
KING
キング
五月號

飛躍



新計劃!!

ミがウエリントン将軍もナポレオンを向うに廻して些の引け目を見せぬ勇将であつた。彼はブリュツヘルの



ウエリントン（世界史上の華繪巻　その十七）——裏面參照

北蓮藏筆

たか[illegible]

援兵さへ到着すれば、必ずフランス軍は粉碎して見せる。最後の一人になるともこの陣地を失ふなと絶叫し、砲煙彈雨隙間もない中を馳驅しつつ全軍の士氣を鼓舞振作することに努力した。

軈て長い夏の日も暮れて、蒼然たる夜の帳が野山を掩ひ包まうとした頃、ブリュツヘル將軍の統率してゐた七萬の精兵が戰場の一角に現はれた。ウエリントン將軍は之を望見して大に勇躍し、全線に猛烈な突撃を敢行させた、そしてブリュツヘル將軍も之に策應して側面攻撃を加へた。ナポレオンは最後の死物狂ひの攻撃を加へたが、援兵の出現によつて勇氣百倍した勢力にどうして敵し得よう。さん〴〵に撃退され、果ては軍神マースの再來かと疑はれたナポレオン自身さへ軍帽佩劍を戰場に遺棄し、身を以て脫するの醜體を演ずるに至つた。

かくしてウエリントン公とブリュツヘル將軍とは、その夜遲くベル＝アリヤンスの村に會し、堅い握手をして互に戰勝を祝し、重大な使命を全うしたことを神に拜謝した。

ヨーロッパの天地にみなぎつてゐた不安な雲はこの一戰によつて一掃せられ、大ナポレオンの雄圖は忽に挫折し、『百日天下』の名を殘して彼は遂に絕海の孤島の鬼となつた。

夜中ねむれぬ人と
あたまのハッキリせぬ人等へ

神經衰弱の

新奇藥と體驗談を無料通信

頭腦の使ひ過ぎや青春當時の不自然なる性行爲が原因となれる神經衰弱やヒステリーこれに伴ふ不眠症遺精夢精陰萎早漏等の病氣は治療最も困難にしてその治療藥或は特効劑と稱するものは實に夥多く發賣されて居りますが、何れも消極的な催眠藥や或は一時的興奮劑にて一ッとして根治的價値を有するものはありません私は

私もこの病ひの爲めにはこれ等の藥は勿論機械療法物理療法等其他何人がヨイと云ふ療法は總て實行しましたが何等の反響なく遂にアト三年餘りにて恩給がツクと云ふ官界にも別れを告げ廢人同樣の境遇に失望の日を送つて居りましたがフトした事より或る奇藥を手にし服用したるに今迄用ひし藥と全然異り先づ七日間位にて不眠症は大いにラクになり連用一ヶ月餘りにて病前と同樣の體になる事が出來まして今では代書業者として活動して居ります（この間私獨特の養生法も行ひ兩樣相マッテ治療に腐心したるは勿論です）で私は自己の知つて居る範圍内の同病に苦しむ方にこの藥や養生法を御敎へしましたら何れもその效果にビックリした位です、そこで私は是を一般同病患者に御知らせして一人にても多く全快者を得る事は最も有意義の事と考へましてこゝに廣告した次第ですどうぞ同病にて御ナヤミの方は色々と迷はず一刻も早く私方に三錢切手封入御申越し下さい、スグ新奇藥並に養生法を無料で御知らせ致します。

官公署代書業

東京市外三河島町四三四番地

菅谷松翠

無學は男の恥

◇自宅實習僅か一ヶ年で卒業が出來る

最高速度式

農業實習講義
商業實習講義

▲新知識を吸收して時代に遅れるな▲講師は專門の博士學士▲講義最も平易で親切▲學費一番低廉です

此際の入學者に限 中學講義錄 無代添附

詳細の内容見本つき 規則 農商別記入ハガキ申込次第 進呈

東京小石川表町六十七 國民實科大學院

◇無學は女の恥



お嫁に行つて赤い顔をせぬやう

裁縫料理禮儀作法を始め洗濯生花に至る迄何れも一流の大家が親切叮嚀に述べた本校講義を見れば、どんな無學の方でも女一通りの知識が得られます。ハガキで申込次第見本一冊無代進呈。

東京小石川表町六十七 大日本通信家政女學校

未來の菊池寛久米正雄出でよ一躍文壇に名を成さんと欲する諸君は來れ!!▼其他文學研究者新聞雜誌記者作家編輯員等文筆業は今後益々多望なり

日本文學講義錄

▼入學案内書は葉書で申込次第即時送呈
▼東京市小石川表町七〇 日本文學通信學校

今や鐵道界は諸君の來るを待て

生存競爭激甚な社會に於て青少年自活の途は唯一鐵道界あるのみ!鐵道界は立身成功迅速で又不景氣なく就職難更になし

鉄道員養成講義

▼入學案内書はハガキで御申込次第進呈
▼東京市小石川表町七〇 帝國鐵道教育會

青年よいつまでも親の脛を嚙らず獨立獨歩せよ

人民保護の榮職で社會の尊敬を受け警部警視と昇進し加俸恩給の特典あり且努力次第でドシドシ出世の出來る警官になれ

巡査養成講義錄

▼巡査と記入ハガキ御申込次第見本進呈
▼東京市小石川表町七〇 國民實科大學院

惡筆と惡文は一生を棒に振る

能筆能文は一生の德だ、タツタ一本の手紙で易々と就職し僅かに一回のヶ通で出世の道が開けた例は澤山あるではないか

手紙習字講義

本會獨特の方法でペン字・毛筆・手紙文上達保證

▼手紙と記入ハガキで申込次第見本進呈
▼東京市小石川表町七〇 國民實科大學院

信用ある字引 三冊揃ひ只の一圓に大割引

◇◇紙數合計 一千四百頁

左の模範的大辭典三冊定價五圓の處實物宣傳の爲三冊一時に御注文者には夫々の一圓に大割引す

手紙新百科大辭典

商用文◆公用文◆儀式◆交際◆日用文◆ハガキ文◆口語文◆候文◆見舞文◆案内文◆注文文◆催促文◆慰問文◆弔慶文を始め凡そ手紙百般に亙る事細大漏さず掲載すればどんな惡文家も必ず上達保證の大辭典◆他でまねの出來ない新式考案編輯で◆

新手紙研究會編 縱四寸八分横三寸八分 總紙數三百八十六頁 定價金二圓也

いろは引大辭典

◆之までのいろは字引よりも、ひきよいみよいわかりよいのが大特長であるから手紙や文章を書くときチヨツとみればどんな難しい字でも忘れた字でも忽ち字と意味が同時に分り一を引いて百を知り百を知つて活用無限、實に便利重寶の大辭典なり

常用文字研究會編 縱四寸八分横三寸八分 總紙數三百十二頁 定價金一圓五十錢

現代新語大辭典

◆近頃流行の新熟語外來語流行語を知らねば新聞や雜誌を讀んでも演説を聞いても何がナンだかさつぱり分らぬ本書は日常のあらゆる新語をいろは引でひけるやうにし一々解釋をしてあるから誰にも聞かずどんな新らしい言葉でもスグ分る良書なり

新語研究會編 縱四寸八分横三寸八分 總紙數四百二十頁 定價金一圓五十錢

發賣記念の爲 記憶字典 (二百九十頁)(美本一冊宛) 進呈 後では忘れる今スグハガキで申込め

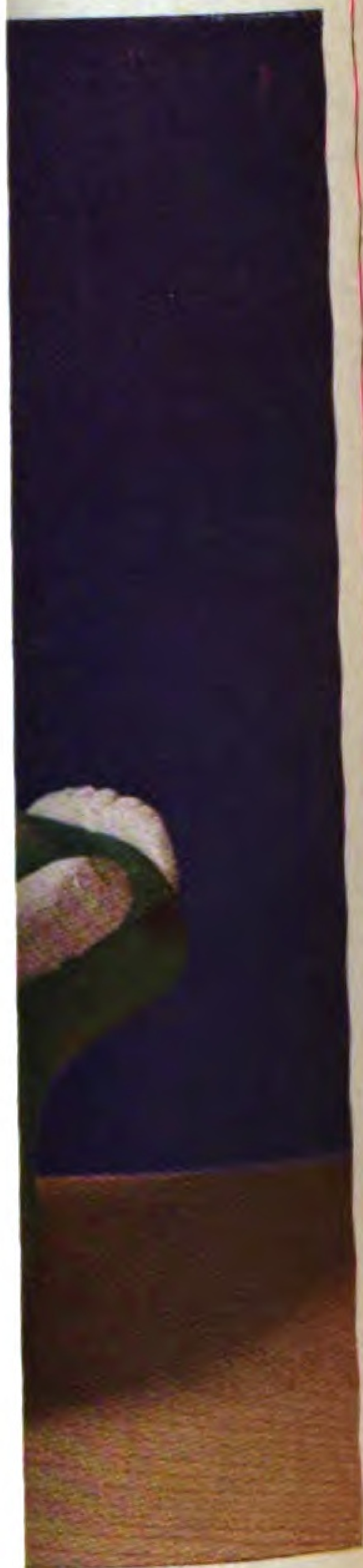
●此の三辭典は至急投賣處分品に就き内容見本等は差上げられません
●當店を信用の上御申込下さい御氣に召さぬ場合は何時にても返金す

前金送料十二錢 代金引換卌錢增 ◆東京市小石川區表町六七 振替東京六六八〇〇番

進文館本店



懸賞寫眞募集



御陰様でキングの口繪は、雜誌界の白眉として毎號天下の評判となつてゐます。更に此の際皆様の御力を借りて、良いが上にも良いものにしたいといふ考へから、左記により、廣く天下に寫眞を募集いたします。專門の方も、アマチュアの方も何卒奮つて優秀な寫眞を御寄せ下さい。

◆募集規定

□題材＝一、人物（例へば可愛い赤ちやん、無邪氣な少年少女、美人、一家の團欒、品のよい老人等、半身でも全身でも結構ですがなるべく動きのあるポーズを歡迎）。二、スケツチ物（街頭スケツチ、農村スケツチ、動物、靜物等）。三、郷土名物（日本一のもの、珍らしい風俗、郷土の舞踊、祭禮及催し物等）。四、風景（各地の代表的奇勝、絕景等）。五、其他（水泳、登山、季節もの等）

□內容＝他の新聞雜誌等に發表された事のあるものは御斷り。應募に際してはなるべく從來のキング口繪を御參照下さい。寫眞は口繪に適するか否かを標準として選を致します。

□樣式＝大きさはなるべく手札型以上、印刷したものは絕對に御斷り。寫眞の裏面には一枚毎に住所氏名明記のこと。同時に説明を要するものは詳記願度。臺紙の有無御隨意。

□〆切＝五月三十一日。應募枚數に制限なし。但し應募寫眞は御返し致しません。

□宛名＝東京市本郷區駒込坂下町キング懸賞部。

□發表＝本誌九月號の豫定。發表の際匿名希望の方は寫眞にその旨附記されたし。

賞金

入選寫眞　一枚につき　**五圓以上五十圓迄**
但し賞金額は無制限。從つて優秀なものは幾枚でも頂きます。
選外佳作　には特別銀製メダル贈呈

□附記＝今回特に優秀なる寫眞を寄せられた方では、場合に

時だ時だ。種まき時だ!!!

草花の種をまけ

▲……人を驚かす珍花の數々



人間生きてゐる以上、何か一つの道樂がなくてゐられぬ。と云つて不景氣の今日、芝居だ、旅行だ、寫眞だといふ樣な金の掛る道樂では困る。其處へ行くと草花の栽培は誰にも出來る理想的の道樂である。のみならず草花栽培を初めた爲に主人の道樂が止んだり子供のイタヅラが止んだと云ふ話もある。日曜の日など一家揃つての土いぢりは一家團欒の樂みである。それ故本會では毎月雜誌を出したり草花の種子を無代進呈したりして大に草花の奬勵をしてゐるが、今は草花の種まき時である。二種や三種では面白くないと云ふ方に左記十二種の草花種子を提供する。此の十二種は初心の人にも作れる頑強な草花で、それで世人をアツと驚かすに足る珍花である。

(一)サルビヤ
(二)三色日々草
(三)セロシヤ
(四)七色百日草
(五)菊咲日廻り
(六)大輪朝顔
(七)椿咲鳳仙花
(八)アマランタス
(九)五色コスモス
(十)大輪松葉牡丹
(十一)ルコー草
(十二)八重天人菊

たとへば普通の鳳仙花は誰でも知つてゐるが、椿咲鳳仙花は知つてる人は少からう。椿の花の樣な大きな花が咲くのである。日廻は普通の花だがこれも菊咲きといふは千重に咲くので誰が見てもこれが日廻かと驚くのである。其の他ドノ花もドノ花も珍奇の面白いもの許りである。

草花栽培法

右十二種を美しい袋入にして、更に之を箱づめとし、之に加ふるに誰にも分る樣に其栽培法を書いた美本一冊を添へてある。本だけなら定價三十錢であるが以上十二種の種まで加へて定價一圓八十錢である。



年中花絶えず

世の中は不景氣である。一圓八十錢は出し憎いといふ人もあるので今回種屋さんへのオロシ値段一圓二十錢に割引して差上げます。但其れは本誌の愛讀者に限るのですから次の通りハガキで御申越を願ひます。

ハガキの書き方

郵便はがき
切手
東京神田小川町一
花の會御中

春まき草花十二種栽培法付割引一圓二十錢
右キングの廣告により御註文いたします
何縣何郡何町村番地
何の某

右のハガキが到着いたしましたらすぐ代金引換小包で發送いたします。送料は入りません。この十二種さへあれば春から秋まで花絶えず、庭でも床の間でも食卓の上まで花だらけ、想像しただけでも愉快ではありませんか、どうぞすぐ御註文を願ひます。



ウテナ白粉
ウテナ粉白粉　五十錢
ウテナ水白粉　五十錢
ウテナ固煉白粉　六十錢
—各種三色あります—
東京・本郷
久保政吉商店
色白く明るい美しさに
肌色
色の黑い方、赤みがち、垢ぬけせぬ方、白粉が不自然に見える方も、すつきりと美しいお化粧ができます。
健康色
顔色の蒼い方、血色のすぐれない方、蒼黑い方も、地肌から生々と明るく健康美を現す素晴しい人氣の白粉です。
白色
上品な色白さ、氣品高き魅力は、最もすぐれた最新式の白粉ウテナの白色から生れます。誰方も愛用ください。
春のお肌に「ウテナクリーム」
雪印（ウテナ・バニシング）：無脂肪のサラリとした心地よいクリームで、顔剃り後に、輕いお化粧に、いつも必要——月印は脂肪中性のウテナ・ハイゼニックで、淡化粧用、白粉落し洗顔用、美顔マッサージ用——花印（ウテナ・コールド）は濃化粧用、肌の榮養料です。
—正價雪印六十錢、月印七十錢、花印一圓—

情味大名

——裏面の説明を御覧下さい——



松本姿水筆

キング教訓畫譜（その五）

情味大名

前田曙山

肥後熊本五十四萬石の大守、從四位左少將細川越中守重賢朝臣は、大名には稀なほど惻隠の深い名君でした。或時、大廣間詰同列の大名の賀筵に招かれ、山海の珍味を盡して饗應され、列席の諸侯も歡を盡して興を催した折柄、越中守は何か考へて居るやうでしたが、偶と左右に會釋して。

「手前御無禮ながら暫時中座致す。……如何に氣張居つても、老年に及ぶと、兎角冷が參るで、辛抱が致し兼まするでな。」

人の心をトロリと蕩すやうな笑顏を見せて手水にと立たれました。御客待遇の小姓が一人御案内に立つと、越中守は入側の中程で立駐つて、其小姓を麾ねきながら。

「先程馳走の汁椀の蓋を取つたところ、如何なる次第か、中は空で有つたぞ。察する處膳所の者の粗相で、汁を盛つた積りで盛り損ねた事と存ずる。」と言はれて、小姓の顏は見る〳〵眞蒼になつて慄へ出した。大切な上客に對して、言語道斷の落度、掛一同の者は切腹にも及ばねばならぬ大事、ハッと平伏するのみ、何とも答へのしやうも有りません。

「夫ぢやに因つて、予は只今手水に假托せて立つて參つたのぢやが、此事が殿に聞えては其方達の落度になつて誠に不憫に存ずるにより、恁樣に致したらどうぢや。予が復座致したなら、饗應の者が、御汁が冷めましたと存じますから、御取換致しませうと申して、一度膳を下げ、改めて入れて參る事に致したら。」

酸いも甘いも嚙み分けた情味の雫が全身に沁み透つた小姓は、頭も得上げず、難有涙に息も吐かれない程でした。

「いや御無禮で御座つた。」

再び席へ戻つた重賢朝臣の涼しい顏には、幾人かの侍の命を救つた貴い優しさが、何人にも氣附れず、快よく潜むで居ました。

井上英語講義錄

東洋一の英語學校

Welcome!

春季新學期開始

新入學生募集

英語を知る事は青少年立身の基礎です。否既に現代人の常識です。未だ英語を知られぬ諸君は即刻入學し現代人の資格を獲得なさい。

我國最大の英學者井上十吉先生御執筆の有名な講義と門下拾五教授が懇切に御指導下さる獨學本位の組織で小學卒業の學力あれば誰でも自宅で樂に上達が出來る

ABCの讀方書方から毎日二時間宛の努力で充分十五ケ月で中學卒業更に三ケ月で専門程度に進む

全國貳百餘校教授參考書・銀杯御下賜記念特典あり

五大附錄及び受驗カード進呈。試驗合格者最多數。

講義振りの一端は内容見本で御覽なさい(別に英語獨



井上十吉先生

内容見本進呈

ハガキで申込まれよ

東京麹町富士見町

井上通信英語學校

振替東京參〇貳八八番

イグワズ瀑布の壯觀



何たる雄大な自然であらう！何たる美しきパノラマであらう！　これこそ始めて世に紹介された空中撮影の驚異である。南米の大河イグワズの流れは滔々西に走つて四百哩、アルゼンチン、ブラジル、パラグワイ三國の國境に到つて、俄然、一大瀑布をなしてゐる。落下すること百九十五呎、飛沫天を蔽うて五彩の虹となり、その壯觀は北米のナイアガラを顔色なからしめてゐる。

どちらが本物

嘗ては「佛蘭西の虎」として全世界に雷名を轟かせたクレマンソー翁の漫影が、此の程紐育の美術館に陳列されて、評判となつてゐる。なる程見れば見る程本もの（右）と生寫しだ。地下の翁も定めし苦笑してゐることだらう。



尚クレマンソー翁の繪入傳記は本誌の「出世畫傳」に載つてゐます。

研究社

英語通信講座



◎キングといふも英語―モダンといふも英語、英語は常識です

◎せめて新聞雜誌で出逢ふ英語は現代人として知らぬは恥です

◎今日にも本講座へ入會十五ヶ月で英語全科を卒業せられよ！

abcの讀方書方から教授

なまじの豫備知識は邪魔、小學卒業で充分！

覺えさせずに措かぬ熱意と完全無比の設備！

而も毎日二時間の獨學で中學卒業の實力に！

WELCOME!

新會員募集

◎ラヂオの岡倉先生初め獨學に理解深き英學諸大家の平易懇切な講義

◎學友拾萬、整然たる日課表により勉强、文檢專檢高檢他合格者續出

◎別冊五大附錄贈呈・學資全免懸賞・すぐ内容見本(立志案内附)を御申込あれ

東京市麹町區富士見町六丁目

研究社英語通信學部

振替東京三〇八五番

腦神經衰弱、ヒステリー早老性慾障害
悩める方へ平山藥學博士苦心の創見

專賣特許 ヨヂロール療法を勸む

苦樂園主 鶴堂生

神經衰弱の原因は遺傳説もありますが十中の八九は精神の過勞及び青春期の非衛生的行爲から來るもので又腸チブス、インフルエンザ等の身體を弱らす後抔に來る事が多いもので而も精神的方面を犯された場合と肉體的に犯された場合とがあります**第一の場合**はまづ記憶が減り物に飽き易く氣が散り何事にもおつくうになる。それが極端になるとハガキ一枚讀むのも嫌になり何んでもない事に迄恐怖を抱く樣になり不安と猜疑心に捕はれて後には脅迫感念で支配され俗に云ふ神經病者となり精神の統一を缺き遂には**自殺抔する樣**になります。次に、

肉體的に犯された場合は先づ頭痛、肩のこり、脊筋の痛み、手足、顔等ムズ〳〵して蟻がはつた樣な感じがしたり又心臟部を押へつけた樣な感じが起り胃腸病でないのに便秘し又下痢が起つたり、自然にやせ身體がだるく濁つた小水抔が出ます原因なしに不眠を招く事もあり肺やロクマクではないかと煩悶する樣な症狀が表はれる事もあります。

此病氣の治療法としては生活狀態の改善と體質の改造を計る事が先決問題であります即ち不安の境遇から逃れ精神的にも肉體的にも餘裕ある生活を營む事が大切な事であつて如何なる時でも睡眠を充分にし心を平靜に保つ事が最も大切な事であります。眞に此病ばかりは體質の改造と生活狀態の改善の外に根治の途がない事を呉々も御了解になつて激くならぬ中に最善の療法を試みて下さい

その療法としては一時押への世にありふれた對症藥では駄目であります病氣に對する身體の抵抗力を養ひ體質の改善によりて病根を一掃する處の根本療法でないとホントの治癒は出來ませんから「ヨヂロール」の如き根本から病的體質を改造して健康體とする處の名藥を服んで蘇生する事が最も賢明な合理的良法であります。

『ヨヂロール』は平山藥學博士苦心の發見藥で專賣特許になつてゐる名藥であつて人體の生存上缺く事の出來ない生命の素とも稱すべき甲狀腺ホルモンと合理的に其成分を一致せしめた上ヴヰタミン其他の高貴藥を配劑したもので内服によつて身體内に容易に吸收せられ、人體ヨードの減損及びヴヰタミンの消費を補給し、新陳代謝機能を旺盛ならしめ、あらゆる病氣を治癒し疲勞を醫し精力を增進しますので如何なる慢性病に用ひても効驗著しく日常之れを用ゆれば心氣爽快、頭腦明晰、健康增進、疲勞倦怠等も自然に體内から忘れた樣に退散してまゐります事は寧ろ不思議な位で、これまで幾千の實驗者から滿足し喜ばれて居る事實が何より著明に物語つて居ります。

尚今までの實驗より推して殊更に効果顯著なるものを揚ぐれば◎腦神經衰弱◎ヒステリー◎喘息◎動脈硬化症◎中風症老衰及早老豫防◎生殖器障害◎月經困難◎冷症病後の快復期疾病豫防等です。藥價は小五十球入二圓五十錢中百球入四圓五十錢大瓶二百五十球入拾圓で(送料内地十八錢領土五十錢特に東京本郷駒込大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九)で御取次いたします。



コロムビア
蓄音器
Viva-tonal Columbia like life itself
「キング」は雑誌の王(キング)
コロムビアは蓄音器のキング
其の製品は……
絶對權威ある優秀無比の逸品
ニユープロセス
針音のない コロムビアレコード
には コロムビア蓄音器が最適
最寄の蓄音器店に御照合の上御買上げ下さい。
COLUMBIA
(外觀圖)
(演奏中)
COLUMBIA
第百三十三號 スプリングモーター 正價 金貳百六拾圓也
第百三十三號E 電氣モーター 正價 金參百拾圓也
日本コロムビア蓄音器株式會社

□若葉の頃□



爽かな微風――裏山のあたりから時鳥の聲がおくられてくる。御堂の碧瓦、金色の九輪、此處清水の臺は、全てが懐しい春の光に包まれてゐる。今日も越の國から參詣の人が見えた。はるかに眼を放てば京都の街は陽炎の間に浮んでゐる。

京都　黒川翠山撮影

○朝々を頬白來啼く山の寺古木のけやき芽をふきにけり――藤澤正俊

○空晴れて朝よりぬくき春日ざし街の人聲ほの〴〵聞ゆ――川島白夢

伊太利皇



室の御慶事





伊太利皇太子ウンベルト殿下（一六）と、白耳義皇女マリア・ジョーゼ殿下（一四）との御婚儀は、今春ローマに於て盛大に取行はれました。右頁の寫眞は最近の兩殿下。左頁は兩殿下がいづれも御歳七歳の時の可愛い御姿で、今昔、感慨深きものがあるではありませんか。



五月の頌

今朝も鉢植のスウヰートピーが三つ四つ咲いた。花片の紅は、朝露を含んで麗人の唇を偲ばせてゐる。

と庭の方からは妹の頓狂な聲が聞える。さうだ、カナリアの卵が孵つたのかも知れない。お爺さまは縁側に出て釣道具の手入れに餘念がない。さあ、これからまた朝のお稽古にうつらう。

五月――そこに萬物の生命がをどる。

寫眞はソプラノの名歌手として又日本有數の竪琴家として聞え高き荻野綾子様。

顧問

子爵 三島章道閣下

海軍少將 小山武閣下

速成速記講座

就職の最高武器と能率增進

即刻學べ!! 能率時代の實力發揮に

即刻摑め!! 生活安定と成功の爲に速記術

▼先づハガキで御申越あれ詳細説明書無代進呈す▲

立身も成功も合理的で最も早いことが第一の條件である。速記術は現代社會に活動する人々にとり完全に自己の才能と實力を發揮するに是非とも知らねばならぬ成功の近道であり且又常識である。處世上必須の武器であり且つ近代的職業として最高のものである。速記の可能者は調法で何時も引張り凧で同僚先輩の羨望の的である。本講座こそは從來の獨修書や教授法と全然異り、最も新式な獨創的教授法であるから此新講座に就て學べば小學校卒業程度の學力さへあれば、誰でも樂に或は學業の餘暇、仕事の合間に練習して僅か三ケ月で完全に獨修が出來、早速役立たせるに十二分の實力がつく。(會費一ケ月一圓廿錢、三ケ月完了三圓)

東京市麴町區三番町八三
日本速記學會
振替東京七七九五番

ABC一つ知らぬ人でも僅か三ケ月で實用化し得る模範講座



エスペラントの創始者 ザメンホフ博士

世界共通語

エスペラント講座

(內容見本無代進呈)

自覺せる日本人の常識は先づエス語!!

學ぶは今! **エスペラント**は日本人が世界的に活躍する必須絶對無二の世界共通語である。然も**エス語**は日本人にとり總ゆる語學の中で最も簡單に修得出來る理想的世界語で、全然外國語の素養なき人も本講座に依れば絶對責任を以て必ず理解の行く迄徹底的に教授するから誰でも安心して勉強出來る。**エス講座**の「內容見本」東京市麴町一口坂、**大日本エスペラント會**宛にハガキで申込めば無代進呈す

新家庭

大評判！猛烈な賣行

『キング』連載中、滿天下の讀者諸君を熱狂させた名讀物、出ると忽ち大變な評判で、賣れることく、素晴らしい大盛況です。

これこそ——

佐々木邦先生傑作中の大々傑作！

大學出の模範會社員里見君と、重役の姪で美しくて頭のよい若夫人徳子さんとの、**嬉しいけれども恥かしい、輝かしい中に苦勞が漂ふ新家庭の内幕を描いた**もので、奇拔な珍事件がひつきりなしにもちあがつて、トテモ面白く、トテモ可笑しく、しかも非常に教訓になる大傑作。しかもその中に——

胸を衝く皮肉や考へさせる諷刺

腹の底から笑が爆發するユーモア

——それが上品に輕快に、トテモ巧みに織込まれてゐる筆の力の素晴らしさ！

未婚の人々には此上なき結婚準備書——

新婚の人々には幸福增進の聖書——

既婚の人々には愛情復活、若返りの手引——

夫を知り、妻を知り、世間を知り、

家庭和合、家運繁昌の基となる新國民寶本！



御覧の通り徳子さんが大切にしてやるからバアヤの眼にあまる。それが筒拔けに傳はるから近所がトテモうるさい。結局一騷動は免れない………



人間美展覽會

子供を讃ふ

子供の純眞素直さは、
野や草木の自然を想はせる。
その神々しい靈の純潔は、
すがすがしい朝の日光や、
春の若枝の水滴のやうに、
私たちの心を靜かに清める。
黎明のやうな清新の美、
天眞の優しさ、愛らしさよ。
未來への懸橋、人類の青春。
子供こそ吾々の理想の姿だ。



日本舞踊の美

小柴錦侍書伯夫人　小柴アリス

歐米人が、日本の舞踊を見て第一に魅惑され、驚嘆させられるのは日本婦人の美しい髮と美しいキモノであります。殊に長い袂の描き出す曲線の美は、世界のどこにも類のない優雅さがあります。どうしても日本舞踊から袂を離して考へたくはありません。元來日本人は手足も短く、體格も立派ではありませんが、一度着物を着ると美しく見えるやうに身體が出來てゐます。そして歐米人より遙に彈力性あり柔軟性ある身體を持つてゐますから、その踊りにもデリケートな巧みさが多分にあります。兎に角日本舞踊には、實在の人間といふよりも寧ろお伽噺の主人公か、でなければ浮世繪の人物が現れて來たやうな美しさがあります。（寫眞は水谷八重子孃の舞踊）



歐米舞踊の美

歐米人は概して肉體美に於て優れてゐます。從つて半裸體で踊る場合でも、それは踊を一層美化するためであつて、決して醜惡な感じを與へません。元來歐米の舞踊は人間自然の感情の發露が動作となつて現れたものですから、顏の美よりも表情が貴ばれ、局部的の美よりも全體的な構成美が貴ばれます。それ故その舞踊は飽迄動的であり、主情的であり、見てゐるうちに自然とリズムに引込まれて、嬉しさに泣き、悲しさに泣くといふ工合に、何ものか人の胸に迫つて參ります。兎に角風に搖ぐ花、花に戲れる胡蝶といつたやうな感じは歐米舞踊の持つてゐる力強い特長でありませう。

（寫眞はアンナ・パブロバ孃の舞踊）





寫眞(1)は美しい口の所有者米國のモナ・リコ孃。(2)は典型的の美しい齒。

口の美

美容家　小口みち子

口は大切な表情美の一つです。ところが日本人は總體に唇が厚くて、重苦しい感じがいたします。殊に御婦人の方は傳統と申しませうか、物を食べるにもなるべく口を開けないやうにし、話すにもなるべく唇を動かさないやうに習慣づけられて參りましたため、口許の美に乏しいやうです。そして笑ひも朗かでありません。此の頃毒々しい程紅い口紅をつけてゐる方もありますが、根本は口許の動かし方の習慣を



寫眞(3)は日本人らしい美しい眼の所有者木谷千種女史。(4)は『サファイアの眼』と綽名をとつたユ社ドロシー・ガリバー嬢の目。

目の美

女優　森律子

昔は『目ぼそ鼻高』と云つて細目を尊びましたが、今の時代は大きく澄んだ眼が、美人の要素としてなくてはならぬものとなりました。外人の眼は大體大きく下り、日本人の目は小さく釣り上つてゐます。しかし此の頃は目を大きく見せるお化粧法が流行り、そして事實又だんだん日本人の目が大きくなつて來たやうに思はれます。外國では杏の種の形をした目で、睫毛の長いのがよいとされてゐます。目は人間の入口と申す程で、その人の性質や氣持がスグ現れて來るものでありますから、目を美しくするには何よりも先づ精神の修養が大切であります。大體外人の碧い目は温和、神秘の感じがし、東洋人の黒い目は熱烈、純眞の感が致します。



1

寫眞說明 (1)は米國の映畫女優ロレツタ・ヤング孃の見事な足。(2)は理想的に美しい足の模型として獨逸で特許をとつたもの。(3)は紐育で美しい手として一等當選をしたもの。(4)(5)は帝劇女優小村京子さんの美しい手のポーズ。



2

手の美・足の美

松竹監督 池田義信

世間には顏の化粧に憂身を窶す人は隨分ありますが、手足の美に就ては殆んど無關心のやうです。しかし最近では手足の美が非常に重んぜられて來ました。外國では手足に高い傷害保險をつけてゐる人も澤山あります。美の點から云ふと支那婦人の纏足は問題になりませんが、日本婦人も遺憾ながら、まあ落選組でせう。平素坐る關係で、太く短く、その上大抵の人は〝X〟足と云つて膝のあたりが內側


③


④


⑤

[illegible]下駄を穿くため指先が太く、[illegible]に擴がつてゐる人があります。但し此の頃の女學生などには穿くばかり素直な良い形の足をよく見受けます。

それから手に就て『嫁を貰ふなら手を見て貰へ』といふ諺がありますが、これはあまり實用的に偏した手の見方です。といつて白魚のやうな手が必ずしもよいのではありません。手の美は健康とそのポーズにあります。常に清潔でなければならないのは勿論ですが、爪に赤味があり、皮膚のつやゝかなのは健康を表示してゐるものです。又タイピストとかピアニストとかは職業的に手の形がよいとは云はれませんが、ポーズがよければ非常に美しく見えます。

例へば寫眞を撮るとき、人と應對の時、演説の時等手の置場所、形などによつてその人が奥床しくも輕薄にも見えます。



スタイルの美

漫畫家 田中比左良

西洋婦人のスタイルは、全體が表現的であります。體格が立派で、身體の均整がとれてゐますから、衣服もその美を損はないやうに出來てゐます。例へば袖や裾の短いのも、手足の肉體美を發揮するためであります。それ故その服が如何に贅澤に出來て居ても日本服に比べれば、形と云ひ色と云ひ何處か原始的の感じが致します。しかし又一面には清楚であり、氣品もあります。日本婦人のスタイルの美はどちらかと云へば靜的でありますが、西洋婦人の方はその輕快な動作や表情に美があると思ひます。



日本婦人の服飾は、世界一の服飾文化であると思ひます。その絢爛さ上品さは、日本服丈けが持つてゐる誇りであります。その美しい帶や半襟なども他に類がありません。殊に振袖は何とも云へない優雅さがあります。日本服の姿全體から受ける感じは、第一に親しみ易い柔和さと、女らしい愛らしさでありませう。日本婦人の首は西洋人に比し丸味を帶びて細くありますが、それが却つて着物によくうつります。兎に角日本婦人の美は、着物と身體と一致した點にあると思ひます。





笑顔

歌人　茅野雅子

しら珠のその歯を見せて稚兒の
笑まへるおもわ神に似たるかも
おほらかに笑めるおもわの靜なる
もの暖かさたふとかりけり
にこやかにゑまふ心のゆたかさを
常もたまほし人もこの身も

（寫眞上は三宅雪嶺博士）

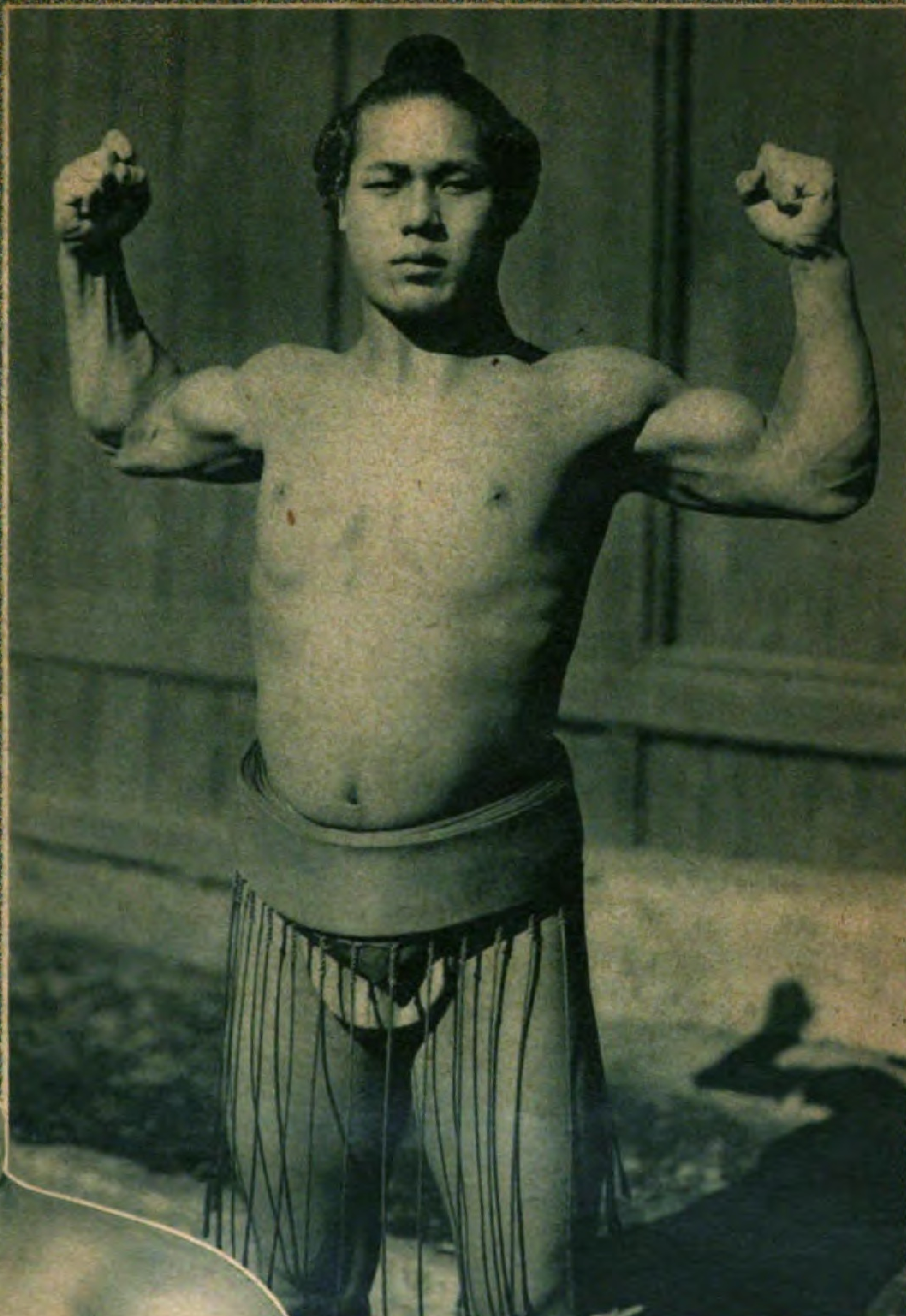




髪の美

畫家　伊東深水

最近また丸髷が流行して來ましたが、西洋人などは頻りと日本髪の素晴らしさを羨望してゐます。日本髪は實用的でないにしても、洵に優美で上品で、何とも云へない奥床しさがあります。これと反對に西洋人の髪には輕快な明るさがあります。柔かく波うつた美しい金髪――スグ泰西名畫が頭に浮んで來ます。しかし日本人の洋髪は如何に巧みに西洋人に模倣しても、結局は美の點で競爭にならないのではありますまいか。





上は典型的肉體美の所有者武藏山、身長六尺一寸五分、體重三十一貫。下は伊太利の巨人拳鬪家カルネラの偉大なる體軀。

肉體美

彫刻家 北村西望

何と云つても立派な肉體の所有者は、柔道家、拳鬪家、スポーツマンなどに多い。眞の肉體美はギリシヤ彫刻のやうに筋肉が隆々として脂肪分が少く、その上身體全體の均整がとれてゐなければならない。手ばかり太かつたり、足が短かかつたりしては駄目である。その點で武藏山の如きは、脂肪太りの多い力士中にも稀に見る立派な肉體美の所有者である。

慢性胃腸病と腦神經衰弱を全快した告白

茨城縣筑波郡　大塚林平（本年二十一歲）

思ひ出は遠く二年前の秋種々の草花が筑波山麓の農場を彩る頃私は胃病に犯され爾來一年有餘の間あらゆる醫藥賣藥に親しみました。其の間便秘はする肩がコル食慾はあつても胃痛を怖れて食事も控へ勝ちであるから意氣はいよ〳〵衰へる其の上神經衰弱まで併發して惡夢に迄もおそはれ一日として愉快な日を送つた事がありませんでしたが或醫學の本に蝮が種々の病氣に非常に効力ある樣に記載されてありましたからそれ以後は毎日の新聞廣告に注意して居りました所圖らずも天龍館の赤蝮の活性絞り汁に高山藥草七種によつて造られた養命酒のあるを發見し早速買ひ求め朝晩小盃に一パイ宛飲みはじめると一日毎に効力があらはれ其日から身體が溫まり數日にしてあれほど頑強な便秘も治り通常となり肩のコリも忘れるやうになりました今思ひ出しても全く夢の樣ですそしてグン〳〵日に見えて快方に向ひ其のキヽメには驚くより外ありませんでした飲用十數日にして血色もよくなり身體もメキ〳〵と肥えて來て飲用前より一貫五百目ばかり體重もまし日に〳〵健康の域に達しました。これ全く創製本舗たる鹽澤家に感謝する外ありませんでした次に五週間分お送り願つて飲用する事一ヶ月遂に病より脱し今では前にも增した健康體の持主となり久し振りで土に親しむ樂しさを取返しました。其の後は如何に働いても風邪一つ引かず益々靑年の意氣を發揮する事が出來ました、まづ健康をモットーとする今日天龍館の養命酒を病める人々に飲用させて健康體になられん事を[illegible]つ鐵を罹きます。[illegible]事はマムシの絞り汁と云つて氣味惡がる事は大間違ひで蝮の絞り汁に高山藥草七種を加へそれを滋養酒に釀造され數年間經たものであるから上等の葡萄酒よりも其の風味も香りもよいから女でも子供でも又どんな病人でも美味しく飲用出來ます。

鹽澤家天龍館の景
日本アルプス赤石嶽



「記者曰く」

信州天龍峽の鹽澤家は賴朝時代からの素封舊家で現在海軍少將も出て居りますが今から三百年の昔十八代前の祖先鹽澤宗閑が赤石嶽特産の赤蝮蛇の絞り汁に高山藥草七種を加へ一種の藥酒を釀造して近郷の病弱者の爲に無代で惠んで居りましたこれを鹽澤家では代々繼承して今日に至つたのでありますから世にありふれた榮養劑や強精劑とは異り身體の眞底から根強い精力が付きます。各博覽會では金牌を受領し醫學博士阪口勇先生も楨森賢次郎先生もこれを親しく來患者に薦められて居ります、御希望の御方は東京、大阪市內は各百貨店全國各地は有名藥店にあります。品切の節は東京澁谷町神宮通り一丁目七**天龍館東京出張所**（振替東京六八八五五番）へ御申込下さい、實費二十日分參圓、三十日分四圓で送料三十五錢、新領土六十五錢、代金引替實費ですが、御都合で講談社代理部（振替東京六六二一九番）へ申込まれてもよい。

◎◎◎◎無代進呈　「見本瓶詰」と說明書御希望の方はハガキで本舗へ申込下さい

何と言

講

あゝ、戀は悲し！

讀切長篇 青春の天地

名選手と名女優の紅涙潸々たる悲戀哀話！

天才投手の名を天下に謳はれるK大學野球チームの宮地公一の前に、突如現れた艶麗無比の映畫スター小百合！ 偶然燃え上つた彼等のこの甘い華やかな戀を繞つて捲起される息詰るやうな大悲劇！ 然もこれが暗示する事實的興味と相俟つて眞に堪らなく面白い、

堂々八十枚に亙る讀切大長篇

一讀何人も無限の哀涙を絞る「講談倶樂部」五月號の傑作大讀物！

近藤經一先生 苦心の大傑作



▲モデル小説 永遠の愛に生く……（岸白汀）

——江木欣々女史一代物語！（見よ！麗人の一生は餘りにも痛まし）

一世の佳人として九條武子、日向きむ子等と共に女王の如くその名を謳はれた欣々女史の數奇を極めた一代物語 藝妓から博士夫人へ……尼僧生活から謎の死——一讀何人も熱涙！



▲明治大正 劍豪物語

（大日本武德會の劍道形を制定され明治年間の大劍士と云はれる内藤

つも日本一だ！

講談倶楽部五月號の面白さ

▲探偵小說 彼が一重瞼になる謎（[illegible]天晴子の活躍！）

▲忠治外傳 勘助の首實檢（磯村野風）
（名石下船の國定忠治も散々の苦衷にホロリと一番）

▲新代議士結婚ロマンス
（美人と名な兩手に掴んだ羨ましい人々。）

▲美男俠客 珊瑚重太郎……（白井喬二）
▲長篇小說 火の翼……（加藤武雄）
▲小說 負けない男……（佐々木邦）
▲武俠小說 鈴木新内……（村上浪六）
▲探偵小說 蜘蛛男……（江戸川亂歩）
▲處女小說 處女爪占師……（吉川英治）
▲武勇小說 王冠……（中村武羅夫）
▲俠盜物語 尼子十勇士……（一龍齋貞山）
▲ かげらふ噺……（大佛次郎）



菊池寬先生 大傑作發表

（長篇戯曲 肉眼心眼）

數奇な運命、戀の縺れ！偶然廻り合つた初戀の人は……美男美女を繞る大悲劇！見よ！文壇の大御所が心血を注いだ素晴しい大雄篇！！

奴の小萬 涙の仇討

人並勝れた器量を以て俠名を全國に謳はれた奴の小萬が、計略でとなり、水火離を取つて十五年間、遂に親の恨を晴す。思はず泣かされる血涙の仇討物語！



講談倶楽部 五月號 定價五十錢 送料二錢
東京本郷 大日本雄辯會講談社（振替東京三九三〇）



數ある肺病藥の中で

▼何故に私は是のみ確信を以てお奬めするか▲

ドクトル　尾山瑞雄

肺病や肋膜炎のやうな慢性の病氣に罹りますと誰しも早く治りたい一心から、兎角氣が焦り物事に迷ひ易くなります。そのため思はぬ失敗をすることが往々あります。特に藥を選ぶ場合には、餘程愼重な態度で臨みませんと、取返しのつかぬ結果を招くことがないとも限りませぬ。

肺病を治すためには、正しい養生法を守らねばならぬことは勿論でありますが、藥の選擇といふことも、それ以上に大切であります。しかし現在のやうに數多い肺病藥の中から、たゞ一つを選ぶといふことは、それでなくてさへ迷ひ易い病者にとつてはなかなか容易なことではありませぬ。さういふ方々のために、私はこゝに責任を以て『ツベルシン』なる藥物をお奬めいたしたいと存じます。

この『ツベルシン』は、私が永年の海外留學に依つて苦心研究の結果、初めて完成することを得た肺治療藥でありまして、この藥の特色ある效果に就いては、創製者である私自身が大なる自信と誇りを以て、皆様にお奬めするものなのであります。

『ツベルシン』の他藥と根本的に異る特色は、この藥の服用と同時に體力の衰へを喰止め、食慾を著しく增進せしめ、病患部に於て喰菌作用の藥效を發揮しますため、連用すれば、次第に熱を下げ盗汗を止め、咯血や咯痰を全止し、今迄減る一方であつた體重を、メキメキと增加させてくれるのであります。しかも一時抑への解熱劑や鎭咳劑を含みませぬから假令他藥と併用するにも絕對に危險な副作用はありませぬ。

事實この『ツベルシン』の服用に依つて、全治の喜びを得られた方々は、隨分多いのでありまして、これは創製者たる私自身にとつても、實に此上ない大きな喜びでなければなりませぬ。どう

ン』を御試用なさいますやう、重ねてお奬め申上ぐる次第でございます。

現に初期の肺尖カタルの方や、肋膜炎でお悩みの方は申す迄もなく、二期三期の重い容態の方々も、決して胸の病に失望落膽なさることなく、どうか一人でも多くの方が、この『ツベルシン』の服用によつて、一日も早く再び前の丈夫な身體になつて頂きたいものと、それのみを念じてをる者でございます。

▲「ツベルシン」で肺病快癒の實驗

前略御免下され度候、扨て先般來は種々御手數相掛け誠に申譯無之候。丁度葉書にて御催促申上候翌日現品到着致し候間何卒惡からず御思召し下され度願上げ候。御送附下され候「ツベルシン」は其日から服用致し候處御蔭様で洵に氣分よく日々全快致し居候間何卒御安心下され度願上げ候。

一月十八日　熊本縣球磨郡多良木町　中〇昇

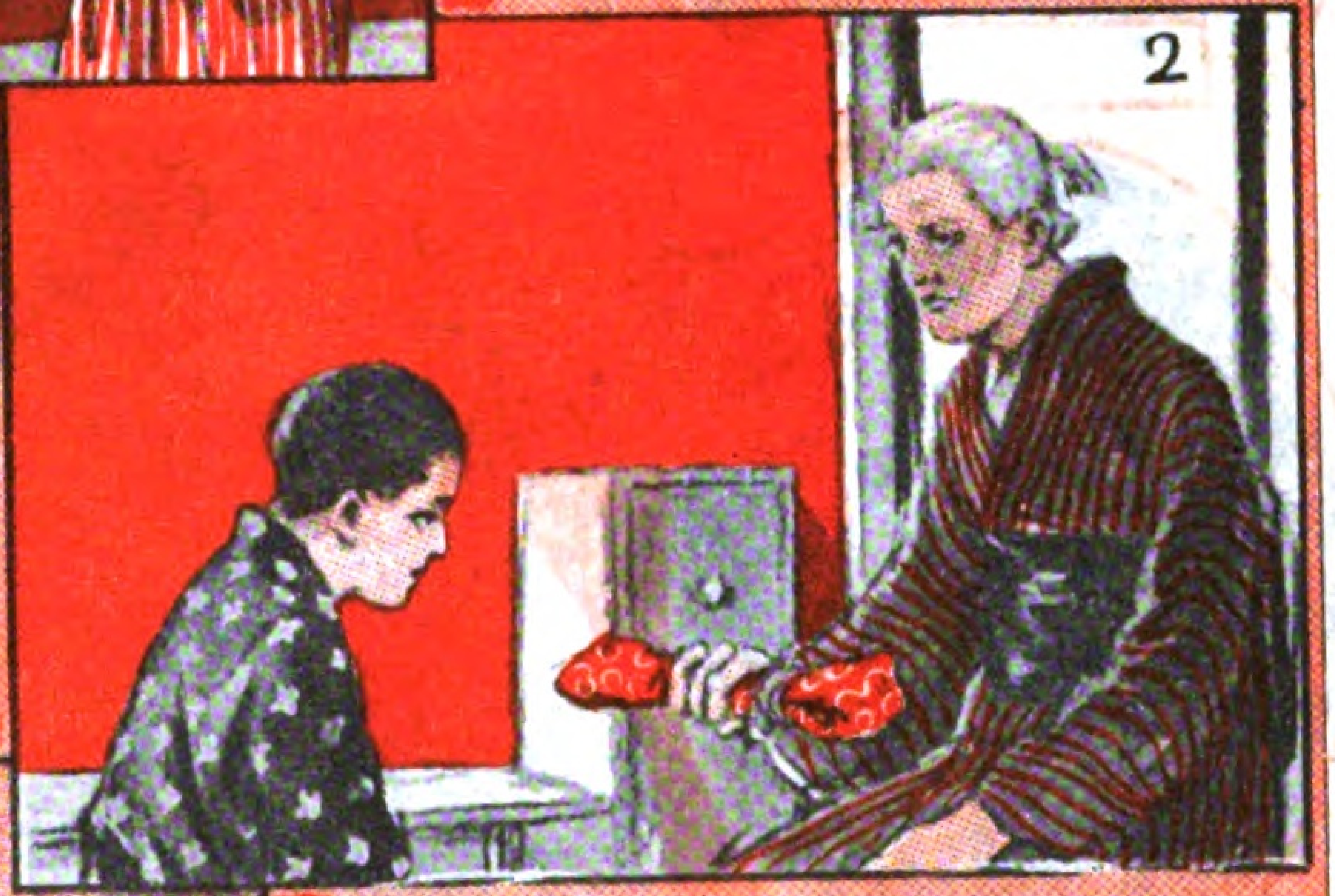
（こゝに掲げました書狀は、數ある中の極最近の一例で、わづか二週足らずの御服用にすら、かくまで「ツベルシン」の效果を認めて喜んでゐられ


高橋是清
マクドナルド
澁澤榮一
ストレーゼマン
カーネギー
東郷平八郎
野口英世
クレマンソー
出世畫傳
大人物の歩いた道

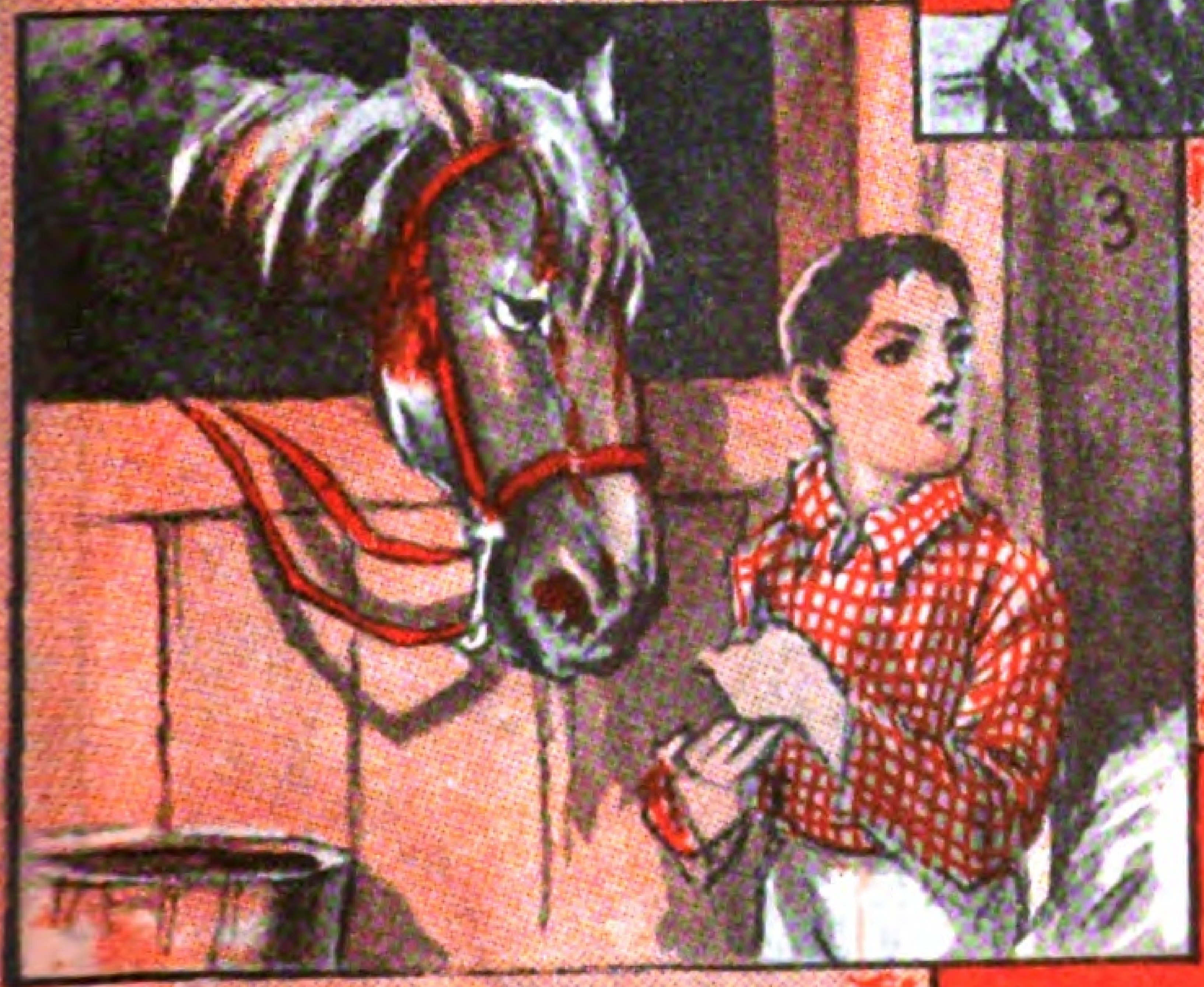
高橋是清



(1)十二歳のとき、仙臺公の菩提所壽昌寺の寺小姓をしてゐた高橋は、フトしたことから大童信太夫といふ若い侍に見出されて、洋學を學ぶために、横濱の外人の家に預けられた。



(2)十四歳のとき、仙臺藩から選ばれて、米國の留學生となることになつた。祖母は高橋の髮を切り落してやつた後『遠い異國に渡つて、若し辱めを受けたら、これで男を立てなさい』と、一口の短刀を渡した。彼は『決してこの刀に笑はれるやうなことはしません』と誓つた。



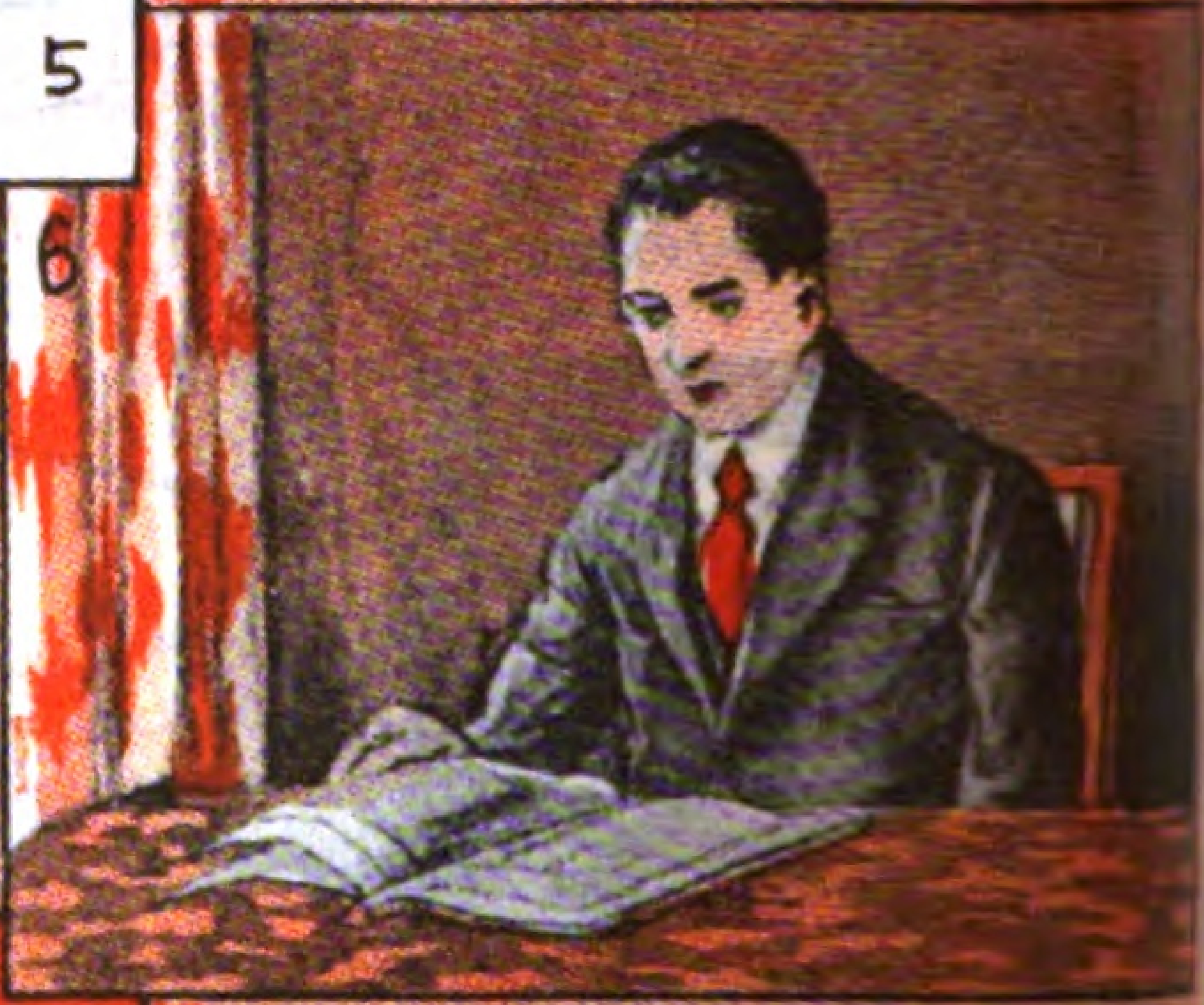
(3)桑港の日本移民の世話をしてゐるヴアンリードといふ人の保護を受けることになつたが、これが大變な惡漢で、高橋等を虐待した。『おい燕麥は喰へぬだらうか』と厩に入つて馬糧でやつと餓を凌いだり、夜本を讀んでゐると、生意氣だと言はれてランプを消されたりした。



(4)同じ年、欺されて高橋は、知らぬ間に三年の契約で、奴隷に賣られてゐた。支那人があまり意地惡をするので、喧嘩になつたが、なアに小供がと思つてゐた高橋が、短刀を出して切つてかゝつたので、たまげて降參した。高橋は散々主人に叱られた。

⑤十五歳の年、あまりの虐待に堪へかねた高橋は、脱走して桑港に逃げ歸り、苦しかつた一年前の思ひ出をのこして、日本に歸つて來た。歸つて見ると明治元年、仙臺藩は賊だといふので、寄邊さへない憐れな有樣であつた。





(6)二十二歳のとき、開成學校を卒業するとすぐ大阪英語學校長に任ぜられたが、彼は『まだ修業が足りぬから』と、辭令を突き返へして、靜かに老莊の學を研究し、禪を修めた。羨んでゐた文部省の役人達は、『高橋は氣が狂つた』と評判した。

(7)五十一歳のとき、日本銀行副總裁高橋是清は、英國に派遣されて、日露戰爭の一億圓軍事公債募集のことに從つた。このとき黄金王ロスチャイルドは、高橋の手を握つて、『私も四十餘年、經濟界の仕事をしてゐますが、こんどの日本の外債募集ほどの大成功は、嘗て見たことがありません』と驚嘆した。





(8)七十一歳のとき、新政友會總裁高橋是清は、華族を辭して一平民となり、盛岡市から立候補して代議士に當選した。そして間もなく政界を隱退したが、昭和二年の大恐慌を鎭定し、野に下つて後も現に内閣總理大臣禮遇である。

——富田千秋畫——



マクドナルド

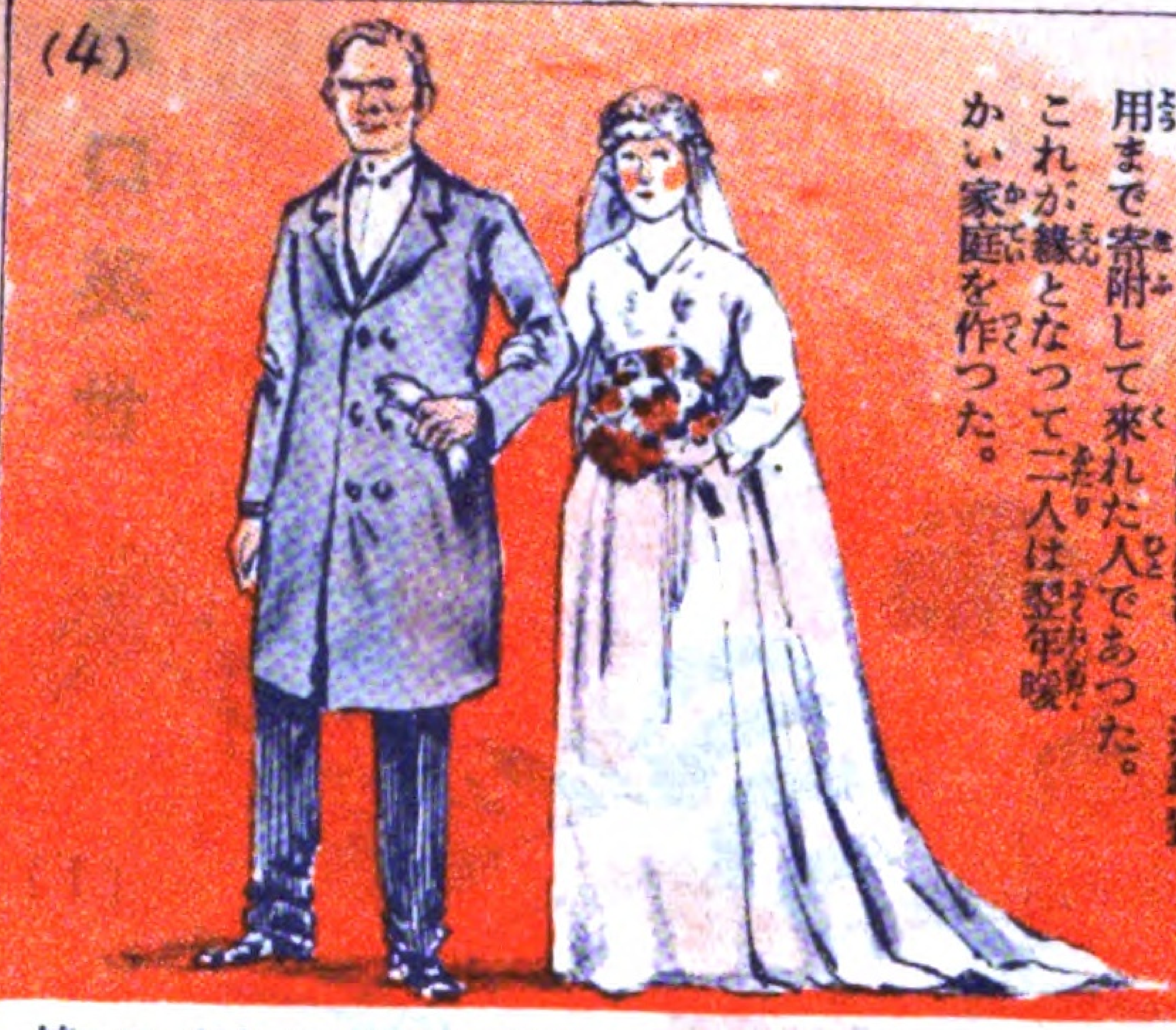
(1)マクドナルドは蘇格蘭の貧しい漁夫の子として生れた。彼の家はお勝手ともお座敷とも二間しかないといふ貧弱さであつた。それで十歳の頃、村のお寺の附屬小學校に通ふのにも毎日裸足で通した。しかし本を讀む事は三度の飯より好きで、村中の本といふ本はみんな借りて讀み、おしまひには隣町の本屋まで立讀みに出かけた。そんな風で學校の成績も拔群であつた。

(2)十六歳のとき、先生に見込まれて小學校の代用教員になつた。しかし相變らず研究熱は旺んで、『誰でも判る科學の話』などいふやうな書物を耽讀しては、俺もいまに偉い科學者になつて、大學の教壇に立つやうにならうと決心した。そして秘に機會の來るのを待つて居た。





(3)二十歳のとき、僅かばかりの金を懷中にして倫敦に飛出した。そして市營金庫の事務員になつた。だが月給と云つても三十圓足らず、物價の高い倫敦では、お茶を飲む金もない有様だつた。それで水とパンで我慢し、寸暇を裂いては近所の圖書館に通つた。彼の勉強振りは實に凄じいもので、到頭、醫者は彼の過勞を心配し、『このまゝ勉強すれば君は倒れるより外はないよ』とさへ忠告した。



(4)マクドナルドが獨立勞働黨から始めて代議士に立候補したのは三十歳の時であつた。彼は、その頃もう立派な評論家となつて居たが、相變らず貧乏で、選擧民も事務員も辯士も一人でやらねばならぬ有樣だつた。しかし、その健闘も報いられず、無殘にも落選の憂めを見た。失望と過勞は竟に彼を病院に送つた。そのとき彼は一人の美しい婦人から優しい慰問を受けた。この婦人は政戰中彼の演說に感激し、選擧費用まで寄附して來れた人であつた。これが緣となつて二人は翌年暖かい家庭を作つた。

(5) それから數年はすぎ去つた。マクドナルドは下院議員として次第に頭角を現し、竟に勞働黨の領袖となつた。四十九歲のとき世界大戰が始まるや、內閣から使ひが來て、彼の入閣を懇請した。けれども非戰論者であつた彼は、主義政見のために大臣の椅子も弊履の如く顧みなかつた。



(5)

(6)非戰論！それは社會人としての彼に致命的打擊を與へた。國賊と呼ばれ、勞働黨からは追はれ、紳士の資格は剝奪され、社交倶樂部からは除名され、群衆からは石を投げられるといふ始末だつたが、彼は全てを耐忍した。しかし、竟に彼は勝つた。一九二二年、保守黨內閣が倒れるや、勅使は彼の陋屋に飛んだ。その日、彼は英國大宰相の印綬を帯びて、宮中の階段を下るや、『マック萬歲』の聲が嵐のやうに起つた。



(6)

—吉邨二郎畫—

野口英世

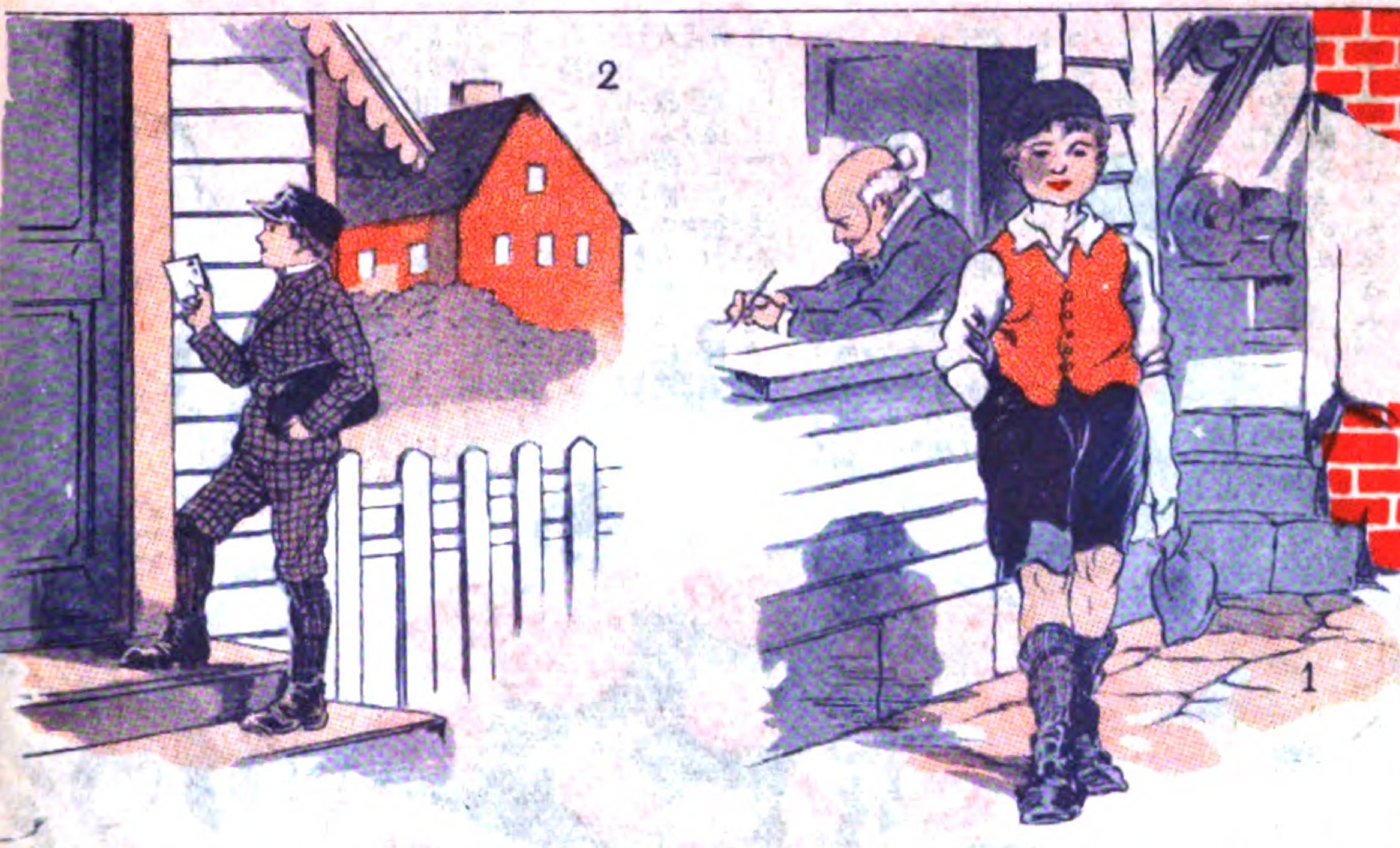


(1) 三歳のとき清作（英世の前名）は不圖した機に圍爐裡のなかに轉げこみ、焚火のために左手を大火傷した。そのため拇指はメチャくになり、他の四本の指は折れ曲つて掌にべつとりと燒きつき、生れもつかぬ不具者になつた。

(2) 十一歳のとき、尋常三年の清作は、筆や紙を買ふ金がないので、學校から歸ると田圃の細い流で、泥鰌をすくつて捕り、それを朝早く、二里も離れてゐる猪苗代町まで『泥鰌！　泥鰌！』と賣り歩いて、やつと學用品を求めた。

(4) 二十一歳のとき、上京して、高山齒科學院の受付部屋に籠つて、猛烈に勉強した。毎夜三時間か三時間半しか眠らなかつた。まもなく後期試驗に及第し、醫師の資格を得、傳染病研究所の助手となつた。


(3)十六歳のとき、先生や學友が氣の毒がつて、醵金して、野口を若松市の名醫渡部ドクトルの手術をうけさせた。その爲茶碗すら持てなかつた手は、ほゞ自由に使へるやうになつた。人を救ふ醫術の有難さに沁々と感激した彼れは『醫者にならう』と決心した。
(5)二十二歳のとき、突然歸省した。『何うして歸つて來た？』と問はれて彼は『小林先生の奥樣が御病氣だと聞いて、御看病に歸りました』そして一ヶ月、つききりで看病し、最初の療法を試みたので、恩師夫人の生命を救ふことができた。
(5)
(7)三十九歳のとき、ロックフェラー醫學研究所の細菌部長となり、多くの世界的發見をなした。その中でも黄熱病の研究によつて、南米エクアドルの民を救つたときのごとき、國民は感謝に溢れて、生ける野口博士の銅像を立てた。
(6)
(6)二十五歳のとき、米國フレキスナー博士に認められて渡米した。屋根裏の薄暗い室に立て籠つた野口は、『もう米國まで來たからは、髑髏になるまで日本には歸らぬ』と頑張つて勉強し、つひに細菌學の大家となつた。
(7)



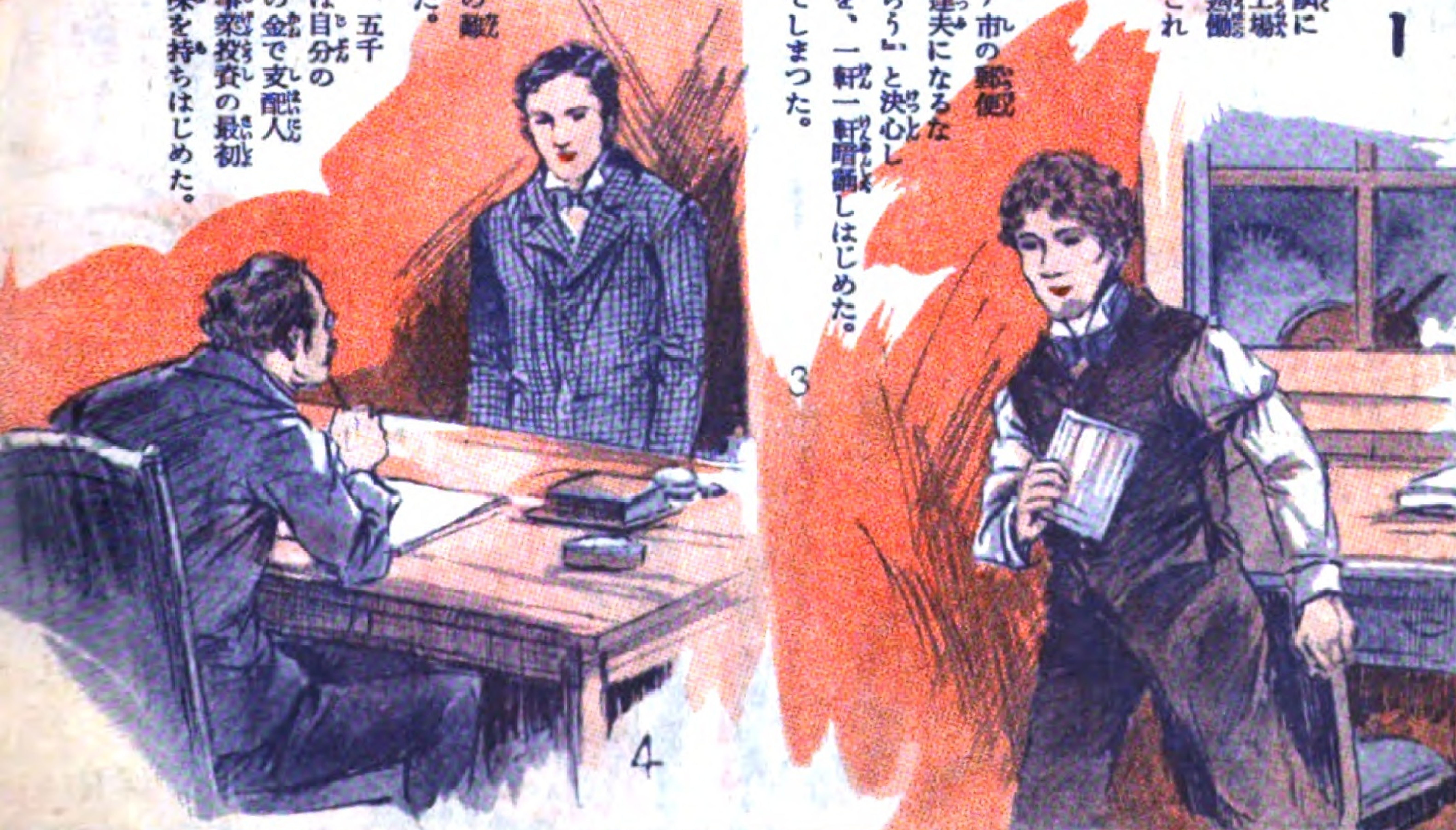
カーネギー

(1)十二歳のとき一家は英國から米國に流れついた。少年カーネギーは紡績工場に、糸巻小僧に雇はれて、給料は一週働いてたつた二圓四十錢であつたが、『これは俺が働いて稼いだ金だと思ふと、その後何百萬圓儲けたときよりも嬉しかつた』と言つてゐる。

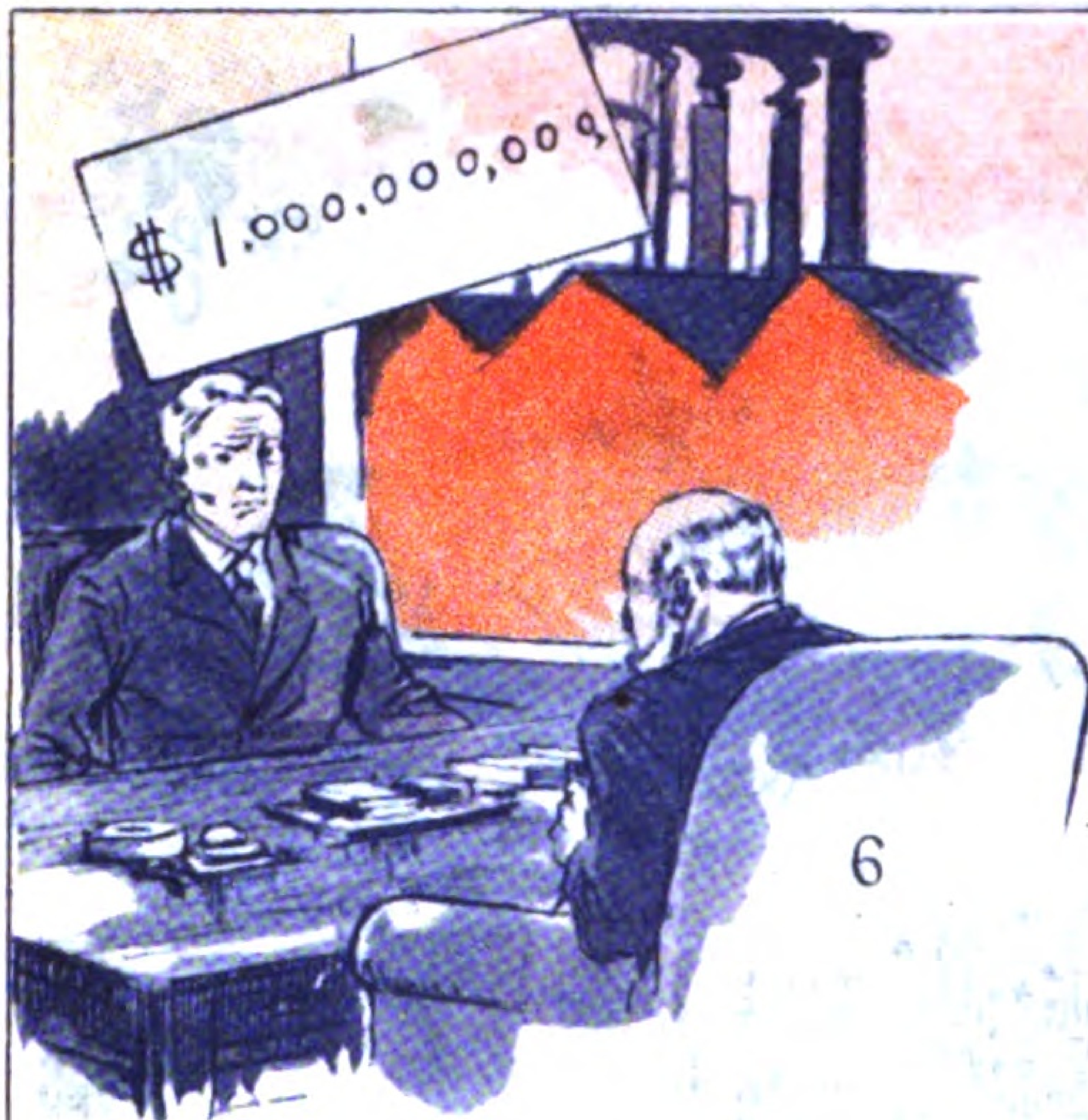
(2)十五歳のとき、フイラデルフイア市の郵便配達夫になつた。『よし、同じ郵便配達夫になるなら、世界一の郵便配達夫になつてやらう』と決心した。そして自分の配達する家の名前を、一軒一軒暗誦しはじめた。しまひには市中の家をすつかり覺えてしまつた。

(3)十九歳のとき、鐵道會社の事務員となり、月給五十圓となつた。『自分は事務員をやつてゐても仕事は社長の仕事をするんだ』と豪語してゐた彼は、宿直中、支配人の名前で打つた機轉の電報で、危く鐵道の難儀を救ひ、月給は一躍七十圓に上つた。

(4)二十二歳のとき、支配人が、『君、五千圓金を持つてないか』と聞いた。彼は自分の貯金と母の臍繰り金まで合せて、その金で支配人から株を買つて貰つた。これが彼の事業投資の最初である。そして段々と事業經營に興味を持ちはじめた。



(5)三十歳のとき、鐵道の木造橋が燒け落ちた。このとき彼はフト考へついた。『これは鐵橋にしたらどんなものだらう。そしてキーストン鐵橋工場を建てたが、果して大成功で、四年のうちに出資全部を取りかへしてしまつた。



6


5

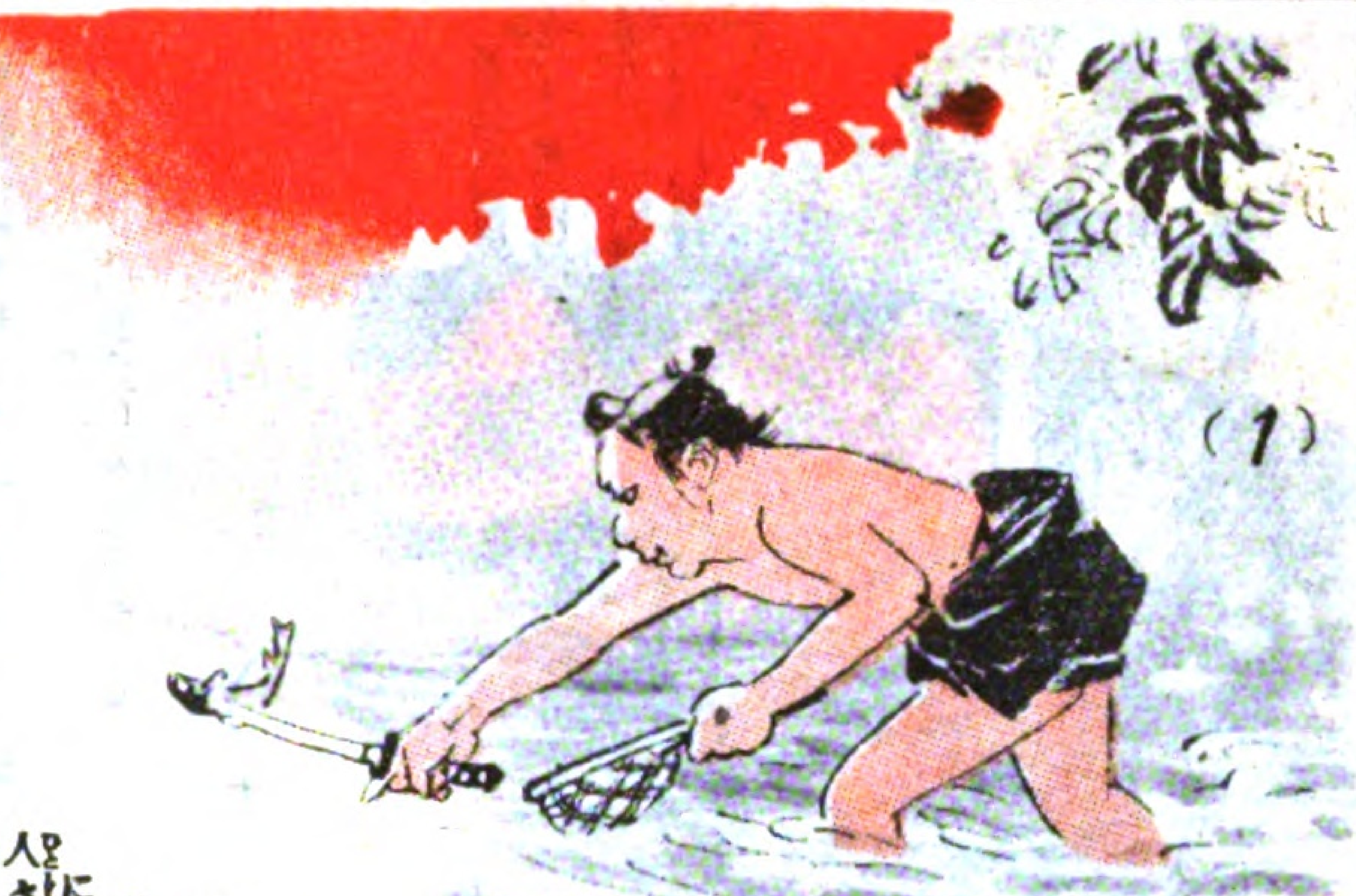
(6)六十五歳のとき、實業界隱退を決心し、カーネギー鋼鐵會社を、すつかりモルガンの米國鋼鐵會社に賣つた。値段は約十億圓に當る。最初の投資が五十萬圓。彼は二十七年のうちに二千倍にしたわけだ。

(7)それと同時に、彼は『子孫に金を遺して死ぬものは呪はれたる人だ』と言つて、ドンドン慈善事業に寄附しはじめた。自分は老後を養ふための六千萬圓だけ殘して、六億五千萬圓といふものは、スッカリ寄附してしまつた。

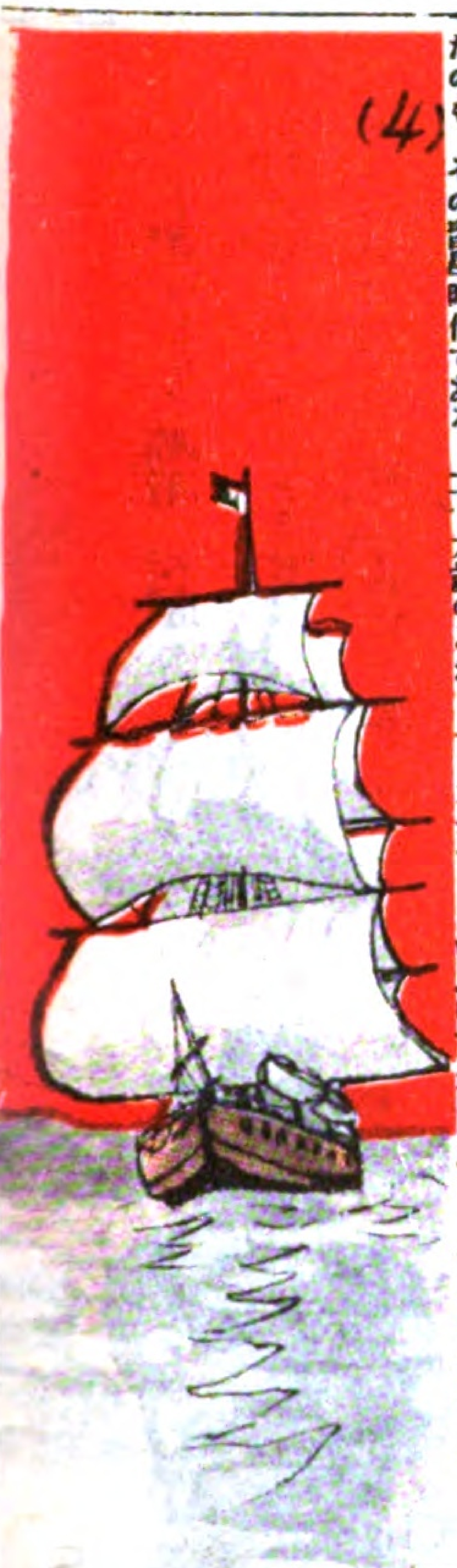

7

―嶺田弘畫―

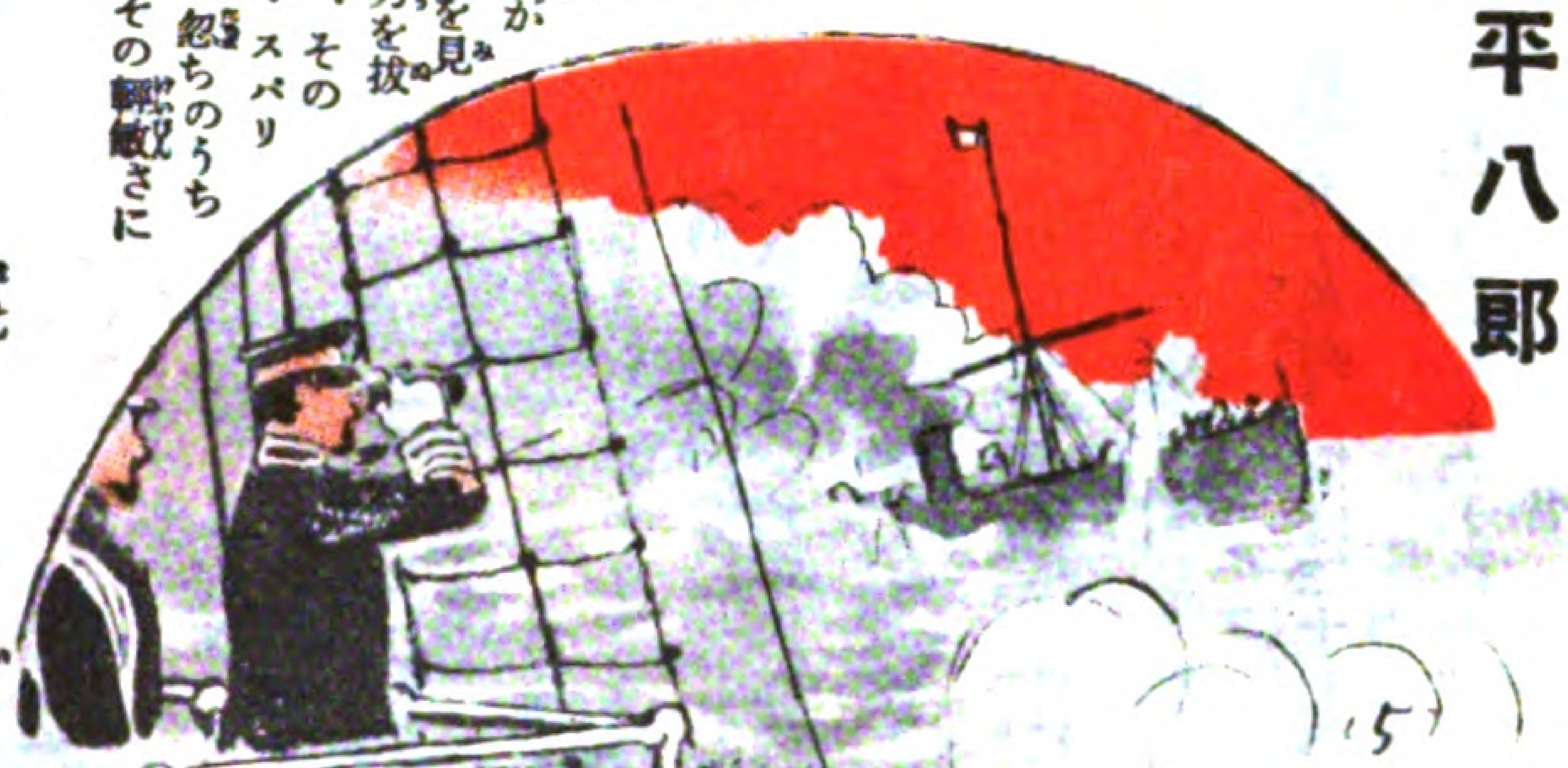
東郷平八郎



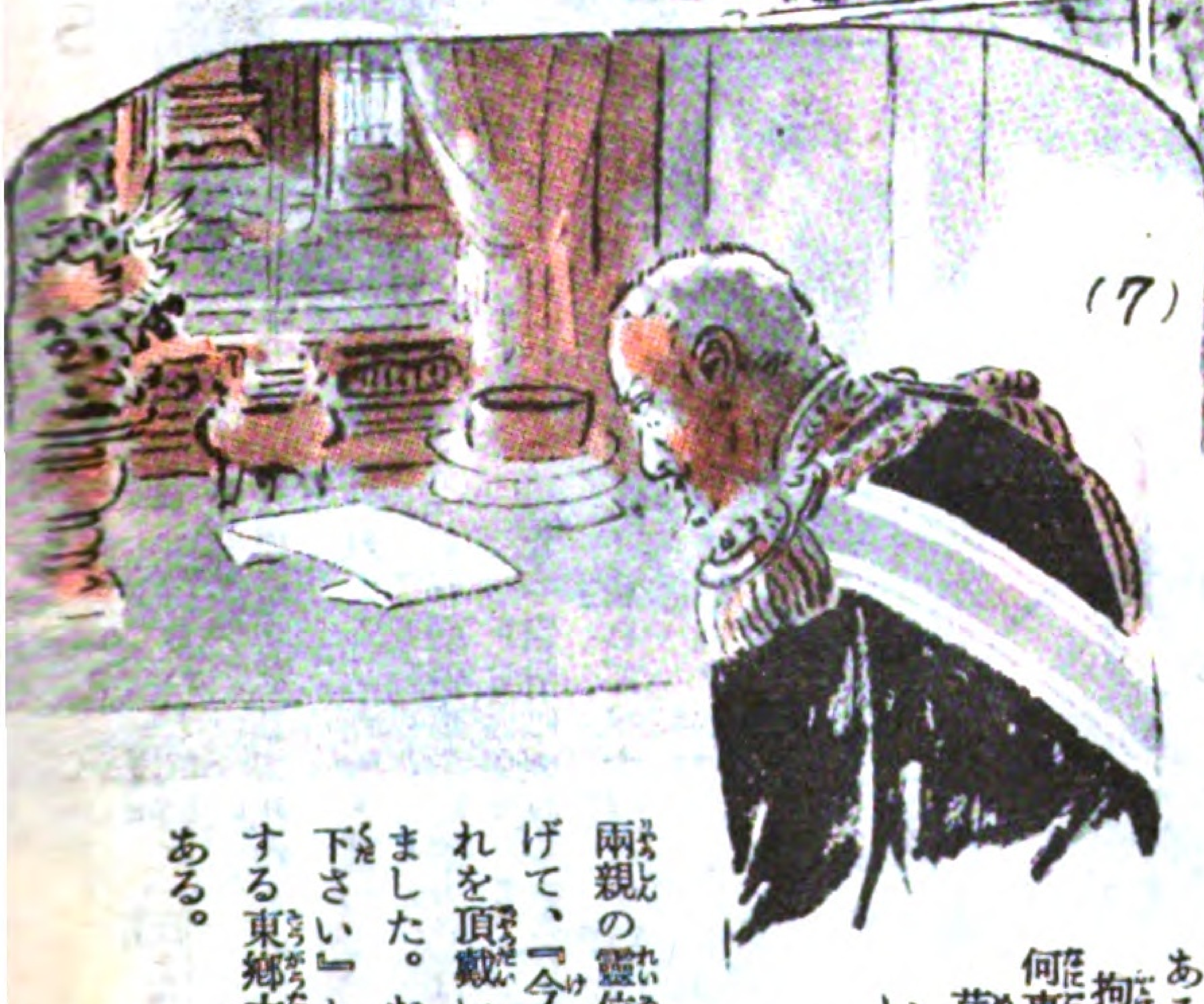
(1)十歳のときのお盆の日、裏の田圃の小川で、澤山の鮒が川上に上るのを見ていきなり小刀を拔いて小川に入り、その昇つて行く鮒を、スパリスパリと斬つて、忽ちのうちに數十尾を獲り、その輕敏さに人々を驚かせた。



(4)まもなく明治政府の海軍見習士官になり、官費で英國に留學した。ネルソンの旗艦ヴイクトリーに往つたのも、その留學時代である。二十九歳のとき、ハンプシヤーといふ帆前船に乗つて、世界を一周した。



(5)四十八歳のとき、日清戰爭が起つた。浪速艦長東郷大佐は、高陞號といふ英國の旗を擧げた運送船が、支那の兵隊や武器を乗せて避けようとしてゐるのを、撃沈してしまつた。危く國際問題になりかけたが、英國も流石に東郷大佐の正理に勝てず、事なきを得た。



(7)今年八十五歳、身はすでに大勳位に叙せられ、頸飾まで賜はつて、臣下第一の地位にあるにも拘らず、何事でも芽出度い事があると、まづ兩親の靈位に捧げて、『今日これを頂戴いたしました。お喜び下さい』と報告する東郷大將である。



(2)十四歳のとき、元服して前髪を落し、表面十五歳といふことにして、薩摩藩に出仕して書役となり、一ヶ月に玄米三斗俵一個を給せられた。毎日筆を執つて職を奉じ、家に歸つて餘暇があると、畑に出て野菜を栽培したりした。

(3)二十一歳のとき、御維新があつた。その際、春日といふ鹿兒島藩の軍艦に乗り込んで、いろ〳〵な戰功を立て、函館戰争にも往つた。それが濟むと東京に出て、再び書生生活に入つた。

(6)五十九歳のとき、日露戰争が起つた。東郷大將は聯合艦隊司令長官として、かの『皇國の興廢この一戰に在り。各員奮勵努力せよ』といふ信號を掲げて、日本海大海戰にバルチック艦隊を全滅させ、世界にその雄名を馳せた。

――小山榮達畫――

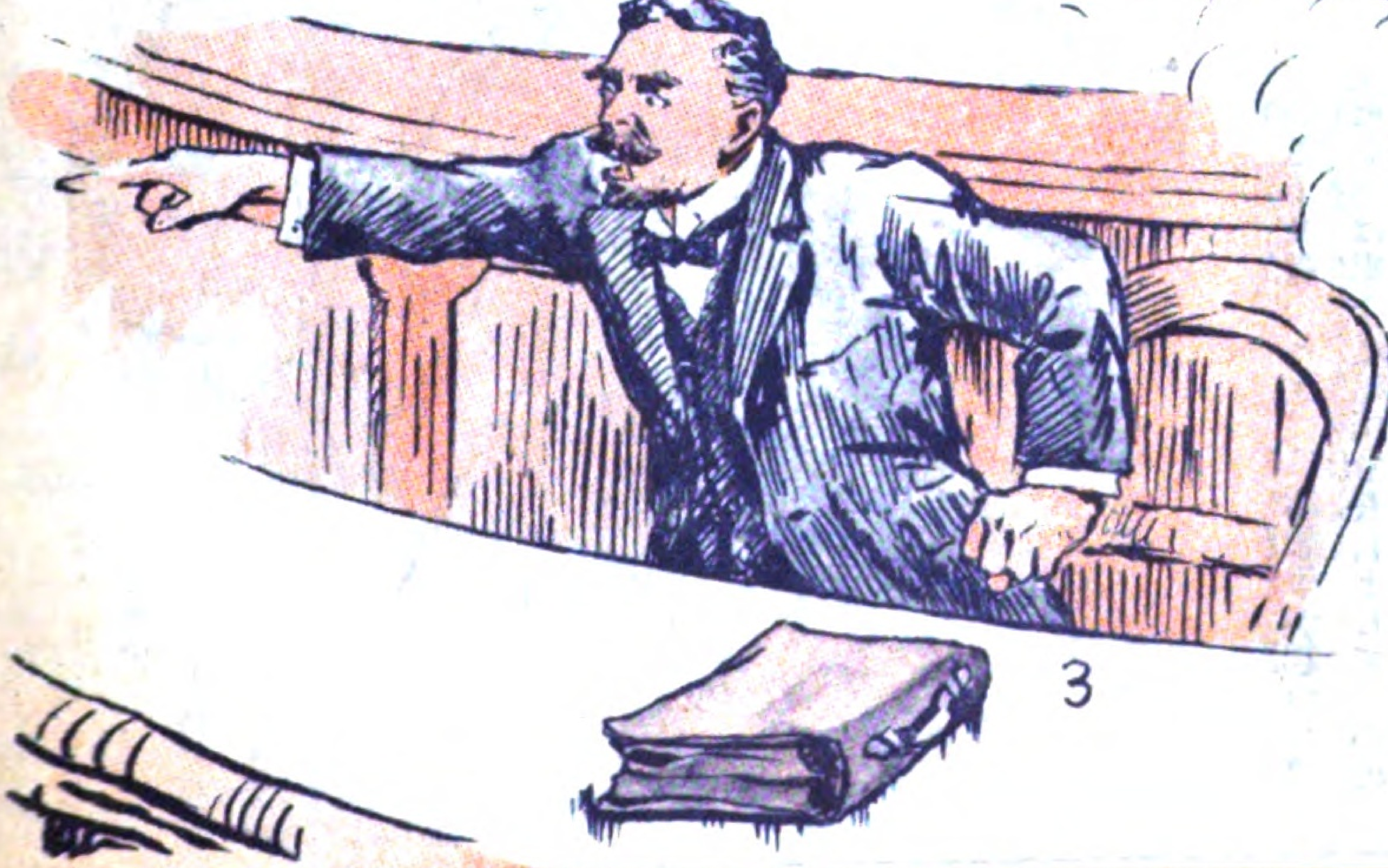
クレマンソー



(1)五歳のとき、ヴァンデイーの村醫者をしてゐた彼の父は、政治犯で拘引された。このとき少年クレマンソーは叫んだ。『何故お父さんを引ッ張つて行くんだ。よし、覺えてゐろ。僕がきつと仇討をしてやる！』



(2)三十一歳のとき普佛戰爭が起つた。セダンの關を破つて、勝誇つたプロシヤ軍は、續々と巴里に侵入して來た。熱血兒クレマンソーは、新婚早々の若き妻を故郷の兩親の許にのこして、あくまで祖國のために闘はうと決心した。



(3)三十六歳のとき、巴里の市會議長となり、國民議會においては、ガンベッタの下に極左共和黨員として代議士の議席を得、天性の雄辯をもつて、『内閣破壞者』といふ綽名をうけるほど猛烈に戰つた。その彼の倒した内閣十八である。



(4) 六十六歳のとき、この『内閣破壊者』は、こんどは自分で内閣をつくらなければならなかつた。首相としても相變らず熱烈な闘士で、政敵と喧嘩すれば、かまはず決闘するといふやり方で、『虎』と綽名されたが、その内閣は佛蘭西共和國最長命の内閣といはれた。

(5) 六十七歳のとき、『不肖は戦争の遂行のために組閣の大命を受けたのだ。我輩は最大の矜をもつて最後まで戦ふ』と宣言して、自ら戦場に度々姿を現はし、疲れ切つたる兵士たちの士氣を鼓舞した。

(6) 八十九歳のとき、この一生を戦ひつゞけた老虎も、つひに永眠した。『俺は婦女子に守られて死にたくない』と、枕元に女を一切遠ざけた彼は、『俺の死骸は、ヴアンデイーの森に、直立不動の姿勢で埋めてくれ』と遺言して死んだ。

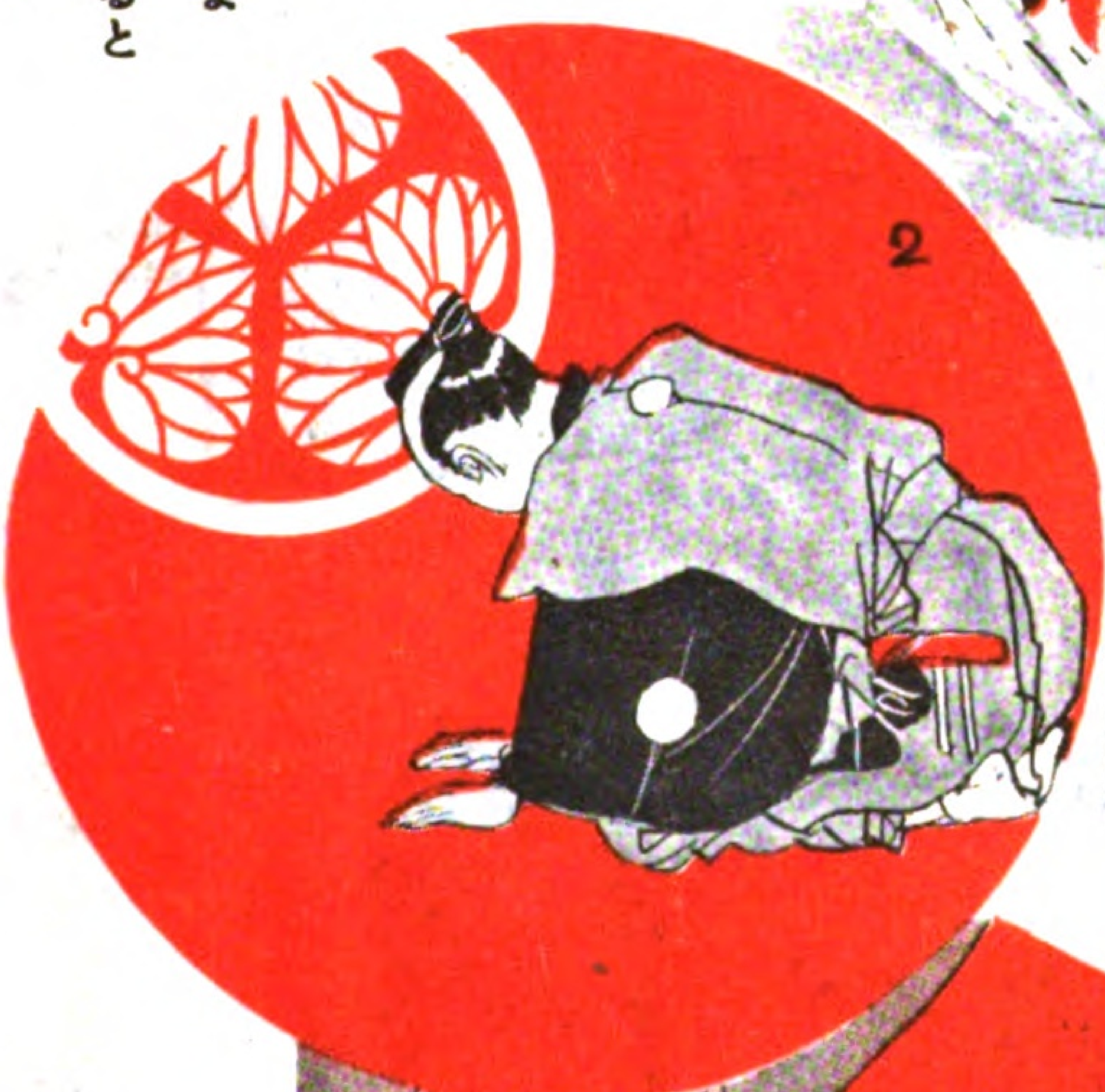
澁澤榮一

(1)十四歳のとき、『何でもこれからは勉強せねば立派な人間になれぬ』と、歩きながら論語を讀み耽つてゐたが、あまり夢中になつて泥溝に落ち、正月の晴着を臺なしにした。彼は父に向つて、『この汚した晴着の代りに、今にもつと立派な着物を着る身分になります』と言つた。

(2)二十四歳のとき、百姓を廢めて京都に出たが、熱心な攘夷黨で、睦仁親王の綸旨を戴いて、攘夷を實行しようと企てたりしたので、『君方が縛られて牢に入れられるといかんから』と奬められ、德川一橋家の家來になつた。

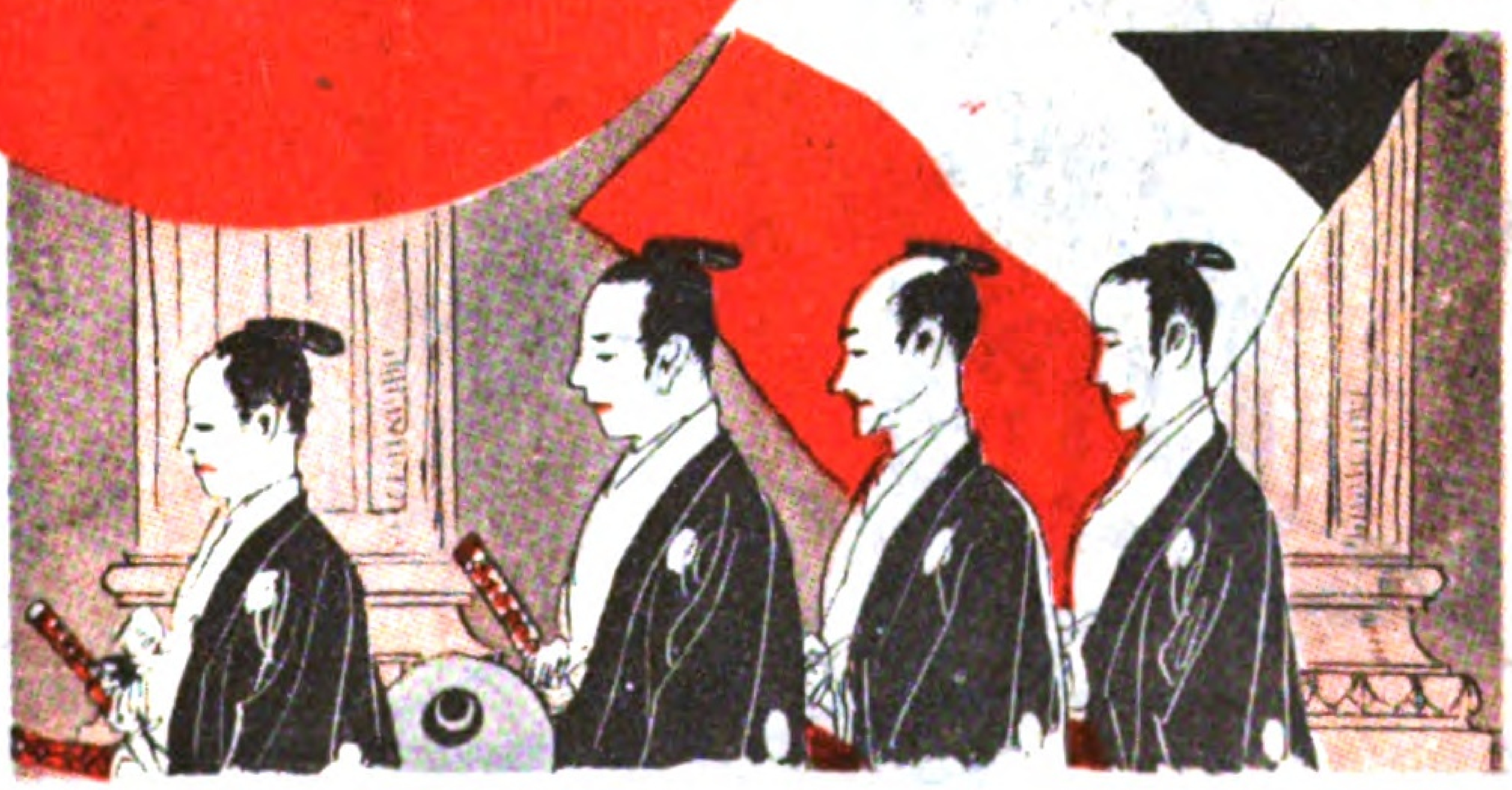


1



2

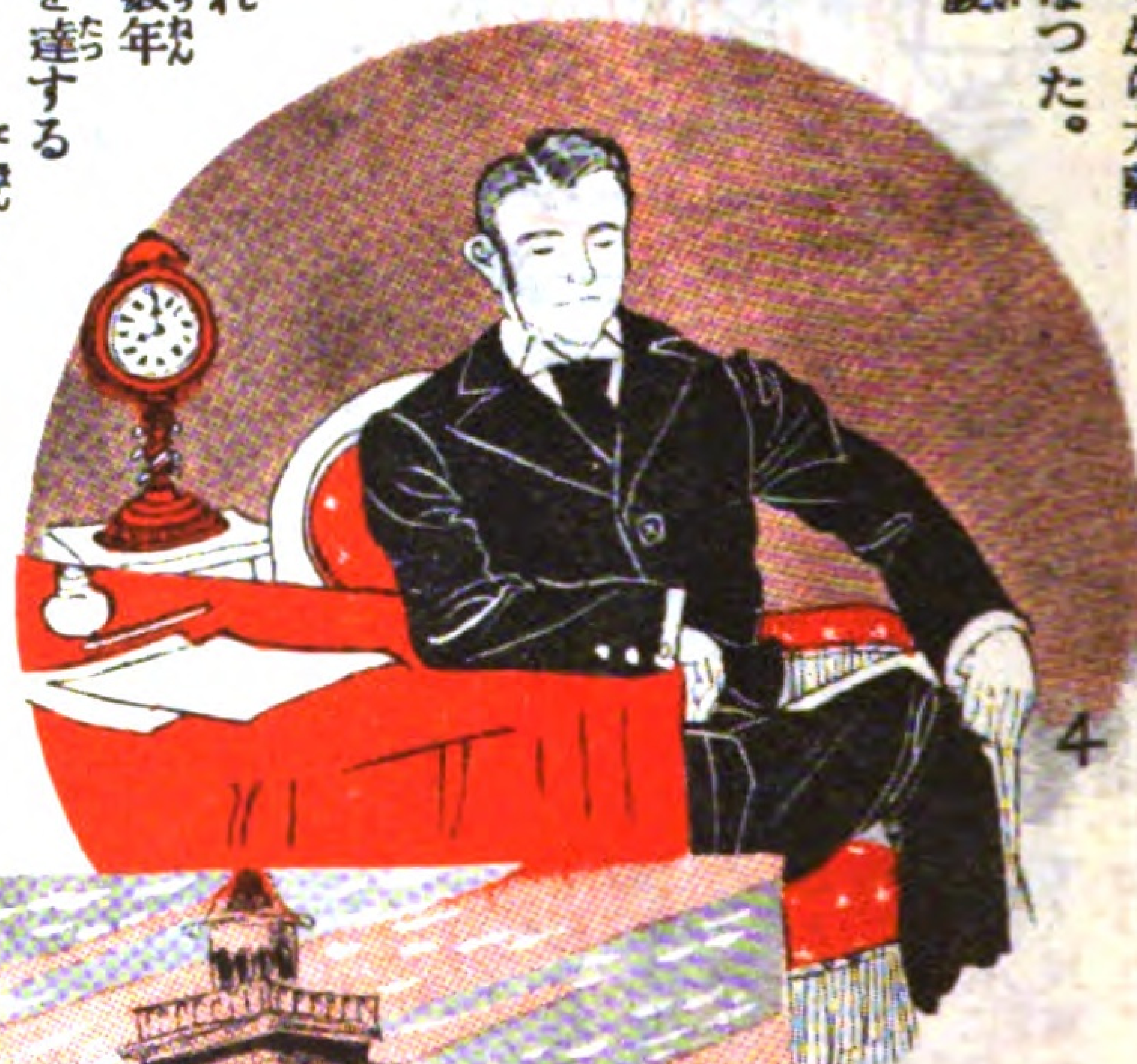
(3)二十八歳のとき、慶喜將軍の弟民部大輔昭武が將軍代理格で巴里大博覽會の使節として行かれるのにお伴して渡歐した。そしてナポレオン三世に謁したところ、『佛蘭西は日本に同情を持つてるんだから、安心して歸りなさい』と言はれた。



3

(4)歸朝してから大藏省の役人となつた。氏の三十四歳のとき、大藏大臣井上馨が辭職したので、次官であつた氏は大臣になることを求められたが、『私が數年以來の宿望を達するのは今だ。いまの日本で一番大切なのは民業を興すことだ』と言つて、斷然官を辭した。

(5)同じ年、第一銀行を創立した。資本金二百五十萬圓、そのうちに二百萬圓は三井と小野が出し、五十萬圓は公募した。當時の二百五十萬圓は、今の二億五千萬圓にも當る。この第一銀行が、日本で最初の銀行であつた。



4



5



6

(6)七十七歳のとき、斷然實業界から隱退した。しかし社會事業とか、國家關係のこととか、國際上の務めなどについては、相變らず盡瘁して、『これらは辭表の出せぬ仕事だ。倒れるまでやる』と言つてをられる。

―石井朋昌畫―

ストレーゼマン



(1) 家があまり裕福でなかつたので、彼は苦心して高等學校を卒業した後、十九歳で伯林大學に入學し、歴史、國家學、文學などを勉強した。彼の博士論文は『ビール瓶工業に關して』といふ珍らしいものであつた。

(2) 二十四歳のとき、伯林のチヨコレート製造業組合の書記長になつたのが、彼の社會に出た第一歩。それからサクセン工業組合の理事、獨米經濟協會の幹部と、實業界に活躍し、



(3) 三十歳には早くも國會議員となつた。世界大戰中、彼は年少の身を以て、堂々たる大政治家と伍し、實業界に扶殖した努力と、彼自身の政治的手腕をもつて押しも押されぬ一方の旗頭となつた。四十歳のときには國民自由黨の首領、後に分裂して人民黨の首領となつた。



(4) その後彼は、長く外相として獨逸の難局を處理し、その偉名は歐洲全土に響いた。



四十九歳のとき、彼の多年の努力は酬いられ、獨逸は國際聯盟に加入することになつた。彼の偉業は未だ半にして國民に惜しまれつゝ昨年物故した。

—— 加東三郎畫 ——

はい病の全快法を

無料で差上げます

御安心下さい肺病は必ず治ります。私の治つたが何よりの證據です私は數年前から猛烈な肺病にかゝりあれこれと隨分金も使ひ有名な先生にも見ていたゞき人がいゝと云われる藥や療法は勿論木の實草の根、虫やけものゝ**キモ**に至るまで數限りなく試みましたが何れも一向に**キヽメ**なく日増にやせ衰へ家人には恐れ嫌われ只死を待つばかりの心細い身の上となりました所、フトした動機から發見した合理的療法により僅か二ケ月半の後には立派に元の身體になる事が出來ました。

昔から「**病んで醫者になる**」の諺通り今では肺病の事なら專門家も及ばぬ程體驗による實際の智識を得ました爲に近頃世間に發賣してゐる色々な賣藥の内幕や療法なども悉く知つて居ます無論藥は必要ですが此の病氣ばかりはどうしても服藥をすると共に養生を合理的にしなければ決して早く完全に治るものでありません。

この合理的療法により完全に治つた私の現在は御覧の通り人一倍元氣に働くやうになり今では僅か乍ら蓄財も出來恵まれた家庭の中に樂しく暮して居ます。

それにつけても全國に百萬人以上も現に肺病で惱んでゐる人達があると聞くにつけ私の苦んだ當時を思出し氣の毒でなりませんので此のたび貯蓄の一部をさいて病氣當時の實驗談や藥の選び方を初め息切れ、セキの止方喀血した時の手當法、肺病を治すに何より大切な食物等を委しく記述した肺病全治の極意とも云ふべき寫眞入で約五十頁の書物を作り私の治つた御禮の意味で人助けのために無料で差上げて居りますから御病人は勿論其の御家族の方でも此の記事に目がついたのが幸です御遠慮なく近所の方は私宅へ、遠方の人は手紙で「**肺病の全快法**」を記述した書物を送れと御申込下さいドナタにも無料でスグ送つて差上げます。

東京下谷上根岸町九六皆統寮内　**加藤生**

登録商標

獨逸ベルツ博士

SUZUKI NIPPON-SEIYAKUSHA

黴毒と體毒を

内服藥で治癒する「ベルツ丸」の偉力

△統計上から見た有毒者

東京市の衛生試驗所では昭和四年十月廿五日に血液檢査無料デーを行つた處、受檢査の人員が男千二十二人女百二十二人計千百四十四人に達した其内陽性即ち有毒者は男百九十一人即ち一割八分七厘が恐るべき有毒者であつた所が女に至つてはとてもひどく百二十二人中四十九人即ち四割が有毒者であつた。之を以て直ちに全國有毒者數の一般を推す事は勿論出來ぬとしても又意識しない人の多くも有毒者である事は事實である(右は東京朝日新聞四年十一月四日發表による。)

△恐るべき梅毒や體毒は内服藥で治療せよ

季節の變り目特に木の芽時になりますと額手足は勿論身體全體に吹出物のした御氣の毒なお子樣方を見受けますが、これは親の不品行が罪もない可愛いゝ子供に迄報いたもので、昔は胎毒と云ひ今では遺傳梅毒と云つて居ります。申上げる迄もなく梅毒は自分一人の病にとゞまらず、妻を泣かせ子孫を苦しめ、其の害毒は實に恐ろしい程であります。近時わが國に於ける醫學の進歩發達は非常なものでありますが尚ほ之れを根絶するは至難とされて居ります。故に政府でもこれが對策に種々苦心されて居る事は皆樣も既に御承知の通りです。が其の實績を擧げ

や體毒の患者は少しも減じて居ない、それ丈け治療が困難だと云へる。それは注射藥のみの治療で内服藥がなかつたからとも云へる。

△ベルツ丸は梅毒體毒唯一の内服藥ですから

梅毒、體毒、下疳、しつ毒、瘡毒、梅毒性痔疾、リウマチス、ひえ毒、脊髓、惡性ニキビ吹出物、又は梅毒性にて頭腦惡き方や常に便秘性にて苦しむ方其の他凡て梅毒性から來た諸疾患に思ひ當る方はベルツ丸を服用すれば切らず注射せず血液中の諸毒を大小便に依つて體外に排泄します。試みに四五回服用すれば直に心身の氣力は恢復して頭腦は輕くなり胃腸は强健になり食慾は進み知らず識らずの間に血液は淨化され日ならずして全治の悅び



ベルツ博士は明治九年我が國政府の懇請に依つて來朝せられ爾來三十年間東京帝國大學教授宮内省御用係として令名天下に轟いた名醫で人類愛の一念に驅られ我が國の病苦に惱む方々を一人でも多く救ひたいと幾多苦心研究された醫學界の大恩人であります。

左に數ある禮狀の一部を紹介します

△ベルツ丸十五圓で全快　熊本市　寺内博君

「前略」小生は二年前縣立病院にて六〇六號注射を數十本致しましたが效果なく全く苦しんで居りました處キング誌上にて貴藥を知り早速五圓分注文致し着藥其の日から服用致しました處其の效力の偉大なるに驚き追て十圓分一個服用致し全く健康體となりました念の爲前日病院にて血液檢査を致しました處無毒と云ふ有難い通知に接し只々感謝の外はありません……云々。

△潜伏梅毒を根治した私　山形縣　高山良雄君

「前略」ベルツ丸服用以來胃腸は强健になり頭腦の重いのは治り氣分もはつきりし全身の抵抗力は驚く程强くなり全く生れ變つた樣な身體の持主となり毎日感謝に咽んで居ます……云々。

△高木博士が推奬したベルツ丸で頑固なニキビを全治した　岐阜縣　大内保君

「前略」先日御送藥煩はし候は愚息が顔面に「ニキビ吹出物」續出し困り居り候處偶々内科醫の診斷を乞ふ必要ありて伊勢羽津山病院に行き診斷の節種々の話より高木博士がベルツ丸を推奬せられ早速御送藥煩はしたる次第其の後連服致居候が約半量にて全治致し候殘部は後日の爲大切に保存致置候之偏にベルツ丸の顯著なる效力と家内一同喜び居候云々。……………禮狀そのまゝ

藥價は輕症用三圓、重症用五圓、頑固用十圓、常服根切用二十圓、特別大德用三十圓。送料内地十八錢、領土六十五錢代金引替切手廿錢封入の事

東京市日本橋區濱町三ノ四(新大橋下車)

鈴木日本製藥所

嫁く人の噂もあしらひの花



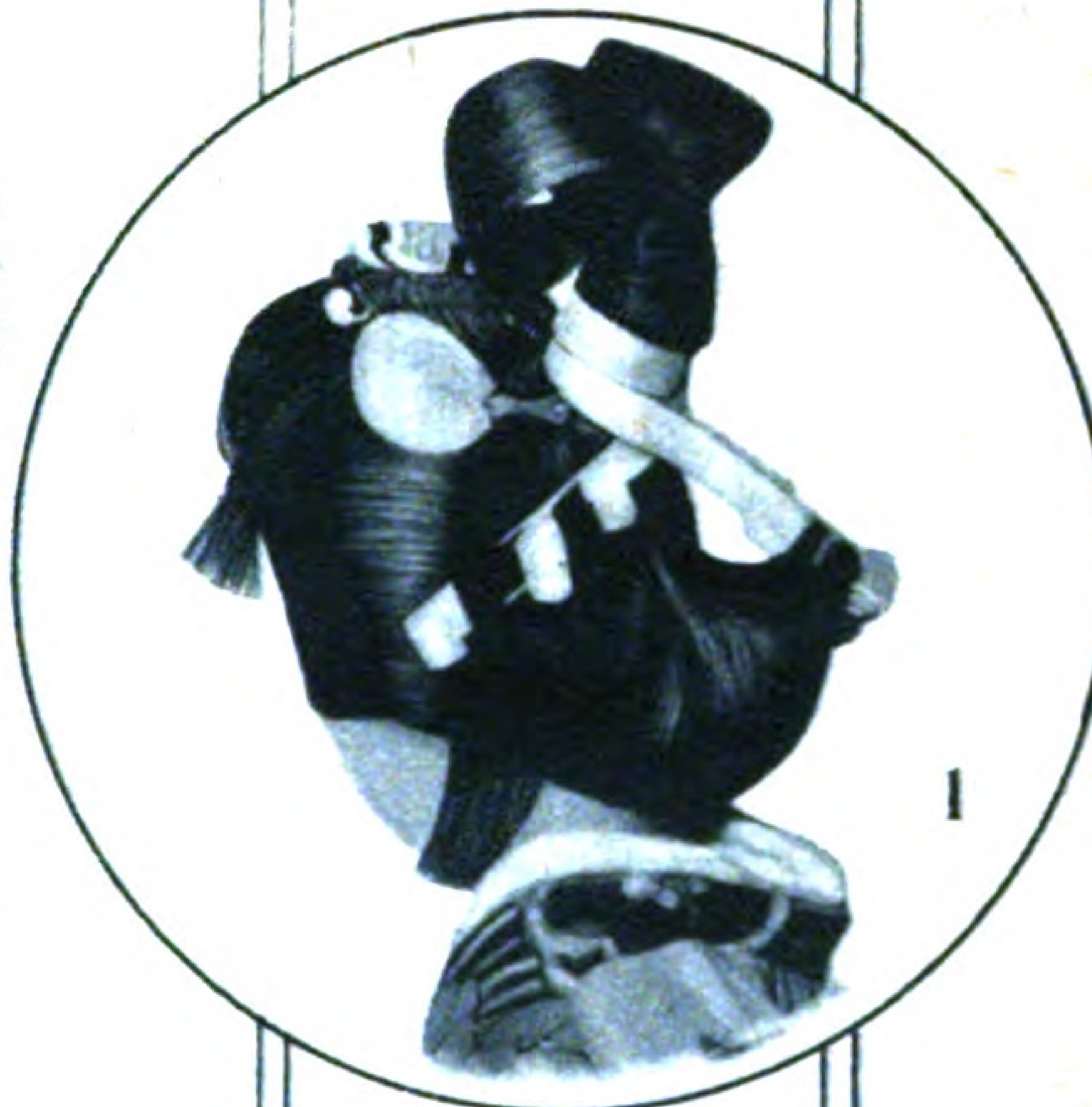
キンググラフ

春雨









(1) 二つ輪元祿（徳川末期）



(2) ねぢうめ（明治初期）



(3) 稚兒まげ（明治十年頃）



(4) 結綿くづし（明治二十年頃）



(5) 夜會まき（明治二十四五年頃）



(6) ばち形藝妓（明治三十年頃）



(7) 二百三高地（明治三十八九年頃）



(8) 勝山（明治末期）



(9) 七三（大正初期）



(10) 耳かくし（大正中葉）



(11) 髷なし（大正末期）



(12) 断髪（昭和初期）

偶然の





偶然といふものは隨分いたづらで、時時思ひがけない皮肉やユーモアを演出することがある。

(1)はラグビーの選手が敵味方入亂れて混戰！又混戰！戰ひは今や白熱の頂點に達して、犇めき合つてゐる壯烈な場面だ。

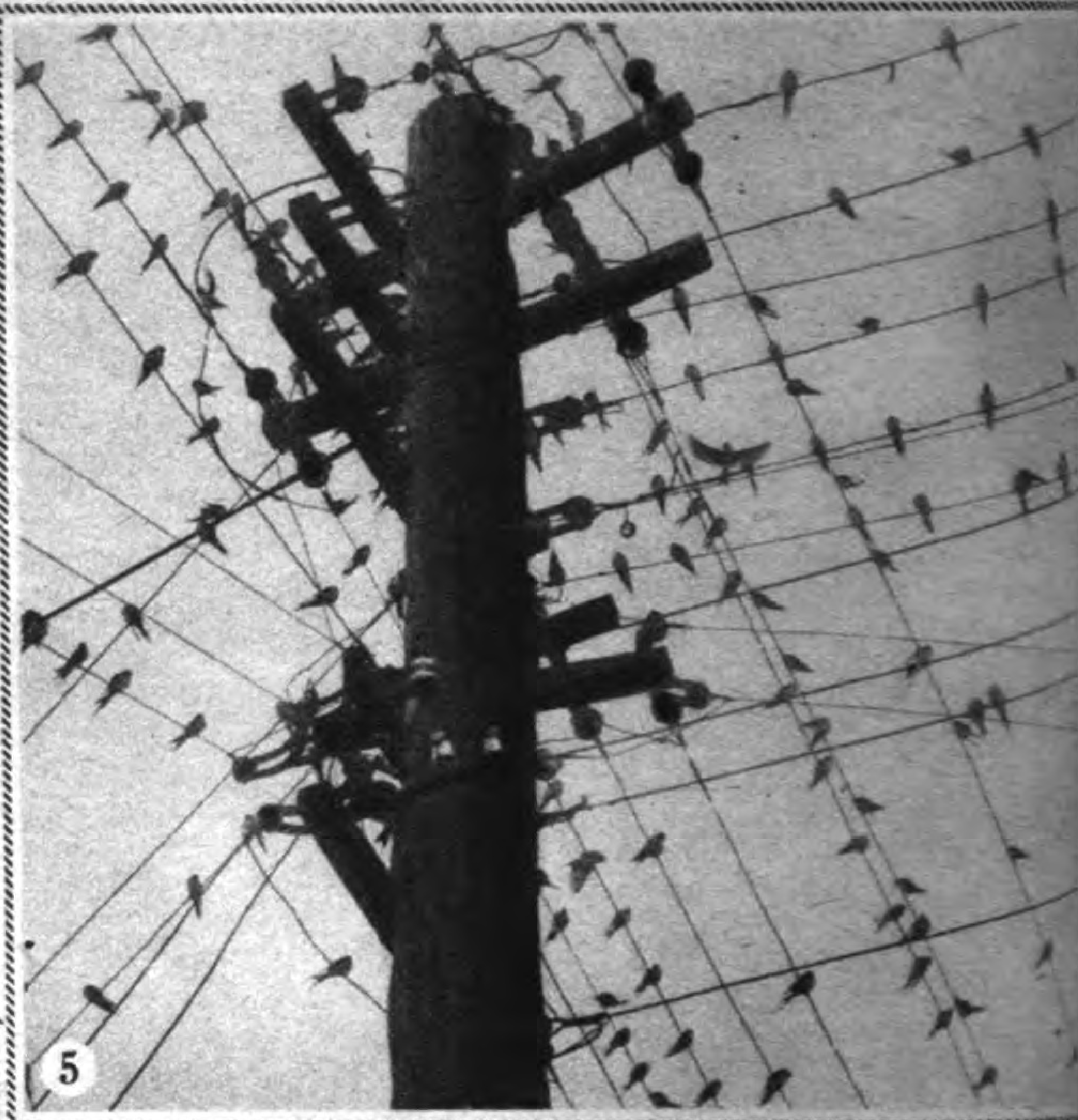
(2)ところがどう見てもこれと同じやうに揉み合つてゐるのは獵犬の一隊だ。ラグビー選手に負けてたまるものかと、獲物を中心に功名を爭つてゐるところは實に皮肉な對照である。

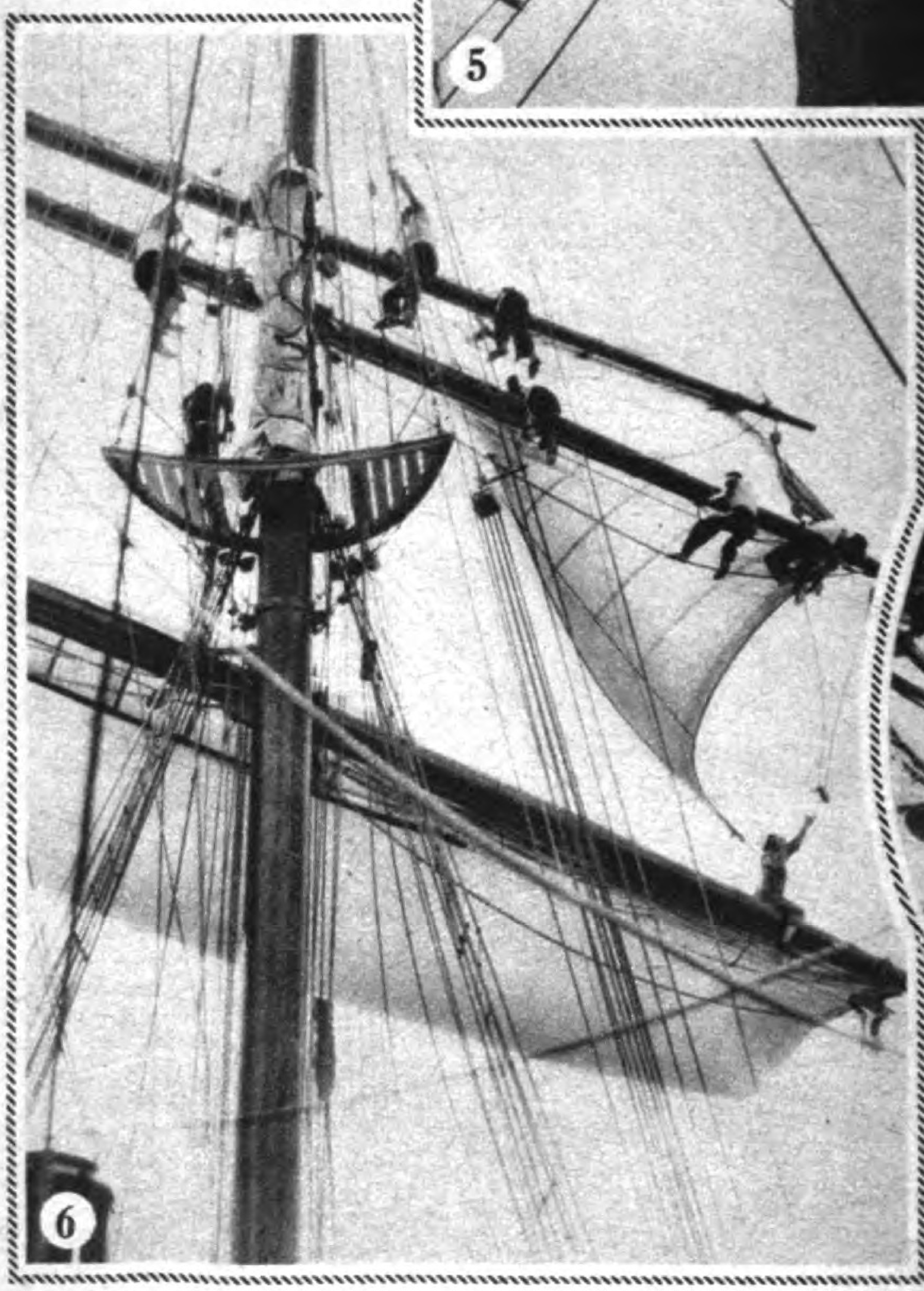
(3)は阿弗利加ネグロ土人の母子である。洋の東西を問はず人情に變りはない。色は黒くても可愛い吾が子、しつかりおんぶして『ネン〳〵コロリン……』と見ればこれによく似たのは

(4)濠洲の袋熊、子供を背中におんぶしたまゝ安全地帶の樹に登つて、天下の形勢を觀望？してゐる。かうして子供の大きくなる迄大事に育てるとは獸ながら感心。

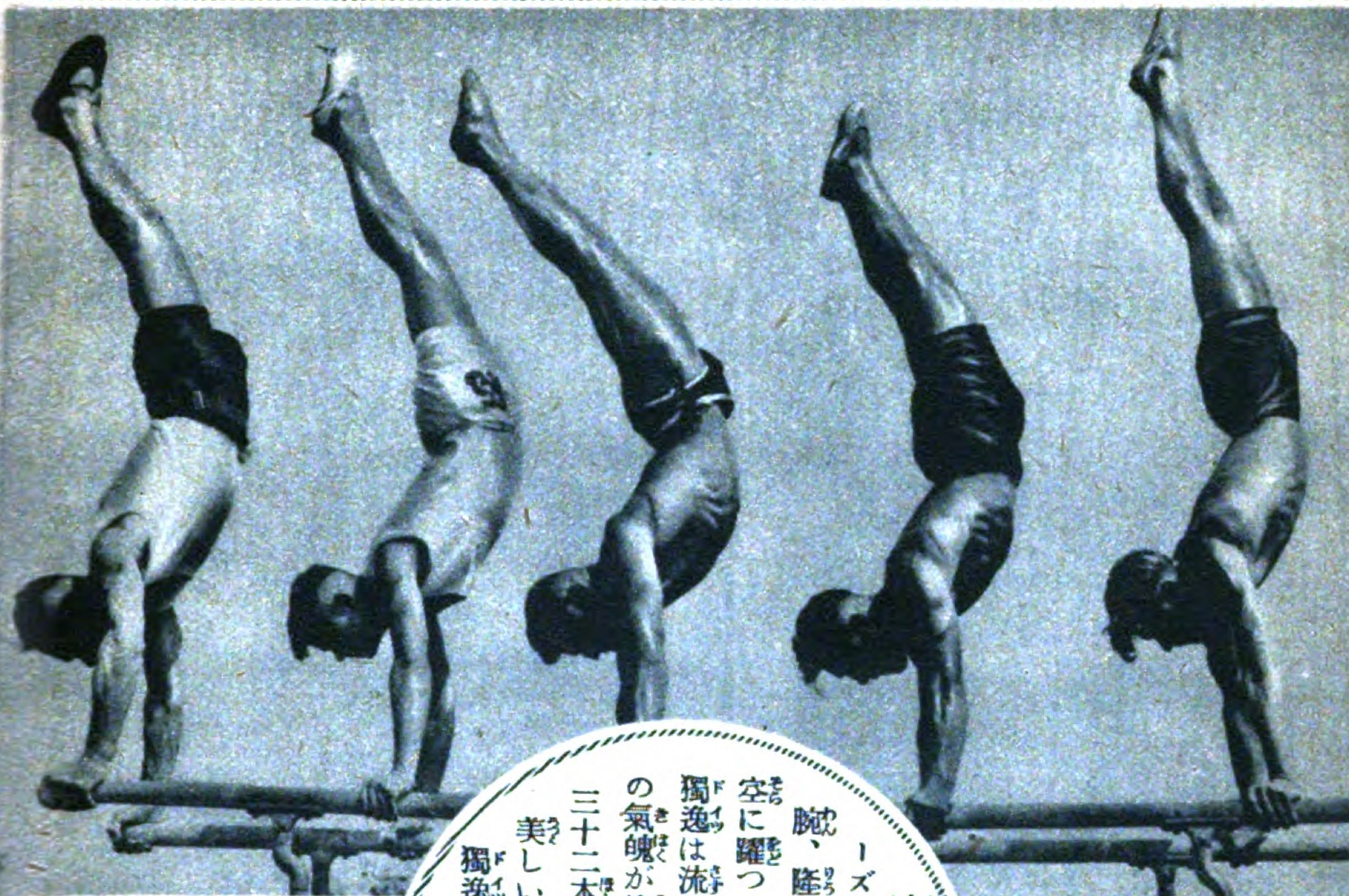


(5)雁が歸れば燕が來る。見上ぐれば晴れた日の電線には、無數の燕が止つて、チ、と啼いてゐる。これも春の景物の一つである。(6)恰度その燕かと見紛ふのは、高い檣の上に登つて作業してゐる船員たちだ。大空の下に輕く身を飜へす燕と船員――好一對の面白い對照ではないか。









(上) 此の素晴らしいポーズを御覧下さい。鐵の双腕、隆々たる筋肉、若者の五體は空に躍つて美しい弧を描いて居ます。獨逸は流石に體育の國、此處にも新興の氣魄が窺はれます。(下) 整然と並んだ三十二本の脚ー　さながら大理石の美しい柱列のやうです。これも獨逸舞踊團の奇拔なポーズ。



衞生講座

手術によらず自宅で手輕に
蓄膿症を治した經驗

▼興味ある實驗例—最近醫學上の一大驚異▲

▽六年來の蓄膿全治

私は六年前より鼻が惡く、一昨年より物の匂が分らず、一寸した事も忘れ又物にあき易くなりました。之が所謂恐るべき蓄膿症で、此儘に放つて置くと、神經衰弱や低腦になるといふ事を知つた時は、自分の前途の光明は俄かに消え失せたやうに思はれて、日々絶望の日を送つてゐました。しかしあゝ天なるかな。神なるかな。ドクトル湊謙治氏發明の湊式吸瘉療法によりて一生の喜びの聲をあげる事が出來たのです。湊式吸瘉療法を始めて以來私の蓄膿症は一回二回と度重なるに從ひメキ〳〵と効果を奏し、靑黄色い鼻汁は水色と化し、頭も全く輕くなりました。そうして嗅覺不能、不眠症、記憶力減退等も漸次恢復して參りました。醫院生活十有餘年、賣藥五種何れも無効、今私は湊式吸瘉液により明るい社會に蹈み出すことが出來ました。私は嬉しくてたまりません。吸瘉液の効。助けの舟、私は社會の荒波に流されるのを助けて呉れた吸瘉液の事は終世忘れることは出來ません。私は滿天下の同病に惱む人々のために湊式吸瘉療法を御勸めする。——之は山形縣鶴岡市賀島町仁藤堅治氏の實驗報告の要旨です。以上と同樣な實驗者の報告や禮状は日々山をなしつゝある次第です。今日蓄膿症でも肥厚性鼻炎でも鼻の病は切開手術の外はないとされてゐるのに、切開手術によらず極めて手輕に簡單に吸入療法でそれが治る事となれば之に越したる喜びはない譯であります。助けの舟だ！救世の福音だと人々の喜ぶのも無理はありません。では湊式吸瘉療法とは何んな療法かといふに、ドクトル湊謙治氏が父子三十五年の長年月を費し完成せる科學的新療法でありまして、革命的の新創製劑吸瘉液を獨特の裝置により煙霧となし、切開手術の外到達し得ない鼻腔の奧深く送り込み、蓄膿の原因をなしてゐる膿菌を死滅分離せしめますので、鼻汁の澤山出る人は出なくなり、鼻のつまる人は忽ち快通し、物の香の分からぬ人は分かるやうになることは驚くばかりである。

▽實驗報告無代進呈

特に手術を嫌はるゝ方、手術後の經過思はしからぬ人は、是非共一度此湊式吸瘉療法を御試用あらん事を御勸め致します。其方法又頗る簡單で自宅では勿論電車汽車中でも煙草一本を吸ふと同樣の手數と費用で出來ますので、家庭療法としても全く理想的であります。ハガキで「キング」で見た旨記入東京市麹町區下二番町十明光社へ申込み次第鼻病患者必讀の「實驗報告集」を無代進呈す。

本誌愛讀の皆様へ

いよ〳〵新學期が始まりました

新學期！心を引きしめる大事な節の新學期！！大事なお子様方、お弟妹方にとつて最も大切な時です。此の機會に深き注意が必要です。最善の指導が要ります。どうぞ、全國の教育家諸先生が擧つて賞讃する良雜誌、男子には『少年倶樂部』女子には『少女倶樂部』をお與へ下さい。この兩雜誌は面白く讀むうちに學課のたすけになる樣、優れた考案で、編輯されてあります。

特に今度の五月號は、兩誌とも大奮發！
破天荒の大附錄がついて居ります

一人も多く讀まれて、善良な子供が一人も多く出來るやう、兩編輯局は熱誠を傾けて苦心努力致しました。

どうぞ御愛子樣がいよ〳〵人格が高まるやう

學校の成績がよくなる樣、家庭でも喜んで勉强するやう、ハキ〳〵活氣ある少年になるやう、淑やかな品のある少女となるやう、『少年倶樂部』又は『少女倶樂部』をお與へ下さい！

御覽下さい！
諸名士諸先生
此の賞讃



代議士　永井柳太郎

古今東西の面白い話を讀んでゐる内に奮發心も出る、我慢をする氣にもなる。果ては自分も何か研究しようなどと野心も起つ[illegible]くる。つまり少年の心に潜んでゐたあらゆる良いものを呼醒すやうに編輯されてるのは『少年倶樂部』だ。



文學博士　谷本富

『少年倶樂部』は眞に名詮自稱の老大なる雜誌で、徹頭徹尾淸新の氣が溢れて居り、只々アッと感服するばかりである。全篇悉く金玉の辭で確かに少年男子の好讀物だらうと信じ、一層手廣く推薦したいと思つてゐる。

お願ひがございます



少年倶樂部五月號

定價平月號通り 五十錢

少年倶樂部五月號は—

二百號記念特別號で

美しい、貴い、得難い

二つの大附錄がつきます

この二大附錄は又と手に入らぬ皇室の御寫眞と物知りになる本です。

五月號は四月の十日頃に發賣になります。是非御與へ下さい。



少女倶樂部五月號

定價平月號通り 五十錢

とても立派な、爲めになる大附錄

繪入り國史年代表

がつきます。これは歴史の勉強になくてはならないものです。美しい繪を極彩色に印刷し、昔から今までの歴史が一目で分る重寶なもので之があればキット歴史の成績はグット上ります。

此の外、人見絹枝孃のお話や、優等生になれる法などの特輯があります。



山脇高女校長 山脇房子

『少女倶樂部』は先づ理想に近い雜誌だと思つてゐます。この雜誌は立派な教育家や、名士が賛助員となつて居られますだけに、品性の點からも、知識といふ點からもよく考へて編輯してあるのがよくうかがはれます。

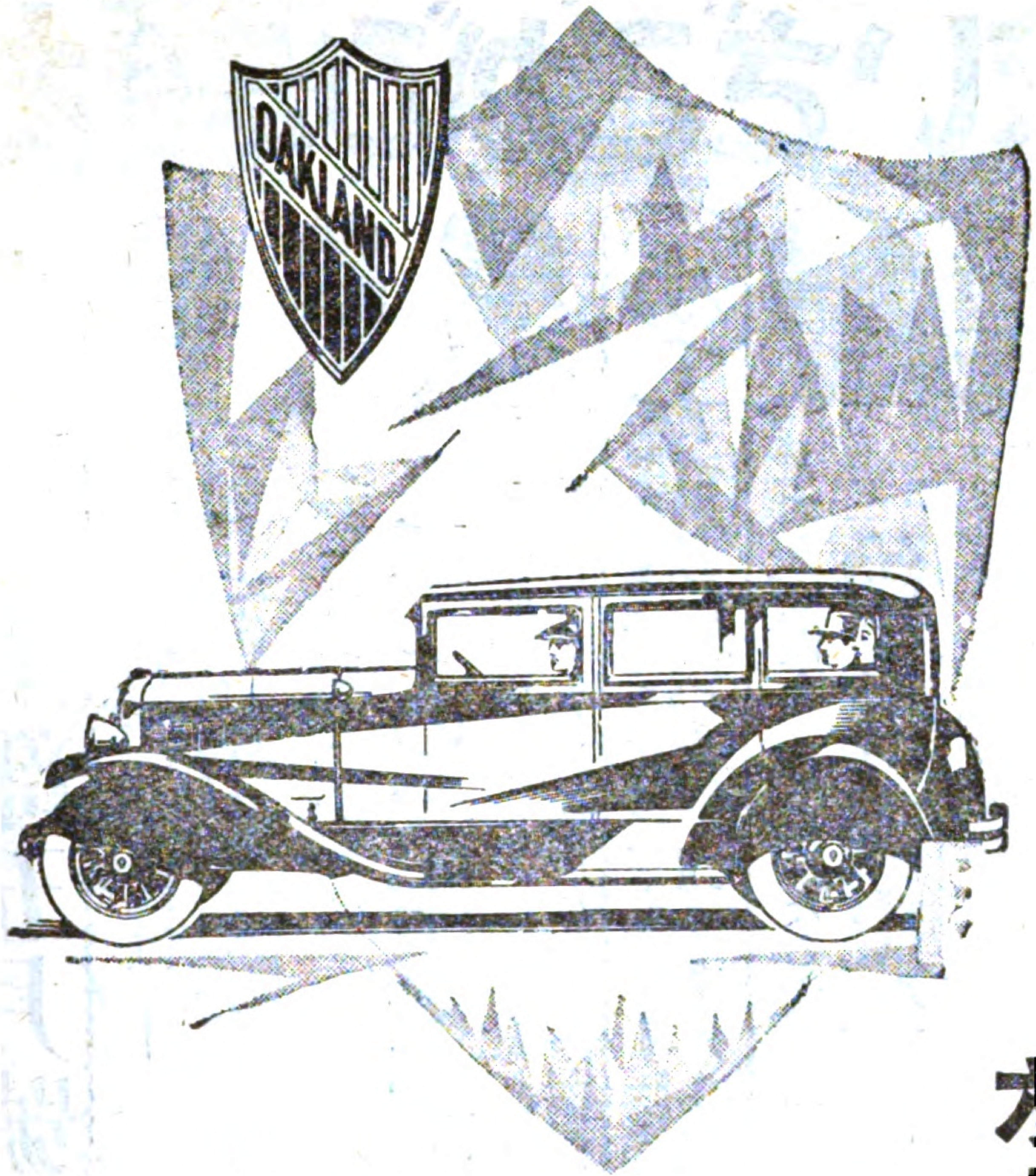


文學博士 中村孝也

少女を禮讃するものは、又『少女倶樂部』を禮讃せよ。そこには常に希望の光がたゞよふ。平和と幸福と、而して笑ひとに祝福された花園は此處だ。この美しき『少女倶樂部』に繁榮の悦びあれ。

何時も出ると直ぐ賣切れになります。折角の特別號買ひ損ねては殘念です—今から書店へお申込おき下さい。

發行所—（振替東京三九三〇）— 東京本郷 大日本雄辯會講談社



瀟洒そのもので且有利な

オークランド號

今日の自動車愛用の公衆はスタイルの瀟洒な車に乘る事に非常な熱心さを示して來ました。

オークランド號はその車體の流線美目の覺める樣な美觀を以て、遺憾なく此の一般傾向に合致して居りますその上に本車本來の特色たる最も信賴すべき車として自動車に興味を持たない人々をまで熱狂的の自動車フアンにしてしまひます。

營業用としての本車の價値は經營者の最初の投資に對して有り餘る利潤を齎らします。又自家用としての本車は所有者の期待に幾倍する滿足を與へます。

日本ゼネラル・モータース株式會社

オークランド號はゼネラル・モータースの製品なり

馬を躍らして



寫眞は東京乘馬倶樂部の明星と謳はれる德川厚男令孃喜和子さまが、得意の障碍物飛越。





春だ！春だ！學窓の若人にとつて最も樂しい春だ。朗かな大氣、スクスクと伸びる五體、あゝ若人に惠まれたる春だ。

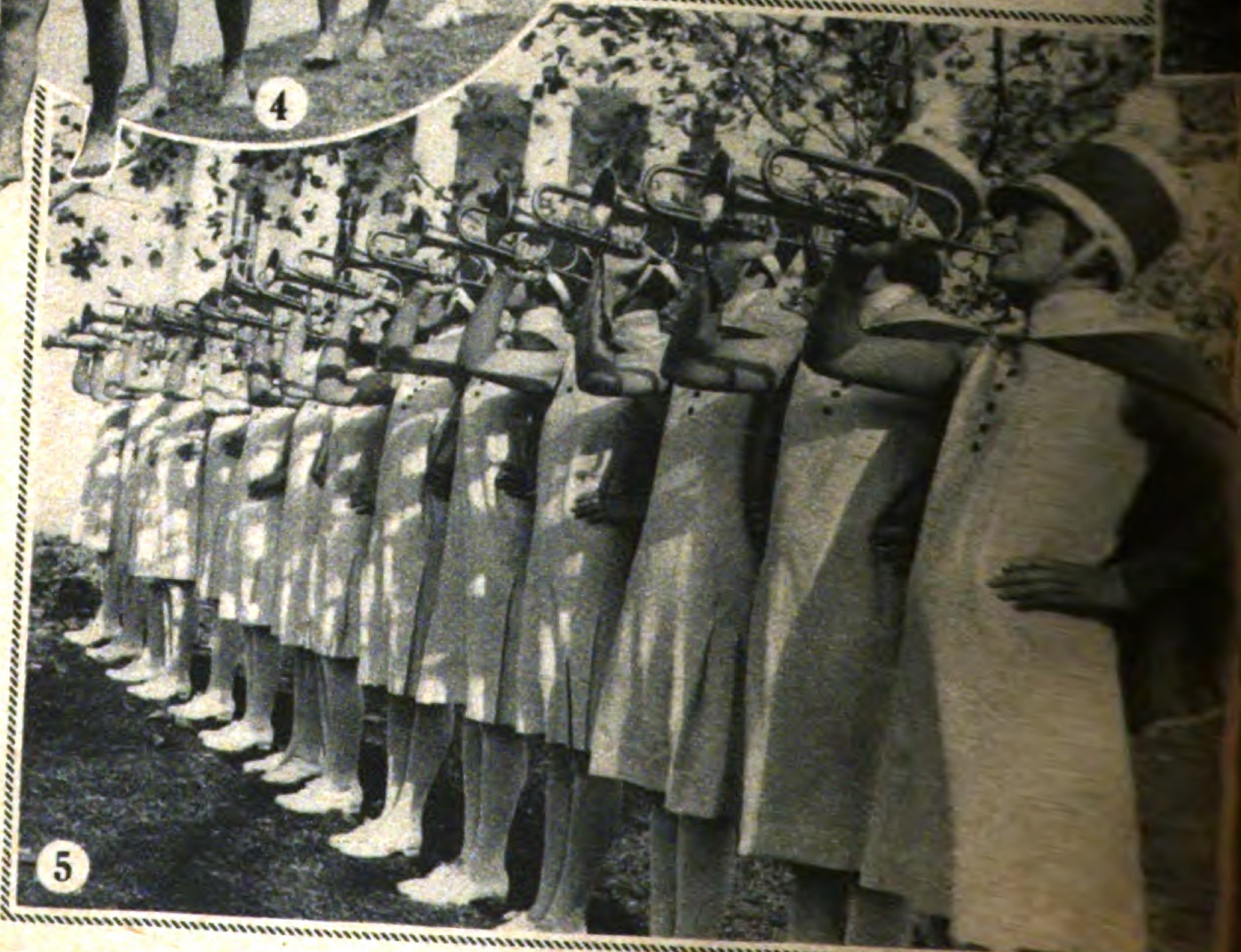
(2) 米國ヴアツサル女子大學の記念祭。その美しい花輪の行列は每年の呼物となつてゐる。



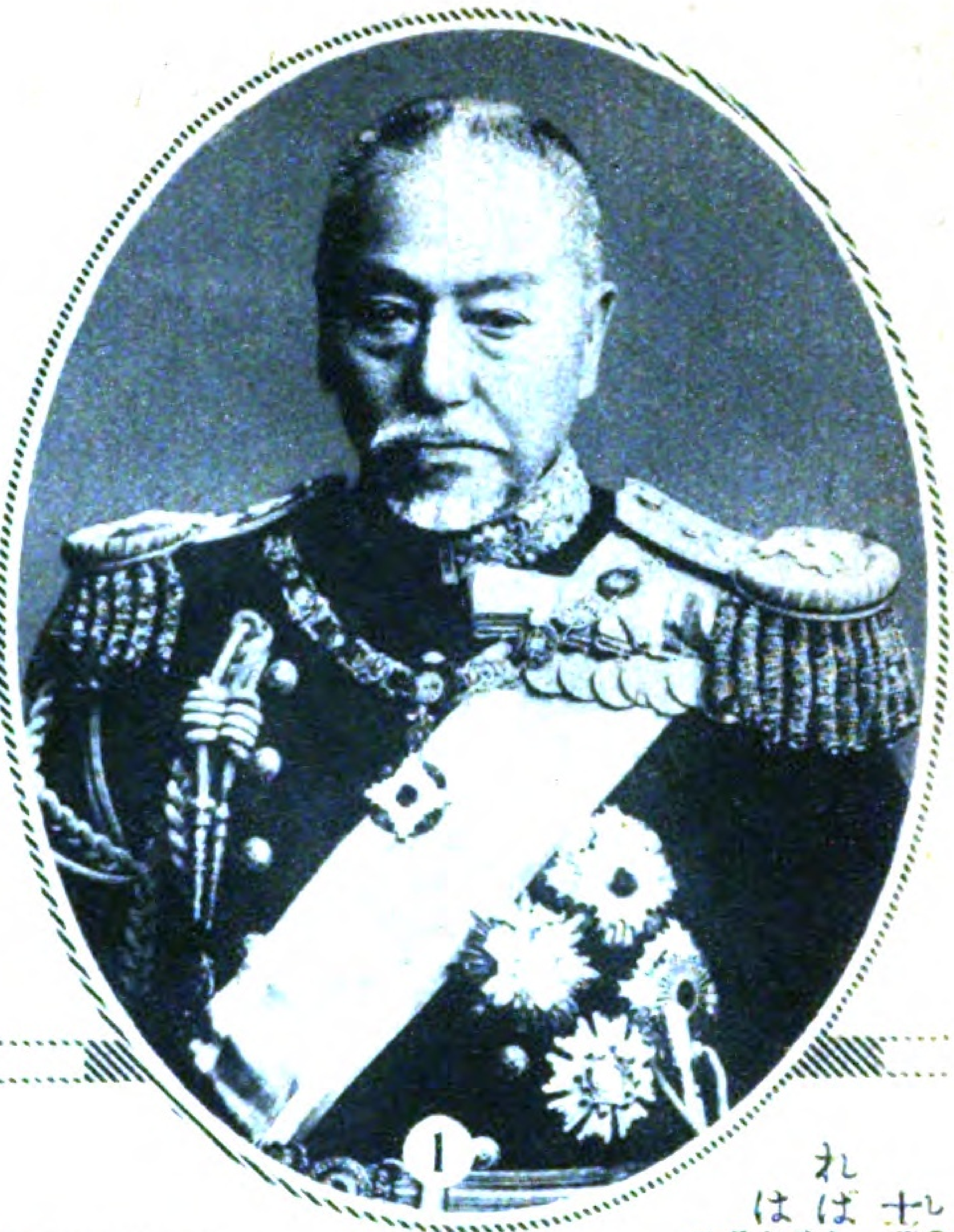
(3)國力の回復は國民の健康より—を標語にしてゐる獨逸は、女子の間にも運動熱が旺んである。これは槍投の練習に行くベルリン女子大學生の一隊。(4)佛國ドーヴイルの野外學校では專ら家事、運動、舞踏、音樂を課してゐるが、寫眞は同校の女生徒がギリシャ風の着物を纏ひ、朝露を踏んで運動に出た處。かうして美しい姿勢、美しい體格を作り上げる。



(1)清淨な黎明の光を全身に浴びて馬首を丘の上に進めてゐるのは、英國スタッドリー女子農科大學の學生である。見るからに颯爽たる姿—これから彼女等の日課が始まるのだ。



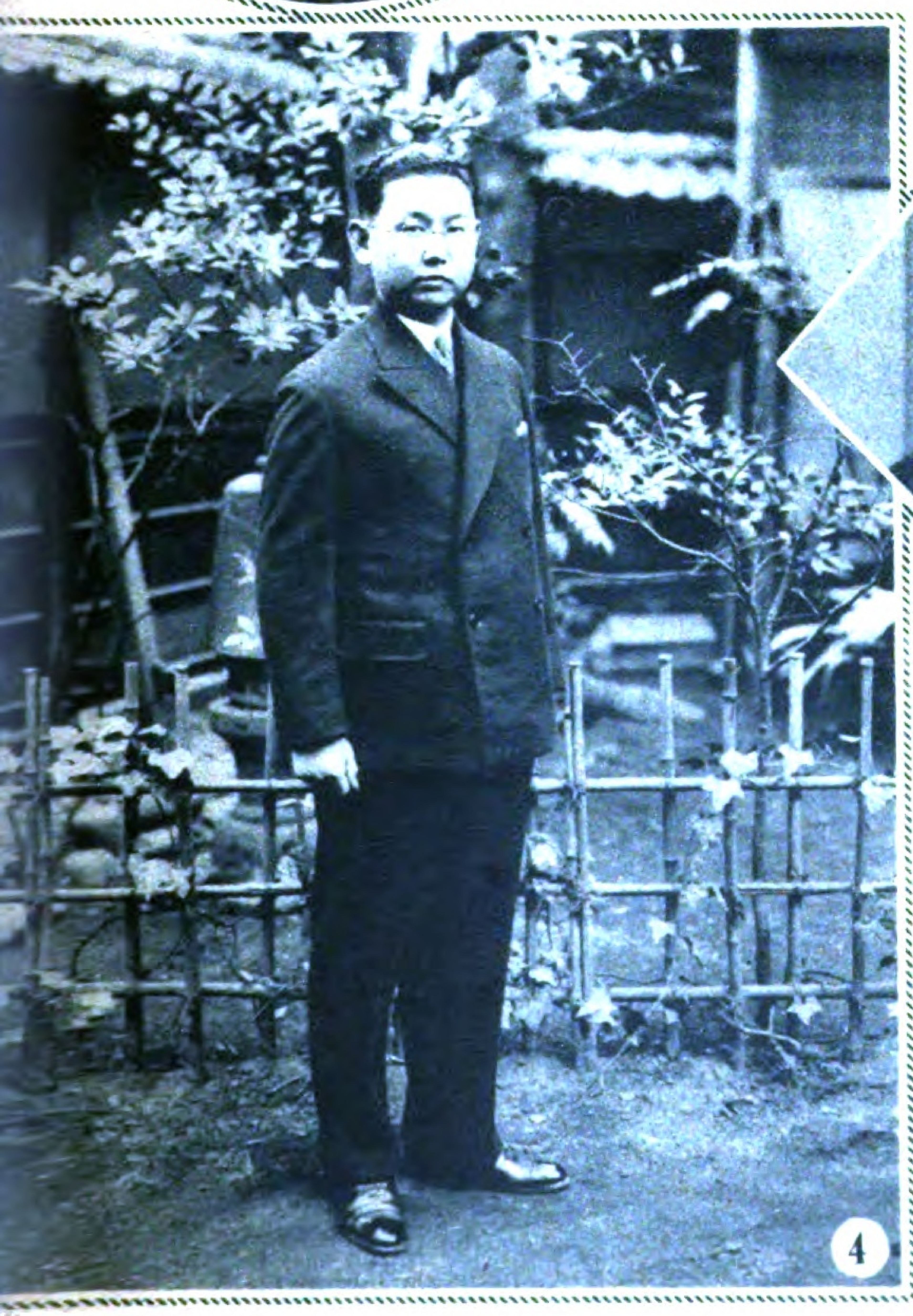
(5)輕快な服裝、美しい隊列、これは米國オーエンズマス女學校の喇叭隊だ。その瀏喨たる響は、催し物のある毎に若人の血をそゝつてゐる。


1


2

士農工商――親代々の暖簾をつがなければならないといふのは昔の事、今日では名門の家に生れても變つた方面に天分を伸して行くのは敢て珍らしくない


3


4

(1)東郷元帥は人も知る宮中席次第一位、位人臣を極めた國家の元勳である。(2)その第二世彪氏は宮內省式部官として又新宿御苑の菊作りの大家として令名ある方である。(3)荒木十畝畫伯は帝國美術院會員として日本畫壇の重鎭である。(4)その御曹司の光太郎氏は新進の經濟學者、しかも今帝大の講堂で講じてゐるのは、藝術家とは緣のなささうな貨幣論た。運命はどこ迄も皮肉である。

第二世





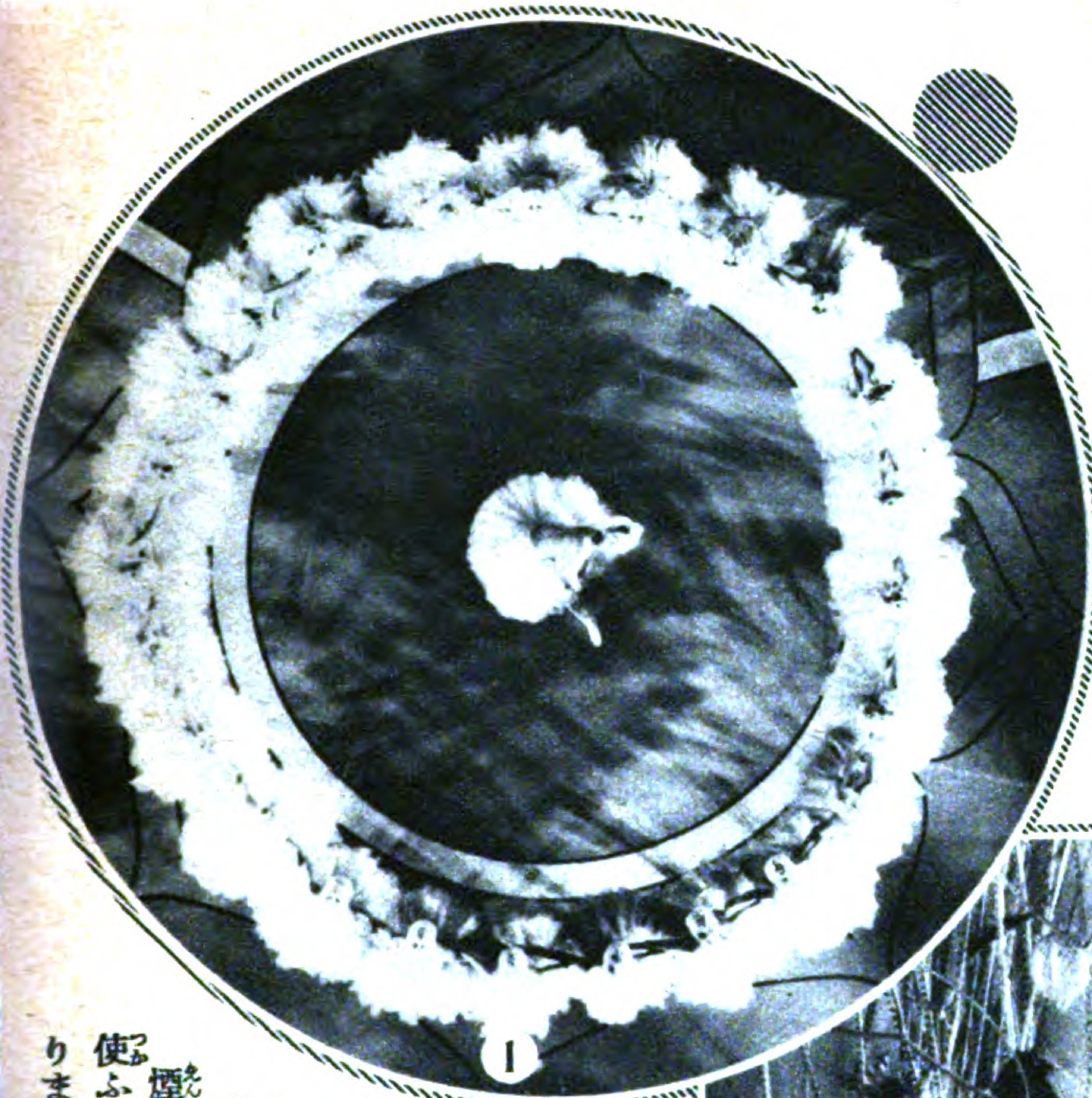
(5)子爵小笠原長生氏は、日清、日露の役等に出征され軍人として華々しい生涯を持つて居られる人だ。(6)その次男長英君は斷然藝術のために身を投じ、楠英二郎といふ名で只管映畫方面に精進してゐるのも變り種。(寫眞下)

(7)豚料理で有名な田中宏氏は、東大名譽教授獸醫學博士といふむづかしい肩書の持主。△





毎號表紙の筆を揮はれて居る細井良雄畫伯の令息であるのも一寸取合せが面白い。



(1)見事に咲き誇つた大輪の花かと見紛ふのは世にも珍らしいダンスの寫眞であります。米國アルバーチナ・バッシュ舞踊團の踊り子達が、純白の衣裳を身に纏ひ、圓陣をつくつて舞臺に踊つてゐるところを、その眞上から撮影したのがこれであります。



(2)扨も不思議！どう見ても此の寫眞は一寸見當がつきますまい。これは半吋四方の池底の水を、顯微鏡で百倍に擴大した珍らしい光景です眼に見えない微生物が時ならぬ奇觀を呈して居ます。



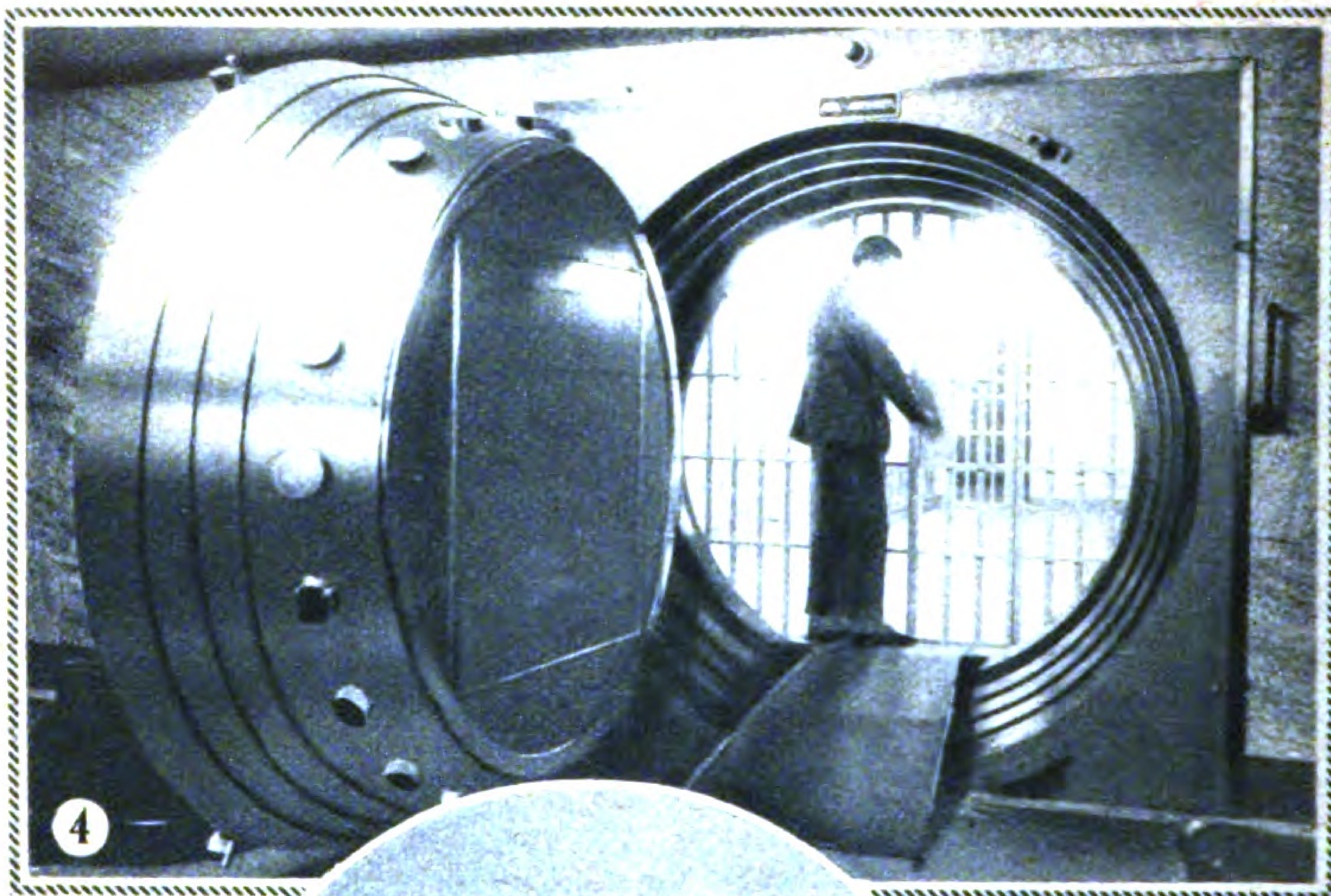
(3)ヤッこれは驚いた。小ッぽけな少年が、とんでもない大きなものを擔ぎあげてゐます。サムソンの怪力もこれには顏色ないでせうところがその實こ*

*の袋の中は空なんです。長さ二十八呎直徑六呎、煙突掃除に使ふ道具であります。

何てせう

(4)これは最近紐育の銀行に設備された世界最大の金庫であります。扉丈けでも直径二米、厚さ一米、重さ三十五噸、これではどんな石川五右衛門でも一寸手が出ますまい。

(5)大きいと云つてこれ程大きいパインアップルは又とありません。これは布哇のドール・パインアップル罐詰工場で使用してゐる鋼鐵製の水槽で、高さ六十四呎、廣告と實用とを兼ねた抜目のないものです。



4



5





僕は兵隊



僕は木彫の新兵です
熊毛の帽子が似合ひましよ
伍長さんの號令で
毎日調練　パカパカパカ

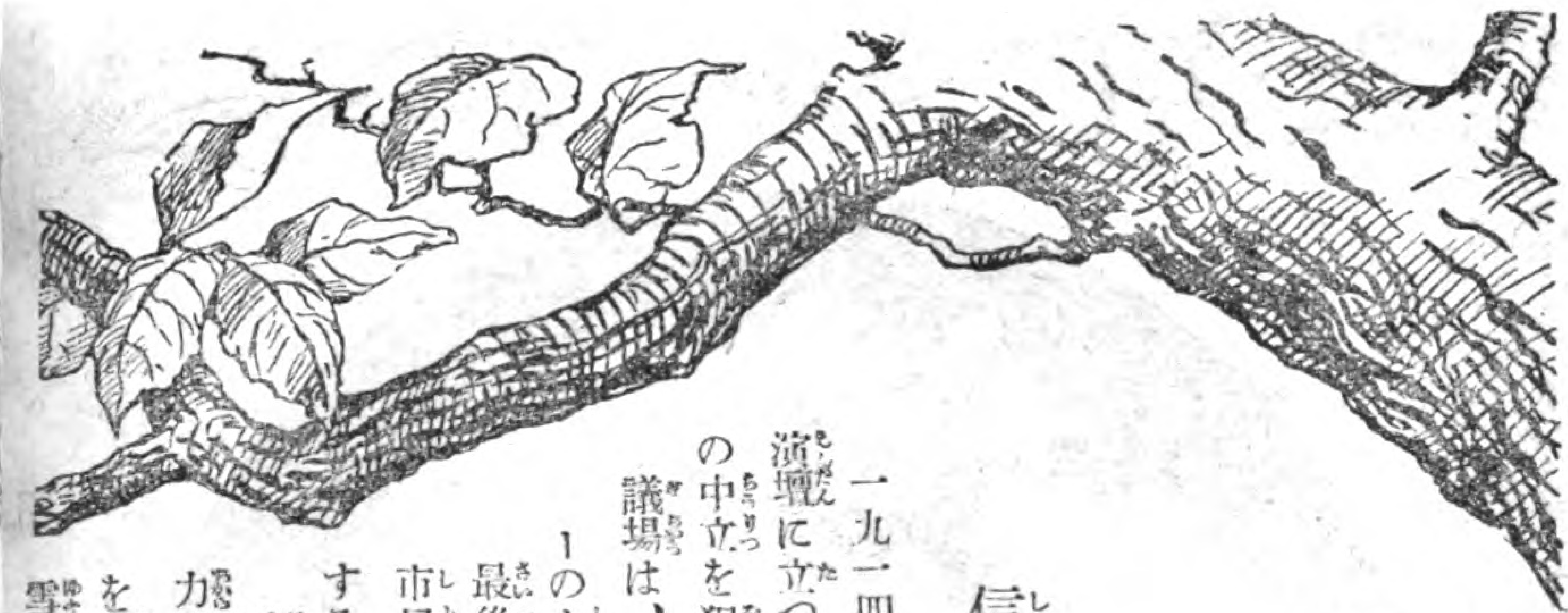
ポッポが空いても　一二三
犬が吠えても　一二三
上等兵　になるまでは
調練大事　パカパカパカ

寫眞は倫敦ヴイクトリア館で評判になつた『風車小屋の男』といふ歌劇の一場面で、人間が木彫の人形に扮したところ。



ウイリアム・ブース

勞働は善きものである。神は働き給ふ。神は最大の勞働者である。彼ほど斷えず、誤りなき智慧と、絶大なる精力と、又仁愛の目的とを以て勞働する者は他にない。古今の善人は、亦皆骨惜みなく勞働したものである。人類の世界に最も多くの貢獻をした人々を見よ。彼等は皆朝夙に起き、夜おそく寢ね、終日時を惜んで勞働した人々ではないか。私は堅く信ずる、怠惰はあらゆる不衞生と、疾病と、罪惡を産むの母であると。



英國の大政治家 エドワード・グレーの風格

貴族院議員 公爵 近衛文麿

信念、節操、氣高い風格

一九一四年八月四日の英國下院は、實に壯烈な光景を現出した。演壇に立つた外相サー・エドワード・グレーは、滿面に憂愁の色を湛へ、一言一句沈痛な調子で、白耳義の中立を犯した獨逸の横暴を非難し、英國が最後の決意を以て起たざるべからざる所以を力說してゐる。議場は、水を打つた如くに靜かである。一人の野次さへない。そして割れんばかりの大喝采を以て、グレーの主張は迎へられた。

最後通牒は發せられた。回答期間はその夜半である。その夜の倫敦は異狀な昂奮狀態に涌き上つた。市民は隊列を組んで、バッキンガム宮殿前の廣場に押掛け、國家と皇帝との萬歳を唱へ、獨逸に對する挑戰の意氣と、祖國に對する熱愛の至情とを遺憾なく發揮した。

喧々囂々として歸するところを知らなかつた輿論を、導いてこゝに至らしめたのは、一にグレーの力である。今まで極力非戰論を唱へてゐた勞働黨さへも、前言を取消し、擧國一致、强力內閣の出現を謳歌するに至つた。その間、グレーの心痛努力は容易なものではなかつた。彼の頭髮は、數日間に雪の如く白くなつたといはれてゐる。

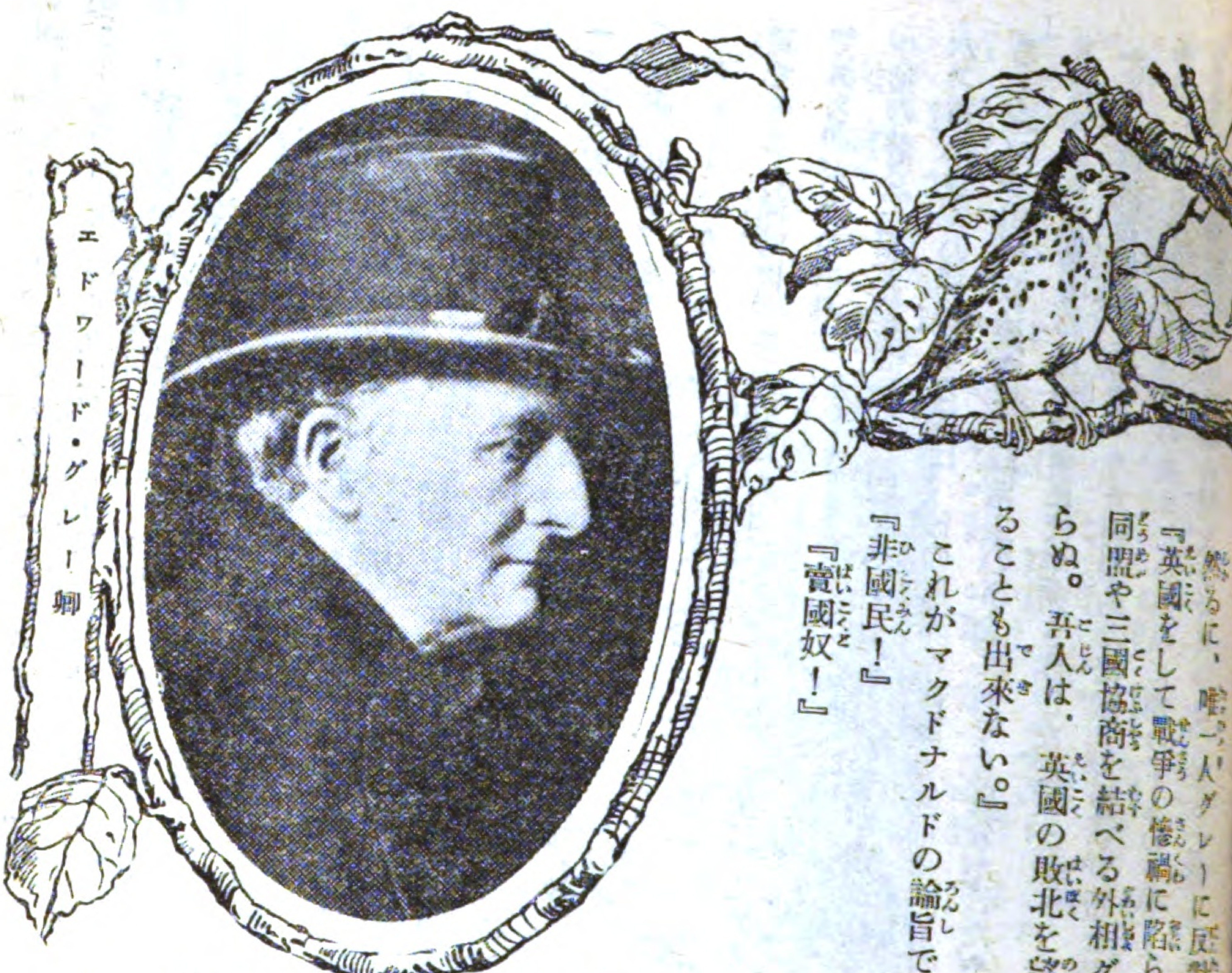
然るに、唯一人グレーに反對したのは、ラムゼー・マクドナルドである。

『英國をして戰爭の慘禍に陷らしめたものは、獨逸に非ずして、寧ろ英國の外交である。就中三國同盟や三國協商を結べる外相グレーの罪である。國民は、戰爭の罪惡とその慘禍とを知らねばならぬ。吾人は、英國の敗北を望むことが出來ぬと同時に、あの大國民たる獨逸の負けることを祈ることも出來ない。』

これがマクドナルドの論旨である。ために彼は、

『非國民！』

『賣國奴！』



エドワード・グレー卿

『國賊！』

凡ゆる罵詈讒謗の雨を注がれ、凡ゆる迫害を蒙り、數年の間全く世の中から葬り去られねばならなかつた。

そのマクドナルドは、今や時めく勞働宰相となつた。彼の燃ゆる如き信念と、何者にも屈服しない鐵の如き節操とは、彼をして遂に今日あるに至らしめたのであるが、彼が一世の毀譽褒貶を度外視して、極力非難攻撃したグレーも、また大政治家として尊敬すべき人物であつた。殊にその教養あり、學識あり、氣品の高い風格は、寧ろマクドナルド以上に立派な政治家であるといふても過言でない。

學識教養の高い人

グレーは貴族の出身である。その境遇にも因るのであらうが、

英國政治家の中でも、學識教養共に高く、その生活も非常に雅趣に富んでゐる。一八九二年頃日本に來たことのあるカーゾン卿や、最も永い政治生活をつゞけたバルフオア卿などと並び稱せられる第一流の人物である。

若い頃はテニスをやつた。併し後年病を得てからは、一切のスポーツを斷念して、專ら讀書に耽つた。

『政治家に最も必要なものは、想像力である。』

さういふ意味から、彼は詩を愛讀した。また常にギボンの羅馬史を手元に置いて繙いた。

『書物は亂讀すべきではない。最も良い書物を系統を正しくして熟讀玩味すべきである。』

グレーは、さういふ考で讀書をした。であるから、彼は博識であると同時に、その知識が凡て一家の見識となつてゐたのである。

彼の著『二十五年間』を讀むと、彼の學識教養が窺はれるが、更に我々の感動する點は、彼の風格に謙讓と氣品との存することだ。兎角政治家は、政治上の事業は何でも自分がしたやうに言ひたがるものだが、彼には毛頭さうした態度がない。またその廣汎な學識を誇るやうな衒學的な素振りもない。讀む者をして知らず識らず、その奥床しい氣品に頭の下るのを覺えしめる。といつて、唯趣味家の閑文字ではない。紙背に流るゝ憂國の熱情や、火の如き社會的義務の觀念は、儼然として讀者の胸底を打つのである。

グレーは、世界大戰中外相を辭し、米國大使となつて紐育に行つた。その頃、ハーバート大學に招かれて、學生に講演をしたことがある。その筆記には、こんなことが書いてある。

『政治家として缺くべからざることが四つある。一は、道德的規準を嚴守する事。二は、圓滿なる家庭生活を營むこと。三は、自分の存在を社會的に意義あらしめる仕事をすること。四は靜養である。』

この四箇條は、政治家は勿論、凡ての人の嚴守すべきことである。グレーは自らこれを行ひ、政治家としての偉大なる風格を養ひ上げたのである。

この四箇條中、特に考ふべきことは、最後の靜養である。講演の題目とその大部分とが、この靜養に就いてであつた。

然らば靜養とは何か?

自然に親しむ人

グレーは、それに就いて面白い話をしてゐる。

グレーがまだ外相就任中のある日であつた。駐米英國大使ゼームス・ブライス子爵から、一通の手紙を受け取つた。何事

であらうかと開封して見ると、こんな意味のことが書いてあつた。

『現米國大統領ルーズヴェルト氏は、近くその職を去るや、阿弗利加を經て歐羅巴に赴く豫定である。英國へは春の頃訪れ、陽光麗かな山野で、鳥の聲を聽きたい。就ては、その道に明るい人に案内を請ひ度いといつてゐる。閣下は兼て鳥に趣味を持たれてゐるから、最も適任者と思ふ。若しルーズヴエル氏が行つたら、御案内を願ひたい。』



元米國大統領ルーズヴェルト氏

　これを讀んだグレーは、非常に嬉しく感じた。世界でも最も有力な國の元首が、鳥の聲を聽くが如き單純なそして健全な趣味を持つてゐることは、グレーの興味を惹き起さずにはゐなかつた。そこで早速、承知した旨の返事を書いて送つた。

　それから二年の歳月が流れた。

ルーズヴェルトは、豫定の如く阿弗利加を經て歐羅巴に入り、本國歸還の砌、英京倫敦に來たが、何しろ前米國大統領であるから、到る處で最高級の歡迎を受け、その日程は細大洩らさず、各新聞に發表されてゐた。

　その多忙中、殊に年月も經つてゐる、鳥の聲を聽くことは、もう忘れてゐるだらうと思ふと、さうでない。ルーズヴェルトは、宿泊所の主人がグレーの友人であるのを幸ひ、先年の約束を實行したいと申込ませた。

　グレーは、驚いた。併し非常に喜んだ。そして早速、ルーズヴェルトを訪ねて、萬端の打合せをした。

　二人はウオータールーの停車場で落合ひ、そこから閑寂な田舍の山野を驅走しようといふのであつた。

　處が、それと聞いた新聞社は、俄かに色めき立つた。

『前米國大統領と現英國外務大臣とが、二人きりで鳥の聲を聽きに行くとは、近來にない特種だ。』

　そら行けとばかり、我も我もとウオータールーへ押掛けた。

　これにはグレーもルーズヴェルトも辟易してしまつた。折角の清遊も、秘密外交の如く邪推され、新聞記者に包圍されて

は、何の興味もなくなつてしまふ。

『何うか諸君は歸つて頂きたい。そして二人限りで鳥の聲を聽かせて貰ひたい。……鳥にしても、諸君の寫眞機で撮影されたり、諸君に訪問されたりすることは、甚だ迷惑するであらう。』

二人は、交々こんなことをいつて、漸く記者團の尾行を斷つた。そして二十時間、全く世界から姿を消したのであつた。

靜養は卽ち修養

その夜二人は、ある村の舊家に泊つた。この家族は、十七世紀のゼームス一世時代から連綿として其地に棲んでゐるものであつた。村の者も、またその家族自身も、それを非常な矜としてゐる。

『併し、この家族よりも、更に舊いのは鳥の唄である。恐らくはアングロ・サクソン民族の舊い〳〵祖先も、ノルマン人も、我々と同じ鳥の音樂に耳を傾けたことであらう。』

ルーズヴエルトは、そんなことをいつた。

その言葉や思想は、立派な詩人である。猛獸狩で有名な彼は、殺伐粗野な奮鬪家の如く思はれもするが、孰んぞ知らん、かかる優しい同情心や感受性に富んだ人であつた。



二人は終日を、花咲く春の野や、靜寂な森や谿間を逍遙して、思ふ儘鳥の聲に聽き惚れたが、グレーを更に驚嘆させたのは、ルーズヴエルトの有する鳥に關する知識が極めて豐富なことであつた。英國特有の鳥の名でも、ちやんと知つてゐて、天晴れ鳥類學者であつた。

勿論政治の話もした。詩や歷史や趣味の話もした。併しそれは新聞記者の想像したやうな秘密外交ではなく、奥床しい一日の清遊であつた。

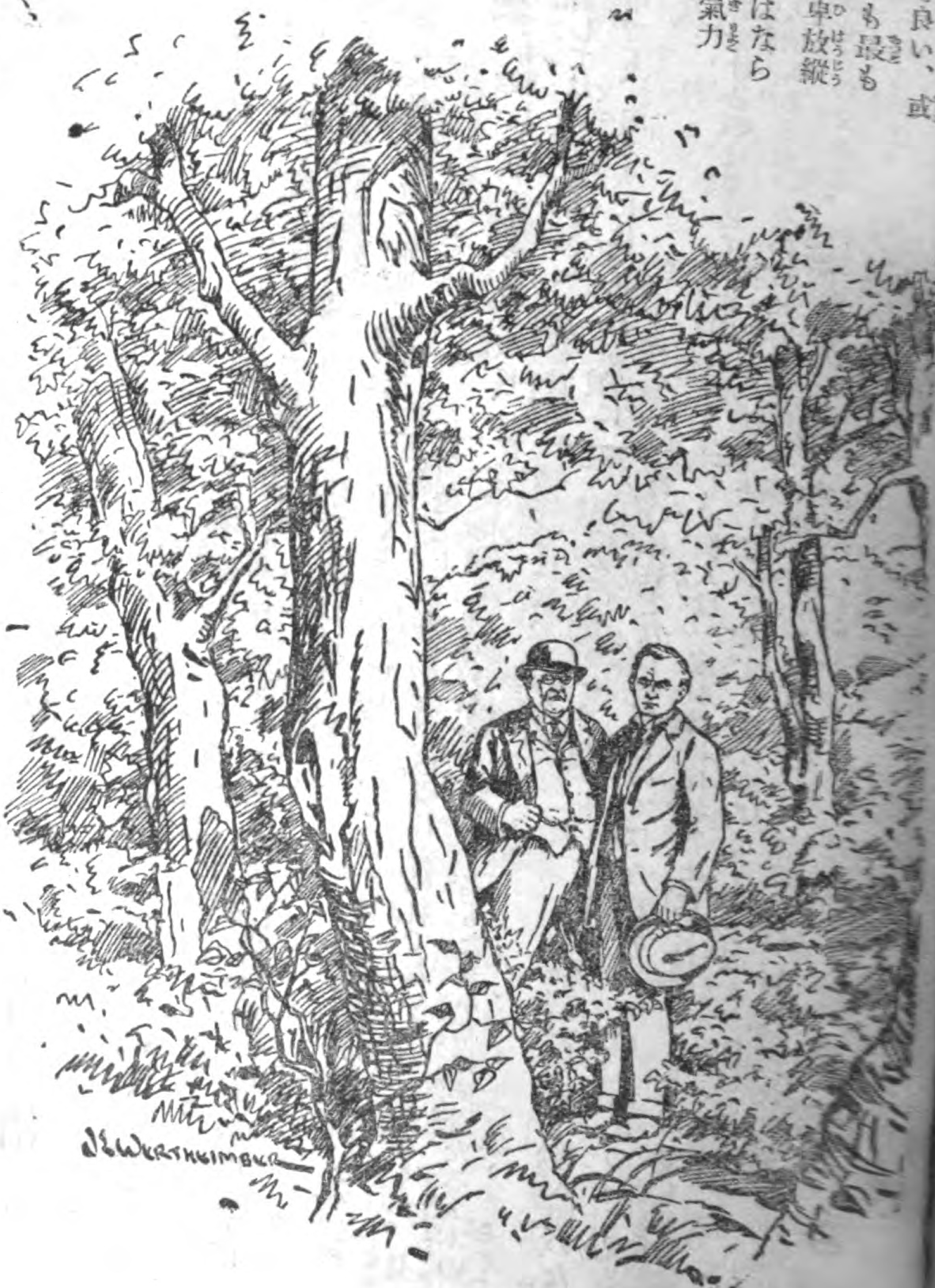
ルーズヴエルトも偉いが、現在繁忙な外務大臣の椅子にある身を以てして、二十時間を割いて、自然に親しむグレーの風格にも、普通な政治家などには見られない高雅な氣品があるではないか。

グレーが、政治家に必要な第四條件として、靜養を說いてゐるのは、これである。事務や思索に疲れた心身を靜養させるに

は、スポーツも良い、讀書も良い、或はかくの如く自然に親しむのも最も良い。唯、俗惡な遊戯や、野卑放縦な行爲をしては、眞の靜養にはならない。蓋し靜養とは、身心の氣力を恢復しつつ、自己の品格を高めることであるから。

日本の政治家にも、西園寺公の如き清雅な生活をなす人もある、犬養木堂翁のやうに學識卓拔にして、趣味圓滿な人もある。佛蘭西には、虎宰相クレマンソーの如く、暇さへあれば自動車を驅つて、慰安を求めた人もある。

人の風貌が、それぐ〵異る如く、その靜養の方法も異るであらうが、グレーの如きは、凡ての人に模範となるべき人物ではないかと思はれる。彼の生活を見れば見る程、悉く眞の政治家として具ふべき理想の條件を具へてゐる人の如く思はれる。そしてかゝる政治家の多く存する國土では、その政治も淸淨である筈だと、痛切に感ずる。





犧牲の精神

本社社長　野間清治

○生きとし生けるもの

日本人は犧牲と云ふことを、昔から深く敎へ付けられて居る。そして日本人は、どんな人でも犧牲と云ふ精神を必ず持つて居る。これは實に日本人の立派な長所であり、世界に誇るべき性情の美點である。

犧牲を拂ふことは如何なる人でも難しとする所である故に、他國に於ても、犧牲の行爲に對しては、之を尊敬し、之を賞讃することに變りはない。その中でも、日本人には、それが特に濃厚であり、熱烈であるやうだ。

近松の作を讀んで深い感動を受けるのは果して何に因るか。その中には戀愛もあり、義理人情もあるが、その底に存する犧牲の精神が、最も多く人を泣かせるのである。西鄕南洲が、千秋萬古、同情と尊敬とを仰ぎ見られる所は、一身を以て私學校の健兒に捧げたる犧牲の精神にあるのである。キリストは何處が偉いのかと云ふと、人類の靈魂を救濟せんが爲に、從容として十字架上に死したる犧牲の精神にあるのではあるまいか。偉なるかな、犧牲の精神。それは實に人間の最高にして最美なる金字塔であらねばならぬ。

よくよく考へて見ると、この世は所詮犧牲の世の中である。生きとし生けるもの、いづれか犧牲でないものがあらうか。見よ、小魚は大魚の犧牲であり、名もなき小草は欝蒼たる大木の犧牲ではないか。

更にその大魚も、大木も、その他の禽獸草木も、皆人間のための犧牲となつてゐるのではないか。その人間について見るも、個人は一家の爲には犧牲とならねばならず、一家も社會國家の爲には犧牲とならねばならぬ。個人が自己の慾望を制し、意思を抑へ、習慣に從ひ、統制に服し、甘んじて自己の自由を自ら拘束制限する所以は、社會國家の爲に拂ふ犧牲であり、時としては、國家を生かし、社會を立てる爲に、二つとない生命

あくまでも捧げて之に殉ずるのである。この世は所詮犧牲の世の中であらねばならぬ。

犧牲がなくては此の世は持たない。小魚の犧牲がなくては大魚は生存することが出來ず、大木が大木たる爲には小草はその陰に枯死せねばならぬ。

人間にあつてもさうだ。犧牲の精神がなくては一家を保つことが出來ず、一個の小さな團體をさへも存立させることはむづかしい。

況んや一社會一國家に於てをや。國家の爲には一家は犧牲にならなければならぬ。一家の爲には一人は犧牲にならなければならぬ。斯くの如くにして、始めて「より大いなるもの」が出來る。本當の「大いなる力」が出來る、「本當の大いなる仕事」が出來る。さうして「本當の大いなる善」が出來るのである。

○進んで帶びた使命

實に果敢ないものゝ譬へにひかれるかげろふは、朝に生れて夕に死するけれど、彼は旣に第二の我即ち子孫をこの世に遺して居る。彼の死するは、その第二の我の爲に、即ち子孫の生命をこの世に持續せしめんが爲に、その餘地を作るのであるといはれてゐる。



これ即ちかげろふが、其の子孫の爲に與へた犧牲でなくて果して何であらうか。いかにそれが貴くも亦美しいことよ。これを思ふとき、かげろふの一死に對してだにも感謝せざるを得ない。

それは彼等の本能である。彼等は犧牲の意義を意識して、敢て犧牲を拂ふのではない。それですら、吾等は犧牲の價値の高く且美しきことを認識して、之に感謝することが出來るではないか。

まして人間の犧牲的精神は、深甚なる自覺に本づくものである故に、一層の尊嚴を加へるのである。人間は自己の「魂」

の貴きことを知り、自己の「生」の貴きことを知り、自己よりもより大いなるものを創造せんが爲に、自己を棄てることの價値を明らかに認識し、而して躍り立つばかりの感激の裡に、自ら進んで犧牲臺に上るのである。

天下これほど貴く美しいものが又とあるであらうか。天下これほど大いなる仁愛が又とあるであらうか。吾等が近松の戲曲に涙の袖を絞り、西鄕南洲の高邁な心事に感銘し、十字架上のキリストに感激する所以のものは、決して偶然ではないのである。

凡そ犧牲の對象物が、大いなれば大いなるほど、犧牲の價値は高い。「身を殺して仁を成す」のは犧牲の最高最大なるものである。併し左樣な大きな犧牲を拂ふのは、人間一生たゞ一度あるかないかの特殊な場合である。吾等はそれよりも先づ日常の生活に於て、絕えず小なる犧牲を拂つてゆく覺悟がなくてはならぬ。父母の爲に、妻子の爲に、己が仕ふる主人の爲に、己が勤むる官衙會社の爲に、お互ひが住む市町村の爲に、社會の爲に、また自己の天職の爲に。

犧牲は自己を捨てることではあるけれども、みだりに自己を滅ぼすことではない。より大いなるものを成さんが爲に、自己をそれに沒入するのである。「小の蟲を殺して大の蟲を助ける」といふ諺の通り、小なる自己を捨てゝ、大なる自己を成り立たすことに外ならぬ。即ち空虛に入つてしまふのではなくして、より大なる更生に入るのである。されば犧牲となることによつて自己は永久に生きるのである。犧牲は即ち永生の道である。

楠公兄弟が「七たび人間に生れて國賊を滅さん」と言はれたのは、こゝに至つて深甚の意義あるを覺ゆるではないか。

この意味に徹して、十分悟つて見るならば、犧牲となることは、真に愉快なことであらねばならぬ。「仁を求めて仁を得たり、又何をか怨みんや」で、その人からいふと、自己の求める所のものを得るのである。

古來大いなる犧牲者が、皆勇猛感激して、自ら犧牲となることの出來たのは、正にこの故であると信ずる。

さう考へて見ると、犧牲は已むを得ざる服從ではなくして、自ら進んで帶びたる使命である。私は、世人が動もすると、犧牲を以て或權力の前に強ひられたる已むを得ざる服從であるかのやうに見ることを甚だ遺憾に思ふものである。

思ひ來れば犧牲の精神は、社會國家を成す上に、一日片時も缺くべからざるものである。否これあるが爲に、國家も存し、社會も存し、また一家も存するのである。犧牲の生活は感激の生活である、愉快な生活である。永遠の生活である。向上進歩と發展との生活である。お互ひにこの犧牲の生活をしたいと

思ふ。

○賞讃と感謝との裡に

私は嘗て賞讃と感謝との間に生活をしたいと述べたことがある。これは一面からいへば犠牲の間に生活することだと言ふことが出來る。犠牲の精神の盛んに躍動する間に生活をするときは、自分が勞苦しようとすれば、他が之に代つて勞苦せんと欲する。他が勞苦せんと欲すれば、自分が之に代つて勞苦せんと欲する。我に樂みを得れる場合に、我は樂まずして他を樂ませる。他が樂まうとする場合に、他は我に讓つて我を樂ませる。斯樣な生活は即ち感激の生活ではあるまいか。

互に他を賞讃せざらんと欲するも能はず、感謝せざらんと欲するも能はず。否その賞讃をすら、我は之を取らずして、他をして賞讃の位置に立たしめ、感謝をすら我は之を受けずして他をして之を受けしめる。皆これ犠牲の精神の迸りであらねばならぬ。かくの如くにして、私の常に標榜した「賞讃と感謝との裡に生活する」ことが出來るのである。



自ら犠牲になると云ふことは、非常に愉快な事である。いつでも犠牲になりたい。犠牲になるべき時は、進んで犠牲になりたい。自分は名を求めなくても宜い、利を求めなくても宜い、他の爲めに犠牲になりたい。さうして犠牲を以て一生を貫きたい。自分には何等の獲物を持たずして、たゞ犠牲の中に目を瞑ると云ふことは、自分に顧みて此上もない滿足である、歡喜である、大往生である——犠牲の精神を推しつめてゆくと、こゝまで到り得るものであらうと思ふ。斯くして釋迦があつた。キリストがあつた。孔子があつた。吾等は少くとも此の精神を追慕することによつて、今少し個人を大きく生かすことに心がけねばならぬ。（終）

○不良の安逸は、死するよりも尚愧づべし（ニコロ・トマセヲ）

○藝術は長し生命は短かし。判斷は難し機會は失ひ易し（ゲーテ）

子供

加能作次郎

此世に何が一番好きかと尋ねられるならば、私は何の躊躇もなく子供だと答へる。實際子供といふものは、幸福と喜悦の塊であり、無邪氣と純潔との權化である。彼等にとつては、如何なる不幸も不幸でなく、如何なる悲しみも悲しみとはならない。又彼等の爲す如何なる無作法も、却つてその潔らかさを示し、乞食や泥棒のするやうなことをやつても、彼等がやれば可愛くなる。然り而して彼等は、恰も何にでも絡みつく葡萄の若芽のやうに何物をでも愛する、彼等は憎むといふことを知らない。これが特に重要な彼等の特性だ。

桑

加藤武雄

北相模の高原の桑畑の中で私は生れた。桑は人生の功利に仕へて、その美しさにはあまり氣がつかれないが、あの淡緑の紗を野良一面に張る新芽の眺め、五月の風にひるがへつて緑金の海と湧き立つ風情は云はずもがな、霜葉を地に委したあとの枝條を魔法使ひの鞭のやうに夕日にきらめかす様も捨て難い。とりわけ、赤の紫の實を葉陰にかくして、野の甘蔗を幼かつ

た日の我等に供して與れた功德をどうして忘れよう。弟よ、我は汝を愛す。

雲

川路柳虹

忽ちにして起り、忽ちにして崩れ、忽ちにして消え、忽ちにして群る大空の雲の姿。自然の千變萬化を自在に行つてゐる雲。雨となり、雪と化し霰となり霙となる雲。一天拭ふが如く晴れた青空にも一抹の雲影は地平に引いてゐる。雲の如き自由が人間に許されたらどんなにか愉快であらう。それは行動に於て不可能であるが思想のみはひとり自由である。思想は人間界に於ける雲である。

うるはしい情景

上司小劍

郊外電車に乘ると、新婚の若夫婦らしいのがやつて來た。初めは、一尺ほども離れて、腰をかけてゐたが、だん／＼客が立て込むので、互ひに側へ寄りはしたけれど、ひとことも口をきかない。他人に顔を見られると、男も女も眞ッ赤になる。二十二三と十七八。ある停留場で、男をさきに、女はあとから、羞かしさうに一間も離れて、随いて行つた。ダンスの流行する世に、珍らしくうぶなうるはしい情景。



心の日月

菊池寛
田中良畫

遂に相逢はず

(牛込の方から、橋を渡つて來ると、すぐ驛の入口があるでせう。)

磯村は、一時間以上待つた。だが、麗子の姿は見えなかつた。

電話できいた麗子の言葉を、いく度くり返して見ても、玆より外には考へられなかつた。そのうちに、一時間半になつた。もし、玆へ來ないとすると、思ひ切つて、寄宿舍の方へ來てゐるのかも知れない、さう思ふと磯村は、驛の入口を離れて、濠端を馳けるやうに走つて、砂土原町の寄宿舍へ歸つて見た。

そして、臺所にゐた女中に訊いた。

『僕のところへ誰か、來なかつた?』

『いゝえ。どなたも。……あ、さう〳〵、先刻電話が、かゝつて

ざましたよ。』

『電話？ 女の人？』

『えゝ。さうですよ。』

『何と云つた。』

『一時間位前に、お出かけになつたと云ふと、そのまゝお切りになつてしまひましたよ。』

『さう！』

磯村は、どう考へてよいか分らなかつた。なぜ、何か言傳でもして置いてくれないのだらうと思つた。でも、妙齢の處女が、男と待ち合す場所や時間などについて他人に言傳することなどが出來るものでないことを考へると、麗子を恨む氣にもなれなかつたが、しかし何と云ふ心細いことかと思つた。磯村は、またたまらなくなつて、牛込見附へ驅けつけた。もう、三時を過ぎてゐるので、男女の學生が、驛の建物から洪水のやうに流れ入つたり流れ出したりしてゐた。

彼は、また驛の入口で神經を極度に緊張させながら、一時間近くも待つてゐた。

麗子の方も、また一時間近く待ちつゞけた。十分毎に、身體が一廻りづつ縮つて行くやうな氣持だつた。堪へ切れなくなつてもう一度電話をかけて見ようと思つた。

彼女は、今度こそ寄宿舍に歸つて來てくれゝばいゝと考へながら、また公衆電話にかゝつた。

『もしもし、聖陽學舍でせうか。』

『さうです。』

『あの、磯村さんはいらつしやいますでせうか。』

『あつ、今お出かけになりましたよ。』

『あら、ぢや一度お歸りになつたのでせうか。』

『え、先刻お歸りになつて、電話がかゝつたことを申上げると、すぐまたお出かけになりました。』

麗子は、目がくらみさうだつた。（あゝ、あの方は自分を避けていらつしやるのだ）と、思つた。茲へも、來て下さらない上に、電話がかゝると知ると、宿にもいらつしやらないなんて、何と云ふひどい人だらうと思つた。麗子は、危く涙が出さうになるのを、じつとこらへて電話室を出た。

（私、何と云ふお馬鹿さんだらう。何と云ふ……）

麗子は、飯田橋の橋の上に、たゝずんで右へ行つてよいか左へ行つてよいか、分らなかつた。

待てど、くらせど來ぬ人を、いくら待つても仕方がないのだ。今宵は月が出ないどころか、こんな眞晝の、あかるい陽光の下に、それは何と云ふ悲しい事實であらう。あの方は、自分の上京したことを、きつと迷惑に考へていらつしやるんだわ。だか

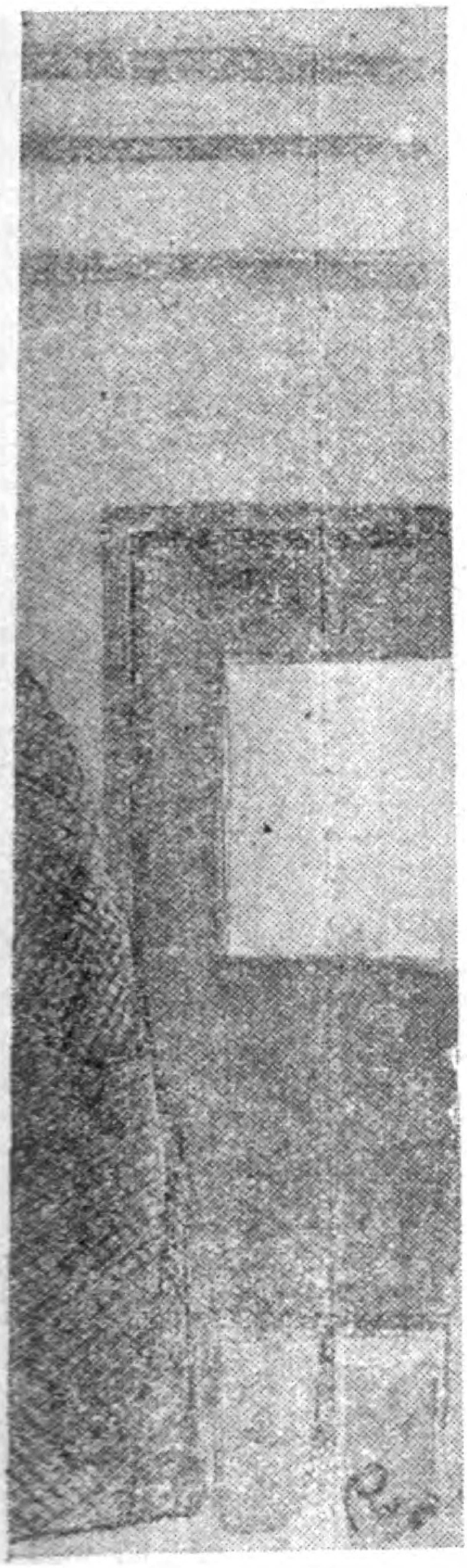
ら、あんなにお逃げになるんだわ。もう、幾時間待つたつて、いらつしやる筈はないんだわ。さう思ふと、再び麗子は驛の入口に引き返して行く氣はしなくなつた。それなら、どこへ行かうか、麗子は水平線の彼方に見えてゐた島影が、急に一抹の雲となつて飛び去つたやうに、渺々たる大都會の波濤の中に、たゞ一人取りのこされたやうに、悲しさと賴りなさが、一時に襲つて來た。

麗子は、本當にどうしていゝか分らなかつた。今更、寄宿舍へ押しかけて行く、勇氣はなかつた。もし、寄宿舍へ行つて、もつとひどい目に逢つたら、どうしようなどと考へると、どうしてもその方に足が、うごかなかつた。

到頭四時近くなつた。彼女は、一級上のクラスで、一寸交際つたことのあるお友達が、目白の女子大學に來てゐることを思ひ出した。しかし、多分寄宿舍には入つてゐるだらうと思ふと、たとひ尋ねて行つたところで、結局相手に迷惑をかけるだけだと思つた。

四時間近くも、驛の前にうろついてゐたために、麗子は改札口の驛員や賣店の娘などから、疑惑の眼付で見られ始めてゐることに氣がついた。もう、一時間もゐたら、擧動不審で、巡査にでも、とがめられたら、どんな事になるかも分らないと思ふと、麗子は一刻も早く、どこかへ行きたかつた。しかし、萬一その後に、瀧村さんが、いらしつたらと思ふと、まだ一縷の望みを捨てることが出來なかつた。しかし、四時三十分になつたとき、麗子はもう思ひ切つた。思ひ切らずにはゐられなかつた。彼女は、向ふからはしつて來た一臺のタクシを呼び止めた。先刻タクシにのつたので、電車よりも、タクシの方が氣安く思はれた。

『どちらへ？』



運轉手は、扉をしめると、直ぐ訊いた。

麗子は、まだ行く先を考へてゐなかつた。あきらめて、この悲しい飯田橋驛から、離れようと思つたゞけで、まだ行く先の當はなかつたのである。

でも、麗子は突嗟に答へた。

『銀座！』



それは、初めて東京に來たものにも、すぐ思ひつく名前だつた。

運轉手は、すぐ方向を變へて、麗子が最初東京驛から、來るときに通つて來た道の方へ走り出した。

銀座へ行つて、どうしようと云ふ當もなかつた。たゞ、じつといつまでも、待つても來ない人を待つてゐるよりは、かうして走つてゐる方が、氣がまぎれた。でも、やつぱり何時までも、待つてゐた方が、ほんたうはよかつたのではないかしら。萬一、どんな事變があつて、磯村さんは來るのが、遅れたのかも知れない。もう、十分も待つたら、ひよつくりいらしつたかも知れない。そんな未練が、麗子の心の底のどつかに、ひつかゝつて離れなかつた。

磯村は、牛込見附側の飯田橋驛で、四時半まで待つた。麗子を探す氣持で、電車通りまで降りて行つて見たり、向ふ側

の神樂坂を少し上つて見たり、引き返して驛の建物の中には入つて見たり、凡そやるせないもどかしい時間だつた。でも、どんなにいら〳〵しても、結局待つてゐる外は、どうすることも出來なかつた。

彼は、おしまひには、驛の向ひ側にある外濠に添うた柵によりかゝつて、身動きもしないで、たゞ眼だけを驛の入口に、驛から神樂坂の方へ降りる緩い坂に、お濠に添うた電車通に、間斷なく動かしてゐた、十七八の女學生の姿が見える每に、磯村の心は緊張した。しかし、どれも踏子ではなかつた、あの美しい眼をした踏子ではなかつた。絕望が、彼の心の空を雲のやうに掩ひ始めた。

『おい！ 磯村君！』

彼は、ふいに呼び止められた。氣がつくと、同じ寄宿舍にゐる友人の小野が、一間位近くに立つてゐた。彼は、女性の姿以外は、ちつとも目には入つて來なかつたのである。

『何してゐるんだ——こんなところで。』

磯村は、少しあわてた。しかし、ちつとも氣の置けない友人なので、彼はすぐ答へた。

『人を待つてゐるんだ。』

『男性！ 女性！』

『女性だよ。』

『ぢや、君、密會か。』

『いや、そんなわけぢやないんだけれども。』

『あやしいぞ。』

『いや全く。』

『どうした、來ないのか。』

『先刻から隨分待つてゐるんだけれども。』

磯村は、心の中のもどかしさを、この友達にでもきいて貰ひたかつた。

『ほゝう。何時の約束だつたのだ。』

『電話がかゝつたのは、一時前だつたんだ。』

『何だ。ぢや三時間以上も待つてゐるんぢやないか。體よく、すつぽかされたんぢやないか。』

『そんな、筈はないんだが。』

『さうか。どこで、會ふと云つたんだ？』

『飯田橋驛の入口と云ふ約束なんだが。』

『ぢや、無論向ふ側へも行つて見たね？』

『向ふ側？』

磯村は、愕然として訊いた。

『何だ、知らないのか。飯田橋の方にも入口があるんだぜ！』

『えゝつ！』

『何だい！ きつと向ふ側だぜ。』

磯村は、小野に應對するのも、もどかしかつた。
『それぢや、向ふ側だ！』
彼は、さう悲鳴に近い聲をあげると、小野を殘して、電車線路の方へ馳け降りた。そして、牛込警察署の前を、飯田橋の方へ走つた。
彼は、飯田橋の上を走りながら思つた。なるほど（牛込の方から、橋を渡つて來たところにある驛の入口）、こゝこそたしかにそれなのである。牛込見附の方にある橋は、橋と云つても土に掩はれた土橋で、飯田橋こそ、ハツキリした形の橋である。自分の不案内から、麗子を三時間以上も待たしたと思ふと、彼ははげしい悔恨に打たれながら、驛の入口に殺到した。だが、そこにも麗子の姿はなかつた。周圍を、いくら探しても見えなかつた。
（到頭待ち切れなかつたんだな。）
ぢや、寄宿舍の方へ來たのかも知れない。さう思つて、彼は公衆電話をさがして、寄宿舍へ電話をかけて見た。だが（先刻また電話がかゝつて來ましたけれども、お出にはなりません。）と云ふ返事だつた。
彼は、三時間も待ちつくして、自分の不信を恨みながら、夕暮の大都會の波の中に、姿をかくしてしまつた麗子のことを考へると、たまらなかつた。彼は、自分の胸をかきむしりたいやうな懊惱と苦惱とにさいなまれた。
彼は、露店で夕刊を買ふと、店番の少女に訊いて見た。
『こゝに、誰か女の人が居ませんでしたか。』
『えゝ、いらつしやいました。若いきれいな方でせう。』
『さうです。』
『隨分、長い間お待ちになつたやうです。』
『さうですか。』
磯村は、泣きたいやうな氣持だつた。
『十五分位前に、どつかへいらしつたやうですよ。』
磯村は、口惜しさのために身もだえした。何と、おろかしい誤ちを自分はしたことか。
磯村は、待つた。萬一、麗子が引き返しては來ないかと、夕飯も喰べないで、九時頃まで待つた。
しかし、多くの女性が、省線に乘るべく、その入口を通つた。しかし、彼の求むる麗子は、遂に姿を見せなかつた。

嬉しく悲しき電話

磯村が、寄宿舍へ歸つて來たのは、十時過だつた。精神的な焦燥と肉體的な疲勞と、おろかしい手違に對する悔恨とで、彼は打ちひしがれたやうになつてゐた。それに、夕飯もまだ喰べてゐなかつた。彼は、途中で、パンを買ひそれを、夕飯の代り

にするつもりで、持つて歸つて來た。

だが、自分の疲勞よりも、麗子が、今この時間に、大東京の何處を、さまようてゐるかと思ふと、心配でたまらなかつた。自分のことをどう思うてゐるだらう、きつと自分が彼女を裏切つたと、思つてゐやしないかと、それが一番たまらないことだつた。

寄宿舍へ女中に、電話がかゝつて來ないかときいたが、かゝつて來てゐなかつた。

自分の部屋で、パンをかじり始めたが、それは綿を嚙むやうに味がなかつた。

でも、今にも電話がかゝつて來やしないかと云ふことが、一縷の望みだつた。彼は、二階に在る彼の部屋へ、誰かの足音が近づくごとに、もしや女中が電話がかかつたことを知らせに來るのではないかと思つて、心が躍つた。



しかし、さうした足音も、たいていは彼の部屋の前を行きすぎたり、また部屋の手前で止まつたりした。

だが、何番目かの足音は、彼の部屋の前で、バッタリ止まつた。そして、襖をかるくノックした。

『どなた？』

『僕岡田！ 一寸は入つてもいゝですか。』

『どうぞ。』

岡田と云ふのは、この寄宿舍の監督だつた。ある專門學校の體操の教師で、岡山縣人であるために、この寄宿舍の監督を賴まれて、學生と起居を共にしてゐた。四十五六になるが、一度妻君に死なれてから、獨身でゐる人である。

岡田は、軍人上りの人としては、話のよく分る人だつた。五分刈の頭に、髯の濃い丸顏の男だつたが、絶えずニコ〳〵笑つてゐた。

岡田は、磯村が默り直さうとすると、
『いや、そのまゝでいいよ。』と、自分もあぐらをかきながら、
『君は皆川と云ふ婦人を知つてゐるか。』と云つた。
麗子の名前が、岡田の口から出ることが、あまり意外だつたので、磯村はどう返事していゝか分らなかつた。
『知つてゐます。しかし、それが、どうしたのです。』
『いや、今日僕のところへ、岡山の箕田さんから電報が來てね。親類の皆川と云ふ家の娘が、家出をしたが、多分上京するらしい。上京したら、君の寄宿舍にゐる磯村と云ふ學生を訪ねるかも知れないから、もし訪ねたら、よろしく御配慮を乞ふと長文の電報が來たんだがね。君のところへ、まだ消息がないかしら。』
磯村は、あまりに思ひがけない事情の發展に、どう云つていいか分らなかつた。



『君と、何う云ふ關係にある婦人か知らないが、向ふは年若らしいし、君も學生なんだから、もし訪ねて來たら、おだやかに話して、國から人が來るまで引き止めて置きたいと思ふんだが、君はどう思ふ。』
岡田氏は、威壓するやうなところは、ちつともなく、ごくおだやかだつた。でも、磯村は、返事が出來なかつた。
『君と、どう云ふ關係があるかしらないが、また戀愛關係があつても、俺はちつとも非難しようとは思はないが、今家を飛び出すと云つたやうな、過激な行動を取ることは、君のためにも、その娘さんのためにも、よくないと思ふんだが、どうだらう。』
磯村は、泣き出したくなつた。麗子と相見ざる内から、もうその會見には、禁制の札が貼られようとしてゐるではないか。
『君も、いろ〳〵考があるだらうが、もし來たら、おだやかに話して貰ひたいと思ふが、どうだらう。』
磯村は、仕方なく答へた。

『それは、僕も考へて見ませう。でも、僕のところへは、何の消息もないんですからな。』

『ぢや、もし消息があつたら、かくさずに一つ、わしに打ちあけて貰ひたいな。』

『かしこまりました。』

さう云ふと、岡田氏は立ち上つた。だが、丁度岡田氏が、立ち上つたとき、あわたゞしい女中の足音が、きこえたかと思ふと、女中が襖をあけた。

『磯村さん、お電話ですよ。皆川さんと云ふ方。』

何と、最悪なときに、かゝつて來た電話だらう。もう、五分前か五分後であつたら、どんなにそれが欲しい電話だつたらうに。

磯村はうれしさと、同時に、困惑を感じた。だが、彼は勇氣を出して、岡田氏を無視しようとした。

『一寸失禮!』

さう岡田氏に云つて、足早に階段を降りて、電話にかゝつた。

しかし、麗子の聲は容易に、きゝとれなかつた、やつと、きき取れるやうになると、麗子は云つた。

『まあ、さつきどうなさいましたの。』

『すみません。僕が、まちがつたのです。』

驛の入口が二つあるなんて云ふことは、容易に説明出來ることではなかつた。

『わたしが、まゐつたの、御迷惑なのでせう!』

『馬鹿な! そんな事があるもんですか。』

『だつて、あんなことをなさるんですもの。』

『間違ひです。すみません。今、どこにゐるのですか。』

麗子は、電話口で泣きじやくつてゐた。

『銀座ですの。わたし、今晩どこへ行つていゝか分りませんの!』

さう云ふと、麗子はまた泣きじやくつた。磯村は胸が、はりさけるやうな思ひだつた。

磯村は、(直ぐ此方へ來い!)と云ひたかつた。しかし、氣がつくと、岡田氏は、彼について階下に降りて、彼の背後二間位のところに立つてゐた。

『ねえ、そちらへ行つたら、いけませんかしら!』

麗子は、外見も外聞も忘れて、此方へ來たがつてゐるらしかつた。しかし、(此方へ來い)と云ふことは、麗子を、罠にかけるのと同じだつた。

『ねえ、そちらへ行つたらいけません?』

『……』

『えゝ、いけませんの?』

『その……今夜は……』

『やつぱり、御迷惑なのでせう？』

『そんたことあるもんですか。でも……』

磯村が、云ひたやんでゐると、岡田氏は、そつと、磯村の傍へ來た。

『君、先刻の人なんだらう。直ぐ來るやうに云ひたまへ！どこにゐるんだ。こんたに夜遲く、うろついてゐると、取り返しのつかないことになるよ。云ひたまへ！此方へ來るやうに。』

だが、岡田氏の云ふ通に云へば、それこそ別な意味で、取り返しのつかないことになるのだつた。

『ねえ、わたし行つたら、いけません？』

しかし、どうして來いと云へるだらうか。と云つて、背後に岡田氏が立つてゐる以上、拒絶の言葉は、何一つ口に出すことも出來なかつた。

『君、來いと云ひたまへ！こちらへ來いと云つた方が、間違がなくつていゝんだよ。』

岡田氏は、ます〳〵電話口に近づいて來ながら云つた。

『いけませんの。そちらへ伺つたら。』

電話口の向ふで、麗子が云つた。

『……………』

だが、磯村はどう云つていゝか分らなかつた。彼は、恐ろしい板ばさみの中に、魂をひきちぎられる思ひがした。

『いけませんの。ぢや、ようございます。では左樣なら。』

麗子の絶望的な聲が、怨むやうにきこえて來た。

『麗子さん！麗子さん！麗子さん！』

磯村は、叫び立てた。しかし、受話器を置くかすかな音が、彼の心臟を突き通すやうにきこえて來ただけで、萬事休した矣。

バア・シロバラ

麗子は、數寄屋橋際の自働電話から、ころがるやうに外へ出た。

晝間、飯田橋驛で待ち呆けの憂き目に會つたので、磯村の心持は、たいてい想像が出來たのであつたが、銀座から日比谷公園の間をさまよつてゐる内に、だん〳〵夜が更け、十時を過ぎたのに、まだ行くべき今宵の宿もない心細さに、もう一度磯村のところへ電話をかけて見たのだつた。しかし、電話の應對で、磯村の心がまざ〳〵と分つたと思ふと、彼女は絶望の淵に、投げこまれたやうな氣がした。結局、磯村が自分に對した氣持は、遊戲的な紙上戀愛だつたかと思ふと、そんなものを頼りに東京へ來た自分のおろかさが、しみじみと後悔された。

しかし、彼女は絶望の淵に、そのまゝ泣き沈んで行く女ではなかつた。絶望の底にあつても、彼女の朗らかな性格の底から

湧き上る勇氣は、いつの間にか胸の底にたまつてゐた。磯村さんがあつたゝめに、良吉が嫌ひになつたわけではないのだ、磯村さんが無くたつて、あんな男に身を委せるわけには行かないのだ。磯村さんなんか、なくつてもわたしは、あの結婚を避けるために、東京へ來たのに違ひないのだ。わたしは、磯村さんなんか初から、なかつたものとして、勇しくわたくし自身の道を歩んで行かう。一人の自覺した女性として、勇ましく胸を張つて。

だが、麗子は今夜の宿にさしづめ當惑した。紹介もなしに、宿屋へ一人で行くなどは、世間をちつとも知らない彼女としては、どうにもたま



らないことだつた。

彼女は、先刻から汽車の中で會つた渡邊洋子のことを考へてゐた。初對面の人のところへ行くことは、いかにも恥しかつたが、しかし宿屋へ一人で宿りに行つて、巡査にあやしまれて、恥をかくなどより、どんなにまさつてゐるか分らないと思つた。

それに、もう二十分もすれば十一時である。彼女は、あの婦人を訪ねて行くにしてもなるべく早い方がいゝと思つた。

彼女は、通りかかりの小僧さんのやうな人に訊いて見た。

『南鍋町つて、どちらでせうかしら。』

『南鍋町！ そこの角を曲つて左へ半町位行つたところですよ。』

『ありがたう！』

心も身體も疲れきつてゐる麗子には、近いと云ふことは何よりの救ひだつた。

彼女は、あの人を訪ねて行く外ないと決心した。教へられた通、左へ曲り半町ばかり行つてから、煙草屋できいた。

『南鍋町一丁目四番地の渡邊さんて、どちらでせうかしら。』

店番をしてゐた老婆は、奥の間にゐる娘を振りかへつてきいた。

『四番地の渡邊つてお前知らないか。』

『あゝ、それはバー・シロバラよ。この先の横丁を左へいらつしやると、三軒目に紫と赤の電氣で、バー・シロバラとかいてありますわ。』

バー・シロバラと云ふ言葉をきくと、麗子は、足がすくんだ。渡邊洋子が、（わたし今何をしてゐるか御存じ？）と、汽車の中で云つたことが、思ひ合はされた。バー、カフェー、そこに足を踏み入れることは、若い女性が、墮落への第一歩であるやうに麗子はきかされてゐた。

（つゞく）

『心の日月』を讀みて

加藤武雄



菊池氏の作を讀んでいつも感じる事は、何を描いても眞によくかん所を押へてゐるといふ事だ。そして、筆の粗い割合に實によく細かな氣持を出してゐる事だ。それともう一ツ、これは最も重大なことだが、描寫が些とも浮いて居ないといふ事だ。『心の日月』は第一回から愛讀してゐるが、評判の「東京行進曲」よりも、もつと藝術的で落着いてゐて、菊池氏得意の女性描寫は實に巧妙を極めてゐる。特に本月の分など、眞野夫人を訪ねて東京へ出て來た女主人公の姿が、其のまゝで出てゐる。人生の最初の冒險に臨める處女の胸の鼓動が活字の一つ一つに躍つてゐる。鮮明なる哉。



富士より强い山の上

鈴木彦次郎
さしゑ　近藤紫雲

一

『カアーン、カン、カーン！』
耳も千切れるほど冷い朝風に送られて、鐘の音がさびしくふるへて聞えてくる。つづいて奥の間から洩れる力無げな念佛の聲――。
『まあ、父さまは此の寒さもおいとひなくあのお念佛、それも兄さまの仇討ちたいばつかりのお心と知れば、どうか一日も早く、あの富士山を投げ殺すやうな強いお力のお助けが得たいものを――』
廣い臺所で、女中相手に朝餉の仕度に忙しく働いてゐたお絹は、老父のさびしい念佛を聞きつけると、思はず仕事の手を休め、口惜涙に身をもんだ。その頰を傳はる涙さへ身にしみわたる今朝の寒さである。
それも道理、まだ霜月初めだが、北國は冬が近い、まして、東の空もやつと白み初めた夜明け方、外は一面、田も畑も眞白く埋もれた雪の原、その上を吹きまくつてくる小雪まじりの山颪が、板戸の隙から洩れ入つて、お絹のぬける程白い頸に切れよとばかり沁み通る。
お絹は、あわてて襟をかき合せながら、眞紅な唇を、糸切齒できつと噛んだ。
『ええ、もう愚痴なんか止しませう。それより早く作男達にお膳を出さなきや――お千代まだかい？』
さう、女中をうながした瞬間、突然、納屋の方に、すさまじい叫び聲が、どつと上つた。
驚きあわてる作男達の激しい叫びだ！
『やあ！　大變だ、大變だ！』
『熊だぞ、大熊が出たぞ！』
『あぶない、あぶないッ！』
『逃げろ、手向ふな』
氣丈なお絹は、その聲を聞きつけると、やさしい眉をきりり上げ、板戸を細目にあけてじつと外を見つめた。

――恐しく猛だ。しかも小牛ほどもある大熊が、[illegible]七堤を蹴破つて納屋の方へと迫つてくる。男達の叫び聲は益〻鋭くなる。その聲に、熊は一層氣を荒立てて、後足で雪を蹴散らして進んでくる。その大きく開いた口が赤く見えるまでに近付くと、もう男達は空元氣も失せて、どやどやと先を爭つて裏の方へ逃げてゆく。

『お孃さま、おあぶなうございます』

さういふ聲もふるへながら、女中達は早くも腰をぬかしてる。

『ウオーッ!』

熊は大手をひろげて立ち上つた。

その時だ!

『あぶねい!』

『吉! なにするだ。命が惜しくれいのか』

口々に引止める聲をふりきつて、荒熊めざして走り出た筋骨逞しい若者、誰かと見ればむつつりした新參者の作男吉六である。

『吉や! あぶないよ、あぶないよ!』

思はず、お絹も甲走つた聲を上げる。だが、吉六は一歩も引かぬ。愈〻熊に近寄りさま、

『人騒がせのこん畜生! くたばりあがれ!』

破鐘のやうな聲で怒鳴りつけ、いきなり首を縮めるが早いか、熊の胸板目がけ、破れよとばかり、どしーんと、大膽不敵[illegible]

『こいつ、恐しく賢い奴だ』

とは、云はなかつたが、不意を喰つてよろめきながら、熊が得意の拳を揮つて横なぐりにくるのを、吉は巧に身をかはしておいて、懐中から取り出した山刀、双手に握るや身をすくめて、腕も通れとずぶり突刺した月の輪。熊は美事に急所をゑぐられ、たじたじとなるその足を、隙も與へず横に蹴返せば、さしもの大熊も堪へ得ず、

『ウオーッ、ウオーッ!』

斷末魔の悲鳴も物すごく、血を吐いて、ずでんどうと雪の原に仰向けに倒れた。

その返り血を全身に浴び、まだひくひく動く大熊をふんまへて、すつくと立つた吉六の姿は、折から、雪に映じてきんきらきんと輝く朝日に浮いて、如何にも男性美の極致を示した光景であつた。

どつと賞めそやす作男等の喝采。それも耳に入らぬ樣子で、お絹は、瞳を輝かし、頼母し氣に、いつまでもいつまでも吉六の雄姿に見とれてゐる。

『これ、お絹や』

『はッ』

驚いてふりむけば、いつの間に後に立つてゐたのか、父の重兵衛は、老いた顔にも珍しく微笑さへ浮べて、お絹の肩先にやさしく皺だらけの手をかけてゐる。

『ハハハ、驚いたか、わしも最初から見てゐたのだ。どうぢやな、あの膽力といひ、勇氣といひ、吉六は頼母しい若者だな。わしはむろんのこと、お前も日頃の願が叶うて嬉しいぢやらう』

『まあ、すぐにそのやうなことを――』

『いや、はづかしいことはない。あの男なら美事重太郎の仇は取れる、だが、それともほかに――』

『いえ、兄さまの仇討てさうなあの力、わたしはそれが嬉しくて――』

口籠りながら、うつぶせになつたお絹の美しい襟すぢは、時ならぬ紅葉に、ぱつと染まつてゐた。

――その日から一月も經つた或る宵、さしもの廣い笹倉家の大廣間も狭しとばかり招かれた客達のさんざめきの聲は、二年ぶりに明々と灯された燈火のゆらめく毎に響きわたつて、早くも、春はここのみ訪れたかと思ふほどの賑ひである。



この祝宴こそ、熊退治の作男吉六は、その俠勇な氣性と無類の力を見込まれて、廣い南部領内でも音に聞えた淺岸郷の豪家、笹倉重兵衛の獨り娘、淺岸小町の名も高いお絹の婿に定つた披露の宴であつた。

『どうぢや、皆の衆、此の婿貰つてわしも安心ぢや。死んだ重太も安心ぢやろ。お絹もむろん大喜び、せめてもの望といへば、わしの眼の黒い内、婿どんが、あの憎い仇富士山を土俵の砂に埋めて吳れるそのことだけぢや。ああ、めでたいな。嬉しいな』

重兵衛は、絶えて久しい喜びに心もほぐれ、思はず過した大酒に、たゞもう相好崩して笑ひつゞけてゐる。

――まだ黒船の騒ぎも立たず、世を舉げて

太平の[illegible]

なかばのことであつた。

二

物語は、前年の春、お絹の兄重太郎變死の顛末に、說き戻らなければならぬ――

ここは伊達侯の城下仙臺の町はづれ。長い冬も過ぎ去つて、野邊に若草萠える彌生の末、たゞさへ人出の多い此頃を、今日はまたその邊に建てられた掛小屋めざして寄せて來る人の群、



[illegible]を[illegible]いてゐた文化三年も押しつまる[illegible]

事情を[illegible]道中は[illegible]のおとなつく

りして見送るのも道理、田舍では珍しい江戸大相撲西方の力士は、大關黑雲、關脇富士山を始めとして殆ど全部、この仙臺に下つて來て、今日は、千秋樂の三日目、日頃御ひいきの御禮として、飛入り勝手の番外お好みが行はれる當日だもの、場內は、もう午前中に、びつしり蟻の這ひ出る隙間もないほど大入滿員、外はまだ春風が肌寒いのに、見物は汗だくだくになつて、領內の飛入り力士に聲を限りの應援である。

『荒獅子！』

『政岡！』

だが、玄人と素人の悲しさ。何人入り代つて土俵に出ても、幕下の名もない連中に樂々とこなされる。見物は漸く焦ら立つてきた。

中にも、西土俵の前に坐つた旅仕度の若者、勝負の度に、自分が取りもしないのに、土俵の力士と一所になつて、手を動かす足をふんばる。

『それ、もう一息だ。ちえツ弱いな。そこで突張つて、なんだ、たたきこめつてえに』

『あ、痛ツ痛ツ！　若旦那、手前の頭を毆つちや困りますよ』

『我慢しろ、ここが大事の所だ』

『へいへい。まあ手前を殴る位ならよござんすが、あなた、夢中になつて飛び入りなんかしちやいけませんぜ。他國ですからね』

『わかつてる、だまつてろい』

さう、供の者を叱りつけて夢中になつてる此の若者は、佐倉の若旦那重太郎である。

重太郎は、相撲は飯より好きだ。だから素晴しく強い。近郷近在の草相撲で、重太郎が出ると云へば、相手方の大關が尻込みする程の力量である。此の相撲好きの重太郎が、父のいひつけで、取引上の用事のため、仙臺にやつて來てゐた丁度その時に、江戸相撲が興行されたからたまらない。重太郎は大事な用事もおつぽり出して、初日の朝から、毎日相撲場へ詰めかけてゐる。

今しも、十二人目の飛入りが、美事に突き倒された。

『さあ、おあとの飛び入り！』

呼出しの聲がひびく。だが、誰も出ない。

『さあさ、ござりませんか』

『よし！　俺が出る。南部の千鳥川が飛入りだ』

『いけない、いけないつたら若旦那』

『はなせ！　俺が出て投げてやるんだ』

重太郎は、供の安吉の止める袂をふり切つて、やにはに裸になるが早いか土俵の上に躍り出した。まだ二十一だが、五尺八寸の上背に、ふつくり肥つた色白な體軀。

『千鳥川ア！』

見物人は大喜びだ。やさしい顏に似ず、さすが自慢の相撲巧者、重太郎は、見る見る幕下の強い所を七人まで投げ倒して、ほつと息を入れて、土俵の上に大胡坐をかいた。

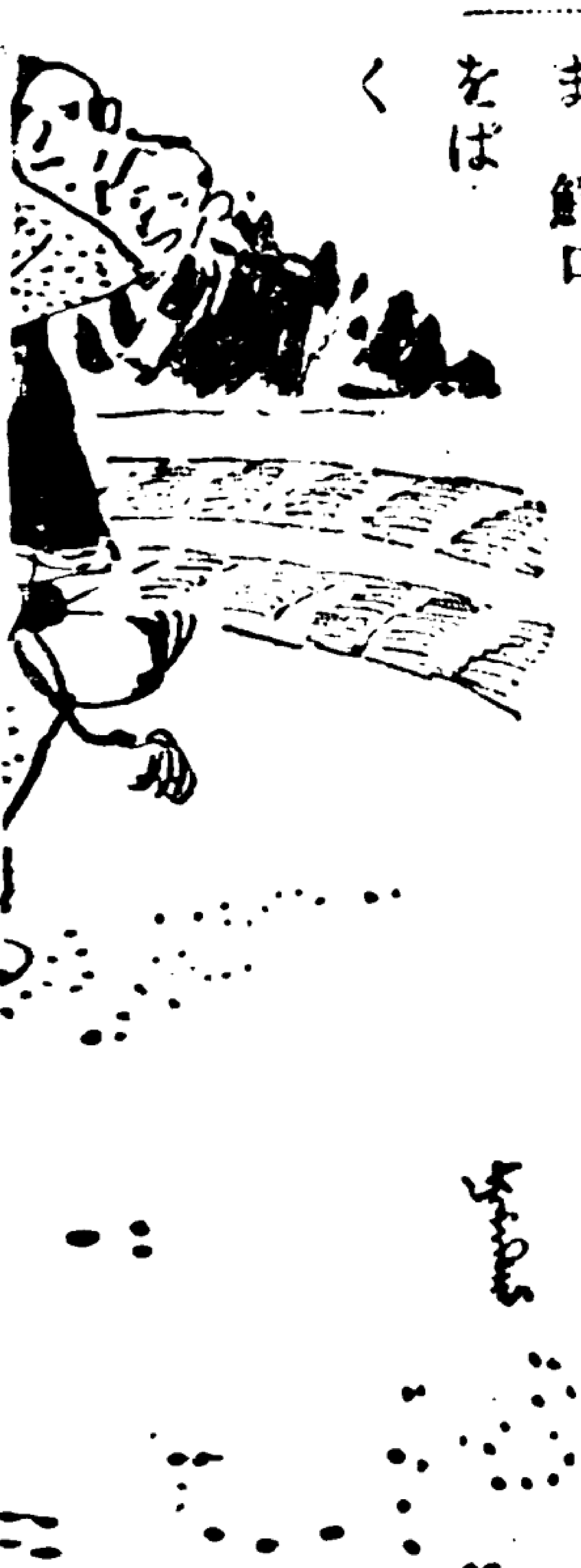
さあ、かうたると、見物の方は少し面白くなくなつてくる。國の連中がまるで歯が立たない所へもつてきて、他國の千鳥川が何の苦もなく七人迄ぬいてしまつた。

『おうい、強い關取出て、一つその高慢ちきな若僧を投げ飛ばしちまへ』

贔屓は逆になつてしまつた。その矢先へ、のそり土俵に現はれた見上げるばかりの大男、おまけに肩のあたりは瘤だらけとも思はれる程、筋骨稜々たる立派な關取、これぞ、關脇富士山大五郎だ、鬼瓦のやうな顏に皮肉な笑を浮べて、重太郎の肩を輕くたたく。

『おい、若い客人、大分威勢がいいやうだが、今度はわしが相手でごんす、今の内に念佛でも唱へておかつせい、ウハハハハ』

さういひさま、鰐口をばく



つかせての大笑ひだ、重太郎も、さすがにぎよつとした。いくら自分が強くても、たかが素人、しかも七人ぬいたその後に江戸でも名高い關脇富士山が相手になるとは、あまりな仕打だ。どんなにふんばつたつて、重太郎が勝てる筈はない。

だが、勝氣の重太郎、齒嚙みして怒鳴つた。

『御親切は有難いが手前こそ水盃でもしろい!』

さう云はれて、富士山は力水さへ飲まず眞赤になつて仕切つた。千鳥川も懸命の睨み合ひ、さあツと軍配が引かれると、千鳥川が得意の突張り、そこはさすがに關脇、平氣で受け流し、びくともしない。さうなると思ひ切つて突き進めない。そこへつけ入つてずぶり二本を差した富士山は、得たりとぢりぢり寄り進む、重太郎は力足をふんまへて、必死となつてふせいでる。

『富士山、もう一息だ!』

『若旦那、若旦那! お怪我のないやうに』

安吉は、かうなつては、勝負なんかどうでもいい。死物狂ひに怪我のないやうにと祈つてゐる。



重太郎の顔は、眞赤に充血して、脂汗が氣の毒なほど流れ始めた。富士山は飽くまで落着いて攻勢をとる。ぢり、ぢり、ぢり、重太郎の踵は、もう西の俵にすれすれになつた。

富士山は、ぐいと寄る。瞬間、重太郎はくるり身をかはす。

右腕が相手の首にからみつく、決死の冒險！

『えーい』と打つた首投の放れ業に、富士山は、ぐらりゆらめく！

『しめた！』

安吉が、息を飲んだのも束の間、すぐさま立直つた富士山は、後ざまに重太郎を抱きかかへ三尺も高く差上げると、蛙でも投げるやうにいきなり土俵の外にたたきつけた。

『うーむ』

『若旦那！　若旦那！』

安吉が走り寄つたその時には、もう重太郎は血反吐をはいて絶命してをつた。

三

泣く泣く重太郎の骨をたづさへて歸國した安吉から、その詳しい話を聞いた重兵衛は、あまりのむごたらしさに、悲憤の涙も出ぬほどであつた。たつた一人の後とり息子が土俵の上での變死、しかもズブの素人へ、いやしくも天下の關脇が立合つて、投げなくてもいい最後の亂暴な手、だが、それも土俵の上の出來事といへば、表立つて仇討も出來ぬ。相手は尾州家お抱への天下の力士、場所は他國の仙臺領、それに別段禁制の逆手をつかつたわけでもないから、いくら苗字帶刀御免の豪家でも泣き寢入りの外はない。

重兵衛は、それ以來世の中がいやになつた。家事も打棄て、佛間に閉ぢ籠つては念佛三昧の中に、土俵の上で息子の仇討てさうな婿の見つかるやうにと祈をこめてゐた。女房は、重太郎の變死に力を落し、その年の秋、木の葉の散ると諸共あへなくなつてしまつた。だから、娘のお絹は、まだ十七の秋から、兩親に代つて、笹倉家を脊負つて立ち、かよわい身體で、野良仕事にも水仕事にも一心こめて働いてゐたのである。

此のやうに暗黑に閉ざされてゐた笹倉一家に一道の光がさしこんで來たのだ。熊退治が不思議な緣となつて、吉六がお絹の婿になつた。

吉六の力量と膽力勇氣は、あの熊に向つた時で既に證明されてゐる。おまけに目にこそ一丁字もなかつたが、彼は生れながら俠氣と義心を充分持つてゐた。始め、重兵衛から、婿にと迫られ、その一切を打明けられた時から、吉六には、笹倉家の財産もお絹の美貌も殆ど問題ではなかつた。ただ、お絹が大家の娘としては珍らしく素直な働き手なことと、此の哀れな一家のために憎むべき仇富士山を投げ殺すのは自分の外にあるまいといふ自信と俠氣から、二つ返事に承諾したのだ。

だから、婚禮が濟むと、そんなに急がなくてもと優しく止めるお絹の手をふり切つて、重兵衛から貰つた紹介狀を懷中に

て江戸へ出發した。

やがて、江戸へ到着した吉六は、すぐさま同藩の葉内力士御用木の許を訪れ、重兵衞の紹介狀を差出して弟子入りを願つた。

『おう、吉六どんとやら、話は笹倉の旦那からの手紙でようわかりました。どれ、一つ裸體になつて、見せて貰ひませうか』

御用木に、さう云はれて、吉六は早速裸體になつた。その體格を、ぢいつと見てゐた御用木は、思はずうなり始めた。

『うーむ、こりや素晴しい身體ぢやわい。わしは受合ふ、二年經つたら立派な關取ぢや』

かうして、吉六は廿三の春、始めて力士仲間に身を入れ、御用木の部屋で稽古することになつた。

何しろ、生れつき熊をもひしぐ怪力、それに氣轉の利く早業、たゞさへ強くなるべき所へ、お絹親子の仇を一日も早く討ちたい一心に稽古を勵むから、さあ、日を追うてめきめきと強くなる。今では、御用木は秘藏の寶玉のやうに大事がり、なかなか場所に出してくれない。

『吉六どんや、お前なんぞア前相撲から取るなんて勿體ない、もう半年辛棒さつせい、そしたら十兩迄へ附出しますア』

激しいぶつかり稽古のうちに半年は經つた。吉六は翌年の春場所、始めて、熊より強い荒虎吉五郎と名乘つて、十兩へ附出された。

時に、富士山は、もう西の大關、當時、かなふ相手もなく飛ぶ鳥も落す勢。[illegible]

だもの、どうして十兩迄の途中の[illegible]道理はない。[illegible]所早々見事全勝して、翌場所は[illegible]尻に昇進した。その時も、富士山とは取組の都合で顏が合はなかつたから、荒虎は、またもや難なく全勝をつゞけ、翌年春場所の番附では、遂に東の力小結に昇進した。

四

櫓太鼓が鼕々と堀割にひゞきわたる、場所は、深川富岡八幡境内、やつと咲き初めた社前の櫻も寄せ來る人群れに、やたら花を散らす彌生の初め、文化六年春場所の八日目の朝は、麗かに晴れわたつてゐる。

今日こそ、東方随一の人氣力士荒虎が、西の御大富士山との初顏合せの取組がある。さあ、前夜から市中の人氣は大したもの。ひいきひいきが勢立つて、新進勝つか、老巧味をやるかと豫想もつかぬ明日の勝負の噂に花が咲き、諸方に喧嘩も起らうといふ騷ぎ、それへ誰が聞きつけてか、義兄千鳥川の仇を荒虎が討つのだといふ噂さへ立つたから、まだ朝ながら、滿員の場内は何となく殺氣立つてゐる。

むろん、お絹親子は、吉六から此の場所こそ富士山と顏が合ふといふ知らせを得て、家事を投げ棄て、一月も前から神田の旅籠に宿つては今日の日を待ち兼ねてゐる。だが、吉六は一度も訪ねない。固く身を持し精進潔齋、一心不亂に富士山を倒す

手段を講じてゐる。お絹親子も同じこと、朝夕の念佛祈願、夜は夜でお絹の三七日の水垢離取つての熱心に、今は同宿の人々も擧つて狂氣のやうな應援である、愈々取組の時刻は近づいた。お絹は場所にはとてもゆけぬ。重兵衛とても同じことだが、老人だまつて念佛も唱へても居れぬ。到頭たまり兼ねて、駕籠を飛ばして深川へ急ぎ、もう入れぬといふ木戸番の股の間をくぐりぬけ、やつと土間に禿頭を突き出した時が、丁度申の刻——今で云へば午後四時、春の夕陽が、かアーッと人いきれのした場内を照り附ける。折しも呼出しの透通る聲が場内の隅々まで流れる。

『東——荒虎。



西——富士山』

さあ、共に七日勝放しの新進と老巧、しかも初顔合せの遺恨相撲、此の勝負一番に夜明け方から詰めかけてた滿場の觀客は、もう總立ちになつて、ワアーッといふ騒。つづいて行司の軍配に從ひ、のつそり西の土俵に上つたのは今全盛と呼ばれる富士山、前年仙臺の時と比ぶれば、肉もつき腹も出張つた今年卅一の働き盛り、例の鬼瓦の樣な顔を今日は益々物凄く緊張させ、六尺五寸の大兵に力をこめて四股を踏む。

こちらは、半眼を閉ぢて靜かに登る荒虎、身長こそ五尺八寸だが、一心こめて段へ上ずを筋

背筋逞しく、扉先に張り切つた筋肉へ春の陽が映じてきらり光つてゐる。ふつくら出た腹をかろく兩手で抱へながら、じつと策戰をこらしてゐる樣子だ。さて、兩人は睨み合つた。富士山もむろん荒虎が千鳥川の仇討たうと心掛けてることは知つてる。だから、兩者共に仕切りは入念だ。やがて、仕切り直し五回の後、『やつ』と懸聲諸共荒虎が突掛ければ、『よう』と應じて立上る富士山、行司の軍配は、さらり引かれた。

『荒虎！』

『富士山！』



見物は覇を認りの總評だ。重兵衞老人は、もう見てる空がない。隣の座蒲團をすつぽり禿頭にかぶつたまま、お念佛に急しい。

荒虎は矢繼早の鐵砲だ。富士山は巧みにそれをさばきながら得意の二本を差さうとする。だが、一心こめての鐵砲に射すくめられ、富士山はたじ〳〵と西土俵際にすさつてゆく。勢を得て荒虎が尚もと突くその手を一寸さばきながら、大關富士山は卑怯にも、熱狂した見物にも音が聞える程の激しい張り手を荒虎の左頰に見舞つた。不意を撃たれて、荒虎が思はず顏をそむける瞬間、ずぶり富士山の二本は深々と入つた。かうなると上背のある富士

山、大いに歩がいい。荒虎がまだ目がくらんでゐるのを幸ひ、そのまま吊り身にぢりぢり寄り詰める。荒虎の足は東の俵にかかつた。丁度、仙臺の千鳥川の場合と同様だ。此の時、座蒲團から顔を出した重兵衛老人、皺枯れ聲をあらん限りふりしぼつて、

『荒虎！荒虎！わしが祈つてるぞ！』

その聲が聞えてか、それまでずるずるすべつてゐた荒虎の足は、ぴたと根のついた様に動かない。富士山は焦つて満面朱を注いでのしかかる。瞬間、荒虎は熊退治の吉六の怪力を呼び起した。二本差した敵の腕を折れよとばかり閂に極めつけ、そのまま、腹をつかつてぐいと釣り上げるや、寄り身の體勢を利用して、打棄り氣味に後へ砕けよとばかり投げ棄てた。軍配はサアーツと東に上がる。

『荒虎！』

『ワアーツ！』

『荒虎、えらいぞ！えらいぞ！』

座蒲團は舞ふ、火鉢は飛ぶ。羽織は投げ出される。辨當は散る。満場の見物は總立ちになつて狂氣のやうな亂舞だ。

その狂亂を他所に、すつくと土俵に立つた吉六は、額ににじむ汗を西日に浮かし、嬉し涙にうるんだ瞳をしばたゝいては、底から湧き上る會心の笑に我を忘れてゐた。

だが、ふとふりかへると、富士山は突伏した切りうめいてゐる。見れば、怪力で閂に極められた兩腕はぽつきり折れて、氣絶せんばかりの様子である。吉六には、持前の俠氣が湧いて來た。相撲の仇討は殺すが正義ぢやない。相手を廢人にして仕舞へばそれでいい。そこが武士と相撲の區別だと常から合點してる吉六は、矢庭に土俵から下りて富士山を介抱し始めた。

重兵衛老人は、禿頭で人を突きのけ押しのけ、やつと木戸口まで出ると、すぐさま駕籠を飛ばして旅宿に駈け入る。

『勝つた、勝つた、婿さんが勝つた。重太の仇は美事に取つた』

聞いたお絹は、今迄合掌して祈つてた手を放すと、いきなり父の膝に飛びついて、わアーツと嬉し泣きに突伏した。

彌次馬の歓呼の聲に送られて、美々しい駕籠が此の旅宿の前に着き、大銀杏の髷も美しい小結荒虎が、のつしのつしとお絹親子の部屋を訪れたのは、それから半刻過ぎた黄昏時であつた。

×　×　×

吉六の花も實もある仇討の話は、その日の内に南部侯の耳にも達した。殿は翌日吉六並に重兵衛を藩邸に呼ばれ、直接對面の上、その孝心義胆を賞揚され、ついで有難い言葉を賜つた。

『これ、荒虎！富士山より強いそちぢや。余がよき名を與へる。今後は富士より強い山の上吉太夫と名乗れ』

夏場所は雨で流れ、次場所は初秋だつた。新番附には富士山の名前は消え、その代り、勢頭、東大關、荒虎改め山の上吉太夫と筆太に誌されてゐた。その鮮かな足跡は、爽かな秋風のうちにも、[illegible]

漫畫 蛙の惡戯

中島七郎


まだ一匹も釣れない。
おや、もう正午だ。
どれ芝生へ行つて、
辨當にするかな。
何だ、貴樣は！
憎くき蛙め！
おのれ、又か。
今度こそは！
また來たのか。
よし、辨當もろとも、
投込んでやれ、
ポチャン！
今日は歸らう、
あれ、まだ居たのか。

空の巨人

西條八十

青野の涯の白雲は
巨人のごとき姿にて
五月の空に湧きいでぬ。

われは幼き童の
草にまろびて銀笛を
悲しく吹きてありけるが、

五月の空の紺碧に
立てる巨人の燦として
莊嚴しき相にをののきぬ。



雲の巨人のもの言はぬ
眸はわれに教へけり
『見よ、偉なる人となれ。』

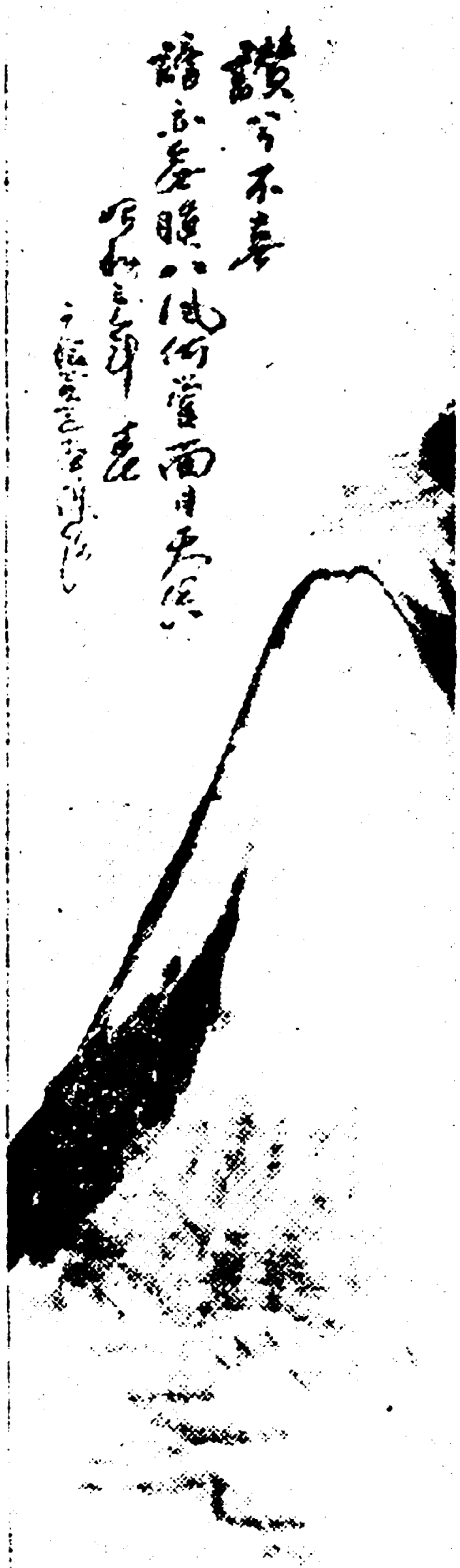
夕、野を吹く風ありて
空の巨人は音もなく
揺れて、崩れて、失せしかど、

その俤はわが胸に
三十路を越えし今日もなほ
啓示となりて殘るなり。

ああ、懐かしき大空の
雲の巨人よ、いつの日か
また見んことのありやなし。

須藤しげる畫





讃するも喜ばず、謗るも亦た瞋るなし、八風何ぞ管せん、面目天眞たり

（秋野孝道禪師の自讃自書）

富士に題す

向上不退の一路

總持寺貫主　秋野孝道

△

『聞、思、修より三摩地に入る』

といふ古聖の言葉がある。修養は機會あるごとに聞くことが必要だ、又讀む方からいへば、飽かずに根氣よく讀むことである。而して聞いたり、讀んだりしたことは、よく〳〵自分の心で考へることが必要である。

今日は一般に聞くことは聞くが深く考へない、讀んでも讀みつぱなしの人が多い、考へなくてはだめだ。

その上にそれを實行する、實地に修して初めて三摩地、卽ち修養の堂奥に達することが出來るのだ。

世を呪つたり、人を羨んだり、側目をするには及ばない、何事も只眞一文字に、根氣のつゞく限り努力せよ、そこに必ず光明が輝いて來るものぞ。

△

私は、實は少年時代極めて鈍漢であつた。物覺えが悪く、爲めに一時は非常に悲觀もした。何とかして一人前の僧侶になりたいものと、たゞそれのみを念願として、人知れず苦心を重ねた。

私の鄕里は遠州の相良町で、昔は一萬石の城下であつた。兩親も揃うて居たが、不思議な因緣から出家をすることになり、六歳の時、暖かき父母の膝下を離れた。同國榛原郡中村の長興寺といふ禪寺に貰はれ、住職伊藤慶道和尚に就いて、先づ第一に經文を教はつた。

師匠の慶道と云ふ人は、まことに嚴重な方であつた。物覺えの悪い私はお經を聞いても直に忘れて了ふ。忘れると叱られ、更に打たれる。その打ち力も尋常一樣の事ではなかつたので、私の頭は殆んど瘤が絶えなかつた。

隨つて八九歳の頃はどのくらゐ難儀をしたか知れぬ。禪僧の修行は容易でないと聞いたものの、さて深夜人靜まる時、思ふは兩親の慈愛の懐、寧そ逃げ歸らうと思うたことも一再ではなかつた。



秋野孝道禪師

△

默々として坐禪三昧に入る禪の修行は、要するに心の間隙を許さぬのである。彼の昔の劍道修行者に對して、一寸の油斷も與へない樣に仕込むのとよく似て居る。即ち精神の油斷を缺くことを大敵としてゐるのである。

一體、心の迷ひと云ふものは精神の油斷から悪魔が飛び込むのであつて、いつも心の主人公が嚴然と控へて居れば、如何に悪魔がねらつても入る場所がない。坐禪にしろ又世間の職務者にしろ、精神の緊張を缺くと云ふことが宜しくない。

△

私は、明治五年四月八日、佛誕生の聖辰に得度の式を擧げ、

いよ〳〵本式に佛道修行の第一歩を踏むことゝなつたが、例によつて記憶はよくない。どうしたならばよからうかと百方苦心をした結果、此上は神佛の庇護を仰ぐより外に途がないと考へ、丁度、長興寺の門前に白山權現があり、裏山に天滿宮が祀られてあるのを幸、それに祈願を籠めることにした。

子供心の一心から、夜、三更草木も眠る眞夜中を、密かに寺を拔け出でて、跣足參りをするのである。霜の凝つた寒夜の月影を踏む、その淋しさ、寒さ。身を震はせつゝ、每夜人知れず床を離れて、祈願すること一七日、只一心不亂に、物覺えがよくなりたいばかり、寢ても覺めても精神は常に緊張そのものであつた。

而して、人の二人分三人分の復習をつゞける決心で勉強したが、師匠は前云ふ如く嚴格一方の人で、夜になつても行燈の點火すら許さない。暗夜では經文の復習は出來ず、どうしたものかと思案の結果、遂に一策を案出した。



それは本堂の前机にある無駄線香を、密かに二三本宛拔き取つて來ては、それに點火して、寢たふりをしながら、幽かに見ゆる經文の文字を辿り、復習をつゞけてゆくことである。

妙案效を奏して、經文は片端から記憶が出來た。併し困つたことには、それを長くやつたために眼が惡くなつた。縷々と立上る線香の煙が直接眼に入るので、兩眼腫れあがつて痛むこと一通りでない。

昔の車胤や孫康は、雪を積み、螢を集めて勉強したと云ふが、それを考へると、今日の學生は仕合せである。白晝を欺く如き電燈あり、圖書館ありであるが、文明の惠澤も、餘りにそれに馴れ過ぎると、遂にはその有難さも忘れ勝なものである。一事一物みなこれ先人苦心の結晶なることを考へ、如何なる場合も感謝の氣持を失つてはならない。

特に大切なのは君の恩、親の恩、師匠の恩、社會公衆の恩であつて、佛敎ではこれを四恩と云ふ。如何なる人も此の四恩を受けずに成長さるゝものではない。隨つて日常の生活が、そのまま四恩報謝の生活に入ることを得れば、先づ一人前の

人間だ。

△

私は十九歳の時、漸くそこに氣が付いた。遠州の大洞院と云ふ巨刹で、長老になる修行、それは禪僧としての一階段である。百日の禁足修行が無事終了した嬉しさを、先づ第一に兩親に告げて喜ばせたさに、六歳の時出家以來初めて我が家の門を潜つた。

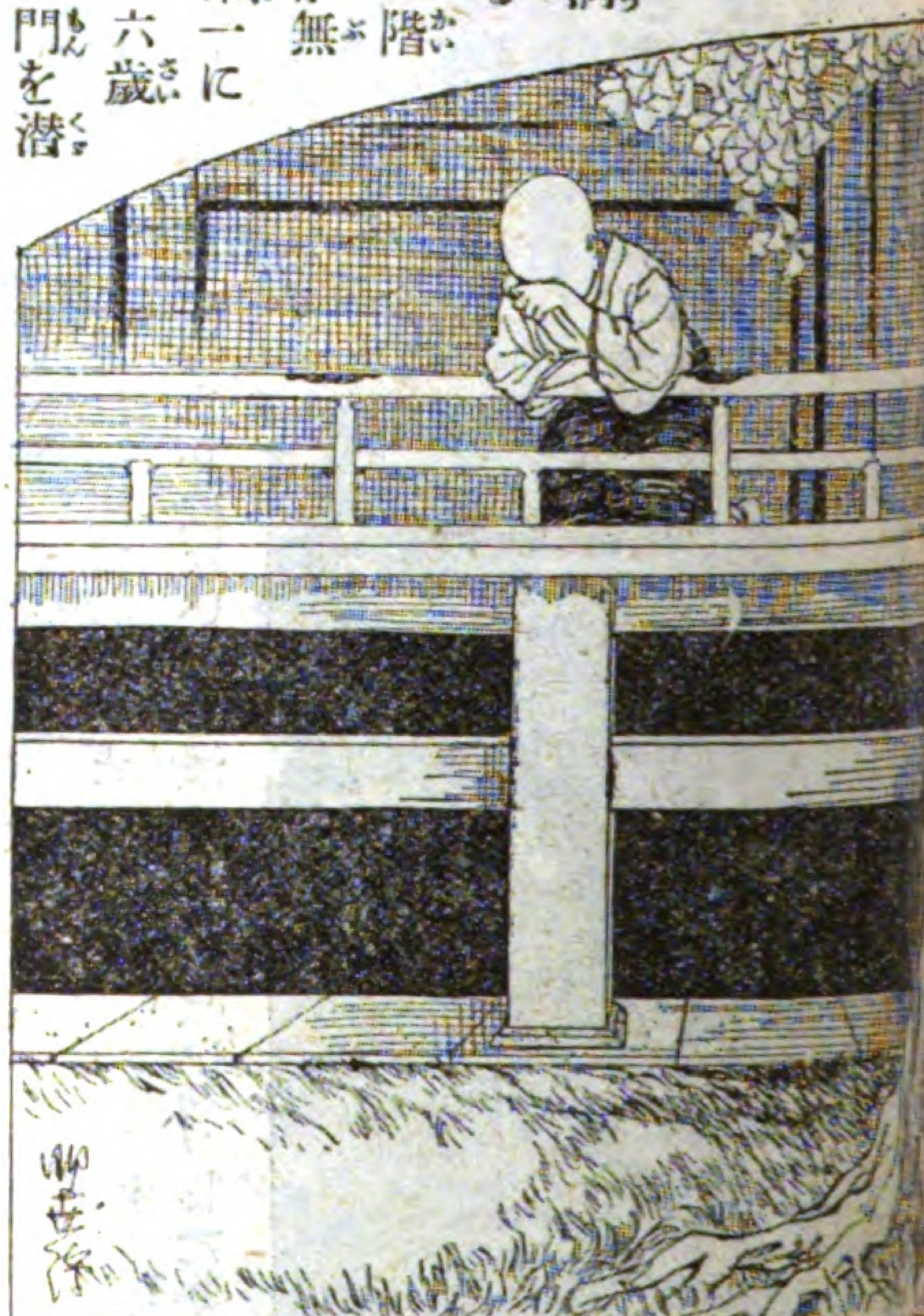
因緣は妙なもので、後年、私はその大洞院の住職として請待を受け、永く住山するに至つたが、其時は左樣なことは夢にだも考へず、兩親に逢へることの嬉しさに、胸先づ躍つた、思へば實に十三年振りの親子對面である。

父も母も、只、私の顏を瞠めたまゝ何にも云はずにハラ〱と淚を流してゐる。自分も萬感涌き起つて、泣くより外に詮術もなかつた。

漸ゝ話をして居る間に、兩親は私が出家以來十數年、雨につけ風につけ、たゞの一日私を忘れたことがないと聞いて、今更らながら稱濟まぬことだと心の裡に詫たのであつた。子供の私は親を忘れて居た日が多い、親は我子を思はぬ日とてはない。私は此時、つく〲親の恩の大切な事が身に沁みて感じたのであつた。

人の親の心は闇にあらねども
子を思ふ道にまよひぬるかな

と云ふ古歌がある。世の青年士女諸子よ！深く此點を考慮して、徒らに放縱なる生活を喜び、親に心配をかくるが如き事の無き樣に注意せねばならぬ。



特に慈悲深きは母親である。私を六歳で寺には遣つて見たものゝ、今頃は淋しさに泣いては居らぬか、病氣でもせぬかと、密かに家を出て、寺の軒先に立つては中の樣子を窺ひ、私が子供心に夜になると母戀しさにシク〱泣いて居る時などは、矢も楯も堪らず、幾度か中に入らうとしては――自分を誡め、一旦出家をさして今更つれ歸る譯にもゆかず――と、張り裂く思ひを抱いて、外に立つたまゝ共に泣いた……と語られた。

聞き了つて知る親の慈悲、子供心に親を恨んだ過ぎし日の事など思ひ起されて、誠に勿體ないことだと痛感した。

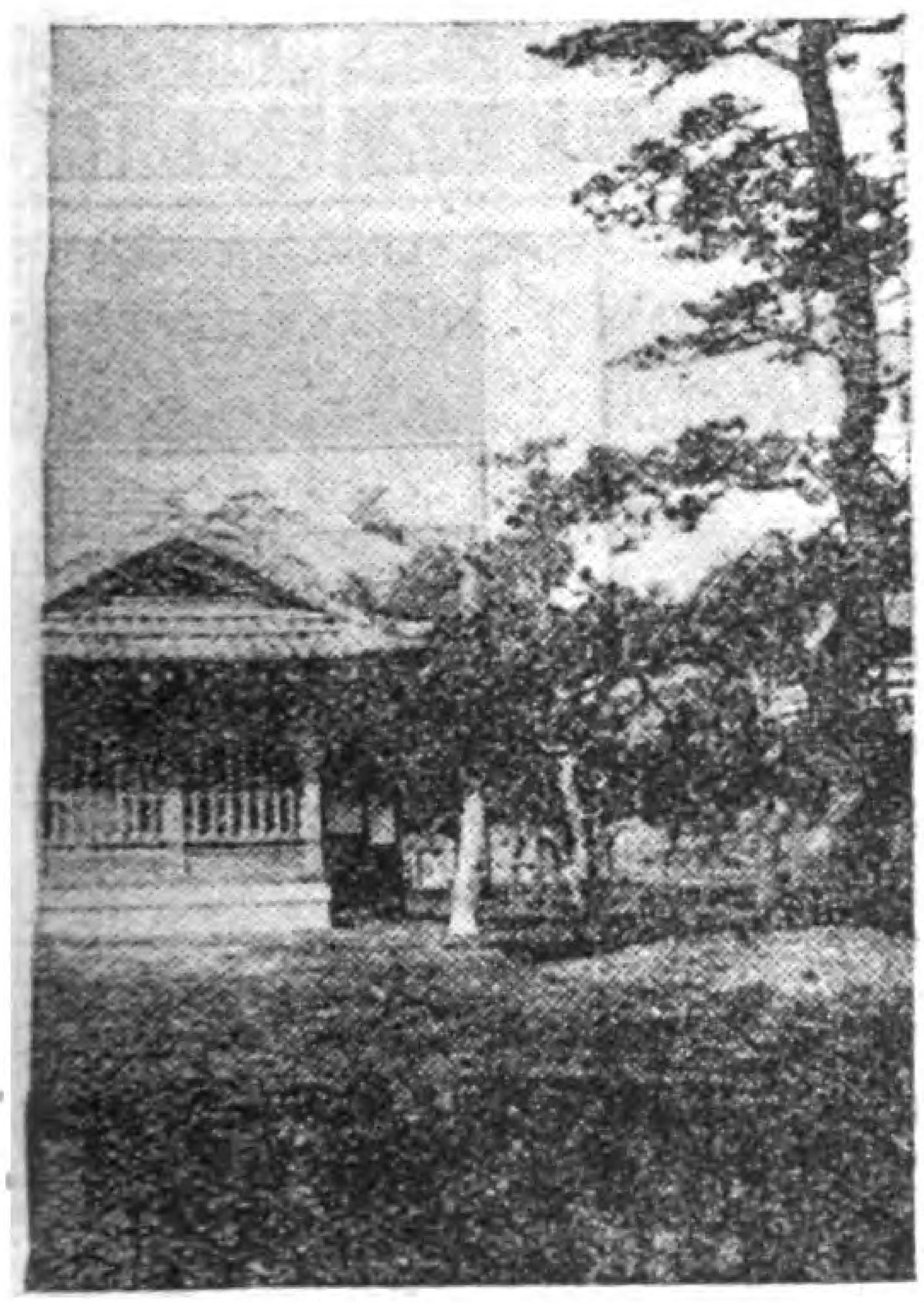
△

總て、ものゝ眞と云ふものは言葉や文字で現はせるものではない。『文字は載道の器なり』とも云うて、道を説明するには必要であるが、道そのものではない。

道樂息子が家に歸ると、嚴父からさんぐ叱られる、そして最後に『貴樣のやうな奴は何處へなりと出て行け！』と云ふ。息子は『それでは――』と云ふので表口から出ようとすると『そこから出ては不可ん』と云はれる。今度は裏口から出ようとすれば、又『そこから出るぢやない』といふ。座敷の緣から飛び出さうとすると、矢張『そこからでも不可ぬ』と云うて怒鳴る。無理を言ふ老爺だと息子は恨むが、親の方では『出て行け』と言葉では云ふものゝ、心では『貴樣を出すつもりはない、立派な人間になつて此家を相續して呉れ』といふ意味なのだ。

△

私も十九歲までは、殆んど毎日のやうに炊事と草取りばかり、時には寺男と共に山中に入つて萱刈までやらされた。勉強の時間は全く與へられないので、隨分師匠を恨みもしたが、それは間違つた考へであつた。



佛道の修行は單なる學問ではない。『行解相應』が目的なのである。行解相應とは學んだ道理を實踐躬行するにあるので、換言すれば言行一致の事である、これが中々容易ではない。

支那の慧能といふ人は弘忍禪師の會下に居つて數百人の修行僧の食べる米舂の役を勤めて居た、朝から晩まで米舂ばかりやらされるのであるが、彼はその事が佛法であるといふ信念でやつた。それで悟りを開き、終には弘忍禪師の法を繼承し、達磨大師より六代目の祖師となり、曹溪大師と謚せられて、今日尚ほ幾百萬人の人々から禮拜されて居る。

△

併し、斯うした事柄は修養の極致であつて、容易に體得さるるものではない。

私も實は、やはり本が讀みたく、或時は四書の假名付の本を求めて、或時は便所内にて讀み耽り、又或時は山に柴刈りに持參して忘れて來た事もあつた。

これから、更に志を立て、着のみ着のまゝ寺を出で、濱松市の天林

寺內にある曹洞宗の專門支校へ入學した。本來無一物の雲水でも、私の場合は全くひどい。着替一枚持たぬばかりか、木綿の法衣も所々破れて居る。如何にも見悪かつたに相違ない。小遣錢の不足な他の學生は、日曜や休日には、他の寺の法事葬式を手傳つて筆墨の資料にするのであるが、私は汚いと云ふので誰も頼んで呉れない、それには全く弱つた。

幸に、年二回、江湖會と云ふ大法要には一同と共に參られるので、其時の布施を以て筆紙を購ひ、夜具などは無論求め得られざるまま、毎夜机に凭れて坐睡し、寒夜眠りならざる時は、專心一意勉强と坐禪三昧、爲めに三年の卒業期を二ケ年で學得することが出來た。

時の教師は遠州の可睡齋住職で、後には大本山總持寺に出られた西有穆山禪師、この方も隨分苦學をされ、寒中袷一枚で通された位であつたから、苦學中の自分に同情を寄せられた、しかし學問の事は隨分嚴重であつた。



上圖は後醍醐天皇の勅額
下圖は鶴見、總持寺の山門

卒業後、私は一時、母校に學監となつたが其後更に穆山禪師の教をうくること前後十三年、不思議にも、今日、穆山禪師が晩年の德風を布かれた大本山總持寺に晉位して、その尊位に香華を捧げるやうになつたことは、全く禪師の御陰と衷心より感謝禁ずる能はざる所である。

△

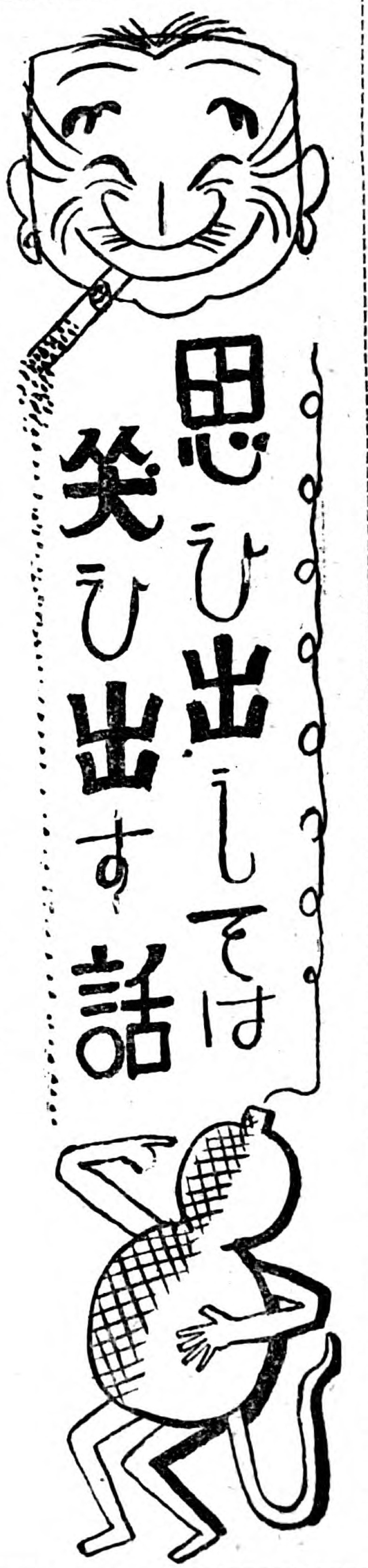
耳にきゝ心に思ひ身に修せば
　いつか菩提に入相の鐘

といふ歌がある。

よく聞き、よく思ひ、之を身に行うてゆけば、必らず體に悟るところがあるものだ。

たとへ身は不遇にあつても、落膽、失望、世を呪ひ、人を羨むことはいらない。

只眞一文字に努力精進せよ、職の何たるを問はず、必らず、其處に道は開け幸福と歡びの世界が來るであらう。





玉島驛の大失敗

文學博士　沼田頼輔

今から三十餘年前、岡山縣の師範學校に奉職して居た時、一日同僚の教師達と學生を引率して備中大谷といふ所に野外演習に出張した事があつた。

その歸途、私は同僚の石橋朗君と一緒に玉島驛に向つたが、私は途中立寄る所があつたので少し後れて玉島驛に着いたのである。石橋君はと見ると、驛前の茶店に、前夜の疲れの所爲か正體もなく眠つてゐて、その傍に、此の地方名物の西條柿が携帶に都合よく細紐に括られて置いてあつた。私はテツキリ彼が新妻の土産に買つたものと思つたので、急に茶目氣分を出し、彼の鼻を明かしてやらんものと、ホクソ笑みながらそれを平げて了つた。

所がやがて驛鈴がヂャン〳〵鳴り響くと、一人の盛裝した美婦人が遽ただしくやつて來て、何か物を搜すやうな風情であつたが、間もなく柿の蔕や種子が散ばつてゐるのを見つけて呆氣に取られたらしかつた。

私はそれを見て南無三寶これは失策つたと氣はついたが、最早食べたものをどうする譯にもゆかず、石橋君を叩き起してテレ隱しに柿の禮を述べると、同君は怪訝な顔をして、それは私の物では無いと云ふ。そこで、絕體絕命、正直に婦人に粗忽を謝して、その價を辨償しようとした。と、婦人は微笑を漏して、

『召し上られたものは仕方が御座いません。どうぞ御氣になさいませんやうに』と、なかなか代價を受取つて呉れない。

さうかうするうちに、汽車が出發するので已むを得ず挨拶もそこそこに汽車に乘り込むと、その婦人も後を踵いで、一緒に矢張り同室に乘り込んで來た。それには能く感心したが、やがて汽車が岡山に着くとその婦人も亦岡山に下車した。私は他日辨償の下心もあつたので、その宿所氏名を尋ねると、矢張り頑として諾いてくれなかつた。



其の後約半年を經過した頃、私の住んでゐた西中山下の隣の家に、松本といふ新夫婦が引ツ越して來た。その夫人を見ると何處でか逢つた人のやうな氣がしてならない。誰人か？と、あの人この人と知人を描いてみると、何ぞ知らん、その人は曩に玉島驛で柿を失敬した婦人であつた。

今度は隣同士の事であるから、お互に素性も知れ隔なく交際したのであつたが、この位きまりの悪いことはなかつた。三十餘年後の今日になつても、果物屋の店頭に柿の出る頃には、何となく思ひ出して、覺えず噴き出すことがある。



萬國旗の裸行列

劇作家　水谷竹紫

今を去る三十幾年前の中學時代、小生を初め何れも十五六の腕白連が、N港のとある海邊に水泳と出かけた。處が不圖した事から脱衣を積んで居た舟を見失つて了つて、各自は何れも褌一貫の有樣、裸體で道中は相成らぬ始末で、さすがの腕白連中も弱切つて、最寄の水上警察へ斷け込み、着物をかしてくれるか、でなければ裸の道中を許してくれるかとの談判。

處が、こゝの署長が鬚髭こそ閻魔大王のやうな物凄い人物であつたが、根は案外の親切者、『裸體で街路を歩く譯には可かん、事情は察しるが天下の御規則は枉げられない』

と、云ひながら、小使を招いて囁いて居たが、やがて、持ち出されたのは勿驚、この警察備付の萬國旗であつた。

『これを身體に卷いて歸るがよい。裸體でさへなければ天下の御規則には違反しない』

英、佛、獨、露、象のついたシヤムの國旗もあれば三日月の土耳古も、紅白とりどりに擴げ出された。思ひもかけぬ閻魔大王のこの茶氣滿々な處置に、一同は面白がつて、一枚は腹に他の一枚は背中に首から結ひつけ、何の事はない國旗のサンドウイッチと云つた珍無類の服裝が出來上つた。



『俺はロシアと英國とを併合するかな』『僕は佛蘭西と獨逸を同盟させよう、もう可い加減喧嘩をしたから仲直りさせてもよからう』なんかと出鱈目に彌次りながら、此の前代未聞の不可思議な一隊は大手を振つて警察の正門から押出した。

街の人々は呆氣にとられ、犬は吠えながらついて來る。見送つた巡査の面々、日頃は冷たい鐵のやうな警察構内もドッと笑ひ崩れて、地獄の釜の蓋があいた時も、かくやと思はるるばかり……懐しい若き日のエピソードである。今想ひ出して自づと朗らかに頬笑まるゝ。

グタリとなつた時平大臣

小說家　伊原青々園



市村羽左衛門が臺灣へ渡つた時の咄だから、今より十何年も前のことである。

中途から出演の番組に「菅原」の車引が加はることになつたが、こまつた事は時平の大臣の乘物である牛車が用意してない、それが內地なら何うにかして間に合はすのだが、旅先きのしかも臺灣だけに、さういふ特種の小道具を、急場で何うにもする事が出來ない。

いろ〳〵考へた末、誰の發案だつたか、火防用のポンプを、

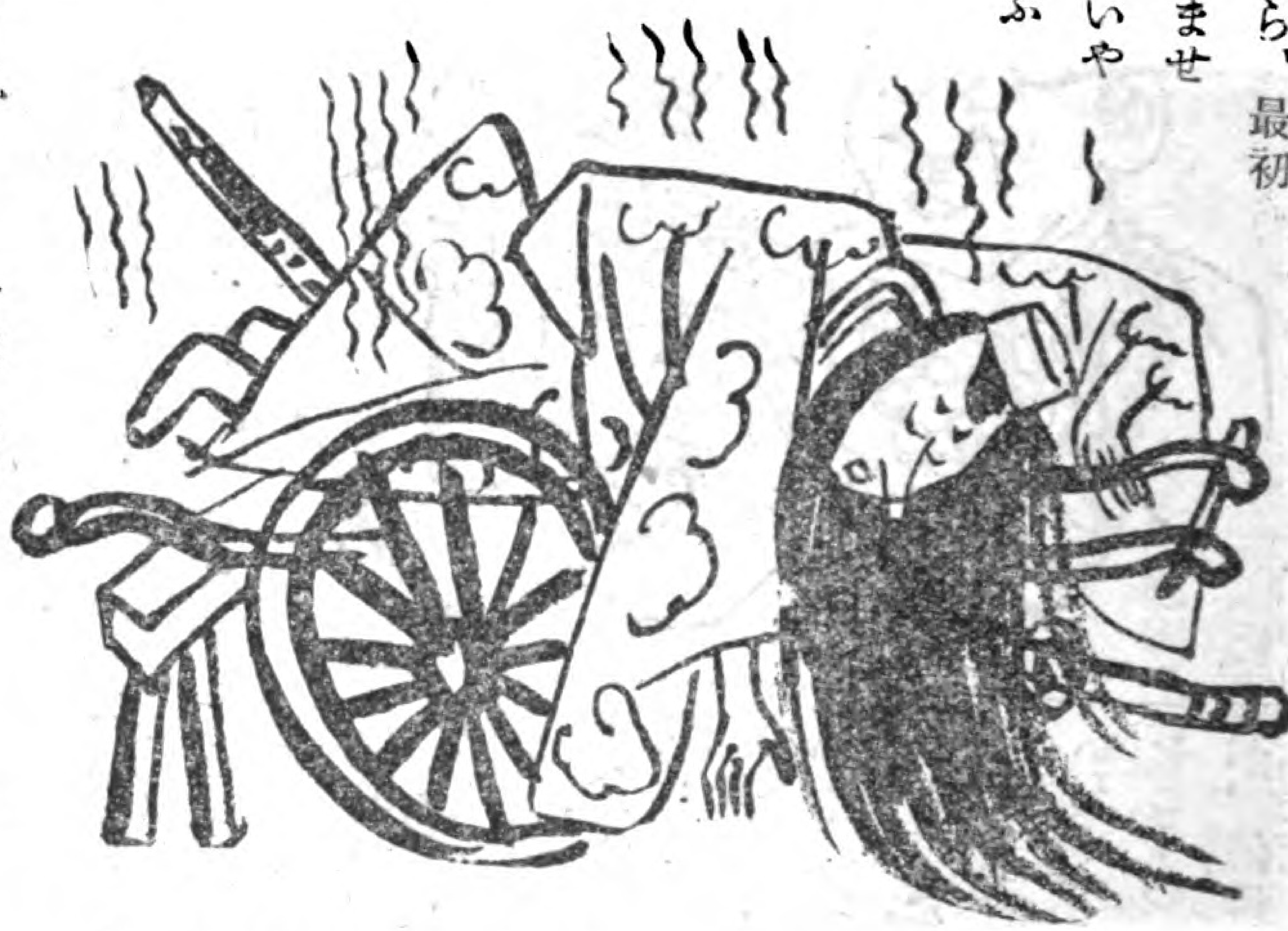
その牛車に代用する事となつた。そして當り前だと、空車を舞臺へ引出して、後に時平が車から現はれる條になつて、時平の役者が車の後へ出て來るのであるが、ボムプ車ではさういふ器用な事が出來ないから、最初から時平を車の上にしやがませて、其の姿が見物へ見えないやうに、ゴム引の合羽をかぶらして舞臺へ引出した。

何しろ氣温が百度以上といふ暑さだから、梅王も櫻丸も汗だくになつて、顏の白粉や隈どりの紅が溶けて流れるといふ始末である。

それでも場面は次第に進行して、松王と梅王櫻丸の三人兄弟が其の車を引合ふ立廻りになる。

『車の內ゆるぐと見えしが、みすも飾りも踏み破り、現はれ出でたる時平の大臣』

といふチョボになつたが、肝腎の時平は車の上にしやがんだまゝで立上らない、それは只さへ暑くるしい上に、先つきからゴム引の合羽をかぶらされたため、氣が遠くなつたのである。



チョボの淨瑠璃では、時平にさういふ故障が起つたと知らないから、

『金巾子の冠を著し、天子に變らぬその粧ひ、赫赫たる面色にて』

と語りつゞけたが、時平はやはりグタリとなつたきりで、無論セリフをいふ所ではない。忽ち舞臺に穴が明いたが、それでも杉王になつた役者が氣轉をきかして、時平のセリフを代つて言つたので、何うにか見物をごまかして、その一場を演じ了ることが出來た。

さて、幕が下りても時平は相變らず氣が遠くなつて居る、仕方がないから、其のボムプ車に乘せたまま樂屋へ連れて行つて、水を吹きかけたり、藥を飲ましたり、應急の手當をしたので、やつと正氣に歸つたといふ。

ボムプの車といふだけでも可笑しいのに、物々しく金冠に束帶の裝束で、顏に藍色の隈どりをした時平大臣が、その車の上にグタリとなつて居た姿を想像すると、今でも吹き出さずには居られない。



引込みのつかぬ『べつかんかう』

評論家　千葉龜雄

漢詩人として有名な宮崎來城氏。早大の講師もし、支那近代文學の知識が深かつた。一體が構はない、奇癖に富んだ豪傑でした。これは氏の實話。

或る日、相當な家庭を訪問したら、主人が客來で、暫時待つて居てもらひたいと、日本客間の方へ通されました。茶が出る。茶菓子が出る、しかし、主人が容易に現はれない。やつと襖が開いたと思つたら、ちよろちよろと現はれたのが、主人ではなかつた。五六歳の、いたづら盛りの男の子でした。一寸はにかんだ樣子でしたが、いきなりばらばらと驅け寄つて、出て居た菓子を一つ引つつかむや、いなや、鐵砲玉のやうに、襖をしめて、驅けて行つ



て了ひました。隨分行儀の惡い子だ。家庭教育がなつて居ないナと、漢學者だけに、心中では憤慨したが、それでも、そのまゝ默つてゐました。間もなく襖が開く。またちよろちよろと出て來たのが前の子供、また一つ摑んで飛び出しました。宮崎氏、すつかり癪に障りました。今度來たら脅かしてやらうといふので、右手の兩指を鼻穴へ突込んで上へ向け、左手の兩指で、兩瞼を下へ下げる、よくあるべつかんかうをして待ち構へてゐると、襖がするすると開きました。いざと意氣込んで身構をすると、どうでせう、それが男の子でなくて、主人なのです。主人は宮崎君が、氣が狂つたかと思つて、びつくりして立ち止まる。元來眞面目な宮崎氏の方が、今度は引つ込みがつかなくなりました。まさか御子さんを脅かす積りだつたと辯解するにも行かないし……眼へごみが入つたものですからなどと、しきりに顏をこすつたりして、やつとばつを合せて、その日は歸りましたが、何にしても苦しかつた相です。

『大概な事には閉口まんが、あれだけは弱つたヨ』と、豪傑が、失策話の一つとして白状するのでした。なるほどあの顏のべつかつかうでは、主人も、さぞ驚いたことでしたらう。

名をつけて貰つて出るや草相撲

洋畫家 中川一政



私達で俳句の會を作らうと話しあひ、木村荘八は貴塵、小杉未醒は放庵、木下杢太郎は桐下亭、吉田白嶺は木心、私は住所の名をとつて永福と皆、それ〴〵風流になりました。さてもう一人岡本一平はどうしよう。一平では風流ではないとの議が起りましたが本人は不參、皆でつけてやらうと云ふ事になりました。いろ〳〵考へたがまとまりません。すると貴塵が、『一亭とするか』

木心『平亭はどうだ』

一亭、平亭で皆が喧々囂々しました。すると一際、放庵が机を乗り出して『いつそ亭々とつけてしまはう』と他人の名だもので勝手にきめました。皆もそれに吹出してそれに決し貴塵が手紙を書きました。さうとは知らぬ一平は有難がり、

『名をつけてもらつて出るや草相撲』

といふ返事をよこしました。



露天風呂の喜劇

林學博士 ドクトル 本多靜六

若い時から旅行好きであつた自分は、今でもさうであるが、今から三十年前頃と云ふものは特に旅で日を送つたものである。

此の話も其の頃の事であるが、公用で鹿兒島高等農林學校演習林選定に同縣の高隈山へ行くことになつた。ところが途中に宿屋が無くて、縣廳の周旋で二ツ川と云ふ部落の一豪家に泊めて貰ふ事になつた。

東京からの珍客！偉いお方の御泊りだと云ふので、障子の貼替やら疊替やら下へも置かぬ鄭重な歡待ぶりである。風呂場も廐の隣にあるから失禮に當るだらうと、態々庭の片隅の露天

に風呂桶を据ゑつけて呉れた。



で、早速失禮して旅の汗を流しながら夕陽に映えた深緑の山々を眺めて露天風呂の風流さに獨り悦に入つてゐると、一天俄かに掻き曇つて、サツと一陣の風が吹くよと見る間に夕立雨が篠つくやうに降り出した。と、逸早くも番傘を二本抱へた此の家の娘——芳紀將に十七八歳、所謂、花も恥らふ美しい娘さんが風呂桶の側へ飛んで來て、一本は自分がさし、一本は僕にさしかけて呉れた。

濡れぬ先きこそ露をも厭へ——どうせ風呂につかつて居るのだから雨は些つとも厭ひません——と再三辭退したが、娘さんはいともつゝましやかに頷くのみで立去らうともしない。其のうちに心なしの竈の薪は次第に燃え盛り、湯は煮え立つて焦熱地獄のやうな苦しさである。堪りかねて立たうとしたが、其の頃の自分には、妙齢の娘さんを前にして裸體のまゝ立つ勇氣は無く、さればと云つて後向きになるのも變だし、立つに立たれず、湯は遠慮もなく沸つてくると云ふ有様、で、表面平氣を裝ひながらも秘かに神に祈つてゐると、それこそアーラ不思議、來る時と同じやうに雷雨はさつと行き過ぎて後はカラツと晴れわたつた。

そこで、娘さんは肅然と傘をつぼめて一禮して立ち去つた。同時に自分も立ち上つて風呂桶から出られた譯である。茹章魚のやうになりながらも、何も知らずに歸り行く純良な娘さんの後姿を眺めては流石に苦笑を禁じ得なかつた。



笑ひの『高等馬車』

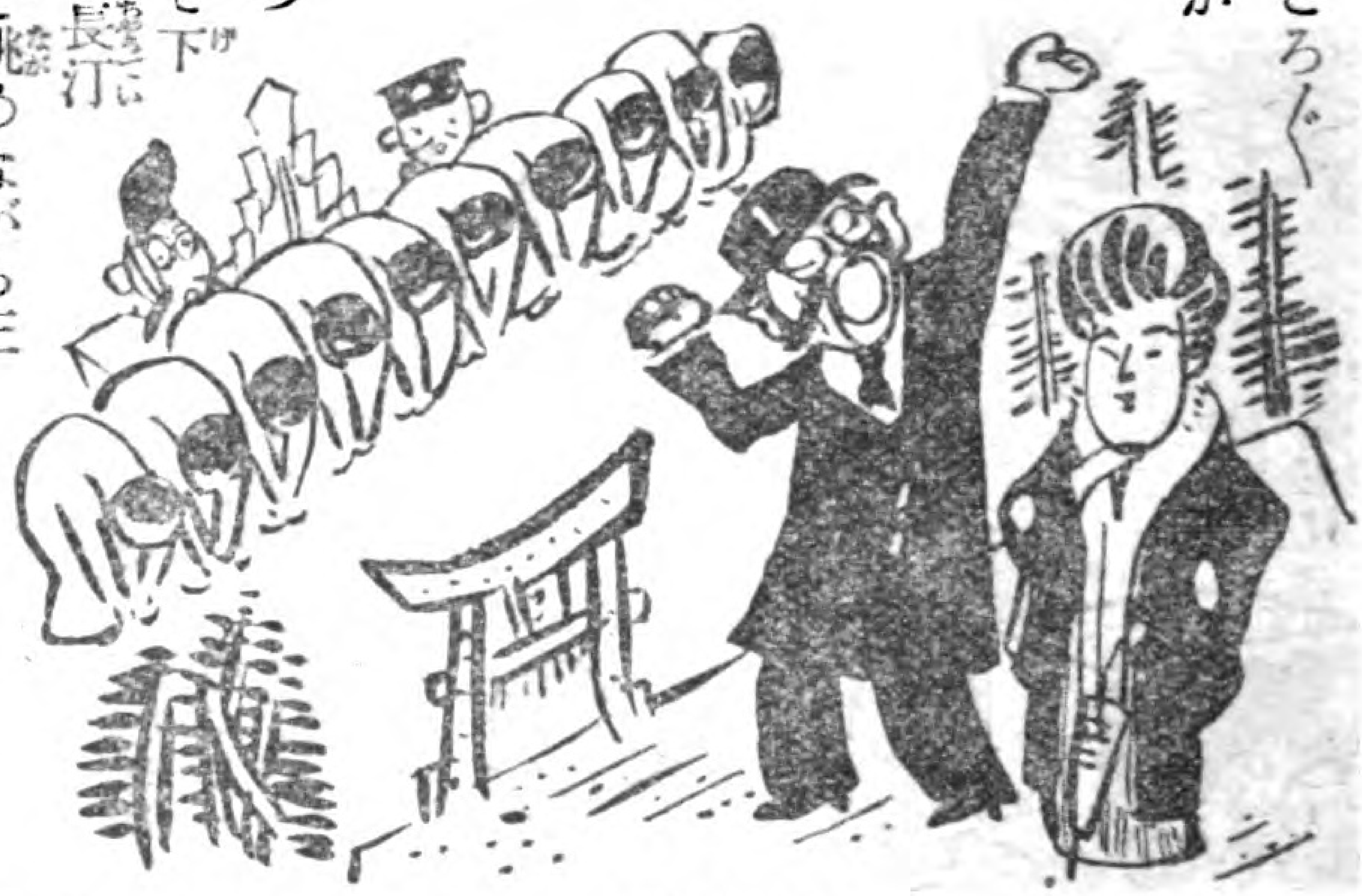
『東京日日』社會部長　小野賢一郎

その昔——左樣、十四五年も前のことです。靜岡に所用があつて山妻同伴いつたことがある。靜岡ではよく行

久能山にいつたことがないので、友人も案内しようといふし、『高等馬車』といふものに乘つてゆくことになつた。自動車時代はまだ來てゐなかつたので、二頭立の幌馬車が『高等馬車』で、一番いゝ乘物だつたのです。

久能の村に入ると、ところ〴〵巡査が立つてゐる、それが私共の馬車を見て擧手の禮をするのです。久能山の麓には棒杭のやうに巡査が立つてゐる、これがみんな馬車に敬禮をする——地方の警官といふものは叮嚀なものだなアとマアいゝ氣持でゐたのです。

あの電形の石段を登つて參拜し、寶物も拜見して下山、また高等馬車を驅つて長汀曲浦——いゝ氣持で景色を眺めながら三保の村に入り、更に淸水に出て朝陽館といふのに馬車をつけました。こゝでも驚いたことには女中も番頭も盛裝して出迎へてくれるのです。そして大きな間の、ぬく〳〵した座蒲團、煙草盆、威儀堂々たる室へ通さうとした、その刹那、ハツと氣がついた。(玄關の横にも巡査がゐたぢやないか)



『おい、ちがふ〳〵』と私は大聲を發して笑つたものです。女中も氣がついたのか、へら〳〵笑ひ乍ら外の室に通しました。

食事をしながら『誰と間ちがへたのか』とたづねますと『二荒伯爵と間ちがへました』といふわけです。

二荒伯は、靜岡縣理事官として赴任早々令夫人同伴『高等馬車』で久能山へ詣られ、そして午餐も、この朝陽館にきまつてゐたのださうです。私どもの一行が『高等馬車』であつたのと、一足早かつたため、到るところ二荒伯爵閣下と勘ちがひされたわけです。警官がドウして突立つてゐたかを考へると——令夫人は宮家の出でゐらつしやるからなので——私も山妻も恐々縮々してしまつた次第です。

それにしても久能山上でドウして間ちがへられなかつたか——

——といふ疑問が起つた。

『それは、あの石段を登り切つた時、あなたがア——アと大きなあくびをしたり腰をたゝいたりしたからでせう。華族樣はあんな無作法なことはなさいますまいから、神主も正體を見破つたのでせう』と、山妻の觀測でした。或は然らん——と思ひます。

二荒伯爵に、その後ちよい〳〵會ひましたが、いつも此の事が思ひ出されてをかしくなるのです。

さしゑ 宍戸左行



狂人と言はれる趣味が堂に入り（在ブラジル、久米仙）

ロンドンの聲を東京で立聞きし（千葉、春や）

貧困の中に輝く優等賞（下關、勝章）

洋裝の母さん抱つこして吳れず。（山梨、一勢）

紙芝居買つた兒だけは前に出し（巣鴨、武男）

吸入器母も一緒に口を開け（淺草、新駒家）

飴賣りへ大きい下駄でやつて來る（名古屋、笑山）

長靴を持つて新妻迎へに來（巣鴨、武男）



將軍も孫には弱い相手なり（山形、利雄）



娘達會ふと坂から賞めはじめ（山梨、呑天坊）



騎兵隊馬と別れにパンをやり（名古屋、小雀）



映寫幕危險なとこでアッと言ひ（淺草、敏子）



ベツカチが出來て父さん嬉しがり（靜岡、十四郎）





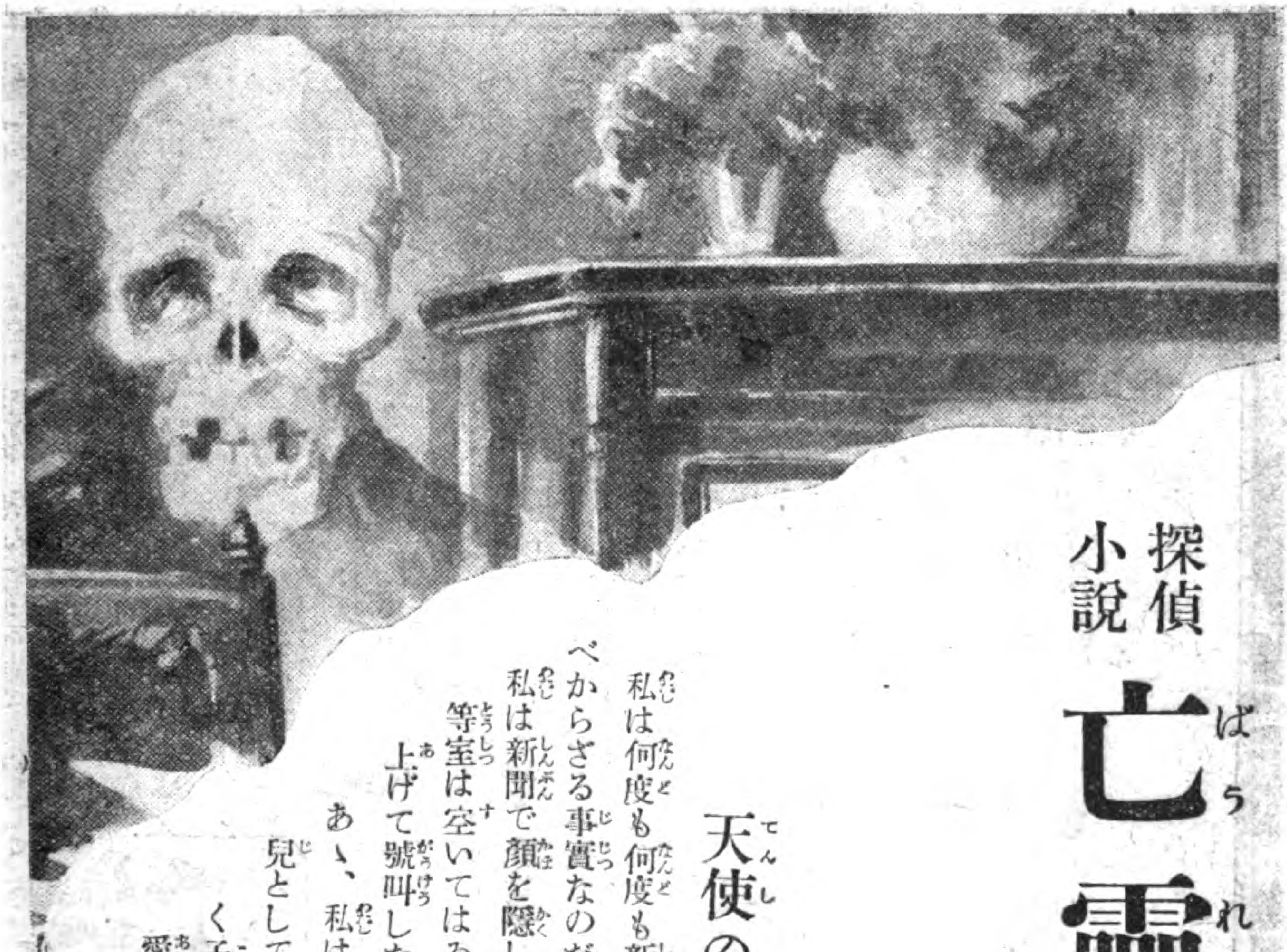
夫婦喧嘩猫悠々と喰つて逃げ（島根、とし訓）



撃劍は鼻の痒いを持てあまし（北見、義高）

川柳漫畫　素文

投句歡迎　宛名「キング川柳係」



探偵小說

亡靈の指紋

甲賀三郎
富田千秋畫

天使のやうな女

私は何度も何度も新聞を見直した。然し、夢でも何でもない、河原博士の死は動かすべからざる事實なのだ！

私は新聞で顏を隱しながら止度なくハラハラと涙を溢した。東海道線上り特急車の一等室は空いてはゐたが、チラホラと客はゐた。もし他に客がゐなかつたら私は聲を上げて號叫したに違ひない。

あゝ、私は何たる不幸な人間だらう。幼い時に兩親に別れて、全く天涯の孤兒として育つたが、大學で河原博士と知るやうになると、博士自身妻もなく子もなく淋しい生活をして居られた爲か、忽ち私を眞の子のやうに愛して呉れ、私も又眞の親のやうに懷しみ、三年間の大學の生活は同級生にも羨ましがられながら、いとも幸福に過去つた。大學を卒業すると私は博士の援助に依つて直ちに獨逸に留學し



た。獨逸の大學で有機化學を三年間研究して、學位を受けると共に研究所に止ること四年、前後七年の外國留學を卒へると、直ちに故鄕に錦を飾るべく歸朝を急いだのだつたが、師とも仰ぎ父とも賴む博士は私の神戸上陸の前二日に忽焉として長逝せられたのだ！　博士なくして何の錦をどこの誰に飾るべき。特急車に乘り込むと直ぐに買ひ求めた新聞に、河原博士の死の報道を發見した時に、私は全く一時失神狀態になつた事を、讀者諸君は決して怪しみはしないだらう。

博士の死は全く突然だつた。私はマルセーユ出發の少し前に博士から元氣な手紙を貰つてゐる。滯歐中も博士から度々懷しい手紙を貰つたが、元來博士は理學部の敎授で化學專攻の世界的學者なのだが、最近に法醫學に非常に興味を持ち初められたやうで、殊に血液による親子の鑑定から、終に進んで指紋による親子鑑定に力を注いで居られたが、今云ふ最後に受取つた手紙にはいよ〳〵指紋による方法が完成

した事が嬉しさうに書いてあつた。私は手紙を讀みながら、博士の元氣なニコ〳〵顏が眼の前に浮ぶやうだつたが、その博士は私が七年振りで歸朝するのを待たないで、原因不明の病氣で四五日寢られたかと思ふと、忽ち眠るが如く死んで終はれたのである。

私は泣いても泣いても泣き切れなかつた。東京驛に着くまでの長い時間も、私は一杯の水も呑まないで泣き續けてゐた。東京驛で降りると私は夢中で麴町の博士邸にタキシを走らせた。私には友人がない譯ではなかつたが、東京驛に着く時間を知らせてもなかつたし、迎へて吳れるものは誰もなかつた。

外はシト〳〵と春雨が降つてゐた。自動車のヘッドライトに細い雨足が濠端の柳に斜に煙るのが美しく照らし出された。然し七年振りに見る懷しい故國の情景も、今の私には何の感興も惹かなかつた。

麴町の博士の家はひつそりとしてゐた。

私の訪ふ聲に現はれたのは一人の老女だつた。この老女は博士に長く仕へてゐた忠實な下女で私を能く見覺えてゐた。彼女は私の姿を見るともう涙聲だつた。

『三日遲うございました。先生は飛んだ事で――』

彼女は直ぐ私を博士の寢室に通した。新聞に報じてあつた通り、今朝告別式を濟ませて、そのまゝ火葬場に送つたので、私は遺骸にさへ接する事が出來なかつた。私は博士が臨終の寢室の前に跪づいて心からの默禱を捧げた。

『先生はな、死ぬ時まであなたの事ばかり云つて居られましたぞ。』

老女の言葉に私の眼には新たな涙が湧き出てた。博士に會つたらあゝも云はうかうも云はうと心に期してゐた事は盡く徒らになつた。私は茫然として立上ると、ありし日の博士の俤を少しでも偲ばうと部屋の中を步き廻つた。

『餘り急だつたのでな、遺言も遺書も何にもありませんでしたわな。』

老女は咽び泣きながら云ひ續けた。私は胸が張り裂けさうで、之以上老女の哀愁に充ちた聲を聞くに忍びなかつた。私は耳を蔽ふやうにして、部屋を無茶苦茶に步き廻るばかりだつた。

そのうちに私はふと寢臺の枕頭にある小さい卓子の上に書簡箋が置かれてゐるのに氣がついた。私は何氣なしにそれを開いて見た。無論、そこには眞白なレターペーパーがあるだけだつた。豫期した事とは云ひながら落膽して、パタリと元の通り閉ぢようとしたが、その時に、一番上の紙に薄い線の痕のあるのを發見した。それは多分上の紙に鉛筆のやうなもので强く押へつけて書いた後に、その痕が下の紙に薄くついたものであつた。さう思つて見ると、上の紙は非常に急いで引き裂られたも

のらしく、完全に取り去られないで、上の方が僅かばかり縦の
切口を示しながら殘つてゐた。

私はその痕のついたレターペーパーを引き裂つて、苦心して讀んで見た。それは獨逸語らしく、その上に非常に亂雜な崩し文字で、而も途切れ途切れに續いてゐる微かな痕なので、ひどく讀み惡くかつたが、漸くにして讀み得たのは次の數語だつた。

『余ハ毒殺セ――』

私はハツと顏色を變へた。さうして幾度も幾度も讀み直して見た。然し、どうしてもさう云ふ風に讀まれるのだつた。

私の頭はすつかり混亂した。私は急いで老女に詰問するやうに訊いたが、それは變にかすれて恰で他人の聲のやうに聞えるのだつた。

『せ、先生はどう云ふ病氣で死なれたのかね。』

『それがはつきり分らないのです。』老女は私の異樣な劍幕に呑まれて、おろ／＼しながら『心臟痲痺と云ふ事ぢやわな。』

『醫者は？ 先生を診た醫者は何と云ふ人？』

『高宮さんと云つてな。有名な博士さまですわな。』

『そ、その醫者の宅はどこだ。僕は直ぐそこへ行く。』

『つい近所ですが。』

老女は何の事か譯が分らないので呆れながら、『ぢやが、先生の御病氣の事なら、看護婦の藤井さんが知つてゐるから、お聞き
になつたらどうぢやな。』

『なに、看護婦？』

『えゝ、お葬式も濟みましたけれど、この家の始末がつくまで、私一人では餘り淋しいので、藤井さんにゐて貰つてゐますのぢや。』

『直ぐ、直ぐ、その看護婦を呼んで下さい。』

私は一刻も早く博士の死際の樣子が聞きたかつたので、老女を叱りつけるやうに叫んだ。

老女は面喰つたやうに部屋を出て行つたが、やがて看護婦を伴つて這入つて來た。

私は一眼看護婦を見た時に、思はず口のうちでおゝと感嘆の言葉を發した。

純白の看護服をつけた彼女の神々しい美しさ。もし私が文人ならきつとあらゆる佳麗な句を並べて私自身が恍惚としたやうに讀者諸君をも恍惚とさせる事が出來たらう。然し、私は一介の化學者だ。そんな器用な事は出來ない。それに今はそんな悠長な言葉を弄してゐる時ではない。私は簡短にさうして月並に云ふ他はない。彼女は恰で天使のやうな女だつた！ 恥かしながら、私は一眼彼女を見た時から、すつかり魅せられて終つたのである。

亡靈の指紋

餘りの美しさに驚嘆して茫然としてゐる暇に、看護婦は淑やかに私の前に出た。

『草間先生でいらつしやいますか。河原先生の御病中度度お噂さを伺つて居りました。』

『あ、あなたがずつと先生を看護して下つたのですね。』

漸く我に返つた私は途切れ途切れに云つた。

『はい。御發病後直ぐ參りまして四五日御看護いたしました。けれども、たうとう――』

『病名は分らなかつたのですか。』

『はい。高宮先生の御診斷では病源不明の熱性疾患と云ふ事でございました。發病の原因も傳染の經路も全然分らないさうでございます。發病後間もなく意識不良となられまして、五日目に突然眠るやうに死なられました。』

『看護してゐたのはあなた一人でしたか。』

『はい。私が主で婆やさんに手傳つて頂きました。』

『この部屋には、あなたと婆や以外に、どんな人が出入しましたか。』

『御見舞の方々が來られました。――あの何か御不審の事が――』



私の樣子の只ならぬに氣づいた看護婦は探るやうに私を見つめた。私はあわてゝ云つた。

『いゝえ、別に何にも――ちよつと參考までに伺ひたいのだが、見舞にはどんな方が來られましたかね。』

『大學の先生方や、御弟子さんの若い方や、學生さんなどです。』

『その他には？』

『さあ、その他には、』看護婦は首を傾けながら、『學校以外の方はあまりお見受け致しませんでした、まあ家主さん位でせうか。』

『家主？　家主は誰ですか。』

『北垣さんと云ふ人ですけれども。その方の事は婆やさんの方が能く御存じです。』

看護婦はさう答へて老女の方を振り向いた。



婆やの語る所に依ると、北垣と云ふのはこの界隈の地所と家作とを所有してゐる大金持だつた。

北垣が博士邸に繁々と出入するやうになつたのは、單に家主だつたと云ふわけではなく、それにはちよつと變つた譯があつた。と云ふのは一年ばかり前から博士の住んでゐる家について奇怪な噂さが立つたのだつた。博士の住んでゐた家は、元は北垣の先代が住んでゐたので、廣々とした庭があり、二階建の中中大きい家で、小人數の博士はホンのその一部しか使つてゐす、大部分は空いてゐて晝間でも雨戸が締め切りだつた。庭は今云ふ通り市内とは思へないほどの廣さで、鬱蒼と木が茂つて晝間でも小暗く狸が住んでゐると云ふ位だつたから、邸内は何となく陰氣で、從つてそんな噂も出たのであらうが、誰云ふとなく博士邸に幽靈が出ると云ひ出した。

博士邸に出ると云ふ幽靈は北垣の先代の亡靈だつた。非常な

守錢奴だつた先代は邸内のどこかに多額の財寶を隱してゐるらしく、その爲に死んでも死に切れず、亡靈が邸の中を歩き廻るのだと云ふ事だつた。

『わしは氣味が悪うてな。先生にこんな陰氣臭い家は早く宿替へするやうに云ひましたのぢやが、先生は笑つて受つけられませんのでな。』

老女の云ふ通り、科學者である博士は幽靈の噂さなどは一笑に附して居られたのだつたが、最近には頻々として怪しい事が起り、盗人に襲はれた事が二回ばかり、邸内を怪しい姿の者が深夜歩き廻つてゐた事が數回あつたと云ふ事だつた。

『わしは恐うてな、足があつたかなかつたか知りませんが、確かにあれは幽靈ぢや。夜中にな、憚りに行くと、窓の前を人の姿をしたものが、すうと音もなく通り過ぎるのぢや。終ひにはな、家の中でも會ひましたがな。わしはガタ〳〵顫へながら誰ぢやと云ふと、すうと壁の中に消えて終うたのぢや。』

幽靈の噂が立ち始めると、家主の北垣は非常にそれを氣にして、それから再々博士邸を訪れるやうになつた。北垣の意見では博士邸を襲うた盗人は、邸内のどこかに先代が隱して置いた寶があると云ふ事を聞いて、それを探しに來たものであらうと云ふ事だつた。(と云ふのはその盗人は二回とも博士の金品には少しも手をつけず、邸内の博士の少しも使用してゐない空いた部屋を荒して行つたからである)

以上の老女の話で私は河原博士の死が尋常の死でない事を直感した。然し、主治醫は自然死と認めて居るし、警察でも何等の疑ひを抱いてゐず、且つ遺骸が既に荼毘に附せられてゐるのであるから、果して博士の手蹟かどうか確かでない曖昧な獨逸字の、而も鉛筆で押しつけた痕に過ぎないものを證據に、輕々に他殺呼ばはりをする事は出來ない。確たる證據が上るまでは私の胸一つに疊んで置くべきであると考へたから、看護婦にも老婆にもそれ以上の事を聞かうとはしなかつた。然し、博士の研究の事について、もう少し委しく調べて置きたいと思つたから、婆やに博士の書齋へ案内させた。

博士は以前から研究書類は金庫に收めてゐた。金庫と云つても、元より研究書類など盗んで見た所で、金になる譯のものではないから、博士の恐れたのは盗難よりも火災で、それ故、金庫は外國製の絶對防火性のもので、鍵は別に文字盤などはなく、一風變つた鍵で容易に開くやうになつてゐたのである。

私は老女が保管してゐる鍵を借りて、金庫の一つを開けて見た。(金庫は抽斗式で三つ縱に並んでゐた)研究の結果はすべて獨逸語で書かれてゐた。私は最初はホンの鳥渡調べて見る積りだつたが、一行二行と讀んで行くに連れて、つい引き入れられて傍に婆やが立つてゐるのも忘れて、思はず讀み耽つて終つ

た。論文は指紋による親子鑑別法の草稿だつたが、實に興味津津たるもので、讀んでゐるうちに博士に質問したいやうな點が多々あつた。その度にふと博士はもうこの世にはゐられないのだと思ふと、私は何とも云へない淋しさに襲はれた。私はそれを振拂ふやうにしては先を讀み耽つた。

親子鑑別法を大體讀み終つて、私は又別の研究書類を取り上げたが、その表題を見ると、私はおやと聲を上げた。と云ふのは、表紙にやはり獨逸語で「亡靈の指紋」と書かれてゐたのだつた。

私は表題が奇拔なのと、先刻の老女の話とを思ひ合せて、好奇の心に驅られながら急いで頁を繰つた。その大略は次のやうだつた。

『余の邸内に亡靈が徘徊すると云ふ事は、世上の噂さにも昇り、且つ老女中もそれを見たと云つて非常に氣味惡がり、余に度々移轉を勸めた。余は然し、老女中の言を一笑に附してゐたが、余自身も亦亡靈の存在を認めざるを得なかつた。

余が最初に亡靈を認めたのは、深夜便所に起きた時に、平生使用しない部屋に當つて、微かな物音を聞いたので、急いでその方に行くと、人の形をした黒い影がすうつと壁の中に消えて行つた。余は直ぐに壁の傍によつて驗して見たが、壁には何等異狀を認めなかつた。

次に實見したのは、矢張り深夜に余の書齋内に於てゞあつた。余は深夜ふと目覺めた時に、研究上に好箇のヒントを得たので、忘れないうちに書き記して置かうと書齋に行つたのだつたが、その時に書齋内から黒い人の形をした影が、すつと余の前を掠めて行つた。

余は別に誰何せずにぢつとその人影の行手を見守つた。彼はどことなく消えて行つた。然し、余はこの時に亡靈に確かに足がある事を發見した。彼は靈でなくて、恐らく人そのものであらうと考へられた。この考へは書齋に這入るに及んで一層確かめられた。と云ふのは書齋内は明かに搔き廻された形痕があり、更に綿密に觀察すると、机の一部と、研究書類が入れてある金庫の一部に見馴れざる指紋がついてゐるのを發見した。余は直ちに指紋を寫眞に收めたが、その指紋を見るに及んで一驚を喫した。即ち深夜余の邸内を徘徊するものは亡靈に非ざるまでも、少くとも通常の人間ではないのである。その理由の一つは彼がいづこより邸内に忍入り、いづこより消え去るか、その經路が全然不明なる事、その二は彼の異常なる指紋である。

余は指紋による親子鑑別法の研究の爲に、從來幾十萬の指紋を檢閲した。然し、未だ嘗て亡靈の殘せし如き異常なる指紋を見た事はない。亡靈の殘せし指紋は右手であるが、寫眞の示す如く、拇指紋が異狀に大きく、正に普通人の二倍以上ある。

然し、その波紋の鮮明なる點よりして、猿或ひはそれ以下の動物の指紋では絶對にない。正しく人類のそれであるが、深夜いづくともなく出て來て徘徊する點と云ひ、この異常なる指紋を有する點と云ひ、彼は少くとも世上に流布する如く、北垣某の亡靈に非さるまでも、普通人とも餘程毛色の變つたものである。故に余はこの指紋を假りに亡靈の指紋と名づけて、研究しようと思ふ。』

河原博士が明細書きに記した結論を讀んで、附圖の指紋寫眞を見た時に、私はぞつとして水を浴せられたやうに總毛立つた。寫眞にはありありと巨大な圓味を帶びた亡靈の右の拇指紋が寫つてゐた。こんな巨大な拇指を持つた人間が果して人類のうちにあるであらうか。

博士がこの拇指紋を發見したのは極く最近の事らしく、その後亡靈の徘徊がなかつたか、又は拇指紋を發見しなかつたと見えて、その先にはその後に思ひついた二三の簡短な事が書いてあるのみで、白紙のまゝ殘つてゐた。

何と云ふ奇怪に充ちた事であらう。私は博士の研究書類を金庫に收めて、錠を下すとホッとして立上つた。老女中は私が餘り熱心に研究書類に讀み耽つてゐた爲に、待ち切れなくなつたと見えて、あたりにはゐなかつた。私は一種異樣な鬼氣に打たれながら部屋を見廻した。今にもどこかの隅から非人間の奇怪な亡靈が現はれはしないかと思はれるのだつた。然し、私は怯む心を勵まして、博士の愛弟子として、又一科學者として、博士の死を廻る奇怪な事件を、必ず解決して見せると決心した。

その途端に書齋の扉が開いて、老女が音もなくすつと這入つて來た。

『北垣さんが見えまして、先生とさう云ふ深い關係の方がお見えになつてゐるのなら、是非お目にかゝりたいと申して居られます。』

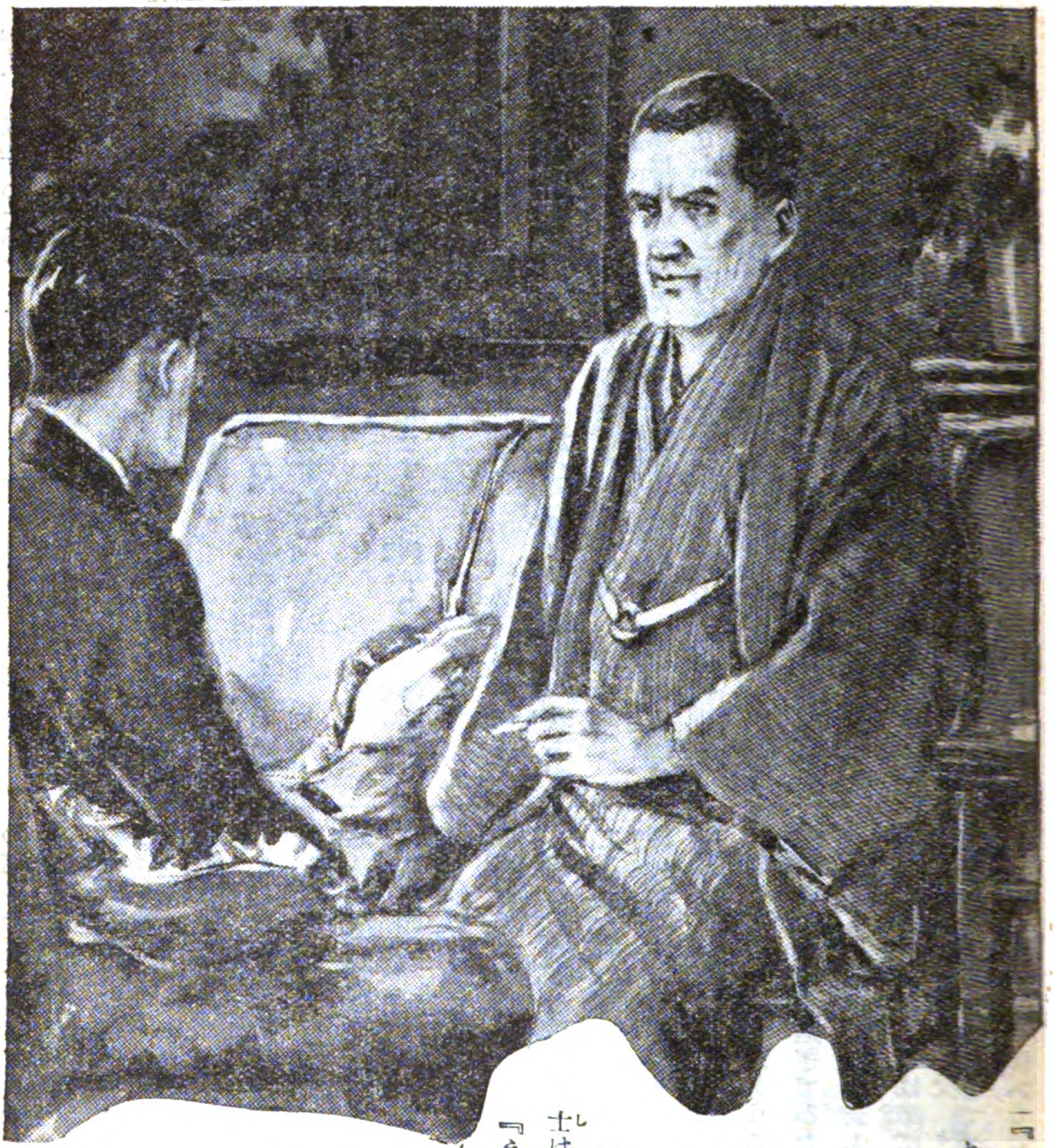
私は時計を出して見た。もう十時を少し過ぎてゐる。初對面には遲い時間だと思つたが、場合が場合だし、北垣に會へば博士の死について何か得る所があると考へて、老女に命じて書齋に連れて來させた。

蛇に嚙まれた男

北垣と云ふ男は四十を少し越した年輩だが年の割には衰へてゐるやうに、額には深い皺があり身體は瘦せて骨ばつてゐた。

初對面の挨拶が濟んで、互に博士の死を悼み、病氣の模樣などについて一通り話が終ると、私は訊いた。

『この家に幽靈が出ると云ふではありませんか。』



『へ、、、もうそんな事がお耳に這入りましたか。』

北垣は肩を搖つて苦笑ひをした。この時に私は始めて氣がついたが、彼の右手は義手だつた。

『どうも詰らない噂さが立つて困つてゐます。親父の亡靈が出ると云ふのでしてな。』

『然し、その亡靈と云ふのは死んだ博士は見られたらしいのですよ。』

『えゝツ、博士が！　然し、博士は私にはそんな事は一言も仰有いませんでしたが。』

『さうでしたか。實は私は博士の研究論文をちよつと調べて見たのですが、その中に亡靈の指紋――』

と云ひかけて私ははつと後悔した。迂濶に秘密を明かす事は出來ない。私は後をどう云はうかと迷つてゐると、幸ひに北垣にはよく分らなかつたらしく、

『え、何ですつて。』

と問ひ返したので、私は後を胡麻化して終つた。

『指紋の研究の中にちよつと亡靈の事が書いてありましたよ。』

『指紋の研究の中にね。』北垣は何か他の事を考へてゐるらしく、私の云つた事を繰り返へしながら、

『さう云へば博士の指紋の研究ですね、親子の鑑別をするとか云ふ、それはもう完成してゐるのですか。』

『えゝ、完成してゐるやうです。』

『さうすると、それが發表になりますと、親子の眞の鑑別が出來ますか。』

『えゝ、出來ます。』

『誰にでも出來ますか。別に亡くなつた博士に限ると云ふやうな――』

『そんな事はありません。そこが學問ですから、出來ると極まれば誰にでも出來ます。』

『さうですか。それを聞いて安心しました。私は又博士が亡くなれば折角の研究も駄目になりはしないかと心配してゐました。それでは早速發表して世を益する事ですね。』

『さうですか。私も博士の遺志を繼いで早速發表したいと思つてゐますよ。』

指紋の話が一通り濟むと、私は先刻から氣になつてゐた北垣の義手の事を訊いて見た。北垣は例の如く苦笑ひしながら、

『私は若い頃親父と仲違ひをしましてね、餘り親父の云ふ事が癪に障つたものですから、日本にばかり日が照るものかと、血氣に委せて、シンガポールを振り出しに、印度から南洋方面に漂浪しました。その時に右手を毒蛇に食ひつかれましてね、傍にゐた友達が直ぐ持つてゐた鉈で右手を根元から切つて呉れたのです。こんな事を初めてお聞きになると、亂暴な話だとお思ひになるでせうが、もしその時に友人が右手を切り落して呉れなければ、私は忽ち生命を落したのですから、友人が全く私の生命を救つて呉れたのですよ。私にして見れば生命の代りに右腕を失つた譯なんです。ハヽヽヽ。』

何と云ふ怖ろしい話だらう。いかに生命を救ふ爲でも、生きてゐる人間の右腕を根元から落すなんて、全く氣の弱いものは聞いただけでもぞつとする話だ。

『どうもお疲れの所をお邪魔いたしました。』

暫くすると北垣はかう云つて歸つて行つた。私は時計を見たが既に十一時を過ぎてゐた。

私は鳥渡困つた。と云ふのは私は神戸に上陸するまで博士が死んでゐるようなどとは夢にも考へなかつたから、無論父のやうに仰いでゐる博士の家で泊めて貰ふつもりだつた。汽車の中では博士の死を嘆くばかりで、東京驛に着くと直ぐにかうしてこ

こへ駆けつけたのだから、術の事に考へる暇はなかつた。無論今からでも術は取れない事はなかつたけれども、こんなに遅く始めての所へ行くのは嫌だし、それに婆やが淋しいので是非泊つて行つて呉れと喧ましく云ふし、私はこゝへ泊る事にした。婆やは早速座敷の一間に床を延べて呉れた。私は寝衣に着替へて、さて悠り一服しようと脱ぎ棄てた洋服のポケットを探つたが、どうしたのかそこにある筈の銀製の紙巻煙草入が見當らなかつた。或はどこかに置き忘れたのかも知れないとそこいらを探して見たがどうしても見當らなかつた。婆やがどこかへ片づけて呉れたのだらうと思つたが、彼女はもう部屋に退つたので、呼ぶのは氣の毒だと思つたので、明日の事にして煙草を吸ふのは斷念して、床の中に潜り込んだ。

深夜の怪事

どれ位寝たのか能く分らない。始めのうちは中々寝つかなくて床の中で輾々として、博士の死の事や、美しい看護婦、亡靈の徘徊、奇怪な指紋の事など、それからそれへと考へに耽つてゐたが、いつとはなしに眠つたと見える。兎に角、はつと眼の覺めた時には未だ夜中で四邊は眞暗だつた。

眼の覺めた私は變に胸騒ぎがして心臓がドキ〳〵してゐた。何だか奇妙な物音がしたと思つたのだつたが、それが夢の中だつたか能く分らなかつたのだ。私は大きく眼を見開いて暗い中をキヨロ〳〵見廻したが、途端に書齋の方に當つて、微かな物音がした。

私はガバと跳起きた。さうして寝衣の衣紋を合して帯を締めながら、耳をぢつと澄して、そろ〳〵と書齋の方に近づいて行つた。

書齋からは薄ボンヤリと燈火が差してゐた。私は總身の血が逆流したやうに感じた。膝頭がブル〳〵顫へ出した。

燈火がついてゐる所を見ると、確かに人がゐるらしく、話に聞いた亡靈ではないらしい。家の者がゐるのでなければ、確かに盗人が這入つたのだ。私は一生懸命に氣を勵まして、書齋に近づいて外側の壁にピッタリ身を忍ばせながら、半開きになつてゐる扉からそつと中を覗き込んだ。

私は思はずアッと叫ぶ所を漸くにして聲を呑み込んだ。

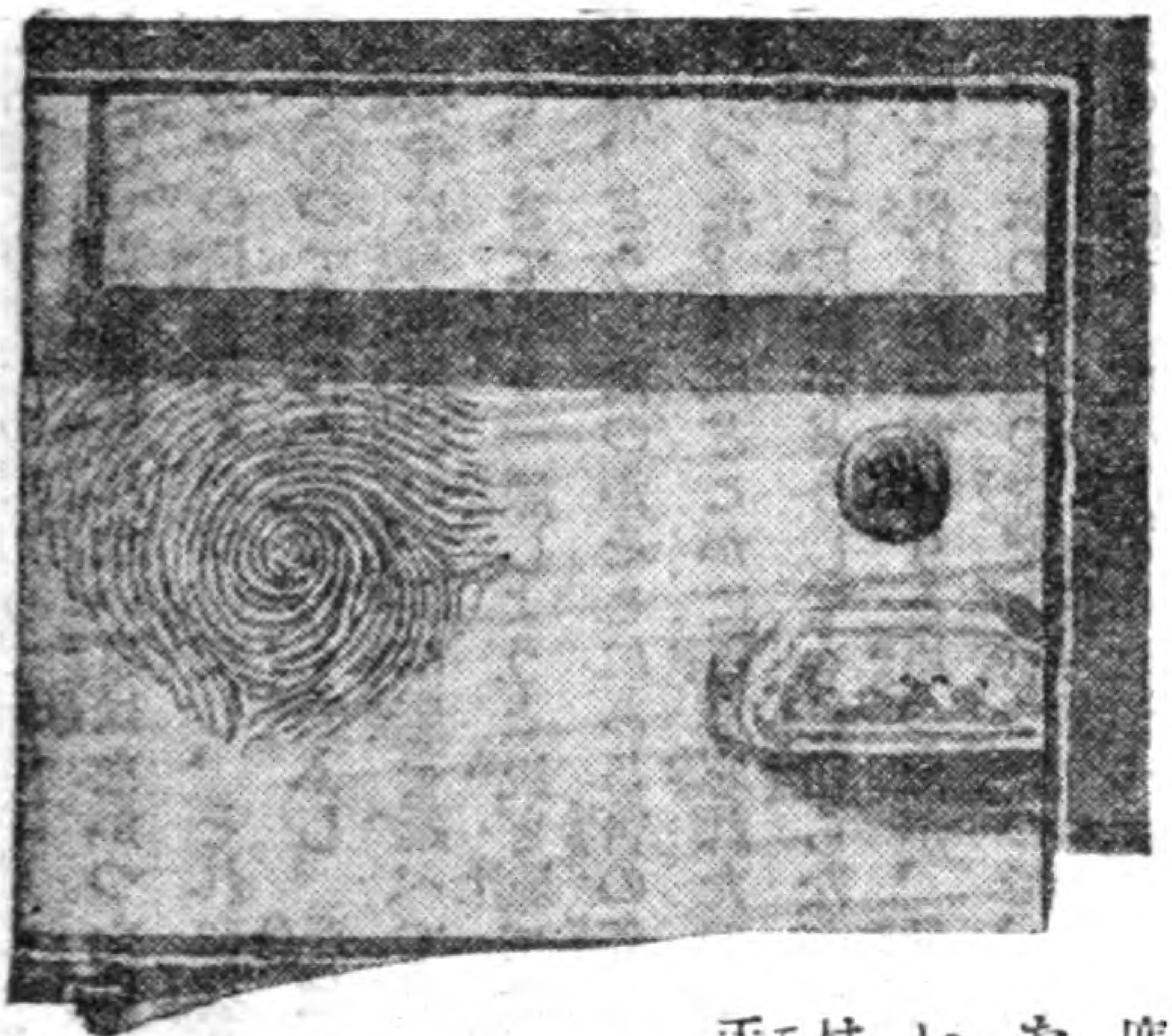
中には一人の人間が——それは女だつた。而もそれがこの家の老女中である事がやがて分つて來たが、なんと、彼女は後手に縛られた上に、眼隠しをされて猿轡まで嵌めて押し轉がされてゐるのだ！　さうして轉がされてゐる彼女の前に、一人の女が脊中を見せながら跪いて頻りに何か探してゐるのだ。

私は四肢を硬ばらして息もしないで見詰めてゐたが、そのうちに跪いてゐた女は床の上で何か探し當てたと見えて、そつ

と立上つた。その時にチラリと女の後姿が見えたが、アッ、なんとその女はあの天使のやうに美しい看護婦だつた！

彼女は無論看護婦の服を着てゐなかつた。と云つて寢衣姿でもなかつた。キチンと帶を結んでゐた。私は驚き怪しみながら部屋を見廻したが、縛られてゐる老女と、看護婦の他には誰もゐなかつた。

何と云ふ奇怪な事だらう。あの蟲も殺さないやうな若い美人が、深夜に老女を後手に縛り上げて、部屋の中で何か探し求めてゐるとは。私にはどうしてもこの事が信ぜられなかつた。何度となく眼を擦つて見たが、確かに夢ではない。では、あの看護婦は何者だらう。盜人の手先なのだらうか。



相手が女一人と見た爲だらうか、私はだん〳〵勇氣づいて來た。私は兎に角隱れ場所から飛出して、彼女を咎めようとした。私は屈めてゐた腰を延ばして部屋の中へ一歩踏み入れようとしたが、その途端に私の背後から何者かゞ飛かゝつて、私の頭を嫌と云ふほど撲りつけた。さうして恥かしながら私はそのまゝ、そこへ氣を失つて斃れて終つたのだつた。

それからどれ位時間が立つたか分らない。私はふと我に返つた。あたりが依然として暗かつた所から見ると、氣を失つてゐたのはホンの僅かな間だつたらしい。正氣に返つて見ると、私は書齋の入口の所で倒れてゐた。部屋の中では老女中が相變らず縛られたまゝ轉がつてゐた。怪しい看護婦の姿はもう見えなかつた。

私は急いで婆やの傍に寄つて、眼隱しを取つて、猿轡を外し、繩を解いてやつた。

婆やは暫くの間キョト〳〵として恐ろしさうにあたりを見廻しながら容易に聲が出なかつた。

やがて彼女はポツリ〳〵と語り出したが、彼女の云ふ所によると、夜中にふと眼を覺ますと、書齋の方で物音がするので、直ぐ私を起さうと思つたが、疲れてゐる所を氣の毒だと思つて、一人で起きて恐々そつと書齋に來て、電燈をつけて見た所が、格別變つた事がなかつたので、氣の所爲だつたか、それとも鼠でも騷いだのだと思つて、そのまゝ引返へさうとすると、やにはに背後から飛かゝつた者があつて、アッと聲を立てる暇



もなく、猿轡を嵌められ、眼隱しをされ、後手に縛られたのだつた。

『縛られてゐる間恐くて恐くて、生きた空はありませんでしたわな。』

老女は未だガタガタと顫へてゐた。

『そ、その背後から飛かゝつたのは男だつたかね、それとも――』

私は言葉を濁して老女の顏を見守つた。

『無論男ぢや。顏は見なかつたが、力と云ひ腕つきと云ひ男に違ひないわな。』

老女の返辭に私はホッとした。私はあの可憐な看護婦がそんな大それた事をする女でないのを心から祈つてゐたのだつた。

然し、私はその時に直ぐ私の背後から飛かかつた男の事を思ひ出した。婆やを縛つたのも大方その男であらう。して見ると、あの藤井と云ふ看護婦は確かに惡漢の手先だ！

老女が縛り上げられてから私がこゝへ來るまでにどの位時間があつたのだらうか。私は始めて思ひついたやうに書齋の中を見廻したが、あッ、なんと、書類の入れてある金庫が開いてゐるではないか。私は吃驚して傍へ驅け寄つたが、中の研究書類はすつかり失くなつてゐた！

今夜忍び込んだ賊は疑ひもなく研究書類を盜みに來たのだ。始めは錠を壞して開ける積だつたらしいが、恰度老婆が這入つて來たので、机の下にでも隱れてゐて樣子を覗つて、老婆が何事もないので安心して行かうとする油斷を見濟して、背後から飛かゝつて自由を奪ひ、彼女が身體につけてゐた鍵を取つたの

に違ひない。

だが、博士の研究書類を盗んで何になるのだらう。研究書類を盗む者はその價値を知つてゐるものでなくてはならない。とすると、博士の名聲を妬む卑怯な學者か、それとも博士の研究を自分のものにしようとする憎むべき學徒の仕業に違ひない。さうすると、あの看護婦はさう云ふ卑怯な學者の手先なのだ。もつと立入つて考へると、博士を殺したのも矢張り研究書類を盗み出さうとする一味の者かも知れない。看護婦が共謀すれば、どんな事でも出來るではないか。

けれども、私にはどうしてもあの子供のやうに純眞な、本當に天使のやうな顔をしてゐる彼女が、そんな大それた事をするとは考へられなかつた。いや、考へたくはなかつた。彼女が惡人なんて、どんな事をしたつて考へられない。いや、考へたくはない。然し、私は現在彼女がこの部屋で何か探し求めてゐるのを見たではないか。

『藤井さんはどうしてゐるでせう。』

漸く氣がついたらしい婆やは、不安さうに云つた。

『藤井さんは何にも知らないで寢てゐるんだらう。』私はあわてて嘘を云つた。

『いゝえ、藤井さんは眼慧いからきつと氣がついてゐるわな。いつもちよつと物音がしてもきつと飛んで來て呉れます。今にこゝへ來ない所を見ると、惡ものにひどい眼に合はされてゐるのではないぢやらうか。』

『なあに、そんな氣遣ひはないよ。きつと寢てゐるんだ。起した所で仕方はないし、起すのも氣の毒だから拋つて置いたが好い。それはさうとして、婆やはどれ位こゝに縛られてゐたかね。』

『さあ、五時間も十時間も縛られてゐたやうな氣持ですが、大方三十分か、それとも一時間位ぢやらうかな。』

『惡い奴は一人だつたかい。』

『さあ、それもはつきり分りません。飛かゝつたのは確に一人ぢやつたが、その他にもう一人ゐたやうでもあり、ゐないやうでもあり、能く分りません。』

老婆には看護婦のゐた事は全然分らないらしく、藤井を少しも疑つてゐる様子もないので私は稍安心した。

『別に怪我もなかつたやうだし、格別失くなつたものもないやうだから、警察の人を呼ぶのは止さう。この家には何か秘密があつて、無理に發き立てると亡くなつた先生の御迷惑になるやうな事があるかも知れない。だから今晩の事は誰にも默つてゐるのだよ。』

『あなたが默つて居れと仰有れば默つてゐますわな。けれども、わしはこんな恐ろしい家は懲り〳〵ぢや。明日にでも暇を

貰つて婆の所へでも歸らして貰ひます。』

『あんたに歸られてはこの家が忽ち困る。眞逆私と藤井さんとで泊る譯にも行かんからな。家の始末がつくまでもう少しの間ゐて貰はなくちや。』私は骨を折つて老婆を宥めた。

『あんたがさう仰有るなら、もう暫くは辛抱しますがな。本當に警察に云はんでも好いかな。何か失くなつてゐるものはありませんかな。』彼女はさう云ひながら腰のあたりを探つたが、忽ち叫聲を上げた。

『鍵がなくなつてゐる。金庫の鍵を盜られました。あれ、金庫があの通り開いてゐますわな。』

『靜かに、靜かに。』私は彼女を制した。『金庫の開いてゐるのは知つてゐる。然し、別段何も大切なものはなくなつてゐないから、決して心配しなくても好い。』

私はさう云つて、急いで金庫の傍に寄つて、開いてゐた抽斗を締めようとしたが、忽ちそこへ立竦んで終つた。金庫にはありありと指紋がついてゐた。巨大な、到底普通の人間の指紋とは思はれないやうな拇指紋が！　あゝ、亡靈の拇指紋！　（つゞく）

『亡靈の指紋』作者

甲賀三郎先生曰く

『私は今迄隨分多くの探偵小說を書いたが、この「亡靈の指紋」ほど眞劍になつたものはありません。抑〻この物語それ自身が、私にとつて忘れんとして忘るゝことの出來ない深刻な事件なのです。

私は今、眞に身の毛を竪立たせつゝこの作品を讀みつゝあります。「亡靈の指紋」の一字一句は、全く私の血です涙です」と。

此の第一篇を讀まれた方は、作者のこの言葉が、如何に適切なるかを痛感されたことでせう。第二篇に至つて、事件は急轉換、讀者をして恍惚熱狂せしめずに置きません。探偵小說界空前の大傑作です。乞ふ、次號をお待ち下さい。

細川忠興の訓言

○寄合つてよき友
正直や、能書、もの書、學文ぢや、貴人、年寄り、嘘つかぬ人

○寄合つてあしき友
喧嘩すき、いらぬ廣言、うつけもの、人の忠言、公事たくむ人

○よく思はるゝ人
心よく、人事いはず、いんぎんに、慈悲ある人に、遠慮ある人

○憎まるゝ人
嘘つきや、人事はなし、差出口、高慢ありて自慢する人

○物の成る人
朝起きや、身を働らかせ少食に、忠孝ありて、灸を絶やさず



怪盜夜叉王

前田曙山
山川秀峰畫

夜叉の正體

鹿を追ふ獵師の山を見ぬ右近は、朝臣の後に續いて走つたが、枯草生ひ茂る渺茫たる原中、踏み出す足を虛空に取られ、ヘッと思ふ瞬間眞逆樣に古井戸の中へ落ち込むだ。

右近は墜落の瞬間に、底知れぬ井戸と知つて、もう助からぬといふ觀念の閃めきが、頭腦の先から閃光の如く突拔けたが、落ちると同時に、夫が空井戸で有つて、底の土も思ひの外柔かいやうに感じたが、夫なり彼は自分の魂が拔け出して行くのを意識しつゝ、夢とも現とも無く昏倒して了つた。恐らく今息が絕えて行く道筋を知りながら、絕息して了つたのであらう。

『御客人え、お起なんし。』と言ふ媚めいた聲が、右近の魂を冥土の奧の方から喚び返した。死んだと思つた彼が偶と眼を明て見ると、自分は此世にも彼世にも容れられずして、情無く中有に迂路つき廻つて居るのでは無いかと、覺束ない心になつて驚き呆れた。

右近は涸井戸の中に落込むだ迄は知つて居るが、郡內の夜具に括まれて、枕を高く穩やかに眠つて居た事は知らなかつた。狹い行燈形の掘拔の穴で有るべき筈が、廣々とした小書院めいた座敷で、枕元には有明の絹燈が、暢和した灯火を軟らかに投げ、高麗緣の床には、狩野派らしい唐子遊びの幅が懸つて居る。側床には胡麻竹の落し掛、蛭環から下つた釣花活に小手鞠を投げ入れた雅嫻やかの好み、二枚折の銀屛に唐美人の畫姿は、美男の現なき寢姿を、今迄倦かず眺め入つて居たらしく、玉と艷やかな双頰には、ほんのりと面映氣の紅が抹されて居る。

『オウ拙者は何故として之へ參つた。』

右近は慌てゝ蓐の上に起直つた。と同時に、銀屛の美人は、莞爾と笑ふかと見ると、スル〳〵と畫から拔け出して來て、右近の蓐の側へシナヤカに坐つた。得ならぬ蘭香の時めきが、濡柳な襟足から仄めき出て、一男の身體をヤンワリと包むで了ふ。

『ヤツ、御身は吉原の音羽太夫では無いか。』

右近は夢か幻か分別されなかつた。朝臣が溫たかく滑らかに介抱されたと、魂を有頂天外に飛ばす名妓は、褊衣姿の金絲緞絲を脱ぎ捨て、野暮のヤの字の屋敷姿ながら、昔を其儘の廓言葉、男を痿す嬌態の諸分は、夜の櫻の仇なる色香に、梅の薫りを移したに過ぎぬのだ。

『ほんに主は、小梅の姫君樣が久木萬字へ來なんした時に、梅樣と一座しなんした御方、よう來ておくんなました。』

梅樣といふのは、朝臣が花を折り柳を攀ぢる時の廓名で有る。

『いや拙者は先刻誤つて空井戸へ落ちた迄は存じ居るが、其以後は一切夢中、只今我に返ると、思ひも寄らぬ當家、自體之は何と致した事で御座る。』

『妾だといつて知りいせん。此處の旦那さんにお逢ひなんしたら、主も合點なさんせう。』

『オウ其御主人と言はれるは。』

『妾が口で言ひすより、主が直にお逢ひなんしたら、何も彼も知れいせう。……旦那さんが主に逢ふと言ひなんすによつて、此方へ來てくんなまし。』

右近は氣拔のした頭腦が漸く元へ戻つて來て、朧氣ながら夢中の事情が摑めたやうな氣がした。

彼は誘拐された老母を取戻すべく、朝臣に案内されて、洛町河岸の細川屋敷に近く、怪盜夜叉王の隱家へ覗ひ寄つたのだが、姫を奪はれた忿激に燃ゆる朝臣の、狂奔するやうた足取に曳かされ、心とも無く追ひ縋つて行く時に、誤つて空井戸へ墜ちたので有つた。

然し其空井戸が、果して偶然の穴で有つたか、乃至は怪賊が用心の爲に掘つて置いたのか、いづれにしても絕息して居る中に、何者にか救ひ上られて、此處へ運ばれたので有る。

右近は此處まで自分の考へを辿つて來た時、愕然として頭から冷水を浴せかけられたやうにギョッとした。

『夜叉に生擒られたのでは無いか。』

全身此時に緊張して、忙しい息が肩先を突破した。畢生の仇敵の手に落ちては、母子諸共、弄殺になる外は無い、よく〳〵弓矢八幡に見放されたのだと、無念の血淚が、五臟六腑を搾木にかけて滴り落ちる。

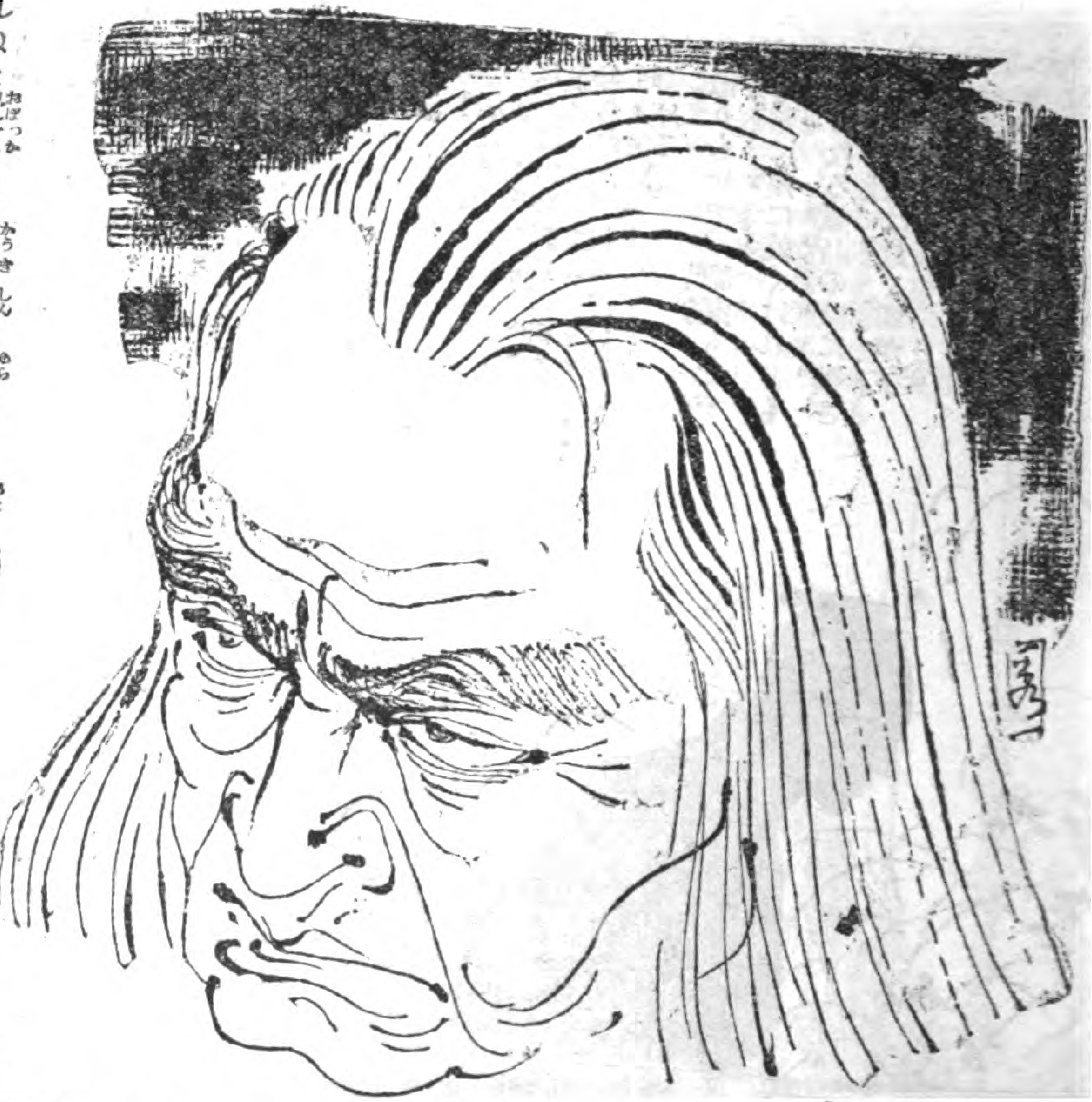
『さあ恁來てくんなまし。』

音羽太夫は靜かに身を起したが、しなやかた袖に右近の兩刀を捲いて、重さうに彼の前に差出した。

此家の主人が夜叉王ならば刀を渡さう道理はないから、右近は又思ひ惑つた。自分に對して害心が無いとすると、主人といふは夜叉王では無く、或ひは大名の隱居といふやうな人かも知

れぬと覺束ない好奇心に蕩れつゝ後に從つた。

二間三間打過ぎ、入側造りの廣緣の先なる一室、初對面の客



ではなく、寧ろ内輪の人を待つやうな茶室で、武家屋敷には思ひがけぬ京造の墨繩、長押などいふ無意氣な 裃は微塵もなく、砂壁に朝顏窓、掛障子の風流な好みが、憎らしい程風雅て居る。

八疊程の座敷には、少し暗いと思はれる絹行燈、小さい火鉢を添へた緞子の座蒲團、夫が主客の爲に設けられ、空炷の薫りが夢の國のやうに、清い快さを蕩よはせる。

右近は右手に提げた刀を、其儘右へ置いたものか、乃至は敵陣に使する軍使の作法に倣つて、左手へ引附けようかとも考へたが、相手の善惡が知れもせぬに、餘りに卑怯にも臆病にも當るので、其儘自分の後に横たへたが、いざと言へば直に引攫むで身構へるに足るだけの用心は有る。

床脇の架燈口を靜かに明けて、太夫が引退ると、振袖かと思はれる熨斗目模樣の若衆小姓が、入れ違ひに摺足で茶を運むで來て、右近の前に置くと、一禮して又其儘に引退る、凡てが無言の行で有る。家造も飽迄廣からうが、人の話聲は元より、ソヨとの音すら聞えない。

突然一方の襖が音も無く明いた。此屋敷にはよく〱音響と

いふものを封じたらしいと、右近は全く狐に憑まれた思ひがする。

入つて來たのは、言はでもしるき主人で有る、滿面朱を塗つたやうな赭ら顔で、銀の如き白髪は鬖々として垂れ、肩を限りにキチンと剪まれて居る、眉太く眼鋭どく、一見して尋常一樣の人物では無い。黑綸子無紋の羽織に、茶無地羽二重の着物、短刀さへも帶せぬ全くの丸腰、何處までも鷹揚に落附の有る、六十恰好の屈竟な老骨、軍學者とも行者とも附かず、元より大小名の隱居などでは無い。

『其許は波多野氏で御在さう、よう參られた。拙者は當家の主人で御座る。』

傲りもせず、謙遜もせず、只尋常に座に就くけれども、自からなる氣品の威に壓されて、右近は危く頭が下りさうに覺えた。



『此度は圖らず御雜作に相成り、右近厚けなう存ずる。……慮外ながら御主人御姓名を承はりたう存ずる。』

主人の名一つが、凡ての疑團を氷解させる春風の音信であらねばならぬ。

『拙者の名で御座るか、之は近頃申し遲れ申したが、拙者は其許が拙者を御承知の上にて、遙々御尋ね下された事とのみ存じ居るが。』

『御貴殿御姓名を、拙者承知の上にてと仰せられるか。』と、右近は謎が解き兼た。

『如何にも。』と、主人は大きく首肯いた。

『之は意外の儀を承はる。拙者は近頃御府内を騷がせる不敵の怪賊を詮議の爲相向つた處、誤つて古井戸へ墜ち、怎樣に御雜作に相成つたので御座る。決して御貴殿をお尋ね申したでは御座らぬ。』

『然し不敵の怪賊を詮議の爲參られたと申されるでは御座らぬか。』

『仰せの通り。……其怪賊と申すは。』

ハツと氣附いた右近は、目覺めたやうに眦を上げて、相手の顏を見

つめた。老人とは思はれぬ程、水々と膏切つた元氣旺盛の顔には、絶倫の精氣が充ち亙つて、右近などを眼中にも措かない、夫が證據には、相手に兩刀を與へながら、己は全くの無刀、然も主客只二人切の對坐で、用心棒を備へて置く武者隱しなどは絶對にないのだ。何處まで大膽で、何處まで横道だか、數が知れない。

『ハヽア、漸くお解りに相成つたかな。』

『偖こそ夜叉王といふ不敵者は貴殿か。』

太い息を深く吸ひ込むで、全身の力を双の臂に罩めた。

『お騒ぎ有るな。拙者は人に顔を合さぬと言ふ事を金科玉條と致し居つたが、此度は心の誓ひを破つて、其許のみには面會致す。……如何にも拙者こそ夜叉王丸に相違御座らぬよ。』

明々白地に言ひ切つた此老骨こそ、江戸の上下を震駭させる不敵の怪盜なので有る。右近の胸に描きつゝ有つた夜叉王丸は、三十前後の屈竟の怪漢とのみ信じたのが、假令壯者を凌ぐ元氣有りとは言へ、六十を過ぎた白髮の怪人とは、夢にも思ひ寄らなかつたので有る。



龍虎の舌戰

敵と敵とは端なくも咫尺の間に相對し、龍攘虎搏の意氣は、萬丈の光炎となつて天をも衝かんず勢ひだが、絹燈仄かに温かき夜は仄めいて、靜かなる事林の如くで有る。

『拙者を波多野右近と知つて、之へ招き寄せたるからは、拙者を何とする積で有るか。』

有らん限り氣色ばむだ右近は、少し引身になつて、香師を睨

ふ虎の如くに身構へた。スハと言はゞ、一氣に飛蒐つて、畢生の仇敵を取つて押へるので有る。

然し右近の激しに激するに反し、夜叉王は冷やかなる事氷の如く、片臂を脇息へ落して、飽まで内懐を開け、何等の用心も身構へも無い、其太膽不敵過ぎる豪爽の態度に、右近は聊さか氣を呑まれねばならなかつた。此曲者は此方の變化一つで、如何なる秘術を現はすか知れぬので有る。

『其許こそ、夜叉王を詮議して何と致されるのぢやな。』

『公儀役人を惱ます不敵の盜賊、江戸靜謐の爲に退治致すのぢや。』

『夫は無用の事ぢや。』と、夜叉王は他事でも聞いて居るやうに、アハハと笑つた。

『何が無用、貴公一人の爲に、江戸中枕を高うされぬのぢや。然らば貴公を召捕るは、天下政道の爲で有るぞ。斯なる上は尋常に繩に懸るか、但しは潔よく勝負するか、二つに一つぢや、いざ返答承はらう。』

虎は怒つて將に擲たんとするのだ。然し龍は嘯ぶいて容易く應じようとはしない。

『兩樣ともお斷り申す。誠に以て下らぬ事ぢや。江戸中の役人が石を起し瓦を剝いでも搜し當らなんだ拙者、八百萬石の權威を以ても、指も指されぬ夜叉王で御座るぞ、其許如きが十百千人集ればとて、結句は困作の齒軋とやら申すもの、廢にせられい。』

夜叉の言葉は強て豪放を衒ふのでは無く、全く右近などを齒牙にかけぬ程、奥底知れぬ不敵さが有る。

『いや廢には致されぬ、拙者は飽まで貴公と雌雄を決するのぢや、殊に貴公は拙者の不在を欺むいて、卑怯にも母を誘拐したのぢや、此怨は何として忘れようか。』

激しに激した右近の眦は血走つて、アハヤ飛蒐らんばかりに焦燥するが、相手は何處を風が吹くと言はぬばかり、悠然として下目に眺めながら、絶えず薄笑ひを朱の脣に泛べて居る。

『其許の母御を誘拐したのは拙者では御座らぬよ。』

『言ふな、貴公で無くて誰ぢや。』

『夫は其許自身では無いか。』

『何と。』と、右近の膝は褥を越えて、疊の床も滅入らんばかりに力を罩める。

『其許が忠義の道を忘れたにより、其許の母御は、其許を捨て家出をされたのぢや。拙者は如何にも不憫に存するにより、波多野家の系圖と共に、或處へ安穩に扶持致して置くにより、其儀は安堵致したがよい。』

『默らつしやい、拙者が母を貴公に賴むと思ふか。』

『其許に頼まれはせぬ、母御より頼まれたのぢや。其許志を改めて、誠の忠義の道を貫ぬきさへ致せば、母御は喜んで其許の許に歸るし、拙者も祝うて送り申すで御座らう。』

右近の母は夜叉の爲に人質に取られたので有る。右近如何に齒を咬み目を瞋らすとも、母の一命を眼前にかけては、左右なく手を下す事はならぬのだ。

『言ふな、拙者が何で不忠を致した。』

『不忠を致したとは言はぬ、其許は忠義といふものを全く承知致さぬのぢや。』

『忠義を知らぬと。』と、右近は夜叉の奇矯な暴言に呆れた。

『如何にも。……貴公は關東將軍家の家臣として只柳營の爲を圖れば、夫で忠義は成ると心得て居ようが、夫は忠義の贋物ぢや、珊瑚で言へば、古渡と土佐珠の相違どころ



か、どうやら形は似て居ても、其許のは練玉といふ僞造物ぢや。凡そ忠義といふものは、都に御在す一天萬乘の大君の御爲に、不惜身命の赤心を捧げてこそ誠の忠臣、然るに其許は只祿を貰ふ私の主人の爲にするを忠義とのみ心得居るは愚の骨頂、本來其祿と雖も、畢竟は大君より賜はるを、將軍家が取次ぐと

言ふに過ぎぬのぢや、普天の下率土の濱、孰れか王土に非ざるべき、其王土に生れ、王土の米に育てられたからは、其許は即ち王臣、いや其許のみでは無い、其許が主と仰ぐ將軍家と雖も、同じく一列の王臣、畏くも大君の御眼より御覽ぜられる時には、征夷大將軍とも有れ、國守大名城持とも有れ、乃至は士農工商の蒼生、凡そ此國に生きとし生ける人々は、身分に貴賤上下の隔ては有るとも、等しく同列の赤子と思召されるのぢや。然らば其赤子が私に主を持つて、其主の爲にするは、是れ即ち私の忠義、之を僞造物の練玉珊瑚と申すのぢや、……どうぢや、合點が參られたかな。』

夜叉の舌端には風生じ、熱烈火を吐くばかり、腑る丶もの盡く燒き盡さねば措かぬ概が有る。右近は片唾を吞んで焦立しく焦つた。

『其樣な邪說を盜賊に習はうか、誠にもせよ僞にもせよ、事ふる君に盡すは即ち忠義、武士たる者は只君の命ずる處に任せて、火にも入り水にも飛び込む、主の爲に身を殺して悔ゆる無く、求むる處無きを忠義と知るのみ、無用の舌を動かすな。』

いきり立つ右近の轉ばし離き鐵石の言葉を聞くと、憫れむ如き顰縮の雲が、夜叉の眉字を走るが如く掠め去つた。

『然らば其許が秦姬君の館へ伺候するのも、將軍家よりの申附けで有るかな。』

蔑すむが如き憫然な微笑を浮べられて、右近は迫込む氣先を透されたやうに、思はず鼻白むで、顏が火と熱した。

『其許を小梅へ取入らせたは、將軍の知る處では無く、彦根の私の申附けでは無うたか、剰さへ色を以て欺むき能はねば、刄を以て命を縮めよと、霞ケ關の密室に於て、マザ〳〵と申附つたを、拙者はよう存じ居るのぢや。其許も彦根の姦物も、大名屋敷の奧殿で有るに因つて、二人の外には洩れまじと思うたであらうが、天と地の知る事で、此夜叉の知らぬといふ事は無いのぢや。』

愈よ出でて愈よ怪奇、目にも見えぬ大力量に壓し附けられて、右近は胸塞がり息詰り、飛蒐るどころか、身動きもならぬ程居竦む外なかつた。

『然し其許は思ひの外の機關師ぢや、小細工に妙を得て居る事は、拙者などの企て及ぶ處では無い。秦姬に近寄る手段として、無賴不逞の浪人共を語らひ、秦姬や望月に喧嘩を仕掛けさせ、夫を追拂つて恩を賣り、首尾よう取入つた手段、古手ながらも、時に取つての細工事、察する處辻講釋の前譚からでも聞き覺えた故智で御座らうな。』

右近の魂は形無き泣微塵に碎かれて了つた。武士として恥づべき手段と、心に恥しからぬは無き秘中の苦計を、夜叉は知り過ぎる程知り拔いて、面皮を剝ぐばかりに犇々と素破拔くの

で有る、右近は顔落ち窪みて、肩で息するばかりに敗北したが、此場合是が非でも頽勢を盛り返さねば、一分の面目さへ立たぬので有る。

『拙者の事よりも貴公自身こそ、能己が影を顧みたが宜しい。假令拙者が如何なる手段を以て、姫君に近附たりとしても、貴公が賤しき身柄を憚からず、高貴の姫君に御在すのみか、西園中納言家の御許婚とも有る上臈を掠め取り、是非なく契を結むだに比べて、何れが罪を重しとするか、口に賢しく言ひ瞞めるとも、貴公の所為は天を恐れず人を憚からず、夫にても尚猿の人眞似、忠孝を口にするとは笑止千萬ぢや。』

夜叉は此詰問を待ち設けつゝ有つたやうに首肯いた。敵の鋒先が鋭どい時は鋭どく受け、弱い時は弱く受ける、操縦自在の老獪な手段は、血氣に逸る右近如きに逡巡く様子もないのだ。

『其許こそ口巧者ぢや、拙者は曾て姫を掠めも誘拐しもせぬ。彼儘館に在る時には、姫の命危ふしと見て、拙者が救ひ取らせたのぢや。業に彼夜さりも、姫を手捕けるか、夫がならずば命を縮める迄と、窃かに姫の寝所へ忍び入つた優しい曲者の有つたを、よもや其許の存ぜぬ事は御座るまいが。』

大身の槍より鋭どき皮肉の一言は、右近の胸の眞正中を、蛭卷込めて突き徹したので有る。夫こそ右近自身の外、何人も知らぬ當夜の擧動、夫を見るが如くに知り拔いて居るのは、人では無く神の化身で有る。右近は頭へ上た氣が[illegible]まつて、蟲の目へも消え入り度、言甲斐無い脂汗が流るゝ如くに湧いた。

『さればに因つて、無緣の新佛を假り、姫の死屍と見せたのは、貴公達の目を晦まして、一時の餘炎を冷さう爲の小細工に過ぎぬのぢや、但し此老人、姫の如き女性を相具するは、決して色を貪ぼる爲では無く、身の邊に女手が乏しいにより、介抱を頼む迄ぢや。姫の許婚たる西園中納言とやらに邂逅うたる節には、拙者の手より渡し參らする所存ぢや。』

夜叉の言ふ處が誠ならば、妻妾として色を漁るので無く、賤端女にも齊しき召使として、左右の用事を達させるので、高貴の上臈を奴婢同様に心得て居るのでは無いか。

『いや偽りぢや、西園中納言殿は、現に當家に押込められて居つた事が有るのぢや、然らば何故姫を朝臣に渡し召されぬか。』

『其許は當家々々と言ふが、此處を何處と心得居られるな。』

『言ふ迄も無く濱町河岸の貴公の隠れ家ぢや。』

夜叉はアハハ〳〵と高らかに笑ひ出した。

『其許は悪夢に魘はれて、まだ目が醒めぬのぢやな。……濱町河岸といふは江戸では無いか。此處は人間界では御座らぬよ笑止千萬。』

右近は又肚膽を拔かれて、瞬きもせず呆れ返つた。

鬼が佛の望月玄蕃

活殺自在の夜叉の辯舌は、幾度か右近を擒へ、幾度か右近を縦ち、殆んど嬲り殺しにするが如き者が有る。假令正氣を失つたとは言へ、確かに一時の間の事、之が濱町河岸ならぬ道理は無い、夜叉は隠家を知られる事を恐れて、態と僞を構へるのだと、右近はハッと心附くと、危ふく油斷して賺されようとしたのに驚くと共に、聊さか氣力を盛返して來た。

『貴公は現に貴公の首を覘ふ拙者を、何と致される積ぢや。』

『拙者は只其許に誠の忠義を説き、誠の人間と致さう爲ぢや、此儀は其許の母御にも堅く請合申したのぢや。』

『拙者が飽まで聞入れぬ時には。』

右近は必死に夜叉を激發して、形勢の變化を圖るべく焦つた。一度劍を執つて起てば、口のみ達者な老耄は、有無を言はさず一刀兩斷、一人の夜叉を、見事二人にして見せるので有る。

『聞き入れる迄說いて聞かせるのぢや。』

と、宛ら暖簾に腕押、右近は自分の力が餘つて、危ふくのめり蹟づくやうに感じた。

『然し、一先立戻られたがよい。然し其許は緣無き衆生では無いに因つて、何時かは拙者の幕



下に就き、天朝へ眞忠を勵むに及ぶであらう。先夫までは、母御も立戻る事は有るまい。』

母といふ大切な弱點を押へられて居るので、無念ながら如何ともする事がならず、頭から黑烟を立てんばかりに忿激した。

『拙を人質にするとは卑怯千萬、何故男らしく立派に立合ぬのぢや。』

『拙者は斷ると前にも申したでは御座らぬか。然し其許には刀を渡し有るにより、其許より斬り懸るならば隨意にせられい。』

右近も流石に恥を知る武士で有る、無刀の敵に向つて、鯉口三寸寛ろげるは、末代までの恥辱では無いか。

『拙者は無刀の者を斬る刄は持合さぬ。……然らば此場は此儘立戻つて異存は無いか。』

『御隨意になされたが宜しい。然し立戻られた節には、其許より彦根殿へ傳言を賴みたい。其許を招ぎ寄せたのも、一つには其爲で御座るぞ。』

曾て霞ケ關の屋敷に於て、此怪盜の妖術にかけられ、無念の不覺を取つた事を思ひ出すと、忿激の血が又逆流して、五臟六腑をズタ〳〵に引搔るを感じた。

『夜叉王は只財を貪ぼる盜賊では無い、其財は天下の大事に備へん爲、不義の者より奪ひ來るのぢや、假令大名たりと雖も、大義名分を辨まへず、天朝を疎かに致す者は、拙者一々に參つて、土藏の中を空に致して見せる、江戸本丸の中と雖も容赦致さぬ。否々將軍家寢所の奧たりとも、物の數とはせぬのぢや。尤も拙者の手段の畏るべきは先夜霞ケ關を襲うたに因つても承知致されるであらう。彦根殿には速やかに昨日の非を悔い、京都御所の御扱ひを改ため、謹しんで臣節を盡すやう致さるべく、左も無きに於ては、天誅忽ち其身に及んで、如何なる最期を遂げられべきか、天下の怨と憤ほりとは、彦根殿一人に集り居る事を、呉々も申傳へられるやう、拙者より其許に依賴致すのぢや。又其許に於ても、能く思慮致して、徒づらに私の忠義にのみ心を惑はさぬやう、之も拙者の老婆心ぢや。其許の知る望月玄蕃の如きは、彼强情我慢ながら、拙者の理解を聞いて夢の



聳めたる如く、豆粒の如き涙を流して、天朝への忠節を誓ひ申した。鬼の目に涙といふは彼事で御座らうよ。』

忽ちにして眞率熱誠、忽ちにして洒落飄逸、右近は呆氣に取られて言ふべき言葉も無いが、玄蕃が夜叉に降參したとは、天地が逆さに轉がり廻らうとも、有りやう事柄では無いのだ。

『何と、玄蕃が貴公の理解に服したとな。』

『如何にも、鬼が佛と相成り申した。最早其許に同心して、要も無き姫の詮索、夜叉の詮議など致す事では無いのぢや。』

右近は漸々足許が壞えて行つて、次第に立場を失ふ心細さを覺えた。

怪盗の誠の棲家

膽玉の小さい大小名、直參の旗下諸役人や、江戸詰の家中侍を顫へ上らせた稀代の怪盜夜叉王丸の本身を見た者は、天下廣しと雖も波多野右近の外ないのだ。右近一人が其面體を知つて、他の者が一人も知らなければ、他日夜叉を捕へる者は、右近の外には無い。

然し現に自分に仇する者を捕へながら、其敵に刀を與へて已は無刀、剰さへ牢獄へ取込めもせずに、素直に放ち返すといふ夜叉の大腹中、夫が彦根殿へ嘲弄の傳言を頼む爲とは言へ、横道極まる腹の中が右近には讀め兼た、恐らくは自分を味方へ引込む考へかも知らぬが、自分は三河以來譜代の直參、五百石を食むで大御番を承はる者、石が流れて木の葉の沈む世もあれ、爭でか似非勤王の盜賊づれに降參しようか、見よ〳〵今にも彼怪しき老異人を取つて押へ、化の皮を引剝いて、正體を現はさねば措かぬと、燃ゆるやうな敵愾心を胸に抱きながら、案内に從がつて送り出された。

『先刻拙者を介抱された音羽太夫と申す傾城、彼は當家の愛妾でゞもあられるか。』

附いて來た若衆小姓に探りを入れて見た。右近は音羽太夫が此屋敷に居た事が不審でならぬので、朝臣が太夫の爲に、魂を蕩かすばかりの介抱を受けたといふも此屋敷、然らば音羽太夫は色好みの夜叉の爲に根引され、此屋敷へ移し植ゑられ、姫松の翠を罩めるのでは無いかと、疑へば疑がへるのだ。

『いゝえ、其様な人は居りませぬ。』

『居ない筈は無い、現に拙者も介抱を受けたのぢや。』

右近は若衆小姓が秘し隱すのだとのみ思ひ込んだ。

『夫でも此方には、女子といふ者は一人も居りませぬが。』

『然し現在拙者が面會致したのぢや。』

『夫は何處の座敷で御座いましたか、若しや彼銀屏風に唐美人の繪姿を描いた座敷では。』

若衆は妖冶な眉を顰らせ、氣味惡さうに右近の方へ寄つて來

た。長い廊下には、一穗の有明が朦朧たるばかり、目には見えぬが陰森の黑氣が冷たい水のやうに滲み透つて來る。

『如何にも羅浮の仙女でも有つたらうか。』

『夫ならば彼名畫の精が脱け出したので御座いまする。』

『何を白痴た事を、昔羽太夫が拙者を奧座敷まで案內致したのみか、現に物語りを致した覺えが有る。』

『左樣でも御座いませうが、當家に女といふ者は一人も居りませぬ、凡て男世帶、……彼畫と申しまするは、何人が畫きましたか無落款ながら、偖々不思議な事が御座りまして、彼部屋に寢た者は、夜中見知らぬ美人に訪づれられ、其爲精氣を奪はれまする由、先般も當家へ參られたる或高貴の客人は、彼室に寢た爲、美人に會ひまして、夫よりは只現の如く、美人の事のみ申し續けて悉皆亂心、手前共頻りに看護致して居りましたが、隙を見て何方へか迷ひ出で、夫なり今以て行方は知れませぬ。』

と、意外な言葉、果して唐美人が音羽太夫となつて現はれたものならば、其客人といふは正しく西園中納言雅信朝臣、然らば此處を江戸の中ならずと欺いたのは夜叉の詭言、矢張濱町河岸の隱れ家に違ひないのだ。然し何としても怪奇異樣の棲家、切支丹の妖術、伴天連の魔法を修する妖邪の道場に相違無いと、右近は冷たい舌の先で身體を舐め減されつゝ有るやうな不氣味さにゾッとした。此若衆小姓にしても、妖術を以て幻に出現させたかも知れぬ。

『夫では之にてお別れ致しまする。主人は又のお運びをお待ち申上げると申されました。』

本來ならば途中目隱しでもして、何處かの方角違ひまで運んでから、始めて別れを告げてこそ、隱れ家の所在を晦まし得るのだが、豪膽なる夜叉は更に忌み憚かる處も無く、堂々と表門より右近を送り出したので有る。

眞の夜中とは言ひながら、曉近き空には、仄かに東明の光が薄く先走つて、朧氣ながらも、四邊の姿が闇中に浮び上つて居る。

低いながらも、森から森へと續く丘阜、見渡す限りに家といふ物無く、田とも沼とも知れぬ水が、目も遙かに低く繋がつて居るらしい。何處かに人里が有るかして、遙かに鷄の聲の聞えるからは、此世の中には違ひないが、江戸の濱町河岸に、際涯無く續く山々のあらう筈はない。

夜叉は流石に賊首だけあつて、右近を欺かなかつた。此處は正しく江戸では無いが、江戸でないとすると、空井戸から何時の間に此處まで運ばれたのか。昏々として不覺に目覺めなかつつた間に、首を搔かうとならば、南瓜を切るよりも容易だつたものをと、今更身を慄はして戰のいた。

何にしても四邊が暗く、足許も定かならぬのみか、方角も見

當も附かぬ中を歩き廻るのは、濃霧の中を當無しに掻い捜るやうで、果して何處へ辿り附くか解らぬけれど、爪先下りの下り勾配を、殆んで一足拔のやうに歩いて來ると、黑い山の塊が壞え去つた處に、僅かに光る鉛色の水の流れ、淺い瀨に囁やくか、深い淵に碎けるか、目覺ますやうな淸らかな響きが、耳を洗つて聞えるので、右近は宛ら故人に會つたやうな心地がした。

兎も角水へ就いて行けば、必らず人家があると思つたので、田の畔の畷道を、榛の木に突き當つたり、畦切へ落ちたりして、半身泥塗れによろぼふ樣は、狐につままれて、虛空に拔き手を切るにも劣ると、自分ながら淺ましく馬鹿々々しかつたが、軈ての事に一軒の草の家が突如として目の前に現はれ、然も一縷の灯さへ、戸の節穴から力無く洩れて居る。只一軒の小舍ながら、右近に取つては地獄で佛とも、盲龜の浮木とも譬へやうが無い。



『コレ〳〵此處を明けて呉れ、乃公は路に迷うた者ぢや。』
二つ三つ戸を叩くと、中から鈍みたる老人の聲が聞えた。
『締りは無いで、明けて入らつしやれ。』
右近は急いで、戸を引明けた、今外へ洩れた覺束ない灯は、爐を焚き附けた榾の火炎で、甦生るやうな心地よさを以て、勢ひよく赤々と燃え盛つて居る。表から背戸まで突抜けた土間で、一方に煤げた反古障子が閉てゝ有るのは寢床らしく、主人の老人は不時の客來に、呆れた眼を瞬らいた儘、釜を釣つた丸柱の前に、腰を伸して突立つた。
『ハア、御武家樣で御座らつしやるか、どうさつしやりました。』
老人の怪しむのも無理はない。右近が自ら嘲けるが如く、正氣の沙汰とは思はれぬ姿が、マザ〳〵と榾火に映し出された。

大奥三千の女中の嬌かな裳を吸ひ寄せる柳營第一の美男も、袴から羽織の裾へかけての泥まみれ、舐めて拭いたやうな清潔の月代に、亂髮が垂下つて居ては、百年の戀も此時に覺めるばかりだ。
『乃公は夜陰道に迷うたのぢやが、之より里へはどう參つて宜しいかな。』
『旦那樣は何方から御座らつしやいました。』
老人に反問されても、出て來た先も解らねば、何處に居たかも知れぬので有る。
『自體此處は何處ぢやな。江戸の山の手でも有るかな。』
意外な質問に、老人は眼を圓くして魂消た。
『飛んだ事言はつしやる。何で此處が江戸で御座らう。』
『然らば何處ぢや。』

右近は躓づいた上を又突飛ばされたやうに忙てに忙てた。

『旦那樣御存じ無くて、どうして御座らしやつた。此處は市川の眞間の臺下で御座いますだよ。』

『エツ市川か。』右近は又しても魂を引抜かれ、天から無慚にどやし附けられて了つた。市川と言へば平井の先の江戸川を越して、下總の國で有る。江戸の日本橋からは四里とは言ひながら、地道は遙かに遠い片田舍、夫を濱町河岸とのみ信じて居たのには、我ながら愛想が盡きた。

『乃公は今此向ふの高臺から降りて來た筈ぢやが、彼處に大きな屋敷が有るが、彼は何ぢや。』

『臺の上には總寧寺さんが有りますが其外に大きな家といふのは源空寺といふ古寺ばかり、後は畑地と森とで御座いますだ。』

『其源空寺といふのかな、然し寺らしくは思はれなんだが。』

と、右近は又迷ひ出した。

『旦那樣は源空寺狐に行られたで御座りましねえか、彼處は古寺で、惡いお狐さんが棲むで居りますだ。……而して此頃ではどうやら人相の惡い人達が出入をして居る樣子、氣味の惡い處で御座います。』

『其人相の惡いといふは、どのやうな者共ぢや。乃公は實は公儀役方の者で、內々樣子を搜りに來たのぢや、委しく聞かして貰ひたい、其方の迷惑には致させぬ。』

『お役人樣で御座らつしやるか、夫なら申しますが、此頃源空寺に逃出しをして住つて居るのは、何でも銀のやうな眞白な總髮で赭ら顏、村芝居で見る髯の意休のやうな人だと、新田の李十が言つて居ました。而して此間の晩も、江戸の方から御旗下の隱居でも有らつしやるやうな、女の老人を連れて來て、何ぢやら手紙を書けといふを書かぬといふので、慘い折檻をして居たで、ヒイ〳〵言ふ聲が聞いて居られないと言つて居ましたから、俺等恐怖なくてなりません。』

夫を聞くと右近は身を震はして忿激した、其女隱居といふは正しく我母、母の直覺の腑に落ち兼る節々は、惡虐無道の夜叉が、母を責め苛なんで、無理に書かしたもので有る事を、始めて明らかに覺つたのである。

『其外にも女の居るやうな時は聞かぬか。』

『明瞭とは知らないでがすが、御大名のお姫樣のやうな氣高い女子衆が、彼處に閉ぢ込められて居るといふやうな噂も御座ります。』

夫こそ秋の門の姫花奈姫の御方の外は無い。右近は猛然として蹶起した、之より江戸へ取つて返し、多くの與力同心手先の面々を選り、白晝多勢を以つて取圍めば、切支丹の妖術も施すに由無く、一擧に怪賊一味を召捕つて、姫と母とを救ひ出す事が出來ると、心の中に躍り上り飛上つて喜び勇んだ。（つゞく）

本邦重要輸出入品番附

——昭和四年全一ケ年——

單位圓止

輸出總額	二、一四八、六一八、六五二
輸入總額	二、二一六、二四〇、〇一五

（十億・百萬・千・圓）

輸出の部

品名	金額（億・百萬・千・圓）
生絲	七八一、〇四〇、一四〇
綿織物	四一二、七〇六、七二九
絹織物	一四九、九五四、五七四
陶磁器	三六、九六二、六五四
シヤツ類	三一、九五五、九一六
砂糖	三一、一一六、四一八
小麥粉	二六、八一五、五六〇
綿織絲	二六、七五五、七〇二
食料品（罐詰瓶詰）	二五、六八〇、九六五
石炭	三三、二二五、二一八
木材	二一、一三八、二九九
帽子類	一八、一三九、三七九
豆類	一四、六二一、三五〇
玩具	一三、八五四、九五一
硝子及製品	一三、二一〇、五一九
印刷用紙	一三、〇七三、六七四
綠茶及茶	一二、〇三八、一一五
襤褸	九、八一八、四三七
セメント	九、一八二、四七一
屑絲（キビソ及ノシ）	八、三七〇、八〇二
魚油	七、七三三、八五〇
ゴム靴	七、四四四、九五七
鈕釦	七、二二二、八一五
琺瑯鐵器	六、七〇七、二七二
乾魚	六、三五一、〇五一
ゴムタイヤー	六、三〇〇、六六九
樟腦	六、一九九、四四九
ブラッシュ	六、〇九一、四九七
雜機械	六、〇四一、九五五
メリヤス靴下	五、八一〇、三五四
電球	五、三九九、九七七
薄荷腦玉	五、二九一、六〇七
汽船	五、二三九、〇七一
屑綿屑絲	五、〇九六、二四五
寒天	四、六四六、四〇九
人造眞珠	四、五五七、五七六
絹手巾	四、四四八、四一七
菜子油	四、三一六、一三四
除蟲菊	四、二五一、八三一
毛織物	四、一五三、二九二
地氈	四、〇〇二、九四一
油精	四、〇〇一、七六六
昆布	三、九七五、三二七
麥酒	三、七五五、二三三
綿タオル	三、七二二、六一八
燐寸	三、七一五、三八三
紡織機械	三、六六一、〇八三
毛皮	三、六五六、六二三
眞鍮板	三、六三五、一四一

輸入の部

品名	金額（億・百萬・千・圓）
繰綿	五七二、六三九、九六五
羊毛	一〇一、八一五、八二六
肥料	九六、二二三、二六七
木材	八八、八三七、八七二
豆類	七八、七四五、五二四
小麥	七〇、八九六、一八四
硫酸アムモニユーム	四八、〇八六、一五四
原油重油	四六、六〇三、四五〇
石炭	四二、九七八、五一四
鐵板	四二、九四六、七二四
石油	三四、六八二、一九七
生ゴム	三三、八八五、五七一
砂糖類	三一、一五九、七四八
銑鐵	二八、四三五、四六六
自動車及部分品	二四、〇六二、五一三
米及籾	二三、七八一、五四七
大麻（黃麻マニラ麻ヘンプ及）	二〇、〇五五、八三七
毛織物	一九、九四一、三七八
鐵鑛	一九、三九七、七九五
毛織絲	一八、七三六、七〇四
故鐵及屑	一八、三四五、一二〇
瓦斯石油熱氣機關	一八、一一三、三〇三
紡績用機械	一四、四八六、六一二
鉛	一五、一六六、一九七
ワイヤロップ	一三、五七七、二五八
製紙用パルプ	一三、四八五、三三五
燐鑛石	一三、四五四、九四七
葉煙草其他	一三、二七〇、五七六
皮類	一二、八一三、六七一
麩	一二、三八四、七九三
飼料	一二、二六〇、六四八
アルミニウム	一二、四〇二、〇八一
鐵筒及管	一二、二五五、三七七
菜子及芥子	一一、一九九、九二七
硝酸曹達	一〇、〇五一、三三七
亞鉛	一〇、〇二七、三二七
自動車	九、五四五、八七〇
縫衣機	九、五〇二、〇八五
錫	九、二四三、三三六
綿織物	八、五七四、五七八
鳥獸肉	七、八七八、〇七六
機械油	七、五五一、二四六
革類	七、二八九、五〇七
時計類	六、九八七、七四一
發電機及電動機類	六、八三二、四〇九
硫酸加里	六、六七二、八六二
棉子	六、三八〇、九六一
銅	六、〇八八、七六一
苛性曹達	六、〇〇四、〇四三

努力奮闘！

日本を繁榮させませう

力一杯に働け

内閣總理大臣 濱口雄幸

人が世に處して進むところの情況は、恰もステーションに於ける改札口と同樣である。東京大阪邊りの大きなステーションの改札口では、一行列を作つて順々に改札を待つてゐる。

それは中々手間がとれるが、待つのが面倒だと云つて、横合から切符を切らさうと一旦列を離れて仕舞へば、最早列中には這入れない。最後に廻らねばならない。

即ち落伍者となる。處世上の事も、不正な方法で成功を急いだり、奇利を求めようといふ樣な考へが一寸でも胸中に閃いた時、それは墮落である。

人間の一生は常に緊張し眞面目でなければならない。

私は青年諸君に勸めたい。偶然の機會や、人の助けなどを賴らず、自己の力を信じ自己の力に依つて堂々と進まれんことを。

素より自己の力を信ずるに、その度を越してはならない。自分の力のあるまゝその通りを信じなくてはいけない。自ら天才なりと過信して不斷の鍛錬修養を怠つた者の最後は必ず失敗に終つてゐる。

然しながら、餘りに自分の力を信じなさ過ぎるのも亦不可ない。他人からは十丈けの力を持つて居る人物と見られてゐる人が、自分には五の力しかない、三の力しかないと餘りに卑屈に考へる爲め折角有用の材を抱き乍ら遂に何事も出來ず

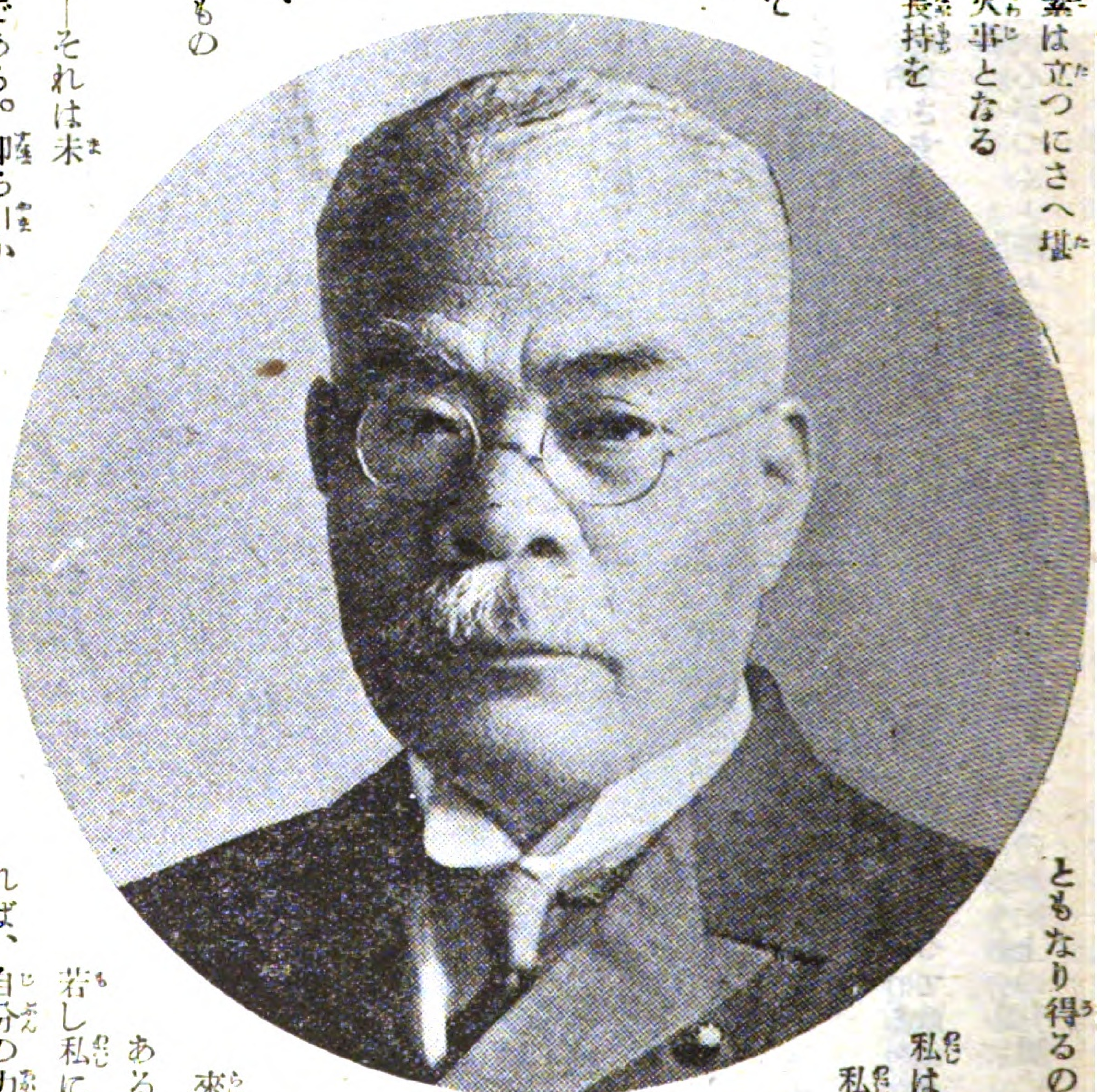
に一生を終ることの如何に多いことであらう。腕力の例でも分る、平素は立つにさへ堪へ兼ねた婦女子が、いざ火事となると、夢中になつて簞笥や長持を擔ぎ出すではないか。

人間は意外な力を藏して居るものである。私は諸君が自己の藏して居る力を一杯に發揮せられんことを勸める。

○

私の經驗によると、人は誰でも生れ乍らにして、相當の能力を持つてゐるものである。

勿論生れ乍らの能力――それは未だ粗製品であり、原料品である。即ち山から堀出したまゝの鑛石である。その鑛石は之を鍛へ、之を磨くことによつて、或は、正宗の名鐵ともなり、燦然たる寶石ともなり得るのである。



○

私は平凡なる人間である。併し私の半生を顧みて、自分は力のあらん限り努力奮鬪しようといふ信念だけは持つて來た。既に今日六拾一歳の馬齡を加へてゐるが、未だ最後までには相當の時日があると思つてゐる。苟も自分の生きてゐる間は過去の奮鬪を將來に向つてつゞけるつもりである。

若し私に何かとりどころがありとすれば、自分の力のあらん限り努力奮鬪すると云ふこと、唯それ丈けである。



山縣公の風骨

伯爵 清浦奎吾

私の官途經歴中の事柄は、山縣公との關係が一番深かつたであらう。私は山縣公の言行によつて、自分が官途に立つて事を處する上に頗る益することが多かつた。

山縣公はあのとほり極めて謹嚴なる大人物であつて、事を輕忽に爲さず、十分考慮に考慮を重ねて一たび斯うと決心がつくと斷々乎としてこれを敢行する人であつた。又實行に着手した以上は容易に中途で所信を變ずると云ふ事が無かつた。──どこまでも終始一貫的にやると云ふのが山縣公の信條であり生活であつた。

山縣公は元來が軍人であつて、中年以後に政界の人となられたが爲に公は、

『余は一介の武弁であつて政治を知らぬ』と常に言はれたが、なか〳〵その政治上の見識に於ても傑出してゐられた。

山縣公の祖先の藩主の連枝である有名な小早川隆景公は、

『戰は進軍の時よりも退軍の時の事を考へておくべきである。進軍は易いが、退軍が大事だ』と、その戰術を說いてゐるが、それは今日の戰爭に於ても同じであるのみならず又政治に就ても同樣に言へることであらう。

山縣公は、その出處進退に於ても、如何にも綺麗で、機を見て退くべき時にはさつさと退かれた。寧ろ投げ出しが早いと云はれた程であつたが、そのため雪隱詰めになるやうな見苦しい事がなかつた。これは思ふに公がこの隆景公の言葉を政治



上の規範として躬行せられたのであつて、その結果は却つて再起の機會が早いと云ふことになつた。

伊藤博文公も亦常に退く時が大事だと云つてをられたが、偉人の云ふ所皆その揆を一にするものがある。出處進退は男子の最も考ふべき點であつて、殊に退く時に退くと云ふ事は所謂晩節を全うする所以である。

隆景公の話は山縣公から、私の屢ゝ聞いたことであるが、眞に味のある話で、私もさう云ふ道を踏みはづさぬやうにと心がけてゐる。



日本紹介赤毛布旅行

伯爵　牧野伸顯

私が初めて外國に行つたのは、明治四年、當時、新日本を紹介する爲に岩倉大使一行を歐米各國にお遣はしになつた時であつた。私の父（大久保利通）も副使の一人として行くといふ事を聞いたので私は、子供ながら行きたくて堪らず、熱心に希望の結果、漸く連れて行つて貰ふことになつたのであつた。

船はアメリカ號といふ千八百噸位のもので一行百餘名の爲に殆ど借切りと云ふ有樣であつたが、六、七人の人を除くと、外國語の出來る人は殆どなく、思へば、隨分心細い旅行であつた。

同樣に外國の作法といつたやうなことは全く知らない。そこで船中にて日々講習會が開け一生懸命練習したものである。

すると、後年熊本縣令をやつた有名な安場保和など云ふ方は『我々は何も外國へ交際とか、婦人の機嫌取りとか、そんな事の稽古に行くのではない。國家の爲に見聞を廣めに行くのである。それに、外國人の行儀作法の眞似を强ふるなどとは以ての外だ』といつてとう／＼桑港から歸つてしまつたといふやうな逸話もあつた。

桑港に着くと、市長始め官民の盛な歡迎で一行大に面目を施した次第であつたが、何がさて向ふの風習が一向分らぬ爲、上陸早々、瓦斯を吹消したり、湯殿の中から裸で飛出したり隨分奇拔な失敗も可なりあつた。

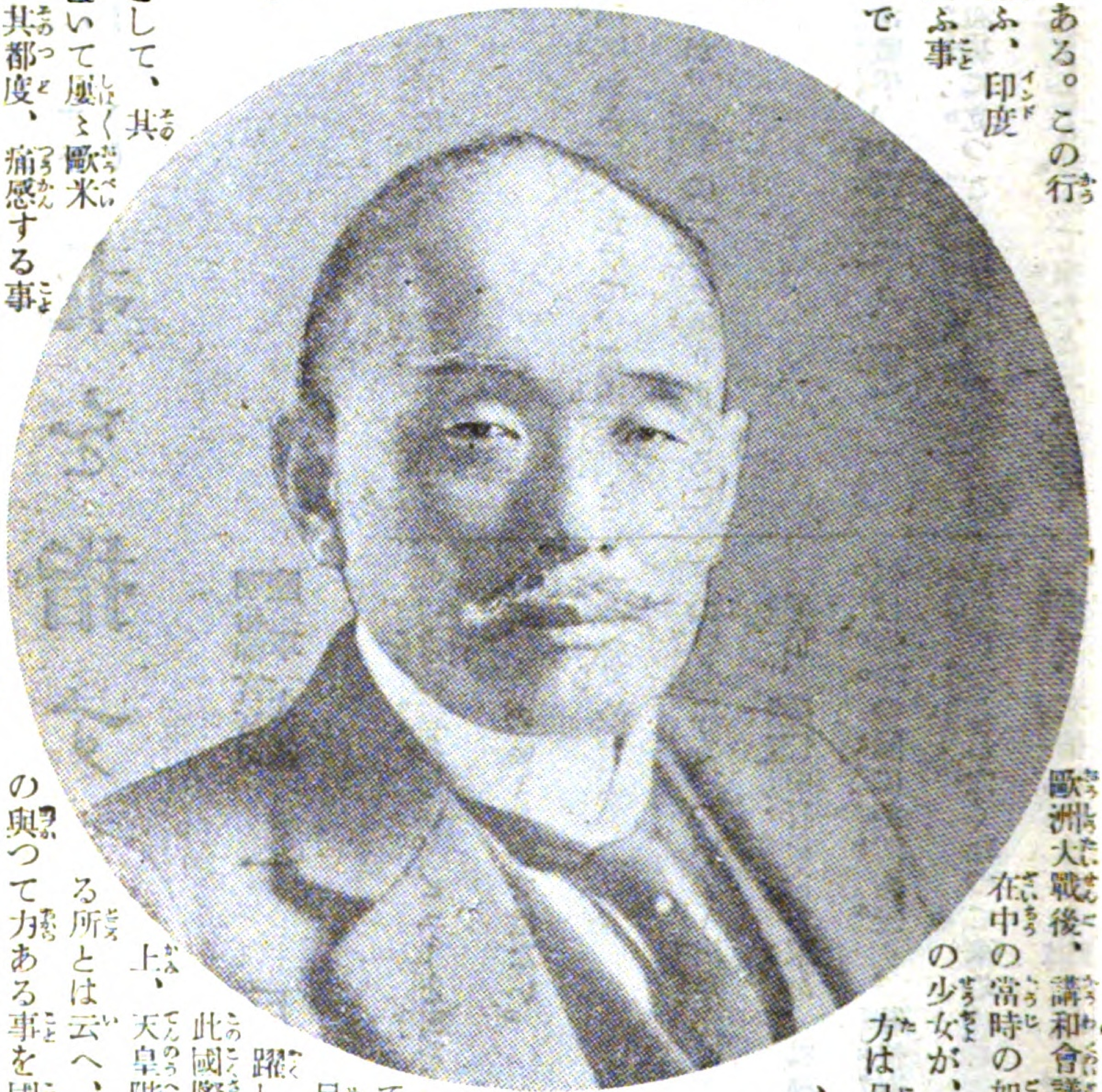
殊に正副大使が皆衣冠束帶で謁見などに行くときは、唯でさへ日本人は珍らしいところ、それにこの服裝だものだから、隨分奇異であつたに相違ない。ホテルの附近は、出入りの度每に人が一杯、まるで見世物のやうであつた。

それにしても當時までは、日本といふ國は殆ど歐米人の頭になく、たま／＼あれば支那の一部のやうに思はれてゐた。

だから、一行が通ると『支那人〳〵』と子供にはやされたものである。この行で初めて日本は支那とも違ふ、印度とも違ふ、特殊な國だと云ふ事を明にする事が出來たのであつた。

そんな狀態であつた丈にこの時の一行は全く眞劍であつた。當時の復命書は『歐米回覽記』といふ五冊に收められてゐるが、今日、外國視察の途に上る人が調べて見たいと着眼する事は大抵『回覽記』に載つてゐるのでも推して知るべしである。

私は此の洋行を皮切りとして、其後、十年、十五年と間を置いて屢々歐米に出張する機會を得たが、其都度、痛感する事は、日本の世界的地位の向上であつて、體のよい見世物であつた往時の事を考へると、まるで夢のやうな感がする。



歐洲大戰後、講和會議の全權として、巴里に滯在中の當時の如き、買物に行くと、賣子の少女が、私の顏をヂッと見て『貴方は日本の全權ですね』と云ふ。

食事の爲に料理屋に行くと『君が代』の吹奏裡に總員起立して迎へてくれるといふ待遇、實に感慨無量たらざるを得なかつた。今や英京倫敦に於て、我全權は世界の平和を目指して軍縮會議に於て活躍してゐる。

此國際的地位の向上は、勿論、上、天皇陛下の大御稜威の然らしむる所とは云へ、先輩諸氏の眞劍なる努力の與つて力ある事を國民は決して忘れてならぬことと思ふ。

常に北を指す

明治神宮宮司
陸軍大將　一戸兵衛

私が抑々初めて戰爭に出たのは、明治十年の西南戰爭であつた。

その時、私は咽喉から肩へかけて、貫徹銃創と云ふ重傷を負つたが、幸に一命は取り止めることが出來た。

それから、日清戰爭、日露戰爭と、續いて二大戰役に參加し、戰場に立つこと幾十回、形容すれば、千軍萬馬の間をくぐり拔けて來たと云ふ譯だ。

正直な話だが、最初戰場に立つ時は、流石に敵の彈丸は恐ろしい。ピユーと耳をかすめて飛んで來るのは決して氣持のいゝものではない。

『前へ進め』

の號令にも、つい〳〵出足がにぶるものだ。

然し、砲煙山野をたち罩め、喊聲四方に起るに及べば、恐怖は何時の間にか消え去り、壯快淋漓、寧ろ熱狂して、無茶苦茶に突貫したくなつて來る。

處で、恐怖に襲はれる時これに勇氣をつけ、熱狂に過ぎる時これに正しい判斷を與へるのは實にその指揮者である。指

揮者の任は重い。

之について思ひ出すのは獨逸の哲人、ヴラベウイッチの云つた言葉である。

『……船は大洋に乘り出した。時しも一天俄かに掻き曇つたと見ると、四方忽ち暗黒となり、西すべきか東すべきか、全く方向を失つて了つた。この時に於て、信頼すべきものはただ一つしかない。それは羅針盤である。羅針盤だけは如何なる時も北を指して少しも狂はぬ……』と。

部下を率ゐて戰場に立つ者は、是非斯うした羅針盤でありたいものだ。



イヤ、たゞひとり軍隊ばかりではない。廣く世の指導者、──家の指導者、村の指導者、國の指導者、その他あらゆる指導者に對し私は彼等も亦斯くありたいと思ふ。

近頃世間の有樣を見ると、指導者の地位にあるものが寧ろ狂つてゐて、一般から逆に彼れ是れと批判される樣なことが尠くない。これは何う考へても變な現象ではないか。彼等が眞に自覺してその羅針盤たるに十分思を致さんことを熱望せざるを得ない。

好少年クヱンタン

樞密顧問官子爵　金子堅太郎

明治三十八年七月五日、オイスター・ベーの朝は、朗かに晴れわたつて居た。ルーズベルト氏と私は、縁側（ピヤザ）へ椅子を持出して、昨夜の講和談判の話のあとをつゞけて居た。

そこへ、夫人が現はれて、そつとルーズベルト氏を呼返して別室で、何かヒソ〱とさゝやき合つて居たが、やがてル氏は、やつて來た。

『金子君、まことに相濟まぬが、一ツ御願がある』

と、改つて云つた。

『ほう、何ですか』

『實は、クヱンタンの奴、金子の小父さんに見てもらふんだといつて、今朝早くから手入をした馬具をつけて、折角芝生の上をのりまはして居る、處が誰が見向きもせず賞めてくれぬのでベソをかいて居る、可哀さうだから賞めてくれと、今家内からの頼みがあつた』

『いや、これはわるかつた』

と、私も笑つて了つた。

やがてクヱンタン少年、再び揚々として、仔馬にのつて來たので、私は大いに賞めたてたわけである。

後、歐洲大戰の際、獨逸戰線の上空に於て、勇敢に闘つて、つひに射落された米機がある。その操縦者は、大統領であつたル氏の子であるといふ報せがあつた。段々、屈指して考へると、その青年將校こそは、クヱンタンであつた。

戰後、獨逸政府から、屍は、發掘して送らうかといふ照會

に對して、ル氏はこたへた。

『落葉は、その樹の根に埋められる、戰士が祖國の爲に死した地に眠はる當然である、どうかそのまゝに賴む』

まことに、ルーズベルト氏らしい言葉だと思つて居る。彼は、怯懦を蛇蝎のやうに嫌つて居たので、その子を敎育するに當つても、正しかれ、淸かれ、而して强かれと敎へてゐたに違ひない。

彼は常に若い者に向つて云うて居る。

『若いものは、飽くまでも剛强であつて、如何なる鬪に於ても、滿腔の精神をさゝぐる覺悟がないと、好事業を成すことは出來るものでない、もし君等が、已に克ち、已の慾望を制する能はずして、その力を正義と公道に用ゐなかつたならば、その力たるや、却つて災となる、――フートボールを知つて居るか、あの遊戲の方則は、此うだ、强く打て、穢くやるな、避くるな、唯强く打て――若者よ、此の呼吸で行け』



彼自からがさうであつたので、後進を導くに當つても、常に此ういふ態度をもつて居た。

クエンタンは父の敎の如くに、父の望みの如くに、父そのまゝの態度をもつて、戰つたことであらう――今でも、あの好少年の面影が、私には忘れられない。

一笑一顰

貴族院議員
男爵　阪谷芳郎

日露戰爭當時の大藏大臣曾禰荒助氏は、生來大膽な人で、些しも細事に拘泥しなかつた。

『阪谷君、萬事宜敷く頼む！』

さういつた調子で、當時次官であつた余に一切萬事任せ切りであつた。

時は國家危急存亡の秋である、事は最も難關とする財政事務である、委せられた余の責任の重大なるはいふまでもない。

『身命を賭して、御奉公せねばならぬ』

勿論、余はその覺悟であつた。そして軍事費の調達に、戰時公債の發行に、國事多端の中を夜の眼も寢ずに活動をしたものである。

然るに、戰爭は順調に進み、滿洲の原野に、皇軍到る處靡かぬ草木もなかつたが、これと反對に帝國の財政は日一日と行詰つて行つた。

當路に在る余等の苦衷は、言語に絶するものがあつた。

さういふ中を、始終電話で面會を申し込む人があつた。それは某有力國公使館の書記官である。

余は能ふ限り暇を作つては、その人と面會をしてゐたが、會つて見ると別に重大な緊急問題がある譯でもない。唯談笑の間に別れるのである。

『この繁忙中を人の心も知らずして……』

と、密かに思はぬではないが、余は決して不快な顔もせず、談笑するのであつた。

處が何ぞ知らん、この書記官が歸國する際、打明けた言葉を聞いた時、余は、一大痛棒を加へられた如くハッとせざるを得なかつた。

書記官のいふ處は、かうであつた。

當時財政に行き詰つた日本は、今に兌換停止をするであらうといふのが、專ら外國の評判であつた。實際、そこまで財

説は行詰り、日本銀行に金貨はもう少しもなかつた。某元老

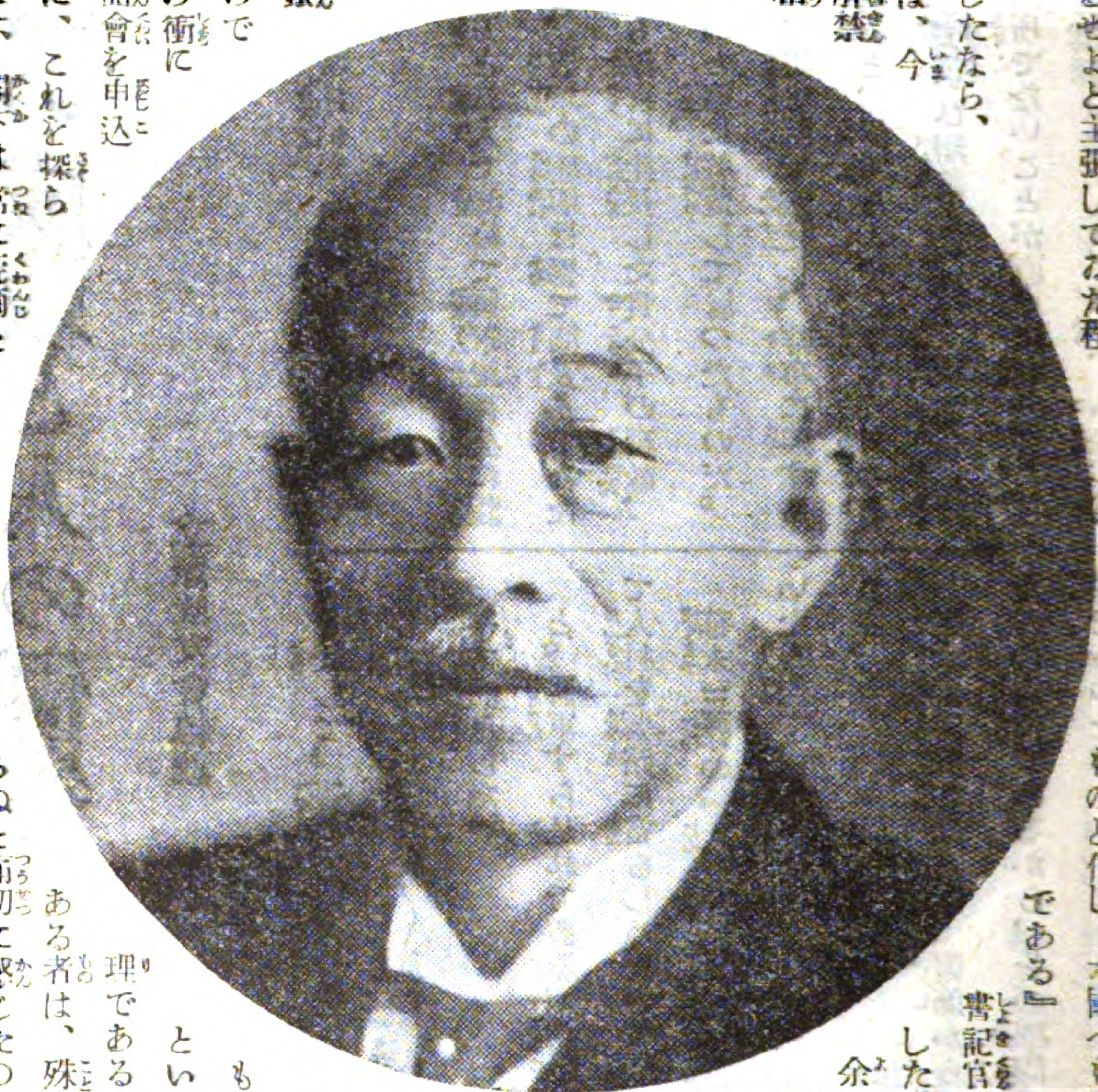
の如きも、極力兌換停止をせよと主張してゐた程

である。

併し、若しこれを實行したなら、その國際的に影響する處は、今八釜しくいはれてゐる金解禁などの比ではない。貨幣相場の動搖に伴つて、多數の人が莫大な損害を蒙らねばならないのだ。

故に、兌換停止を一刻も早く知ると否とは、外國としても重大な問題である。

『かういふことは、日本銀行へ行つて見ても分るものではない。そこで私は、その衝に當つてゐる閣下に屢々面會を申込み、閣下の一顰一笑の間に、これを探らんとしたのである。然るに、閣下は常に莞爾と



し、談話に何の屈托なきを見て、我は兌換停止を實行されぬものと信じ、本國へもその如く報道して置いたのである』

書記官は、さういつて呵々大笑した。

余が、腋下に汗を覺えたのも當然である。何事も知らず、唯普通の交友と信じてゐた一顰一笑が、國家の財政方針をトするバロメーターに用ひられてゐようとは、神ならぬ身の誰かよくこれを知らうや！

余はその時以來、『君子は一顰一笑も苟しくもせず』といふ言葉の動かす可らざる眞理であることを知つた。そして責任ある者は、殊に、その言動を愼まねばならぬと痛切に感じたのである。

事の成敗と人の優劣

立憲政友會總裁　犬養毅

吾輩は曾て後藤象次郎伯から、斯う云ふ話を聴いたことがある。

『自分が小松帯刀と二人で初めて將軍慶喜公に謁見した際のこと、將軍の聰明は豫て聞及んでゐたが、何をいふにも深宮に生長した貴公子の事故、多寡の知れたものと竊に輕蔑して居つたものだ。ところが登城して黑書院で謁見し、時事に關する意見を陳べて見ると、豈料らんや將軍は海外の事情にも通じ、識見といひ辯論といひ、到底田舎侍たる兩人の及ぶ所でないことが直ぐに判り、しどろもどろの態で引退つた。その途中、小松が言ふには、殿中の儀式の莊嚴と將軍の英明には一驚を喫して、覺えず冷汗背を濕した。お互豪傑を以て自ら任じてゐるが、まだ〳〵眞の豪傑たるには遠い、と、互に顧みて嘆息した』

と。將軍すら是れである。當時の幕府は、異例の拔擢を以て人材を要路に當らしめたので傑物は仲々多かつた。幕末三傑の一人岩瀬肥後守（鷗所）なども、一頭地を拔いた人傑で、幕末の人材は多く此人の推挽を蒙つたものである。

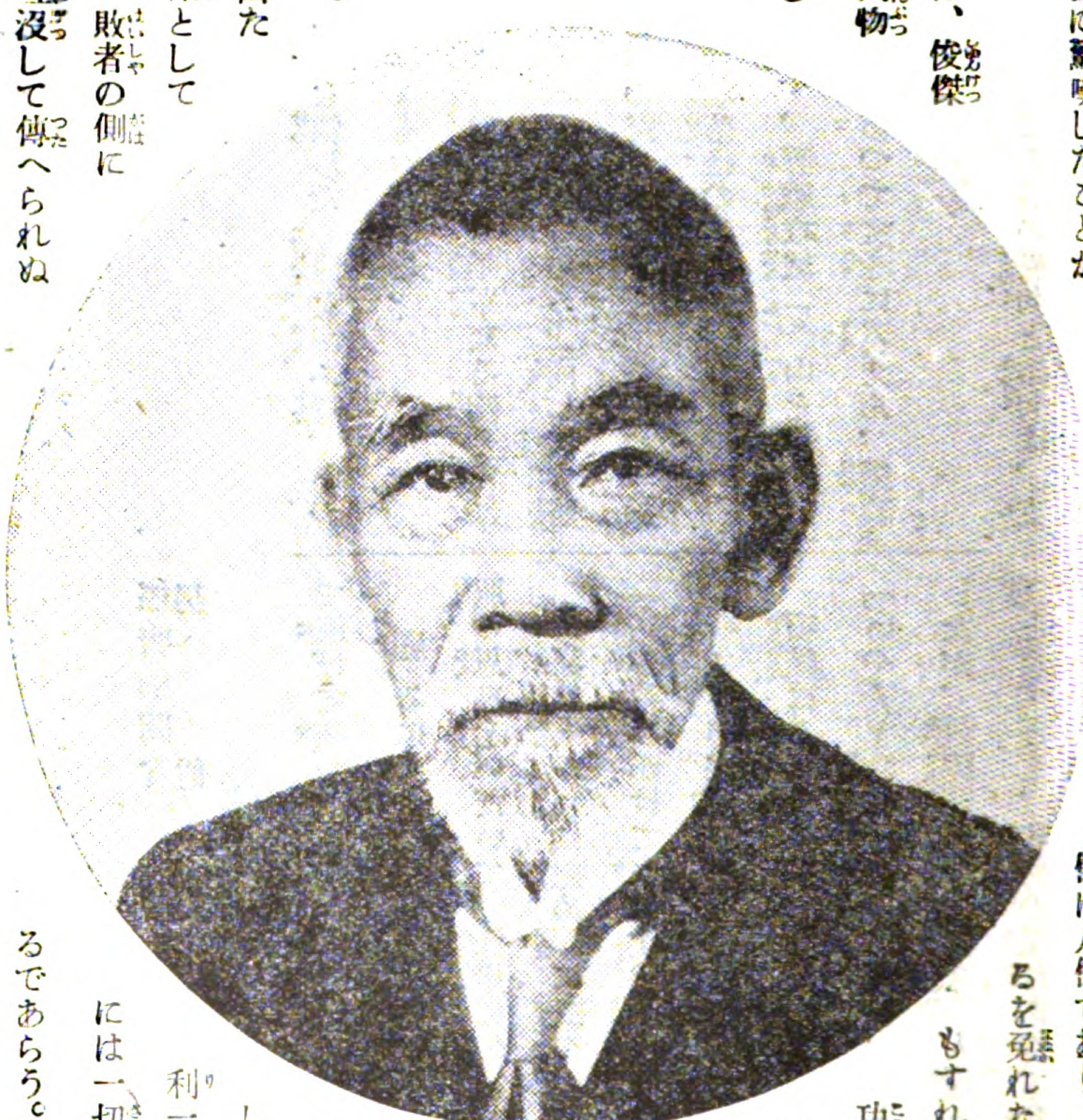
栗本鋤雲先生なども、醫師から表役人に破格の拔擢に逢つた程の人物であるから、その學問、識見、膽力共に一代の奇傑であつた。

水戸からも人物は澤山輩出したが、就中原伍軒は傑出して

ゐた。吾輩曾て伍軒の『脱牖記略』を讀んで、その政治的識見と、實際的能力との卓拔に驚嘆したことがあつた。

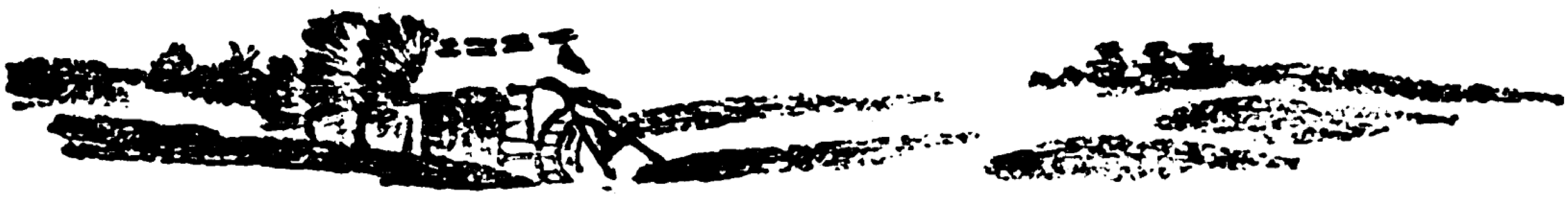
斯樣に幕末多難の際には、俊傑雲の如く輩出したから、人物論から言へば多士濟々であつたが、時勢轉換の氣運は、人力を以て奈何ともすることができず、遂に敗滅の已むを得ざるに至つたのである。

さて勝敗の數が定まつて見ると、勤王の雄藩から出た大官は、生れながらの人傑として立派な傳記が作られたが、敗者の側に立つた舊幕の人傑には、埋沒して傳へられぬ者が多い。



元來、事の成敗と人の優劣とは別問題で、失敗しても人傑は人傑であり、成功しても凡庸は凡庸たるを免れないのであるが、世人は動もすれば其區別を忘れ、所謂成功者であれば、詐欺師でも泥棒でも、之を推重し、死すれば直ちに偉人豪傑に祭り上げてしまふ。

若し斯くの如くして世に道義もなく、氣節もなく、社會の制裁もなしとすれば、後來の人は名利一點張りで、之を遂る爲めには一切手段を擇ばぬやうになるであらう。吾輩の憂ふる所は茲に在る。



心約

樞密顧問官
男爵　山川健次郎

私は乃木大將の死を決した心情を懷ふ時、いつも犇々と胸を打たるゝものがある。

私は思ふ、乃木大將の死は、唯單なる殉死ではない。大將自身の心約の實行である。而して大將の偉さがここにあるのだ、と。

乃木大將が、旅順陷落後の述懷に、

『皇師百萬强虜を征す、野戰攻城屍山を作す、愧づべし、我何の顏あつて父老に看えん、凱歌今日幾人還る』

といふ詩があるが、この詩の轉句と結句は、支那の項籍の故事に據つたものである。

楚王項籍は、漢に敗れ、主從ばら〳〵で烏江まで逃げて來た。

顧るに兵卒の多くは敵の馬蹄に蹂躙された樣子、彼は斷腸の思ひをいだいて、江岸に佇んだのであつた。

宿場役人の長は慰め顏に云つた。

『敵が追ひかけて來ます。早く揚子江をお渡りなさい。江東は小さいが、王となるにはまづ〳〵不足はありますまい』

項籍はこれに答へて云つた。

『いや〳〵我は江東の子弟八千人と共に江を渡つて西に出陣したが、皆戰死して、我今一人還る。假令父兄が我を憐んで王となすとも、我何の面目あつて父老に見えん、獨り心に愧ぢざらんや』と。

さうして項籍は遂に自ら頸を斬つて死んだのであつた。

乃木大將が、遜懷の詩を作る時、項羽の故事を思ひ浮べ、我も亦項籍の如く六萬の戰死者の跡を追はうと心に誓はれたと想像することは、無理ではあるまい。

一體、約束には四つの種類がある。第一は證約といひ、約束を明白に書きつけて相手に出すもの。第二は口約といひ、口約束である。第三は默約といひ、前後の事情から所謂以心傳心で約束の意志を相手に示すもの。そして第四が、心約である。

心約は、約束するものゝみ知つてゐて、相手は少しも知らぬものだ。故に餘程克已心の強い人でないと兎角行はれ難い。よく神佛に大願成就の曉は、堂祠を建立するなどと心約をしたものが、成功後僅かに鳥居か燈籠を奉納して濟ましたといふ話がある。



乃木大將は、心中窃かに部下に誓つて、部下のみ殺しはせぬといはれたに相違ない。そこへ明治天皇の御事があつたので、その御供をすると同時に、豫ての心約を果されたと、私は確信してゐる。

旅順の山河に斃れた六萬の忠勇なる士卒を眼前に思ひ浮べ乍ら、從容として死に就かれた大將の心中に思ひ到るとき、自ら熱涙を禁ずる能はざるものがあるではないか。



雞の蹴合

頭山滿

俺が十二三の頃ぢやつた。隣家の主が軍鶏好きでな、一番大きいのが九斤、次が八斤、小さいのが五斤、この三羽の鷄を買うてきたが、小さいのは迚もいかん、お前にやらうかといふ。ウム、貰はうと、此奴を引きとつたが、さて其處で、俺は考へた。

——小さくても、負けるといふ譯はない、人間だつても、場合によれば、五尺に足らぬ小男が、六尺豊かな大男と喧嘩をして、みごとに勝つことがある、此奴、一番仕込んでやらうと思つて、俺は、軍鶏の飼ひ方を研究した。まづ毎日、南天の葉を煎じた湯で、身を洗つてやる、それから蚯蚓をとつて來て喰はせてやる、これも、細かく切つて玄米にまぜてくはせるので、仲々手數だが、毎晩十二時迄寢ないで、飼ひたてた。

此うして五月ばかりたつた。

『さア、爺さん、蹴合をさせて見ておくれ、きつと、あの小さいのが勝つから……』

主は、てんで相手にしない。でも、試みに八斤の奴と、蹴合はせて見ると、俺が飼ひたてた方が、餘程強かつた。

『これは妙だ』と、主が今度は九斤の鷄をもつて來て、蹴合はせると、又して蹴捲つて了つた。

それからといふもの、俺が手飼の此の鷄は、どんな奴と戰つても負けたことはなかつた。

——國家も、軍鶏と同じで、勝ちぐせがつくと好いが、負け癖がつくと、列強角逐の中に落伍するのは知れて居る。日本の外交を見なさい。明治初年にパークスといふ頑固な軍鶏が居つてからに、日本の外交官を蹴捲つて、ぐうの音も出させず、さん〳〵な眼に合はせ居つた。一度、外交談判で外國

をやッつけた認識があると、これ程でもなかつたらうが、どうも外交ではいつも敗をとつて居るのは、パークス以來の負け癖が累ひして居る。

國家の事のみぢやない、個人の修養についてもさうで、友人の佐佐友房が、俺にいうた事がある。

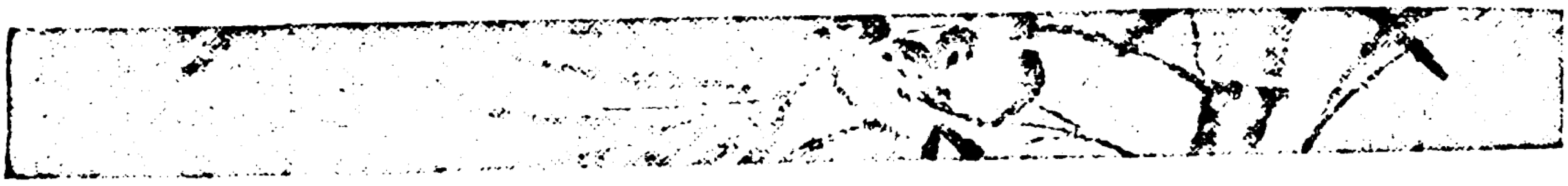
『孟子は富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、これをこれ大丈夫といふと申して居る、俺もいろ〳〵やつたが、此の中威武貧賤には大概打ち克つことが出來た、ところで、富貴といふやつには、時々手古摺る、これには打克つことは困難だ』

かういふ述懐である。よつて俺は云うた。

『眞に一を得れば他は同じだ、とりわけ難しいの、やさしいのといふ譯はない筈。勝ち初めに一つだけ、ほんとうに克服出來れば、あとは必ずしも二つとはいはぬ、百でも千でも同じことだ。一度鬪合に於て、完全に勝つた軍鷄は、それから後は、どんな強い奴にでもぶつかつて、必ず勝つ、俺はさういふ經驗を有つて居るが、人間の心の働きもそれと同じだらう、どうだね』

佐々は、これを聴いて、豪いことを云ふな、ほんとにさうかもしれぬと、ひどく感心して居た事がある。だから、どんな凡人でも、克服しようといふ心教を目標として、これを完全に打破ることに成功すれば、修養の第一段階に足をかけたも同然となる。俺はさう信じて居る。





萬人皆我師なり

樞密顧問官
男爵　田健治郎

或る日、徳川家康は、本仁房と雙桂とに將棋を指させた。

試合は、巳の刻（午前十時）から始まり、近臣も多勢集つて見物してゐたが、本仁房に利運あつて、雙桂は唯一手といふところまで追詰められてしまつた。ところが雙桂は思案に思案を重ねてゐて容易に手を下さず、また負けたとも云はない。

『外に手のある筈もないのに、何を考へてゐるのだらう。未練な奴め！』

近臣の面々は退屈して、ぶつ〳〵と不平を鳴らし始めた。しかし雙桂は只じつと考へてゐる。とうとう夜になつたが雙桂はまだ手を下さない。

『試合は長引くやうだから、明日のことに致せ』

と流石の家康も、本多上野介にさう命じて立たうとした時、雙桂は『暫く』と聲かけて、漸く手を下した。そして三十一手で、ばた〳〵と逆に本仁房を詰めてしまつた。

家康は之を見ていたく感じ入り、

『天下の事、何事もこれだ。萬人の見る眼に最早最後と思ふ場合でも忍耐してやつて行けば工夫があるものぢや』

と家臣を訓誡し、自分も悟るところがあつた。

この事實は、『大阪御陣の前、駿河にての事なりとぞ』と山鹿素行は書いてゐる。

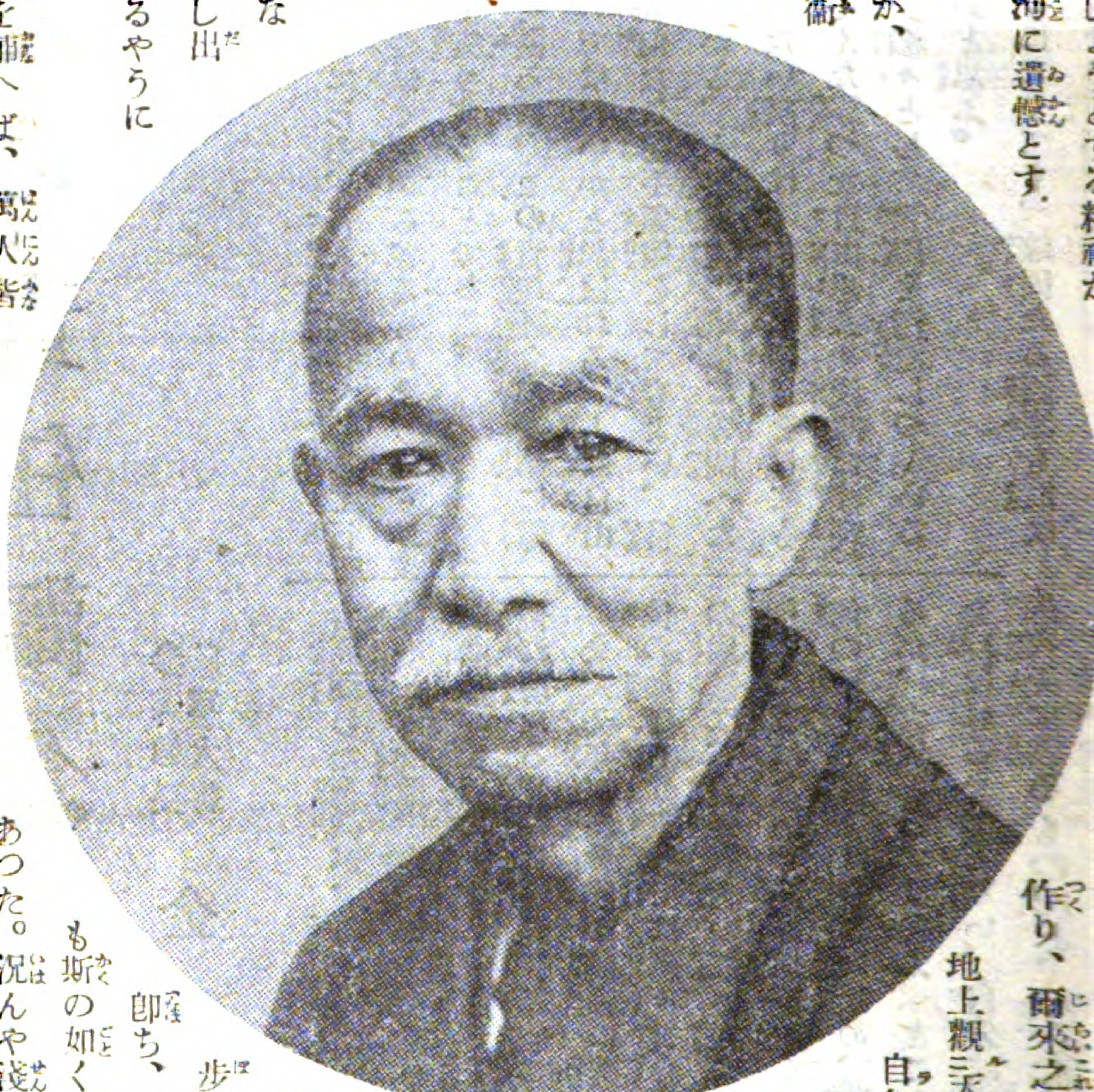
あの大阪城攻撃中、幾度か難局に立つた時、家康は雙桂のこの最後の粘着力を考へた事と思はれる。

高が慰みに見てゐた將棋でさへも、偉人は斯うして自分の修養の糧としてゐる。

然るに現時の風潮、自我意識のみ徒らに發達し、他人の長所を見て、自己の修養にしようとする精神が極めて薄らいでゐるのは洵に遺憾とすべきことである。

幕末の砲術家高島秋帆が、弟子であつた江川太郎左衞門に、己の知らぬ處を聽いたやうな雅量と修養心の乏しきは勿論、甚だしきになると、驅出しの書生が、先輩を訪ねて自分の說を聽かせようとする者さへ見受ける。人の長所を採らうとする精神がないから、人の缺點のみ探し出して、これを誹謗罵倒するやうにもなるのだ。

『人の長を採り我が短を補へば、萬人皆我が師なり』といふ語があるが、誠によく云つたもので



ある。

私は明治十一年、二十四歳の時、次のやうな詩を作り、爾來之を座右の銘としてゐる。

地上觀二天轉一、船中覺二岸流一
自知難レ如レ是　克レ己在二反求一

地上にあつては地球の廻るのに心づかず天が廻る樣に思つたり、船中にあつて舟の進むを知らず岸が流れるやうに感ぜらるゝと同樣、己れに克つといふ事はお互實にむつかしいものだ。日夜、自己の行動を反省して行く事が修養の第一步であるといふ意味である。

即ち、家康や秋帆の如き大家でさへも斯の如く目下の者の行を見て學ぶ所あつた。況んや淺學不敏の我々は、深く此點に考へる所がなければならぬ。

眞の責任觀念

參謀總長
陸軍大將　金谷範三

國家にしろ社會にしろ、吾人が共存共榮して行く上に、最も重要缺ぐ可からざるものは、お互ひが自己の責任を完うすることである。

現今の世相を觀るに、この責任觀念が次第に薄らぎつゝあるのではないかと思はれる。人は自由であるから、如何なる勝手氣儘をしてもよい、言論は自由であるから、人を罵詈罵倒して差閊へない、法律に觸れない限りは、何んな不正をしてもよい――と、そんな誤つた自由思想や淺薄な權利義務の觀念が、滔々として世態を汚濁しつゝあるのではないのかと思ふ。

これでは何日になつても、確固たる國家も麗はしい社會も出來よう筈がない。

そこで私は常に憶ふのだが、この責任觀念の最も高潮した實例が、あの赤穗義士の行動だと思ふ。彼等が一家妻子は勿論、自己の身命さへも擲つて、あれだけのことをせねば、主君に對する責任が完うされないと考へたのだ。輕佻浮薄なる責任者流の到底企て及ぶところではない。

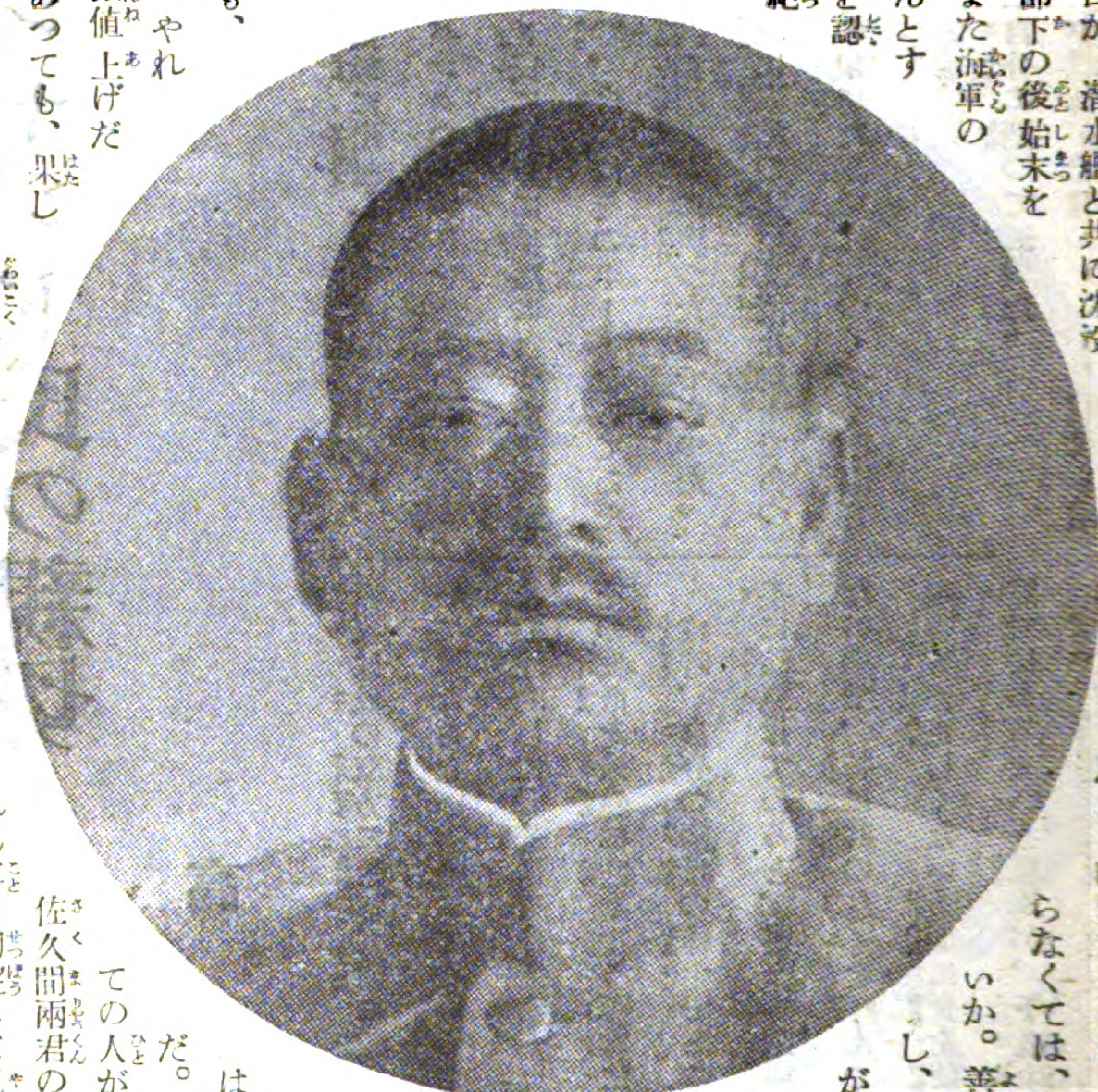
また先年軍法會議の判決に先つて自殺を遂げた水城海軍大佐の如きも、世間では種々批評する者もあらうが、私は、あの處置は、責任觀念の强い人にして始めて斷行し得るものと信じて疑はない。誰も知る如く、海軍の夜間攻擊演習で、大佐の軍艦が衝突沈沒した爲め、軍法會議に附せられたのであるが、大佐としては言ふべきことはいひ盡した、他から責任を問はれるまでもない、自分は充分その責任を知つてゐる、罪萬死に當るものだと、自らあの立派な處決をしたのである。高位高官が自己の地位を利用して惡事を働き、その判決の輕きを待つ者の如きとは、根柢から相違した立派な精神で

はないか！

また先年佐久間海軍少佐が、潜水艦と共に沈沒した時、最後に至るまで部下の後始末をし、陛下に對し奉り、また海軍の先輩に對し將に息の絶えんとする時まで筆を執つて遺書を認めたことは、責任觀念の絶頂でなくて何であらう!?

是非善惡を批評する人は澤山ある。責任を論じこれを高潮讃美する者は多い。併し、實行の伴はぬ議論批評は、何の役にも立たない。否寧ろ弊害のみ多いものだ。

今日の勞働問題の如きも、徒らに外國流を模倣して、やれ八時間勞働だ、やれ賃銀値上げだと、權利の主張のみ急であつても、果してこれに實行が伴つてゐるであらうか？ 外國でさうだからと、日本もさうすべきだといふ議論は考へ物だと思ふ。時間だけ短縮しても、それだけの能率が擧らなくては、餘りに無責任な主張ではないか。善いことは眞似るがよい。併し、それには準備と責任觀念とが必要である。



十時間勞働を八時間勞働としたら、八時間で十時間の仕事をなし遂げるだけの責任觀念がなくてはならない。否、その實行力がなくてはならない。

兎角實行力の乏しいのが、目下の世態の通弊である。實行が伴はないのは、眞の責任觀念がないからだ。事の大小を問はず、余は總ての人が、赤穗義士の精神や、水城、佐久間兩君の如き精神で、總ての事に當られん事を切望して已まない。



シャンド氏の親切

高橋是清

外債募集の爲倫敦に出張してゐた時、自分は、當時の、パースバンクのロンドン支店の副支配人であつたシャンド氏に非常に世話になつた。氏がまだ横濱に居た時、自分はそのボーイをしてゐた關係から、特に其指導盡力に與つたのであつた。

シャンド氏は誠に人格の高い立派な紳士であつたが、中にもその親切な點では、つくづく感服させられた。

或る時、氏は自分に語つて云つた。

『銀行としては預金者も大切であるが、銀行の金を使つてくれる得意先も又極めて大切である。銀行家は此の双方に對して常に信を重んじ、敬意と親切とを缺いてはならない。從つてその親切たるや、顧客の金の使途にまで注意して、若しその使途が良くないと氣付いた時には、その失敗を未然に防ぐやう顧客に忠告すべきである。

或時、自分の銀行の株主である人の息子の振り出した小切手に注意してゐると、どうも賭博か遊興に使ふとしか思はれないので、特に其の息子を呼んで、

『貴方が正しくない方面に金を使はれるのは、親御さんの本意ではあるまいと思ふが、今後注意されては如何ですか。もし貴君が尙私の忠告を聞かなければ、私としても貴君の親御さんに、此の事を報告せねばならぬ』

て、危く邪道に深入りしようとした人を救つた事がある。

さう云ふ人である丈に、シャンド氏は個人的の交際に於ても、いよ〳〵親切を爲した人であつたが、その癖、人を世話したといふやうな顔はちつとも見せなかつた。

私がボーイ時代のお禮を申述べようとすると、氏は忽ち話頭を轉じて、知らぬ顔をするばかりでなく、どうしても其の事を云はせまいとするのだつた。

これは私ばかりでなく、私の娘が同じくロンドンでシャン



『横濱では父がいろ〳〵お世話になりましたさうで……』

と挨拶すると、

『そんな事は知りません、何かの間違ひでせう』と、そらして了つて、何と云つても受付なかつたと云ふことである。

人情浮薄、誠と愛とが兎角失はれがちな今日、實に立派な珍らしい態度である。

シャンド氏は今も健在で、互に文通をしてゐるが、時節柄氏を思ふ一層切實なものがある。

滑稽小説 雲を摑んだ男

川上三太郎
挿繪　田中比左良

◇第二十番大吉の事◇

出世地藏の御緣日を突切ると——

『あの、おみくじを買つて下さいな』

七ツか八ツの女の子です。三助はフト故鄕の妹を思ひ出しました。

『おみくじ？　おみくじを賣るのかい？』

『いゝえ、おみくじのやうに出來て居る辻占なンです。よく當ります』

小さい口から出るお世辭です。

『よし買つてやらう、幾らだい？』

『一枚五錢です』

五錢と聞いて彼はグーと咽喉が詰りました。といふのは實は彼の懐中には五錢の白銅一つしかなかつたからです。[illegible]



出來ません。

『よし、そら五錢！　落すンぢやないよ』

そのくせ自分が落したやうな心持でした。

『ヤレ〳〵到頭これで本當の一文無しになつてしまつたぞ。田中三助最後の五錢玉、遂に一片の紙片と化すか！』

しかもその上三助は一昨日から飯といふものを食はないのです。それで最初の日は水を飲んで我慢

をしましたが、二日目の晩日になるともう胃袋が水を受附けなくなりました。それが今日は益々甚しく、往來を歩いて居ると總ゆる物がみンな食物に見え出しました。現に今もフト下駄屋の前を通りかゝると、何と店先で小僧が鼻緒をすげて居る支那桐製の書生下駄が、色なら形ならそツくりその儘あの狐色の食パンに見えたではありませんか。そこで三助ゴツクリ唾を飲み込んで慌てて御緣日を突切つた途端、例の女の子におみくじを賣りつけられてしまツたので――。

『僕のやうな若い者が、時代錯誤のおみくじを買ふなンて、全く馬鹿な話だな』

彼は生れて初めておみくじなンてものを見るのです。それは斯んな格好をしたものでした。然しおや〳〵、へヽエ、これは迚も素晴しい運勢です！彼は思はず大きな聲で讀み上げました。

第二十番大吉

希望成新改	あらたなるねがひのぞみごとすべてよし
即日喜悦重	たちまちよろこびあまたあるなり
貴人救助來	めうへのたすけありていよいよちからをますなり
福祿耀前程	くわんろくざいさんおもふまゝにかゞやきみつるべし

○ぐわんまう叶ふべし○病人ほんぷくす○うせもの出る○やづくり、ひきこしよし○たびだちよし○むことり、人をかゝへる、よろづよし



三助はムキになつてもう一度大きな聲で讀みました。が、フト氣がつくと冗談ぢやない。

『何だ！一昨日から飯も食はない一文無しの今の僕に、大吉とは飛ん

でもないおみくじだ。ハ、ハ、ハ』

笑ふ聲さへ腹へ響きます。その儘ピリ／＼破かうとする途端に、その手を優しくおさへたものがありました。

『あの、そのおみくじを何うぞわたくしに頂かして下さいまし』

三助ハッと振り返るとこれは闇にも白い百合の花の、二十ばかりの娘さんです。

『病人の母親が是非お地藏さまのおみくじをと言ひますので、只今頂いて來たので御座いますけれど、それが餘りよくないおみくじなので御座います』

愁を含むその聲に三助思はずつり込まれて、

『ハ、ア』

『母はながいこと煩つて居ります。これを見たらさぞ力を落す事と、實は途方に暮れて居りました。すると只今あなたのお讀みになつたおみくじ。二十番の大吉と伺ひまして、飛び立つばかりに羨やましく、見ればその儘お棄て遊ばす御容子なので……』

『解りました。それでお母さんに勇氣をおつけになる爲めに、此の大吉といふやつを持つて歸り度いと仰言るンですね』

『はい』

『これがお役に立てば結構です。さあ／＼お持ちなさい』

『久々で母の悦ぶ顔が見られます』

『お母さんを大切になさいよ』

『有難う存じます。これがわたくしの頂いたおみくじで御座います』

『さあ／＼早く歸つてお母さんの看病をして下さい』

『はい、本當に有難う御座いました』

その喜んで立去る姿。三助は一寸感傷的になりました。『感心な娘さんだな』

ところがその感傷的も忽ち一昨日から騷いで居る腹の蟲の爲めに見事に叩き潰されて、一層猛烈な勢ひで三助の腹はグー、グー鳴り出したのでありました。

『あゝ何か食ひ度いな――』

此の時の三助の鼻は實に敏感でした。彼は忽ち何處かで何か煮て居る匂を嗅ぎ當てたのです。三助の身體は殘らず胃袋になりました。

『ヤ、ヤ！牛肉だ！あゝ、あの蝙蝠の羽根みたいなやつを、箸で挾んで斯う口へ入れて、キウと嚙みしめたら、何ンなに熱くつて美味くツて――』

思はず二三間、その匂のする方へヨロ／＼、小ぢんまりした古い門構へ。牛肉の匂は奥の母屋から春の夜の、柔かい空氣に乘つて來るので……。

『此家だ！』

さう思つて何氣なくフト門札を見上げて、彼は思はず飛び上りました。だつてこれは何うだ！そこには、

田中三助

『ヤ、ヤ、ヤ！　こりや僕と同じ姓名だ！』

―◇三助忽ち氣絶の事◇―

田中といふ苗字は隨分ある。然し三助なんてのは錢湯の流し場以外餘り活躍はして居ない筈だ。それだのに堂々と田中三助――しかも此の三助奥でパク〳〵牛肉を食つて居る……。

彼は思はず玄關の方へ迷ひ込みました。否、迷ひ込まうとしたのです。すると此時横合から突然一人の紳士が現はれました。

『失禮ですが田中さんでいらッしやいますな』

『エ、、僕田中ですが……』

『これは恐縮でした。では早速あの自動車へ――おい、運轉手。先生はお待ちになつて居て下すつたんだ』

『僕は自動車を呼びはしませんよ』

『いや、私の方からお迎へに參りましたので、何しろ、奥さまがお急ぎなものですから』

『何？　何か起つたんですか？』

『何かどころぢやありませんよ、奥様が大變です。兎に角、早くお乘り下さい』

運轉手と助手がマゴマゴしてゐる三助を引張るやうに自動車の中へ押込むと、矢を射る如く走り出しました。

一寸落つくと、例の紳士は益々慇懃な樣子で、

『私は柳田家の者で、山崎と申します』

『柳田家？　へ、エ』

『[illegible]を顧みず突然お迎へに上りました。ところがもう一足で先生は外出なさる、まことに危機一髪で御座いました』

ハ、ア、さては僕をあの田中三助と間違へて居るのだな。こりや大變だ！

『然し、その、僕田中は田中ですが――』

『イエ、何もかも承知して居ります。先生は少しも邊幅を飾らぬ、服裝風采に無頓着な、極めて無雜作な方であるといふ事。それは豫々私共も聞及んで居ります。その代り先生。田中三助先生はお若いに似合はず博士といふ肩書あるが爲めのみでなく、化學者として有名である事も、矢張りよく承知して居りますので、エヘ、、ヘ』

『こりや驚いた？』

『マア〳〵先生。時にお煙草、如何です』

五六日前からバットも吸へなかつた三助の口は、煙草と聞くなり章魚のやうに尖がりました。

『イヤこれは……』

あゝ久し振りの此の氣持です！　全で百年も吸はなかつたやうです。一息――二息。すると忽ち頭がグラ〳〵として意識朦朧、何だか星みたいなものが五六十、パチ〳〵眼から飛び出しました。

あ、こりや不可ない。空腹に煙草――田中三助に田中三助――牛肉の匂ひ……到頭三助は陸へ上つた潜水器みたいにクタクタ

ッ』と、自動車の中で三ツに折れました。

『ヤア大變だア。先生が氣絶したぞ！　おい運轉手、早くお邸へ！　お邸へ早く――』

◇第十三番大凶の事◇

『先生、お氣を確かに……』

フト氣がついて周圍を見廻すと、こゝは實に立派な洋風の容間です。彼が烟草に醉つてボーとして居る中に何時の間にか此の客間の安樂椅子へ運ばれたらしい……。

『いやそれで安心致しました。では早速奧樣がお目にかゝりたいと仰言つて居りますから』

『奧樣？』

『エヘ、ヘ、。では早速』

彼はドアを排して姿をかくした。

『こりや大變な事になつたぞ！』

三助起上りました。さうして水差の水をグッと呷つて、口をふくために懷中から半巾を引ずり出しました。するとオヤ！　何かばたりと落ちた物があります。

『オヤ？』

拾つて見るとそれは最前出世地藏の御緣日で、例の娘さんが自分へ手渡したおみくじの紙片でした。

『さう〳〵、何でも病人が力を落すおみくじだと言つてたツけ……』

なるほど讀んで見ると惡いおみくじです。

第十三番大凶	
逆風反走船	ことすべてこゝろざしにはんするなり
雲烟如捕捉	よろづのことすべてくもをつかむがごとし
小花要小心	ちひさきことに氣をつくることなによりかんえうなり
再見是懸命	ふたたびあひたるときはいのちがけ一心ふらんになるべし
○くわんまう叶はず○病人ながびく○うせもの出ず○やづくりひきこしわるし○たびだちむよう○よめとり、むことり、人をかゝへる、すべてわるし	

『こりや酷いな。だが待てよ。然し一寸當つて居る點もあるぞ。第一此の、

逆風反走船｜ことすべてこゝろざしにはんするなり

といふ最初の文句なンぞは、現在の僕にピツタリだ。全く僕は斯んな家へ來る氣なンか少しもないのだ。それだのに無理矢理否應なしに腕力で連れ込まれてしまつた。これ正に、事すべて志に反する也――だ。ホ、ウ、こりや妙だ。ヘ、エ！』

ところで次の文句は何うだ？

雲烟如捕捉｜よろづのことすべてくもをつかむがごとし

『……雲を掴むが如しは心細いな。一體これから何うなるンだらう？』

此の時突然扉が開きました。

『先生御氣分は如何で御座います？』

[illegible]

した。
『はア、もう全然、その……ですが――』
『まあそれで安心致しました。初めまして、妾、柳田の家内で靜子と申します』
『はア、僕は田中三……』
助といはうとする矢先を早速引とつて、
『イエ豫てからお名前は存じ上げて居ります。それ故實は折入つてお願ひがあるので御座います』
『はア、ですが、然し、その……』
『一箇月程以前から良人――御承知でいらつしやいませうか。柳田金五郎……』
柳田金五郎といへば有名な富豪です。何時もその人の財界展望談や骨董趣味談なぞが新聞や雑誌に出て居ます。三助も自分が提灯で向ふが釣鐘ほど違ふ意味で、柳田金五郎氏ならよく知つて居ました。
『その良人が九州方面へ旅行の留守中、平素から良人がそれはそれは大切にして居る猫が行方不明になつてしまひましたので――』
『ネコ？　あの魚屋が來るとニヤア〳〵啼く猫ですか？』
『イエ猫と申しましても黄金製の置物の猫なので御座います』
黄金むくの猫？　それは大變だ！
『それが良人の留守中紛失したのでございます。どうしたらよいか、妾は困り切つてゐるのでございます』
『なるほど、御尤です。然し、僕は……』
『五六日以前までは確かに良人の書齋に在つたので御座います。さあそれが見えないといふので、家内殘らず手別けして探しましたが何うしても知れません。ところへ突然良人が明晩歸京すると電報で言つて來たので御座います』

『ヤレ〳〵それは〳〵。然し……僕は――』
『イエ〳〵勿論先生が斯ういふ事を專門になさる方でない事は、妾よく存じて居ります。けれども櫻川伯爵家の金剛石事件も、梅園子爵家のトランク騷動も、森山銀行の贋紙幣事件も、みんな裏面から先生の御援助で見事に解決した事を、妾よく承知して居りますので。ですから何うぞ先生。先生のお力で妾どもの猫を探し出して頂きたいのでございます』
それから靜子夫人の金屬性の雄辯は實に四十分ばかり三助の空腹へ響き渡りました。
『兎に角、その、エヘエヘ――』
到頭三助は悲鳴を上げました。すると夫人は感違ひして飛び上つて悦びました。
『まあ、お引受け下さいまして?! 先生、何うも有難う! これで妾、助かりましたわ』
彼はペタンと精神的に尻餅をつきました。

――◇人相の惡い男の事◇――

それは實に立派な食堂でした。何の用意も御座いませんが、時分時ですから――といふ夫人の言葉は嘘で、出るお料理の見事な事! それに第一三助の氣に入つたのは、全で銀座を圓タクが通るやうに、そのお料理があとから〳〵無限に續いて出て來る事でした。
『あゝ食つた〳〵』

食事は彼と夫人の外に三人でした。夫人はそれを、
『これは妾どもの娘で歌津子。これは妾の甥の多美雄。それから木下さんで御座います』
と彼に紹介をしたのですが、スープの皿から煙の出て居るのを見た時から、三助の頭はもう前後不覺でありました。
さて頤も草臥れ、腹も太鼓のやうになりました。そこで今度は少し眠くなつたのです。
『先生!』
三助元の客間へ戾つてウト〳〵して居ると靜子夫人がその肩を叩きました。
『先生お見込がおつきになりまして?』
『エ? 何です?』
『猫で御座います』
あ、さう〳〵。全然忘れて居た……。
『は、イエ、その、實は、目下考へ中です』
『何うぞ今晩御悠然御考へ下さいますやうに。それで御部屋も靜かな所を指圖して置きました。では失禮致します。お寢み遊ばせ』
『お寢みなさい!』
彼はもう度胸をすゑた。度胸はすゑたものゝどうしたらよいか。
弱つた。全く弱つた!

[illegible]つて、誰も上品なモダンボーイだ。その癖召使だつて何れも五年十年と奉公して居る者ばかりだ。第一みんな人相がいゝ。泥棒をしさうな人間は一人だつて居やしない。然し待てよ、たツた一人、さうだ、たツた一人……。

『たツた一人、人相のよくない奴が居たぞ。それはあの蟇蛙みたいな面をした木下とかいふ野郎だ。彼奴の眼つきは何うも只の眼つきと眼つきが違ふ。怪しいのは彼奴だ！』

そこへ折よく先刻自動車へ自分を乗つけた山崎氏が通りかゝりました。

『山崎さん。一寸秘密で伺ひますがね。あの木下といふ男ですが、あれは一體何者です？』

『木下さんですか。木下さんは多美雄樣の紹介で二三日以前から當家でお願ひした有名な私立探偵で御座います』

彼は落膽して寢る事にしました。ところが廊下でパツタリその木下氏に出會ひました。

『博士。私は知つて居ます。博士が何でこの家へおいでになつたかを』

何だか妙な物の言ひかたをする奴だナ。

『猫の行方でせう？　夫人の御依賴で――』

全で英語の獨案內を讀んでるやうだ。

『然し困難ですよ、此の事件は。何しろ御主人の書齋に在つたンですからな、例の猫は。さうしてその書齋の鍵は、夫人がち[illegible]

『ハヽア、さうですか』

『勿論猫は盜まれたのです。然し實に妙ですな』

『妙ですかな』

『私の經驗に依りますと、斯ういふ面倒な事件は寧ろ此方から願ひ下げにした方がいゝやうです』

『なるほど。よく考へて見ませう』

『ではお寢みなさい。御悠然と』

彼は無論寢みました、悠然と――。

――◇三助試問落第の事◇

愉快な翌くる朝でした。新鮮な空氣を吸ふべく早速庭へ飛び出した三助、フト溫室の陰で誰やら密々話聲が聞えるので、チラリ覗いて見るとそれは當家の令孃嘉津子と甥の多美雄君です。

『貴下が連れて來た木下さんね。あの力探偵だつて被言つたけれど、一寸も要領を得ないぢやないこと？』

『幾ら專門家でも駄目なものは駄目なンですね。然し僕は決して悲觀はしません』

『あら、何故ですの？』

『僕の此の一心、即ち念力ですな。此の念力で屹度あの猫は探し出して見せます』

『お父さん今夜お歸りになるのよ。大丈夫？』

『大丈夫です。僕には確信があるンです』
『まあ、さうしたらお母さま何んなにお悦びになるでせう！』
『然し歌津子さん。貴女も悦んで下さるでせうね』
『それは勿論よ。悦ぶどころか、心から尊敬してよ』
『その時僕は改めて貴女にお願ひする事があるンですが、聞いて頂けますか？』
『――』
『いやその事はまあその時の事としませう。はゝはゝ。時に歌津子さん、昨夜突然現はれた田中といふ人。貴女あの博士を御存じですか』
『いゝえ。昨夜初めてゞすの』
『何だか恐ろしく風采の上らない、全で皺くちやな牛みたいな男ぢやありませんか』
『でも學者つてみンなあゝぢやなくつて？』
『然し醜過ぎますよ。あの格好は何う見たつてラシヤ賣です』
『お母さまが迚も信賴して居る方をそンな事言ふと、妾怒つてよ』
『だから滑稽ですよ。あんな者に猫が探し出せるものですか』
『まあ多美雄さん！』
『僕は彼奴に出會ひ次第、今日は試問をやつてやる心算です』
『妾そんな事反對よ』
こゝで運惡く三助はハツクショイ！　大きなクシヤミをしてしまひました。何うも今更隱れて居る譯にもゆかず、止むを得ずノツ〳〵顏を出しました。
『やあ博士お早う』
『いや、これは』
『先生、お早う御座います』



『貴女もお早いですな』
『博士。早速ですが猫は如何です』
彼は困りました。
『エ、その、目下――目下考慮中で……』
『話は違ひますが博士は洋行をなさいましたか』
『いゝえ、朝鮮なら行つた事はありますが……』
『でも博士。ナポリの船唄は御存

『ナポリの船唄？』

彼は益々困りました。

『知りません。カッポレの唄なら知つてますけれど……』

『アハヽヽ。ナポリといふのは所の名ですよ』

『矢張り知りませんなあ。けれどニッポリなら上野から直ぐですよ』

見兼ねて令孃が話題をかへて呉れました。

『先生、妾、昨日ゴルフの球をあの竹藪で見失ひましたの。まだ下手ですから、そりや危險ですのよ。おほゝほゝ』

『なるほど。では僕が探して來て上げませう』

得たりと三助、その儘竹藪の中へガサ〳〵。

『あゝ驚いた〳〵。あのモボめ隨分意地の悪い奴だな。それに引替へてあの令孃はエライぞ』

藪の前方は崖になつて居るのですが、三助夢中で歩いて居るので少しも氣がつきません。忽ち足を踏み外して――ドシン！

『アイテ、テ、テ、……』

彼は思はず悲鳴を上げました。すると直ぐその近所で遊んで居た子供が五六人――。

『ヤア、何處かの小父さんがアスコから落ツこツて來たア！』

『行つて見ろ、行つて見ろヤアイ！』



忽ちがゝりと衛を取巻いた中に一人の女の子。

『あら小父さん。小父さんは昨夜の小父さんでせう！』

エ、エ？　ほんにそれは昨夜の辻占賣でした。

―◇蜘蛛を摑む用の事◇―

『君は此の近所かい』

『えゝ、晝間はあすこの學校へ行つて、夜になるとおみくじを賣りに出るのよ』

『感心だ。立派な苦學生だ。勉強をするンだよ。小父さんのやうに斯んな處へ落ちるやうになつちや駄目だぜ』

『でも屹度昨夜のおみくじが凶かつたのでせう。だから落ッこッたンだわ』

『全く悪いおみくじだつたよ。何しろ十三番の大凶で最初の文句が逆風反走船で、その次が雲烟如捕捉だからなあ』

『何の事？　それ』

『おみくじの文句だよ。雲を摑む如しだとさ』

『あら小父さん、蜘蛛を掴むの？　だけど妾のおみくじ當るでせう？』

『當るよ。當り過ぎる位だ。多分第三番目の文句は屹度三助崖墜落とか何とか書いてあるに違ひないぜ』

『ねえ小父さん、妾と遊ばない？』

『また今度にしよう。小父さんはまだ用があるンだ』

『さう？　矢張り蜘蛛を掴む用なの？』

三助旦下の自分を考へて思はず苦笑しました。

『さうだ。さうだよ。』

『あら小父さん！　あそこに蜘蛛がゐてよ』

子供は實に唐突です。彼は女の子の指さす方を顔を顰めながら見上げました。そこは今自分が墜落した崖です。しかもそこに大きな蜘蛛が二匹、ブラリ――と下つてゐるではありませんか。

『偉い蜘蛛だなあ――』

彼は思はず讃歎の聲を放ちました。と同時に例の辻占の第三番目の文句が、ヒラリと頭にひらめきました。

第三番目の文句といふのは、

小花要小心　ちひさきことに氣をつくることとなによりかんえうなり

といふのです。

『小さいことに氣をつけよ。小さいことに氣をつけよ……雲をつかむが如し、蜘蛛をつかむが如し……小さいことに氣をつけよ……こりや、もしかすると、あの蜘蛛が何かの手掛りにならぬとも限らぬぞ』

彼はウントコサと崖を登り出しました。

――◇多美雄君活躍の事◇――

さて正午の食事に靜子夫人、歌津子さん、三助と集つて居るところへ、多美雄君が一通の手紙を持つて來ました。

『木下さんの置手紙です。今度の猫の事件は到底自分の手におひ兼ねるから、勝手ながら手を引き度い――といふ文面なンです。敏腕家の木下さんが手を引くといふのですから、こりや却々難問題と見えますよ、小母さん』

『まあ、今になつて……』

『お母さま、何うしませう。お父さまは今夜お歸りよ』

多美雄君、三助の前へ來てニヤ〱しながら、

『如何です博士。まだ考慮中ですか？』

『……………』

『そこで小母さん。僕一ツ努力して見ようと思ふンです。最早此の際一刻を爭ひますからね』

然し夫人は三助に氣を兼ねて、

『でも先生には先生で又……』

『いや奥様。多美雄さんにやつて頂ければ結構です。何うぞ多美雄さんやつて下さい』

『エヘヽヽ。博士のお言葉がなくとも僕必ず探し出します。實は僕は今度の事件に就いて、此の間からシャロック・ホーム

[illegible]

て、綿密に研究した結果、今朝その猫を発見したのです！』

『エ、では何か手がかりがありまして？』

『さうです。然し僕は豫め小間さんにお願ひがあるのです。それは今度の猫泥棒の犯人は、何人であるかといふ事を決して質問しない事です』

『その人を宥ます――といふのですね。それはもう品物さへ出れば後はお前さんに一任します』

『それがよう御座いますわ、お母さま』

『多美雄や、若しお前さんが目つけてくれたら、タンと御褒美をあげますよ』

『エへ、へ、そりや有り難う、歌津子さん、小間さんの今の言葉をよく覺えて居て下さい。では早速着手しませうかナ……』

『今晩お父様がお歸りになるのよ』

『大丈夫です。歌津子さん僕が本氣になつたら瞬く中に探し出しますよ。僕はシャロック・ホームスです。アルセーヌ・ルパンです。電光石火！　僕の鮮かな手腕を見てゝ下さい。それから博士。貴下もさう何時迄も考へてばかり居ずと、僕の手腕を御覧なさい。また何處か他から事件を頼まれた際、非常に參考になりますぜ。ハ、ハ、ハ、ハ！』

一氣に喋舌つた多美雄君、大きな確信でもあるが如く、そのまゝ、ひらりと身を返し、部屋の外へ走り出ました。

あんな大きなことをいつて一體どこへ行つたんだらう。……警察などへ頼みに行つたんぢやあないかしら？　そんなことを

すると、[illegible]心配してゐるところへ多美雄君が戻つて来ました。

しかも、眞赤になつてゐるのです。

『多美雄や〳〵！』

『まあ多美雄さんどうしたの？』

多美雄君は全で絲の切れた奴紙鳶のやうに、フラ〳〵と椅子によろめき着きました。

『無い！　無い!!　あゝ大變だ！　本當に大變だ！』

多美雄君はガタ〳〵と身を慄はして居ります。

此の時三助はハツハツハツ立ち上りながら言ひました。

『多美雄さん、さう、心配することはありませんよ。何しろ相手は魔物の猫の事ですから、どうせ一所には居りませんよ。或は今頃はもう御主人の書齋へ歸つて居るかも知れませんな』

『エ、書齋ですつて？』夫人は思はず叫びました。

『さうです。先程、何だか書齋で鳴いてゐるやうでしたよ。アハ、ハ、お嬢様行つて御覧なさいよ』

『本當ですか？』

令嬢と婦人はその儘書齋へ駈け出しました。

『あら、あら、あら！』

『在りました！　在りました！　先生、猫が在りました！』

三助があとから這入つて行くと突然縋りついたのは令嬢でした。夫人は目よりも高く問題の猫を差し上げて悦びと昂奮に醉つて居りました。二人の聲を聞きつけた召使たちも嬉しさう

です！

『要するに、僕も先刻多美雄さんの言つた通り、犯人は不問にする事に賛成します。なアに此猫が一寸隠れンぼをして、皆さんを脅したンです。然しシャロック・ホームスなら屹度斯う考へますよ。或る人間が自分の望みを達したい爲に、自分で隠して置いて自分で發見し、それを手柄に恩に着せて希望を滿す。又若しこれがアルセーヌ・ルパンだつたら、彼は屹度斯う言ひます。戀は青年の心を熱しさせ又同時に馬鹿にさせる……』

彼はそれから扉近くへ歩み寄りました。

『もうこれで御用もないやうですから、僕は失敬します』

――◇再會一心不亂の事◇――

外は全然夜になつて居ました。彼は迚も愉快です。

『みンないゝ人たちだ。あのモダンボーイだつて戀に目が眩んでの單純な計畫に過ぎないんだ。だから自分が密かに隠して置いた場所に猫がなかつた時のあの慌てかたは何うだ。本當に眞靑になつて顫へて居たつけ。然しあの私立探偵と共謀になつて、態と探偵に匙を投げさせた所なンぞは少々細工が過ぎたやうだな』



彼は獨りニヤ〳〵笑ひました。

『それにしてもあの辻占賣の女の子は何うだ。あの子があの時あの妙な蜘蛛を見つけなかつたら、僕もあの猫を見つける事は出來なかつたんだ。しかもあの蜘蛛が二尺ばかり下つて、スルスルと這つて行つた石垣と桐の樹の間に、黄金むくの猫がゐるなんて、何とまあ、間がいゝんだらう。おみくじはよく當つたね。小花要小心。全く小さな事に注意すべしだ。あの時あの蜘蛛に注意しなかつたら……それにしてもあの女の子には感謝しなきやならないぞ』

三助は時々懷中に觸つて見ました。そこには靜子夫人から無理に渡された紙包が這入つて居るのでした。彼は本當に愉快です。その上今夜は腹も減つて居ないので、下駄屋は下駄屋

にちやンと見えました。彼はフト往來のラヂオの喇叭に耳を傾けました。

『……只今よりニュースで御座います。最初は帝展の入選者氏名發表——一般畫家の登龍門たる帝展本年の光榮ある入選者は次の通り發表されました……』

彼は暫くして又フラ〳〵歩き出しました。さうしてと或る横町を曲つた途端、パッタリ出逢つた人の顏を見て、思はずアッと飛び上りました。

『ヤ、ヤ！　貴女は⁉』

『あ、貴方は昨夜おみくじを取替へて下すつた方！』

『あの時の娘さんでしたね！』

『は』

『お母さんは如何です』

『あの頂いたおみくじで全然元氣が出ましたの。信仰つて尊いもので御座いますわね。それで妾嬉しくつて〳〵、何うぞもう一度貴方にお目にかゝつて此のお禮を申し上げたいと、實はこれからまたお地藏さまへお願ひに行くところですの』

さういふ彼女の態度も言葉も、昨夜に引替へて素敵に快活だ。無邪氣だ。朗らかだ！

『それは結構です』

此の時彼の頭に電光の如くサッと閃いたものがありました。

彼はハッと胸を躍らせて改めて沁々彼女を見詰めたのです。その清らかな眼、丹花の紅脣、その頰に、その襟に、純眞の美と清淨の麗らかさが、發止とばかりに彼の心臟を打ちました！

『失禮ですが貴女のお名前は？』

『不厭な名ですわ。和枝と申しますの』

彼の舌は火のやうになりました。さうして一氣に叫びました。

『僕は畫家です。食ふや食はずで描いた繪が、今度は多分帝展を入選したらしいンです。さうして僕は——僕は田中三助といふンです！』

彼の頭に電光の如くサッと閃めいたのは、それは實に例のおみくじの最後の一行でした。それ故彼は火の玉のやうになつたのです。



再見是懸命——ふたたびあひたるときはいのちがけ一心ふらんになるべし

——（をはり）——

水

芽ぶく樹々水に濕たう影落す

スイスの湖　小金井素子

ほのにたゞよふ水のにほひゆきずりの
をんなのまみもほがらけき街



長田幹彦筆

水と詩人　西條八十

ながれてやまぬ人の世を
水のすがたにたとふれば
詩人は岸にたたずみて
花摘むひとに似たるかた。

摘みて泛ぶる花びらの
紅きゆくへを問ふなかれ、
水面をかざる瞬間の
いのちにわれは生きてこそ。

武田鶯塘

踏む石に堰かれて濁り春の水
水音も春眠たげた筧かな

雨になりし湖のいろ船べりに身をよせ
て見る冷たきそのいろ
雨の小やみ湖ぞひ道の崖に咲く小草の
花にもひかるゝこゝろ。

臼田亞浪

子雀や曉けの水邊の青みゆき
青すすき筧の水の吹き散るか
芦越す水の明けゆきぬつばくらめ
儼時や代田明りの百姓家
まひ／＼に朝燒したる野川哉

高野六郎

如露の水素足のさきに
かゝれども冷くもなく
早やなりしかな
湯上りに水道の水かぶ
るわざ何の苦もなし春
深みつゝ
ビルヂングの屋根の旗
まではつきりとお濠の
水に映れる眞晝。

橋田東聲

瑞枝さす小野の林よ夏來ると
草をひたして水の
流るゝ。
さゝにごる五月の
流れながれ來て
竹の林に音立つる
なり
竹林の下ゆく水の
こゑきけば
よみがへり來る思
ひすべなし

村上鬼城

玉垣の影うつりたる泉かな



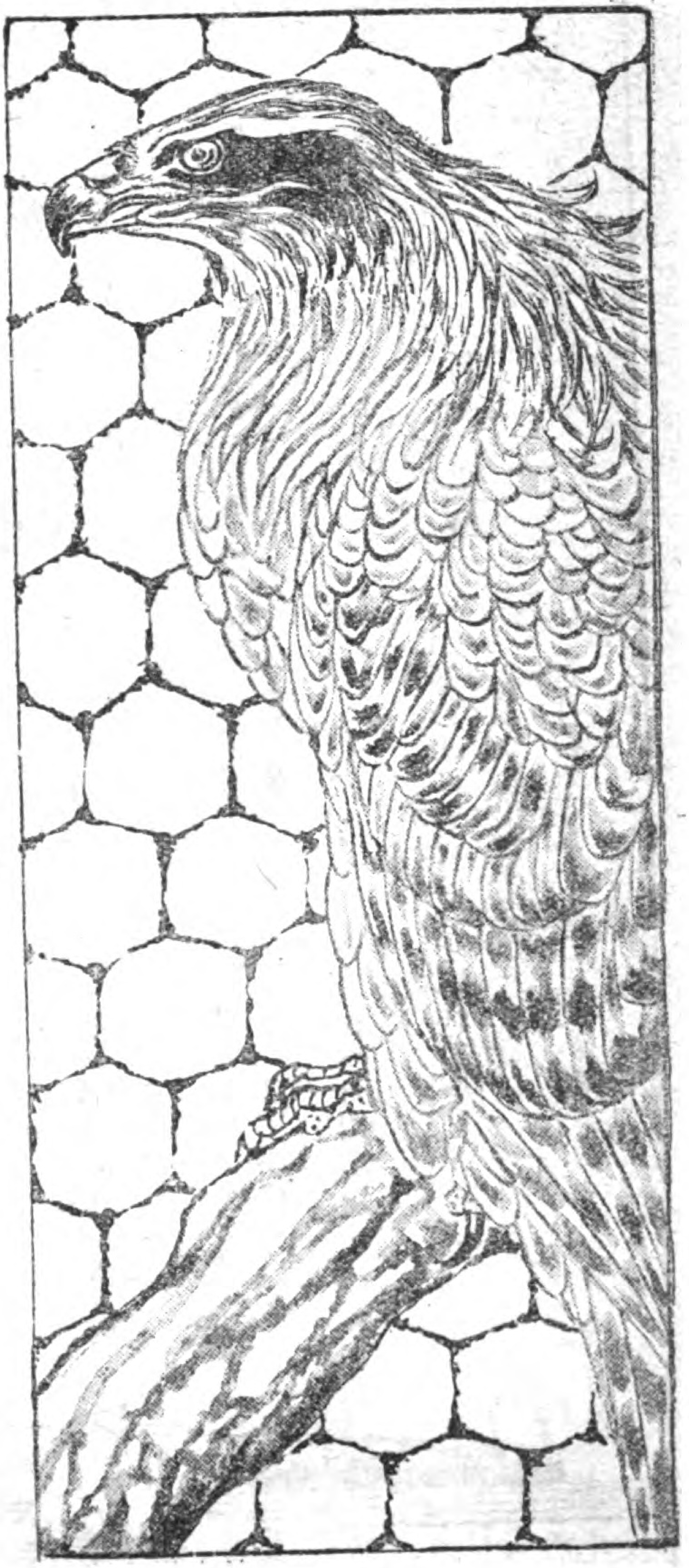
くひな　池上秀畝畫

長谷川かな女

温む水に物思ふこと忘れず居り
幌馬車を出だす驛かな水温む
近江の水温みて登る比叡かな

時代小說 大醜女物語

本田美禰
磯田長秋畫



亂調子薙刀の舞

間もなく其所へ小雪が見えた。小櫻をどしの鎧を着けて、大薙刀を携へてゐる。紫縮緬の覆面は、去年聚樂邸で御免のもので、三百諸侯列座の前へ出てさへ矢はりかの女はしてゐた。日本國中何所へ行つても脱らないで好いものなので、今日もまた平氣でしてゐる。

獻上品の猿と鷲とは、綺麗な檻に入れたのが雜兵の手で挽かれて來てある。

『珍らしいの小雪』物にこだはらぬ太閤はまづ自分から呼びかけた。

『は……』小雪は謹んで一禮してから、『昨年はいろ／＼と身に餘りたる御懇命、その後領國へまゐりましては、新居城の造營やら、一揆の討伐やらにかまけてゐまして、つい御機嫌も伺はず、失禮ばかりしてゐましたが、何時に變らぬお健やかなる尊顏を拜し奉りまして、祝着至極に存じ上げます』

『うむ、汝も恙なくて頂上だつたな』
『は、お陰様で頑健で……』
『承はれば肥後一國、確と仕置してまゐつたさうだが、もう騒ぎ出す懸念はないか』
『は、御威光によりまして、今後は決してそのやうな懸念はあるまいかと存じます』
『大儀であつた』と秀吉は上々機嫌で、『で、あの小倅も一緒に來たか』
『は、いゝえ……』小雪はちよつと躊躇してから、『その儀につきましてわたくし自身にお詫びに上つたので御ざいます』
『什うしたのだ』
『實は大雅樂之介儀、わたくし叛徒討伐のため、五家へ向ひました留守中に、外征従軍をお願ひするやう、書状を殘しまして濱町を發足いたしまして御ざいますので、今頃は殿下に拝謁、お叱りを蒙つて居りはしないかと考へますと、安き心も御ざいませんので、歸城即日、斯る姿で、馳けつけたので御ざいますが、雅樂之介はまだ拝謁を願ひ出ませんで御ざいませうか』
『參らんぞ未だ』
『まア!』と小雪は叫んで、『ではお許しを仰がずに、擅まゝに何所からか渡海したのかも知れませぬ』
『然やうなことは斷じて出來ん』秀吉は不興げに、『船手奉行の切手がなうては、いかなる者も自由には渡れんことになつて居る。あの柔弱な小倅が、獨りで渡海を企てたその心意氣は感心だが、太閤の指圖も待たず、大名たる者が領國を勝手に離れるとは不屆至極だ』
『で、わたくしがお詫びのために……』
『好い〳〵』秀吉は耳にもかけず、『その儀は後でゆる〳〵沙汰する。肥後からの土産は其れか』と小雪の背後に据ゑられてある獻上物の檻へ眼をやる。
六尺四方ほどの金網張りの檻に入れられた荒鷲は、食を收めてきよろ〳〵と鋭い兩眼を光らしてゐる。猿は猿で親子四匹で頻りに滑稽を演じてゐる。
加賀大納言と江戸の内府(徳川家康)と、會津中納言(蒲生氏郷)とは假裝のまゝで、先から檻の周圍を廻つて、鷲と猿とに揶揄つてゐた。天下を狙ふ豪傑手あひも斯んな物を見ると丸で子供だ。酒の肴を持つて來て鷲の檻の中へ投り込んだり、甜瓜を割つて金網に取りつく猿に與へたりして笑壺に入つて興がつてゐた。
『江戸の内府』と太閤は呼びかけた。『秀吉は其所に四匹もゐるが、今の日本でその鷲に譬へる者は誰であらうな』
『さア……』と家康はにや〳〵してゐる。
と、氏郷が側から答へた。『まづ福島で御ざいませうかな』
『其許は什うだな』
『却々!』と氏郷は手を左右へ振つた。
『はゝゝ、勇はあるが智慧はない。成ほど市松(福島正則)はその鷲ぐらゐの値打しかない代物だ。小雪』と秀吉はま

たかの女へ眼を向け、『見やるとほりみんなして今日は氣のおけぬ遊びをしてゐた。其所へ汝はそのやうな物の具をして見えたのだ。幸ひだからその扮裝で舞なと一つ舞つて見い』

『は……』小雪は太く當惑をした。舞どころか繪踊さへかの女はやつた覺えがないのだ。

『劍の舞といふのがあるが、那れは女のやるものでない。汝は薙刀を持つて居る。薙刀の舞をやつてみい』

『は……』

『おゝ其れよ』秀吉は膝を叩いて『汝には汝の影のやうに付き添うて居る女中があつたな、那れは什うした』

『彼方に控へさして御ざいます』

『では直に是れへ呼べ』

『は』小雪は振返つて後に控へた――檻を挽いて來た士卒の一個に、お袖を呼んで來るやうに命じた。

その間に檻の周圍へは、假裝した大名や、園遊會見物御免の觀衆が集まつて來て雜沓し出した。動物園のなかつた當時だ。猿は兎も角、生きてゐる大きな獸を見るのは珍らしいに相違なかつた。

加賀大納言の高野聖と、荷ひ茶賣りの氏鄕とは連りに酒を酌み交はしてゐる。大政所重病平癒祈禱のために秀吉が去年聚樂邸で催ほした大盤振舞の席上で、福島正則を投げつけたかの女の膽と大勇力とを眼の前に見て驚いた渠等は今も覆面したかの女をはつきりと記憶してゐる。其れが今日は華やかに粧うてやつて來たのであるから、既に先刻から注意を惹かれて、興がつて見てゐたのであつた。

暫くするとお袖が見えた。腹卷に身を堅め、鉢卷をして、臑當をつけ、小雪と同じやうな大薙刀を小脇にかい込んで持つてゐる。華やかな女武者、繪から脫け出して來たやうである。

一禮すると小雪と並んで、薙刀を置いて地上へ坐つた。

『おゝ、相變らず勇ましいのう』と太閤は言葉をかけた。『今汝の主人にも、薙刀の舞をやるやうに予は所望した許なのだ。汝もまた物の具して居る。幸ひだから小雪と共に、薙刀の舞を舞うて見い』

『は……』とは答へたがお袖も窮つた。かの女も矢張り主人同樣、舞など舞つたことはない。で、困じ果てゝ小雪を見ると、小雪も困惑の面を垂れて地上をじつと見つめてゐる。

『何でも好いのじや』と太閤は強要をする。『今日の催しはお見やるとほりに、予を初め名ある者等もみな假裝して下司となり、瓜など賣つて戯むれとるのじや。百姓老爺に見せる舞、どんな拙いものでも構はぬ。心の儘に舞うて見い』

『では御免を』といふかと思ふと、小雪は側に置いた薙刀を取る。

『まア貴女お出來になるので』お袖は驚いて小聲で訊ねた。

『出來はせぬが殿下の上意、御辭退申すわけにはゆかぬ。殿がよく酒宴でお唄ひあそばした橋辨慶、那れなと行つて見ようと思ふ。そなたも多分お謠の文句は聞いて覺えてゐやらう』

『名だけは覺えて居ります』
『では早く――。そなたは牛若になつてたも』
『は……』とは答へたがお袖は慌てた。五條の橋の牛若は被衣をかついで居らねばならぬ。で、つツと起つと小雪の方へ眼色をもつてその意を傳へて、咄嗟の間に諒解を求めて置いて彼方に見える茶店の方へ走り出す。
と、小雪は初めた。
『既にこの夜も明方の、山とうの端もすき間をもる雲の光りかがやく月の夜に、着たる鎧は黑革のをどしに縅せる大よろひ、草摺ながに着なしつゝ』
『ほう、橋辨慶を舞ふと見えるな』と秀吉は感心しながら、『素より好む大薙刀、最中とつて打ちかつぎ、ゆらり〳〵と出でたる有樣、いかなる天魔鬼神なりとも、面もむくべきやうあらじと』と受け取つて和して謠ふ。
小雪『我身ながらも頼母しうて、手に立つ敵のこひしさよ』
『川風も、はや更けすぎる橋の面に』と唄ひながら彼方からお袖が其所へ戻つて來た。女中の着てをつた帷子を借り、其れを被衣にしてかぶつてゐる。太刀の鐺は被衣の裾から覗きながら反り出してゐる。好い御曹子ぶりである。『通る人もなきぞとて、心やすげに休らへば』と謠ひ續ける。
小雪『辨慶斯くともしら波の、立ちより渡る橋板を、さも荒らかに踏み鳴らせば』
お袖『牛若彼を見るよりも、すはや嬉しや人來るぞと、薄衣なほも打ちかつぎ、片はらに寄り添ひ佇めば』
小雪『辨慶かれを見つけつゝ、言葉をかけんと思へども、見れば女の姿なり、われは出家のことなれば、思ひわづらひ過ぎて行く』
お袖『牛若かれを嬲つて見んと、行きちがひさまに薙刀の柄もとを發矢と蹴上ぐれば』
小雪『すは痴者よ物見せんと』
『薙刀やがて取り直し』と秀吉は興に乘り、手拍子取りながら、和して謠ふ。『取り直し、いで物見せん、手並のほどと、斬つてかゝれば』
『少しも騷がず突ツ立ち直つて』と氏郷もまた謠ひ初める。『うす衣引きのけつゝ、しづ〳〵と太刀拔き放つて』
秀吉『つツ支へたる薙刀の、斬ツ先に太刀打ち合せ、詰めつ開いつたゝかひしが』
氏郷『何とかしたりけん』
秀吉『手許に牛若寄るよと見えしが、たゝみかけて打つ太刀に、さしもの辨慶合せ得で、橋げたを二三間、退つて肝をぞ消したりける――うむ巧い、行るのう』と感嘆の聲を禁えず漏らす。
勿論雙方は兩個とも我流で行つてゐるのであるから、能としての價値などはない。たゞうろ覺えの謠に合はして、小雪は辨慶、お袖は牛若に成りすまし、五條橋上の當時の光景を實地に行つてゐるだけなのだが、何にしろ牛若氣取りで、本物の太刀を引き拔いて、踊つてゐる役者はお袖だ。[illegible]一見して秀吉が[illegible]

殺された美貌の持主、もし髮を稚兒髷に結ひ、緋の紋緞子に金絲をもつて龍膽を刺繡つた眼の覺めるやうな直垂を着け、黄金作りの太刀を佩き、黑塗の木履を穿いて、手に金扇を持つてゐたなら、どんなに優美に見えるかと想像される面影である。

また相手方の小雪にしても、本文どほり黑革をどしの大鎧こそ着てゐぬが、小ざくら縅しに身を堅め、刄わたり三尺もあらうかと思はれるやうな薙刀を持ち、然も僧形を聯想させる覆面をしてゐるのであるから、觀衆の眼には何所となく辨慶らしく見えてゐる。その舞ぶりは拙いが、詰めつ開きつ美しい兩個が眞劍に鬪ふ狀は、單に勇壯なばかりではない。極彩色の繪畫でも見るかのやうに美しい。

『あゝ矢はり能は好いのう』秀吉は側にゐる加賀大納言と氏鄕とを見て、『どうじや、百姓親仁の遊びは、もうこのくらゐで切り上げて、役者共に申しつけ、是れから一つ本當の能をやらして見ようでないか』

『結構で御ざいますな』

『權左』秀吉は旅籠の亭主に扮裝つてゐる蒔田を呼び寄せ、『汝は役者共の長屋へまゐつて、今夜は能の興行がある。是れから直に支度にかかれと、四座（觀世、寶生、金春、金剛）の者に吩咐けてくりや』

『畏まりました』

權左は大急ぎで彼方へ立ち去る。

この時はもう小雪とお袖の橋辨慶は終りに近く、『偖汝は『西塔の武藏坊辨慶なり』といふ名乗りあひの許をしてゐた。



雅樂之介殿浦に現はる

吉良の軍勢の宿舍には、加藤主計頭清正の

營舍であつた建物がそつくり其のまゝで宛てられた。北隣には德川家康、前田利家、伊達政宗、結城秀康らの宿營が門を並べてゐる。いづれも海岸に近いので、沖から吹いて來る風は涼しく、波濤の音は不斷に聞える。

南には入江を隔つて、呼子の臺の本營の天主が高く見えてゐる。本朝の築城法に天主なる物を設けることは、この名護屋城から起つたもので（安土城からといふ說もある）、何事にも豪壯快活、人の大膽を拔くことを欣ぶ秀吉は爰に登つて、壹岐對馬から朝鮮を煙波の間に望み見ながら、地圖を擴げては諸侯と共に軍議をやつてゐたのであつた。

日は今しがた暮れたところだ。

千艘がくしと謠はれる前面にある港を初め、殿浦を中心として、碁盤目狀にびつしりと建てられてある諸侯の營舍も暮靄の裡に罩められてゐる。

海岸には灯がちら／＼見える。戰地へ送り出す兵糧や、補充の兵器彈藥を、沖一ぱいに碇泊してゐる運漕船へ積み込むために、晝夜の差別なく働いてゐる傳馬の上の船頭が振りまはしてゐる松明の火だ。



呼子の臺の太閤の本營の上はぱあツと明るく、營中一面に萬燈のやう燭されてある銀燭の焰の色で染められて、天主をその中に浮き出さしてゐる。列をなしてちら／＼とその裾の方で瞬きするのは、城の側面の塀に切られた銃眼を漏れる燭火の灯だ。

然うした四顧の光景を珍らしさうに見廻はしながら、怪童の駒市は殿浦の濱邊を馬に乘つて行く。いふまでもなく馬は鬼鹿毛、今厩から引き出して、洗つてやるために乘つて來たのだ。

『可哀想に一月ばかりは彼方へ此方へと乘り廻はし、一度だつてゆつくりと洗つてやつた事がなかつた。馬だつて人間だつて、偶にはゆつくりと行水ぐらゐ使はぬことにや行つちやアゆけねえ。喃ア鹿毛よ』

人間に物をいふやうに然ういひながら手綱を絞ると、渠は愛馬の背中から沙上へひらり降り立つた。

そのとき丁度波の頭が、薄闇の中に白く碎けて、渠の足許まで濆ひ寄つて來た。

『此奴ア素敵だ。矢部の山奥にゐるのと違つて、斯うした許で洗つてやつたら、馬も定めし心よからう。明日の朝は六十頭みな率いて來てこの濱でゆつくり遊ばしてやらなきやならねえ。さア來い』といひながら手綱を執ると渠は鬼鹿毛を白浪の碎ける中へ引ツ張つて行く。

洗ふために乘つて來たので、馬には鞍は置いてない。裸馬に麻手綱、其れに洗ひ轡がつけてあるだけ。手入道具は紐で括つて、腰にぶら下げて持つて來たので、渠は其れを取り出して、心ゆくまで手入をしてやる。山育ちの渠に取つては、この海岸は珍らしいとほりに名馬鬼鹿毛に取つても矢はり珍らしく、氣色がぐつと好いと見え、嬉しさうに大人しく、嘶きながら洗はれてゐる。

その左手には巌岩が小山のやうに蹲ばつてゐる。岩の裾は沙地だが、其所にも波はざぶり〳〵と白く碎けては寄せてゐる。

『だが俺達は斯うやつて』洗つてやりながら駒市は漫に話しかけてゐる。

『爰で暢々と海へ入つて行水なんぞ使つてゐるが、奥方様は營中へ召されたまゝで今もつてまだお歸りにならぬのだ。冗談じやねえ行軍同様、物の具をして道中を續けてやつて來て着くてえ、すぐ捕まつて營中にあつて殿下の御用を足すやうにとの上意が出たとか。この様子じやア朝鮮へすぐ行くことは出來ねえやうだが……。はてな？』と駒市は頭を捻つた。波の音の騒ぐ間に、囃子の音が聞えて來たのだ。笛、太鼓、皷、大かは、其等のものゝ綜合した音が、低くきれ〳〵に響いて來たのだ。

『あれがお能とかいふもんだな』渠は振り返つて彼方を見仰げた。

營中の舞臺において、今初まつた時なのだ。晝、園遊會のあつた時には、沸くやうな歡呼の聲が、折々どつと爰らまで手に取るやうに聞えて來たが、今夜の能は靜粛に拜觀をしてゐると見え、然うした聲は聞えて來ないが、何となく其所だけは空氣が動揺してゐるかに思へる。

『ふん氣樂な奴等だ』と駒市は冷笑しながら『他の連中は朝鮮で血みどろになつて闘つてゐるのに、其れを餘所に那アやつて戯けた眞似をして騒いでゐやがる。人の上に立つ者は、自分を

詰めても下の者等の樂の出來るやうにするのが本望だ。其所へゆくと俺の主人は――奥方樣は偉えもんだな。七百人の家來の中に不足をいふ者は一個もねえんだ。喃ア鹿毛や』

ざぶり／＼と汐をかけては洗つてやりながら語り續ける。

『お互ひに朝鮮へ行つたらうんと手柄を爲ようぜ。俺達が手柄をすれば、其れが御主人の手柄になるんだ。朝鮮征伐をすつかり終つて、歸つて來る時には少くも十萬石ぐらゐの大名にして上げるやうにしなけりやならねえ。殿樣なんざゐねえからッて、奥方樣がゐらつしやりや何所へいつたつて怯は取らねえ。小櫻縅しの鎧を召したあの武者ぶりといふものは……吁、日本一の女大將！ おら考へても嬉しくなるんだ。さア、是れで好い、すつかり洗へた』

いひながら手綱を執ると、しづかに岩の背面の沙地の方へ率いて來る。

其所には草が一面に蒼く擴がつて生えてゐるので、馬は欣んで鼻面をその草の中へ持つて行く。

『畜生め、旨えもんだな。手前達ア何所へ行つてもすぐ御馳走にありつかれるんだ。待つてゐろ、俺も行水を使つて來るから』

然ういひながら裸になると、其れはまた元氣よく海へ飛び込んでじやぶ／＼初める。

せい／＼とした氣持になつて、大欣びで戻つて來ると、今度は鹿毛の體に溜つた雫を克明に手の平でしゆつ／＼と扱いてやつてゐる。何所までも友達あつかひ、其れに取つては主人の次にはこの鬼鹿毛が大切なのだ。

このとき彼方から渚邊づたひに松明の火が搖れながら來た。その火で見ると一行四人、うち兩名は旅裝の侍、一名は從者とおぼしい六十あまりの老人で、殘る一名は當世の侍らしい姿をしてゐる。松明は從者とおぼしいその老人が揭げてゐるのだ。

『吉良氏、爰でお別れにゆる〳〵とお話說なりとして行かれちや什うだな』といつたのは當番の侍らしい男であつた。

『忝けない』

『この岩の上が涼しくて好い』然ういひながら當番の侍らしい姿の男は、旅裝の人に先立つて巨岩の天邊へ登つて來ると、海風に浴するに好い地位を見計つて腰を下した。

三人はその側へと沈着く。

岩は四丈ほどの高さをもつて牛の臥たやうに這つてゐる。幅も相應に廣い上、波打際に臨んだところは、菅の笠を見るやうにその岩緣が突き出てゐるので、馬と共に休息してゐる駒市のゐる地位からは四人の者の姿は見えない。たゞその聲が聞えるばかりだ。

『今、吉良氏といつたやうだが……？』怪しみながら駒市は耳を引き立てゝ聞いてゐる。

『だが頓だ迷惑かけたな』と旅裝した一個がいつた。渠は吉良樂雅之介である。

同行者は加地五郎太、其れと忠僕の角内なのだ。

『いや〳〵』當番の侍らしい男は手を振つて打ち消した。渠は船手奉行の下役、市川六之助と名乘る者だが、以前は太閤の小性の一個で、聚樂第に居つた頃には、吉良等と親密に交際してゐた。いはゞ心友の一人なのだ。

『幸ひに船手奉行の配下となつて働いとるので切手ぐらゐ什うにでも胡魔化すことが出來るのだ』と渠は續けた。『で、御兩所は加藤家の臣、諫早圭太郎、諸角四郎五郎、共に急用で一僕を伴れ、渡海をするやうに渡海名簿へ明朝そつと記して置くから、その考へで居つてくれ。是れが切手だ』

『忝けない』雅樂之介は受取ると、松明の火に照らして見ながら、『拙者が諫早圭太郎だ』

『然うだ』

『拙者は諸角四郎五郎か』と加地も松明に照らして見てゐる。

『加地氏は兎も角も、吉良氏は一城の主人となつた躰でゐながら、些と物好きが過ぎるやうだな』と市川は揶揄して笑つた

『が、什うも致し方ない。女房のお陰をもつて……と思ふと一時も沈着いて濱町に居る心がせぬのだ』

『無理もないがな』と市川は同情しながら、『しかしあのやうにお身の後から、すぐ追うて來た奥方の心も察してやつては什うかな』

『駄目だ！』

『はゝゝゝゝよく〳〵性が合はぬと見えるな』

『で、什うしても今夜の中に』雅樂之介は聲を潜めて、『家來の者の眼につかぬ許まで落ち延びて居らぬといふと、面倒な事になるのだが、お身の今いはれた向ふの』

眼を擧げて前面の暗闇中に横はる加部島の方をじつと見ながら、『あの島まで行つとれば、その心配から遁れるだらうな』

『大丈夫！』と市川は大きく頷き『あの島へ渡つて居れば、明日すぐに運漕船に乘り込まんでも懸念はないが、次の船は二三

目せぬと出ぬやうだから成るべくは明日の船に乗られるが好い。その切手さへ持つとれば、我軍のゐる所なら何所へなりとも自由に行かれる』

『忝けない』

『ではそろ〳〵とまゐるといたさう』

と、市川は先に立つ。



その様子から察すると、加部島へ渡るべく、艀舟の出る許へ三人の案内をして行くらしい。

加地は默々と吉良の背後にくツついて歩を運んでゐるが、その胸中には様々な苦痛と不安とを持つてゐる。

『百萬石の大名に取り立てるとの上意があつても御奉

公をするわけにはゆかない。袖はお姫樣のお側から離れることは出來ませぬので」

然ういつて太閤の好意を刎ねつけたくらゐの女を、わが物とする考へで、知行を捨てゝ去年の春に渠が聚樂から脫走をした事實は前に記したとほりだ。で、雅樂之介の小伜となつて濱町城に居つた時にも、勿論渠は暇さへあれば云ひ寄ることを工夫してゐた。だが何にしろ相手はお袖だ。下手なことをいはうものなら鬈髮を取つて小犬のごとくに叩きつけられる心配がある。艷がかつた事などは一口だつて聞く隙がない。雅樂之介は笑つていつた。

『迚も駄目だよ。あいつは戀を知らない女だ。知つてゐても小雪と俺との夫婦關係が圓滿にならない以上、男など顧みてゐる隙はないのだ。そのうへ那んな生れ損ない。まア當分は寄らず觸らず、俺と一緒に武藝でも磨いて置く方が得策だ。朝鮮へ行つて手柄を立てゝ、天晴れ武士の名でも揚げたら、其れに感心して我を折つて女房にならぬものとも限らぬ。その考へで俺と一緒に朝鮮へ行つて一旗舉げろ。たアに何時まで放つて置いても人に取られる心配はない」

成程それに間違ないので、渠は雅樂之介の供をして濱町城を脫出し、爰までやつて來たのだが、然し渠の境遇は主人雅樂之介以上に危險だ。

小事に介意せぬ太閤はそのまゝにして放つてあるが、聚樂邸を無斷で飛び出し、戀のために九州下りをした事などが知れようものなら、什ういふ處置をされるか分らぬ。其れを思ふと、今雅樂之介に從つて、當營中にあることは、敵地にあるよりも恐ろしいのだ。で、成るべくは言葉少なに、侍女だつた市川にさへ物をいはぬやうに用心してゐる。些とも早く船に乘り込み、危險地域から脫出するやう、たゞ其ればかり祈つてゐるので、默々として尾いて行くのだ。

駒市は渠等の話說を胸を轟かして聞いてゐた。渠は初め若上の四人の中の一名を主人であると知つた時には、占めたと思つて躍り上つた。奧方樣にこの事をそつと御報告申し上げたら、どんなにお欣びなさるであらうと思つて飛んで行かうとしかけた。

だが渠は考へ直した。ない方が好い殿樣だ。其れに殿樣のゐることが知れるとどんな厭な御沙汰を蒙らんとも限らない。太閤殿下といふ人は、いや殿下には限らない。誰にしても自分の口から、一度斯うせよと云ひ出したその吩咐を守らずに、勝手な眞似をする者は決してよくは思はない。其れに殿樣は殿下の仰せを負いて國を逃げ出したのだ。今夜爰にゐることが知れゝば直に摑まつて、惡くすると切腹ぐらゐを云ひつけられぬものとも限らぬ。其んな事になられては、奧方樣にすまないばかりか、折角戰爭の用意して爰まで押し出した自分等の苦心も水の泡となる。樂みにした朝鮮へゆかれぬやうになるかも知れない。

『然うだ、爰は一つ知らぬ風して、無事に朝鮮へやつてしまは

う。而うして時が經つてから、奥方樣にその事を——然うだ、其れが好い。今の模樣では殿下から什ういふお言葉が下るか知れぬが、先へ殿樣が朝鮮へいつてるといふ事が分れば、奥方樣は命にかけても御渡海なさるのに相違ない。好しッ！』

と腹を据ゑると、渠は悠々と軀を起して、暗黒中でも、づく〳〵と草を食んでゐる鬼鹿毛の手綱を執つてひらりと乘つた。

もうこのときは雅樂之介一行の影は迥か彼方の濱邊の闇の中へ消え、松明の灯が鬼火のごとくに風にちら〳〵と揺れてゐた。

駒市本多忠勝と組討つ

『だが、好い事に出合つたもんだな』

呟きながら駒市は濱邊傳ひに闇中を宿舍の方へ戻つて來る。

跨つてゐる鬼鹿毛は、涼しい海ですつかりと軀の汗を流してもらつて、氣のせい〳〵としてゐる加減か、連りに高く嘶き續ける。

名馬の嘶き！　其れは闇中に山彦を返して濱一ぱいに大きく聞える。

『無理アねえ。人間にしても海へ入つて行水つかや清々とする。宿舍ではみんなの奴等が、湯でも焚いて今頃は一風呂あびてゐるかも知れねえ。待てよ！』

心の中で渠は叫んだ。夕暮に宿舍へ就く時、當地は水が拂底

である。殊にこの半月あまりは旱天續きで雨がなかつた。で、雜用の水は勿論、炊事用の水のごときも、成るべく大切に使ふやうにと宿舍奉行から注意をされた。其れを思ひ出したのである。

『飯を焚く水までも儉約しなきやならねえやうでは、湯を沸かしてゆつくりと行水つかふわけにはゆくめえ。好し、海へ入つて行水するやう是れから行つて敎へてやらう。おら山ン中で育つた加減か、今鹿毛と共に海へ入つて一風呂浴びた氣持は好かつた。鹿毛でせえ斯うやつてまだ嬉しがつて嘶いてゐる。早くいつて敎へてやらう』

呟きながら手綱を操り、結城秀康の營舍の横手を、曲つてひよいと向ふを見ると、渠は驚いて手綱を控へた。

數百の松明が、左側と右側と二列になつて燃えてゐる。左側には二三千、右側にもまた二三千、鎧下の直垂一つの侍共が集まつて、相對して眼を剝いて怒號の聲を揚げてゐる。肩肘を張り、地韛を踏み、刀の柄に手をかけて、いざといへば斬りかかるべく身構へてゐる者もある。いふまでもなく喧嘩なのだが、その原因の何であるかは、今爰へ來かゝつた馬上の駒市には少しも分らぬ。



が、耐らなく面白い。

『行れ〳〵ッ！』と駒市は心で叫んだ。『他の者は朝鮮で爲たい法題の戰爭をしてゐる。こんな許へ留められてまご〳〵しとる連中は、腹一ぱいに喧嘩でもしなくちや行りきれるもんじやねえ。行れ〳〵ッ、面白いなア！　だが何處の家來なんだらう』

眼を擧げてじつと見ながら馬を喧嘩場の方へと進める。

左側のは江戸内府徳川家康の麾下の士だ。右側のは加賀大納言前田利家の家中の者だ。左側は家康の營舍の門前になつてゐ

る。その門前の車井は、當地第一の名水で、飲料に供する外は、所有者德川家の者といへども、汲取ることを禁じられてある。

で、本月に入つて半月あまりの旱天續きになつてから、夜こつそりと汲みに來る水泥棒が屢〻あつたが、その泥棒の大半は、相對して營舍を構へた加賀大納言家の者だつた。

『怪しからん、くれといへば遣るものを、盜み來るた何事だ』

『何の多寡が水ぐらゐ。其れに井戸は往來にあるのだ。德川家の門に近いからとて獨り占めにする法はない。構ふものか汲んでやれ』

『言語道斷、もう斯うなつては刀にかけても、前の加州家の者等には一滴の水も汲ませない』

『何をッ！』

といつた調子で、この半月來兩家の者等は每日啀み合つてゐた。その欝積した反感が、とう〳〵今夜破裂して、爰に大がかりの鬪爭が今起りかけてゐるのであるから、集まつてゐる連中



は、身分の低い者のみでない。兩家共に大名格の立派な侍が飛び出してゐる。

殊に德川家の侍中には、蜻蛉切の槍で名高い本多中務大輔忠勝の白髮頭さへ見えてゐる。酒井、榊原井伊なども飛び出して來て交つてゐる。渠等は主人家康が朝鮮從軍を許されず、當地にあつて秀吉の帷幄に參してゐるために、髀肉の歎に堪へない

でゐる。その鬱憤を晴らすためには、喧嘩は持つて來いの仕事であるから、面白半分にやつてゐるのだ。前田家の侍中には、長成瀬、奥村などの顔ぶれもある。いづれも一騎當千の大名格の强者なのだ。

『中務殿にも似合はぬ』と長九郎左衛門は冷笑しながら『この者は今日初めて、當地へ着いたばかりの者で、當營中の事情を存ぜぬ。殊に本國は肥後の濱町』

『何ツ？』と駒市は聞耳立てた。

松明の灯で調べて見ると、わが家中にて見覺えのある助五郎といふ足輕が、後手甲に縛り上げられ、今忠勝と爭つてゐる片倉小十郎の後の地上に、戰きながら跼つてゐる。その樣子から推測すると、渠は徳川家の車井の水を汲まうとして捕へられ、慘々な目に會つてゐた。其れを前田家の侍が見かねて渠を庇はうとした。

『赦してやれ』『否や赦さぬ』といふのが動機で、兩家の門内から段々と侍共が飛び出して來て、とう／＼斯んな騷動が初まつたらしく見えるのである。

『何にせよ當方で捉へた者を横合から出て奪ひ取るといふ法はない』と忠勝は白髮頭を振り立てながら啀み合ふ。『大人しく返へせば兎も角、然もない時はお身等が相手だ』

『面白い。水一ぱいの盜人を赦せ赦さぬといふのが起りで、江戸と加州が叩き合ふのも却つて時に取つての一興』

『然うだ、退屈なお能など拜見するよりは興がある』と忠勝も後へは退かない。

『行るか』

『行らいで！』

と、いつたのが最後であつた。

長老の談判破裂を、手具脛引いて待つてゐた兩家の侍は左右からどつと喊聲をつくつて、亂鬪の手を碎き初めた。

松明が飛ぶ。白刃が閃めく。

兩家の人數を併せると六千近い大數が、鼎のごとく沸き立つて、入り亂れての私鬪三昧。冷靜な眼で見ると、正氣の沙汰とは思へない、言語道斷の振舞なのだが、水爭ひといふのは付けたり、その實は朝鮮へ行き、暴れ法題に暴れられない不平と、無聊と倦怠とを茲で晴らさうといふのであるから、案外眞劍でやつてゐるのだ。

駒市はおつと喚くと、その亂刃亂擊の間へ馬を乘り入れた。渠は一家中の人の命を犧牲にしてまでもわが家の步卒を庇つてくれた前田家の人には深く感謝してゐる。其れと反對の徳川家の老士の傲岸な態度には、憤怒と反感とを持つてゐた。で、猝然地に馬を飛ばせる、その第一の蹄には老士の白髮頭をかけて、其所へ踏み仆す積りであつたが、何にしろ相手は忠勝、徳川家四天王中隨一人の猛者である。然知つたりと體をかはすと、名馬鬼鹿毛の轡面しつかと執つて動かさず、馬上の駒市を睨み上げつゝ、

『何者だ、僮めッ？』と鋭い聲で喝みつけた。

駒市は驚いた。他の馬ならば兎も角も、鬼鹿毛の轡を執つて、動かさぬほどの豪傑が自分の外にあらうとは、今日まで彼は思はなかつた。然も其れは白髪頭の六十以上の老ぼれである本多平八郎忠勝と名を聞いたならいかな渠でも、無謀な事はしないのだが、盲は蛇に恐れなかつた。

『吉良殿の騎馬奉行、馬場駒市といふ者だ』と渠は怒鳴つた。

『何、吉良の……？』

『然うだ』叫びながら馬上からさつと忠勝に組みついた。

戰場萬馬往來の古强者だが忠勝はもう老年になつてゐる。不意に首ツ玉へ噛りつかれて、大地の上へ揉み仆されては、蜻蛉切を振り舞はし、猛虎の群羊を驅るやうに雜兵共を叩きまくつた當時の勇力は奮ひ起せぬ。上になり下になり、まだ十五歳の少年と、互角の勢ひで揉み合つてゐる。

『大變な小僧だな』

『大概な者は名を聞いたばかりで腰をぬかしてしまふ中務殿に組みついて、臆面もなく揉合つてゐる』

『だが感心に强さうだ』『うん、面白い。放つて置いて什うなるか勝負のつくまで見物しよう』『其れが好い』と德川家の侍は、喧嘩は其方退けにして興味をもつて見物してゐる。

其れは前田家の者も同じであつた。衆を恃んでゐればこそ、鬼本多と唄はれる平八郎を向ふに廻はして、亂鬪の手を碎いて見たが、一騎討の勝負となつては組みつき得る者は一個もないのだ。其れに名もなき小伜が、互角に揉み合つてゐるのであるから、渠等の眼には奇蹟的事實とより思はれぬ。

『しつかり〳〵！』

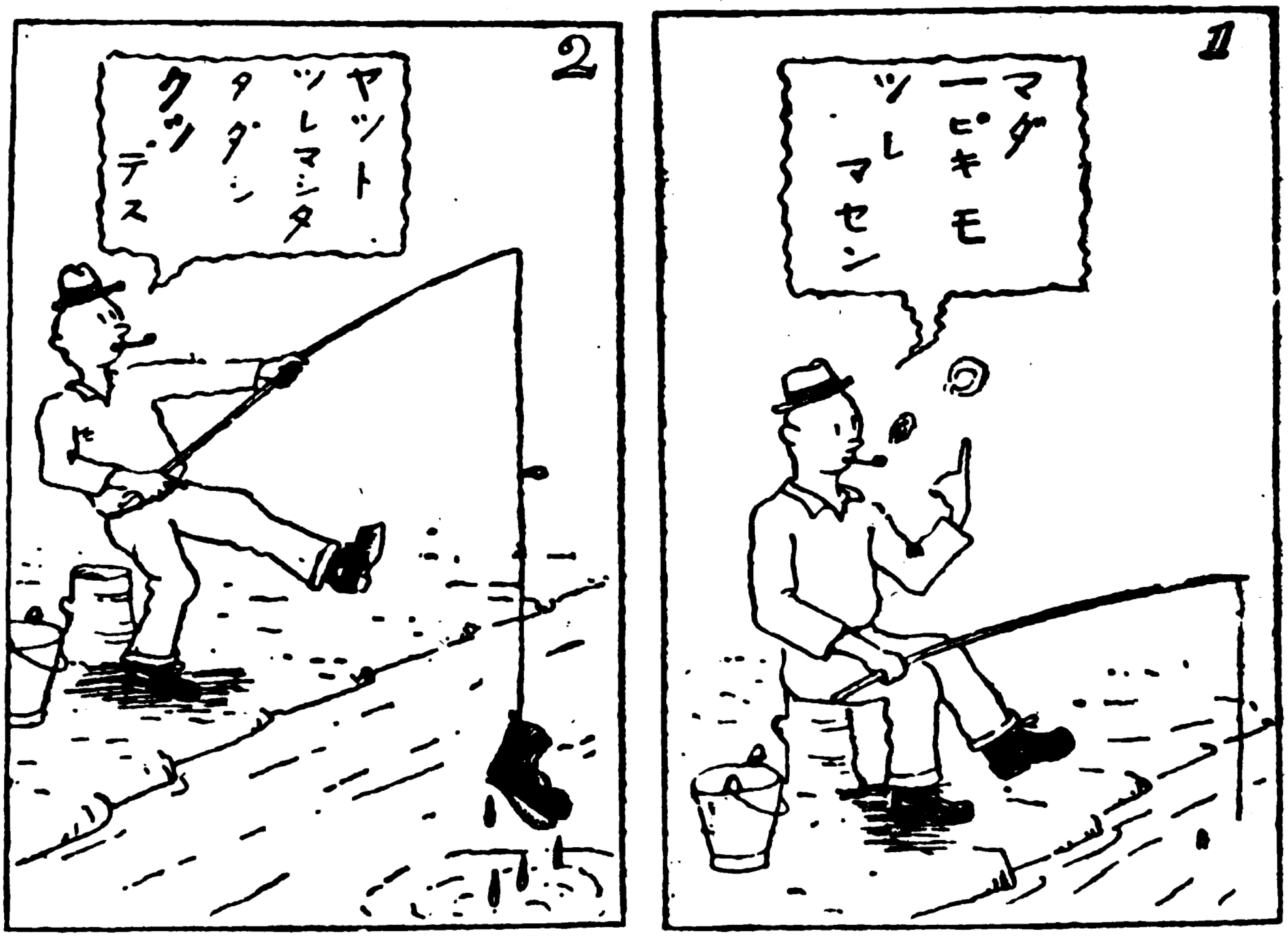
『其の人を組み敷けば日本一の手柄になるのだ』

『殿下の上聞に達したら一萬石がものはある。蹈ン張つてやれ』

『然うだ、もう一息だ、確かり〳〵！』と前田家の連中は、力を入れて聲援してゐる。（つゞく）

漫畫

釣の妙味は獲物の如何にあらず





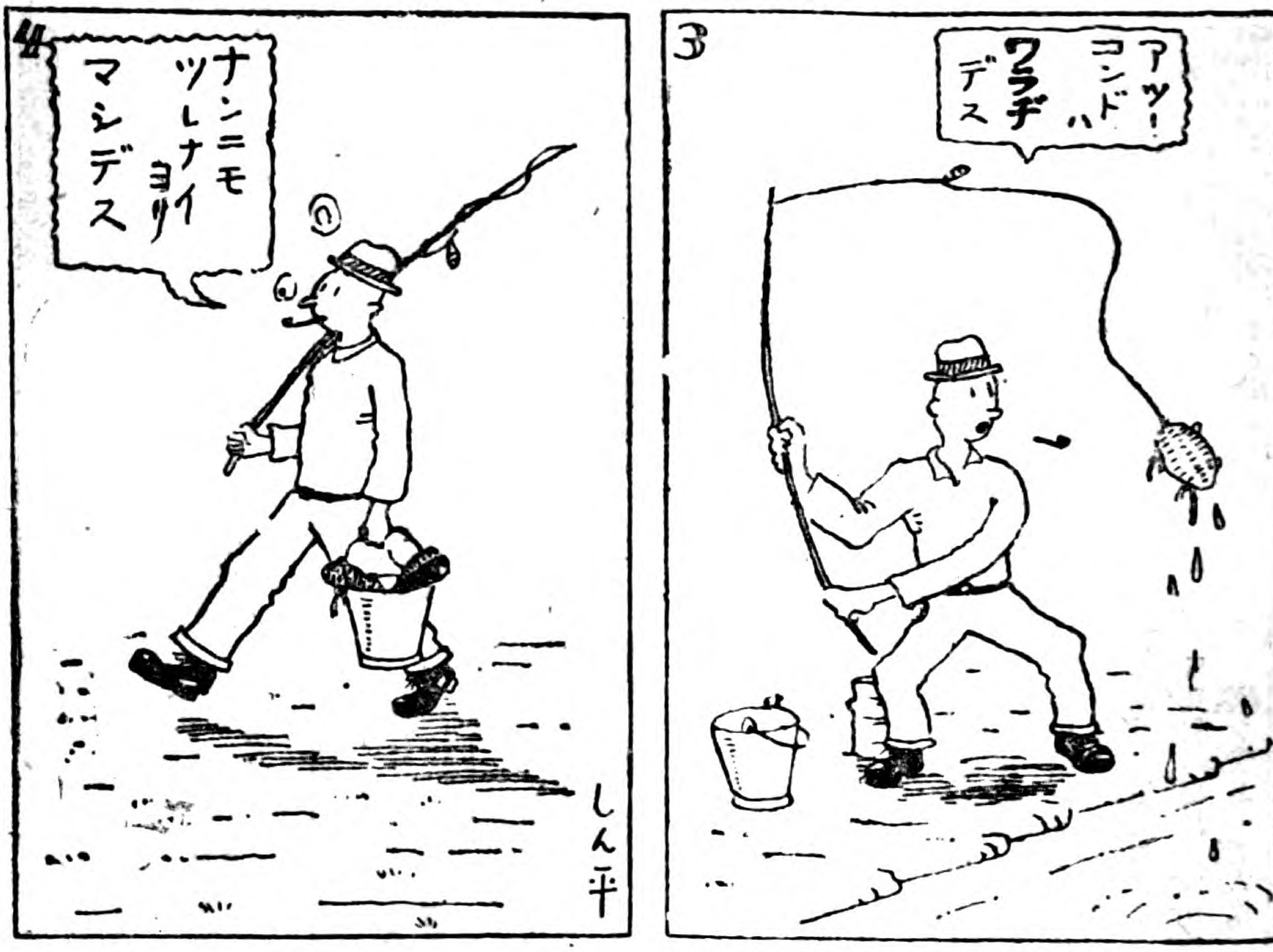
寄らば切るぞ

須田功



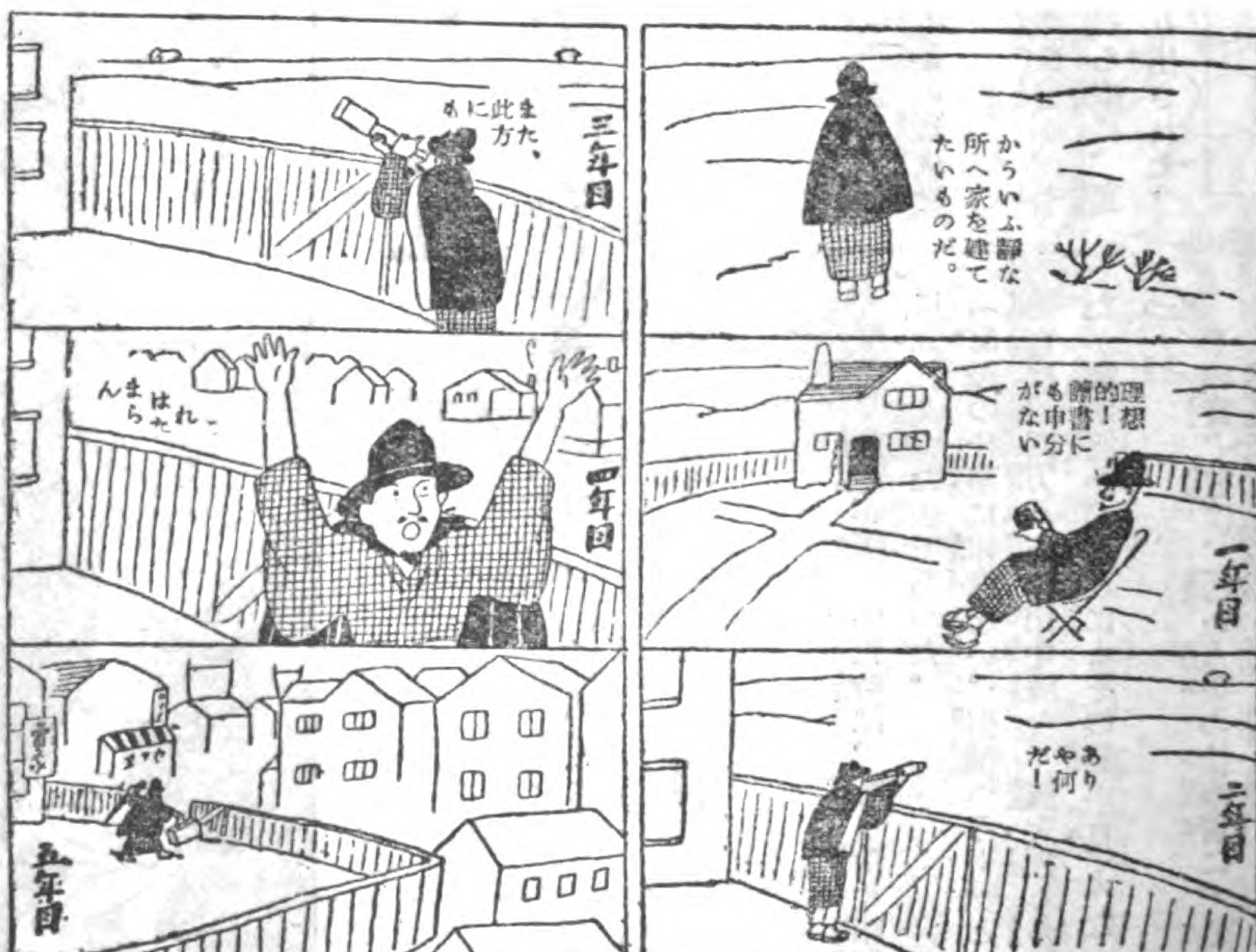
くらぶ

廣瀬しん平



郊外の發展

在田稠



彼が一旗擧げるまで



血戰十五年

―新代議士、眞鍋儀十氏當選ロマンス―

久本三世

眞鍋儀十氏



先頃の總選擧で、多くの新人が議會に送られたが、中にも評判の眞鍋儀十氏。血戰十有五年の苦鬪の甲斐あり、腕一本、脛一本で代議士にはなる、美しい夫人は貰ふ。その上立派な家まで建て丶貰へると言ふので、人生の幸福が一時に集まつて來た形、新代議士中第一の幸福者と言ふ噂。

○　○

彼は持つて生れた熱血漢である。既に學生時代、彼は政治運動に身を投じた。

當時澎湃たるデモクラシーの大潮流に、帝都十萬の學生を牛耳つて、普選運動の猛火を擧げたのは彼であつた。

それは原内閣の時、時の野黨憲政會が、普選案を出す前晩であつた。市中到る處に、驚くべきポスターがベタ〳〵と張り出された。

> 普選促進學生大會
> 日比谷に集れ、日比谷に集れ
> 國を憂ふる若人は悉く集れ

翌朝、官憲が氣づいた時は、もう洽く市民に知れ亙つた後であつた。

『眞鍋の仕事に相違ない。引捕へろ！』と、警官は、四方八方に市中隈なく彼を捜し歩いたが雲か霞か、どこにもその姿が見えなかつた。

その實、彼は、汚い人夫の仕事着にくるまり、淺草公園觀音樣の緣の下に乞食と共に一夜を明かしたのであつた。

國民大會は午後一時、今や、普選を要求す

る民衆はに音樂堂の前に、怒濤の如く押し寄せ今や遲しと開會を待つてゐる。

午後一時が來た、音樂堂の一方に司會者らしい洋服の幾人かが並んでゐるが、なか〳〵立上らない。

『始めろッ——司會者どうしたッ！』と、群集が騷ぎ立つ折しも、裏口の植木畑の中を掻きくゞり、ヌッと現はれた人夫姿、誰あらう、これこそわが眞鍋儀十氏。

『ワアーッ！』と聽衆は大喝采、驚いたのは官憲、前夜からのお尋ね者、よし來たとばかりに直に拉し去つて留置場に投じた。

それは、あと廿日で彼は明大の卒業證書が貰へる日であつた。彼は、學校に迷惑を及ぼしてはと言ふ考へから自ら退學屆を提出した。もう天下誰にも拘束さるゝ事のない一野人

爾來、當時國民大會の總大將とも言はれた今の遞信大臣小泉又次郎氏の恩顧の下に、普選の爲に奮闘、又奮闘、その間檢束されること、罰金を科せられること無慮數十回、刑務所に入ること亦幾回、

彼が最初に市ケ谷刑務所に投せられて以來、彼の親は懲役人の親として郷黨の退けものにされた。彼の父が病を得て最後の息をひきとらんと喘いでゐる時、枕邊にかけつけたものは、只彼の弟一人であつた。彼はその時も刑務所にゐたのであつた。



『兄さんが此處にゐられないのが殘念です』と、弟は言つた。すると父は毅然として、

『いやあれはお國の爲に、大衆の幸福の爲にあそこにゐるのだ、私の死目に驅けつけたとてそれがなにになならう。幾度獄へつながれても厭ふ事はない、父の死目にあへない位の事をくやむな。唯一念を貫く爲、飽く迄邁進せよと傳へてくれ！』

父はさう言つて安らかに息を引きとつた。

獄舍を訪れた弟からこれを聞いた氏は、鐵窓に身を投げかけてとめどなき泪にくれた。

彼は言つた。

『でも、いくらか恨んでいらつしやらなかつた？』

『いゝえ、絶對に——』弟は言つた。

『——死水をとらなかつた代りに、屹度天下に名を爲して、村の人達を見返してくれと仰言いました。——』

『うむ……』

懲役人の親として嘲笑の中に死んだ父の心事を思ふと、氏は胸の張り裂ける思ひがした。

『うぬ！　やらずに置くものか！　石に噛りついてもやる。必ず普選の世にして見せるぞ』彼は更に奮ひ起つた。苦戰數年、遂に普選は布かれた。

不幸にして、彼は普選の第一回に敗れた。

然し、敗れていよ〳〵盛なるは彼の意氣である。

見よ、普選第二回——

選擧には三ツのバンが要る。一つにカバン(卽ち金)二にヂバン(地盤)三にヒヤウバン(評判)わが眞鍋儀十氏は金もない、地盤もない、榮爵榮位もない。只あるものは彼の熱血だ。

『普選に地盤があつて堪るものか。因緣情實何するものぞ』

さすがは往年十萬の學徒を引具して、八千の官憲を向ふに廻し、普選促進運動をリードした彼だ、果敢の意氣いよ〳〵高潮して縱橫無盡に奮闘した。

然し、何としても定員四人に十三人の候補、泣いても笑つても三人に二人の落選を見なければならぬ。今度も六つかしいかと危ぶまれてゐる激戰の最中、これは又、世にも芽出度い、美しいロマンスが持ち上つた。何日の頃からか一人の美しい妙齡の令孃が熱心な聽者の一人として、氏の舌戰場に現はれる樣になつた。そして、氷點下何度と言ふ天地も凍てつく樣な酷寒の夕も、篠つく氷雨の冷たい夜も、氏の到る處恰も形に影の添ふ如く、令孃の姿の見受けられないことはなかつた。

そもこの美人は誰ぞ? 物好きの運動員が内偵の結果——令孃の名は藤原周子さん、深川木場問屋の令孃、女子大出の才媛と判つた。

いつの間にか、その話は眞鍋氏の親分小泉遞信大臣の耳に入つた。

『こりや面白い、俺が一つ月下氷人にならう』

酸も甘いもかみわけた小泉大臣のお聲がかりで、話がまとまつた。だが萬事は當選決定の上、彼が當選の榮譽をかち得たなれば結婚させようと言ふことになつた。

戰は愈よ白熱して、一喜一憂! 彼女は、最早聽衆の中の一人として身を置いてはゐられなかつた。

白いエプロン姿甲斐々々しく、本所柳島の選擧事務所に立ち働く彼女の姿——陣營をかためる熱血の勇士達は、この異彩ある支援に一段の勇を鼓舞された。

勝つた! 勝つた! 勝つた!!

愈よ當選が確定した時一番喜んだのはそも誰であらう。眞鍋儀十氏彼自身か、地下に眠る彼の父か、それともその美しき令孃であつたか!!

歌を忘れたカナリヤ

—相場に敗れて詩に歸つた西條八十氏—

柴山晴美

西條八十氏



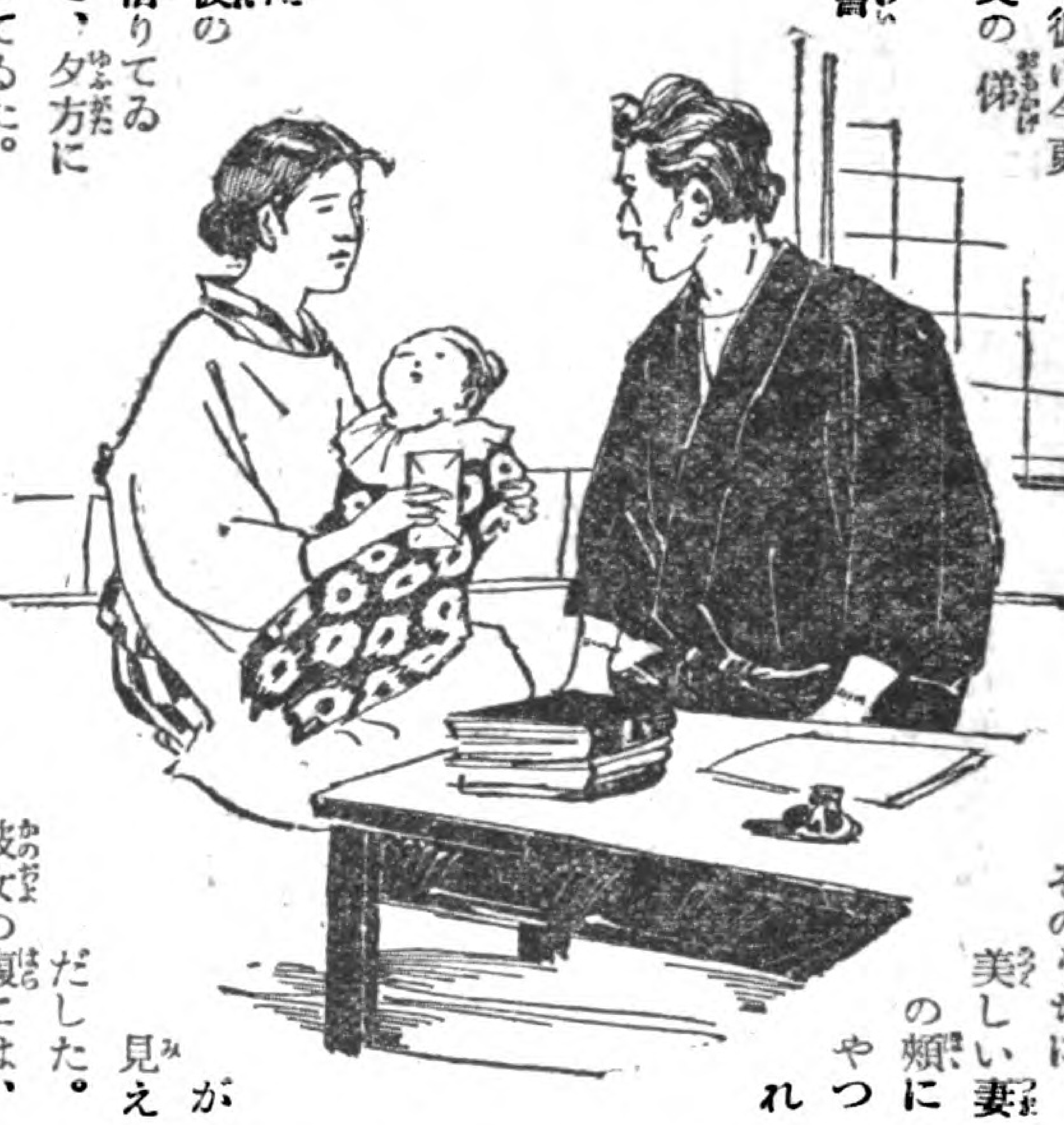
大學の卒業が近づいた或る夜、彼は新妻を前にして財産調をしてゐた。そこで、彼は初めて、今住んでゐる家が自分の學資と弟妹の

養育のために二重三重に抵當に入つてゐることを知つた。そしてこのまゝでゆけば一家は路頭に迷はなければならないのを知つて、愕然とした。——安閑としてはゐられない。どうかして老いた母や妻の爲に安らかな生活のみちをつけなければならない。——彼は今更のやうに裸一貫から産を成した亡父の俤を思ひ浮べるのだつた。

間もなく彼は、神田の方に株式會社××館を創立して、英文學に關する雜誌や研究書の出版をはじめた。秋は歐洲大戰直後の好況時代であつた。

彼は住みなれた牛込の家を引拂つて芝の方に夫婦で二階借の生活をはじめ、そこから神田の店に通つてゐた。背水の陣をしいた形だつた。彼はもともと詩人であつた。彼の詩才は學生時代から光つてゐた。借りてゐる家の階下には老夫婦が住んでゐて、夕方になると老爺がきつと植木に水をやつてゐた。

『さうだ、自分も、あのやうに、せつせと水をやつて、植木が大木に生長するやうに、自分の藝術を、店を大きく育てゝゆかなければならない』



彼はさう考へて涙ぐましくなつた。生活の爲とは云へ、あられもない商賣などに沒頭することが、とても煩はしく思はれた。然し、それも、仕事の多忙につれ、忘るゝともなく忘られて行つた。

そのうちに、美しい妻の頰にやつれが見えだした。彼女の腹には、いつの間にか嬰兒（長女緻子さん）が宿つてゐたのだつた。然し、彼は女中を雇ふことも出來なかつた。その上何かと不便なので、神田の店の方へまた引越していつた。

そこで彼は九州の方へいつてゐた老母を迎へた。

そこで、トタン屋根から照りかへす暑い陽射の中で彼はせつせと、雜誌の編輯や、單行本の校正などの雜務に追はれてゐた。

その頃の或る夜——彼はさゝやかな夕餉を終へると柱に凭つて、はかばかしくゆかない出版業のことを考へて暗然としてゐた。その時後片付けに勝手口の方へ老母が降りていつた。臨月近い妻をいたはる母の心を有難くも思つた。が、父在りし日は澤山の女中を使つて華やかであつた母の、現在の物寂しい後姿を見ると、孝心深い彼は思はず胸がいつぱいになるのだつた。

『お母さん、御苦勞かけて濟みません。今にきつと、きつと家を挽回して、お母さんをお樂にさせますから……』

彼はじつと唇を嚙みながら、頰を傳ふ涙をどうすることも出來なかつた。

早く樂になりたい、早く老母にも妻にも安心させたい。さうした慾望から、彼は知人に勸めらるゝまゝに、株式相場に手を出しはじめた。

商賣はそちのけに彼は兜町へ日參を始めた。幸に彼は儲けた。三千圓の資本が數萬

間になつた。然しこの一攫千金は、一夜のうちに水泡の如く消えてしまつたのみならず、やがては彼の生活の根柢をも奪ひ去らうとした。そして、あせればあせる程、不利は重なつて行つた。

前場と後場の休憩の時間が來ると、一敗地に塗れた彼はいつものやうに、兜町の中を流れてゐる溝川に架かつた鎧橋の上に立つた。欄干に凭れて、見るともなく濁つた水を見下してゐた。

何處から流れて來るのか、いつも七彩の虹のやうに美しく光つた油が、その水の上に擴がつては流れていつた。汚穢な水にも染まないで美しく流れてゆく油をみてゐると、何か崇高なものが激しく胸をうつた。――ふつと、レオナルド・ダ・ヴキンチが家の壁ににじんだ汚點をみて、後世に殘る名畫を描いたといふ逸話を思ひ出した。

『さうだ、藝術、これこそ自分がほんたうに持つて生れて來たものではなかつたか』

彼は、つく〴〵と來し方の過ちを感じた。長い年月の間、商賈の群に魂を賣つて、目前の利を爭つてゐた自分の哀れな姿に氣付いた。

『彼奴にはもう詩は出來ないんだよ』

と多くの友にも見放された淋しい〳〵涙であつた。彼は涙ぐみつゝ家に歸ると、その涙の中から一篇の小唄を草した。これがかの有名な、『唄を忘れたカナリヤ』である。

○

唄を忘れたカナリヤは
うしろの山に棄てましよか、
いえ、いえ、それはなりませぬ

○

唄を忘れたカナリヤは
背戸の小藪に埋けましよか。
いえ、いえ、それもなりませぬ。

○

唄を忘れたカナリヤは
柳の鞭で打ちましよか。
いえ、いえ、それは可哀さう。

○

唄を忘れたカナリヤは
象牙の船に銀の櫂
月夜の海に浮ぶれば
忘れた唄を思ひ出す。

○

唄を忘れたカナリヤ、それは實に彼自身の姿であつた。

その翌日――それは神秘的な暗合だつた。――彼は襯衣一枚になつて、詩のことを考へ乍ら書籍の荷造りを手傳つてゐた。そこへ門口に人力車が止つた。

『御主人は在宅ですか。私は「赤い鳥」の鈴木三重吉です……』

彼の若々しい顏に、この時、さつと血がさした。そこで、彼は鈴木氏から『赤い鳥』へ童謠執筆の依頼を受けたのだつた。これこそ眞に、唄を忘れた哀れなカナリヤに銀の櫂を與へ、月夜の海に浮べる象牙の船であつた。

『金參圓也……赤い鳥薄謝』と認めた稿料が、初めて屆けられた時既に母となつてゐた彼の妻は、昔の娘にかへつたやうに悦んだ。

『お父さんの詩が賣れた。お父さんの詩が賣れた。お父さんの藝術が世の中に認められた』

彼は喜びの涙をいつぱいに溜めてゐる妻の手を、堅く握りしめながら、やはり深い感動をうけて、『うん、うん』とたゞ首肯いてゐるのだつた――

この時彼は既に多くの負債をこしらへてゐた。一切を整理するために、僅か殘つてゐた

土地を思切つて賣拂つた。もう貧乏が苦にならなかつた。彼は雄々しくも茨の路を踏んで、一路藝術へと志したのであつた。

大正八年、彼の處女詩集『砂金』が出版された。『砂金』は賣れた。全く奇蹟的によく賣れたのだつた。……

中でも『歌を忘れたカナリヤ』は一世の評判となつた。到る處の學校で、街路で可愛い子供に唄はれた。

ふと外出先で之を聞いた老母は、歸るといきなり、

『お前の「カナリヤ」を小學生がうたつてゐたよ。私は嬉しくて、嬉しくて、その子供達に、「それは私の伜が作つたんですよ」と大聲で教へてやりたい位だつたよ』と感激にみちた口調で語り、更に『ホンにお父さんにも聞かせてあげたい』と、しんみり附け加へた時には彼も我ながらホロリとした。

×

彼とは誰か。

詩人教授として、今日、早稲田大學に佛文學を講じて、二萬の學生に欽仰思慕されてゐる、西條八十氏、實にその人である。今や一世の詩人として社會にもつとも流行し、民衆の支持を受けてゐる詩壇の大月星、詩人西條八十氏その人である。

岩田專太郎氏



綠のセルロイド人形

——挿繪壇の新人、岩田專太郎氏の賣出し——

矢薙雅夫

此處は或る裏町のセルロイドの人形工場。狭苦しい仕事場は踏みどころも無く雜然混然と取り散らかつて、その中に堆高く積まれてあるのは眼も鼻もないノッペラポーのセルロイド人形。

と、五六人の職工がセッセと片つ端からそれを崩して、丹念に眼をつけ、鼻をつけ、口をつける——そして紅い頬紅口紅を塗ると今まで小さい死人だつた人形が急に生き生きとした愛の天使に變る。不思議な情景。

『ほーッ……』

その時誰かが深い溜息を吐いた。

見れば細長い臺を前にズラリと並んだ職工達の一番外れの、蒼白い神經質な顔に、堪へやらぬ疲勞と懊惱とを見せてけだるさうに手を休めて太息をつくのであつた。

『おいおい、怠けてゐちや駄目だよ、冬の日は短いんだからね、まごまごしてゐると歸りに五十錢玉一つ握れないぜ』

中で頭だつたのが尖つた聲で云ふ。

青年はブルッと身を震はせてまたセッセと人形の顔を描き出す。——身にはこの寒空だといふに單衣の浴衣一枚にモヂリ外套、貧と苦とを綯合せたやうな細い兵兒帶をしめて見

るからにみすぼらしい風體だ。

やがてとつぷりと暮れた冬の日。

青年は五十個描いて たつた十五錢の賃金に、やうやく五十錢玉の一つも握つたか、力ない足どりで寒風吹き荒む町へ吐き出されて行つた。

赤、青、黄、色とりどりの街の灯は、疲れて飢ゑた眼に痛いやうにチラつく。モヂリのポケットに兩手を突込んで物憂はしげに地べたをみつめながらとぼとぼ歩く青年。蒼白い顔は寒さでまた一段と透きとほるばかり。

と、ふと横町を曲るとたん、人にぶつつかつた。彼はよろ〳〵とよろめいてぬかるみへ倒れた。彼の抱へてゐた風呂敷包みからセルロイド人形がコロ〳〵と轉げ出した。

『あらッ!』柔しくも驚いた女の聲。

『どうも失禮』女は急いで人形を拾つて彼に渡した。とたん、ふとも見合した顔と顔!

『何といふ美しさであらう!』

彼はボーッとなつた。そして、失心した樣に、去りゆく若い女性の後姿を見つめてゐた。

○

彼はやがて、生田蝶介氏にその天才を見出されてその主宰する雜誌に挿繪を執筆するやうになつたが、強い中にも淋しみを含んだ、美人の姿は讀者に異常な感銘を與へた。

『君に是非見せたいものがあるかなア——』



ある夕、だん〳〵に知り合も出來てゐた挿繪畫家仲間の一友人が彼に言つた。

『何だね』

『何でもよいから、今日は僕の言ふことを聞け、とてもとても素晴らしいものを見せてやるから』

友人は無理矢理に彼を誘つて自動車を走らせた。

『何處へ行くんだい——俺は忙しいよ』

『まあ、默つてゐろ』

自動車は思ひがけなくも、湯島天神下の、とある小綺麗な家の前で止つた。

友人の誘ふがまゝに座敷に通つた彼は、そこにゐた一人の若い藝妓と顔見合せると、

『アッ!』と、聲をあげた。

それは、實に彼が、忘れんとして忘れることの出來ない嘗ての日の、美しい女性であつたのである。

『おや、君達はもう知つてゐたのか』

友人は驚いて言つた。友人は實は、彼の繪に、あまりよく似た婦人があると言ふので、その婦人を見せんが爲、彼を誘うて來たのであつた。

事實は小說よりも奇なり、思はぬ面會から、彼を知つた彼女は、何とかしてこの若き天才畫家を世に出したいと、並々ならぬ親切を盡した。

だが然し、薄命は美人の常と言はうか、彼

妓の背後には義理ある人もあり、さなきだにあまり健康で無かつた彼女は、苦勞に苦勞を重ねた末、哀れにも淋しく散つて行つたのであつた。

秋雨しとゞ降るうすらさみしい秋の夕暮、傘もさゝず、そつくり濡れて逝き人の墓地を魂の抜けた人の樣にさまよひ歩く彼の姿を、墓守は幾度か怪しんだことであらう。

彼は、ばつたり繪を書かなくなつた。彼の天才を愛してゐた生田氏は幾度か彼に苦言を與へ、又彼を激勵した、然し、抜けた氣力は容易に蘇りさうにもなかつた。彼の友人達は、せめて墓場から遠ざけることが、彼の爲であらうかと、郷里の關西へ旅立たせた。

○

時は移つた。生田氏の門下で彼と知合であつた川口松太郎氏が大阪で、雜誌『苦樂』を主宰することになつた。川口氏は早速彼を訪うた。

『君を慰める唯一のものは繪ぢやあないか、その繪を捨てゝ君はどうして生きられるものか、今度僕が雜誌をやる樣になつたのは、何よりの機會だ、勇氣を起して書き給へ』

傷つける彼の胸に川口氏の涙ぐましい友情は、俄然、火の樣な製作熱を湧き立たせた。生ける屍に脈々たる血潮が流れ始めた。

見よ！、雜誌『苦樂』の誌上には、あの一種凄愴憂愁、然も何者かを求めてやまない心の感激を見せた特異な挿繪が續々と現はれ始めたではないか。

『岩田專太郎、岩田專太郎、一體どうした男だらう』

彗星の如き彼の出現に、滿天下はやんやと評判し合つた。彼こそ實に現代挿繪壇の一雄岩田專太郎氏であつたのである。

華々しくも勇ましき門出。あらゆる過去の陰慘憂欝哀愁の情をかなぐり棄てて、更始一新、敢然として再生の第一歩を力強く踏み出したのであつた。

不幸にして『苦樂』は間もなく雜誌界からその姿を沒したのであつたが、今や彼の挿繪は一流の新聞雜誌へその聲名をうたはるゝことになつた。

×　×　×　×

さもあらばあれ、彼の描く凄艷極まりない挿繪の中には、ある女性の面影が、描くとはなしに髣髴としてゐるとの世評、果して當れるや否や？　それは讀者の想像に任せることとする。

澤田正二郎



決死の匕首

―惜まるゝ名優、澤正の受難時代―

安藝三郎

一

新富座の旗擧興行で、美事大失敗をした澤田正二郎は、新國劇一座を引きつれて、財政上苦境のどん底に漠掻かねばならなかつた。

本郷東片町の彼の家には、着のみ團栗の座員達が、空腹を抱へてごろ〳〵してゐた。借金取が呶鳴り込む位は愚かなこと、彼等は、兵兒帶や襦袢を賣拂つて、大福餅や燒芋を買つて食ふといふ慘めさであつた。

その時だ。京都にゐる澤田の女房役倉橋仙太郎から、一通の手紙が届いた。

『京都南座との歩興行が成立したから、直ぐ來い』

さういふ通知である。萎れ返つてゐた一座の者が、俄に活氣づいたのはいふまでもない。

『よし、今度こそは、一旗擧げて見せるぞ！』

壯烈な覺悟で、意氣揚々、だが見窄らしい風態の一座十二名が、京都へ乘込んだのは、大正六年六月のことであつた。

二

ところが、初日の蓋を開けようといふ間際、忽如として一大悶著が湧き上つた。それは一座の看板ともいふべき女優衣川孔雀に關する事件である。

誰も知る如く、孔雀は、目下歸朝中大評判の、かのホリウッドの名優上山草人の弟子であつたが、草人の手元を離れ、齒科醫某と結婚する時、『他の劇團へは、無斷出演はしない』といふ誓の一札を入れてゐたのだ。

その孔雀が、今、新國劇一座に加はつて、南座へ出演しようとしてゐる。

『怪しからぬ奴だ！　斷じて出演はさせない！』

上山草人が、烈火の如く怒つて、京都へ乘込み、强硬な抗議を申し込んだのは、無理もないことであつた。

だが、かゝる事情に通じない澤田は、はたと途方に暮れてしまつた。愚圖々々してゐると、南座との契約は破棄されるばかりか、ピカ一の女優を出演させぬとは詐僞であると脅しつけられるのである。

道の澤田も、今は絶體絶命であつた

『この上は、上山草人に會つて、こちらの事情を訴へる外はない、それでも



彼に一滴の涙もなく、孔雀を貸さぬといふなら、一座の名譽のために草人を刺し殺す迄だ！」

澤田は、か丶る悲壯な決心をして、倉橋と共に、上山草人の旅館木屋町の木村屋に向つた。二人の懷中には途上で買ひ求めたドギ／＼する短刀が忍ばされてゐた。

初夏の清々しい夜である。夢見るやうな美しい月の光が、加茂川の水に銀粉を漂はせてゐた。死を覺悟した澤田等二人が、三條の大橋に差し掛つた時、何方からともなく歩み寄つて、互ひに手を固く握りしめた。

無言ではあつたが、二人の手と手の間には、死を賭して新國劇の運命を開拓しようといふ意氣と熱血とが電流のやうに通つてゐた

三

それから間もなくである。澤田等二人は、木村屋旅館の奧まつた六疊で、威儀端然ゝ、上山草人と對坐してゐた。夜も十時を過ぐる頃で、河原には螢が飛んでゐた。

澤田は、諄々と事情を訴へて、草人の諒解を求めた。

『如何なる事情があらうと、僕は、僕の威信上、孔雀の出演は許されない』

草人は、きつぱりと反ねつけた。

談判は遂に破裂した。澤田の豫期した危機は到來した。雨か！　風か！　の一瞬。

澤田は、ズラリと短刀の鞘を拂つて、白刄を草人の胸に突きつけて叫んだ。

『君の態度は、單に孔雀の問題ではなく、新國劇の事業を打壞さうとするものだ。同士の名譽と前途のために、君を刺し殺すから、覺悟しろ！』

澤田は、眞劍に詰め寄つた。

併し、上山草人は顏色一つ動かさず、泰然自若として相手の腹を讀んだ。短刀の切先から、ひし／＼と迫る殺氣、全身皆熱血と意氣かの如く見える語調や態度。

『この男のためなら、一女性に對する鬱憤を棄てゝやつても好い』

草人はすつかり男惚れしてしまつた。

『宜しい、君の意氣に免じて、孔雀は貸さう。また、僕の妻浦路も、望みなら貸してやつても良い』

決死の談判は、血の雨を降らすかと思はれたのに、何ぞ圖らん、當時人氣を呼んでゐた女優二人まで得るといふ好結果を齎らした。虎穴に入つて虎兒を得た譯だ。

四

後年、行くとして可ならざるなく、蓋を開ける毎に大入滿員を續け、演劇界の幸運兒、天下の澤正となつた彼も、旗擧當時は、一膳飯屋で空腹を滿たす程の慘めさを幾年も續けてゐたのだ。

併し、上山草人と死を賭して談判した澤田の眞劍な覺悟と、壯烈な意氣とは、彼を天下の澤正たらせずには措かなかつた。

見よ！　彼の芝居は、常に何人も及ばぬ眞劍さと、不思議な力とが、觀客の肺腑に緊々と迫つて來たではないか！

本派本願寺執行長後藤環爾猊下推奨

親鸞聖人

松原致遠
本田穆堂畫



親鸞聖人御畫像

外より内へ

午下りに糸魚川の名主の家を出た三人の僧が、日野村へ半道といふところまで來ると、俄かに吹雪がして來た。見る〱空も地面も眞ツ白になつたので、とても日野村までは、と三人が立ちどまつて躊躇つた時、山ふところに一軒の大きな屋敷のあるのが見えた。

三人はこれに急いだ。

弟子と見ゆる一人が中へはいつて行つた。しばらくすると、烈しく罵る聲とともに、弟子の負笈を何かで叩く音が聞えた。弟子は怒りに滿ちた顏をして、軒下にあらはれた。そのうしろから、まだ罵る聲はつゞいた。

『早く出てうせろ、汚らはしい。おれのうちは新屋したばかりで、まだ佛を出した事はないんだ。死人の世話をする坊主なんぞに見舞はれてたまるもんか。とつと出てうせろ』

師匠と見えるのが、弟子にいぢらしさうな目をそゝいだ。弟子の怒りの顏は、それを見るなり和らいだ。

『蓮位、これはとても歩けさうにもない。この軒下に泊めてもらはう』

三人は互ひにもたれ合つて一枚の莚のうへにねた。

夜半になつて寒さは更にまして來た。弟子たちは自分の衣を剝いで師匠に着せようとした。師匠は、

『それは不可ません。おの〳〵分といふものがある。そなたたちのものまで着せて貰うては勿體ない』

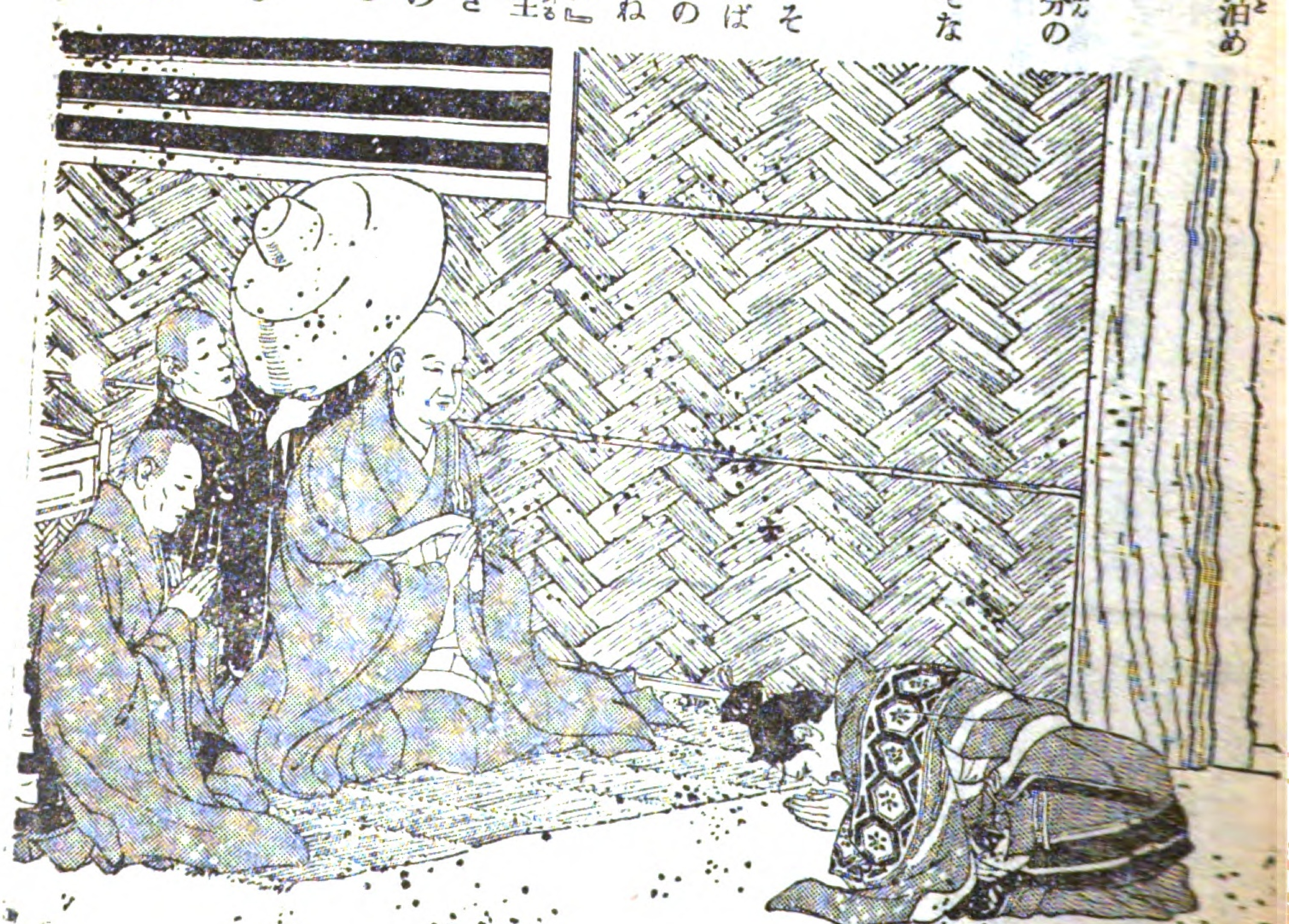
『それでもお師匠さまが、このやうなところで……』

『イヤ〳〵これが私の分ぢや。これを小言いふならば、それは人間の我儘ぢや。自然の大きなはからひを味はねばならぬ。苦しい時には其苦しさの中にはいつて、心一杯その苦しさを味はふのぢや。自然の與へるものは素直に受けねばならぬ。苦しい時に苦しさから逃げるものは救はれない』

この細々した聲が、ふと家の中の主人の耳に響いた。主人の心の底から、何か首をもたげたものがある。夕方叩き出した法師らの姿が目に浮んだ。心の靜まつた時に本當のものが出て來る。何かに牽かれるやうな心持で雨戸をそつと明けた。

『さきほど蓮位は、かなり烈し顏をしてゐたが、よくこらへてくれたの』

『ありがたうございます。昔ならほんとにどんな事をいたしましたらう——。しかし今でもこゝの主人を憎む心が除きませんで、先程から自分で悲しんで居ります』



『腹は誰でも立つ。私もこの人を憎む心を持て餘して居る。しかしながら、その人のことを腹立ち憎むといふ心の奥底をよく考へて見ると、それは強ち卑しめぬところもある。人を憎むといへば悪いやうでもあるが、しかしそれだけ人の事を氣にもせずに居れぬといふは、心の底に自分と他人とは一つのものであり、人のわるいのが無心で見て居れぬといふ感じがあるからぢや。この自分と他人とが一つのものであるといふのが佛の敎ぢや。それだからと言つて、憎んでよいといふ法はない。自分としては、どこまでも、この我儘なこゝろを愧ぢねばならぬ。腹を立てるが當り前ぢやというて自ら許してはたましひがほろびる。自ら愧ぢ、自ら悲しむこころが法のいのちぢや』

この時、雨戸が少し多く明いて、主人の顔がほのかに見える。

『たましひを愛するならば、あらゆる機緣にふれて自分を見つめてゆかねばならぬ。佛の修行といふも、それの外ではない。今夜はことに平生の敎が身にしみる。先程こゝの主人が私どもを嫌つたのも考へて見れば道理ぢや。生きとし生けるもの死を嫌はぬはない。無心に見ゆる蟲けらさへ死ぬことは恐れる。しかし死ぬるといふことは、あらゆるものに附き纏うてゐる運めぢや。これは逃げようとしても逃げられぬ。それのみならず、この死ぬるといふことが本當に感ぜられればこそ、生きてゐるよろこびが深く感じらるゝ。死をおもはぬゆゑに無駄事をして大事な月日を潰してしまふのぢや。死をおもふとき限りなく生命を愛する心が湧く。なぜ生命を愛するかといへば、あらゆるものは皆その使命をもつてゐる』

師匠の聲は一言々々熱をもつて來て、寒さも忘れてゐるかのやうに見ゆる。弟子たちも己れを忘れて傾聽してゐる。

『智愚賢不肖をえらばず、それ〳〵に成し果すべく運められた使命がある。死を見つめねばそれに己れの全部を舉げる氣にはなれぬ。生死を超越するといふことは、本當に死を見つめて、現在の生活に限りなき價値と意味とを感ずることぢや。いかに苦しからうとも惱みがあらうとも、それは受けられるだけ受けて、雄々しく自分の使命を果すの

ちや。外典にも朝に道を聞いて夕に死すとも可なりとある。わが師匠は、源空は死刑に處せらるゝとも念佛すゝめではあるべからずと言はれた。しかし私は使命を果して居ると思ふのはまだ隙がある。自分を忘れて使命一つになりきつたところに眞實のすくひがあるのぢや』

この時雨戸がさつと明き、雪の上に額をつけて、泣いて詫び入る主人の姿が見られた。

内へ請じ入れるなり主人は幾度も〳〵自らの罪を詫びた。さうして絶え入るやうな聲をして、

『このやうな尊いお方とは存ぜず、酷い仕打をいたしまして申譯もありませぬ。このやうな惡人、必ず未來は地獄に墮ちるに相違ありませぬ。どうか私の助かる教をお聞かせ下さいませ』

『地獄へ墮ちるとか墮ちぬとかいふ事は重大な事ではありませぬ。佛の教は心の中の話です。佛が三惡道といはれ、地獄餓鬼畜生などと言はれるのも我々の心の相なのです。地獄といふは人を呪ひ人を憎む心をいうたものです。その呪ひや憎みの心を給に描いて御覧なさい。[illegible]す相手を殺し傷つけ、或は共家に火を焚けるやうな相を描かねばなりますまい。この鬼のやうな心が地獄ぢや。餓鬼といふのは我々が毎日の食事、お米も野菜もお魚も、みな他の生命である。それをとつて自分の生命と致して居る。たとひ殺されたものゝ身になつて見る程ではなくとも、有難く喜んで頂くべきであるのに不味の、旨くないのと小言いひ〳〵食べるのが餓鬼道です。畜生といふも同じことで、わが身一つを可愛がつて、人に同情同感のないのが畜生道。世間の人は親の子を可愛がるのは、まごころのやうに思うて居りますが、わが子だけを可愛がるなら畜生でもする。外典の禮記といふ書物に、その子をのみ子とし、その親をのみ親とするを卑しめてある。佛は三界はこれわが物なり、一切の衆生はこれわが子なりと言はれて、この我々の心とは眞反對なものです。佛の心から見れば我々の心は地獄餓鬼畜生であると言はれても致し方がありますまい』

『自分の心のありさまが見えて來るやうな氣がいたします。自

宗の祖師とも言はるゝ人々の教へなりその言行なりは、皆この人間の主我的欲望を否定することを以て終始してゐる。ことにわが宗祖親鸞聖人は平安朝末期、鎌倉初期といふ、殆ど今日と同じやうな人心險惡な時代に生れ、五濁惡世を痛切に批判し、深き玄理を平易の言葉に寫し、時代の民心を高揚することに努められた。かういふ聖者の言行をわがキング誌が現代に紹介し、この濁亂せる世波を淸うせんとせらるることは、實によろこびて餘りあることである。松原君のものせられた聖人の物語は、簡明にしてよく聖人の高德と教理とを現はして居り、世を益すること少からざることとおもふ。よろこびの一端を開陳する次第である。



分の恐ろしさが分りました。それではその佛にして頂く極樂往生とはどういふ事でござりますか』

『それも極樂へ行くというたとて、こゝからあちらへゆくといふやうな形の上の話ではなく、やはり心の事です。極樂とは申しますが、自分の苦樂と利害ばかりしか考へぬやうな人間が樂しみとして居ることを樂む世界ではありません。極樂は佛の國です。佛は一切の生きとし生けるものの苦しみと惱みとを脊負うて立つことを唯一の樂みとして居られます。ところが人間はその眞反對です。先程いうた地獄餓鬼畜生が我我の心の眞實の有樣です。これはこのまゝでは絕對に極樂へはゆけません。しかし極樂は理想光明の世界です。この理想の光明に照らされて、自分の心の眞相を見るとき、我々はこれを愧ぢ悲しむ心を起します。この自分の惡さを愧ぢ悲しむこゝろ、これが人間のなし得べき最上の善です。惡いものは惡い事を當り前とし、自ら許して居ります。照らされたとき初めて愧ぢます。愧ぢたときに一步理想光明の國へ近よつて居ります。自分で惡いと思ふ時善に進むのです。自分で善いとおもへばそれより一步も善へは進めません。限りなく照らされて限りなく進むのです。かうして自らを愧ぢ悲しみつゝ清淨眞實の世界へと日々步みよらして貰ふのです。これが光明に逢ふことであり、眞に自らを知ることです。古來の聖者の辿られた道はみなこれであります。これは淺いやうで一番深い敎であ

り、手近にあることであつて永遠に不朽な眞實道です』

主人の欣ばしさうな聲が起つた。

『あゝ夜が明けたやうな心もちになりました。ありがたうございました。これで人間に生れた甲斐があるやうにおもはれます。ありがたうございました。幾重にもお禮を申上げます。お伺ひ申すのも忘れて居りましたが、あなた樣は何と仰せらるゝお方でござります』

『私か、私は親鸞と申すものぢや』

この師匠の僧こそ今日の日本に數千萬の信徒と幾萬の僧侶とを有する淨土眞宗の開祖親鸞聖人であつた。

最初の受難

聖人の俗姓は藤原氏の連枝日野家であるとせられてゐるが、それは確實な史料がない。しかし俗姓系圖の如きは一生名利を嫌ひぬかれた聖人にとつては問題ではない。その書きのこされた著述（即ち聖人の生命）と、それによつて吾等が獲得する生活原理とが、聖人の聖人たる所以であるから、こゝにはさういふ詮索は一切省く。

たゞ聖人の生れられた時代を一寸眺めて見る必要がある。それは一九三〇年、即ち昭和五年の世界の有樣と極めてよく似てゐる。國際關係は別として、人間は財と權力とを奪ひ合つて物凄い鬪ひをつゞけてゐる。これを階級鬪爭と名ける事が出來るならば、聖人の時代も、ある意味に於てさうであつた。藤原氏の權力が衰へて平氏が立つた頃に生れられ、平氏が亡びて源氏の立つたのが聖人二十歳の時である。兵亂は彼處此處に起り、兵火のために大伽藍の焚かるゝもの、年に幾度といふことを知らず、南都にも叡山にも僧兵は跋扈し、人心は戰々兢々として、安き日は一日もなかつた。

この時に聰敏多感なる青年であつた聖人は、深く人生問題に疑惑をいだき、眞實に生くる道を求むるために、當時の最高學府であり心靈の救濟所であつた叡山に登られた。

しかしそこには奈良朝、平安朝以來つゞいて來た貴族の玩弄物になつてゐるやうな儀禮專門の佛教ばかりで、人間のたましひを救ふ力のあるものはなかつた。この篤學にして求道心あつき聖人は、學として道として求めざるはなかつたが、遂に精神生活の上には何の得るところもなく、緣あつて洛東吉水の禪房に念佛の法を說いて居らるゝ法然上人の下にいたり、そこにはじめて眞實に生きる道を得られた。

法然上人の教によつて新しき道に入られた聖人は、幾多の心的苦鬪向上ののち、更に獨自の道を開かれたが、それが人間の生活原理として、時代批判價値として、現代の吾等にとつて、どういふ意義があるかは此物語のうちに、しば〳〵語らるゝ言葉から推測し領解せらるゝであらう。

當時の舊佛教徒は、多くこの新興の宗教を理解せず、却てこれを憎み、ことに僧兵を養ふ叡山延曆寺と南都興福寺とは武力を以て、しば〳〵朝廷に嗷訴し、この法然上人の教法を停止

すべきことを逼つた。白河法皇が『朕の意の如くならざるものは鴨河の水、すごろくの釆、山法師である』と仰せられたこの僧兵たちの暴威には朝廷も遂にかなはせられず、法然上人を讃岐に流し、その他高弟數人を或は死刑し、或は流罪にした。

そのうち當時綽空と名のつて居られた親鸞聖人もこの事に坐して越後國府に流された。

當時聖人にはすでに若き妻君があり二人の男兒もあつたことは、最近の史的研究で明かとなつた。かくて師にわかれ、法の友にわかれ、愛子とわかれて、剰へ流人の名を負はされ、都に遠き北の海のほとりに謫居せられたのである。幾多の精神生活史上の偉人に下さるべき同じ運命は聖人にも下つた。外界の苦難は必ず內面を掘り下げて、そこに豐かなる生命の泉を汲ましめる。後世幾千萬の心靈をして聖人としてこの人を仰がしめるに到つた高く且つ深き心的生活は實にこゝに生れたのである。淨土眞宗は、まことに此の暗く淋しい雪の越後の國の孤獨生活から生れた。

草庵にあつての日は、多く思索と讀書とに費やされた。時々は道を求むるものに招かれて、敎を說きに出かけられた。上に記した出來ごとはその一つである。かの家の主人は日野左衛門といひ、その後篤く聖人に歸依し、その一子を聖人の弟子とした。唯圓房といふがそれであるといふ。

自ら欺かず昧まさず

建暦元年に勅免になり、直ちに師の法然上人に久濶の面晤をとげたく、雪を冒して謫居を立ち出でられたが、途中で師の訃音を耳にし、師の居なき華洛へゆきて何かせんとて、上洛はおもひ止まり、一たび越後へ歸り、やがて常陸國稻田に草庵を設らへた。

聖人の敎は幾ばくもなくして遠近の豪族、農民の間へ流れて行つた。聖人にとりては佛といふ最高の眞實に照らされて、虛僞不實なる自己を顧み、これを愧ぢるといふ事が、人間としてなすかぎりの至善であつた。佛に心を照らさるゝが故に、常に自らの內面より目を離さず、敢て善をなさんとする、おのれを揣らざる驕慢を耻ぢ、ひたすら惡を怖れた。ソクラテスが死刑の宣告を受け、友人や弟子達が逃げる可能性のあることを知つて、是非逃げよとすゝめた時『我は死よりも惡を怖れる』と言つて平然として毒を仰いだのが思ひ合はさるゝ。

まことに惡を怖るゝほどの善はない。また聖人にとりては、すべてを不可思議なる大生命力（個人を越えたあるもの）の働きにまかせて、自らは聊かもはからはず、人事を盡して天命を待つといふよりは、天命に安んじて人事を盡すといふ、徹底した使命感に生きた。これを自然法爾の道といふ。この凡愚の自覺は、たとへばニュートンが、その前古未曾有の大發見を稱讚せられ『これは子供が海濱で貝殼を拾うた位のものだ』と言つて大自然の不思議を驚嘆したごとく、自らを無智としたソクラテスが古今の大智者であつたごとく、深き叡智あるもののみが至り得

る境地であつた。かくて聖人は姓を改めて愚禿親鸞と號した。この平易で實生活に適切で、しかも深い眞理と心的苦闘の結果とから現はれた教は、聖人の周圍に多くの歸依者を引きつけた。

稲田から一里ばかり南の方の板敷山に、山伏辨圓といふが住ひ、多くの弟子と信者とを集めてゐた。それが聖人が稲田に住はれるやうになつてから、聖人の草庵へ教をきゝにゆくものが次第に殖えて、山伏の方は自然勢力が減ることとなつた。

聖人に對する山伏の恨みは次第に深まつて行つた。やがて山上に護摩壇をしつらへて、調伏の呪咀を行じた。が一向に驗が見えず、聖人はいつも壯健で弟子や信者たちは盛に稲田に集まる。そこで最後の手段として、辨圓自ら刄を提げて稲田に闖入するといふ噂が傳へられた。

草庵では弟子も信者も深く之を心配し怖れて、ある日聖人の前に集まつて、この事を話しあつた。

『辨圓がいよ／＼この草庵へ押しかけて來ると申す噂でござりますが、今の間にいづれへかへお避け遊ばされては如何でござりまする』

『避ける？　イヤそれは避けられない』

『何故でござりまする』

『親鸞があればこそ辨圓があるのぢや。その人がさういふ心になつたといふのも、私といふものがあるからぢや。その人のさういふ心もちになつたのは私が基因ぢや。自分が種子を播いておいて、逃げるといふことはない。山伏がこゝへ攻めて來ると聞いて私は傷ましく感じた。向ふの心もちにもなつて見ねばならぬ』

『さういふお志は格別尊く頂きますが、それが餘の人のごとく言葉で說いて分るのではなく、兇器をもつて亂入いたしまする以上、御一命にかゝはります。今お師匠様にそのやうなことがありましては——』

『それはこちらで勝手にさういふ風に考へて見るまでゝ、さういふ事になるともならぬとも分るものではない。さういふ風に考へるのが悪いのではないか』

『しかし噂さによれば山伏はたしかに調伏の法も行ひ、先日もお道筋に待ち伏せいたしましたとも申しまするし、それが本意を遂げず、亂入となつたとして見ますれば、必ず害心をもつてまゐるに相違ござりませぬ』

『それよりも、これについては、私にとつては考へて見ねばならぬ。もつと大きな事がある。それは私の心中ぢや。有りやうを言へば山伏が攻めて來るときいて、私も心は平かではなかつた。何もそのやうにせずとも、道の諍ひは道を以てすべきぢや。自分の道をさまたげられたからと言つて、刄に衂るといふは道理にはづれてゐる。悪い人間もあるものぢやとおもふと、私とて憎しみの心がないでもない。かういふ憎しみがある上は、地を換へて見れば、私とて或は血迷うて刄を持たぬものでもない。たゞ教に照らされて持たぬまでのこと、大根は彼も我

も一つぢや。同じ胎から出た兄弟ぢや。私にも憎しみの心がある上は、辨圓は他人ぢやない。私の心の影ぢや』
『お道理は左樣でもおからだには代へられませぬ』
『イヤ道理がそのまゝの生活ぢや。實行のできぬ道ならば道ではない。痛みは痛みを味ふことに依てのぞかれ、苦難は苦難の中へ入ることに依てのみ解かるゝ。與へられたものは受けねばならぬ。それを逃げろといふが人間のはからひぢや。そればかりではない。私はその辨圓に心から逢ひたい。ことに刄を以て人を害はんとするその姿が見たい。それは決して親鸞の他のものではない。その姿を見て、いやその姿によつて私自身の心の姿を明かに眺め、それに大悲同感したまふ親様のお心を本當に味はして頂く。今生に又となき絶好の因縁ぢや。辨圓に逢ふのぢやない。自分に逢ふのぢや』
『あくまでその思召は尊うございまするが、それは何も御一命をおすてにならないでも、さういふ御自覺一つで尊くもあり、また事足るわけではございませんか』
『わが身を案じてくれらるゝはありがたい。しかしそれでは自ら欺き、自ら昧ますことではないか。自覺を自覺だけにとゞめておいて、いはゞ腹の中に收めておいて、實行は實行ですると いふは生活が二重になる。愚かといへども最上の眞實である佛の道を行じさして頂く私には、たとひ首はちぎられても、一つからだで二筋の道は歩めぬ。外側から自分に加へらるゝ富貴や威武や生や死や、さういふものによつて微塵も動かされてはならぬと、かねて教を聞いて居るであらう。そなたたちの私をおもうてくれる志は、まことに厚う受けるが、私としては私の心の底から湧く聲だけには耳をふさぐことが出來ない。辨圓を作つたものは親鸞である。辨圓は親鸞の心の影ぢや。『それにまともに逢うて、自分の姿を見よ。そこに自覺を深めよ』といふ內からの聲が聞える。何を欺いても、こればかりは欺けぬ。
私ぢやとて苦難は恐ろしい。刄にかゝるは厭でもある。この愚かな自分にしては健げなる志を起したのも決して親鸞の力ではない。眞理の光の働きぢや。眞理に照らされては、自ら欺き、自ら昧ますわけにはゆかぬ。餘りに明かな事ぢや。微塵も曲げもすぢりもならぬ。ゆるしてくれ、辨圓にあはせてくれ』
草庵の表口の方にさわがしい聲が起つた。弟子や信徒たちの顏色は變つた。聖人は靜かに立たれた。弟子たちが立ちふさがつて、
『お危うございます』
と言つたが、キツと結ばれた唇は動かず、聖人は靜々と表庭の方へ出られた。



障子を明けると山伏辨圓は立つてゐた。柿色の衣に頭巾をつけて、刀の柄に手をかけ、物凄い形相をし

て、庭石の上に衝つ立ち、聖人を睨み上げてゐる。

聖人はぢいと見入られた。

自らの心の姿を、まのあたりに見出した聖人は、自らを泣かれた。か〻るものに大悲同感したまふ佛の心を憶うて、涙は頰を傳うて止まない。

この不思議な光景に、辨圓はたじ〳〵となつた。

聖人の目から流る〻涙を、目たたきもせずに眺め入つて居るうち、聖人の涙を通して、何物かの大きな力が、辨圓の心へ徹つた。

やがてその物凄い目にも涙が浮んだ。兩手を大地について、山伏はひれ伏した。



あたりに聲を呑んで立つてゐた信徒や弟子たちの唇から、一齊に念佛の聲が湧き起つた。

辨圓は直ちに聖人の弟子となり、名を明法房と改められた。

苦難を目がけて

更に私は親鸞聖人を知るについて最も重要なる事實を語らねばならぬ。

多くの高僧聖者には家庭生活がなく、僅かにソクラテス、トルストイ、及び聖人にそれがあるところに、吾等が親しみ易く、また吾等の實生活の上に教へらる〻ところが多い。

ことに聖人の人格の反映であつた其の妻女慧信のことは世人の知ること稀であるが、これまた非凡なる賢婦人であつた。聖人が六十二歳にして東國をあとに京都へ去つてしまはれて以來、二十四名の高弟と多數の信徒とより成る教團を統一し、その中心となつて可なり盛なる教化の跡を殘してゐる。のち越後に歸り、獨力を以て幾多の

子女を養ひ、下人を世話せられた。八十歳以後しば〳〵病氣にかかり、弘長年間の飢饉には餓死を覺悟した程に艱苦をなめたが、しかも九十歳近くまで生きられたに見ても、その精神生活の凡常でなかつた事が伺はるゝ。これ恐らくは聖人の人格の感化と、信念の乘り移つてゐたがためであらう。晩年にものされた手紙が十三通近年西本願寺の倉庫から現はれたが、その內末女彌女にあてた一通に『そなたの父であり私の夫である親鸞さまは、たゞの人ではなく、佛の再誕したまうたものである』（取意）と記されてあるに見ても、聖人を理解し尊崇し、從つてその敎にも深い領解體達のあつたことが知らるゝ。

また聖人には六人の子女があつた。これらに對する人間としての愛情、また親としての關心も元より深かつたにはちがひない。

また聖人には二十四人の高足の弟子と、二十餘年育てられた多數の信徒があつた。これらの高弟、信徒たちは聖人の剛信と學德とに對して限りなき尊敬をさゝげてゐた。いかにその尊敬歸依の深かつたかは、さま〴〵の文獻に徵して明かである。

しかるに聖人は六十二歳にして、これらの妻子眷屬にも、弟子信徒たちにも別れて、一人京都へ去つてしまはれた。聖人を以て肉食妻帶の元祖のごとく人々は考へて居るが、聖人以前、及び同時にも妻帶した人は幾らもある。聖人の妻帶は決して異數ではない。もし異數とすれば、六十二歳にしてこれを捨て、家にわかれ歸依者にわかれ、孤影蕭然として京都に去られたことである。

さうしてまた京都には何が待つてゐたかと言へば、たゞ貧窮と淋しさとだけであつた。居るに家なければ、肉弟尋有僧都の寺の小さき一室に寓居し、語るに友なく、かしづくべき骨肉も身緣りもなく、たゞ讀書と、思索と、著述と、これだけに老餘の三十年間を送られた。まことに斯の如きは古往今來の精神生活史上に、全く類例なきものである。聖人が何故に、人間として忍ぶべからざる愛別離苦をしのび、老後身邊の不自由なるべき身をかゝへて他家に流寓の身となり、九十歳の高齡まで貧窮と困苦と、極端なる努力との生活を送られたであらうか。

それは吾等の細かき說明によるよりも、次の物語が、具體的に簡明に表現するであらう。

個愛より全愛へ

ある秋唯圓は草庵の裏の雨戶が俄かに明いて、外緣に人の動く氣配にふと目をさました。出て見ると師の聖人が旅姿をして、急ぎ足に裏門を出てゆかれるのが、月明りに照し出されてゐる。唯圓は胸さわぎを抑へ、走りつけて袖にすがつた。

『いづれへお越しでござりまする』

『靜かにしてくれ――。少し仔細あつて草庵をあとにする』

『私、お伴をさせて頂きます』

『イヤ一人行かせてくれ。外の時とはちがふ』

『お言葉ではござりますが、お師匠樣なき世の中に住まはうと

は存じませぬ。[illegible]までもお[illegible]のあらせらるゝところへはお伴いたしたい念願にござります』

『それは忝く思うてゐる。しかし今度は私は草庵をあとにするばかりでなく、まことは唯だ自分一人になりたいが念願なのぢや。そなたの眞情は厚く受けるが、一人になりたいといふ本懐を無にするわけにはゆかぬ』

『それではせめてその御事情だけをお知らせ下されませ。もしさやうでなければ、お伴をさせて頂くより仕方はござりませぬ。何分にも漸次に御老體におなり遊ばしますのに――』唯圓は泣き入つた。

『では――、そなただけは分つてくれるやうに思ふゆゑ。――一應きいてくれ。(しばらく考へこんでから)この心もちは、わしのやうな人間であつて、わしと同じ年ごろまで生きて、わしと同じ苦勞をせにや分るまい。が、唯圓、一口に申せば、わしは直接の愛に失敗したのぢや』

『エッ』唯圓おどろく。

『ぢかの愛に失敗したのぢや。――私は良い師匠をもつて、さまゞゝよい教を受けた。どんなに自分を知るといふ上に、深い智慧を授けられたことであらう。しかるに今自分の周圍にゐる人たちを眺めて居るに、ほとんど皆自分といふものを知らうとしない。外のことは教へれば聞くが、自分を見よと言へば必ず怒る。自分を見なくて眞實の道が歩けるものか。腐つてゆくばかりぢや。さういふのを見て、あはれや、かなしやと思ふ心は[illegible]まことは必ず通るものと思うて、あくまで眞劍に人にせまつた。いゝ加減で措くことのできぬ性分なので、本氣でさへかゝれば、人は必ず分つてくれるとおもうたが、私の徳の足らぬために違ひないが、それが皆片つぱしから失敗ぢや。

ぢかの愛は徹らぬものと私はつくゞゝ考へた。皆ゆがみ、すぢつて相手の心に射し入るものと見えて、今度、わが身にそいつが返つて來るところは、まるで逆つたものとなつて居るのぢや。血を分けた肉身の子供でさへさうぢや。異體同心の妻さへさうぢや。弟子もさう、信徒もさう、その他の世間のならはしで交はつた人たちはもとよりさうぢや。このこころもちは分るであらう』

『ハイ』

『そのことは今日はじまつたことではない。今から二十年も、もつと前から私はさういふことは考へてゐた。がだんゞゝと世を經るにつけ、人との行きさつの深く多くなるにつけ、また私もものを考へるにつけ、わしはこのぢかの愛、直接の愛といふものゝ、まことに末の徹らぬものであることに、しみゞゝおもひ當るやうになつた。

そればかりではない。思ひは山ほどあつても私の力に限りがある。さうしてまたさまゞゝの妨げがあつて思ひは遂げない。悲しみは既に深うなり、なげきも增るが、こればかりは諦めようとおもうても諦めきれない。しみゞゝと一人で泣くことも

ある。

私も考へて考へて考へぬいた。私は例へ自分の誠が、よしや曲つて相手の心へはいらうと、それが反對になつて戻つて來ようと、はじめから愛の報酬を目あてにしてしたことではないから、それはどうでもよい。たゞこゝに考へることは、私の思ふこと、言ふことが、たとひ私にはまことと思はれ、眞實の愛ぢやと考へられても、智慧のまなこの暗い私には、それが分らぬ。よいと思うていうたことが人を誤まつては申わけがない。愛の酬いられぬは元より覺悟ぢやが、相手を誤まつては恐ろしい。もしさうなれば、ぢかの愛は末の徹らぬぐらゐのものではなくて、その愛は、そのまゝが罪ぢや。

わしはかうして多くの人を禍したのを悔ゆる。わし一人のあるために、どれほどの多くの人を誤まつた事やら』

『そのやうな事はござりませぬ。お師匠さまのおかげで、どれほどの人が救はれましたやら――』

『イヤ〱それは私の心の中の明かな事實ぢや。それでの唯圓、このたび思ひ立つてわし一人になるのは、今までの大きな、多くのわしの罪に對するせめてもの懺悔ぢや』

『それではお師匠さま、あなたさまのお心はそれで濟みましても、これからお師匠さまを失つてしまふ草庵や教團御家族さまがたの御不幸についてはいかゞ御考へ遊ばします』

『それも思はぬことはない、(暗然となる)それがために今日まで私はどんなに苦しみ悶えたこ[illegible]

うな決心をしてはこれを崩したことか――。いままたそのぢかの愛憐のために、このたびの決心をこは



母の偏愛にまけてしまうては、また一層の罪を重ねなければならぬ。が、唯圓』

『ハイ』

『いま我々は我執我愛にとらはれて、自分の周圍のものばかりしか目につかぬが、この直接するものの外に、一切の生きとし生けるもの〻あることを忘れてはならぬ。自分の迷ひの深さをおもふにつけ、私はこの百萬億の國土の百萬億の生あるものの上をおもはねばならぬ。多くのものが智慧の眼くらくして、おのれを見ることを知らず、外界のことばかりに囚はれて肉欲の奴隷となり、暗から暗へと迷うてゆくのは、唯圓、よく考へて見れば私の責任ぢや』

この時、月の光に照された師匠の顔の、昻然として輝けるにおどろく。

『因縁あつて此の世に直接の交はりをむすびいろ〱世話をかけた周圍のものの御恩も大きいが、まことの道をきゝ、まことの道を歩むものにとつては、この生々世々の親子兄弟である百千億の同胞を忘れてはならない。これらと手をつなぎあはせて、これらの苦惱を苦惱するのが私のつとめぢや。

體と體とが合うたときは、とかく心がはなれ〱となるが、別れてゐると心は却つて一つになる。わしの一人にならうとするのは一切のものとわかれて、一切と一つにならうとするのぢや。

わしはたゞ一人となつて、師匠から授かつたまことの道を一切の生きとし生けるものに書きのこす仕事に、これからの世をい。何よりも偏りの愛の世に甦るあなたがはかはしく、もはやこのまゝには措けない。一切の人の誤まりを見るのは死よりもつらい。周圍のものに失敗の愛をそゝいで妄動して居るひまを抛つて、億萬の同胞のために、靜かに筆をとつてものを書く生涯に入るのぢや。草庵のことは慧信と眞佛とによく賴んである。萬事は書きのこしたものに記してある――』

自ら光りを韜す

親鸞聖人の生涯のうち、その最も耀かしいものは、京都に於ける晩年の三十年間であらう。これこそ實に古今東西の精神生活者のうちに、殆どその比類を見ざるものである。すでに九十歳といふ高齢が非凡であるのに、歳を經るに隨つて、多くのものが老し耄し遞するとは反對に、心的生活はいよ〱透明澄徹をきはめ、八十八歳にして、宗教的文獻として、はた人間の生活記録として、恐らくは最高なるべき『自然法爾章』の製作あるに見ても、大凡は察知せらるゝであらう。

これを外的に見れば、それは極端なる貧窮と、孤獨と、從つて不自由きはまる生活であつた。而してこれを内的に見れば、限りなきたましひの高揚であつた。

この老年の人にして、定まる住居とてもなかつた。三十年間に五六箇處も寓居を變へて居り、それもみな他人の家に寄寓したのである。最後は肉弟尋有僧都の寺の一室で終られたらしい。

何れは破壁に破れ畳、佛壇らしいものすらなかつたといふ。從つて食餌も極めて粗末なものであつたらうのに、九十歳まで遂に一たびも病の床に寢ねず、心身ともに剛健であつた點だけでも、人間界稀有の存在である。

第六子の彌女といふが、三たび嫁して戻り聖人の側にゐて、少しの間は給仕して居たらしいが、この最愛の子なるべき末子をも傍らにはべらすことができず、大正十二年に高田專修寺の倉庫より發見された聖人の消息によれば『彌女うらぶれて居るところもなく、養ふすべもないから、よろしくたのむ』といふ意味の手紙をつけて、東國の信徒に托されたらしい。

東國の信徒も師匠の貧窮の有樣を知つてゐて時々金を送つたものと見ゆる。八文、二十四文おくられて有難いといふやうな證の言葉が、匂ひの高い宗教的な消息の中に挾まつて居るのがある。

ともかく貧窮はその極限に達してゐたにちがひない。

その上身邊には尋有僧都以外は一人の骨肉も親戚もなく、法友は皆死にはて、温かき言葉をかけるものすら無かつた。まことに推察にも想像にもあまる生活であつた。

しかしこの人間として悲痛愛苦に堪へざる中にあつて、聖人は求道求學の念いよ／＼熾に燃えた。それはこの晩年の著述が、七十四五歳位からいよ／＼底光りを加へ、年を追うて研かれてゆき冴えてゆき、八十八歳にいたりて遂に渾圓太醇の至境に達しられたに見て明かである。

晩年の製作は、

寶治二年、七十六歳、淨土和讃、高僧和讃の諸書。
建長二年、七十八歳、唯信鈔文意。
建長四年、八十歳、淨土文類聚鈔。
建長七年、八十三歳、尊號眞像銘文。
康元元年、八十四歳、入出二門偈。
同　年、　往還回向文類。
康元二年、八十五歳、淨土三經往生文類。
同　年、　愚禿鈔。
正嘉元年、(卽ち康元二)聖德太子奉讃。
同年、　一念多念證文。
正嘉二年、八十六歳、正像末和讃。
文應元年、八十八歳、自然法爾章。

もしこれらの著述を眞實に味解し體讀せらるゝならば、聖人が晩年の內生活の光景が、いかに層々として向上し躍進し、人間として至り得べきかぎりの高き境地に達しられたかを領知せらるゝことができるであらう。

さうしてまたかの常人の堪へ得べからざる窮苦の中にあつて、ひとりさびしく矻々として血を絞り骨を削りつゝ筆をとられし姿の內に、至強至烈の使命感と、一切人類の心生活に對する熱愛とを看取せずには居られないであらう。

この特異なる精神生活の持主も、遂に弘長二年十一月廿八日、滿九十歳を以て世上の命を終つた。（完）



實行第一（修養一夕話）

文學博士 宇野哲人

私は父から聞いて子供心にもよほど印象が深かつたとみえ、今もあり〱と覺えてゐる話がある。昔、熊本に時習館といふ藩學があつて、こゝでは定日に先生の講義が終ると、若士達は必ず之を如何にして實際に活用するかについて種々意見を交はし、その最も適當と決定した事は、勉めて之を實行するといふ風があつた。

或時、若し萬一途中で狂犬に襲はれたらどうするといふ話になり、腰の刀に血ぬりては武士の魂の汚れ、それこそ木刀を以て追ひ拂ふに如かずといふ結論になつた。さて次の定日になつてみると、玄關には若士達の持參した木刀や杖など一ぱいであつたといふ。狂犬など滅多に出逢ふものではないが、昔の人は善いといふ事は必ず之を實行したものだといふのである。これは少しく滑稽に近いやうにも思はれるが、然し一事が萬事である。善を聞いて直ちに實行するといふ精神は、誠に尊敬すべきである。

孔子の弟子の子路は、善を聞いては直ちに之を實行する。然しその實行がなか〱容易でないので、前のもまだ實行しきれないのに、此上に善を聞いてはやりきれぬといつたといふ話である。孔子もこの子路の熱烈な態度には感心せられたが、餘り極端に走るのを心配して、善を聞いても一應は父兄に相談をせねばならぬこともあると戒められた程である。

近世の名君白河樂翁公が、初めて入國せられた時、白河領は殆ど破產に瀕してゐた。そこで公は第一に節約令を下し、自ら率先して之を實行しようといふので、一切の絹布を廢し、食事なども極端な節約を命ぜられた。ところが、御用人の考では、食膳の事はとも角、衣服夜具などは現に絹布で作つたものがあるのに、更に之を綿布で作りかへるとなると、二重の御物入りになるから、當分はこのまゝ御使用になつて、今度新調する時に綿布にせられた方がよからうといふので、この旨申上げると、いや〱一旦志を立てた上は、今直ちに實行しないと、到底目的を達することは出來ぬ、一旦の物入りはさることながら、それでなくては、下、人民に範を垂れる所以でないとて、聞入れられなかつた。かくてこそ風に草木の靡くが如く、人民にその志が徹底して、白河領の經濟の立直しの功を奏したのである。

われ〱も今日緊縮節約のみをいはず、一切の事に就いて、善を聞いたら直ちに之を實行したいものである。



◇手で打つ

小母さん『坊つちやんは學校がお好き？』

坊つちやん『うん。お家よりか好きだよ』

小母さん『まあ。それはいゝ鹽梅ですねえ』

坊つちやん『いゝ鹽梅だとも！ 學校の先生は家の母さんみたいに、箒で打たないからね』

◇用意周到

商人の伜『お父さん。學校の新學期が始るから教科書を買つて下さい』

吝な商人『チヨツ。何んと何んとで幾價だ？』



商人の伜『エヽ。算術の本が七十錢——國語讀本が五十錢——歴史教科書が六十錢——地理が八十錢——英語讀本が一圓——合計四圓です』

吝な商人『そ、そ、そりや違ふ！ 四十錢多いぢやないか。馬鹿め。それしきの加算が出來ないのか？』

商人の伜『出來ないことはないです』

吝な商人『ぢや、どうして四十錢も餘計にいふんだ？』

商人の伜『どうせ、お父さんのことだから、きつと、そのくらゐは値切るだらうと思つたんです』

◇吃りくらべ

吃りの鍛冶屋『は、は、はやく、た、た、たゝかんか！』

矢張り吃りの小僧『た、た、たくつて、ど、ど、どこですか？』

親方『も、も、もう、だ、だめだ！ も、も、もう、ひ、冷えちまつた！』

◇棒ほどになる話

勘三郎『お前、俺が椋十の畑の人參を馬力一杯盗んだつて云つたさうだな』

太吉『馬力に一杯だッて！ そんな事わしは云はねえ、たゞ次郎作のかみさんに聽いた通り、バケツ一杯盗んだつて云つたゞ』

次郎作のかみさん『俺あバケツ

どういふ譯でせうか

唐辛を食べて辛くて堪らぬ時、濃いお茶を飲むと樂になるのはなぜでせうか。

唐辛を食つて辛いのは、その中に含まれてゐるピペリンといふ物質が舌に附着して味覺神經を刺戟するからです。其時茶を飲むと茶の中にタンニンといふ澁い味の物質があつて、それが唐辛のピペリンを取去つて呉れるのでわれ〳〵は辛さから助かることが出來る譯です。



潜水艦が水底を自由に航行することが出來るのはどういふ譯でせうか。

一杯なんて云ふもんか！



お前が椋十の畑の人參を一束持つてつたつてことを三平の阿母に聞いたよ」

三平の阿母『わしはたゞ百藏から聞いた通り、お前が人參を一本引こ拔くところを見たつて言つただけさ』

百藏『冗談ちやあねえや、わしは又此間お前が椋十の人參畠を見て、隨分可い出來だつて褒めたつて事を五兵衞に話したゞけさ』

◇高いでせう?

虛榮夫人『今度弗山さんの夜會へ行くのに靴を新調して欲しいわ』

良人『何かと云ふとそんな物ばかりねだつて……もつと高尙な考を持ちなさい』

夫人『あーら、嬉しい、では眞珠の頸飾とダイヤの髮ピンを買つて下さる？』

◇のどかな日曜

父親『ソラ〳〵、御覽。圓い環が出來たらう』



と、莨の煙を吹いて見せる。不思議さうに眺めてゐた芳坊。——『父ちやん、今度は四角を吹いとくれよ』

◇商賣變へ

叔父『トムや、お前は大きくなつたら、何になるんだえ?』

トム『僕、僕は軍人さ』

叔父『成程なあ！ 然しトムや……軍人は本當に立派だが、もし、戰爭があつたら、殺されるかも知れないぜ。それでもいゝかえ?』

トム『誰にさ?』

叔父『そりや敵だよ。』

トム『ぢやねえ叔父ちやん。僕はその敵になるよ』

◇用途

『君は自動車の運轉が出來るかえ?』

『殘念ながら、出來ねえだ』

『ぢや、いゝ、ほんの鳥渡でいゝから、僕の自動車の番をしてゐて呉れ給へ』

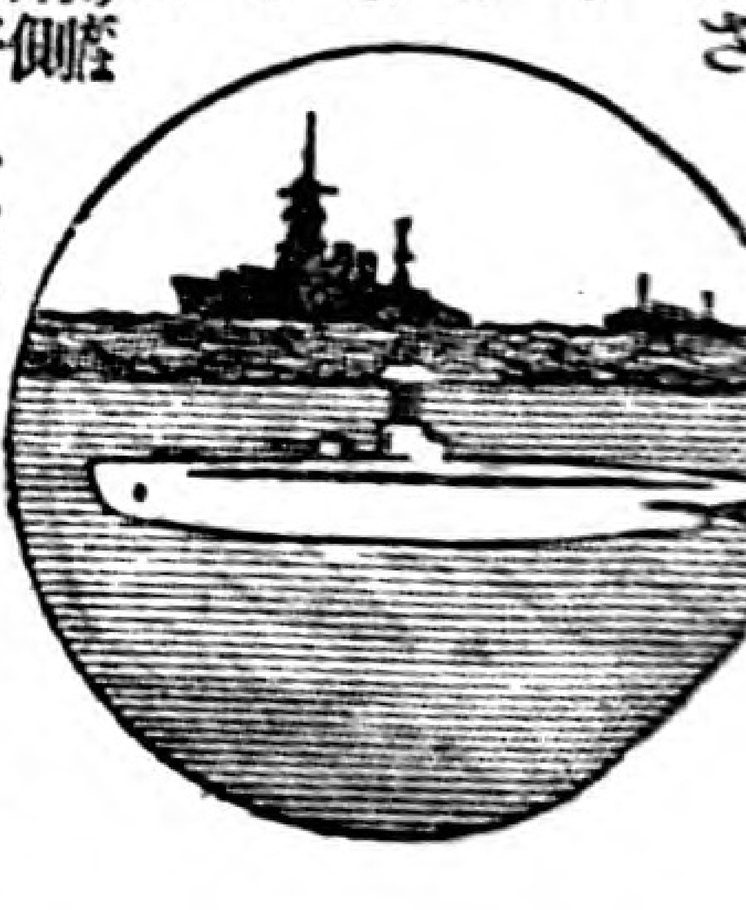
◇實地試驗

トム『さあ、はいり給へ。犬なんか怖がらずにズン〳〵這入り給へ』

サム『何だか怖さうな犬だね。アレ、僕を睨んでゐるぜ。嚙まないかい?』

トム『さあ、そいつを試したいと思ふんだよ。何しろ昨日買つて

潜水艦が水中に沈む時には先づ艦の重さを增す必要があります。それには艦の兩側並に底部に水槽が設けられてあつて、水槽に海水を入れて艦を重くするのです。其時槽内に入れる海水の多寡によつて適當の深さに艦を沈めることが出來ます。そして水上にあるのと同樣に推進機及び舵機の作用で自由自在に航行することが出來るのです。潜航を終つて水面に浮び上らうとする場合は前と反對に水槽内に入れた海水を搾壓空氣等の方法で外へ追出します。



乾大根はなぜ甘いのでせうか。

大根の中にはチアスターゼといつて、澱粉を糖分に變化させる物質が含まれてゐます。隨つて大根を乾して置くと永い間にこのチア

來たばかりだからね』

◇氣が利過ぎる

主人『今日客が來たら、主人は留守でございますと言へ』

小僧『へえ、承知しました。もし來なかつたら何と言ひませう？』

◇虎



『さあ〳〵虎だ！　虎だ！　評判の虎だ！　朝鮮征伐に道の加藤清正も、この虎ばかりには持て餘したと云ふ大虎だぞ！　代は見てのお戻り――』

と、怒鳴る聲を聞いて、一人の素見客、

『實際その大虎つて奴は、この看板に書いてるのと些とも違ひねえのか？』と聞く。すると口上云ひの若者、得意氣に笑顔をつくつて、『なんで嘘なんか云ひませうど うせ見れば解るんだもの――さあ！　男らしく二文投げ出してお這入んなさい』

と云ふ。するとその男、急に取澄して、

『看板と違はなきや、何もわざわざ見るには及ばぬわさ』

◇化の皮

親爺『君だネ、俺の娘に度々手紙を寄越すのは？』

青年『いや違ひます』

親爺『でも、娘が現に白狀しとる！』

青年『變ですねえ、お孃さんとの約束では、そんな筈ではなかつたのですが…』

◇一つの間違ひ

社長『君は去年は實によく働いてくれたから、今年から月給を五圓だけ上げたげようと思つてゐるんだよ。一つの間違ひもなかつたね？』

社員『唯一つ間違ひをしました社長！』

社長『えッ？　何だね、それは？』

社員『少くとも十圓は上げて下さるだらうと思つてゐたことです』

◇二つの場合

甲『僕はネ、君、酒を呑むのをたつた二つの場合に限つてしまつたよ』

乙『へーえ、それは偉いな』

甲『まづ雨の降る日と、それから降らない日と』

◇大釜

與太『俺のうちには、一石五斗焚く大釜があるよ』

頓吉『莫迦な、そんな大きな釜があつて堪るものか。可い加減なほらを吹きなさい』

與太『ほらなものか。それ煮立つと五斗五斗五斗といふぢやないか』

スターゼが作用して、大根中に多量に含まれてゐる澱粉類を糖分に變化させるから甘くなるのです。又餅腹に大根オロシが宜いのは、大根オロシ中のヂアスターゼが餅の主要成分たる澱粉を糖化して消化作用を助けるからです。

夏日光に曝された金屬片が木片よりも熱いのはどういふ譯でせうか。

金屬は熱を良く傳へ、木は傳へない性質があります。日光に溫められた溫度の高い金屬片に手を觸れると、熱はその觸れた部分からばかりでなく他の部分からも傳はつて來て一時に多量の熱が手に移るから熱く感ずるのです。これに反し木片に觸れた場合は熱の傳はるのは單に手を觸



實際どうにかならぬものか

◇旅館のチップには困りますね

◇賄賂の横行には全くウンザリ

◇いかゞはしい廣告の跋扈も癪にさはる

◇丙午の迷信に泣く娘さん達は可愛想です

◇日比谷座の亂鬪に至つては……等々々實際どうにかならぬものか！

この問題に對し小野賢一郎氏が雜誌「雄辯」五月號誌上で徹底的に、筆劍を振はれることになりました。

◇「雄辯は人格の發露」

これをスローガンに掲ぐる雜誌「雄辯」は、凡ゆる問題に行き渡つて、徹底的な、すぐ役立つ、而も興味本位の記事で、滿載されてゐます。

◇政戰の渦卷やゝをさまつて、顧みれば、言論がどんな役割を演じたか、そして、これからの世の中に、どんな根强い力を持つものかは、どなたでも御承知の事と思ひます。

◇天下にわきたつ雄辯の潮流！その眞つたゞ中に、唯一の辯論雜誌としての眞價は、その內容が何よりも雄辯に物語つてゐます。

◇先づ五月號の頁を繰つて見て下さい。

「男泣きに泣いた話」「人氣總監丸山鶴吉」「產業合理化と失業問題」「時代の反映としての文學」「雄辯人國記」「誌上公開演說會」「模範テーブルスピーチ集」「雄辯法六講」空前の大スケールに展開さるる大瀧鞍馬先生の「科學探偵小說」賀川豐彥先生の「理想小說」佐々木味津三先生の「雄辯小說」等等々。あらゆる點に於いて、此種雜誌中の白眉であります。

漫畫募集

題材は何でも結構、愉快な明るいものを歡迎。單獨漫畫もせいぜい應募して下さい。〆切四月末日宛名は……『キング娛樂係』……採用篇には薄謝を進呈。

修學旅行の人々へ

文豪田山花袋氏の有名な著書に『花袋行脚』があります。同書は近畿、中國、四國、九州の各地を、歷史を回顧しつゝの面白い名紀行です。春風駘蕩の好シーズン、旅行さるゝ人もしない人も是非お讀み下さい。（定價二圓三十錢送料十二錢　本社發行）

れた部分だけに止まるから左程熱く感じないのです。尙、冬或は日蔭に於ては、右と全然反對に金屬片は木片よりも多量の熱を手から奪ふから一層冷たく感じます。

自動車の前燈は廿燭光程度に拘らず、あのやうに强く照すのはなぜでせうか。

前燈は自動車の進行する道を照すものであるから、前方以外は照す必要がありません。そのため電燈を凹面鏡と凸レンズとで包み光を殆ど並行させて前方のみに集中する結果、電燈は廿燭光位のものでも極めて强く照すのです。かく燈火はすべてその用途に應じて種々加減せられるのであります。



法螺を吹當てた男

大河内翠山
挿繪　幡恒春

夢を語る

世は麻と亂れた戰國の時代、德川家康公がまだ遠州濱松に在つて密かに天下の風雲を窺つてゐられた時分のこと、その家臣の平岩七之助といふ者の組下秋元甚兵衛といふ一廉の勇士、この甚兵衛の又部下に本多彌八郎といふ變りものがありました。

お手長柄の足輕で、年に三兩一人扶持といふ少しばかりのお手當をいたゞいて女房と二人暮し、內職に提灯を貼つてゐる。貧しい生活はしてゐるが、平常大きなことばかりいつてゐるので、法螺の彌八郎、といふ綽名を持つてゐる。或日のこと、何か頻りに考へ事をしてゐると、側から女房が話しかけた。

女『お前さん、何を考へてゐるのだえ』

彌『なアに、屋敷のことを考へてゐるんだ』

女『屋敷……どこの屋敷のことさ』

彌『乃公の屋敷さ。どんな風にこしらへようかと思つて……』

女『又始まつたよ。年に三兩一人扶持、內職に提灯を貼つてゐる者が、屋敷などとは大それた……いゝ加減におしよ』

彌『さう馬鹿にするな。今こそ貧乏はしてゐるが、出世をしたら先づ一里四方ぐらゐの屋敷を建てゝ、庭には泉水築山をしつらへ、また、大きな池などを掘つて、船を浮べたり、鯨や鰹をおよがして……』

女『冗談をおいひでないよ。馬鹿々々しい』

彌『時節さへ來れば必ず出來るよ。障子は皆緋張りにして、襖は殘らず金銀の貼り交ぜ。一段高い所に坐つて、これ〳〵家來共……』

女『變な聲をお出しでないよ。誰のことだよそれは……』

彌『幾度訊くのだ。乃公のことだよ』

女『まるで殿樣のやうだね』

彌『今に見ろ、何十萬石、何百萬石といふ大名になるのだ。その時にはお前は御臺所だ』

女『御臺所がこんな縫はぎの衣服を着てゐますかよ』

彌『その時には十二單衣に緋の袴をきせて、家來が三千人、腰元が三千人、左右にズラリと列ぶやうにしてやる』

女『大變だね』

彌『今のうちは汚ない服裝をしてゐる方が、後の出世が目に立つていゝのだ。お前はいゝ亭主を持つて仕合せだ』

女『何をいふんだよ。まるで夢みたなことをいつて……』

彌『夢でもそれだけになればよからう……何しろ、御家老の酒井樣などは、左衞門尉忠次などといつて威張つてゐられるが、今に乃公の前へお辭儀をされるやうになる。又家康公だつて、彌八郎、これはどうしたらよからうな、あゝさうかと、何でも乃公に御相談をなさるやうになる。どうだ、えらい出世だらう。お前はいゝ亭主を持つて仕合せだ』

女『又始めたよ。世間ではお前さんのことを法螺吹き彌八郎といつてゐるよ』

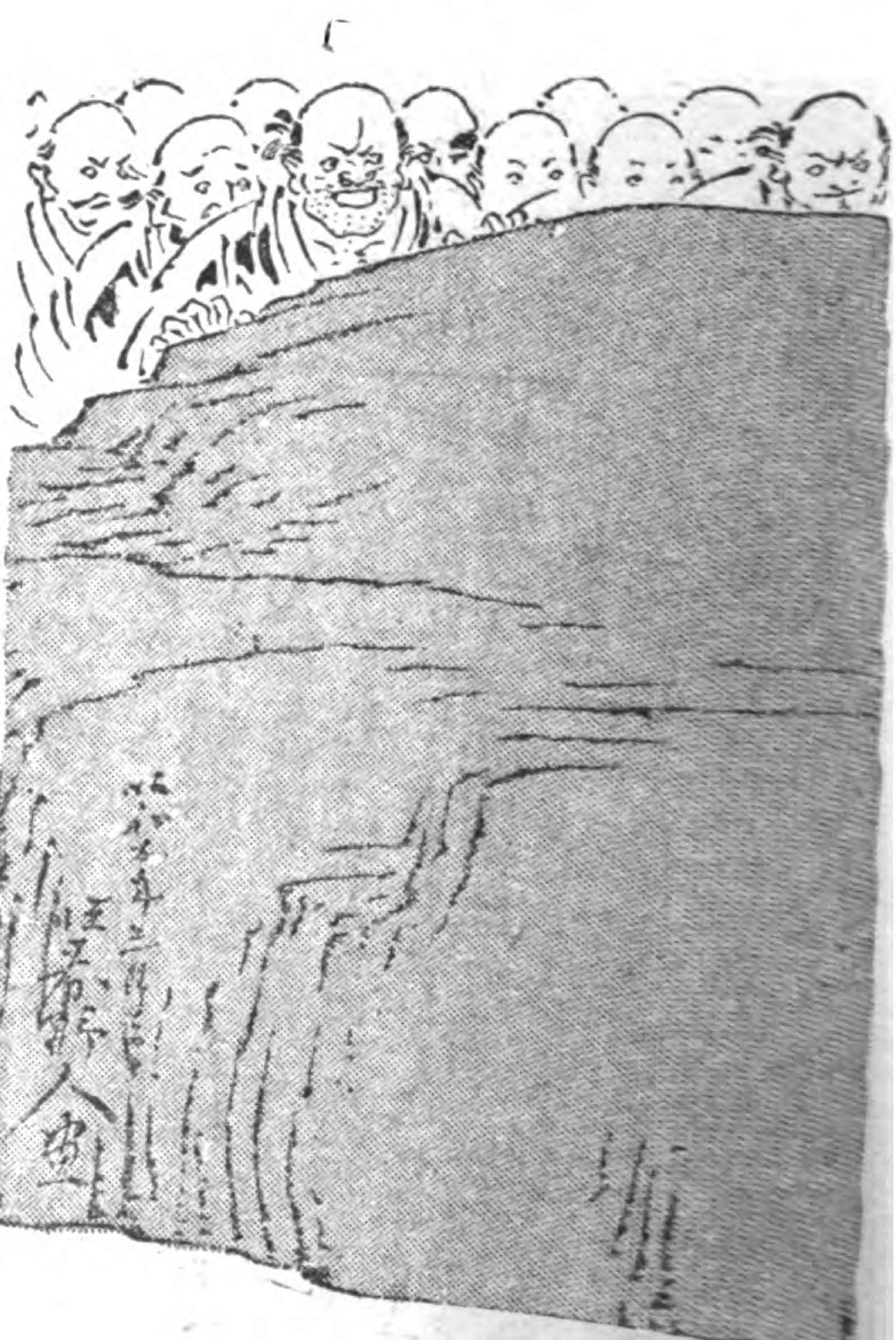
彌『言ふ奴には言はせておけ。乃公が出世をするので羨ましいのだらう。へへヽヽヽ』まづこんな調子。

さて、話は變つて、こゝは濱松町の大通り、昔から大きな石が坐つてゐて通行人の邪魔になる、平岩七之助が部下の足輕を四五十人集めて、この大きな石を片付けようとしてゐるが、何分直徑一間半もあるといふ大石、ピクとも動かない。七之助はいきり立ち、

七『これ〱、大勢掛つてまだ動かぬのか』
○『どうしても動きませぬ』
七『情ない奴等だな。今にお頭の酒井忠次殿が檢分にお出でになつた時、まだ片付けることが出來ぬとあつては、拙者の落度になる。早く片付けてくれ』
○『私共も早く片付けたいと思ひますが、石が言ふことを肯きませぬ。どうか貴下から石に動くやうにさう仰しやつて下さい』
七『馬鹿なことを申せ』下らないことをいつて、大勢で騷いでゐるが、石は少しも動かない。ところへ本多彌八郎が通りかゝつた。早くも見た平岩七之助が、
七『これ〱彌八郎』と、聲をかけた。
彌『いや、これは〱平岩樣、何か御用ですか』
七『貴樣、平常から天下の事、何でも出來ないことはないと申してをるな』
彌『はい、人間のすることなら何でも出來ます』
七『それではこの石を片付けることが出來るか』
彌『どこか他でその石が要るのですか』



七『さうぢやない。邪魔になるから片付けるんだ』
彌『たゞ片付けさへすればいゝんですね』
七『さうだ』
彌『エツヘ、、、、それなら譯はございませぬ。私が二本指で片付けて御覽に入れます』
七『何と、こんな大きな石が二本指で片付くか』
彌『ヘツヘ、、、、、まづそんなもので』
七『妙な笑ひ方をする奴だ。何で笑ふのだ』
彌『何でといつて、こんな石を一つ片付けるのに四五十人もかゝつて、ワイ〳〵騒ぐなんて笑ひたくもなるではありませんか』
これを聞くと、外の足輕達が怒りだした。
○『おい、提灯屋』
彌『提灯屋とは何だ』
○『貴樣は提灯を貼つてゐるから提灯屋といふのだ。吾々が五十人もかゝつて動かぬものを、あんな石の一つや二つ造作はないとは何だ。張子の石ではないぞ』
彌『あんな石、張子の石も同然だ、それに五十人もかゝるなんて馬鹿々々しくて見て居られん』
○『何だとツ！ぶ、ぶ、無禮なツ！』
彌『唾がはねるでないか。そんなに怒るなら話をするが、その



石をどこかへ運んで行つて、それを又何とかするといふなら兎に角、組頭の仰しやるには、別に何の役に立てるのではない、たゞ往來の邪魔だから片付けるといふのだらう』
○『さうだ』
彌『そんなことなら譯はないぢやないか、ちよいと拙者が首を捻れば片付いてしまふ』
○『馬鹿を言へ。手品ではあるまいし、この氣狂ひの法螺吹き奴、擲つてしまへッ』

石の埋葬

皆んな寄つて集つて彌八郎を袋叩きにしようとする所へ、檢

分役の酒井忠次がやつて來た。

忠『これ〳〵平岩、何を騒いでゐるのだ』

七『いや、これは酒井氏、實はこれ〳〵で、彌八郎の奴、あまり馬鹿にしたことをいふものだから、今斬られようとしてゐるところだ』

忠『いや、それは面白い……彌八郎といふのは貴樣か』

彌『左樣でございます』

忠『貴樣が首を捻ると、この石が片付くといふが、確と左樣か』

彌『へえ、確と左樣でございます。尤も私が首を捻つても、他のワイ〳〵連が私の言ふことを肯かないと片付きませぬ』

○『乃公達のことをワイ〳〵連だといつてゐやアがる』

彌『貴下が私の前へ頭をさげて、どうか彌八郎殿、何分賴むと仰しやつて、又ワイ〳〵連には、本多彌八郎の言ふことは何でも背くなと、かう貴下から仰しやつていたゞきたい』

忠『さうか。では彌八郎、何分賴む』

彌『あゝよし〳〵。片付けて取らする』

忠『威張りをるな、ハヽヽヽ。これ〳〵一同の者、本多彌八郎の申すことは、何事も背いてはならぬぞ。彼れの申す通りいたせ』

一同の者が驚いた。

○『おや〳〵大變なことになつてしまつた』

忠『さア彌八郎、片付けて見せろ』

彌『宜しうございます……これ〳〵足輕共』

○『オヤツ、急に提灯屋が威張り出しやアがつた。自分だつて足輕の癖に……』

彌『これ〳〵足輕共、返事をいたさぬか』

○『仕方がない、返事をしてやれ……何だ』

彌『何だとは何だ。これから拙者の申すことは何事も背くな。よいか。早速鋤と畚を持つて來い』

○『おい〳〵本多、石を片付けるのだぜ』

彌『分つてゐる。何事も拙者の申すことは背くなと、お頭が仰しやつたではないか。早々持つて來い』

○『よし。さあ持つて來たがどうするのだ』

彌『これ〳〵、鍬を持つてボンヤリ立つてゐてはいかぬ、馬をつなぎに來るぞ、さあ、石の側へ大きな穴を掘れ』

×『へーえ、穴を掘つてどうするので』

彌『どうしてもいゝ。拙者の申すことを背くな。掘れ〳〵』

×『へえ〳〵……提灯屋め、いやアに威張つてゐやアがる』

ブツ〳〵言ひながらも、穴を掘つてゐる。大人數でやるから、瞬くうちに大穴が掘れる。

彌『穴は掘れたか……ウム、よし〳〵、これ〳〵一同、石の向ふへ廻つて、力一ぱい石を押せ』

○『よし來た』

足輕一同が石に手を掛けて、エンヤラヤー――アツと押すと、さすがの大石もグラグラドスーンと大穴の中へスポリと入つてしまつた。

彌『これでいゝ、跡へは土を被せて均しておくんだ……へえお頭、これで宜しうございます』

ジツとこれを見てゐた酒井忠次、出來てみれば何の事もないやうだが、彌八郎の頭のはたらき尋常でないとすつかり感心してしまつた。

酒井忠次から家康公にこの話をすると、家康公もこの男見どころありと思召したので、一躍七十俵の士分にお取立てになり、自分の側へ勤めさせるやうにとの有難い仰せ。そこで彌八郎、女房に對つて、

彌『どうだお千代、この間は酒井忠次に頭を下げさせて、今日士分になつた。夢もそろ〳〵本物になつて來たぞ』

女『本當だね。お前さんの法螺も馬鹿には出來ないね』

彌『いや、面白くなつて來た。だが、これア ほんの小手調べだ。アハヽヽヽ』と、笑つてゐるが、かうなつて見ると、平常大きなことをいつてゐるのが、何となく本當になつて現れるやうな氣になつて來る。又さうなつて來ると、只法螺を吹きツ放しでは濟まされないで、それ相當の事をしなければならない責任といつたやうなものを感ずるやうになる。從つてぼんやりしてはゐられない。持ち前の頭腦がはたらいて、智慧も出ようといふもの。

彌八郎初陣

或る日のこと、家康公は近侍の者を集めて、戰場の話に打ち興じてをられた。

家『今日の時節、又近く戰爭を始めずばなるまいが、其方共も手柄をあらはして、出世を心掛けるがよいぞ』

○『君の仰せまでもございませぬ。手前はこの次の合戰には、敵の首を二十三十を取つて、第一の手柄を誇りたき考へでござりまする』

△『あゝいや、手前は二十三十では物足らぬ。四十五十の首取つて、首の數なら手前第一の手柄をあらはす考へでござるぞ』

×『いや、手前は六十七十の首……』互ひに爭つて肩肱を張つてゐる折しも、ジリツと席を進めたのは、かういふ時には何でも默つてゐられない大久保彦左衛門。

彦『何だ、各ゝは、敵の首、たつた六十、七十か』

○『ホーラ、大久保が出た。イヨウー一言居士ツ！』

彦『敵の首、僅か六十や七十取つて、功名手柄だなどとはチヤンチヤラ可笑しい。この彦左衛門を知らぬか。この彦左衛門は、大久保平助の昔、十六歳の初陣、遠州の巣文珠山の戰ひに、敵の大將和田兵部を……』

○『大久保、分つた〳〵』

彦『分つたならいゝが、知らんければ詳しく話をする』

○『いや、もう澤山だ。何度も何度もキングや講談倶樂部で讀んだ』

まさかその時分はキングも講談倶樂部もございませんが……

彦『そんなら止めておくが、幾度かの戰ひに、この彦左衛門、

君の御供をして出ないことはない。その度にちよいと戰場を一廻りすれば、敵の首の一萬や二萬取つて來たものだ』

○『嘘をつけ。そんなに取れるものか』

大勢が各自の武勇を誇つてゐる中に、本多彌八郎だけは無言のまゝたゞニヤ〳〵笑つてゐるばかり。家康公ジロリと御覧になつて、



家『彌八郎』

彌『ハッ……』

家『其方は戰場へ出たことがあるか』

彌『まだ一度もございませぬ』

家『いざ合戰といふ時には人におくれず戰場に出で、敵の首でも取つて、衆に劣らぬ働きをいたさねばならぬぞ』

彌『ヘッヘ、、、、』

家『變な笑ひ方をいたすな。何で笑ふ』

彌『先刻から承はつてをりますと、ヤレ敵の首四十五十、彦左衞門殿の如きは一萬二萬と仰せられたが、それは雜兵の首でござらう。雜兵の首など幾つ取つても、葉武者と申して、木の葉を拾ふも同じことでござりまする』

　これを聞くと、彦左衞門が承知をしない。

彦『なにッ、木の葉だ。木の葉とは何だ。たとひ木の葉にしろ。まだ戰場へ出たことのない貴様に取れるか』

彌『いや、手前は木の葉に等しき名もない雜兵の首などは取りませぬ。手前の目指す

は一國一城、少くとも敵の大將の首の外は手にいたさぬつもりでございます』

彥『アハ、、、、又彌八郎めの法螺が始まつた。口ではさう申しても、敵の大將は默つて首は渡さぬぞ』

彌『渡さねばそれまで。手前の望みは一國一城、手に入れるまで時節を待ちます。アハ、、、、』と笑つたが、外の者は例の法螺だと別に氣にしない。しかし、家康公、じッと見てをりましたが、物に屈託せぬ、どこかに胸量の大きいところが見えたものか、この男天下の役にも立つべきものだと、それからは一層目をおかけになつてゐる。



すると、元龜元年六月二十八日、江州姉川の合戰、一方は淺井長政、朝倉義景、一方は織田信長、德川家康、この兩手が鎬を削つての大戰。朝倉の方には黑板備中守、眞柄十郎左衞門などいふ豪傑があつて、必死となつて戰ふから、德川軍の先手は大いに敗れ、これがために家康の本陣も次第に亂れて來るといふ有樣。德川の四天王といはれた酒井、榊原、井伊、本多(忠勝)の面々、こゝぞ大事と踏み留まつて、火花を散して戰つてゐる。馬上にあつて瞬きもせずこの樣子を見てをられた家康公、後方の力でガチヤ〳〵ガチヤ〳〵音がするので、何であらうと思つて振返つて見ると、本多彌八郎が、紺絲の鎧に同じ毛絲三枚錣、獅子頭の兜をいたゞき、赤銅作りの陣太刀を脊負ひ、大身の槍を持つて馬に跨がつてゐる。扮裝だけはいかにも立派だが、幾ら平素大言を吐い

てゐても、いざ戰場となると初陣のことではあり、慄へまいと思つても自然に慄へが來て、鎧の草摺がガチヤ〱音がする。家康公、これを見て、

家『これ彌八郎、其方は今日まで戰場へ出たことがないと申したな』

彌『へえ、出、出、出たことはございませぬ』

家『しつかり口を利け。今日が初めてと申すか』

彌『へえ開業式で……』

家『開業式といふことがあるか……然らば先陣に乘出し、初陣に目覺しき働きをいたしてよからう』

彌『いや、なか〱もちまして、此處まで來たのがやう〱で、胸がドキ〱いたします。これから先へ進めるものではございませぬ』

家『默れッ、臆病者めッ。戰場へ出て慄へるとは何事。平素の大言にも似合はぬ奴。何故初陣の功名をいたさうとはしない。躊躇するに於ては、軍神の血祭に、其方の首を刎ねるぞ』

大喝一聲、家康公、いきなり陣刀の柄に手を掛けられたから驚いた。

彌『アツ、どうか、どうか御勘辨を願ひます。先陣へ出ます。働きます』

家『早や行けッ』

彌『ハーッ……』

首を切られてはどうにもならない。そこで彌八郎、眼を開いてゐると怖いから兩眼を閉ぢて、ハイヨーッ、トッ〱トットトッ進んで行つた。眼を瞑つて戰場へ乘込んだのは、この本多彌八郎只一人。二三町來たかと思ふと、ド、、、ドーンといふ恐ろしい鐵砲の音。ヒヤリとして、覺えず眼を開いて見ると、朝倉左衞門義景の先陣朝倉孫三郎景常の手の者三千人が鐵砲を釣瓶打ちにして乘込み來たる有樣。

彌『大變々々、いよ〱命はないのかな。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛』

助けてくれーッ

彌八郎、念佛をとなへながら、まご〱してゐる所へ一人の大將、紺絲の鎧、同じ毛絲三枚錣、四方白の鉢金に一本劍の前立打つたる兜をいたゞき、猩々緋に金銀を以て獅子の荒れたる模樣を高縫したる陣羽織を着用なし、赤銅作りの陣太刀に血染の槍を小脇に抱込み、鐵鞍置いたる黒く逞ましき駒に打ち跨がり、姉川の河原をトッ〱トッ〱横切つて來たが、本多彌八郎の姿を見るより、天地に轟く大音を揚げ、

○『ヤア〱それに見ゆるは敵陣徳川の臣下と覺えたり。それがしは朝倉九郎次郎景澄と申す者なり。いで、一騎討の勝負なさん』と呼ばはつた。これを聞くと、彌八郎、馬の上で飛上つた。

彌『ヤツ、大變々々……せ、せ、拙者は、一、一騎討などは眞平御免、左樣なら』

馬の頭を立直して引返さうとする。

景『やア／＼この場に於て敵に脊後を見せるとは、卑怯未練の三河武士、いで、汝の首を討取りくれん』

言ふより早く槍を拔いて突いてかゝつた。ぢつとしてゐれば突かれてしまふ、首を取られたら歩くのに見當が着かないと、仕方なしに彌八郎も槍を合せたが、相手は名たる豪傑、もとより敵ふものではない。忽ち槍を撥ね飛ばされ、いでや組まんと、ムンズとばかり組んで來た。彌八郎も仕方がない、敵はないまでもと、喰着いて見たり引搔いて見たりして見たが、どうすることも出來ない。終に馬からドウと落ちて、朝倉九郎次郎はウンと彌八郎の上に馬乘りに乘つてしまつた。今や小刀を拔いて首を切らうとするから、彌八郎、今は絕體絕命。

彌『ワーイ、助けてくれーッ。人殺しッ』

景『これッ、戰場で人殺しといふ奴があるか。尋常に首を渡せ』

彌『唯一つしかない首だ。さう易々と渡してたまるものか。ウーム、人殺しッ』

景『これッ、暴れるな』

爭つてゐる所へ馳せ着けて來た一人の鎧武者、これぞ彌八郎が組頭の秋元甚兵衛といふ勇士、見ると立派な敵の大將に組敷かれて、彌八郎、人殺し／＼と叫んでゐる。

甚『やア／＼敵方の大將と見受けたり。臆病者の首討つて何とする。我れこそは德川の家臣秋元甚兵衛なり。いで一騎討の勝負なさん』

言ひつゝ槍を拔いて突いてかゝつた。心得たりと朝倉九郎次郎、彌八郎を打捨てゝ、すぐ甚兵衛と渡り合つたが、武運や悲しかりけん、流石の九郎次郎、秋元甚兵衛のために其の脇へ突き伏せられてしまつた。

甚『彌八郎』

彌『へえ』

甚『へえではない。平常法螺ばかり吹いてゐるくせに何だ。武士が戰場へ出て、人殺し、助けて呉れろといふ奴があるか』

彌『それでも默つてゐると殺されてしまひますから、聲を揚げたので』

甚『困つた奴だ。併し幸ひこの敵は乃公が突き伏せた。貴樣、此奴の首を斬つて功名にしろ』

彌『冗談言つてはいけませぬ。貴下が討取つた敵の首、それを貰つて私の手柄にしても、後で乾度露れます』

甚『貴樣は正直な奴だ。けれども貴樣のやうな臆病な奴には尋常では敵の首は取れない。拙者は幾らも取れるから、この首は貴樣にやる。貴樣は見所があるから、この首を斬つて功名にし、出世をしろ』

彌『左樣でございますか。それでは戴きませう』

彌八郎、陣刀をスラリ拔いて、

彌『やアこの野郎、乃公の首を斬らうとしやアがつて、今度は此方の番だ。覺悟をしろ』といひながら、朝倉九郎次郎の首へ斬りつけたが、なか／＼切れない。

甚『これ／＼、そんな事で首が斬れるか。貴樣は首を斬つた事は

ないのか』

彌『へえ、私は提灯の骨は削つたことがございますが、人間の首を斬つたことはございませぬ』

甚『なさけない奴だ。首を斬るぐらゐ覺えておけ』

彌『へえ、何所かで首を斬るのを敎へますか』

甚『そんな所はない』

甚兵衛、陣刀を拔いて忽ち九郎次郎の首を切り落し、

甚『さアこれを本陣へ持つて行つて、功名帳へつけて貰へ。尋ねられたら、姉川の河原で互に名乗りを揚げ、朝介九郎次郎と一騎討の勝負をして、終に首を討取りました。證人は秋元甚兵衛でございますと、かういふのだぞ』

彌『へえ、どうも有難う存じます』

秋元甚兵衛の情で首を貰つて喜んだ彌八郎、これを家康公の本陣へ持つて來て、

彌『朝介力の豪傑朝介九郎次郎を討取りました』と云つたが、誰も笑つてゐて本當にしない。酒井忠次が、

忠『彌八郎、本當に貴樣討取つたのか』

彌『本當でございます』

忠『それでは戰ひの様子を物語れ』

彌『ハ、ッ、御大將家康公の御下知により、それがし先陣へと乗出し、戰争の様子を見てある折しも、敵力の大將、手前の姿を見るより早く逃げんといたした卑怯の振舞。よつて拙者は隙さず、大音揚げたることにして、ヤア〳〵それに逃げ行くは、敵方の大將と見受けたり、かく申すそれがしはわが日の本に名も高き徳川家康の家來、三國無双の豪傑といはれたる本多彌八郎正信なり。引返して勝負あれ、オーイ、オーイと扇を上げてさし招けば……』

忠『これ〳〵熊谷の物語に似てゐるやうだな』



彌『へえ、少しは似てをります。この時敵



もさすがに引返し、互に槍がらみにて爭ひしが、打物業は面白からず、いでや組まんと馬を進め、エイヤオウと爭ふ中、兩馬の間にドウと落つ……』

忠『これ〳〵變な身振りをするな。それからどうした』

彌『拙者の力や勝りけん、終に九郞次郞の首を搔切りました。證人は秋元甚兵衞でございます』

辯舌爽かに言ふことだけは立派なもの。

忠『ウーム、實に感心をいたした。それに相違ないな』

彌『と申すのは、實は噓でございます』

忠『なに、噓だ』

彌『へえ、實はその敵は甚兵衞さんが突伏せたのを、私が首を貰つたので。お前が討取つたといふことにして功名をしろと云つてくれたのでございます。あの甚兵衞さんはえらい方でございます。たゞの甚兵衞さんとは甚兵衞さんが違ひます。特別の甚兵衞さんで………』

正直な彌八郞はありのままを話した。家康公と忠次とは思はず顏を見合せたが、彌

八郎の區々たる功名を私しようともしない濶達なところ、その大度は立派なもの、それには家康公も感心を遊ばした。

家『彌八郎、其方は決して臆病ではない。たとひ敵に組み敷かれたとはいへ、助けて呉れと大聲を出すといふは、其方の大膽からである。且つ首を討取つたと、僞りの功名を爲しとせず、ありのまゝを話すとは實に武士の本分。又秋元甚兵衛も義俠の者である。賞め取らせる』とあつて、彌八郎はやはり九郎次郎の首を討取つたといふことにして、その功により感狀を賜はり、甚兵衛にもその義を稱へて、同じく感狀を賜はつた。この時の功名で彌八郎は一躍三百石といふ思はぬ加増をされることになつた。

家康の奧の手

然るに彌八郎、少しもこれを喜ばない。

彌『恐れながら、君にお願ひ申上げます』

家『何ぢや、彌八郎』

彌『折角戴きましたが、三百石の食祿返上いたしたう存じます。何卒御聽屆けが願はしう存じます』

忠『なぜぢや。三百石では不足だと申すのであるか』

彌『飛んでもないことで。不足どころではございませぬ。たゞ手前は三百石ばかりの食祿に甘んずる者でございませぬから、お返し申します』

家『判らぬことを申す。どういふ譯ぢや』

彌『手前は平素大きなことばかり申してをります。それゆゑ人が嘲つて法螺吹き彌八郎などと申します』

家『予も存じてをる』

彌『併し、口にて法螺を申しまする以上、實地にこれを現はしたいと存じて、今日まで努力をいたしました。然るところ君の御情によつて、今日の出世を見ましたが、姉川の戰ひの以前、手前は敵の雜兵の首數多取ることを手柄とする人達を笑ひました』

家『ウム、それも覺えてをる』

彌『その時手前の望みは一國一城の主になるか、敵の大將の首取るにあると申しました。然るに姉川の合戰、手前の初陣でございます。さて平素大きなことを申してをつても、いざ合戰となると、妙に身體が慄へて、なか〳〵亂軍の中へなど飛込むどころではござりませぬ。それを君に勵まされて、やう〳〵乘込んでまゐりましたが、危きところを秋元殿に助けられ、あまつさへ朝倉九郎次郎の首を貰つて、こゝに三百石の出世。併し考へて見ると、大將分とはいへ朝倉義ゝの首ではございませぬ。一將の首、これも人から貰つた首、平素の大言の手前、恥かしくつて白晝大手を振つて歩けませぬ。よつて三百石はお返し申して、自分の力で日頃の望みの達する時節を待つやうにいたし

たいと存じます』彌八郎が衒つてこんなことを言ふのでない事は、その素振りにも現はれてゐる。これが彌八郎の本心でもあり、そこに彌八郎の尋常人に勝れた所がある。それを家康公が見てとられたから、いよ〳〵感心を遊ばした。

家『よい〳〵。見る所があつて、予が遣はした三百石ぢや。恥かしいことはない。そのまゝで時節を待て』

かう言はれてみると、それでもとは言ひかねて、そのまゝお受けをすることになつた。

それから二年、元龜三年、三方ヶ原の合戰、相手は軍の聖といはれた武田信玄、その部下には馬場美濃守などといふ智將があつて、徳川勢散々の敗北。曾てかゝる不覺をとつたことのない家康公、この時ばかりは運の盡きと思召したか、もはや討死を覺悟して、その亂軍の中に突いて入らうと遊ばした時に、

『暫らく……』と、陣羽織を押さへた者がある。外ならぬ本多彌八郎。

家『彌八郎か。何で止める』

彌『君には豫ねての御望み、天下を取ることをお諦め遊ばしたか。死んでは天下は取れませぬぞ。味方不利の時、進んで死地に陥るは、これ即ち敵に天下を譲るもの。天下はしばらく天にあづけて、徐ろに再擧を計るべきでござります。お逃げ遊ばせ。三十六計逃げるに如かず。天下は逃げるにあります。天下天下。お逃げ遊ばせ。逃げる後から天下は追駈けて參りまするぞ』これを聽いた時に、家康公、鎧の草摺を丁と叩いて、

家『ウム、彌八郎、よう申してくれた。其方の法螺は大きいなう』と、仰せられたといふが、全く彌八郎の法螺は大きかつた。家康公は彌八郎から授かつた三十六計逃げるに如かずを奥の手となし、終に天下を掌握して、徳川家三百年繁榮の基礎をおつくりになつた。

法螺を吹き當てた彌八郎は、後に本多佐渡守正信と名乘つて、これまた宿望を遂して諸侯の列に加はり、世に家康公の懐刀といはれて、徳川家のために盡しましたが、家康公の覇業はこの佐渡守に負ふところが少くなかつたといふ。

（をはり）

東西美談逸話集

水戸で申せば青柳通り

文久二年年も押し詰つた十二月二十九日の夜、本郷三丁目より出火があつた。さて出火の場所から目と鼻の小石川水道端の水戸屋敷、毎夜數人のお火見番が火見櫓に詰めて非常を警めて居たが、其の夜は水戸から出たてゞ江戸の西東も知らない新參者一人を殘して、あとの者は皆密と年越の買物に出掛けた留守であつた。



半鐘の音を聽いた火事掛りの役人西郷監物、スハと床を起きて火見櫓の下へ馳付け、

『お火見同心、火事は何處だ？』

大聲に訊ねたが、櫓の上の新參者、元より『何町』と答へる事が出來ぬ。然し一刻を爭ふ危急の場合、早速の機轉で、

『水戸で申せば青柳通り。』

と呼はつた。水戸の青柳通りは、直ぐ御城の目の下の町、それで極めて火が近いことが知れたから、監物は直ちにその手配を全うする事が出來、屋敷の類燒を免れた。

此の事が上に聞えて、その機才に富んだ火見番の男は、厚く賞されたと言ふ。

一言金鐵

未來の宰相を以て目されてゐながら惜しくも早世した大木遠吉伯、賴まれてイヤと云へない性分だけに他人の債務の保證をして先代喬任伯以來の芝葺手町の大邸宅を田中平八に賣らなければならなくなつたが、その値段が餘りに安過ぎるので、田中平八が、



『この値ではチト安いやうに思はれます、私としては結構ですが、あとになつて文句でも出るやうのことでもあると何ですから……どうぞ御腹藏のない所を、のちに御聞かせ願ひたうムいます。』

云ふと伯は言下に、

『安からうが高からうが、その値で賣ると云つたら賣るのだ。』

と一言、而かもその引拂つた後の邸宅

は、家の内外塵一つ捨てゝないキレイさ、障子も唐紙もスッカリ張替へられてあつた。

白手袋の八百屋

倫敦北ケンシントンにトウマスといふ八百屋があつた。不振な店をどうにかして盛んにしたいものと、色々考へた末、或日白の革手袋を一打買つて來た。翌日からはこれを着けて商賣に出たが、必ず新しいのと取換へた。

最初のうちは、誰も氣が付かなかつたが、何時からともなく、

『トウマスはいつも白い新しい手袋をはめてゐるので品物が生きて見える。それに何よりも清潔なのがよい。』と云ふ評判が立つやうになつた。



元來八百屋が品物を配達する時には、大抵は汚れたドス黒い手袋をはめてゐる。處へ、トウマスが白い革手袋をはめて衛生振を發揮したので、お得意では大歡迎、トウマスの店はだん〳〵繁昌するやうになり店員を數人雇入れたが、必ず白の美しい革手袋をはめさしたので、『革手袋の八百屋』と云ふ評判が高くなり、店は益々榮えた。

地中の寶物

曹洞宗總持寺の貫主だつた石川素童禪師は、近來の名僧、禪師がまだ能登の門前にゐた頃、方丈室に靜かに坐禪を組んでゐる處へ、一人の老婆が這入つてきて、悴が極道者で、先祖傳來の畑を賣り拂はうとしてゐるから、何卒老師から説諭して頂きたいと、泣き〳〵訴へた。

其處で禪師はその青年を呼んで『あの畑には、寶物が埋つてゐるから、安い値段で賣つては不可ぬ！』と言つた。

青年は師の言葉に驚いて、早速畑の隅から隅まで掘りかへして見たが、寶物は愚か錢一文出て來ないので、眞赤になつて禪師の處へ怒鳴りこむと、澄したもので、『麥を蒔かつしやれ！』一語冷徹水の如きうちに、暖かき愛のこもつた言葉。



『あツ……』青年は、それから生れ變つたやうに勤勉な農夫になつたと言ふ。

重成定勝一騎討

大阪冬の陣のときである。木村重成と上杉定勝は亂軍中に、はたと行き合せ鋒を交へたが、定勝の獲物は家重代の小豆長光の一刀、重成は槍であつた。定勝、最初はよく戰つたけれど、重成の勇氣に叶はず、くるりと馬をひきかへし逃げ出さうとした。

『定勝と謳はれた大將が、敵に背後見せるとは卑怯なり、返せ〳〵。』

と、重成は呼んだが、意氣地なくも定勝は馬の走るまゝに逃げて行つたが、遂に馬は深田の中に乘入れ、進むも退くこともできなかつた。追撃の重成、

『御首級頂戴仕るぞ。』



突かうとして槍をはたと空にとゞめた。定勝は見苦しくも大將ともあらうものが泥にまみれ、泡を口から吹いてゐるのである。

重成は馬上に屹となつて叫んだ。

『汚なき振舞、見苦るしいことでござるぞ、されど重成は斯る難儀に及ばした弱き武士へ、槍をつきつけんことは末代までの恥辱、命は暫く助け申さう、後日、折あらば又勝負仕らん。』

から云つて、靜かに馬をかへした。泥まみれの定勝は、その情ある言葉に打たれしばらくは顏もあげ得なかつた。

いつも元氣に　いつもニコ〳〵

カーネギーが製鐵事業に着手して間も無い頃、工場に同盟罷工が起り、流石の彼も打沈んで居ると、事務室の一隅で呑氣にも大聲で歌を唄つて居るものがある。見ると唄の主は近頃雇入れたばかりのシュワッブといふ青年、

『おい、君、何をして居るんだ！』

その聲にシュワッブは振り返つたが、別に吃驚した容子も無く、愉快げにニコニコし乍ら、

『此の頃流行つてゐる唄ですよ、社長。面白いでせう。』

カーネギーは、怒るよりも呆れて了つた。

『君は同盟罷工の事で皆が心配してゐるのをどう思つて居るのかね？』と咎めると、



『さうです。皆さんが餘り悲觀していらつしやるから、元氣を付けて上げてゐるのです。クヨ〱して居ると物事は惡くならうとも良くなる氣遣はありません。それよりいつも元氣にいつもニコ〱して、何麼艱難でも突破するのが賢い者の遣り方です。』と、意外な答。

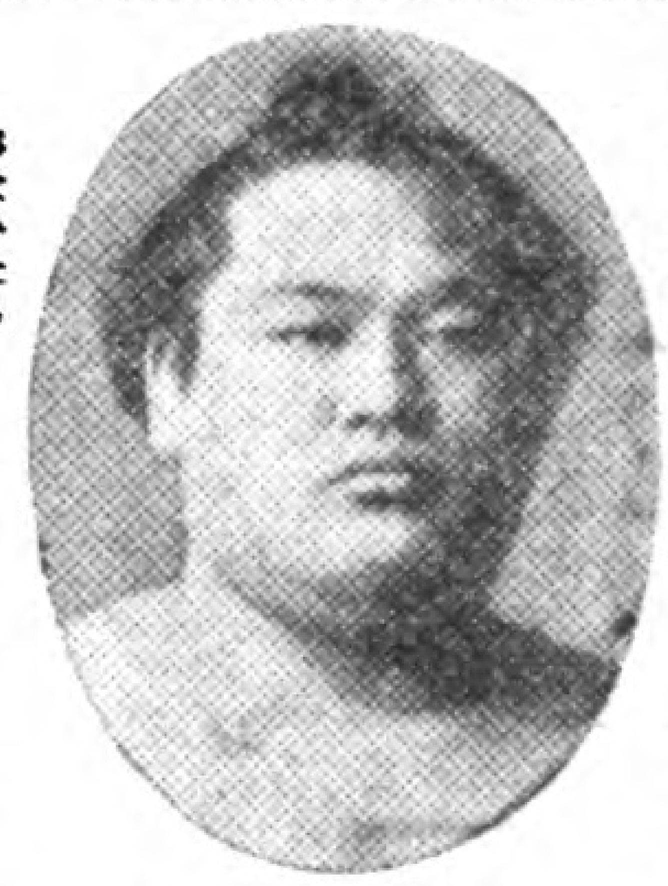
カーネギーはあつと驚嘆した。

『なるほど君の言ふ通りだ。悲觀しないで此難艱を突破しよう！』

彼は、感激して青年の手を握りしめた。其時以來、彼はシユワツブに注目して、間も無く自分の秘書に拔擢した。シユワツブ青年のいつも元氣にいつもニコニコ主義は、益々その效能を發揮して、終に今日米國の鋼鐵王たる運命を開拓するに到つたのである。

大錦の意氣

常陸山が梅ケ谷と角界で雄を爭つてゐた時、大阪で東西合併大相撲が興行された。其時、天王寺中學の一生徒が常陸山の處へ來て、弟子にして呉れと頼んだ。體格もよい、人品も相應だから、承知してやると、其の少年、



横綱大錦

『貴方の弟子入りと定つたら何常陸といふ風な名をつけて下さい。』

といふ、常陸は暫く考へて、

『その望みもいゝが、小常陸はあるし、若常陸があるからなア。』

と聊か當惑の體を示すと、

『大常陸ではいけませんか。』とやツつけて、常陸を呑んでしまつた。

日本角界の權威として天下に其名を稱へられた横綱大錦卯一郎は、此時の少年であつたのである。



諧謔小説 ガラマサどん

佐々木邦
細木原青起畫

一生の轉機

社長は手空きと見えて、デスクから中央の大卓子へ移つた。

『熊野君。』

『はあ。』

と、私は答へるのと立つのが一緒だ。相變らず後生大切に努めてゐる。

『斯ういふ手紙が來たんだが、一つ見てくれ給へ。』

と社長は手に持つてゐたのを渡した。

謹啓、嚴寒の砌り愈々御清穆に渉らせられ大慶の至に存じ上げます。毎々多大の御厚情を蒙り難有一同深く感謝致して居ります。扨、御多用中甚だ恐れ入りますが、今回『我が一生の大轉機』と題して諸先生方に成功訓の御執筆を願ひ小誌上特別の光彩たらしめたいと存じます。これには立志傳中の人物、一代の師表たる先生の御一文を是非々々仰ぎ上げたいのでございます。方今、世道日に衰へ、思想月に荒み、我等操觚者の默視するに忍びないものが多々ございます、云々。

○○○編輯局

太田原宗鄕先生

御侍史

『はゝあ。お原稿の御依賴でございますな。』

『うむ。先生は恐れ入つたよ。』

『これは私が以前勤めてゐた雜誌社でございます。』

『ふうむ。それぢや君が我輩のことを喋つたんだらう?』

『何う致しまして。』

と私は否定した。自叙傳係をやつてゐるとはまさか吹聽出來ない。

『兎に角、太田原宗鄕先生は恐れ入つた。』

と社長は再び手紙を手にして、

『地方へ行つて大臣と間違へられたことはあるが、先生は初めてだ。』
と頗る滿足のやうだつた。
『社長は先生に相違ございません。』
『何故？　先に生れてゐるからか？』
『いや、先覺者でございます。』
『成程。その意味からなら先生かも知れん。』
『何かお書きになりますか？』
『さあ。これはまさか書かせて置いて後から會社の廣告を取りに來るんぢやなからうね？』
『一流雜誌ですから、そんな御心配はございません。』
と私は尙ほ説明を加へた。
『惡德雜誌でなければ、廣告ぐらゐ出してやるさ。萬事君に賴む。』
『はあ。』
『今日これから話すことを後で書いてくれ給へ。』
『承知致しました。』



『しかし長くなるかも知れないね。』
『社長あたりのものは長いほど喜んで頂戴致します。』
『然うかね。君は以前やつてゐたんだから、間違あるまい。よし。』
と社長は少時考へ込んだ後、
『熊野君、君はコロンバスの話を知つてゐるか？』
と訊いた。
『アメリカ發見ですか？』
『馬鹿だなあ、君は。』
と何うも好くない癖だ。思ふ壺に嵌まらないと直ぐにお冠を曲げる。
『はあ。』
『コロンバスがアメリカを發見したぐらゐは小學生でも知つてゐるよ。』
『はあ。』
『そんな分り切つたことを訊いてゐるんぢやない。』
『はあ。』
と秘書は辛い。見す〳〵無理な小言を言はれても逆らふことが出來ない。又始まつたと思つたのか、松本さんが仕事をしながら、クスッと笑つた。
『松本君。』

と社長は聞き流しにしなかつた。

『はあ。』

『閑なら此方へ來給へ。』

『はあ。』

『君は何うだね？　知つてゐるか？』

『さあ。單にコロンバスの話と仰有れば、差詰めアメリカの發見ぢやございませんでせうか？』

と松本さんはもう覺悟をして、ノコノコやつて來た。何、此奴がといふ肚があるから、時折反抗的態度に出て、結局、取つ占められる。

『成程。』

『……』

『これは我輩が惡かつたかも知れん。』

と社長は雅量を示した。

『いや、何う致しまして。』

『社長、玉子の話ではございませんか？』

と私が訊いた。氣を利かさないと松本さんが迷惑する。

『玉子の話？』



『はあ。』

『それは我輩知らんぜ。松本君、君は知つてゐるか？』

『存じてゐます。』

『これは驚いた。』

『私だつて知らないことばかりはございません。』

『後學の爲め承はらう。』

と社長は極く正直なところもある。自分の知つてゐることを他が知らないと輕蔑する代りに、自分の知らないことを他が知つてゐると敬意を表する。

『コロンバスがアメリカを發見してから後の話です。』

『發見は分つてゐる。』

『それでございますよ。同じ方角へ何日も進むで行つて陸地を發見するぐらゐのことは誰にでも出來ると言つて、皆が貶したさうでございます。』

『皆つて誰だね？　世間一般か？』

『いや、恐らく宮廷の人達でしたらう。コロンバスの成功が羨ましかつたに相違ありません。御殿女中根性です。コロンバスはそれには答へず、そこにあつた玉子を取つて、諸君の中で誰かこれを卓子の上に立

てることの出來るものがありますかと訊きました。』

『はゝあ。』

『皆やつて見ましたが、玉子は圓いからコロ〳〵轉がるばかりで立ちません。「それでは御傳授申上げませう。斯うやるのです」とコロンバスは玉子の尻を卓子の角で割つて、美事に立てました。』

『成程。』

『然うやるなら誰にでも出來ると申しましたが、「御說の通り、人のやつた後からなら何でも出來るものでございます」とコロンバスは笑つてゐたさうです。』

『一寸面白いな。』

『如何でございますか？』

『感心してゐるのに要求することはない。』

『はあ。』

『しかし考へて見ると、宮廷に玉子があつたといふのは變だね。宮廷の臺所か知ら？』

『無論作り話でございませう。成功者の逸話なんてものは後から拵へたものが多いですから。』

と松本さん、少し伺うかしてゐる。ガラマサどんは現に自分の逸話を私に編纂させてゐるのだから、むづかしい顔付になつた。

『社長。』

と私は松本さんの爲め又自分の爲めに再び執成さなければならなかつた。

『社長。』

『…………』

『何だ？』

『社長のコロンバスのお話と仰有るのは矢張り松本さんのと同樣教訓的のものでございますか？』

『教訓の押賣をする逸話ぢやない。』

『はあ。』

『世界の歷史そのものだ。教訓よりも神意の發現だらう。考へて見ると、我輩も身につまされる。』

『自叙傳編纂の參考資料として、是非承はりたうございます。』

『私も是非。』

と松本さんも態度を改めた。後が怖いことを知つてゐる。

『コロンバスの喉が乾いたといふ丈けの話だが、これが世界の歷史に影響を與へるから面白いだらう？』

『はあ。』

『コロンブスは喉が乾いた。若し乾かなかつたら、現代の日本の文明も多少面目を異にしてゐるに相違ない。』

『はゝあ。』

『ところが好い鹽梅に喉が乾いてくれたよ。』

と社長は同じことばかり言つてゐる。しかし催促は出來ない。

『成程。』

『折から差しかゝつたお寺へ寄つて水を一杯所望した。奴、若しこれをやらなかつたら、アメリカ發見が出來ずにしまつたらうといふのさ。』

『はゝあ。』

『君達も知つてゐる通り、元來コロンブスは新大陸を發見する積りぢやなかつた。世界が同じといふ理窟から、西へ西へと船を進めれば東洋へ出られると考へてゐた。支那あたりに着いて、金銀財寶を持つて歸る積りだつた。單に桃太郎の思想さ。その相談を彼方此方の王室へ持ち込むだが、斷られてしまつた。スペインでも失敗した。』

『成程。』

『それから間もなくのこと、或日トボ〳〵歩いてゐると喉が乾いてお寺へ寄つたのさ。水を飲ませて貰つてゐる中に、住職に會つて、東洋行の目論見を話したんだね、この住職といふのが女王陛下のお氣に入りだつたから、それなら拙僧から申上げて見ませうと、もう一度女王陛下に拜謁を計らつてくれた。』

『はゝあ。』

『今度は兩陛下ともコロンブスに動かされて、その結果、新大陸發見といふ劃時代的の事件が出來したのさ。』

『あれは一四九二年でございましたな。』

と私が思ひ出した。

『よく知つてゐるね。』

『學生時代の試驗勉強にゼノア生れのコロンブスが以豫の國を發見したと覺えてゐました。電話番號式に申します



と一四九二はイヨノクニでございます。』

『成程。』

これは覺え好

い。當時、日本の御代は？』

『無論存じません。』

『明應元年さ。西洋で新世界を發見するのに、お互の先祖は例によつて城の取りつこをしてゐた。その頃コロンバスのやうに海外へ着眼して見給へ。アメリカの此方側ぐらゐは日本のものになつてゐる。いや、コロンバスを待つまでもない。當時我輩が生れてゐたら、確にやつてゐたんだがなあ！』

『社長。』

と松本さんが注意した。

『何だ？』

『それは先刻の玉子の話でございます。コロンバスに叱られますよ。』

『参つた。ハツハヽヽヽ。』

と社長はもう御機嫌になつてゐた。

『好い學問を致しました。』

と私は社長の博識に敬意を表した。昨今、昔の語學の錆を落すのだと言つてチョク／＼横文字を讀むでゐるから、最近の仕

來てゐるから精神で讀む。變則英語も馬鹿にならない。

『松本君。』

『はあ。私も好い學問を致しました。』

と松本さんは慌てたが、社長は小言でなかつた。

『この喉の乾いたのがコロンバスの生涯の一大轉機、いや、人類文明史の一大轉機だつたと考へられないことはあるまい？』

『はあ。』

『しかし後から見てこそ轉機だけれど、お寺の門へ入る時には御本人然うとも氣がつかなかつたに相違ない。妙なものさ。自ら招いても來なかつた轉機に偶然行き當つた。』

『はゝあ。』

『天機洩らすべからず。』

『はあ。』

『洒落だよ。』

『はゝあ。ハツハヽヽ。』

と私達は呑み込みが悪い。

『さて「我が一生の大轉機」はと考へて見るに、二十三の夏、京橋の共同便所で小用を足したのが正にそれだと思はれる。』

『はゝあ。』

『コロンバスとは反對だつたよ。』

『ハツハヽヽ。』

『その折、手洗の傍に袱紗包が落ちてゐた。拾つて見ると、内が紙入のやうだつたから、交番へ屆けたら、「一寸來い」と警察へ引つ張られた。』

『何うしたんでせう？』

と私が主としてお相手を勤める。

『馬鹿な話さ。その頃あの界隈を荒してゐた掻つ拂ひに我輩の人相が似てゐたんだ。』

『ハツヽヽ。』

『警察でも此奴に相違ないと言ふ。しかし考へて見ると無理もない。當時世話になつてゐた辯護士が大阪へ移つてしまつて、我輩は木賃宿を泊り歩いた果、その三四日全く路頭に迷つてゐたんだから、風體が如何にも宜しくない。』

『社長にもそんな時代がおありでしたかなあ。』

『あの時がどん底だつた。掻つ拂ひと間違へられたんだから、行くところまで行つたんだね。窮すれば通じる。もう轉機が來てゐた。人間の運命つて奴は實に妙なものだよ。我輩の今日をそれからそれと手繰り戻ると、京橋際のあの共同便所に辿りつく。』

と社長は四十年昔の發祥地を懷しむやうだつた。

『蛟龍竟に雲雨を得ましたな？』

『いや、未だ〱前途遼遠だ。紙入の中に名刺があつたので、夕刻、落し主が呼び出された。松本君、誰だつたと思ふ？』

『私の祖父です。』

『然うさ。』

『はゝあ。』

と私は初耳だつた。松本さんは親の代からの關係で、無能にも拘らず、秘書を勤めてゐると聞いたが、詳しいことは知らなかつた。

『君、松本君のお祖父さんは建築の請負人で、ナカ〱景氣が好かつたんだよ。その紙入に千圓からの金が入つてゐた。盜まれたのでなくて、落したといふことが分ると、我輩の嫌疑も晴れた。尤もそれまでに巡査との押問答で、滿更無教育ものでないことが分つたのだらう。』

『漸く安心致しました。』

『ところが松本老人は無筆だ。受取證が書けない。「お若いの、何も緣だ。君、書いてくれ給へ」と賴むだから、我輩が書いてやつた。印文けは首にかけて持つてゐたから、こゝへ何うぞと言つたら、「こゝか？」と見當をつけて、スポンと掛け聲をして捺した。皆笑つたぜ。』

『ハツヽヽ。』

『老人は感心してお禮をしろと言つたよ。[illegible]。』

兎に角その邊まで來てくれと我輩の腕を捉へて放さない。相撲のやうに太つた人で、力がある。警察を出ると、人力を呼んで、立派な料理屋へ乘りつけた。そこで又お禮を押しつける。我輩が拒絶する。「金は取らなくても、實に能く食ふね。君は腹がへつてゐるんだらう？」と老人が訊いた。「はあ。二日ばかり食ひませんから」と我輩は正直なところを答へた。「食ふに困るなら、俺の家へ來ないか？　何も緣だ。君一人ぐらゐ何うにでもする」と老人は何處までも親切だつた。これには我輩二つ返辭さ。そのまゝ松本さんのところへ引き取られて、請負人の手代になつた。』

『社長、今日のお話は一々材料になります。』

『我輩もその積りで喋つてゐる。』

『筆記を致します。』

『然うしてくれ給へ。』

と社長は頷いた。松本さんはデスクの上から葉卷を持つて來た。社長が又頷いたので、先を切つて、火をつけてやる。

『松本君。』

『はあ。』

『今日は何の日だか、君知つてゐるか？』

『さあ。』

『君のお祖父さんの命日だよ。』

『はゝあ。』

『忘れてゐたね。一月の十五日に亡くなつた。尤も君の生れない前だつたからね。』

『はあ。』

と松本君は稍面目が立つた。

『好い人だつた。しかしひどい死に方をしたよ。』

『親父から承はつてゐます。』

『我輩が醫者を呼んで來た時にはもう悉皆いけなかつたが、未



だ煙が出てゐた。身體の內部が燃え上つたんだから溜まらない。』
『火傷をなすつたんですか?』
と私が訊いた。
『いや、大酒飲みだつたから、身體中がアルコール分になつてしまつて發火したんださうだ。』
『はゝあ。』
『自然爆發といふ奴で、強い酒を飲む西洋人には時稀ある現象ださうだが、日本では初めてだと言つて醫者が感心してゐた。煙も出たし、身體中が黒くなつてゐたから、あれは確かに燃えたんだね。』
『恐ろしいものですな。』
『何うせ酒で死ぬんだと始終言つてゐたが、實にひどい死に方をした。身體中がアルコール分なら、全く危い話だ。斯うやつて葉卷を銜へてゐれば、口火をつけるのも同じことだから、直ぐに爆發する。お祖父さんは乾度煙草を吸つてゐたんだよ。』
『然うかも知れません。死んだら瓢簞形の墓を建てゝくれと遺



言するくらゐの飲んだくれでしたから、自業自得です。』
と松本君はお祖父さんに餘り好感を持つてゐない。
『ひどいことを言ふな。』
『いや、祖父が大酒を飲むだ酬いで親父が病身でした。現に私が、頭が好くないつて、社長に叱られるのも祖父の不行跡が祟つてゐるんです。』
『ハツハヽヽ。』
『日本中に類のないやうな死に方をする祖父ですからな。』
『しかし豪い人物だつたよ。我輩は未だに敬服してゐる。』
『社長、その頃の御生活を詳くお願ひ申上げます。』
と私は促した。松本さんのお祖父さんの人物なぞは何うでも宜い。
『他に手代が二人ゐたが、我輩が一番のお氣に入りさ。「京橋のをつれて行く」と言つて、いつもお供を仰せつける。「京橋はよして下さい」と我輩は賴むだ。如何にも京橋から拾はれて來たやうで具合が惡い。老人は全くの無筆だつた。しかし「俺は家を建てるのが商賣で、字を建てるんぢやない」と言つて大威張りさ。我輩ま

契約書や請求書を認めて、こゝへ一つと姓名の下を指さす。大將、「よし。こゝか？ スポン」と掛け聲をして印を捺す。實に景氣の好い人だつた。』

『大分變つてゐますな。』

『迚も當り前ぢやない。しかし頭の好い人だつたよ。何も彼も曲りなりに分つてゐた。自分は無學文盲でも、我輩には勉强を勸めてくれた。「君は他の手代と違ふ。これから出世をするんだから、學がないといけない。英學をやりなさい。英學をやつて獨逸の技師に使つて貰ふのが一番早道だ」と言つて、夜學へ通はせてくれた。こゝが老人らしいところさ。西洋は獨逸でも佛蘭西でも英學だと思つてゐたんだね。』

『成程。』

『しかしその英學で我輩は獨逸人に知己を得たんだから面白いぢやないか？』

『はゝあ。』

『君達も知つてゐる通り、この會社は元來獨逸人が創めたんだからね。』

『はあ。』

『斯う考へて見ると、松本君のお祖父さんは我輩の大恩人さ。』

『先刻のコロンバスのお話のお坊さんの役でございますな。』

『いや、三年間世話になつたんだから、あれ以上さ。しかし松本君。』

『はあ。』

『我輩が斯う思つてゐても、君は君だ。増長しちやいかんぜ。』

『大丈夫です。』

『いや、冗談だよ。ハツハヽヽ。』

と社長は矢張り戒めたのだつた。

『祖父は氣紛れものだつたさうですから、隨分お骨折りでございましたらう？』

『無筆の人の秘書つてものは樂なやうでゐて苦しい。書くばかりでなく、讀むで聞かせなければならないからね。』

『成程。』

『此方も骨が折れるが御本人も不便だらうと思つて、六十の手習ひを勸めて見たけれど、梃でも動く人ぢやない。』

『强情だつたさうでございますよ。』

『俺はお前達麥魚ツ子とは人間の出來が違ふ所爲か、細かいものを見ると目が廻ると言つたよ。』

『はゝあ。』





『その代り氣力が好いから、一遍見たこと聞いたことを決して忘れないと言つて威張つてゐた。』

『社長。』

『何だ？』

『要するに、京橋際の便所から拾ひ上げられて請負人の手代におなりになつたのが社長の御一生の大轉機でございますな？』

と私は萬年筆を動かして迫つた。松本老人の話をしてゐたのでは果しがない。

『ひどいことを書くなよ。』

『違ましたか？』

『いや、それに相違はないけれど、何とかもつと婉曲にやつて貰ひたいな。』

『しかし社長。』

『何だ？』

『成功傳は出發點が低いほど受けるものでございます。』

『はゝあ。』

『橋際の乞食から大會社の社長へといふやうな幅のある題目が殊に喜ばれます。』

『乞食はした覺えがないけれど、下等なことなら可なりやつてゐる。』

『それを是非伺はせて戴きます。』

『我輩は請負人の手代として諸官省へ出入をする間に屢ゝカギをやつた。』

『はあ？』

『鍵さ。これだ。』
と社長は人さし指を曲げて見せた。
『はゝあ。』
『職人を大勢使つてゐるから、工事がないと立ち行かない。松本老人は「おい、やつて來いよ」と命じる。』
『やつてお出になるんですか？』
『うむ。仕方がないさ。皆やるんだもの。』
『よく捉まりませんでしたな？』
『蛇の道は蛇さ。そこを巧くやる。』
『これは標題として乞食よりも更に結構に戴けます。一介の泥棒から大會社の社長へ。』
『馬鹿！』
『はあ。』
『泥棒ぢやない。』
『でもカギと仰有いました。』
『そのカギとはカギが違ふ。』
『はゝあ。これは失禮申上げました。』
と私は何うも輕率でいけない。社長が上機嫌だと、つい調子づいて叱られる。
『カギといふのは馴合入札のことだ。例へばこゝに一萬圓見當の工事がある。一萬圓で取れば儲かるんだけれど、皆競爭で安く入れる。九千圓ぐらゐでも安心してゐられない。この邊の理窟は君にも分るだらう？』
『はあ。』
『ところが一萬圓の工事を一萬圓で取る法がある。これがカギだ。競爭者全體が談合してカギ主を極める。カギ主が一萬圓に入れて、他の連中は皆一萬圓以上に入れる、皆でカギ主を保護するんだね。その代りカギ主は皆にカギ錢をやらなければならない。』
『成程。』

『仲間が多いとカギ錢が澤山でるから、結局安く取つたと同じ勘定になるけれど、必ず取れるから安心してゐられる。』

『カギ錢を貰ふ奴は唯儲けですな。』

『役得だ。』

『するとカギ錢稼ぎ專門の賊が出て來はしませんか？』

『賊は嚴しいね。』

『兎に角、不正ですからな。』

『カギといふ字がつくんだから、無論正しいことぢやない。』

『この頃の請負人もやつてゐるんでせうか？』

『いや、昔の話さ。恐らく松本君のお祖父さんがカギの元祖だつたらう。カギ屋といふ名がついてゐた。無學文盲でも頭の好い人だつたからね。』

『カギ屋の手代からこの會社へお入りになつた經路は何んな風でございましたか？』



と私は又萬年筆を動かした。

『それもカギだ。』

『はゝあ。』

『松本老人がその頃この會社の新築工事をカギで取つたのさ。』

『成程。』

『老人は何ういふ考へか無暗に獨逸贔負だつたよ。これは獨逸人の會社で酒を拵へる工場だから是非取ると言つて、取つたことは取つたが、工事落成間際に爆發してしまつた。さあ、我輩は困つたね。老人一人で持つてゐた家業だから後が續かない。しかしこれが又一轉機だつたよ。』

『はゝあ。』

『當時この會社の社長をしてゐたハイゼといふ獨逸人が我輩を事務員に採用してくれた。十七圓の月給だつたが、これが出世の緒口さ。雜誌の方はこの邊にして置いてくれ給へ。カギの事は書いちやいけないよ。宜いかい？熊野君。』

と社長は念を押した。

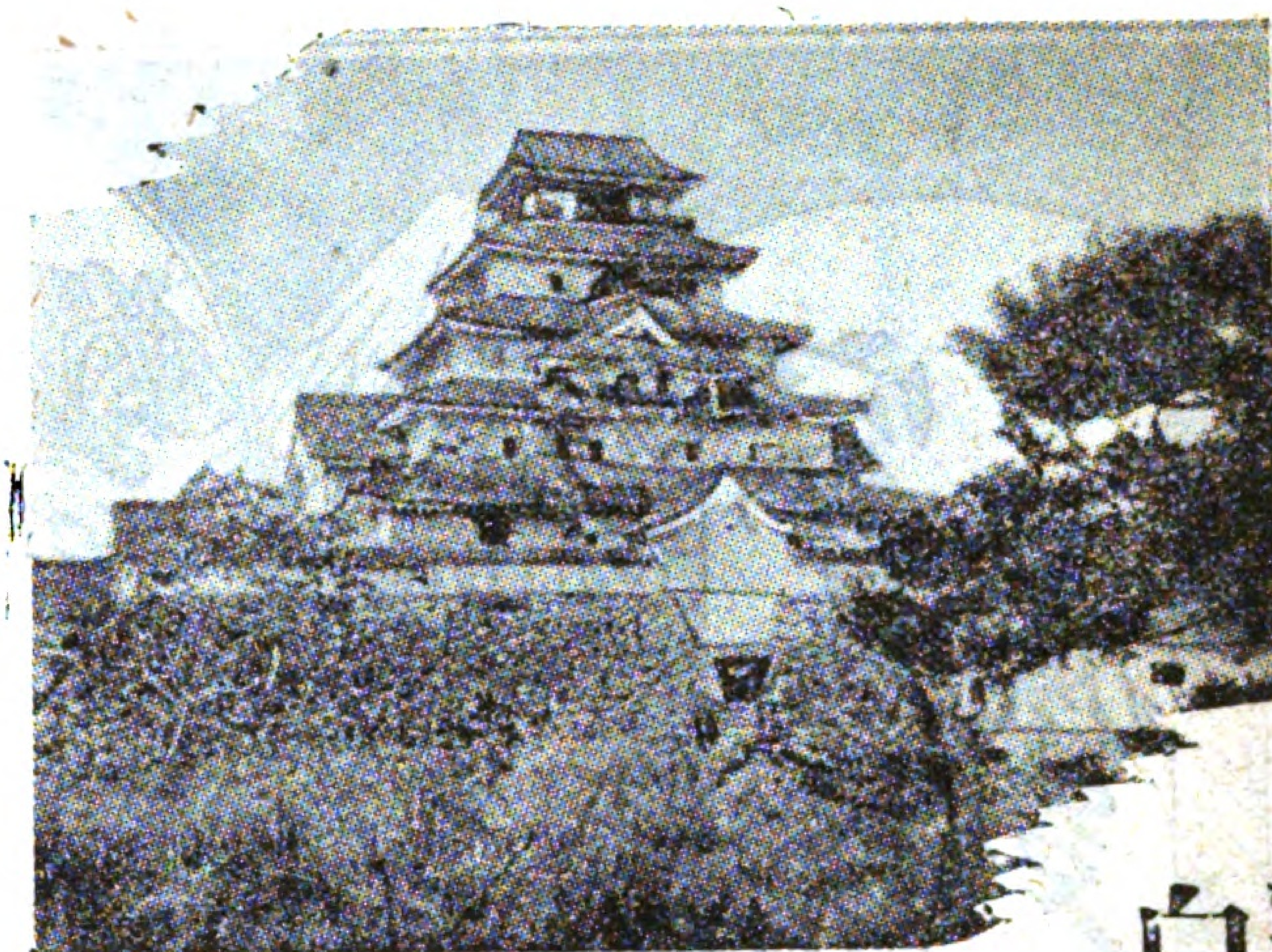
（つゞく）



容易に聞かれぬ面白い話
滅多にない珍らしい話
◇白虎隊悲壯思ひ出話　白虎隊唯一の殘存者　飯沼貞雄
◇ジョール河畔の猛獸狩　陸軍大尉　吉井信照
◇日露開戰極秘錄　某國名外交家　闘外老人
◇老劍士の眞劍勝負體驗談
◇盲目でつんぼで博士になつた婦人　神代種亮
◇わが新徵組の薩摩屋敷燒打　新徵組唯一の殘存者　千葉彌一郎
◇ダイヤモンドの咒ひ　北畠利男
◇暗夜に千里の先が見える……………科學物語
◇沙漠で魚を掘る……………旅行珍談
◇死んだ人を甦らす話……………最新醫學の驚異

白虎隊、悲壯思ひ出話

白虎隊唯一の殘存者　飯沼貞雄



明治七年に取崩せし
會津鶴ケ城の天守閣

危急存亡の秋

幕末の風雲愈ゝ急を告げ、會津藩主松平容保公は將軍家の懇請に依り、決死京都守護職の重任に就かれた。

勤王佐幕兩黨の間に在つて、その協調者である守護職は、實に容易ならぬ重責であつたが、公の誠忠は天朝に通じ、孝明天皇の御親任一方ならず、屢ゝ優渥な御感狀を賜はり、有難き御下賜品をさへ拜受された次第でありました。

然るに、一朝鳥羽伏見の戰ひに、事志と違ひ、止むなく薩長土の軍と戰ふことになりました。

當時、我々會津方の者は、薩長土の軍勢は何等官軍にあらず、我々は素より錦旗に弓引く者ではない、薩長土の賊軍を討つのであると考へてゐました。故に、私は會津軍を東軍、薩長土軍を西軍と呼ぶことにします。

明治元年戊辰正月、鳥羽伏見に火蓋を切つた西軍は、轉戰又轉戰、潮の如き大軍を擁しつゝ、遂にその年の八月に至り、會津若松の國境に攻め寄せて來ました。

この戰爭が起つて以來、薩長土軍の橫暴を憎み、會津方に味方する者少からず、殊に奧羽信越の諸藩は容保公に同情したのであつたが、各ゝ自國を守るの必要から多くの助けを送ることが出來ず、會津藩は孤軍を以てこの大敵を迎へ擊つたのであります。思へばよくも戰つたものです。

然し、半歳に亙る惡戰苦鬪に、殆んど刀折れ矢盡きる有樣、老も若きも、悉く劍を執つて出陣、國を擧げてこの國難に殉ぜんと覺悟したのであります。會津倒るゝか起つか、實に危急存亡の秋、城下の騷ぎといふものは、眞に言語に絕して居りま

した。

八月二十一日、若松に近き石筵口の敗報櫛の齒を引くが如く、西軍は破竹の勢ひを以て、一擧に戸ノ口原の守りを潰滅せんと掛つて來ました。戸ノ口原が破れゝば、あとは城に據つて守る外はなく、味方にとつては由々しき一大事、早々援兵を増して守れと城中愕き騒ぎましたが、悲しや軍兵殆ど殘りなく、遣すべき兵力がありません。『よし、遣すべき兵卒なくば、余自ら陣頭に起つて之を援けん』何といふ壯烈な御決心でせう、容保公は周圍の諫止に耳を傾けられず決然自ら馬を陣頭に進められることになりました。即ち、僅に殘る身側護衛の白虎一番、二番中隊八十名、其他の混合兵百數名、といふ僅の小隊を率ゐて出陣せられたのであります。」

飯沼貞雄氏――はかの飯盛山上に自刃した白虎隊の一人であり、而も不思議なる運命によつて蘇生し、今日尚長壽を保たるゝ唯一人の殘存者である。

その當時の壯烈悲壯なりし有樣を、今日、氏の口づから聞き得るは何たる仕合せぞ。惟ふに我が武士道の精華、白虎隊の至誠盡忠を、如實に我々に訓へんが爲に、天は飯沼氏の口を藉りて、其事蹟を傳へんとするのであらう。



飯沼氏は後、遞信省に入つて技師となり、勤務數十年、正五位勳四等に叙せられた。今は辭任して仙台市光禪寺通りに自適の生涯を送つて居られる。今年高齡七十七歲である。

―寫眞飯沼貞雄氏―

白虎隊晴の出陣

抑ゝ白虎隊といふのは、十六歳と十七歳の少年で組織した隊でありました。會津藩では家臣の男子を總べて軍隊に屬せしめ、その隊名を軍神の名に因んで、白虎、朱雀、青龍、玄武と名付けて居りました。そのうち白虎隊は特に君側護衛の重任を帶びて居つたのです。

戰ひ始まつて以來、白虎隊は城中に出仕するのみで、遠くから指を啣へて戰爭を眺めてゐなければならなかつたので、髀肉の嘆に堪へなかつたのですが、今度こそ愈ゝ出陣と聞いて、一同は欣喜雀躍、我が時至れりとばかり、腕を撫して勇み立つたのでありました。

丁度二十二日の早朝、まだ私が寢てゐた所へ

隊長から左の如き回章が來ました。

『急ぎ回章を以て申入候

昨日白河口の戰ひ利あらず、賊へ阿武隈川の要地を奪はれ、今や石筵口の戰爭最も熾なり。殿樣御出陣仰出され、我隊從軍仰付られ候。今日正午の刻までに面々武具を用意し、相違なく登城可有之、執達仍如件』

この時私は年十六。白虎二番中隊に屬して居りました。父時衞は物頭を勤めて居つたが、當時白河口に出陣中で、家には母文子と若黨の藤太が留守をして居りました。

『母上、出陣の回章が參りました』と私が示すと、

『いよ〳〵おまへは殿樣の爲に身命を捧げる時が到來しました。日頃父上よりお訓へもある通り、今日この家を出たならばオメ〳〵と生きて再び歸るやうな卑怯な振舞はしてはなりませんぞ。武士の子として誠に目出度い首途ですから、先づ西郷の祖母さまにお暇乞をして來なさい』と云はれた。

西郷の祖母さまといふのは母の母堂のことで、私は急いで朝飯を濟して祖母の家に行きました。祖母は端然と容儀を正し、短冊にすら〳〵と左の和歌を書いて下さつた。

重き君輕き命と知れやしれ
　　おのが爐の上は思はで

そして懇々と戰場の覺悟や心得を敎へ訓して下さつた。私は不知不識感に打たれ、いつしか淚が溢れさうになりました。と、祖母は凛とした聲で、

『武士の首途に淚は不吉ですぞ。會津武士たるものは勇んで行きなさい』

私は思はずハッとしました。誠に、祖母は女ながらもさつきから淚を一滴も見せぬのです。武士の子たる私が泣いてよいものか！――私は氣をとり直し、凛然となり、

『お祖母さま、……おさらば……』

と云ひ捨て、門を蹴つて走り出ました。ともすれば振返りたがる心をぢつと堪へて、私は遂に後を見ませんでした。あの時玄關に見送つてくれた祖母の切下髮の姿が、今もあり〳〵と眼に浮んで來ます。……

さうかうするうちにも時刻は容捨なく移るので、集合時刻に遲れては大變と、慌しく家に驅け込んで母に別れを告げました。母は、

『武士が戰場に臨んだら、決して逃げ隱れをしてはなりませんぞ。鐵砲で敵を狙ふ時は必ず臍のあたりを狙ひなさい。太刀打をする時は臆せず、怯ぢず、思ひ切つて先の先々と心掛けて斬りに斬るのです』と敎へ訓し、硯を引寄せて左の一首を認めてくれました。

梓弓むかふ矢先はしげくとも
　　ひきなかへしそ武士の道

玄關に立つと、母は笑顔を以て私を見送つてくれたのです。その温顏を見れば、これが見納めかと覺えず眼頭が熱くなりました。

『母さま……』ともう一度呼びたいが、又祖母のやうに叱られてはならないと考へて、私は故意と後も振向かず、一散に城を指して駈け出しました。母はあとで、奥の間へ入つて、靜かに兩眼を押へられたさうです。

死地に赴く

我々白虎隊の髮は大たぶさに結ひ上げ、紫の元結を用ひた者もあり、白の元結を卷いたものもありました。

黒羅紗の筒袖服を着て、長さ二寸五分、巾一寸五分位ゐの布片に赤の旭日章の半形を描き、その下に墨で『會』の字を記した肩章を一齊に左肩に附けてをりました。

武器は日本刀を眞田紐で肩に提げ、脇差を手挾み、佛國製の『ヤーゲル』銃を携へ、彈藥盒をつけた革帶をしてゐました。よく俗間の繪に白絣の着物に白袴を穿き、白襷に向ふ鉢卷、笹穗の手槍を携へたものなどを描いてをりますが、あれは全くの『繪空事』で、中には劍術の胴などを附けた滑稽な姿を描いたのもありますが、あんな裝束は一人としてして居らなかつたのです。



守護職時代の松平容保公

さて、十分に身仕度をした私は、急ぎ三の丸に赴きました。三の丸に集るのは何れも白虎隊中の者ばかり。十六七歳の少年が君側護衞といふ大任に、極度の緊張を示してゐました。十六七歳の少年が集合した所は、今で云へば中學生の發火演習に出發する光景にも比すべきでせうが、しかし、私共の場合はそんな暢氣なものではなかつたのです。とても生きては歸れぬ味方苦戰の戰場へ赴くので、而も、これが初陣です。

私共は異常の昂奮に包まれて居つた。西軍何者ぞと勇氣凜然たる勇猛果敢な會津武士の氣概はあつたが、さすがに平生よりは口數も少く、默々として隊伍を組みました。互に見交す眼と眼、一緒に死にゝ行くのだといふことを感じ合つて、親愛の光りに燃えてゐた。お互に視線が合ふ、微笑する、それが告別の意味でありました。みんなが非常に懷しく感ぜられました。

隊中の簗瀬武治（飯盛山で自双した一人）が傳家の寶刀を撫し、意氣昂然と、『これでチョン切つてやるのだ』といつてゐた樣子などが今でも眼に浮んで來ます。彼は紅顏の美少年で、隊中でも容貌の優れた一人であつたが、一旦戰場に臨むと實に敏捷勇敢であり

ました。惜みても餘りある人物です。

我々白虎一番中隊、二番中隊は馬上の君公を前後に護り、愈々午後一時若松城卽ち鶴ヶ城を出發しました。

この日は朝から霏々として雨が降つてゐました。我々は肅々として若松市中を過ぎて行きました。市中の老若男女は雨に打たれつゝ、沿道に垣を作つて見送つてくれました。君公の御出馬といへば、會津にとつて愈々これが最後の場合です。

悉く堪へかねて涙滂沱と頰を下つてゐるのが見えました。風呂敷のやうなもので顏を蔽うてゐるお婆さんもある。珠數つまぐつて一心に念佛を唱へてゐるお爺さんもある。中には聲を振り絞つて『安達の若樣』『有賀の若樣』などと叫んで拜むやうに兩手を合せて告別の心を述べてゐる町家の女房もありました。見送る者も、見送らるゝ者も悲壯凄慘の氣で一杯でした。日頃見馴れた街道の並木も、寺や神社の建物も、折からの暗い雨に閉され、慟哭してゐるやうにも見えました。



孤軍敵陣に迫る

行くこと約三十丁で瀧澤村の御本陣横山家に到着し、此處に休憩しました。

と、時もあらせず早打ちが馳せ付けて、

『敢死隊は唯今戸ノ口原附近に詰めて居りますが、敵は早や間近に參りました』といふ報告です。

この急報に依つて、

『白虎二番中隊は直ちに戸ノ口原に前進せよ。一番中隊は其儘君側を護衞すべし』といふ命令が下りました。

さあ喜んだのは我々二番中隊の者です。愈々戰爭だ、といふので俄かに色めき勇み立ちましたが、之に反して一番中隊の者達は非常に憤慨しました。一番中隊を差置いて二番中隊を先にするのは穩當でない、是非共我々を差遣して下さいと、しきりに請願して居つたやうですが、遂に大命は奈何ともする事が出來な

い。そこで我々は勇躍して出發したのでありました。

瀧澤峠を越え、金堀、强淸水を經て、一里餘を進んで戸ノ口原に向ひました。

秋の日は暮れ初めて、晩鴉塒に急ぐ頃、漸くにして戸ノ口原を望み得る附近に近づくと、其處に敢死隊が露營して盛んに火を焚き、夕餉の炊爨をして居りました。白虎隊には兵糧がなかつたので、握り飯一個宛を貰つて飢を凌ぎました。

こゝで我々は敢死隊に別れ、猶も進んで敵の陣營に迫るべく、一隊僅か三十七名の者が宵闇を冒して前進しました。

或る小高い丘の松林の蔭に停止した時、隊長日向内記は一同に向ひ、

『我々には糧食の準備がないから、敢死隊と相談して何とかして都合して貰つて來る。それまで此處に待つてゐてくれ』と云つて、單身元來た道を引返して行きました。

夜は次第に更け、鐵砲の聲は各所に起つて、我々の士氣は彌々緊張したが、隊長はなかなか歸つて來ない。雨は益々降りしきり戎衣はびしよ濡れになる。雨を避けようにも途がないので、各々樹の根に蹲踞んで腕を扼するばかりでした。



やがて、前面に微かな光りの動くのが見えました。素破、敵！と一同屹ッと立つたが、隊長はまだ歸つてゐない。突如、砲聲が各所に起りました。

そこで、副隊長の篠田儀三郎は憤然として、

『氣を付けい…』と叫んだ。

『隊長は今に到るも歸つて來ぬ。故に不肖篠田今より隊長に代つて指揮をするから、左様心得ろ』

こゝに於て篠田の教導に從つて荊棘を分け、木の根を攀ぢて身を忍ばせつゝ、次第々々に敵前間近に迫つて行きました。何でも不意に敵の前に現れ、一時に攻めかゝつて奇勝を得ようといふ計畫であつたのです。

朝霧を衝いて獅子奮迅

雨は何時しか霽れたが、一同は時の經つにつれて次第に空腹

、を感じて來ました。夜來一睡もせず、雨に濡れ、糧食はなく、血氣盛んの者揃ひではあつたが、前面の敵よりも先づこの惡條件に惱まされた。腹の空るのは中でも最も困却したことで、止むなく水を飲んで一時を凌ぐといふ有樣でした。

かくて夜明け近くなり、霧は深く山の端を籠め、樹立の中がやう〳〵白々と見え分けられるやうになつた頃、戸ノ口原の端にさしかゝつた。と、俄かに人馬の足音がする。朝霧の中に見れば正しく敵！

『ソレッ』と一同は素早く田圃の中の溝に身を潛めました。此時敵との距離は僅かに二百米もあるかないかと思はれました。我々は勇氣勃々、

『撃てッ』の號令と共に、一齊に火蓋を切つて撃つたが敵は一向に應戰しない。我々の位置が何處だか判らなかつたのです。が、やがて所在を認めると、猛然として突貫して來ました。

『何糞ッ』と我々も亦溝から躍り上つて敵に向ひ、樹立に隱れて一生懸命に射撃した。敵は益々其數を增し、雨霰と亂射して來る。硝煙雲の如く忽ちにして四圍を蔽うて了ひました。何を云うても敵は多勢味方は小勢、見れば傷いて殪れる者も續々とある。この狀況では味方全滅を免れまいと思はれるのでした。步一步敵は肉薄して、而もその全線を擴げて我々を包圍しようとする。我々は宛かも袋の中の鼠の如き危機に迫つたのです。

で、篠田は急ぎ大音を擧げて、露營地まで退却するやうに命じました。一同が集合してみると、敵彈に殪れて既に姿を見せぬ者が多勢ある。

それを知るにつけても、悲憤やる方なく、再び敵中に突入つて共々に切死せんと云ひ出す者があり、一同之に和しましたが、隊員西川勝太郎は、

『それもさうだが、結局は犬死に終る外ない。寧ろ歸城して君側を護り、城を枕に潔よく戰死を遂げた方が勝つて居る』と主張し、他に飽迄も踏み止つて力の限り戰はんと主張する者を制しました。で、一同詮方なくその意見に從ひ、血路を開いて城へ逃れることゝなりました。

疲勞、彷徨、

既に敢死隊は敵に壓迫せられて退却し、昨日の我が陣地は最早敵の蹂躙に委せられてしまつた。敵の先鋒はひし〳〵と城下に迫り、我が退路は全く絕たれてゐたのです。

昨日から腹に入れたものと云つては握り飯一つきり、我衣は夜來の雨にぐつしより濡れて肌も濕ふばかりで、髮は亂れてざんばらと額にふりかゝる、或者は敵彈を受けて鮮血淋漓と迸るに任せ、纔に有合ふ布を裂いて結んであるばかり、或者は白鉢卷の下から血が噴き出てゐる。實に悽慘な有樣。

我々は僚友を肩に扶け、或は刀を杖によろめく足を踏みしめ、敵の眼につかぬやう、本街道の南に沿うて、知らぬ山路をひたすらに城の方へと志しました。

この時の一同の疲勞困憊は非常なものでありましたが、それ

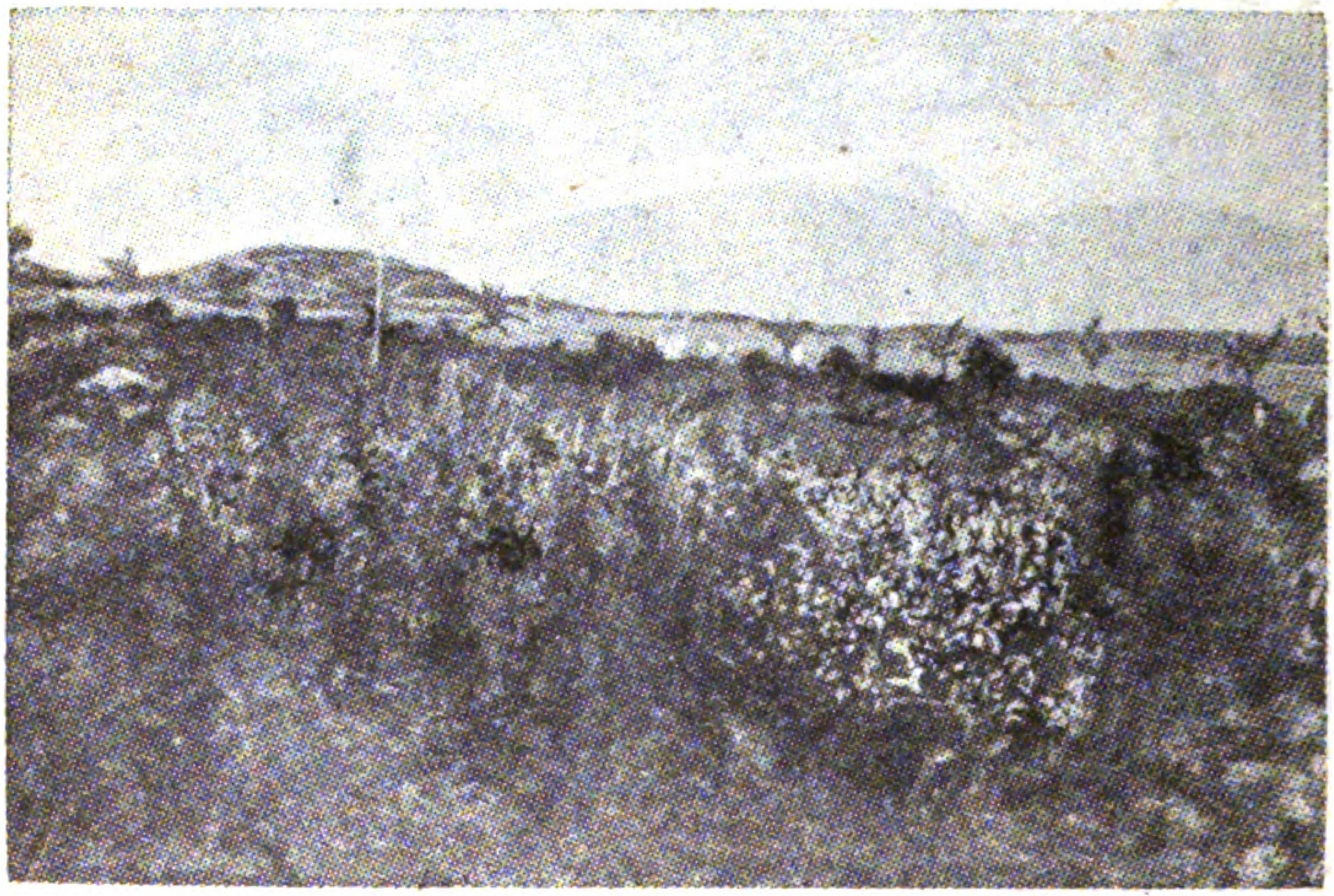
でも意志は毫も挫けなかつた。相勵し、相戒めて、どうかして城に入らう、城に入つたらウンと食つて、西軍の奴等に一泡吹かしてやらうと話し合ひながら行きました。

此の邊の山の中に迷ひ込んでは、誰一人地形を知る者なく、たゞ無茶苦茶に木の下を潜り、棘を踏み越えて行きました。

やうやく眼界の開けた明るみへ出て見れば、こゝは飯盛山の麓、瀧澤白絲神社の上でした。先づ安心と本道に出て城下へ入らうとすると、續々と瀧澤坂を下つて來る部隊がある。『やあ味方がゐるぞ』といふので、誰やらが、

『オーイ、オーイ』と大聲を發して呼びました。

ところが豈計らんや、それは敵軍であつたのです。忽ち銃口を集中して我等に浴せかけました。



――激戰地戸ノ口原の景――

無念！　永瀨雄次は腰部を撃たれて、ドッと其處に倒れました。

『伏せッ』の號令と共に、我々は神社の傍にある洞門の中に潜り込みました。

洞門の中は眞闇で、氣味惡い雫が滴り、蝙蝠がバサ／＼と顏を掠めて飛び、何とも云へない氣持ちでありました。

敵が、こゝまで來てゐることを知つた我々は、最早事態の容易ならざるを感じました。

早く飯盛山の向ふ側に出たい。そこからはお城が見える。城下が見える。君公は、御安泰であらうか？　戰はどうであらうか？　城下はどうであらうか？　我々はもうその心配で一杯でした。疲れた足も忘れて、喘ぎ喘ぎに急ぎました。

あゝ、それがどうだつたでせう。

漸く、眞に漸く辿り着いて見れば、町は早くも焔々として砲烟に覆はれ、遙かに鶴ケ城は全く黑煙に包まれ、天守閣も今や燒落んとする樣子ではありませんか。(實際は、町家の燒ける焰、銃砲の煙の爲に、天守閣炎上の如く遠くから見えたので、その時までは、城は無事であつたのでありますが、我々にはもう城が陷つたものと思はれたのでした。)

その時の我々の悲痛落膽を想像して下さい。



飯盛山上秋風寒し

あゝ萬事休す。

君公も、わが軍も、今は早や、城を枕に討死されたことであらう。

あまりのことに、一同は茫然自失、暫しは言葉もないのでした。

『飯沼、口惜しいぞ、無念だッ！』

篠田儀三郎は沈痛のたゞ一語、はら〳〵と涙を流して、私の手をしつかと握つた。無念殘念の思ひで總身がぶるぶると顫へて居りました。

或者は眦も裂けんばかりにハツタと賊軍の方を睨み、或者はギリ〳〵齒嚙みをして、怒髪天を衝くばかり、『うぬ賊軍奴、うぬ、……』と地團駄を踏むのでした。

この時、山上に辿りついた者は十七名、血と汗と埃に染れ、一夜にして地獄道を經て來た如く、見るも凄慘な有様をして居りました。

『今は早やこれまでだ。潔く此處に自刃して果て、冥途に於て君公と同僚の士に見えよう』

期せずして我々の考へはこゝに來ました

一旦家を出でては生還を期せぬ武士の習ひ、捨てる命は惜しくはないが、たゞ無念なのは、存分に敵と戰はずして死ぬことでした。本朝來の戰ひは謂はゞ腕試し、城に歸つ



て群がる敵を相手に、散々に闘つて力の限りを試さんとしたのに、それの叶はぬのが、武士として何よりも口惜しいのです。しかし、城は既に陥り主君在さぬ今となつては是非もない。我も亦冥途のおん供仕るのみである。

『いざ』と我々は山腹に整列した。髪の亂れを撫でつけ、戎衣の袖を正し、傷ける者は友の肩に倚つて、一同肅然として鶴ケ城の方に向ひました。

默禱數刻、今生のおん暇を告げた。四邊寂として聲なく、たゞ秋風の蕭々として枝を渡るばかり、一同涙を呑んで濛々たる城下の黑煙に相對した。中には感極つて抑ふる能はず、齒を食ひしばつて絞る如き歔欷の聲を洩す者もありました。

今は思ひ殘すこともない。一同はそれ〲席を選んで從容として死に就くのでしました。

私は岩石の傍の芝に腰を下し、昨日の朝、母に貰つた短冊を背中から取出しました。

梓弓むかふ矢先はしげくとも　——
引きなかへしそ武士の道

この母の餞けの一首を、私は心靜に三度四度繰返し誦じました。

あの訣別の折の母の笑顔、又祖母の切下髪の姿、——それらの影が幻の如く眼に浮ぶ。それもこれも、しかし、今は夢の世のことぞ。私は死んで行く。君のおん供をして冥途へ行く。母も祖母も、さぞや喜んで下さるであらう。……さう思ふと、私の心は和やかに慰められました。

「父上よ、母上よ、いづれ黄泉に於ておん目にかゝります」と私は父と母へ最後のお暇を告げた。

朗々たる最期の詩吟

この時、傍に居つた篠田は、熱涙と共に高らかに文天祥が零丁洋の詩を吟じ出しました。

すると、その傍に横つてゐた石田和助は、既に今朝重傷を負うて、正坐し能はぬ程弱つてゐたのでしたが、勇を鼓して莞爾と笑ひ、仰臥したまゝで篠田の吟聲に和したのであります。

人生古より誰か死なからん
丹心を留取して汗靑を照さん

この最後の一句を吟じ終ると、石田はむつくりと身を起し、

『わしは手傷が重い。——お先に御免』

と云つて、ムズと兩肌をぬぎ、年少十六歳にして古武士の型の如く作法正しく刀を腹に突き立て、見事に引廻して、ガバと前に伏した。サッと鮮血は迸り、見る〳〵枯草は朱に染む。

『天晴れだ、のう』

篠田は、和田の血を浴びつゝ、自若として云つた。私は彼と微笑の目禮を交し、

『御機嫌好う』と最後の挨拶をした。

林八十治は永瀬雄次と特に親交の間柄で、共に刺し違へて死ぬことゝし、同時にその咽喉を刺したが、永瀬は先程腰に銃傷を負うてゐたので、その力足らず、林の咽喉を充分に刺せなかつたので、氣丈の林は、手を以てヒタ〳〵と首を打ち、

『誰か、介錯を頼む』とハッキリと云つた。

『おう』と答へて、野村駒四郎が背後に廻り、

『御免』と云つて介錯し終つた。

野村は、暫く刀身を滴る血汐をぢつと眺め、千萬無量の思ひに打たれてをりました。

が、やがて、彼も端坐して兩肌おしひろげ、作法正しく、割腹してガバと伏した。

私も遅れてはならぬと脇差の鞘を拂ひ、力を籠めて咽喉に突き立てました。ブスリと音がして、切先が咽喉へ深く入つたと思つたが、其切先が何かにつかへるやうな氣がして、切先が後へ出ない。再び力を入れて押してみたが、矢張りガチリとつかへるものがあつて思ふやうに突き通らない。不審に思つて脇差を拔いてみると、切先一寸餘も血汐に染つてゐて刃こぼれもしてゐない。――自分はこの時さほど痛いとも苦しいとも感じなかつた。

私は刃こぼれのしてゐないのを確かめてから、

『この上は……』と傍らの岩石に脇差の柄頭をあてゝ、切先を手探りに血汐の流れ出る傷口にさし込み、岩石の兩側に生えてをつた躑躅の根株を兩手に緊つかと握つて、滿身の力を籠めて、グッと上體を前に突き出しました。今度はうまく通つたなと思うたまでは判つてゐますが、其後は夢路を辿るが如く何事も分らなかつた。

英靈永久に芳し

其後どうなつたのか一切覺えてゐないが、其日の夕方に近く、私の家に平生出入りをしてゐた印出新藏といふ人の妻がこの朝自分の息子の死骸を探すつもりで、飯盛山に來り、私を發見し、身體にまだ溫もりがあつたので呼び起して種々介抱を加へたのでした。そして私を負うて麓に下り、更に喜多方といふ村まで逃げてその池上といふ名主の家へ私を預けて、看護をしてくれたお蔭で私は蘇生した。

しかし、私は同僚すべてが自刄したのに、一人オメ〳〵永らへる氣はなく、自分も友と一緒に死んで行きたいと庶幾うたのです。が、城が陷つたと思うたのは誤りで城も無事、殿樣も無事と知らされ、もう一度城に歸つて、主君の御馬前に討死するの

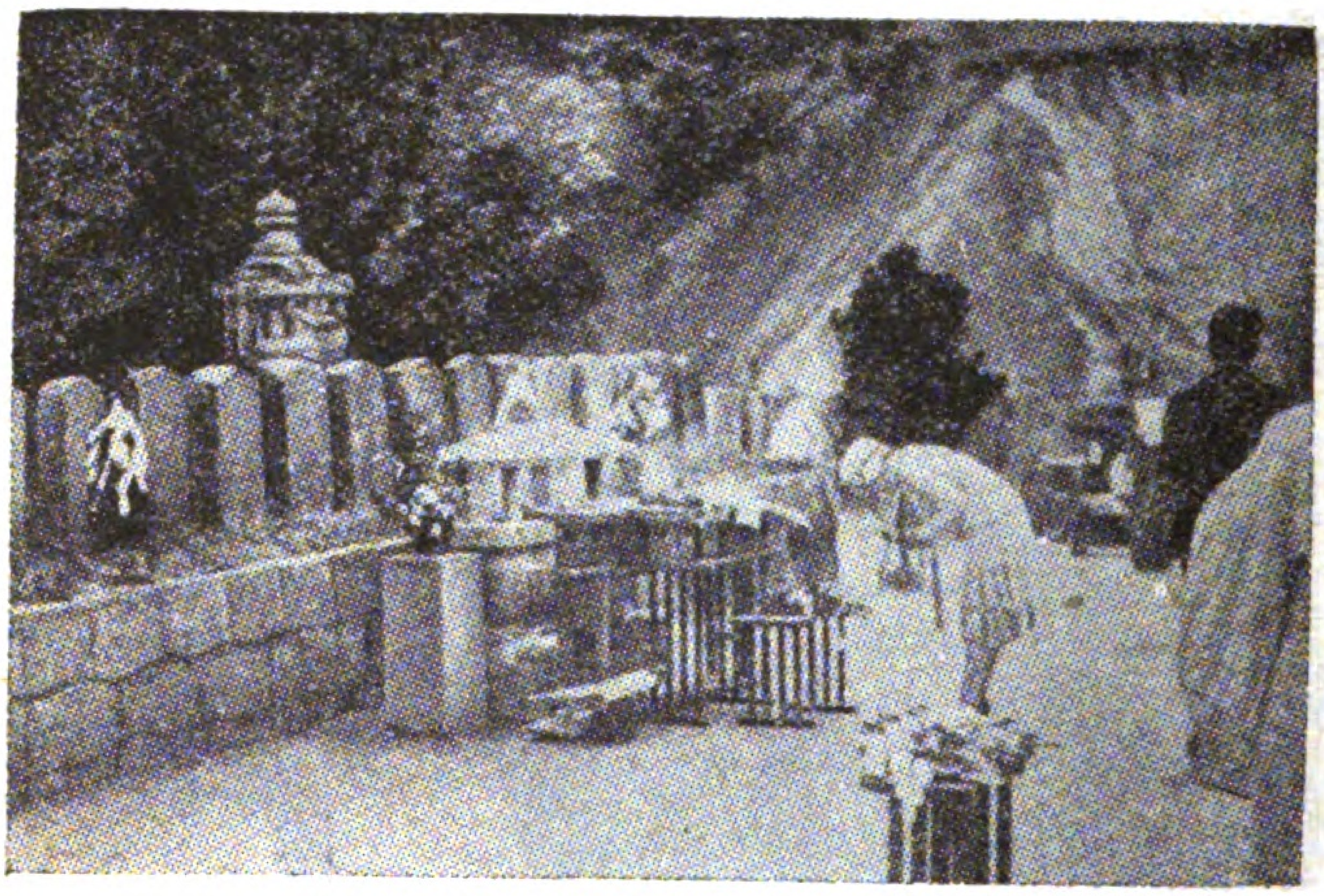
が武士の勤めと諭され、成程それもさうだと思つた。そして生きてゐる以上は直ちに城中に馳せ戻つて華々しく戰ひたいと心は矢竹に逸つたが、身體が云ふことを聞かない。私はじり〳〵する思ひで、一日も一刻も早くこの傷癒えよと焦れてをりました。

此時、鶴ケ城は全く孤立無援に陷り、西軍の重圍を受けて必死となつて奮戰苦鬪を續けて居つたが、遂に錦旗が越後國境を越えて進み來たのを知つて、容保公は斷然兵を收め、開城と決心せられたのです。

私の母は若黨の藤太を連れ、祖母を勞りながら田舍へ落延びて居つたが、藤太は各地の戰場を馳せ廻つて私の行衛を尋ね、漸く喜多方にゐることを知つて、私を若松に連れ戻りました。

若松に歸つて親に再會はしたが、何とも申譯のない氣がして暫らく無言で居りました。

飯盛山で我々十七名が自刄したあとへ同じ隊中の者三名が、



―白虎隊の墳墓に參詣されし松平勢津子姫―

途中西軍に遮られた爲に遲れて馳け付けたのですが、既に奔血淋漓、死屍横はるを見て、これまた刄に伏して共に殉じました。故に、飯盛山上自刄の士として祭られる者十有九士、永へにその英靈を仰がれ、千古に忠烈の名を稱へられて居るのであります。

〇　〇　〇

飯盛山白虎隊遺跡は、先年今上陛下攝政宮に在しゝ時、畏くも妃殿下御同列にて御成を賜り、又、昭和戊辰の還暦に當つては秩父宮殿下と松平勢津子姫との御慶事あり、會津の孤忠遂に天に通じたるを感ぜしめらる。

昭和三年十二月、伊太利國宰相ムツソリニ氏はイタリー全國民の寄贈に係る記念碑を贈られ、高松宮殿下之が建碑式を總裁するの榮を賜ひ、優渥なる令旨を下し置かれました。

盡忠至誠の少年白虎隊、十九士の英靈又以て地下に瞑すべく、洵に感激に堪へない次第であります。

〇　〇

左の一首は飯沼貞雄氏が攝政宮殿下台臨の際、感激の餘りに詠ぜしものである。

日の御子の御かげ仰ぎて若櫻
ちりての後も春を知るらん

……さしゑ　石井滴水……



ジョホール河畔の猛獸狩

猛虎と鬪ふの記

陸軍大尉　吉井信照

九死に一生――とは眞にその時のことであつた。今でも當時の光景を憶ひ出すと、ブルブルッ！　と總身の慄ふを禁じ得ない。

それは、私が、印度ジョホール河畔の護謨園管理に駐在してゐた時である。

このジョホール河畔には、最も古い三五公司を始め、三井、森村、古川、藤田等の諸富豪其他大小會社經營の農園が各地に點在してゐる。

祖國を距る三千哩



の異境に屯し、赤道直下の炎熱を物ともせず、わが同胞が祖國發展の基礎を築きつゝあるのである。

ところが、わが同胞が斧鉞を加へた耕地のその背後には、今尚千古の大森林が欝蒼として繁り、連綿遠くのびてその深さを知らない。而もこの魔の森こそ、猛獸毒蛇の棲家であつて、不斷に爪牙を磨きつつ、人間の隙をねらつてゐるのである。

殊に虎と象との跳梁は最も甚だしく、その害を被らない耕地はない。私の農園の如きも、前には虎の爲めに鷄小屋をあげてその犧牲とし、後には一夜の中に、愛犬二頭、更に又三頭を奪はれ、其都度、生々しい足跡は、主人に見せつけるが如く住宅の四邊に印せられた。

彼の襲撃は極めて大膽且つ敏捷、夜半、萬籟寂として聲なき時、密に住宅附近に現はれ來つて、犬の眠つてゐる高い露臺に飛躍り、一擧にして咥へ去る

のである。如何なる犬も、一度び虎の襲撃に遇つては猫に睨まれた鼠同樣、畏縮して了つて聲さへも出し得ない。咥へ去らるゝ一刹那、只一聲の悲鳴を殘すのみである。

度々の襲撃に私は恨み骨髓に徹し、是が非でも之を擊ちとらねばと思つたのであるが、不思議に其後姿を見せない。聊か張合ひぬけがしてゐるところ、今度は無茶苦茶に象が荒し初めた。

或日、三五公司の植林地から、象が現はれたといふので、私は、直に、土人のマサー及びアワン二人を隨へて急行した。處が惜しいことには、到着した時には、象は既にどこかに立去つた後であつた。

然し、足跡や地形の工合から、必ず彼がパパン村附近を通過するだらうといふ見込がついたので、我々は早速小舟にのり、川を遡つてパパン村につき、彼の行手を邀すべく、朝霧を衝いて進むのであつた。

大膽不敵

やがて路傍に、ラヽン草や、わらびが、人の背丈ほどものびてゐる邊りに來た時である。

ガサ〳〵ッ！

ふと異樣の物音がする。ピタリ足をとめて、何物ならんと今音のした方をうかゞつた。

途端、行手の道にヌッと飛出したのは！……一個の怪物！朝霧のうちにモク〳〵動いて見えた。

『大鹿だ！』『おゝ』

見るよりアワン——一行の土人——は突嗟に銃を擬した。怪物との距離二十間……アワンはうすれ行く霧をすかして狙つてゐたが、突如『アッ！』と叫んだ。間髮をいれず、私も叫んだ。

『虎だ！』

大きいぞ！と思ふ刹那、

ウオーーッ！

一聲高く咆哮して、二三度高く飛びあがつた。これこそ彼れが、獲物を捕へんとする時の豫備行動、虎の示威運動とはかねて聞いた。

おゝ、飛びあがる——また飛びあがつた……凄まじく吼えた！飛びあがる毎に距離はせばめられ、虎の姿は、刻々に大きくなつた。

攻撃だ！飽く迄我々に刃向つて來ようとしてゐるのだ。ピカ〳〵ッ！虎は炯々たる眼に此方を見据ゑつゝ、一瞬疾風の如く突き進んだ。最早十間の距離、牙をむき風を起して向つて來た。

『あゝッ！』

先頭にゐたアワンは、身を飜して逃げ出した。猛獸に馴れた彼れでさへこの始末、いきほひ、私は先頭に立たされて了つた。が、此方から逃げたが最後、虎はこの距離を一飛びにも飛んで、襲撃して來るのは必定、どんなことがあらうとも彼れに

背は見せられぬ。足がすくんだ！　もう絶體絶命、彼れと格鬪するまでも飛はなければならん！　よし！　最早や辭なし！

射撃あるのみだ！

反射的に銃を構へた。ねらつた！

しまツたツ！　銃には彈丸の裝塡がない。

『マサー！　君のは?!』

射るやうな虎の視線を眞向にうけながら、顏は動かさず、口早に、うしろにゐたマサーに訊いた。

『駄目です！　私のも夕マがしてない！』

無理もない、まさかにこんないゝ道で猛虎の襲來を受けようとは、ゆめにも思はないからだ。

距離わづかに數間！　虎は銀髯を逆立たせつゝ、眼光火の如く予に迫つて來る！

撃たんに裝彈なく、裝彈せんとすれば、虎はその間に疾風と飛び來たるは必定、勿論逃げたつて追付くことではない。實に萬事休す！　されど、今は撃つより外になし、突嗟に彈丸をこめた。虎も用心してか飛んで來ないのを幸ひ、彈丸をこめるより早く照準をつけた。虎の心臟に。早くも引き金に指が觸れた、

ドン！　と一發放たうとしたその瞬間だ、突如、予の前に立ちふさがつたのは、うしろにゐた土人マサー！　彼れは、この界隈に鳴る猛獸の足跡追蹤者だ。

予は、餘りの事に茫然とした。

と見る、マサーは、いきなり帽子を脫ぐや否や、右手に高くこれをさゝげ、今憤然として飛びかゝらんず勢ひの虎に向つて、叫んだ。

『……………』

おゝ！……おゝ、たしかにこれは、回々教の呪文！　マサーは聲を張つて呪文を唱へた。恐らくこれ神の加護によつて虎の害を防がんとするに相違ないのだが、これはまた何と云ふ勇敢な行爲であらう！　まつたく、それは、迷信が生んだ驚くべき勇敢さ、餘りと云へば無謀に近い大膽である。

私は、たゞ茫然として、なすところを知らなかつた。

然るに、虎は、この光景に……イヤ、流石の虎自身も、この餘りにも大膽不敵なる行爲に、却つて、度膽を拔かれたのであらう、まさに今一飛びすれば強爪よく予等の體に達する近距離に來ながら、突然パッと體を捻るよと見る間に、ヒラリ右側の叢中深く飛込んで了つた。

ホッとした。

見るとマサーは、なほも呪文を續けてゐる。

『おい、マサー。もうやめろ。アワン、アワン、早くこゝへ！』

アワンは、恐る〳〵近寄つて來た。

『あの向ふにある木――あの木にのぼらう。かうしては居られん。今の間に木にのぼらう』

私は、しきりに急き立てた。が、二人は肯かなかつた。

『いけない、どうも今日は運が惡い。退きませう。日が

惡い』

　そこで私も後退の意を決せざるを得なかつた。

『が、油斷は出來んぞ。三人一體になつて歩くんだ。アワン、君は後の方を、マサーは前方を警戒してくれ。僕は、叢の方の警戒にあたるから』

　三人は銃を構へた姿勢のまゝ、徐々に後退を開始した。

　ザ、、、……ザ、、、、！　ゐる！　まだゐるのだ、音は叢林の中、十數間の所、而かも、我々が、後退して來れば、その音も亦、我等と平行して跟いて來る。

『跟いて來るぞ！』

『獲物を狙つたが最後、前の方に迂廻して、路傍に待ち伏せてゐることがありますぞ！　油斷は出來ない！』

『心得た！』

　しかし、若しその言の如く、待伏せられて襲撃されては、この狹い道路、撃つひまもあるまい。よし、撃ち得たとしても、獰猛なる虎は、命中に屈せず飛びかゝるにきまつてゐる。危ない！　眞に虎の尾を踏む思ひである。

　私は全身を目と耳にした。

　路傍に蠢く蟲の音、草間に落つる露の音――みなピリ／＼と神經に響いた。

　二三丁來た。

　漸く虎の歩く音は聞えなくなつた。が、聞こえなくなればなる程、いつ飛出して來るかわからないので、却つて一層膽寒き思ひ、身構へを充分にして、後退、後退、また後退、やうやつと一里餘の道を退いて來た。

　パパンの村だ。

『もう大丈夫』

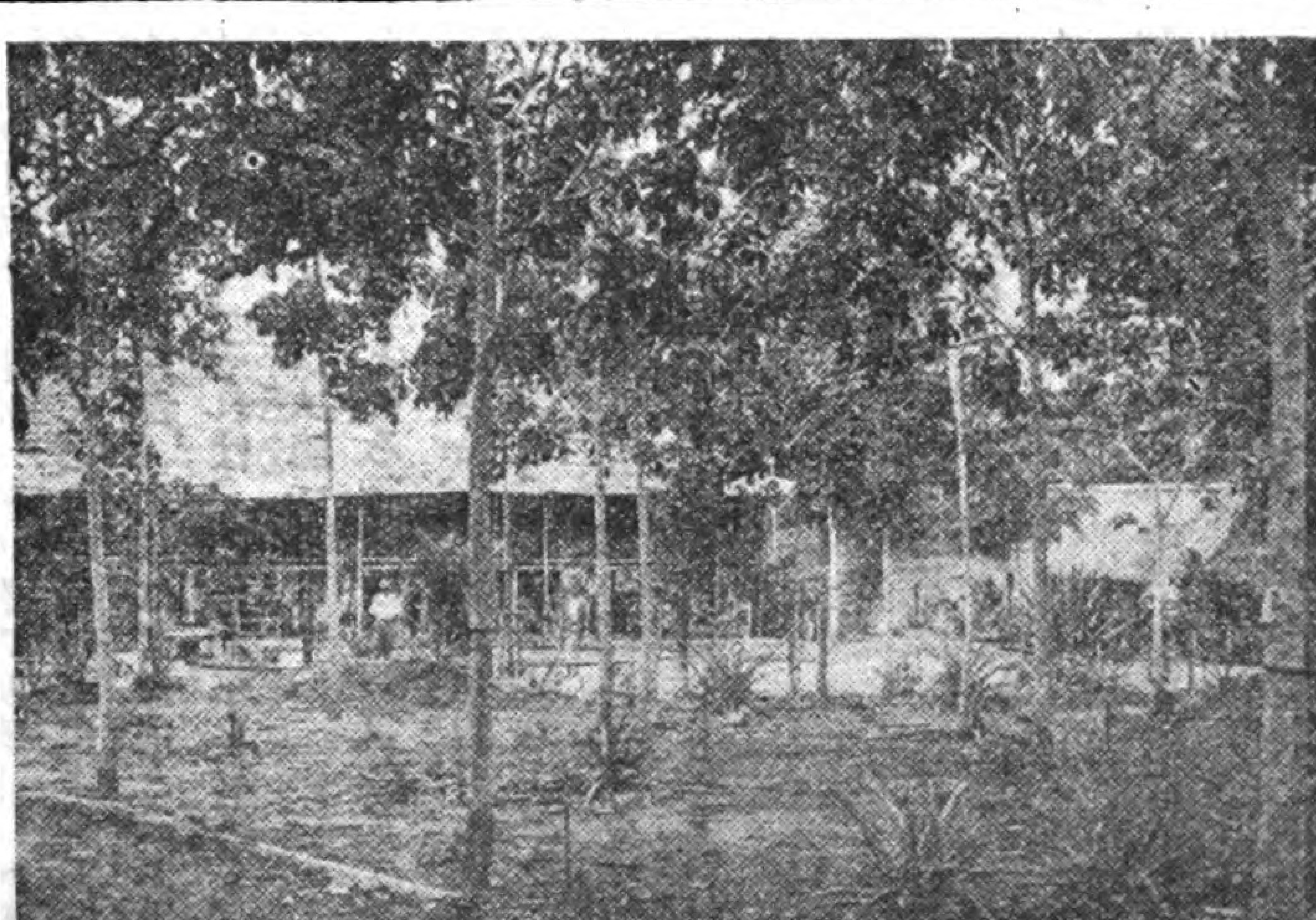
　實に文字通り蘇生の感、ホッとすると、今迄張りつめてゐた氣力が弛んで、極度の疲勞を覺えて來た。

　マサーは云ふ。

『どうも今日は運が惡い。天罰です』

『天罰？』

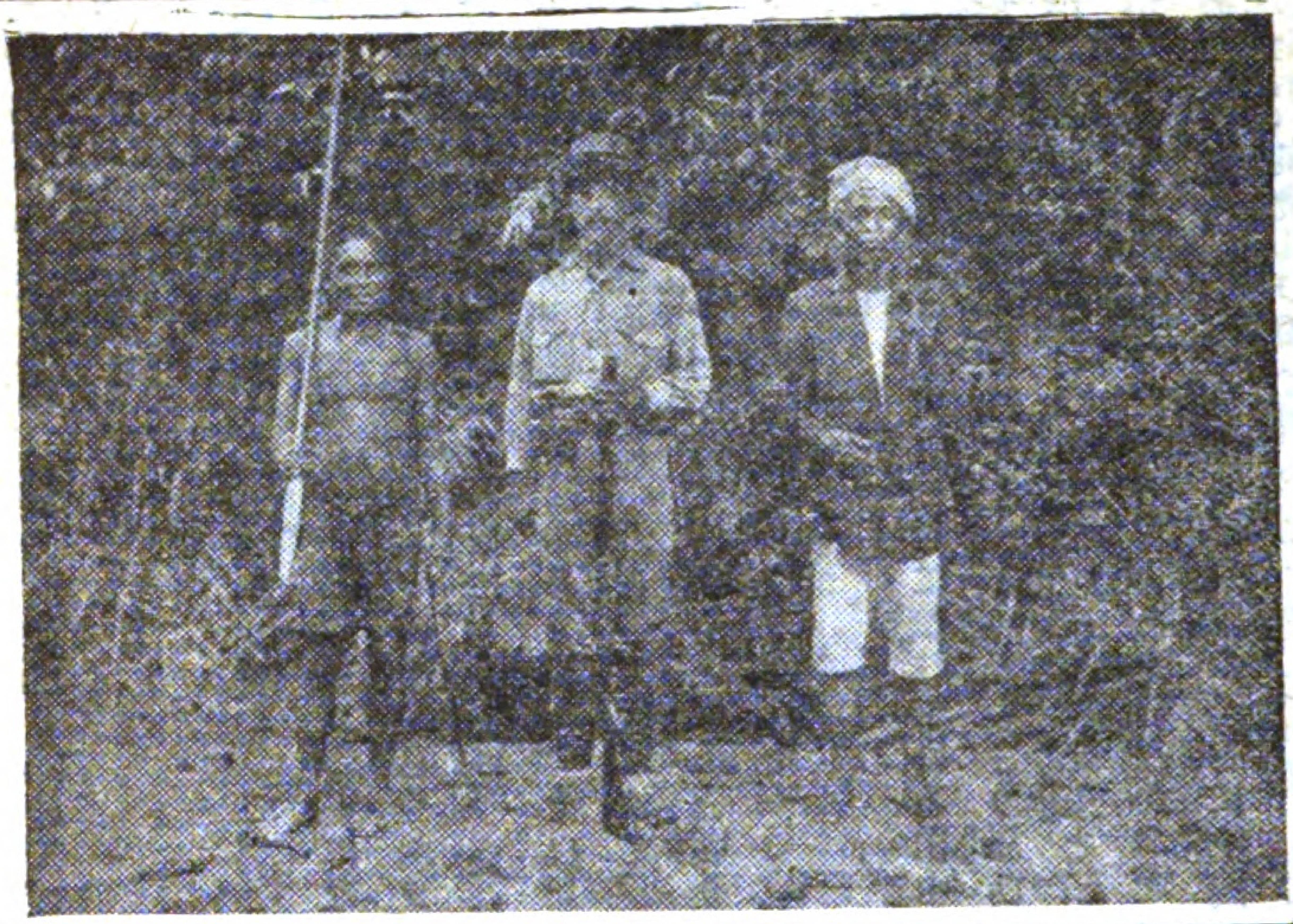
『さうです。今日は斷食の二日目ですから晝間、物を食べては



しば／＼猛虎に襲はれた吉井大尉の住居

いけないのです。それをお勧めに從つて食べましたので、こんな目にあつたのです。神の罰です。家に歸つて、神罰を許して貰ふ祈禱を致す外ありません』

由來、マレー人は、有名な御幣かつぎ、彼等は、神に祈るべく家に引揚げた。



向つて右より、マサー、吉井大尉、アワン

が、アワンの云ふところによれば、私もマサーも、銃に裝彈してゐなかつたので、却つて助かつたのだと云ふ、若し裝彈してあれば屹度撃つた。が、もとより照準も正確には行かないに違ひないし、あはよく虎にあたつたとしても、最初の一發で、完全に斃して了はない以上、第二彈を撃つ間に、虎の一撃は飛び來つて、此方が殺されて了つたらうと云ふのである。

たしかにさうだつたに違ひない。

橋上の活劇

然るにその後間もなくのある夜の事だ。

常夏の境、南洋の夜は、夜風の涼味云ふばかりない。

一夜、河野氏ほか二名の邦人が慌だしく訪づれて來た。虎が自分の方にやつて來て大變だといふのである。

『どうして殺つつけないのです』

『とても手におへないのです』

『据銃はどうです』

『据銃も仕かけて見ましたが、うまくゆかないんです。』

『かゝりませんか』

『かゝるにはかゝつたのですが駄目です。据銃は發射したが、虎は傷一つ出來ず、おまけに鷄を一羽さらつて逃げて了つたのです。そこで、もう一度据銃をかけた。もう來まいと思つてました。然るに何うでせう。またかゝつた、而かも、銃聲のあとから、恐ろしい唸り聲、バリ／＼バリ／＼と云ふ物凄い音、それッと窓をあけ、月明りに透かして見ると、野獸防禦の木柵は碎かれて、虎は、既に逃げて了ひました』

『フーム。が、手負ひにはなつたな』

『それです。もう、手負ひになつた以上、あとをつければ分る、』と云ふので、翌早朝、一同の者を驅り集めて、爪痕と血痕を目あてに、森林に入りました』

『ゐましたか？』

『一行は四人、とある谷間にさしかゝつた。そこは、潮が滿ちて來ればいつぱいになり、干ればたゞの谷になる、その急な斜面を下らうとすると、突然叢の中からうおッ！　土人を目がけて飛びかゝつた。不意の事に、土人は、バッタリ地に俯すと、虎は得たりと躍りかゝらうとした。それを見るや、友人田中は、山刀を握る鐵腕に、渾身の力をこめて、斬りつけた、腦天――虎の腦天を目がけて、骨もとほれと斬りつけたが、ハズミに足を滑らして仰向樣にドッと倒れた』

『やられたッ？』

『虎はうおッと吠えて仰向けに倒れてゐる田中目がけて飛びかゝつた。やられた！　と誰でもさう思ひましたが、幸なことにその時崖の上にゐた兒玉と云ふのが、ドンと一發撃つたのです。あたらなかつた。あたらなかつたが、虎はこの突然の銃聲に吃驚したか、血染れの體を飜へして叢の中深く逃げ込んで了つたのです。』

『そりやよかつた！　それから？』

『イヤ、追跡しました。この活劇が近隣に傳はつたので、續々加勢の邦人がやつて來ました。中にも勇敢なのは椎名君、ライフル（銃）を持つて、眞先に谷を渡らうとしたのです。折柄谷は滿潮になつたので、傍の立木を倒して橋にしました。然るに先頭の椎名君が、今にもその橋を渡らうとした途端、突如猛然と躍り出たのは先刻の虎、一聲高く吠えて橋の中央にさしかゝつた椎名君を目がけて飛びかゝつた』――話はいよ〳〵熱して來た。そしてなほつゞいたのは次ぎの如き活劇であつた。



『アッ！』
遉の椎名君も突然の襲撃に射つヒマなく、矢庭に銃身を揮つて打ち向つた。
ボクッ！　異様の音響と共に銃身は虎の胴にメリこんだ。間髪をいれず、虎の爪は、朝日にピカ〳〵光るその爪は、椎名君の顔面に突きとほらんとした。パッと縮む椎名君の體、虎の鋭爪はブツリ、椎名君の脊に突きとほつた。瞬間、
『畜生ッ！』
と一聲叫んだのは傍にゐた檜垣君、恐ろしく斬れる山刀、宙に閃めくや、一撃グッと虎の脳天深く斬り込んだ。パッと鮮血が宙に龍巻いた。
が虎は怯まない。いよ〳〵猛り狂ひつゝ、いよ〳〵凄く吠えながら、依然椎名君一人を目がけて牙を向いた。爪をさした！　椎名君は銃を落した。ムズと虎に組付いた。
見よ、氏の双腕は、鋭爪に刺され、また噛まれ、その胸部も、鋭爪に引つかけられて、ズタ〳〵に破れた服は鮮血にまみれてゐる。
『アッ！』
今虎の前足の一撃に叩きつけられた椎名君は、更に上から顔面目がけて虎の一撃が打ちおろされようとした途端、再び上半



身を飛び起しさま、虎の首に噛じりついた。
うオーッ！
虎はそれを一振り振つた。振られつゝ椎名君は兩腕で、骨も碎けよとばかり、虎の首を絞めつけた。
その必死渾身の力！　さすがの猛虎も苦しかつたか、うーんとばかり、棒立ちになつた。
途端にズルリ、橋から後肢を踏みはづした。ズ、、、、ッー
ダアーーン！　虎と人とは組合つたまんま、下なる溪流――今

滿潮の最中に轉落した。
流れはパッと紅潮した。
そこは左程深くないが、水に入つては虎のニガ手、どうも思ふやうに活動が出來ないが、やはり椎名君を壓へつけてゐる。椎名君は滿身これ傷だが、今は眞に懸命の場合、必死、抵抗をつづけてゐる。

『ソレ、この機だ！ 撃つちまへ！』

一同は虎を目がけて撃たうとしたが、狙ひをつけてゐる間に形勢は逆轉して椎名君が上、とても危くて引金が引けない。たゞワイ〳〵ワイ〳〵騷ぎ立てるばかりである。

流れは最早や血と化した。

と見る、虎は最後の前肢一撃！ 椎名君の體は仰向けざまにけし飛ばされた。同時に、『ドン！』と堪りかねた銃聲一發！ 幸にそれが効いて、驚いた虎は、クルリ向きをかへるとガ、、、、ツ、早くも向ふ岸に走り上つた。――



『して、その椎名君は？ 何うしました？』

『助かりました。水中に落ちた爲めに一命を拾つたのですが、手などは全然利かなくなつて了ひました』

『フーム！ だが、よくやつたねえ！ 實によくやつた！ 加藤淸正は槍を以て虎を突いたと云ふが、椎名君は虎と格鬪した、檜垣君は、また、山刀を揮つて虎の腦天を打ち割つた――

日本人は、やはりえらいね！してその虎は、今でも……？』
　云はせも果てず河野君、
『それです。それで實は今晩御訪ねしたのです。是非貴方の力を借りたいのです。如何でせう？』
　思はず私は、膝を打つた。
『やりますとも！　僕も恨みのある虎です。討ちとれぬとあつては日本人の名折れです。明日――明早朝やりませう』
　私の決意を見て三人は喜んだ。そこで萬端の打合せ――三人は明早朝の虎退治を約して歸つた。

叢の浪

　胸が躍る！　胸が躍る！　翌拂曉床を蹴つて、園員二名を隨へ、小舟を艤して河を下つた。
　汪洋たる水面にはまだ朝霧が搖曳してゐた。南國の拂曉はまた格別の爽快、而かも今、征虎の首途、水搔く櫂の音も、今朝は一段と勇ましい。



舟は滑るやうに下つて、今日の狩場三石護謨園に着いた。そこにはもう十數人の邦人と數名の土人が待つてゐた。
『さ、早速出かけよう』
その聲に一同は立上つた。
『武器は？　諸君みな御持ちですな？』
見ると驚いた。狂へる虎を撃たうと云ふのに、拳銃、仕込

枚、棍棒と云ふ武器、わづかに一挺の散彈銃とウインチスター銃とがそのうちの尤なるものであるとは！　事實、虎は散彈などでへたばるやうな猛獸ではないのだ。

が、今それを云つたとて詮ないこと、勇を鼓して突き進んだ。

『この窪地――この邊へ逃げこみました』

『こゝに大丈夫居るのですな？　昨夜は、篝火を焚いて徹宵警戒したでせうな？』

『イヤ、そのつもりだつたのですが、イザ夜中となると、警戒の者が、いつの間にか一人減り、二人減り、到頭一人もゐなくなつて了つたのださうです』

がそれも無理はなかつた。それにしても、精鋭の武器なく、十數名の小勢で、この際限ない密林中に虎を狩るのは、むしろ無謀に近い擧だが、今はそんなことは云つてゐられない。たゞ斷の一字あるのみである。

一同は、しづかに進んだ。

『ア！　足跡！　虎の足跡があつた！』

突然隊員の一人は叫んだ。ソレッと云ふので、その足跡を檢すると、まさしくまだ二三時間しか經過してゐない。

而かも足跡は、ゴム園を横斷して數町彼方のブルカー村に進んでゐる。

『しめたッ！』

私は直ぐにその足跡を追うて林中に驅け入らうとしたが、待てしばし、椎名君の轍を踏んではならないと、先づ、足跡の入つてゐる森林の地形を偵察した。仔細に偵察した。

それによると、この森林は、一の大森林から、Ｕ字形をなして突出した一小林であつた。

そこでまた突出林の展開してゐる三方面をも偵察すると、虎はその一方から進入したまゝ、他に脱出した形跡がない。足跡がない。

『よし、たしかにこの突出林の中央にゐる。でなければ、大森林に進入したかだ。兎に角もう一度、大森林とこの林との境目――この林の咽喉部を偵察しよう。出るかも知れん。諸君、覺悟してくれ給へ』

と一策を案じて、附近の部落から多數の爆竹と、石油の空罐とを持つて來させ、之を銃を持たないものに持たせた。

『銃を持つてゐるものは、外側にゐて虎の脱出を見張つてくれ給へ』

と、いよ／＼突出林と大森林との境目を横斷すべく決行した。

爆竹の響き、空罐を叩く音――決死の一同は、ぢり／＼と密林中に進入した。

かくて第一回の横斷は無事に行はれた。幸ひにも虎の足跡は大森林には入つてゐない。もう大丈夫、この小林中に潜伏してゐる。

『サ、第二回の横斷だ』

一同は、勇氣百倍して第二回の横斷を敢行しつゝ、木を伐つ

て觸二匝の通路を切り開いた。勿論、いつ虎が飛出して來るか分らないのだ、我々一隊は、銃を構へて、伐木作業隊を掩護してゐるのだ。

やがて大森林と突出林との分離作業も完成した。

かうして漸次に虎を追ひつめ、包圍して、虎の活動する場所をせばめて行くのだ。

今度は突出林の中部截斷に取りかゝつた。

『注意し給へよ、今度こそ飛出すかも知れんから』

作業隊は、ドン／＼木を伐りつゝ進んだ。

その時である。

『ゐるぞ！』

といふ聲、ピタリ作業の手はとまつた。

見ると、二三間の前方、叢が波のやうに動いてゐる。まさしく虎だ！

が、沈着なる作業隊は、何よりも先づこの突出林を横斷する道を切り開けとばかり、見る間にその伐木を完了した。最早虎は、完全に森の突端に追込まれて了つた。

『アッ！　吉井君、虎の顔が！　早く！』

その聲に驅けつけて見れば、虎はもう叢中に姿を消してゐた。

『ヨシ、撃て！　飛びかゝつて來たら僕が戰ふ、うて！』

ダーン！　と一發、一人の銃手は、今ゐたといふその方を狙つてブッぱなした。手答へがない。

『ヨシ、[illegible]』

銃手は裝彈して射擊の姿勢、銃手と銃手の間には山刀、拳銃、仕込杖の連中を配置して前進した。

ザ、、、、ッ！　前方の叢が搖ぐ、さては敵も逃れぬところと、最後の奮戰を試みるのだな――

『撃ち方、はじめ！』

號令一下、ダーン　ダダーン！　轟然たる銃聲はジョホール河畔の寂寞を破つた。

その時だ！　うーッ！　雑草爲めに慄ふうなり聲が耳をついた。

『ソレ！　あの唸り聲を狙へ！』

ダ、ダ、ダ、ダーン！　唸りの地點目がけて一齊射撃！　銃聲ハッとやむ間もなく、突如、うおーッ！　うおーッ！　と云ふ大咆哮、思はず身體がすくむ時、果然、雑草の動き荒々しく、その波は忽ち此方に向つて猛然と迫つて來た。

『うてッ！』

ダン！　ダダーン！

その時ララン草の間にあらはれた爛々たる眼、逆立てる銀髯はピカ／＼と光つた。

虎は今、身を伏せて躍進の機を待つてゐるのだ。危險だ！　こゝで撃つたらその瞬間に飛びかゝつて來る！

『撃ち方やめい！……むやみにうつな。頭を狙へ、頭でなけりやうつな！』



遂に退治された猛虎

射撃はピタリやんだ。と、虎の咆哮もやんだ。恐らく今憤激して飛びかからんとする矢先きに、射撃を中止したので、彼れは憤激躍進の氣勢をそがれたものに違ひない。

『木にのぼれ！　平地では危險だ』

私は一同を樹にのぼらし、自分ものぼつた。然るに何事ぞ、樹にゐる無數の赤蟻は、突如として襲撃し來つた。而かも片手に銃、片手は木の枝に掴まつてゐる身では、この赤蟻を拂ふことも出來ない。見る〳〵、襟頸、手首は赤蟻の刺すに委せるよりほかはなかつた。が、もう夢中である。

ザ、、、ッと動く叢のうちをすかし見れば、そこにはキラキラと光る凄いものがある。牙だ！　さうだ、あの牙を目標に——突嗟に予は、一彈をブッぱなした。手答へ充分……たしかに面部！

虎は一聲高く怒號したと思ふと、ニョッキと立上つた。後肢を立てて半身を叢の上にあらはした。

『この機！』ダッ！　第二彈！　心臓目がけてぶつぱなせば手負の虎も、ウーッ！と云ふ異樣の聲をあげつつ叢中を狂ひまはつた。最早樹上の我等を襲撃する氣力はない。私は樹上の人々に聲をかけた。

『諸君、下りようか？』

『イヤ、まだ〳〵危ない！』

『ア、大丈夫々々後足に重傷を負うてゐる。こゝからよく見える！　もう飛べないから大丈夫だ』

一同は勇を鼓して下りた。下りるより早く、武器を揮つて虎のゐる方向に突進した。何さま……二三間の距離に……見ると、虎は、胸部、面部、後肢に重傷を負うて、苦痛に堪へないらしく、わづかに頭を擡げて氣息奄々と喘いでゐる。

私は、充分に狙ひを定めて最後の一彈、背後から心臓を狙つてうてば、さしもの猛獸も、最後の飛躍を試みるや、ドウと地上に倒れ伏した。

『萬歳！』一同は、われを忘れて歡聲をあげた。この虎、齢ひ約八年の牡、鼻端より尾端まで、實に八尺五寸であつた。

記者曰く——次號には、吉井大尉の象狩を紹介いたします。いよ〳〵壯烈痛快を極めます。是非御期待下さい。

…………さしゑ　尾竹國觀



日露開戰外交極秘錄

某匿名外交家　關外老人

一

霞ケ關は外務省官舍の階上、デニソン氏の居室で、幣原書記官はデニソン氏と話しながら、氏のデスクや書類箱をかき廻はして居る。

幣原書記官とは今の外務大臣幣原男で、デニソン氏は久しい間帝國外務省の顧問をして居た世界的の老國際法學者である。

デニソン氏は日本政府から絶大の信認を受けて居たが、同時に外務省の若い外交官を指導誘掖して、幾多の人物を養成した。

其の中でも幣原書記官を一番に敬愛して滿幅の信用を置き、其の居室にも自由に出入さして調査研究に便し、幣原氏の爲めならば何んな事でも厭はないと云ふのが當時のデニソン氏であつた。氏は數ある外交官の內から、此の幣原氏こそは將來の日本の外交を荷負つて立つ人だと確信し、親身にも等しい情愛と期待とを注いで居たのであつた。

恰度其の日の事である、幣原氏は今までつひぞ見かけた事の無い反古紙をデニソン翁のデスクの抽斗から發見した。摘み出して見ると、日本政府から露國政府に宛てた外交文書の下書と云ふ事が判つた。判るには判つたが、其の書損じは、或は一行書き、或は二行書き、或は多くて三行、四行、五行と云ふもので、

其の數が驚くなかれ四五十枚にも達して居るではないか。流石の幣原書記官も夫れには驚ろいた。同時に帝國の外交史上、又たと得難き貴重の秘錄たる事を直感した。

『ミスター　デニソン！　之を私に下さらぬか、非常に貴重な記念品です』

幣原書記官が云つた。

ところが何うであらうデニソン氏は暫し無言の儘、幣原書記官の顏を見詰めて居たが、無言の儘其の反古紙を手に丸めて無言の儘ストーヴに焚べて了つた。

そして幣原氏が呆氣に取られ、反古紙は半ば燃え盛つた頃、デニソン氏は初めて口を開いた。

『こればかりは、如何に私と貴方の間でも差上げられません。貴方に差上げられない以上、誰人にも差上げられません、否なお見せする事も出來ません。隨つて之を置いておく事が出來ません、否な置いておいたのが私の誤まりです。之れは私個人の秘密ではありません、日本政府の權威の爲め、又小村侯爵の名譽の爲め、私が此の日本の重大時局に關與したと云ふ事實を、永久に滅殺して置かなければなりません。故にあの反古紙は燒いて了ひます』

言ひ了つた時、書類は恰度全部燃え盡して、記念すべきデニソン氏の書損じは、永久に灰と化して了つた。

『では、その謂はれ丈けでも伺つて置きたいのですが！』

幣原書記官は當然から話し出した。

『では簡單にお話して置きませうが、無論貴方にだけです。之れは呉れ〴〵も小村大臣の名譽、日本帝國の權威に關する事ですから、決して私が好んで洩らすものではないのですよ』

『それは無論心得た上で承はつて置きます』

それから語り出したのは此の老學者、否な日本帝國の忠僕であつたデニソン翁苦惱の一幕であつた。



寫眞は我が外交界の恩人デニソン翁を描ける油繪にして外務省の寶物として大切に保存されてゐるもの

二

話は明治三十六年、日露外交談判の時に遡る。露國は滿洲撤兵を約しながら、事實は撤兵どころか、日に増し增兵して、最早や南北滿洲を奄有し、進んで朝鮮國に迫進する形勢である。日本は東洋平和の爲め、極力開戰を避けて、ひたすら露國

の反省を促した。日本は果ては露國が朝鮮の獨立さへ保障すれば、滿洲は露國の自由に任しても仕方があるまいと云ふ位の腹をきめて、極めて讓歩的に露國に折衝し、遂には我が　明治天皇より、露國皇帝に御親電を發せらるゝ迄の誠悃を披瀝した。然るに露國は辭を曖昧にして、日本の提議に應じない。而して極東の危局は刻々に迫つて來た。何んでも露國としては滿洲は勿論、朝鮮迄も奄有するつもりで、日本の武力を頭から呑んでかゝつて居るのである。

其處で日本の國論は囂々として起つた。對露開戰論は上下を風靡した。國民の熱情は其の極に達し、果ては自重派の元老や政府要人をつけ覘ふものさへ現れる始末となつた。

翌三十七年の新春を迎ふるや政府は緊張し、霞ヶ關の廳舍は深更に至るも明晧々たる有樣、全國民は今にも宣戰の大詔渙發あれかしと、肱を張つて翹望した。

けれども時の外務大臣小村男は、極めて愼重に折衝を反覆した。而して外は世界の同情日本に集中し、内は國民の義憤爆發して、容易に強露を打ちひしぐの時機を窺つて居た。そして一夕元老大臣會議で周到綿密なる廟議を盡して來た小村外相は、デニソン顧問を大臣室に招致した。

『露國政府にいよ／＼斯く／＼の通牒を送りたいと思ひます。御面倒でも一つ起草して下さらぬか。少々急ぎますので……』

と、對露通牒の要旨を爾か／＼と反覆した。當時の外務省には珍田次官、山座政務局長、石井通商局長、本多秘書官と云ふやうな俊髦揃ひで、其の上大臣が小村男と來てゐるから、外交の機略は敢て外人顧問を要しないが、其の通牒文案の起草は之をデニソン翁に囑して居たのである。そして何んな時でも人に用を命じた場合、態々『急ぎませんよ…』と附け足すのが口癖のやうな小村外相が『少々急ぎますので…』と附け加へたのを見ると、日露關係が如何に切迫したかを示すものであつた。

デニソン顧問は通牒の要領をノートに書き留めた、そして直ぐ役所の裏の官舍に歸へり、自室に閉ぢ籠つて此の重大なる對露通牒文の起草にペンを走らした。所が何うであらう、此の世界的の學者、此の外交文書の典型的執筆者で、然かも今迄の日露折衝の曲折も悉く呑み込んで居るデニソン翁、而して新通牒の要旨は、明瞭に小村大臣の口から聞き、又念の爲め手帳にノートしてるデニソン翁は、同夜に限つて迚も文書が纏らない。一行書き、二行書いては又書き直し、三行書き、四行書いては又書き改ため、斯くする事四五十枚、苦吟懊惱して終に東天の白むを見たデニソン翁は、ペンを投じて長大息した。而して其の何の故たるかを靜慮せざるを得なかつた。腕を拱ねいで沈思瞑想する内、前夜來の疲れで喩はうと／＼としたが頭腦は愈々冴え、氣は益々焦つて來る。すると頭腦の中を兵とばかり銀箭の貫通したやうに感じてハタと膝を打つた。

『さうだ、其處だ、其處を確めなくては此の通牒文は書けんのだ』

と感じて獨り微笑を漏らした。そして一夜の努力が急所に觸

れない全くの徒勞であつた事を發見したのであつた。時は眞冬の曉天、執筆に氣を奪られて、ストーヴの火は消えかゝつて居る。翁は之を搔き起しながら日の出を待つた。

三

すると大臣官舍からの使ひである、翁は自分の方で大臣に逢はねばならないのだが、餘りに時刻が早いので躊躇して居たのである。其處へ使ひが來たのだから早速飛んで行くと、小村外相はチヤンと仕度をしてデニソン顧問の通牒文案を待つて居るのである。

『どうです、出來ましたか？』

『殘念乍ら昨夜はとても纏りませんでした。今迄嘗て這んな事は無かつたのですが……』

顧問は前夜來の顚末を仔細に告白して、『一體日本は露西亞と戰爭をする氣ですか、戰爭をしない氣ですか。其の急所が判らぬので、實は御高囑の通牒文が出來なかつたのです』



デニソン氏は、日本の忠實なる顧問ではあるが、外國人である。當時の日本として、強露を相手にさう容易に開戰が出來ると思へなかつたのも無理は無い。

『それは先方（露國）の出やう次第です。』

小村外相の答へは簡單である。デニソン翁は、

『然らば出やうに依つては戰爭をすると云ふのが政府の御決心ですか？』

小村外相は、『勿論！』と突拍子も無い大きい聲で之に應じた。デニソン氏は膝を打つて、

『それで判りました。それさへ判れば通牒文は立ちどころに出來ます。直ぐ歸つて書いて持參します。と云ふのは、若しも日本が強露と戰爭を避ける氣ならば、極く荒つぽく、幾らか恫喝的の語句を使つて、先方を威す氣勢を文書の上に現はさねばなりません。

若し又日本が露國を相手にして開戰を辭せぬと云ふ覺悟が極つて居るならば、下手に出て婉曲な語句を使ひ、然かも全世界から、日本があの態度なのに戰爭になつたのだから、對手の方

が宜しくないのだと、思はるゝやうな用意の下に文章を進めなければならぬ。昨夜一晩つい文章を成さなかつたのは、此の日本政府の決心が、自分の腹に呑み込めて居なかつたからです』と告白して大臣室を退出したデニソン氏は、果して僅かの間に對露通牒文を起草して之を小村大臣に提出したのである。

而して之れが我が國の最後通牒となり、果して日露の大戰役となり、日本は終に大捷を博して今日の興隆を致したのであるが、其の最後通牒が又典型的の外交文書で、當時の露國政府當局は、實は其の婉曲愼重を極めた名文の裏に、日本が彼が如き大決意を通告したものとは、讀破し切れなかつたと云ふ話で、流石に老巧練達なるデニソン翁の傑作と云ふべきである。

四

話は少々横道に入つたが、後年幣原書記官が發見し、デニソン氏が、ストーヴに焚いたと云ふのが即ち前記一夜中の苦吟の草稿其ものであつたのである。小村大臣の腹を聞いて、立ちどころに起草した最後通牒の草案は、小村外相に手交したが、夜前の未定稿は、反古紙としてデスクの抽斗に殘存したのである。そして信義を重んじたデニソン氏は、たとへ日本政府の秘密を食んだ顧問官とは云へ、一外國人たる自分が、日本帝國の此重大國事に關與したと云ふ事は、日本政府の權威の爲め口にすべき事ではない、又當時の草案を、たとへ片鱗と雖も之を殘存せしむるは、小村大臣に忠なる所以でないとして、幣原書記官の面前で之を燒棄てたのであつた。



當時の小村壽太郎男



幣原喜重郎男

幣原書記官は、無論惜しかつた、然し其の貴重な記念品の惜しかつたにも増して、燦然たる光を感じたのはデニソン翁の高朗たる人格と、其の日本國に對する尊信の念の厚い事に對してであつた。

それはかりでない、反古紙を中心とする過去の物語に於て、幣原書記官は外交哲學の最高峯を發見したのである。それは『決心が薄弱ならば威迫的の文書を書け、若しも決心が確乎不動のものであるならば、飽く迄下手に出て婉曲典雅な行文をやれ』との一節である。

固より之れは外交學の初歩、外交官入門の第一頁に在る心得には相違無い。けれども練達堪能の老學者デニソン氏が、日露國交の最大危局に直面し、然かも最も信頼されたる小村大臣

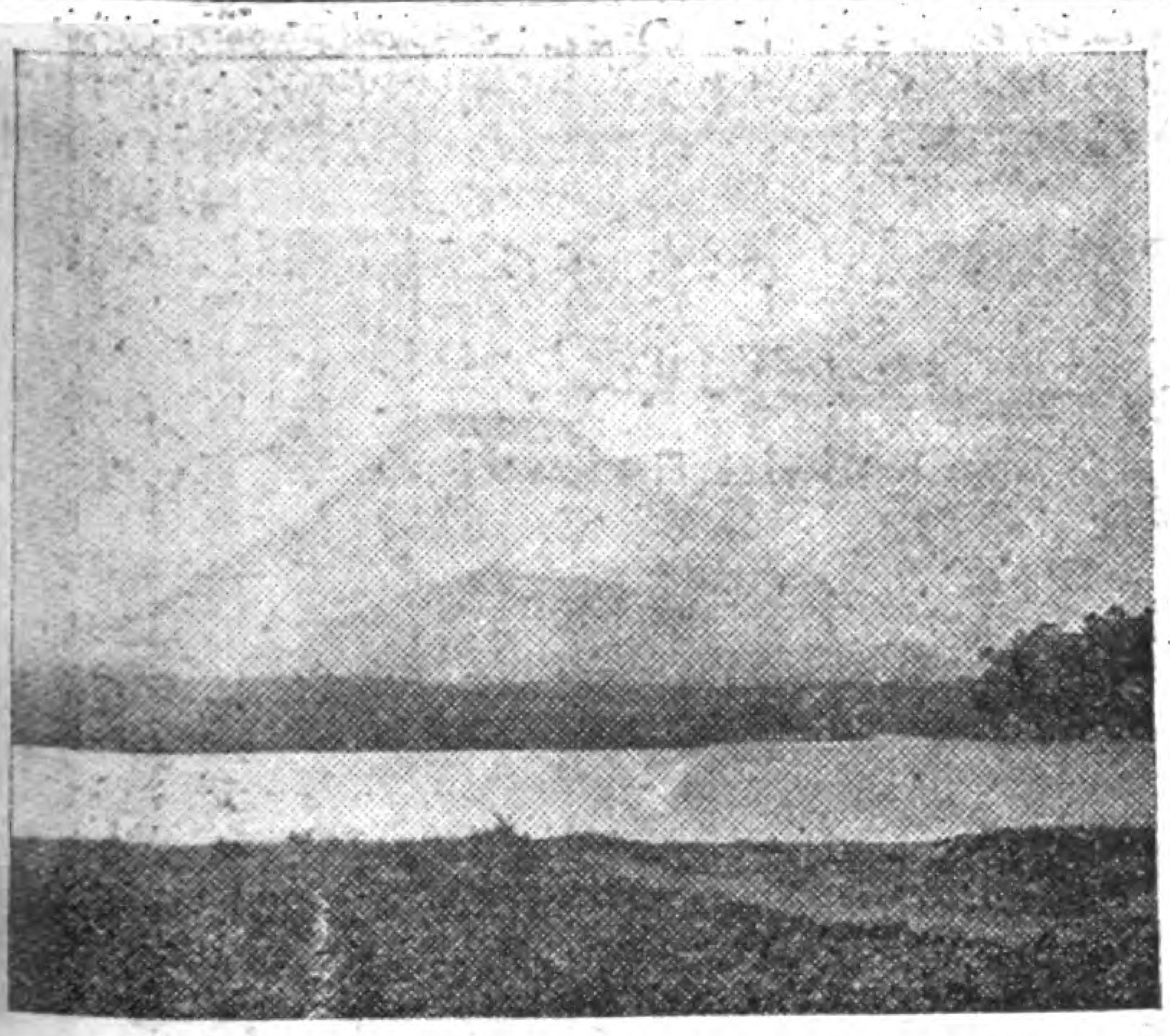
の委囑を受けながら、開戰か否かの急所が呑み込めぬ爲めに、苦吟懊惱一夜に及んで終に一文を成さなかつたと云ふ體驗談を聞かされた幣原氏としては、特殊の肝銘を禁じ得なかつたのは當然であらう。

而して其の幣原男は今や二回目の外務大臣として帝國外交を双肩に擔つて居る。地下のデニソン翁は嘸自家の認識の誤らなかつたのに滿足を感じて居るであらうが、それにしても幣原男の外交が、時に一部の不滿あるにも拘らず、慥かり足を踏み附けて、極めて穩和健實に其の歩みを進めて行くのは、主として右デニソン翁の指導、就中翁の『反古紙』物語に感銘し、啓發された賚であらうと信ぜられる。‥

さしゑ　吉郡二郎‥

謹告

本特輯は各方面の熱烈なる御援助により、多數の特種記事が出來ました。此外、緒方博士の『人工で壽命を延ばす話』、鳥井正功氏の『天津條約秘話』、成田篤氏の『東郷元帥秘話』、丸山畫伯の『ジャイパー物語』、鈴木經勳氏の『輪主寺の宮上野落ち』、マッケンジー氏の『ライオンを釣る』等々……素晴しく面白い話は、頁數の都合止むなく之を保留、漸を追ふて掲載の豫定です。玆に寄稿諸先生の御厚情を深謝し、併せて讀者諸君の御期待を乞ふ次第です。



第一圖

暗夜に千里の先が見える

槇尾赤霧

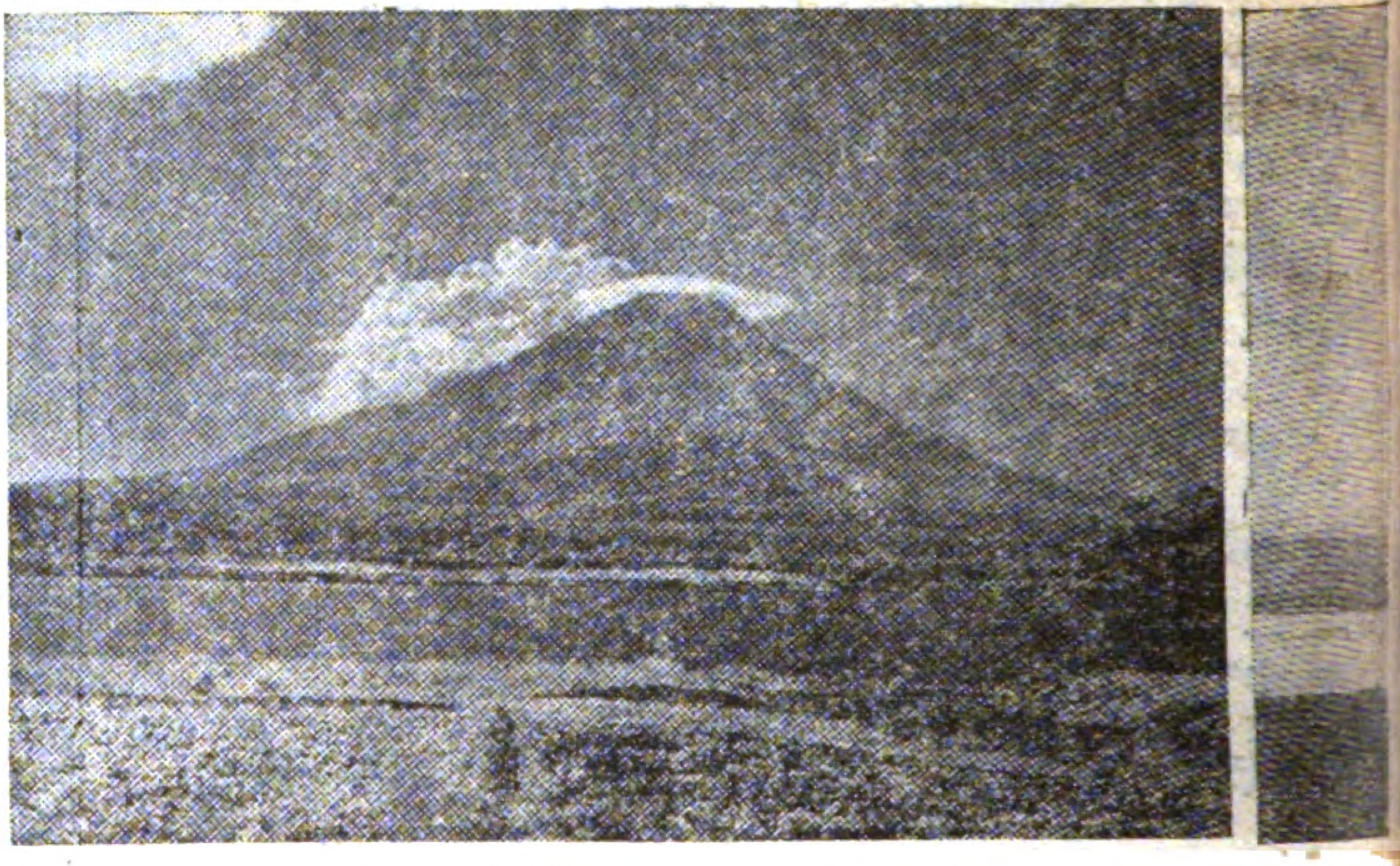
どんな暗夜にも、はつきりと遠方の物の見える驚くべき仕掛けが發明されました。

而も見られてゐる先方は、これにちつとも氣がつかぬといふ重寶此上ない機械で、軍事上などには持つて來いの魔法です。

一體どうしてそんな不思議なことが出來るのかといふと、之は、赤外光線といふ特別の光線を利用するのです。太陽の光線中に、赤、橙、黄、綠、青、藍、菫の七色あることは誰方も御存じですが、尚その外に人の目に感じない光があるのです。

赤外光線もその一つで部ですが、これはその振幅が廣いため人の目には感じないのです。それは恰も、あのラヂオの電波が人に感じないと同じやうな工合です。

しかし、ラヂオの電波は、あのラヂオの機械で捕へることが出來るやうに、この赤外光線も、特別の藥を用ひ



第二圖

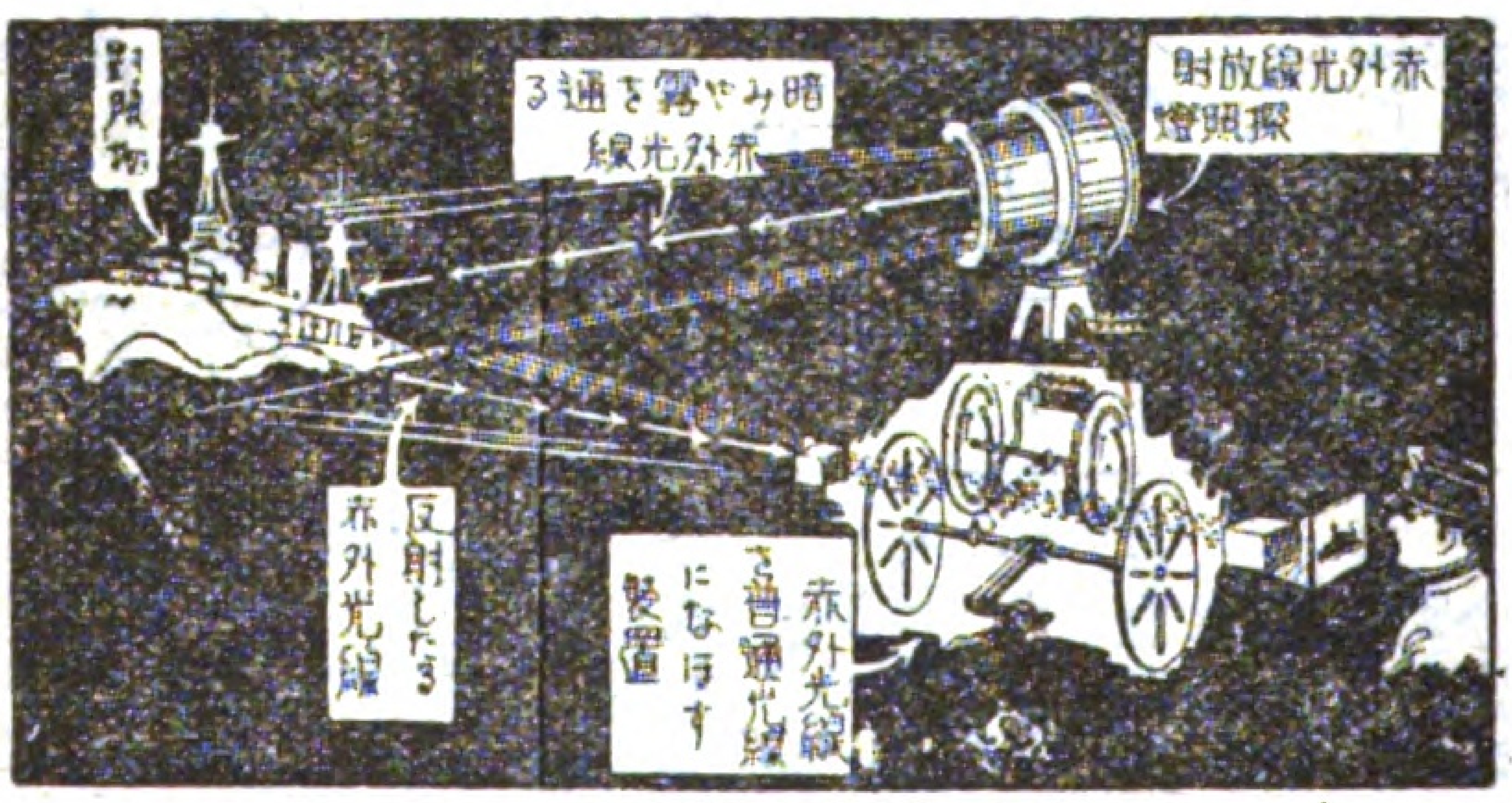
ると之を寫眞に撮すことが出來ます。この寫眞を赤外光線寫眞といひます。

面白いことには、この赤外光線は、人の目には見えないが、普通光線ならば、雨や霧にさへぎられる時でも、この光線だけは不思議にこれを突き通してゆく力を持つてゐるのです。ですから、この赤外光線寫眞を用ふる時は、雨の日や濃霧の日に、遠くの山が見えない時でも、之をハッキリと撮すことが出來るのです。

上に掲げた二枚の寫眞を御覽下さい。之は赤外寫眞の權威者、鎌田東京工藝大學教授が撮されたものですが(1)は霧のために覆はれた富士山を普通の寫眞で撮つたもの、(2)は同じ時に赤外光線寫眞で撮つたものです。實によく山が撮つてゐるではありませんか。

ところが、今度は更に一進歩をして、此方から探照燈で赤外光線を放射して目的物を照らし、目的物から反射して來た光線を目に見える普通の光線にかへる仕組みが發明されたのです。

ですから、この機械を用ふると、どんな暗夜にでも、どんな濃霧の日でも、遠方の景物を、恰も活動寫眞でも見るやうにハッキリ見ることが出來るのです。



しかもこの光線は、普通の探照燈より二三百倍もの遠目がきゝますから、軍事上には勿論、航海などにも、とても重寶なものです。

この仕掛けをノクトビゾアといふ。發明者は、電話寫眞を發明したベアード氏です。

ノクトビゾアまあ猫のやうに暗夜に物を見る、闇の眼とでもいふべきものでせう。



花見の果し合ひ

北辰一刀流範士　門奈正

私がまだ、十七八歳の頃である。友人に金子某と云ふのがあつた。丈も高く、技も旨い方であつた。

陽春四月の或る日である。水戸の郊外に櫻山と云ふ櫻の名所があるが、其處にへ金子を初め友人三名と連立つて、花見に行つた。

何しろ滿山の櫻、その賑ひは非常なもので、花霞の中で重詰を開くもの、醉ひに乘じて踊るもの、その間をぶら〳〵と歩いてゐると、向ふからえらく醉酊した、一人の下郎が、一歩は高く一歩は低く、千鳥足の上機嫌で、こちらへやつて來た。下郎の姿ではあるが、年の頃三十歳位、色黑く筋骨逞しい堂々たる男であつた。

それが突然、アッと云ふ間に金子にドンとぶつかつた。金子は不意を食つて、よろよろとよろけたが、それでも二三歩下つて、きつと身構へた。すると下郎は大聲で、

『氣を附けろ！』

と呶鳴つた。自分でぶつかつて置き乍ら、呶鳴り立てたので、金子もムッとしたらしく、だまつてゐない、二三押問答をしてゐたが、何しろ此方は子供上り、下郎は侮つたと見え、

『この木ッ葉武士め！　その刀が拔けるなら拔いて見ろ！』

と、罵つたので、金子は刀の手前、もう尻込みする譯に行かず、さッと刀を拔いた。と同時に下郎も、

『なに！』

云ふか、と思ふと一刀をギラリと拔きはなつた。

今迄の歡樂に醉ひしれてゐた人々は、一時に醉ひもさめ果てゝ逃げる、わめく、のゝしる、と云つた有樣で、まア非常な騷ぎである。

私共は若し金子がやられたら、すぐ仇をとるつもりで、各ゝ刀の柄に手を懸けてきツと見詰めてゐた。

金子と下郎とは刀の切先と切先との間を七尺位離して、じつと睨めつけてゐ

る。下郎はいつか酒の醉もさめ果て、眞青になつて、たゞ掛け聲ばかり、

『エイッ！　エイッ！』と掛けてゐるが、少しも近寄らうとしない。金子とても同様で、刀の柄をぐつと握りしめ、對手を睨めつけて、ハッ／＼と息をしてゐる。

　私達もいつか息づまる樣な感じになり、ウンと握りしめてゐた手の拳から膏汗が落る程であつた。

　五分も睨み合つてゐたかと思ふ頃、兩方から極く小刻みにじり／＼と歩み寄つた。



門奈　正氏（七十六歳）

　刀の切先が今少しで觸れようとした時、ほんの二三合、それも刀のほんの一寸先で、チャチャッ！　と打ち合つて、さつと兩方に離れた。と同時に、下郎の左の拳から、二筋三筋たら／＼と鮮血が流れた。

『やられたナ』と感じたが、下郎の眼は一層血走つて、決死の色が物凄く面上に浮んだ。

　反對に、金子は度胸が落ちついた。今迄ふら／＼してゐた足が急にぐつと地についた。

　今度は二三度の掛聲の後で兩方じりじりと詰め寄つた。そしてどちらが先とも解らない程の早さで、業も大きく、二三合打ち合つたなと思つた瞬間、下郎は金子の爲めに左の首の稍ゝ下の處から右の乳へ掛けて斜に斬り下げられてゐた。それが實に『アッ！』と云ふ間のことである。下郎は刀を振り上げた儘、どつと地上に倒れてしまつた。

　後で解つたのだが、この下郎と云ふのは極めて、身分の輕い扶持米取りであつたが、相當力量があつたさうで、若輩の金子が之に勝つたのは、只、實に、最初の小さい一太刀に先をとつたが爲であつたと思はれる。下郎の拳にサッと流れた二筋の血が、瞬間に二人の態度を急變したのであつた。

　實のところ、金子も、その時劍を餘り固く握り締めてゐたので、斬合の後で刀の柄から手が離れなかつた位であつた。されぱこそ力が上半身に集中して、足許がふらついたのだつた。若し對手が少し強ければ、きつとやられてゐたに相違ない。

　握る手は極自然に、自由でなくてはならぬ。それ位の餘裕がないと、機に臨み變に應じて自由な働が出來ない。

　私自身、日清戰爭に出征、二十幾人を斬つたこともあるが、この若い時に見た勝負が修業の上に非常に役に立つたやうに思つてゐる。

（松山知義記）

三百人の中に躍入る二人

日置流弓術教士　佐倉強哉

京洛から江戸へ、そして奥州へ——維新の戰火は目まぐるしく、日毎にうつり燃えてゐた。あたかも明治元年七月二十四日の事である。



佐倉強哉氏（八十一歲）
氏が手にせるは佐倉使用したる關孫六

私はその時、まだ十九の少年だつた。しかし、祖父や父と一緒に戰隊へ加はつてゐた。私のゐた隊は、二本松の六番隊といつて、ちやうど石城沖から上陸した官軍を喰ひ止めるために、小野新町（今の磐越東線）に屯し、戰線の最前線にあつた。

二十三日の晩官軍が、大擧して石城に上陸した、といふあはたゞしい情報が小野新町の屯所に來た。敵は果してどれ位の人數か、如何程の勢力を備へて攻め寄せるのか、第一次の偵察にえらび出されたのが、私と山岡仁右衛門といふ人と二人だつた。山岡はその時もう四十を二つか三つ越えてゐた。

小野新町の屯所から約三里ばかり離れた三坂といふ所まで來た頃、やうやく夜が明けはじめてゐた。すると、うすれ行く霧の中から向ひの山頂にすつすつと馳せ交ふ人影が見えた。

『ゐたな！』私は思はず叫んだ。と同時に向ふからも此方が見えたと見え、ド、ド、、。ドツドツ！　と銃砲を打出すと共に、雪崩のやうに山を下つて來た。二人は佇んでゐた丘を、一散に駈け降りると畑のわきを流れてゐる小堀の中へ這入りこんだ。どうしてあんなことをしたか今から考へると可笑しくて堪らぬが、とにかく山岡と私は、堀の中へはいつて、刀の刃だけを頭上に二本ぬつと出したまゝいつまでもしやがんでゐた。

その中に敵の足音はドシ〳〵近づいてもう十間位のところまでやつて來たらしい。

『もう、駄目だ、逃れる路はない』私と山岡は觀念した。そしてどうにでもなれ——と捨身な氣持で敵の押しよせてくるのを待つてゐた。不思議に私共の氣持は落ついてゐた。ところが、どうしたのか、そこまで來ると敵は急に足をとめて此方を見てゐる。

堀の中からによつと二本の劍が出てゐるので、何でも大軍でも潜んでゐるので

はあるまいかとおぢけついてゐるのか、何かぐづ／＼いつてゐる。

が逡巡しながらも、敵は次第に私達との間隔をせばめて來た。いよ／＼最後となると、我々には絶體絶命の氣力が迸り上つて來た。そしてどちらから誘ふともなく、

『わつ！』と叫んで無我無中に堀の中か



ら躍り出した。

敵は、われ／＼が——たつた二人の者が、おそらく二三百人もの大軍の中へ飛び込んで行かうとは豫期しなかつたであらう、跡から大勢の者が亦飛出して來るとでも思つたのか、たじ／＼とたじろぎを見せた。

『寄つて見ろ、なで斬りだぞ！』

二人は遠卷きにする敵に殺入の構へをしながら敵の眞中に突き進んだ。敵の眞中が急に開いて八間ばかり血路が出來二人は却つて敵の背後へ出てしまつた。

出てしまふと二人は一散に走り出した。どかん／＼銃聲が追つかけて來た。私ははいてゐた義經袴と、着物の袖口と二ケ所彈丸につらぬかれたが、幸か不幸か別條なく敵地を逃げ終せたのであつた。

小野新町の戰爭は、遂に奥羽同盟軍の大敗となり、已むなく二本松の本陣へ引き上げ更に石城口に轉戰七月二十九日の大決戰には、及ばずながら、血刀を揮つて奮闘したが顧みて思ふのは、捨身の力、命がけの覺悟の下から湧き上つてくる不思議な落ちつきである。

私は今日八十一歳になるが、其後何事か起つた時は、いつもこの時の氣構へを思ひ浮べてゐる。

（永澤茂美記）

瀬田の橋畔浪士を撃つ

鏡心明智流範士　秋山多吉郎

私は江戸三道場の一つ桃井春藏先生の道場で劍を學んだが、二十二歳の時、大阪へもどり父と共に、道場を開いた。

その頃、『石割』といふ強賊が横行した。數人群を成し、石を以て門を打ち壊し、堂々と押入ると云ふ、大膽不敵な奴

だつた。今夜も現はれた、昨夜も襲はれた、被害は頻々として傳はるが、賊は更に捕縛されない。


秋山多吉郎氏（八十六歳）

ドン、〳〵、〳〵。

或夜、私の道場の門を碎れるやうに叩くものがある。

『すは、石割か』私は、蹶起した。耳を欹てると、さうではなかつた。

『先生、石割がたつた今、私共の家へ參りました、どうぞ御助け願ひたうムいます』報せに來たのだつた。

『ようし、待つとれ』

私は引きかへして、一刀を腰にぼつこみ、六尺棒を持つて、注進に來た男の跡につゞいた。賊は已に門を破つて、邸内に入つたらしいので、私は、戸外で彼等を待ち伏せした。相手は多勢此方は一人、屋内に躍りこむのは不得策だからである。

間もなく、二人の賊が、財物を擔つて、出て來たので、してやつたりと、いきなり其奴の向脛をイヤといふ程かツ拂つた。

『きやツ』

彼等は、バッタリとなる。屋内に殘つてゐた賊は、此の物音をきいて、とつかは身を躍らし、私に向つて斬りこんで來た。私は片ツ端から、何は構はず、六尺棒で脛を薙倒したのである。

ポキン！　中途で、棒は眞ン中から折れた。で、やむなく、一刀を拔いて、最後の一人の片腕を斬落した。結局、二人は逃げて了つたが、四人だけは私の手で捕縛した。

そんな事があつて、その翌年の事だ。近江の瀬田で、浪士が、私に向つてかかつて來た。初めは、私をつかまへて、酒手をゆすらうとでも思つたらしいが、此方も血氣旺んな年頃である。先方が拔いたのを好いことにして、直ちに此方も鞘をはらつて、いざ〳〵と立向つた。見うけるところ、相手は相當使へる腕前であつた。

私は、大上段にふりかぶつて、『えゝい』眞向から打下すと見せかけ、



旅行珍談

畫家 丸山晩霞

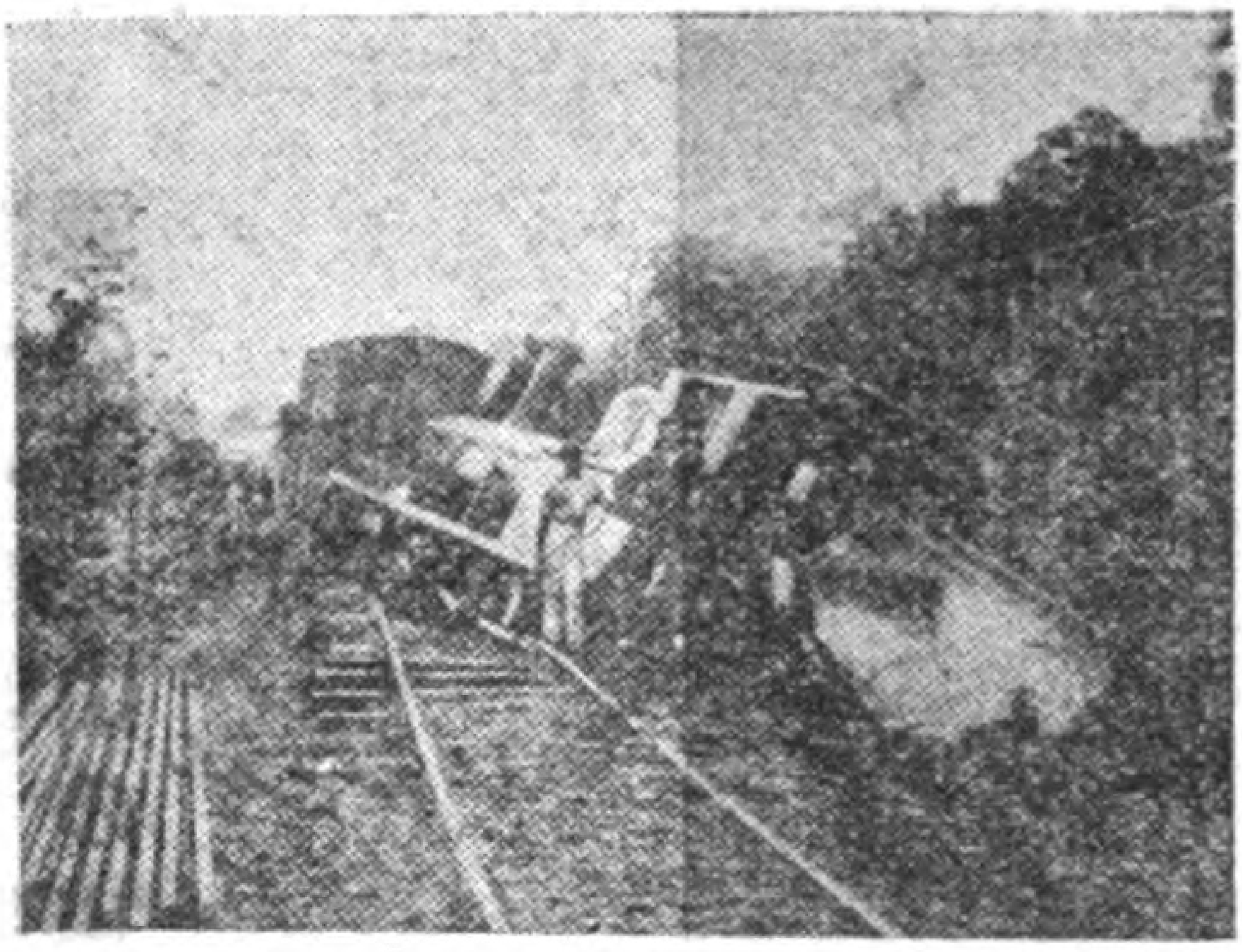
◇沙漠で魚を掘る

私が紀行脚をしてゐる頃、印度のアーメダバット市に滞在してゐたことがある。

この市の東北背面は、小さい沙漠になつてゐて、一木一草を見ず、風が吹くと沙煙りが渦巻く物凄いところである。

すると或日、宿の番頭がそこへ魚を掘りに行かうといふ。變なことをいふものだと思ひながらついて行くと、番頭は沙漠のあちこちを物色してゐたが、やがて見當がついたと見えて掘り初めた。二尺位は乾いた土であつたが、四五尺も掘ると濕つた土になり、一尺あまりもある鯉に似た魚が現はれて來た。

一體この地帶は、その時こそ沙漠になつてゐたが、雨期になると忽ち水が溜つて、湖水となるので、こゝに棲んでゐる魚は旱魃期には土地に深くもぐり込み、雨期になると、泥の中から出て泳ぎ廻り繁殖もするのである。



◇現世の火の車

ヒマラヤ登山口のシリグリ驛から、ダーヂリン・ヒマラヤ鐵道に乗りかへると、テライ地といつて、野象、猛虎、毒蛇の群れ棲む大森林に入るが、日が暮れると、列車は、機關車といはず客車といはず、ズラリと松明を焚く。まるで火の車が走るやうなものだ。

どうしてそんなことをするかといふと、汽車の出來始めには、よく象が線路で遊んでゐて轢き殺された。ある時などは、仲間の慘死を怒つた象群が一齊に列車に襲ひかゝつて、列車を谷底に突き落したといふ大慘事もあつた。それ以後、野獸の最も恐るゝ松明を焚くことになつたのである。（寫眞は野象と衝突して脱線した列車）

パッと右手を離し、片手なぐりに先方の脚を拂つて、何の手間暇もなく仕止めて了つた。兩手を用ふるよりは、切先が確かに一尺は延びるので、先方は體を躱す餘地がなくなつたのだ。

つまり前の六尺棒を刀で行つたわけである。他人は何う思ふかしらぬが、其後私の經驗によると、眞劍勝負の場合は、劍よりも棒の方が有利のやうに思はれる。

無論、一概にはいへぬ、働く場所にもよるが、細身の刀では、ともすると折れたり曲つたりして、役に立ゝなくなる。さればといつて、强刀を用ふれば、腕がつかれて、自在の働きが出來なくなる。

それよりも、寧ろ少し頑丈につくられた四五尺位の棒があれば、素人でも泥棒の一人や二人は打据ゑることが出來る。

但し突いたり振りまはしたりしては却つて不覺をとるので、何は構はず、脚を拂ふに限る。これで一ツ、まともに引ぱたかれたら最後、どんな奴でもぐたつとなつて引くりかへる。その隙に飛びこんで、兇器を奪ふといふことも出來るので、私は、棒術の發達を望んで居る。

（筑波四郎記）

雪の富士山の頂上で
極寒一月を暮す

中央氣象臺技師　佐藤順一



雪中の佐藤順一氏

私は、最近五六年間富士山の氣象觀測に關係して居る。富士は天下の秀峰、我が國民の誇りとする名山であるのみでなく、海拔四千米に近い其の山頂は、此の上もない天然の觀測臺でもある。

然るに、只今の處觀測の實行は只夏期の七、八、九月の三ヶ月に制限されて居る。で、何だか私の使命が殘されてゐる樣にも思はれ、遂に思ひ立つて、雪中一ヶ月の觀測を決行することにしたのであつた。

昨年末十二月三十日午後二時御殿場から登山しかけたが、嘗て無い稀な軟雪で、身體が埋り込みとても歩けない。遺憾ながら二合五勺から引返した。越えて一月三日、天氣が定まつたらしいので、再び出發することにした。案内として強力に一人從いて來て貰ふことにしたが、彼は食料等の準備に尚ほ時間を要すると云ふので、途中で一緒になることにして、一人雪を踏んで出掛けた。雪は降り積つてゐて、人の足跡らしいものは勿論ない。

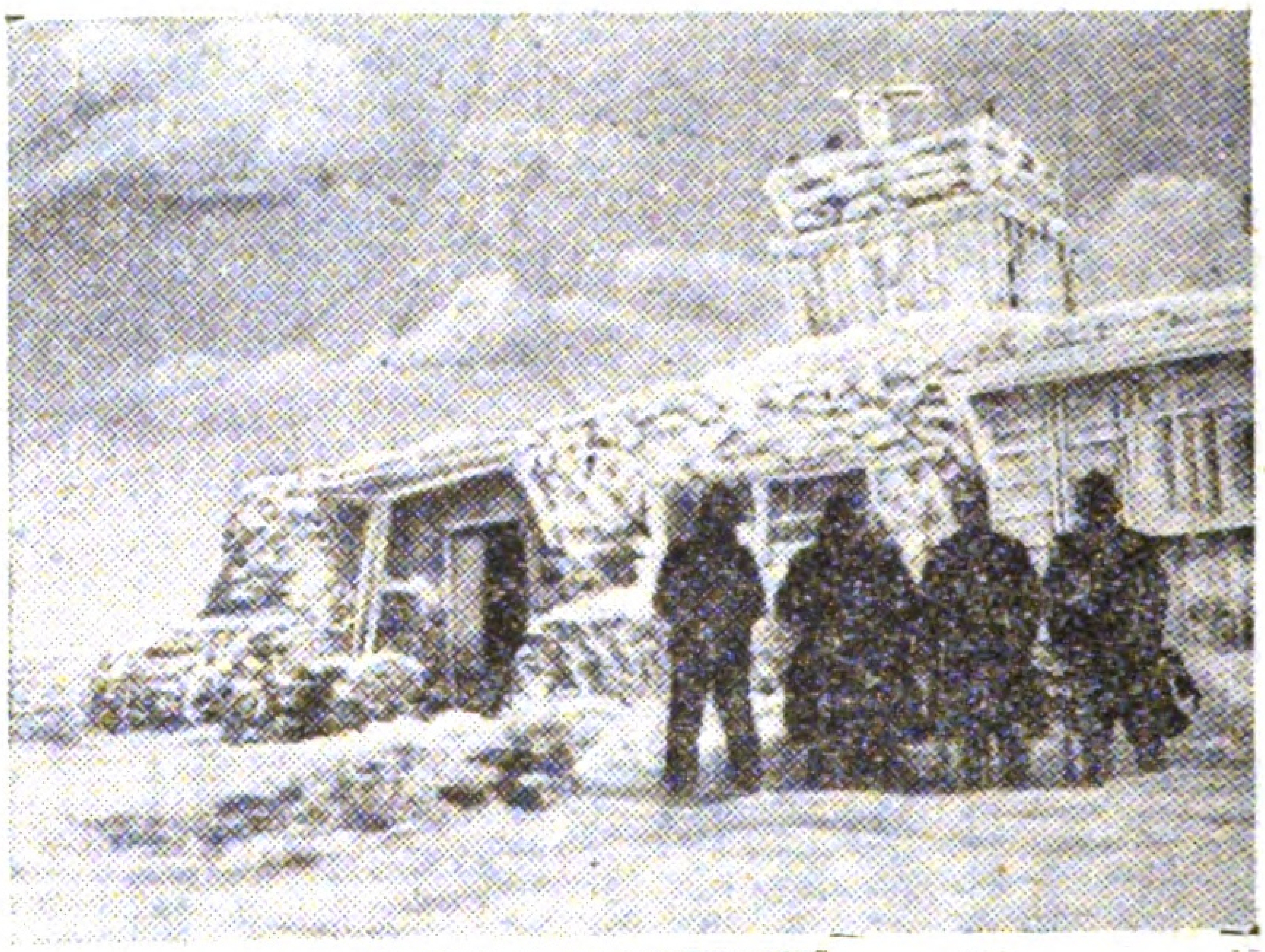
一里杉、五本松、馬返しと、皆一寸づつ休んだ丈で強行した。日が暮れて、全山シーンと靜まつてゐる中に、時々雪崩らしい異樣の響きがする。懐中電燈を照すと、野獸の足跡などがある。流石にゾツとせざるを得ない。雪は深く一足一足股の邊りまでも埋り込みなか／＼捗らない。太郎坊に着いたのは明けて四日の七時であつた。二合二勺の室で強力が荷物を擔いで追ついて來た。その邊から風が強く、ウツカリすると吹き飛ばされさうだ。兎も角風の息を窺ひ／＼進んで。六日の朝、漸く八合目に到達。これからいよいよ坂も急、それに雪が氷つてゐるので、辷つて、とても危い所だが、先づ／＼無事に山頂の觀測所に達することが出來た。

觀測所は石で取り圍んだ、木造の小屋、夏ならば雨の漏つて仕方の無いあばら家であるが、冬は氷で鍍金されたやうになり、風の入る隙間もなく却つて工合がよい。

事務室には二尺四方位の爐を切り、木炭を焚いて其の上に毛布一枚を被ぶせた。これで不完全ながら採暖は出來たが、隣りの寢室は全くの火氣無し、氷點下十度前後、天井も四側も氷の花が一杯に附いてゐる、寢具と言つては敷布團、掛布團、毛布各二枚きり、吸呼のかゝる襟元には氷を結ぶ有様であつたが、これでも眠れば温かい夢が結ばれた。平地にあつて、炬燵や湯タンポなどを抱きこんで尚慄へてゐる人の氣が知れない。

困るのは御飯だ、第一に水がない、雪をとかして水を作る、なかく\の手數だ。それに御承知の通り山頂は空氣が薄いので御飯が早く噴く、蓋の上に石をのせたり、蓋の下に布をかぶせたりいろいろやつたが結局駄目、毎日々々半煮の飯で我慢しなければならなかつた。

お菜には鑵詰や乾物を持つて行つた。



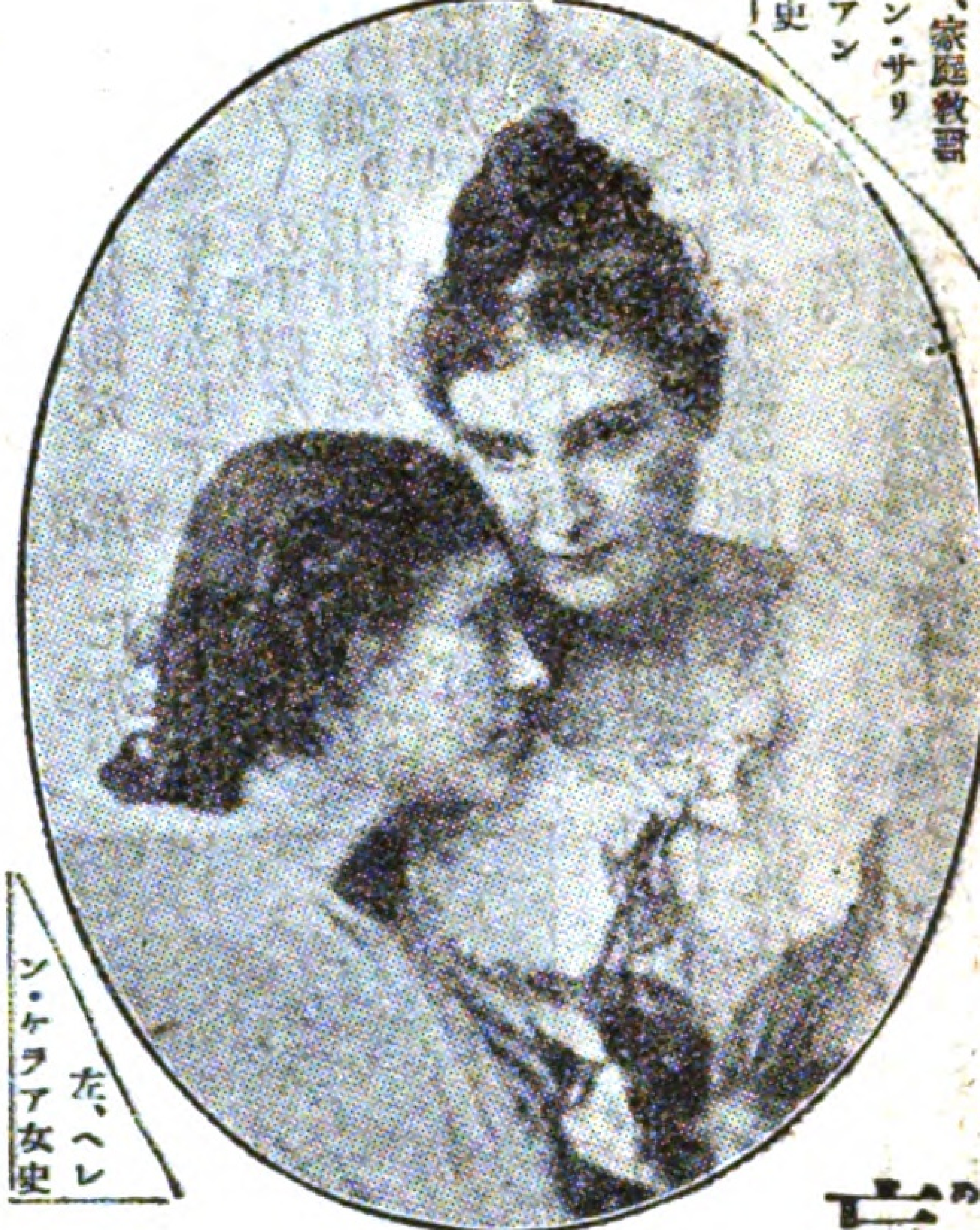
頂上の觀測所（向つて右端佐藤氏）

鑵詰生活を長く續けてゐると、脚氣病や壞血病を起し易い、強力が荷物の都合で漸く四本程持つて來た葱を、二つ切りに十二個として、三日に一個づつ藥味の様に使用した。それに小さな蜜柑五ツ、それも一週間に一つの豫定で皮までも食べて、ヴイタミンBの缺乏を補つた。

水を作るのが容易でないので、顏を洗ふことも出來ない。朝は只瀬戸引の湯呑一杯で、歯を磨き、口をすゝぐと言ふ仕末。況や入浴などは以ての外、平素は一日も入浴しないと身體がかゆくなる。それを一ヶ月も洗はないのだからやり切れない。

山頂の雪は淺い、氷つた雪が二尺位である、尤もしばしばその上に粉雪が降りつむが、風が荒れると皆吹き飛ばして了ふのである。

こんな風で、山頂の滯上は、登山する時程危險は伴はないが、日々氷點下二十度前後の冱寒と戰ひ、半煮の飯で、強力と差向ひきりの孤獨の生活を續ける――口では何でもないが、その淋しい生活の連續が如何に深刻であるかは到底書き盡せない。が、又澄み渡る空に燦然たる星を眺める夜や、我が本土で一番高い白妙の絶頂に立つて、紅に染まる日輪の御來迎を眺める時などは、下界の人達よ！と呼びかけたいやうな何とも言へない崇高な氣持が湧き上つて來た。さうした時、私は昔の高僧が、一人山中に籠つて、缺乏と困苦の中に、心を澄まし、清い強い人格を練つて行つた、あの尊い修養を思はずには居れなかつた。――終――



右、家庭教師アン・サリヴァン女史

左、ヘレン・ケラア女史

盲目でつんぼで博士となつた婦人

――人類の福音、ヘレン・ケラア女史の半生物語――

神代種亮

○恵まれぬ運命

『ほんとにお氣の毒なお孃さまだ』

お人形のやうに美しい、可愛い、小さなヘレン・ケラアを見た時に、誰でもさう云はずには居れなかつた。

お人形のやうに美しい、可愛い少女――それが哀れにも、兩眼とも盲目で、兩耳ともつんぼなのである。

父のアーサー・ケラアは南北戰爭の際、南軍の旅團長として勇名を轟かした名將、母のルーシーも同じ南軍で鬼將軍と呼ばれた司令官ロバート・リーの再從妹であつた。

二人の結婚は名門と名門の結合で、何一つ不足のあらう筈もなく、幸福と愛にみちた家庭であつた。況や一八八〇年（明治十三年）六月廿七日このお人形のやうなヘレンが生れてからは、さながら此世のパラダイス、これ以上幸福な家庭は、又と此世にあるまいと思はるゝ位であつた。

慘酷なるものよ、汝の名は運命なり！

生れてから十九ケ月目、ヘレンは突然死ぬるばかりの大患に襲はれた。手當がよかつた爲に、兎に角一命丈はとり留めたものゝ、可愛想にも彼女は、一朝にして光の世界から闇の底へ、聲の世界から沈默の谷へ突き落されたのであつた。ヘレンは、盲目となり、聾となつたのである。

かうして、この不幸な少女は父の顔も母の聲も、何も分らずに大きくなつて、今は早七歳となつた。聲は出るが、耳が聞えないから、結局言葉も分らず、只「アーアー」といふのみ。用を辨ずるのは只「アーアー」といふ聲と手ぶり身ぶりだけ。

今日はどうしたのか、平素遊びに來てくれる隣りのマルサが來ない。

言葉が解れば、『マルサー』と呼ぶのだが、悲しいかな、それが出來ない。ヨチ／＼と花園の間を隣りの方へ手探りで歩いて行く。

『あッ!!』

一寸した途端で、ヘレンは足をすべらし、水溜で前垂を濡して仕舞つた。

『――乾かして來よう』

斯う思つた彼女は、やつとの事で暖爐の前へ近よつて前垂をあぶつて居たが、眼の見えない爲、火に近寄り過ぎた。と共に瞬間、めら／＼ツと焔が前垂に燃えついたから堪らない。

『アーアー!』

ヘレンの悲鳴に早くも飛んで來たのは乳母であつた。

『まあ! お孃さまア!』

いきなり毛布を持つて來て彼女を押し包み辛うじてモミ消したものゝ、重なる不幸に、只一つ自由であつた手にさへもヘレンは火傷をしてしまつた。

○此の親心

母親は、かうした不幸に逢ふにつけ、

『せめては片方の眼だけでも……いゝえ、目は見えなくてもいい、せめて片方の耳だけでもいゝ、人並に聞えるやうにしてやりたい……あゝ神樣、どうぞ私のヘレンを助けて下さい、憐れんで下さい!』

と、母親は氣狂ひのやうに祈つた。

父親とても其通り、唯、武人だけに口にこそ出しては云はないが、出來る事なら何とかしてやりたいと熱願して居ることに變りはなかつた。

ヘレン自身に於ても、心に思つて居ることを口に云ひ現はしたいといふ願は年と共に募つて來る。身振りや手眞似では、複雜な感情を表はすことは六かしい。

『――あゝじれつたい!』

自分の意志がハッキリと相手に通じないのを知ると、ヘレンは堪らなくなつて、狂人のやうに昂奮して來る。それを見ると母親はいよ／＼堪らない。

『あゝ情けない、情けない……何とかあの子に、ものゝわかるやうにする方法がありますまいか』母親は、日毎夜毎、父親に、この事ばかりをかき口說いてゐた。

丁度其頃の事であつた。夫婦はバルチモア市に居るチスホルムといふ博士が、他の醫者が見放した、とても物になりさうにもない不具者を、見事に治してゐると云ふ事を耳にした。

溺れるものは藁をも摑む、……取るものも取り敢へず父親アーサーはヘレンをつれて出かけて行つた。

博士は叮嚀に診察した後、

『折角、遠方からお出下すつたが、之は迚も治療の途がありま

せん。……然し、何としてもお氣の毒、一つ、私が紹介狀を書きますから、ワシントン市へ行つてベル博士にお逢ひになつて見ては如何でせう、彼の方ならば何とか考へて下さるかも知れません』

と深切に敎へて吳れた。

ベル博士といふのは、人も知る有名な電話の發明家。子を思ふ一念、父親は千里の路を遠しとせず、早速ワシントンに出掛けた。

『どうか、先生、……親として、此の子にホンの僅かでも結構です、物事のわかるやうにさせてやりたいと思ひます。何とか方法がございますまいか』

父親は熱涙を浮べつつ、切なる心情を打明けて博士に縋りついた。

『御尤もです。貴方の御心持は御同情に堪へません。然し私にはどうとも



見當がつきません。

が併し、ボストン市のパーキンス盲人學校の校長アナグノス先生は、盲啞敎育の大家です。あの先生に手紙を出して照會して見たら何うですか、或は貴方の希望をかなへて下さるかも知れません。』

博士は斯う敎へて吳れた。

父親は時も措かず、アナグノス校長に宛て、具に事情を訴へた。

一月許り經つと待ちに待つた返事が來た。

『適當の敎師を派遣するからそれと相談せよ』

と云ふのであつた。

此の手紙を見たケラア夫婦の喜びは、どんなであつたであらう。

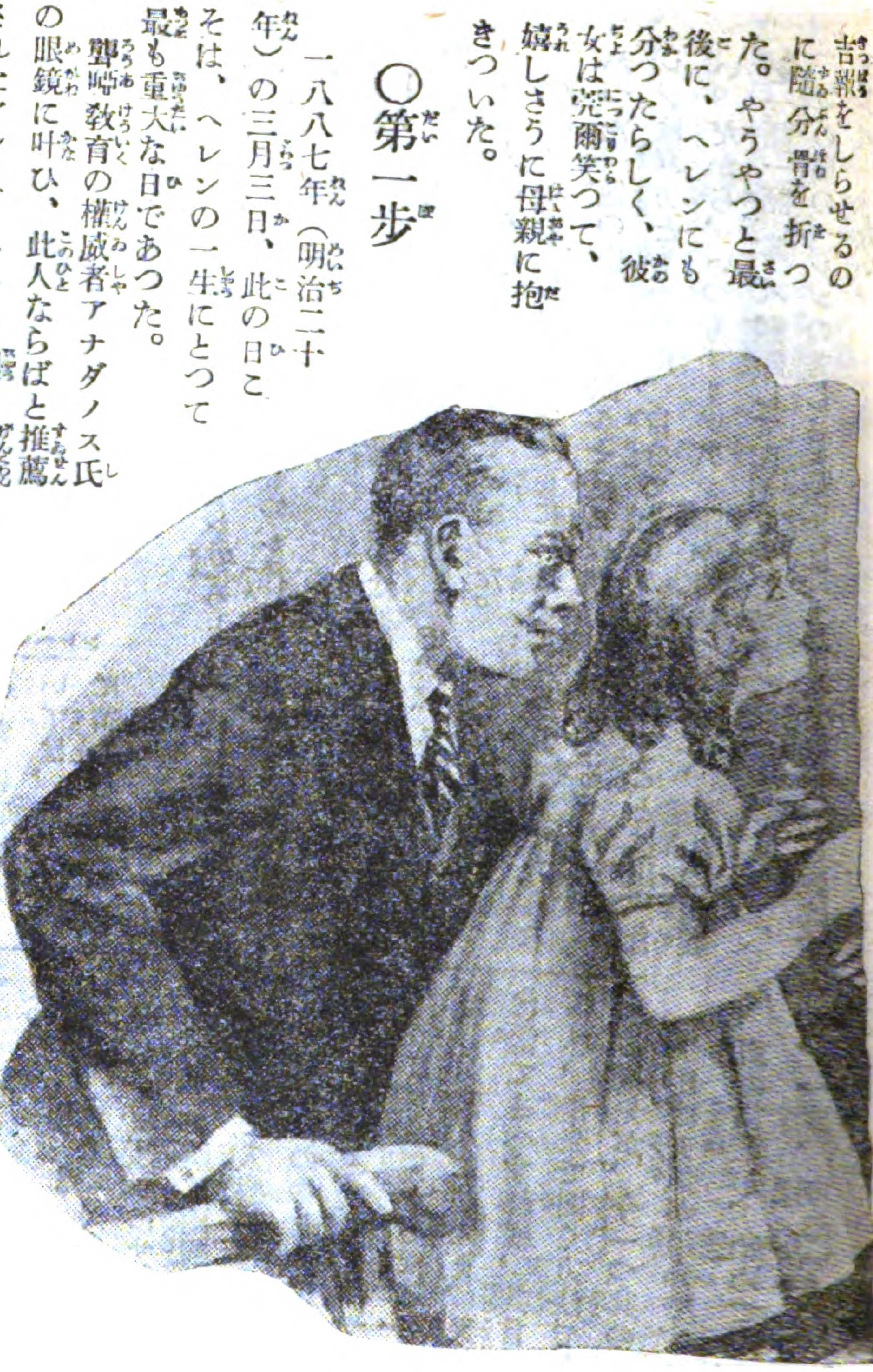
家庭敎師の名は、アン・サリヴアン孃と書かれてあつた。

『何時、來て下さるだらうか？』

家中がはしやぎ切つて、之れを待つた。

母親はヘレンに向つて、此の

吉報をしらせるのに随分骨を折つた。やうやつと最後に、ヘレンにも分つたらしく、彼女は莞爾笑つて、嬉しさうに母親に抱きついた。



○第一歩

一八八七年（明治二十年）の三月三日、此の日こそは、ヘレンの一生にとつて最も重大な日であつた。聾啞教育の權威者アナグノス氏の眼鏡に叶ひ、此人ならばと推薦されたアン・サリヴアン孃が玄關に現はれたのだ。

ケラア夫婦は、躍り上つて孃を迎へ、下にもおかぬ待遇やうであつた。

翌日から、ヘレンの教育が始まつた。サリヴアン孃がヘレンの部屋に行つて見ると、ヘレンは、昨日パーキンス學校の盲生からの贈物として、サリヴアン孃が土産に持つて來た人形を抱いて遊んでゐた。

『お手々をかして頂戴』

サリヴアン孃は、ヘレンの右手をとつた。そして小さな掌へ「人形」といふ文字を指先で書いた。これが實にヘレンの學問への第一歩であつた。

するとヘレンは、此の指先の戯れを面白がつて、自分でも眞似て見た。孃はヘレンが正しく書けるまで、何度もやつて見せた。――しまひに、到頭ドルといふ字を覺えてしまつた。

勿論、それが何の意味であるかは、まだ分らない。只しかし、今迄にない珍らしい出來事なので、ヘレンは、何だか非常に嬉しかつたらしく、ポツと顔を上氣させながら、大急ぎで階段下の母の部屋へ下りて行くと、いきなり母親の掌をとり、可愛いい指先で「人形」と正しく書いて見せた。

『ヘレンやお前どうして覺えたの？』

母親が驚いた素振りに、ヘレンが興がつて、何度も何度も人形と書いた。


指先でサリヴアン教師の言葉を聞くヘレン

五週間目位になると、物にはそれぞれに名稱があるものだと云ふ事がだんだん判つて來た。サリヴアン孃は掌に文字を書いては、いろいろに苦心して其の文字の有つ意味を教へて行つた。」

かくて、ヘレンが、大方の文字を覺ると、今度は第二段として、カードに文字を押出したものを作り、指先で之にさはつて、文字を讀むことを教へた。

指先で文字を讀むことを覺えたのは彼女の一大向上であつた。九歳の夏には、サリヴアン孃が附添で、ボストンのパーキンス盲人學校に入學するまでになつた。

然し、こゝでも、ヘレンは更に一層の苦勞を積まねばならなかつた。他の學生は、眼こそ見えぬが、耳が聞える。だが、ヘレンは双方とも不自由、自分で先生の講義を聞くことは出來ない。だから、いつもサリヴアン孃が附添つてゐて、先生の講義を一語一語掌へ飜譯して聞かせたのであつた。

その間のヘレンの苦しさと努力は、とても言葉で云ひ表はすことは出來ない。

○天來の福音

それは、ヘレンが十一歳の夏だつた。

彼女に取つて天來の大福音が傳へられた。といふのは、北歐の盲聾者教育を視察して來たラムソン夫人が、ノルウエーのカートと云ふ盲で聾の子供が、實際に話す術を覺えたといふ事を傳へたのであつた。それをきくとヘレンは矢も楯もたまらなくなつた。

『先生、私も早くその御稽古をさせて頂きたいと思ひます』

ヘレンは頻りにサリヴアン孃に迫つた。其熱心に動かされたサリヴアン孃は兩親と協議の上、其頃評判の高かつたホレースマン學校に入學してその教育を受けて見ることにした。

その學校のやり方は、先生が發音をする時、自分の口に生徒の手を當てさせて、舌や唇の動き方を探らせて、今度はその通りに口眞似をさせるのである。すると自分で自分の聲は聞えないが他人には聞え、又他人の言葉は、自分の手を他人の唇に當てさへすれば、其言葉がわかるのである。つまり口で物をいひ、指先で聞く方法である。點字を探つて書物を讀ませてくれる指先が、今一つ其の役目を果たすことになつたのである。

『今日は天氣が温かです』

此の言葉が、始めて發音できた時は、ヘレンは永年の牢獄から、一躍、明るい世界へ飛び出したやうな氣がしたといつて居る。

一方では、點字用の雜記帳へ自分で文章を書く事を覺えた。十二歳の冬には、サリヴアン孃に點字を飜譯して原稿紙に寫して貰ひ、自傳の一部を雜誌に寄書したこともあつた。

それから後のヘレンの勉强は、素晴しいもので、遂にはラドクリフ大學へ入學したいといふ志望さへ起すやうになつた。

『ねえ先生、私、生意氣のやうですが、どんな不具者でも、自分の努力次第で、此處までやれると云ふ事を、皆樣に知つて頂くやうにしたいと思ひますわ』

ヘレンは、折にふれては、この健氣な決心を敬愛するサリヴアン孃に語るのであつた。

一八九九年（明治三十二年）二月、二十歳の時、彼女は立派に入學試驗に合格し、堂々と大學教育を受けるやうになつた。かくて所謂螢雪の功成つて大學を卒業後は、更らに進んで獨逸に留學し、立派に學位號迄得て米國に歸つて來た。

爾來、盲聾啞教育の母として一身を其教育に捧げ、現にアメリカ盲聾啞協會々長として不幸なる同胞のために活動を續けて今日に到つた。

而も人生最大の悲境に身を置く女史が、樂天主義の炬火を掲げて、人の世がいかに希望と幸福に滿てる樂土であるかを高唱し、不具者のために萬丈の氣を吐いてゐる。



有名なアメリカの文學者マアク・トウウヱンは、曾て云つた。

『ナポレオンとケラアとは、十九世紀の二大奇蹟である』と。

よいかな言や、那翁一世が人間能力の最極限を發揮した大示標であるならば、ヘレン・ケラア女史の一生は人世絶望の闇を照破する大火柱である。

女子の生涯を顧みて、吾人は今更の如く、教育の力のいかに絶大なるかを讃嘆せずには居れない。而して更に力强く吾等の胸を打つものは、百折撓まぬ人の一心である。

爰に女史の肖像がある。ついて見よ、崇高端麗な其風姿を、溢るゝが如き愛情と、透徹した理智とに輝いてゐる其の容貌を。

……さしゑ ウォルトハインバー……」



わが新徵組の薩摩屋敷燒打

新徵組唯一の殘存者　千葉彌一郎

明治維新に關する著書は、汗牛充棟啻ならぬ程であるが、その多くは薩長の側から見たもので、事實の眞相の誤り傳へられてゐるのは私の深く遺憾とする次第である。就中、新選組とか新徵組とかに關するものに就て特に然りである。

私は本年八十三の老齡、最早や筆も思ふにまかせぬが、當時新徵組の一員として働いたものであり、今にしてその眞相を傳へずんば、遂に明かにすることなからんことを憂へ、目下之を起草中であるが、先づ以てこゝにわが兼て愛讀するキング愛讀者各位の御參考に資せんと欲するのである。語るべきことは多い、こゝにはあの有名な薩摩屋敷燒打の一端を語りたいと思ふ。

浪士組

文久三年四月十三日の夕刻、麻布一ノ橋をわたり切つた處で、浪士組の牛耳をとつてゐた淸川八郎が暗殺された。

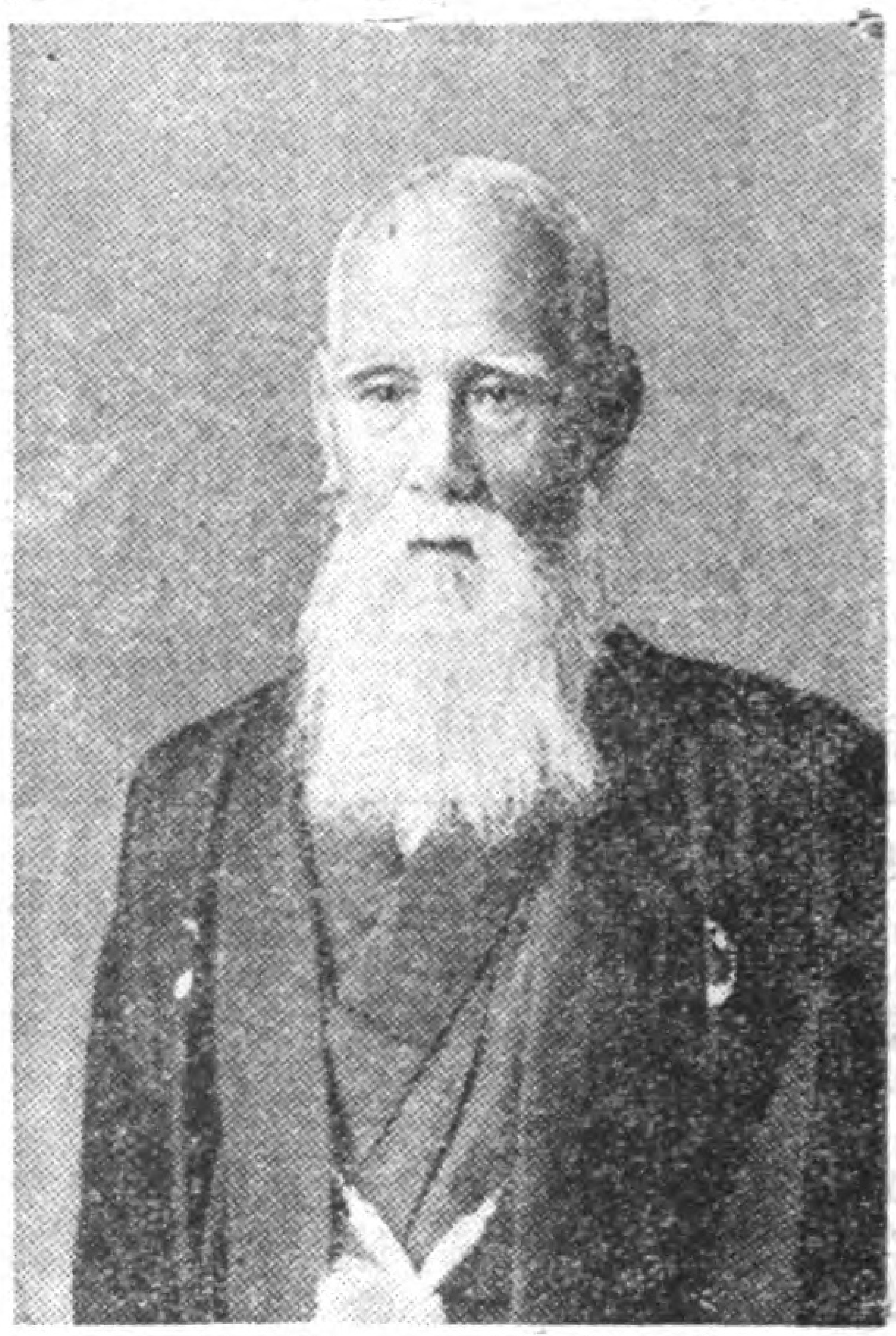
今の人達は、浪士組も、新選組も、新徵組も一緒くたにして考へてゐるが、これにはちやんと區別がある。

もと〳〵浪士組といふのは、幕末騷然の折柄、幕府が、市中取締の爲、旁々當時失業の結果、動もすれば反幕府的に流れんとする浪人を集め之に職を與へたのであつた。之が頭領と仰がれたのが淸川八郎、腕は出來る、智慧はある、それに彼の生家が庄內の富豪で金を惜しげもなく使つたので、威望隆々として他の浪士を壓服したのである。

風雲いよ〳〵急、京都の形勢重大となるや、淸川は所謂勤王黨の行動を監視せんが爲、浪士組の一隊を率ゐて上洛したが、淸川自身、いつの間にか自ら盡忠報國の名の下に攘夷を斷行せんと企て、私に關白より攘夷の內命を拜し、留まること僅かに二十日ばかりにして再び關東に歸つて來たのであつた。

近藤勇は、同じく浪士組の一人であつたが、淸川と志を異にし、飽くまで初志を貫徹せんと、その一黨と共に京洛に踏み止まり、新選組と稱することになつた。

江戶へ歸つた一隊は、一先づ本所三笠町の小笠原加賀守の邸に落着き、淸川は私に攘夷の手始めとして橫濱燒打ちの事を企てゝ居つたが、この事いつか幕府の知る所となり、淸川は暗殺、淸川を助けた幹部は獄に投ぜられた。



千葉彌一郎翁

かくて、主腦を失つた浪士組は、當時市中見廻役の庄內藩に預けられ、新に新徵組と名乘り、浪士組本來の使命たる市中取締の役を勤むることになつたのであつた。

一隊百五十人、これを六組に分ち、毎日二組づつが見廻りの番になつて、各所の番所へ詰めた。そして、市中を騷がす者は勿論、各藩の浪士等の幕府に弓引かんとする者を監視して居つた。

密偵

私の父はもと○○の藩士であつたが、都合あつて浪人し浪士組の一人に加はつて居つた。不幸にして病死したので、兄が跡をついで新徵組の一人となつた。然るにこの兄も、市中巡邏の際旗本を斬り自分も切腹したので、又私がその跡をついだのであつた。つまり一家三人が、浪士組から新徵組まで進退を共にしたわけだ。

庄內藩に預けられてから、新徵組は、飯田町の田沼玄蕃頭の邸外に旗本屋敷二軒を賜はつて、三笠町から其處へ移つた。

しかし、何せ、新徵組といふのは、前述の如く血氣縱橫の壯士であり、且つ淸川八郎の問題などもあつて、なか〳〵規律が八釜しかつた。私が、假に外出しようとすると、外出先を告げて、係から私の名札を貰ひうけ、それを門番にあづけておく。

夜八時迄に、歸つて來て、又門番から其の名札を返してもらつて、係へ渡す。もし、九時十時になつても歸らぬ、外泊をするといふことになれば、直ちに禁足を命ぜらるゝ位、嚴重にしてあつた。

ところが、組中に、私の緣邊に當る川越藩の長屋玄藏といふのが居たが、どうしたものか、長屋は、何時とはなく拔け出で て外泊して來る樣子。

『長屋君、どうも私には腑に落ちかねる事があるが……』

私は、ある日長屋に訊ねた。

『何だ』

『いや外でもないが、この頃君は終始外泊してくるが、一體、どこへ行くのか』

『ふうむ』と、長屋は苦笑して居た。

『私が、君の顏を見ようと思うてやつてくると、いつも寢床に居たことがない、長屋は今晩も泊りだと、他の同志も格別不思議にしては居らぬらしい、だが、私には何うも可怪しい』

此ういふと、當の長屋玄藏。

『分つたかい』

けろりと澄して居る。――

『實はな、君ならば他へ洩す氣遣もないから、本當の事をいふが、此の頃俺は薩摩屋敷へ隱密に入つて居るのだよ、君も知つての通り、今市中を荒かして、强盜をしたり、放火をしたりする賊の一味は、薩摩屋敷にかくれて居るといふ專らの噂、そこで俺も其の仲間に忍び込んでゐるのだ……』

驚くべき自白をした。

『すツかり事情が分つたかネ』

『何も彼も判つたが、只一ツ、今以つて俺にどうしても分らぬのは、あれ丈な大仕事をやる以上、これを指圖して居る餘程の人物がなくてはならぬ、それがどうしても判然しない、益滿新八郞（休之助）といふものが居つて、表面には指圖をして居るやうに見せかけて居るが、事實はあの男ぢやない』

さう云つて、彼は如何にも不思議さうな顏をして居る。

『ぢやア、その陣備へが餘程巧みに行つて居ると見えるなア』

『さうとも……、あの益滿といふ男が、お前達の御用がすむと、其儘にしてはおかぬ、本藩に於て、各自二百石を賜つて、士分に取りたてられる事になつて居る、――此ういふ甘い事を云ひ居る、つまり浮浪の輩を唆しかけて居るのだが、と云つて御用濟の後、本藩へ乘りこまれちやア堪るものでない、……そこで、言下にこれを打消す奴が控へて居る、なアに、わし共は、そんな身分にならうなどといふ腹は、微塵もムいません、只もう奪ひとつて來た金の御褒分けにあづかれば、それが何よりも結構でございますと、下手に出て、此う云はせる。すると一同又そんな氣にもなる。そこいらの手管はまことにうまいもんだが、……どうも此の邊の微妙な呼吸は、背後に智慧者が居らぬと出來ぬ藝だ』

長屋は、しきりにさう云うて居た。

突出す槍の穂先

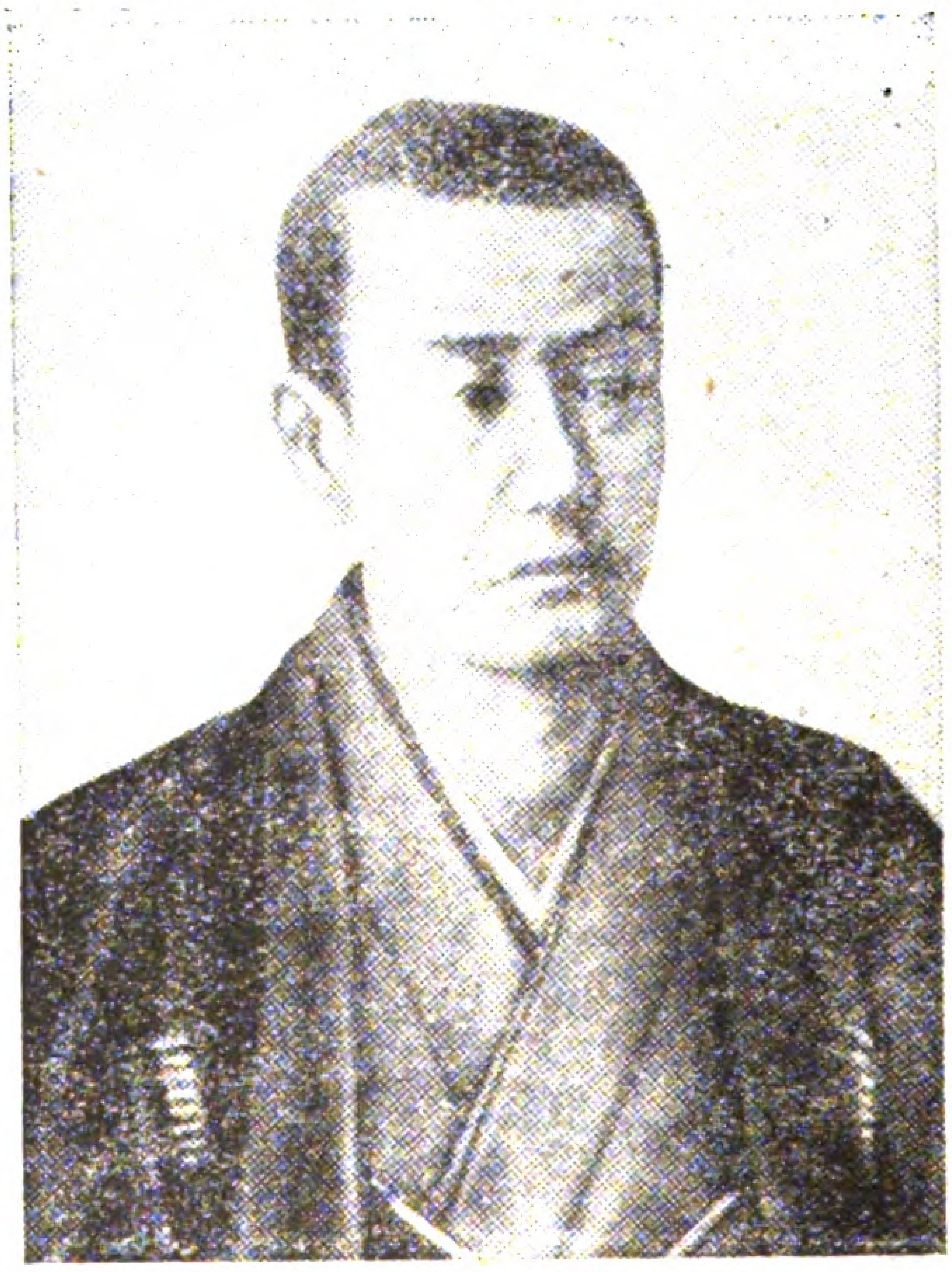
薩摩が、何うして浮浪の徒を集めて、此ういふ騒動を起すかといふに、慶應三年十二月、大政奉還と共に、慶喜公は將軍職を辭された。だが討幕派からいはせると、それでは不滿足である、是が非でも幕府を叩きつぶさねばならぬ、叩きつぶすには、干戈を動かさねばならぬ、干戈を動かすには、幕府側から手出しをするやうに仕向けねばならぬ。

で、幕府の當路者をして、立腹させ、逆上させ、喧嘩を仕向けてくるやうにしようといふのが目的で、江戸騒がせの非常手段をとつた。餅屋は餅屋、さういふことは、浮浪の徒にかぎるといふので、さてこそ無賴の徒を屋敷に集めたのだつた。

『吾々は薩摩屋敷の御用泥棒だ』

眞向から名乘つて出るので仕末がわるい。

市中見廻りの庄内藩に於ては、十分これを警戒してゐたが、京都方面の險惡な時勢にかんがみて、將軍家の留守中、さう無茶なことも出來ぬので、じつと堪へてゐた。



浪士組隊長　清川八郎

それを好いことにして、薩摩屋敷の御用盗は、市内をあばれ廻る。果ては、十二月二十三日の晩、三田の見廻組の屯所へ向つて、鐵砲を打込んだ奴がある。

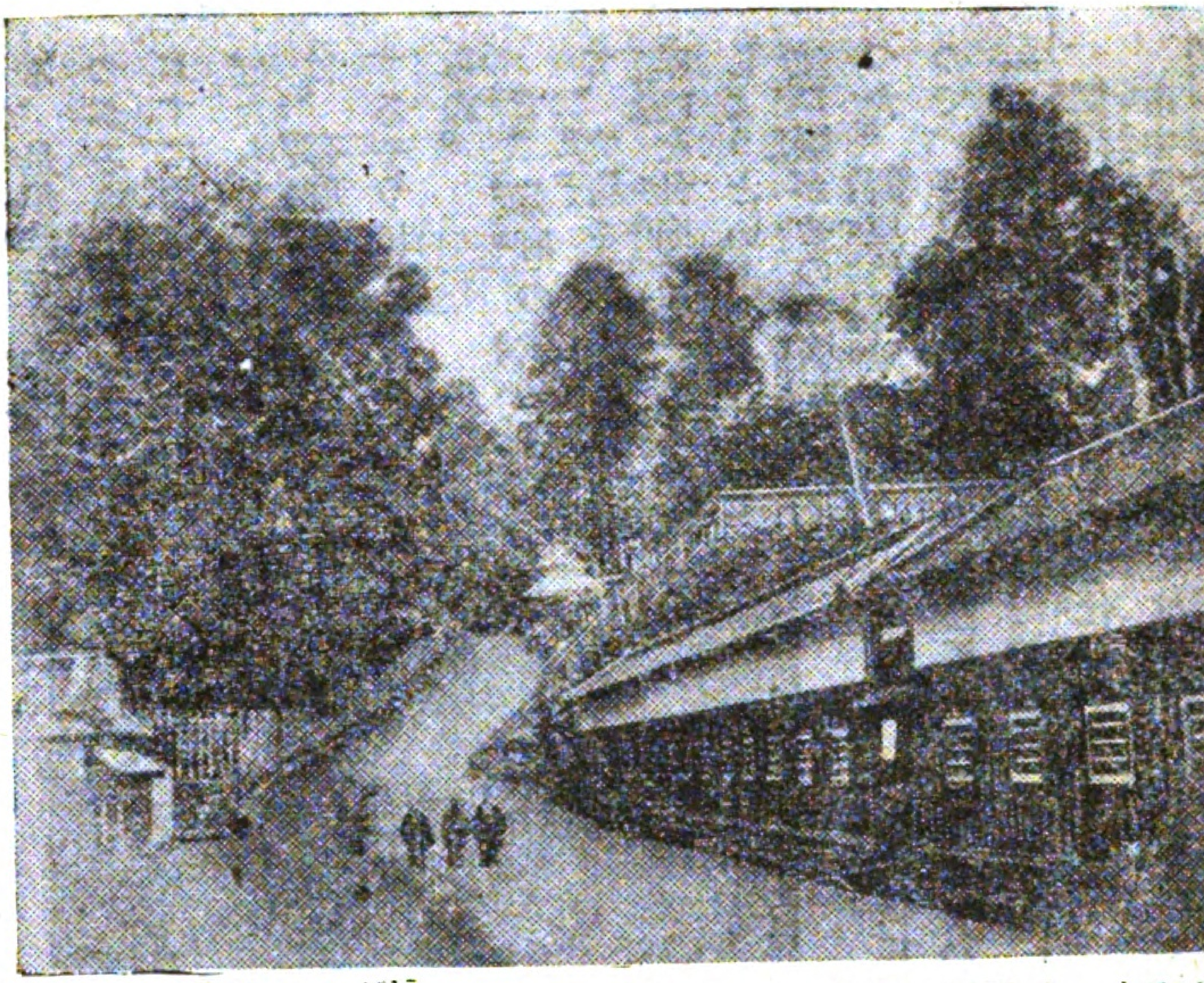
『それッ！』とさわぎたつたが、曲者は忽ち姿を消した。

『薩摩屋敷の奴等だな』

正體は分つたので、庄内藩では、薩摩に向つて、その犯人の引渡を迫るがよろしいと云ふやうな強硬な意見が起つた。よつて幕閣の指令を仰いだが、幕閣にもいろ〳〵と議論があつて、翌日の夜半、やつと三田邸の燒討を決定した。

二十五日の夜明間近く、薩邸に押しよせた人數の先鋒は、勿論家老石倉倉右衞門の率ゐる庄内藩士であつて、上ノ山、龍野、鯖江等の諸藩士併せて二千人餘、外に幕府の別手組などが加はつた。

さて燒討だが、最初から理不盡に燒討をかけたのではなく、通用門から使者をたてゝ、交渉に遣つた。相手は薩摩、此方は庄内、言葉がまるで通じないので、辯口のハッキリした阿倍藤藏、吉川治平の兩名を選んで、かけ合はせたが、一向埒があかない。それならそれでよし！と庄内藩から大砲を打込んだ。同



維新前、某外人の撮影せる薩摩敷屋

時に、辻番小屋に火をかける、折柄西北の風に煽られて火勢は長屋を一なめになめる、鬨の聲はあがる、火の手はあがる、薩摩屋敷は、紅蓮の炎につゝまれた。

　此時、奥から若黨に床几をもたせて、現はれて來た三十五六歳の偉丈夫。何か掛合ひに出たらしい。

だが、逸りに逸る寄手の一人。

『えゝいッ』

待てしばしもなく、長槍をふるつて、此の士人の横ッ腹をぐさッと一突。途端、床几をもつてゐた若黨が、べたッとその場に腰を拔かした。

だが敵人の前に於て、此の醜態を見せたくはなかつたのであらう、彼は、ふるへをののく若黨の頸根ッこをしッかと左脇下にかゝへた。さうして、突かれた槍の躧首を右手で抑へて、

『御無理でござらうが……』

大きな眼をぎよろと光らせ乍ら、きめつけたが、急所の深傷に堪へかねて、その儘其場にどうと倒れた。――御無理でござらうが……と云つたのは、跡で考へると、何か一言陳べたいことがあつて、門前へ出て來た、それは床几をもたせて來たのでも十分に判る、しかるに、何の挨拶もなく、突然槍で突いたので、士道を辨へぬ仕方であると云ふ意味が含まれて居る。

突嗟の間ではあるが、その態度、その音聲、その言語、少しも取り亂したところがなかつた。

これを目撃したのが、先に密偵として忍びこんだ長屋玄藏である。

『あッ！　分つた！　此の男だ！』

彼は、矢庭にさう叫んだ。

彼は、先に私に洩したやうに、薩摩屋敷の浮浪人の間にまぎれこんで、探して見たがどうしてもわからなかつた江戸騷がせの張本。

此の大芝居の陰にかくれて、絲を引いて居る黑ン坊は誰だらうか？　今の今まで突き止めることが出來なかつた。然るに、

ここに突如として出現したる偉丈夫こそは、たしかに、其れに相違ない。何といふ落ちつき方だ、又何といふ天晴れな死に方だ、悉く感心した。

此の騒動が終ると、長屋は、私に云つたのである。

『いつか、君に話をした江戸騒がせの采配をふつた男は分つたぞ』

『誰か』

『さア、名前は分らぬが、いづれ薩摩でも何の某といはれる人物だらう。殺して了つて惜しいやうな氣がする』

さう云つて、その最期の狀景をまざ／＼と語つて聞かせた。

巨人南洲翁の一言

私は新徴組の六番組に屬してゐたが、丁度その日は、一番から四番組までが出役となり五六番組は酒井邸を警戒することになつた爲、その現場には出合さなかつた。

出役の組は本藩とは別に三田小山の島津淡路守の屋敷に向つたのであつた。同邸にも浮浪の徒がかくれて居たからである。流石に新徴組は名に恥ぢず、僅に百名乍ら手際よく俊敏に邸内に踏み込み、忽ち彼等三十餘名殘らずからめとり、引き返して薩摩屋敷の包圍に應援したのであつた。

薩摩屋敷燒討のあつた翌月は、もう明治戊辰の年である。

私共新徴組のものは、庄内藩主酒井忠篤公に從つて、庄内へ引きあげ、こゝで官軍を迎へた。戰は、吾々に有利であつたが、援兵と朝旨が遙かとなるに及んで、我藩は、遂に降伏に一決した。

此時、官軍の參謀黒田淸隆の處置が、まことに寛大であつた。明治元年九月二十七日、降伏の處分が終ると、直ちに官軍は庄内領から引拂つて了つた。これが爲、庄内の人心は、全く王師に歸服した。翌二年一月になつて、藩の重役菅實秀が上京して、黒田參謀を訪ねた。

『昨年は寛大の御處置にあづかつて、藩公始め吾々藩臣一同滿悅至極でござります』

禮をのべると、黒田は笑つて、

『いや、あれは、わしがやつた事ぢやない』

『さう致しますと……』

『萬事西郷さんの指圖をうけてしたことで、あの時、わし共は、庄内藩に對する處分が餘り寛大ではないかと、實は不平をいうた處、西郷さんの云はるゝには、庄内は地僻にして、復古の大旨が未だ徹して居らぬ、それで此ういふことになつたので十分同情せねばならぬ、今一旦順逆を知つて、歸順した上は、もはや敵ではない兄弟も同樣であるぞと、此ういふ次第だ、實際どうも西郷さんの腹の大きいのには此方も驚き入つて居る』

黒川の話ですつかり事情が分つた。

そんな關係から、庄内藩は大に南洲翁を德とし、薩摩とは特に親しくなり、其後藩公自ら島津公を訪ねられ、南洲翁も亦屢ゝ藩公を訪ねて來た。



何かの拍子に、三田の薩摩屋敷焼討が話題にもちあがつた。庄内藩としても、昔、焼討をかけた薩摩の爲に、並々ならぬ恩惠をうけようとは夢想だにしなかつた。考へて見ると、妙なめぐりあはせである。

『まこと相濟まぬことをした』

内心、庄内人にはさういふ心持があつた。

ところが、南洲翁は、あの調子で、洒々落々としてござる。

『いや、屋敷は灰となつても、少しも恨みはござらぬ、が、ただ一つ』

『屋敷に居た兒玉雄一郎を殺したことは、薩摩の一大損失でごわした』憮然として此う云つた。

私は、ハツとして胸ををどらせた。

『さうだ、その兒玉雄一郎に相違ない』

電の如くに、私の頭腦をかすめたのは、長屋女藏から聞かされた一條、即ち焼討當日、門前に於て倒れた一偉丈夫の最期が、再び私の記憶の中によみがへつて來た。

兒玉雄一郎は、もと島津齊彬公の小姓役であつたが、文武共に秀でたる英才で、齊彬公は特に雄一郎には機密の文書取扱を命じた位、餘程君公の信任厚く維新に大貢獻あつたのであるが、一部の人に嫉視され、

『兒玉の奴、やり過ぎる』さういふ非難が出て、彼は君側を斥けられて、江戸屋敷に左遷された。當時、薩摩屋敷に居たのであつた。

……さしゑ　石井朋昌……

最新醫學の驚異！
死んだ人を甦らす話

昔、或醫者が、眼を治療しようと思つて、患者の片眼を抉り出し、これを洗つて物干に乾かして置いた。すると一匹の烏がやつて來て、これはうまいものがある、占めたとばかり食つて了つた。

眼の紛失！　さあ大變！　醫者はとつおいつ思案の末、野良犬の片眼をとり、これを患者の眼窩に入替へた。

患者はおかげでよく見えるやうになり大喜びであつたが、たゞ厠へ行つた時だけは、片方の眼では大變汚く見えるし、片方の眼では大變好もしう見えるので、どうも不思議だといつた話。

これは、鳩翁道話の中に出てゐる笑話であるが、最近醫術の進歩は、嘗ては笑話にされた夢想が實現されさうになつて來た。

只今の眼科醫で、眼球を引出して洗滌治療することは珍らしいことではない。只、他人の生きた眼球と入替へるまでには行かないので、只今のところでは、ガラス製の目玉を入れてゐる。

○　○

眼球に限らず、身體の一部を切斷抉出することは既に洽く行はれてゐることだ。足や手の切斷は勿論、内臟でも、盲腸とか、子宮とか、卵巣とか、腎臟とか、疾患部の取去らるゝものは少くない。

身體の一部を他人のものと入れかへることも段々行はれてゐる。大怪我をした股の傷口に他人の股の肉を植ゑつけたり、敗血症の人に他人の血を移入することは周知の事實である。

然らば、更に一歩進めて、臟器をも他人のものと取換へることが出來ないものか？

例へば、腎臟病患者の犯された腎臟を取つて、他人の健康な腎臟を入替へることが出來れば、その人は新に健康になり、胃病の人を手術して、健康な胃袋を入替へるとすれば、その人を長生させることが出來る筈だ。動物試驗では既に或程度之に成功してゐる。

西洋のある醫學者は、怪我で死んだ犬の血管と腎臟を切取り、之を氷詰めにして貯へて置き、一日を隔てゝ他の生きた犬の血管と腎臟に入替へたところ、果して、貯藏された血管や腎臟が蘇生して活動を初めたことを報告して居る。

○　○

更に又一歩進むれば、内臟の故障で死んだ人に對し、時を移さず手術して之を蘇生させることも出來る筈だ。

呼吸や心臟の止まつたことが必ずしも死ではない。クープリアンコ教授は、呼吸が止んだ後、尚三十時間、心臟を生かして置くことが出來た。ヘイマンズ教授は、血液の供給を斷たれた腦髓が、尚三時間も生きてゐるといふ實驗を報告してゐる。

いや、これらの實驗に待つまでもなく、呼吸も止まり、心臟も止まつた後、十時間二十時間して尚生き返つた例が少くない。

○　○

即ち人間の中樞たる腦髓の大破壞といつたやうな場合は兎に角、身體の一部の疾患による死は、假死の狀態にありともいふべく、身體の他の各部は尚活動力を存し、若し一定時間内に適當の方法が構ぜらるゝならば蘇生の可能性を持つてゐるのである。

それは恰も、一部の故障の爲に活動を休止した機械が、その一部の故障を除くことによつて、再び活動を開始するやうなものだ。

昨秋ニューヨークで開かれた第十八回萬國物理學會の席上、ハーバード大學教授ハーナンツ氏は死の現象について氏の大研究を發表し、「人間の再生は、最早や詩人の夢想ではなくなつた」と闡明した。



寫眞は、魔の寶石『ブリユー・ホープ』

ダイヤモンドの呪ひ

過去三百年に亘り、歐亞の王侯名門を禍して歩いた魔の寶石『ブリユー・ホープ』

北畠利男

序

世界第一の百科辭典といはるゝ大英百科辭典の、ダイヤモンドの項中、世界の名ダイヤモンドとして紹介されてゐるブリユー・ホープ、この一寶石を廻つて、如何に世界に大悲劇大活劇が起つたことか?! おゝ美しくも怖ろしき魔の寶石よ!

一

西暦一六四二年の夏の或日のことだつた。さらでだに熱い常夏の國の夏の眞つ赤な太陽が、灼けつくやうにぢり〱と照りつける下を、脊中に物資を滿載した十數頭の駱駝を引きつれ、椰子の葉蔭をもとめては憩んでも〱瀧のやうに流れる汗と埃に苦しみながら、喘ぎ〱西の國境を越えて印度へはいつて來た數十人からなるフランス人の隊商があつた。

隊長はタバアニエールといふ、歐洲全土に名を知られたパリの寶石商で、當時ダイヤの產地として世界にたゞ一ケ所しか知られてゐなかつたこの印度へ寶石漁りに來ること前後十數回、最早六十近くにもなつたので、今度、老後の思ひ出に最後の寶石漁りにやつて來たのだが、何しろまだ海路印度へ渡る道も開けず、國際的に通用する貨幣もなかつた頃のこと、かうして、寶石と交換用の種々な歐洲の物產——織物、香料、燒物等を駱駝の脊に積み、數十人の供をつれて、陸路遙々やつて來る外はないのだつた。

タバアニエールは、いつものやうにあちらの王宮、こちらの寺を片つ端から訪ね歩いた。寺を訪ねるのは、印度では寺に安置してある佛像の眼や額の中央に、よく大きなダイヤをはめてあることがあり、これまでも幾度かさうしたダイヤを手に入れたことがあつたからである。

ハイデラバッドの或る寺へ來た時のことだつた。何氣なく本堂の佛像を見たタバアニエールは、あつ！ と驚ろくとともに、その眼は灼きついたやうに佛像の額から動かなかつた。見よ！ そこには百二十カラットもあらうと思はれる稀有な大物である上に、純眞透明な緑勝ちの、世にも得難い青ダイヤが燦然たる光を放つてゐるではないか！



恐らくこの石一個あれば、一王國をも購ふことができるだらう！

タバアニエールは、わく〱する胸を押ししづめながら、早速住職の前へ出て、

『御住持さん、どうでせう？ あの本堂の佛像の額にはまつてゐる青ダイヤを、何と私が持つて來た品物ととり替へてくれますまいか？』

ごくりと唾を呑み込んで、返事如何にと住職の顏を見あげると、

『いや、それはなりませんよ』

住職の答へはにべもなかつた。

『では――』と、タバアニエールは、境内に休んでゐる十數頭の駱駝を指しながら、

『あの駱駝をみんなと、背中に積んでゐる一切の品物を差しあげますが――』

『なりませんよ。はい』

『私がこゝへ來るまでに手に入れた四つのすばらしいダイヤを添へても？――』

『何と云つても、それはなりませんよ。あなたは何も御存じないか知りませんが、あれは前の住職が生命に替へて手に入れた佛の佛とも云ふべきもので、拙僧たち一山のもの丶念力が悉くあの石に凝り固まつてゐるんですからね。あればかりは駄目ですよ。はい』

散々頼んでもすかしても、住職は頑としてタバアニエールの申し出に應じなかつた。

二

四五日の後、タバアニエールは、全山の僧侶を招待して大饗宴を開いた。この思ひがけない歡びに、僧侶たちが飲めや唄への一大亂舞を演じてゐる時、不在になつた本堂へ、夜陰に乘じてこつそりと忍び込んだものがあつた。云ふまでもなくタバアニエールから旨を含められた腹心の男で、携へて來た鑿をもつて夜目にもしろく光を放つてゐる例の青ダイヤを苦もなく佛像の額から抉りとつた。醉ひ痴れ、疲れ果てた僧侶たちが寶石の紛失に氣がついたのは三日の後であつた。

『さては、一杯喰はされたか!!』

地團駄踏んで口惜しがつたが、今更追つつかなかつた。夜に日をついで急ぎに急いでゐるタバアニエールの一行は、もう數十里の彼方に去つてゐる頃だつたから。――

『よし！　この上はあのダイヤを手にする惡道者を呪ひ殺さずに置くものか！』

住職は直に全山の僧侶を召集して、呪ひの大祈禱を始めた。椰子の葉陰に祭壇をしつらへて七大地獄の惡魔を祀り、その前には毒矢をもつて射止めた虎、毒槍をもつて仕止めた豹、毒蛇の血を盛つた壺、惡魔の好みさうなありとあらゆる犧牲を供へ、四方には炎々天を焦がす大焚火、銅鑼の響き、象の皮太鼓の音が全山を搖がす中で、住職以下僧侶一同は眞紅の衣を身にまとひ、

『七大地獄の諸々の魔王にお願ひ申す！　何卒あのダイヤを盜みとつた惡道者、之を引繼ぐすべてのものに呪ひと死と禍ひを降させ給へ!!』

瞋恚の眦を決し、憤怒の形相物凄く、口も裂けよ、咽喉も破れよとばかり、聲を揃へて祈りつゞけること實に未明より夜半に及び、最後に住職は身を翻して傍らの猛火の中へ躍り入り、あらゆる呪咀の言葉を叫びつゞけながら我れと我が身を燒き殺してしまつた。

惡魔は果して彼等の恐ろしい願ひを聽き届けただらうか!?

三

パリへ歸つたタバアニエールは、その後放蕩な一人息子のために、彼が生涯を傾けて造つた莫大な財産全部を擔保に金を借りられ、全くの無一物となつたので、かねてこればかりはと秘藏してゐた、かの青ダイヤを國王ルイ十四世に賣りつけ、一六六八年、七十餘歳の老軀を起して、今一度印度への寶石行脚に



旅立つた。其後杳として彼の消息は絶えたが、風のたよりに聞けば、途中アラビヤの沙漠近く、ペルシヤ灣のほとりで熱病のために狂ひ死にをしたといふことである。

ルイ十四世は次々にその寵姫にこの青ダイヤを飾らせたが、不思議にも、之をつけた寵姫には不幸があつた。

ルイ十六世の朝にいたり、青ダイヤは王后マリー・アントアネットの胸に燦然と輝やくやうになつたが、恰もこゝにフランス大革命は勃發しルイ十六世と王后とはあの悲劇的最期を遂げたのであつたが、之は誰しも知るところ。只青ダイヤのみはそのまゝ遺されてルーブル宮殿へ秘められることになつた。

四

數年後の秋も終りに近づいた或日のことだつた。

フランスからの便船がイギリスのロンドンに着いた時、その下等船室からのそりと上陸した見すぼらしい男があつた。荷物とては何一つなく、垢じみたぼろ〳〵の古服に破れ帽子、靴だけはまだ新らしかつたが、やがて冬にならうといふのに外套さへ持たぬ慘めさだつた。

男はとぼ〳〵と市街の方へ足を向けた。そして、とある寶石商の前へ來ると、ちよつと立ちどまつて何やら考へる樣子だつたが、今更のやうに自分の見すぼらしい服装を見廻はしてから、二つ三つ大きくかぶりを振つてまた歩き出した。

間もなく、男は次の寶石商の前で立ちどまつた。が、今度も立派な店の構へと自分の汚ない服装とを見比べるやうにしてから、考へ〳〵そこを立ち去つた。かうして、第三、第四、第五

と、次々に寶石商の前で立ちどまつてはまた歩き出してゐるうちに、やがて日が暮れると、男は裏通りの穢るしい宿屋へはいつて、そこの一番下等な部屋へ泊り込んだ。

翌日も、男はまた朝早くから宿を出て、幾軒かの寶石商の前に立ちどまつたが、どこへもはいらずに、日が暮れてから疲れ切つて宿へ歸つて來た。

次の日も――

その次の日も――

二十日ばかり同じやうなことを繰り返してゐるうちに、男の顏は蒼白め、身體は目に見えて痩せ細り、歩く足どりさへよろめきがちになつて來た。

或日のことだつた。その日も朝から幾軒かの寶石商の前に立ちどまつては素通りしてゐたその男は、日暮れ近く、とある裏通りにさゝやかな店を構へてゐる猶太人の寶石商を見つけると、いつもよりも長時間その前に立ちどまつて、頻りに何やら考へ込んでゐたが、やがて思ひ切つたやうに、然し、弱り切つた足どりでよろ／＼と店先へはいつて行つた。

『少し、そのう、お願ひがあるんですが――』

今は口を利くのも大儀さうにおづ／＼とかう云つて、ぼつねんとそこに坐つてゐた主人の顏を見あげると、主人は怪訝さうな顏をして、

『何だね？』

『實は、少し買つて貰ひたいものがあるんで――』

『何だい？　品物は――』

『ダイヤなんですが、ちよつと見てやつておくんなさい』

云つたかと思ふと、倒れ込むやうにぐつたりと傍らの椅子に腰をおろし、何思つてか左の靴の紐を解きはじめたので、主人はいよ／＼不思議に思ひながらも默つて樣子を見てゐると、やがて靴を脱いだかの男は、踵のところへはめ込みになつてゐた四角な革をとり外し、中の空洞になつたところからとり出して主人の前の机の上に置いたのは、おゝ、それこそ正しく例の青ダイヤではないか！

男はピエールといふ、もとルーブル宮殿の番卒で、不思議にも他の寶石類には眼もくれず、青ダイヤだけを盜み出したが、これをフランスで賣るにはあまりにその名が知られてゐたので、途中の危險を避けるために靴の踵をくり拔いてその中に藏し、巧みにロンドンへ上陸したものゝ、さて、自分はそれまで薄給の番卒、見すぼらしい服裝で一流の寶石商を訪れても對手にしてくれないだらうし、たとへ對手にしてくれたところで、有名な石だからすぐフランスの王宮から盜み出したことが判るだらうしと、毎日々々多くの寶石商の前に立ちどまりながら、はいりかねて素通りし、誰に賣りつけようかと苦心慘憺してゐるうちに僅かの旅費は費ひ果して、今ではその日の宿料はおろか、こゝ十日近くといふもの一片のパンさへ口にしない苦しい土壇場、たまりかねて、この猶太人の寶石商へ賣りつけようとしてゐるのだつた。

それは兎に角、一日青ダイヤを見た主人は開いた口が塞がらなかつた。

『うゝむ！』

唸りながら見すぼらしいピエールの顔と、世にもすばらしい青ダイヤとをまじ〳〵と見比べてゐたが、やがて脣のあたりに、にやりと薄笑ひを浮べて、

『成程、なか〳〵いゝダイヤだが――』とまたじろりとピエールの顔を見てから『一體いくらなら賣るんだね？』

『さあ、いくらで買つておくんなさる？』

『さうさなあ。――まあ二百磅かね』

主人の眼は鋭どかつた。このダイヤがどうしてこの男の手に入つたか、この男が今日で何日飯を食はずにゐるかといふことを、猶太人獨特の狡猾な眼力で、ちやんと見拔いてしまつてゐるのだつた。

『二百磅？――そいつは少し安すぎやしませんかい？』

『ぢや、どうだね？　文句なしに五百磅で買つて置かう。お前さんも生命がけで手に入れたんだらうから――』

五百磅――それはこのダイヤの時價の百分の一にも足りない値段だつたが、然し、ピエールにとつては稀有の大金であり、今の場合、生命の綱でもあつた。殊に、主人の意味ありげた言葉を待つまでもなく、うか〳〵持ち廻つてゐたら、それこそどんなことになるか判らぬと思つたので、

『ぢや、それだけで買つて貰ひませう』

『よろしい。――だが今こゝにそれだけの金がたいから、明日の朝お前さんの許で、金と引き換へに貰ふことにしよう。宿はどこだね？』

そこでピエールは宿の名を教へてから、青ダイヤを懐中にしてそこを出た。今にもばつたり倒れさうなよろ〳〵した足どりで。――

翌朝、約束通り五百磅の金をもつてピエールの許を訪れた猶太人は、戸をノックして部屋の中へ一足はいるなりあつと驚いた。ピエールは、彼が金を持つて來るのを待ち切れずに、燦然と輝やく青ダイヤを、右手にしつかと握つたまゝ餓死してゐたからである。何といふ皮肉だらう！

だが、猶太人の驚ろきはほんの瞬間だけだつた。彼はすぐにたりと笑ふと、硬直したピエールの右手から無理矢理に青ダイヤをもぎとり、何喰はぬ顔をして出て行つた。

五

モスコーの國立劇場『白鳥座』の舞臺では、今し、ロシヤ随一と云はれた名女優アンナが、麗はしく粧つた十八の美貌と、綾羅に包んだ豐艶な肉體とを、輝やく脚光に曝らしながら、得意の『花踊』を踊つてゐるところだつた。立錐の餘地なきまでに詰めかけた觀客は、唾を吞み、手に汗握つて、まじろぎもせず舞臺の上にその視線を灼きつかせてゐる。

瀏喨と聞えて來る音樂の音につれて、踊りの節は次第に進

み、やがてこの『花踊』の中でも、最高潮とも云ふべき最も美しく、最も華やかな場面となつた。今はもうアンナの美貌と、艶姿と、その妙技とに魅了せられた觀客たちが、恍惚として無我の境に遊んでゐる時、何事ぞ、突如として座席の中央と思しきあたりから、轟然たるピストルの音が起つた。途端、

『きやつ！』

たつた一聲、前額を擊ち拔かれた美人アンナの身體が、鮮血に染つてばつたりと舞臺の上に仰向けざまにぶつ倒れた。

觀客たちは、罵り、わめき、泣き、叫び、押し倒し、突きとばし、揉み合ひ、擲り合ひながら、我れがちに外へ逃げ出した。あとには、がらんとした舞臺の上で、驚ろいて驅けつけた劇場の事務員たちとともに、まだピストルを右手に握りしめたまゝの皇族カニトウスキー公が、呆然と氣拔けしたやうに立つてゐた。その足もとに横はつてゐるアンナの屍骸の胸には、おお、紛れもないあの青ダイヤ！

かの猶太人の手を離れた青ダイヤは、その後オランダの寶石商を狂死させ、その息子を自殺させ、フランセス・ビユーローといふ寶石商を頓死させ、ロンドンの銀行家トマス・フイリツプ・ホープの所有に歸して『ホープ・ダイヤモンド』或は『ブリユー・ホープ』と名づけられ、その孫ヘンリー・フランシス・ホープと結婚してホープ・ダイヤを身につけたオーストリアの女優に數々の不幸を齎らし、寶石商フランケル・シモンを種々不幸な目にあはせ、フランスの寶石商コローを狂死させてからカニトウスキー公の手に入つたのだが、公は今宵、その愛人アンナが『白鳥座』の舞臺に立つことになつたについて、ホープ・ダイヤを彼女の胸に飾らせたのだつた。

然るに、カニトウスキー公が兼て、疑ひを持つ、日夜焦慮懊惱してゐたことが、今夜證かになつたやうな氣がした。愛人アンナは滿場を惱殺する彼女の美しき舞の中から、チラチラと劇場の一方に媚く瞳を送るやうに見えた。そこには美男として評判のトルスキー大尉がゐた。

『この恩知らず奴！』

カツ！　となつた公は、我と知らずにピストルの引金を引いたのだつた。その實、公の疑ひは何等跡形もないものであつた。

公が秘密結社のニヒリストのために殺されたのは、この出來事のあつた一週間後のことだつた。

六

魔のダイヤ、ブリユー・ホープはその後ギリシヤの寶石商シモンの手に入つたが、間もなくそれをトルコの王アブダル・ハミツドに賣つた。しかし、シモンの賣り方が遲かつたであらうか、彼は十數日の後、自動車に妻と二人の子供を乘せ、自ら運轉して郊外をドライブ中、誤まつて斷崖から轉落、親子四人とも慘死してしまつた。

ヘミツド王は、それを磨き直させるために磨工のところへや



つたところ、何者にか盗まれたので、赫怒して磨工を牢獄に投じた。

一方、盗んだ男は間もなく捕へられて死刑に處せられ、その子供はコンスタンチノープルの街で群集のために私刑に逢つて縊り殺された。

寶石をとり戻したハミッド王は、その愛人サラマ・ヅバイバニに與へたところ、又もや、嫉妬のあまり、かのカニトウスキー公と同じやうに、ピストルをもつて一發の下にその愛人を射殺した。

トルコの革命黨が勢力を得て、ハミッド王が殺されたのはそれから間もなくのことだつた。

遂に寶石はトルコ革命黨の手に落ち、パリ及びニューヨークに店を有する世界的大寶石商カーチヤー兄弟商會の手を經て、ワシントン・ポスト紙の所有者エドワード・マクリーン氏の手

に移つた。價は五十二萬圓、一九一一年のことだつた。呪ひと惡魔の力を藏せるホープ・ダイヤは、こゝにはじめて新大陸へと移つた譯である。

舊大陸に於てこそ、いろ〳〵と禍ひしたが、すべての迷信を打ち消す新人の集りであるアメリカでは、まさか再びさうした魔力の現はれることはあるまいと思はれた。マクリーン氏夫妻も、人々が心配氣に今までの陰慘な物語を繰り返すのを、ただ一笑に附して氣にもとめなかつた。

ところが、この新所有者にも、相ついで樣々な不幸が訪れ、遂には一粒種の息子が、誤つて父の自動車に轢殺された。

さすがのマクリーン氏も氣を腐らして買手を求めてゐたところへ『それは面白い。是非私が持つてみよう』と現はれたのは、フランスのオートヴィユ氏だつた。氏もまた迷信などといふことには極端に開放された人で、人々の傳へる種々な物語を鼻の先であしらつてゐた。

然し、ホープ・ダイヤの陰慘な魔力は、三百年後の二十世紀の眞つ只中でも、誰憚るところなく振はれた。

オートヴィユ氏の所有に歸して、まだ三ケ月も經たないうちに、まづ、日頃それを飾りにしてゐた夫人がパリの眞中で、而も眞晝間自動車に轢殺され、次には次男が誤つて毒を吞んで狂死し、つゞいて令孃が游泳水浴場で溺死し、最後には次男が、父の射つた銃の外れ彈にあたつて、悲しくも盲目の身となつた。

僅か半年程の間に、かくまでも相踵いだ不幸つゞきに、さすが氣丈なオートヴィユ氏も、とう〳〵その寶石を賣り渡してしまつた。それは一九一五年、歐洲大戰がはじまつて間もなくのことだつた。

爾來、この惡魔の呪ひに閉ぢこめられた世にも怖るべきブリユー・ホープ・ダイヤモンドは、現在ではその行方が判明してゐないが、いづれ遠からざるうちに、また陰慘な物語を世界の社交界へ傳へることだらう。

――附記――

王侯貴婦人から、匹夫賤奴にいたるまで、凡そこれを手にするものは悉く呪ひ斃さずには置かぬ魔のダイヤ『ブリユー・ホープ』が、一六〇〇年頃印度のコーラー鑛山で發見された當時は、その目方百二十カラツトあつたが、其後轉々してゐるうちに磨き直されたり形を變へたりして、現在は四十四カラツト八分の一になつてゐる。その大きさに於ては、他に幾つもこれを凌ぐ名石があるが、その綠勝ちの青味を帶びた透明な色は、何と形容のしやうもない美はしさである。

こゝに記述した物語は、有名な寶石學者ハバート・スミス博士が『ブリユー・ホープ』について、永い間苦心して調べあげた來歷に、更に二三の考證を加へて綴つたものである。

…さしゑ　嶺田　弘…

一行博士

○世界中の海の鹽を全部取り出すとすれば約五百萬立方哩、この鹽で日本全土を包むと二十一哩強の厚さになる。

○各國の赤ン坊死亡率は、和蘭七人、英國八人、佛國十二人、獨逸十二人、日本は十七人で一番割合が高い。

○最近の調査によると香料の研究者や草花栽培者には殆ど呼吸器病患者が無いさうだ。夫は香料に殺菌力ある爲だ。

○東京京華中學生權藤平三君は、人の話をその音律に連れてそのまゝ活字に印刷する自動印字機を發明した。

○こばんざめは頭の吸盤で他の魚類に吸着くと容易に放さない。西印度諸島の土人は之に繩をつけ魚を捕る。

○我國の醫者の數は約四萬八千人、人口との割合では世界第一、醫學の本場獨逸でも四萬三千餘人に過ぎぬ。

○米國で販賣されて居る價の廉い飴の大多數は、腐敗した牛乳から製造される。

○昨年の映畫製作數は米國約四百本が世界一、日本三百七十本で第二位、次が獨英で約百四十本前後。

○丁抹ランゲット島の貯金銀行では開業祝に島の赤ちやん全體に一人當二圓五十錢記入の預金通帳を配つた。

○從業服で最も高價なものは米國飛行郵便の操縦士の服で、一揃が二千圓、それを着込むに三十分かゝる。

○婦人の晴着一揃は實に驚く一萬八千九百疋の蠶の恩惠をうけてゐるとは勿體ない。（本多岩次郎博士調査）

○人間の頭腦は六十歳を越えるまで成長する。

○我國官營鐵道で一年間に使用する石炭の量は三千七百萬噸で、此の價額は實に四億四千百六萬圓だ。

○世界の結婚費用は英佛獨が年收の約一割、米國二割、伊國四割、西國五割、露國八割、日本廿割、支那三十割。

家庭小説

燃ゆる花

菊池幽芳
小早川清畫



愛の巣にて

惠美子はどうして鎌倉の愛の巣まで、自分の身體を運んで來たかも、殆んど知らなかつた。それまで張つめて居た心が、わが安住の地に辿りついたと思ふと、すつかり弛んで、帽子や外套をかなぐり捨て、二階の自分の居室へ駈上るなり、長椅子の上へ倒れかゝつて了つた。

良人がまだ歸つて居なかつた事が、限りなく淋しかつた。

彼女は長い間長椅子の上に泣いて居た。それは悲しみの涙といふよりは、無念の涙であつた。あらゆる侮辱の言葉を投かけられ、この上もない侮蔑の眼で見下された事が、誇りのある若い女性の堪へられないところであつた。それも忍び難い屈從を忍び、自分の人格を頽子の足下に投げてまでかゝつたのに、それだつたのがなほいけなかつた。

惠美子はどんなに自我を捨てゝ了つても、信重の母とは到底調和の餘地のない、お互ひに兩立する事の出來ない女である事

を、ハッキリ知つたのだ。彼女には飽くまで額子夫人と闘ふか、信重を捨てるか、どちらか二つに一つを撰ぶより外に途のない事が明らかにされた。無論信重を捨てる事は出來ない、意地でもそれは出來ない。前途にはたゞ戰鬪があるばかりだ。そして勝利者は自分でなければならない。

彼女は信重の信實を疑ふ事が出來なかつた。母親がどんな手段を用ゐたところで、良人の心が動くものとは信じられない。一年だけ辛棒すれば、日本の法律の下でも、公然夫婦の名乘が出來るのだ。たゞ一年の辛棒なのだ。その間に良人の心に、どうして變化が起り得よう。

彼女は飽くまでも信重を信じようとした。が、そこに何かしら、漠然とした不安のある事をどうする事の出來ない事も事實だつた。良人はどんなに自分を愛し、自分に信實であるにしても、額子は母親である。血を分けた生みの母である。母子を繫ぐ目に見えぬ絆は、他人の手で絶つ事は出來ない。その上に良人は平民と違つた華族といふ特殊の階級に屬して居る。社會的地位もそれに附隨する。何か外國に比べて人の口が非常に煩さく、私的關係が小面倒に出來て居るらしい此國で、さういふいろ〳〵の羈絆から良人を完全に解放する事が、果して出來るだらうか、と云つたやうな危惧の念が、芽を吹き出した事も爭へないのだ。

良人を離る外には、誰一人顧るものもない彼女は、淋しい孤獨の念に襲はれて、早く良人が歸つて呉れなければ、どうにもならないやうな氣持になつて居る時、階下に待焦れて居たその人の歸つて來たらしい氣配を聞取つた。女中との話し聲はたしかに信重である。飛んで行つても良人を迎へたいと思ふ彼女でありながら、自分の身體は、彼女自からに拘はらず、鉛のやうに重かつた。

長椅子に顏を伏せたまゝ、惠美子は梯子段を馳上る良人の跫音を聞いた。

すぐ扉が開いて、

『惠美子さん！　どうしたんだい？』

彼女の顏は擧らない。

こんな事は今まで一度もなかつた事なので、信重は心配さうに傍へより添ふと、

『どうかしたのかい、氣分でも惡いのかい。』

優しい良人の聲を聞くと、惠美子はひとり手にこみ上げて來る啜り泣を、どうする事も出來なかつた。

『泣いてるぢやアないか。どうしたのさ。』

顏を擧げようとしても、どうしても擧る事が出來なかつた。高まるのは啜り泣の聲だけだつた。

信重は彼女を抱起して、

『ほんとにどうしたんだね。女中の話ぢやア東京へ行つて來たといふんぢやアないか。東京のどこへ行つて來たんだね。』信重にはもしやといふ心配が急に持上つたのだ。

『私、悔しいんです。……あんまり、あんまりなんですもの。……だけどやつぱり私が悪かつたのですわ。堪忍してね、堪忍して頂戴ね。』

『何だか、ちつとも分らないぢやアないか。何が悪かつたのさ、何を堪忍してあげるのさ。』

『私、あなたのお言葉もきかずに、今日お母さんを訪問して來たんです。』と、おろおろ聲で云つた。

信重の顔色はサツと變つて、

『母を訪問した？……しまつた！……あゝさうだつたのか！』

彼は太い溜息を漏らした上、

『母が君を認めなかつたのだね。……母には逢つたのかね。母が逢つてくれなかつたのかね。』



『お目にかゝりましたわ。だから……だから、私……』

『今母に逢ふのは全く機會が早いんだ。それで逢つちやアいけ

ないと云つて置いたんだけれども、逢つて來たものは仕方がない。』

『だから堪忍してね。……でもあなた、機會が早くはなかつたんです。なぜと云へば、その機會は永遠に來る筈がないんですから……』

『何だつて？……そんな事は信じられない、また信じたくもないが……。』

『あなたはまだあなたのお母さんをよく御存知ないのです、少なくもそれが私に關する限り。……あなたはお母さんが私を御覧になれば、お心が解けるに違ひないと、よく仰しやつて居らつしやいました。最近まだ機會が早いからとは、仰しやいましたけれども、最初のお言葉に印象づけられたものですから、もしやと冒險的にお尋ねして見たんです。そしてその結果は！……絶望以外の何ものでもありませんでした。私にはあなたのお母さんといふ方が、今日といふ今日ハツキリ分りました。』

『母が惠美さんを見て何と云つたのだね。私は惠美さんを見て、好意をよせる事の出來ない母とは、どうしても信じられないんだが……。』

『それは多分私があなたの妻でなかつたら、好意を持つて下すつたでせう。現に私が自分の身の上を申上なかつた間は、大變私を好遇して下すつたのです。それで私も何か幸先のいゝやうな幻覺を起して、身の上をお打明したのです。その瞬間にお母さんの態度はがらりと變つてお了ひになりました。』

『ウーム……』と、呻いて、『そして母の言葉は？』

『それは殘酷そのものでした。女性としての慈悲も情もお母さんにはございません。どんなに私が申上ても、私はあなたをほんとに愛して居るのではなくて、あなたの未來の爵位と、松尼家の財産を愛して居るのだ、歐羅巴や亞米利加の女優が、財産と爵位のあるものを誘惑にかゝつて居る通りの事を、私がしたに過ないのだと仰しやるのです。』

信重も激昂しながら、

『母がそんなひどい事を……それは心にもない事を云つてるんだ、どんな女かといふ事は惠美さんに一度接しさへすれば分る筈なんだ、母は強て自分の良心に盲目で居ようとするんだ。惠美さんは無論よく辯明をしたらうね。』

『私の申上る事などは何一ツ聞かうとはなさいません。お母さんはどんなに私を憎んで居らつしやるか分らないのです。賤民の子で、孤兒で、女曲馬師で、歌手であつた女は、お母さんの目には、人間の數ではないのです。きつと蟲けらか何かのやうに思つて居らつしやるんでせう。その證據に私のやうなものは、御自分の眼にはナツシングだと仰しやるんです！』

『ナツシングだつて？ ウーム。』

『それはこの上もない侮辱だといふ事を、あなたもお感じになるでせう。ですけれども私はこらへましたわ。何を仰しやられても、あなたのお母さんなのですもの、そして私はこんなにあなたを愛して居るんですもの……。ですからこゝはどんなに忍んでも、お母さんの憐れみを乞はなければならないと考へましたから、お母さんの足下にひれ伏してお願ひ申しましたの、私は恥も誇りも忘れて泣きましたわ。泣いてお願ひしましたわ。私はこの先どんな辛い修養でもして、お母さんのお眼鏡に叶ふやうな、立派な女になる覚悟でございますつて——身も心も低むけて、あなたの忠實な娘になり切る決心ですからつて——血の涙で申上ましたわ。』

『恵美さんがそれほどまでに云つてくれた？　それでも母の心が動かなかつたといふのかい。』

『動かない位の事ではありませんわ。私が血の涙で申上げた事が、どんな言葉で酬いられたとお思ひになります。それはたゞナンセンスの一語だつたのです。私が身を投伏して申上げた事は、お母さんのお耳にはナンセンスなんですつて——。』

彼女は思ひ出しながらも、悲憤の涙に咽ぶのだつた。

『それはあんまりだ！　あんまりだ！　お母さんもあんまりだ。そんな母とは思はなかつた。』

健助も蒼白になつて、身を震はすのであつた。

『お母さんは只お金で私をあなたから引離さうとなさるのです。そして最後に私にお云渡しになりました。私があなたの妻となるのを見るよりは、あなたが死んでくれた方がましですつて！』

『そんな事までも！……あゝ、そんな母ではない筈だが——。』

『私は罪人のやうに追出されて歸つてまゐりました。併し私だつて誇りのある女です。いくらあなたのお母さんでも、卑怯に默つて歸る事は出來ませんでした。私の最後の言葉として、血も涙もないあなたから受取つたこの侮辱は、きつとあなたに酬る日がございませう、私の復讐は今日以上である事を、御記憶下さいと申上てまゐりましたわ。』

『なに、そんな事を云つたのかい。』と、彼の烈しく燃ゆる瞳子を見て、ぞツとしながら『だが復讐なんて、そんな事を考へる必要はないよ。私と恵美さんとは、決して離れないんだから、それが立派な復讐ぢやアないか。』

『え……。』

『それとも恵美さんは何か——。』

『私、何もどういふ復讐をしようとも、またどうすれば復讐が出來るとも考へた譯ではありませんわ。ですけれども、あなた、私にはどうかすると、未來の事が夢のやうに暗示される事がありますのよ。私はお母さんと云合つてる中に、何だかお母

さんが私のした通り、私の足下に跪いて、泣いて私の憐みを求めて居らつしやる光景を、ハツキリ思ひ浮べたのですわ。いゝえ、思ひ浮べたといふよりは、幻影のやうにそこに見えたのですわ。』

信重は何か肌寒い心地を覺えながら、

『私はそんな恐ろしい幻影が、事實になつて表はれようとは想像されない。だつて來年日本の法律の下に立派に結婚さへして了へば、惠美さんは、きつと母の今日の無禮を許してくれる筈だと思ふから……母だつて觀念して



折れて來るに違ないのだから……。』

『ですけれどもお母さんは來年になれば、あなたを私から完全に引離す事が出來ると、確信して居らつしやるらしいのですよ。何がお母さんにさう確信させるのでせう。私、それが恐いのよ。』

『そんな事は斷じて出來ないぢやアないか。それは地球から月を離すといふ事だ。太陽から地球を奪ふといふ事だ。大自然にだつてそんな力はない。』

さう云つて信重は力強く惠美子を抱擁した。

惠美子は涙のひまに始めてにつこりして、

『私、あなたを信じますわ。あなたは私の太陽ですわ。決して……決して私を棄てないでね……。』

『そんな事を云へば、私は惠美子さんを怨むよ。』

『どんなことがあつても?』

『さうだ、どんなことがあつても。』

『きつとよ。きつとよ。』

惠美子は物狂はしいまでに、強く良人を抱しめた。

『併し母はあんまりだ。私はこれからすぐ母に逢つて、云ふだけのことを云はなければならない。』

『いゝえ、いらつしやらないで下さい。私の傍に居て下さい。もうすぐ暮れるぢやアありませんか。今夜は私の傍に居て下さい。』

『あゝ、惠美さんを放つたらかして行く事も出來ない。仕方がない……明日にしよう。』

『明日お母さんにお逢ひになる事も、考へて見ての事にして下さい。私、何の効果もないと思ひますわ。』

『たとへ効果はなくとも、惠美さんをそんなに待遇されて、默つて居る事は出來ないからね。云ふだけの事は、母に云つて來なければ……。』

『あなた、お母さんが私を憎んで居らつしやるのは、私の素性が素性だからといふばかりでなく、外に隱れた理由があるのではないでせうか。』

『隱れた理由とは?』

『假令ば、あなたの奥さんにと、お母さんがお極めになつて居らつしやる方でもあるんぢやアないでせうか。私、そんな氣がしますわ。それで極力私といふものを、あなたから引離さうとなさるんぢやア……。あなたにはお心當りがない?』

『心當りなどはちつともないね。それは母にして見ると、內々擇んで居る女があつて、それを私に押つけようとする肚で居ないとは云へない。併し勝手に子の妻を擇ぶ權利は、斷然母親にないんだからね。現在妻のある私を、どうしやうもないぢやないか、子供ぢやアあるまいし。』

『でも、私、何だか心配ですわ。お母さんは私の敵としては、ほんとに恐ろしい敵ですもの。この先あなたから私を引裂くため、どんな事をなさるか、あなたがほんとにしつかりして、このひとりぼつちの私を保護して下さらなければ……。』

『大丈夫だよ。松尾家の相續權なんか、放棄したつて何とも思はない私なんだ。この世の中に何も恐れるものなんか有やアしない。安心しておいでよ。』

『え……。そのお言葉を忘れないでね。』

信重は返事の代りに熱い接吻を與へた。

芙蓉子

翌日信重は母を責めるため、若くは母に愬へるため、麴町の邸を訪問したが、多く留守勝の母は、案じた通り今日も不在であつた。歸りは夜に入るだらうと告げられたので、父に逢はうとしたが、父も不在だつたため、止むなく鎌倉へ引返すより外なかつたのである。

彼はその日母と或女とが、自分に取つて頗る重大な密談に耽りつゝあつたらうとは、想像する事さへも出來なかつたのだ。

或女とは頼子夫人の無二の親友、山路子爵夫人壽子を指さすのである。

惠美子の想像がそれに觸れた通り、果して頼子が信重のため擇んで居るのは、美貌と才藝の持主である壽子の愛孃芙蓉子に外ならなかつた。無論それが頼子の擇んだ女だといふ以上、第一の條件として、人並すぐれて美くしい娘でない筈はなかつた。



頼子夫人の父が九州の大名華族である事は前に記した通りである。一方壽子の良人山路子爵は、頼子の父の領した舊藩の支藩に領主だつた人で、つまり分家の關係にあつた。然るにこの

山路家はいつも財政難に累られ、本家である頼子の父の家に、度々その援助を仰いで居たほど、不如意の家計に悩まされ通しだつた。その不如意は一つは山路家が華美好であり、社交好であるためもあつた。頼子は五ツ年下の壽子と、親しい友であるといふよりは、寧ろ姉の如く愛し、また姉のやうな専制權を壽子の上に持つて居たのは、父の家の關係ばかりでなく、個人的にも、松尾伯爵夫人として、屢々經濟的援助を壽子に與へて居るためであつた。

美人の聞えの高い壽子夫人は、頼子夫人と共に社交界に輝やく明星の一ツであつた。若し二人が全然他人關係にあつたとすれば、それはきつと白眼を剝合ふ敵手同志であつたに違ひないが、壽子が姉の如く頼子を立てゝ居り、その下風に立つて居るため、何の風波もなく、二人の關係はいつもほんとの姉妹のやうな温たかさと圓滿さを保つて居たのである。のみならず、壽子は聰明であり、同時にまた策士——女で策士といふのも如何であるとすれば、假に陰謀家といふ言葉を用ゐてもいゝ。それほど強い意味ではないにしても、更に術策のある女で、頼子夫人を社交的にヨリ多く輝やかせるためにも、さま〴〵の手段を講じ、それが度々成功するところから、頼子の信頼を一身に集め、從つてまた財政的援助を、頼子から受ける機會も、ますます多きを加へつゝあるのであつた。

併し壽子夫人はまる三年前、東京の社交界を去つたまゝ今日に及んだので、彼女が再びその美しい姿を見せたのは、最近一週間の前に過ぎなかつた。壽子が三年前東京を去つたのは、當時白耳義大使に任用された良人と共に、そのころ女子學習院を出たばかりの愛嬢芙蓉子を伴つて、ブラッセルに赴いたゝめであつた。

壽子が今度娘を連れて歸つて來たのは、たゞ一時の歸省で、一ケ月の後には再び白耳義に歸る豫定なのであるが、こゝに歸朝早々の壽子夫人に取つて耳寄の吉報の持上つた事は、今度佛蘭西駐在の川村大使が、近々米國に轉任する事となるため、その後任に山路子爵と、伊太利駐在のS大使とが、候補者として擬せられて居るとの報道であつた。その報道が傳はると共に、壽子夫人が是非とも良人を佛蘭西大使に推薦すべき運動に取かゝつた事はいふまでもなく、一方頼子夫人がその援助のために最大の努力を試みつゝある事も、想像に難くあるまい。そしてそれには別に或大きな理由の加はつて居る事も、素よりだつた。

頼子が壽子の嬢芙蓉子を、信重の妻として擇ぶ事としたまでには、二人の夫人の間に完全な了解のあつた事はいふまでもない。それは最初には壽子の希望であり、頼子の意志がそのために動いたやうな形を取つて居るが、併し頼子の意中にも、始め

から芙蓉子があつたので、つまり信重と芙蓉子を結びつける考は、期せずして二人の女親達の肚にあつたと云つてよい。その上芙蓉子の胸に、信重に對する戀心の兆して居た事は、二人の母同志の話をまとめる上に好都合だつた。併しそれは昨日今日にあつた話ではなくて、芙蓉子が學習院を出たばかりの時だつた。併しその話に信重の父も、芙蓉子の父も與かつては居ない。たゞ二人の女だけの胸に秘められて居たに止まるので、素より信重もそれについて、何等知るところはなかつたのだ。

二人の母親達がこの話を表向にしようとして居る中、當時大學を出て間のなかつた信重は、俄かに支那公使館に行く話が纏つて、慌たゞしく支那へ出かけ、一方芙蓉子の父は同時ごろ白耳義大使として妻子を引連れ、赴任する事となつたので、話はそのまゝに寢せられて、今日に及んだ次第なのであつた。

親達の關係が關係なので、信重と芙蓉子は、幼いころから、互ひに相知る仲であつた。併し二人とも物心がついてからは、あまり度々逢つては居なかつた。大學生活の信重と、學習院生活の芙蓉子は、ほんの時たま顏を合はせる位で、信重は女學生姿の、そのころ運動のため、よく日焦のして居た快濶な芙蓉子を知づて居るだけであり、その後日本で顏を合はせる機會は全くなかつたので、女になつた芙蓉子を、信重は殆んど知らずに居たと云つてよかつた。併し二人とも幼い時から、互ひにいゝ感じを持合つて居たので、その後も絶えず顏を合はせて居たとしたら、信重の方でも或は芙蓉子と戀に落ちたかも知れないのだつた。

いや、殆んど戀に落ちかけた事があるといふ事實さへあるのだ。而もそれは最近の事で、但し日本ではなくて、白耳義でゝあつた。昨年歐羅巴の漫遊中、信重はブラッセルで一週間過したのだつたが、この間大使館のお客となつて居たので、毎日芙蓉子と顏を合はしもすれば、一緒に芝居も見物し、大使館に行はれたレセプションには芙蓉子とダンスも共にしたのだつた。彼は支那公使館勤務中、外交官生活に必要だといふので、すつかりダンスの稽古までして居たのであつた。

そのブラッセル滯在は、彼に取つて懐かしい思出の一ツであるに拘はらず、彼が諸子夫人のために、切に滯在を引留められながらも、急遽振切つて、ブラッセルを去つたのは、そのころに瑞西で友人と逢ふ約束のあつたのと、何かしら芙蓉子に對して、戀愛を感じさうになつて來たゝめ、なぜといふ理由もなしに、それを恐れて避けるためであつたのである。

信重が伊太利でわが惠美子を發見したのは、無論それより後であつた。そのころになると、芙蓉子の事などは、最早完全に忘れて居たので、要するに芙蓉子は彼に取つては、目の前を心地よく横ぎり過ぎた銀幕の一影像たるに過ないのであつた。

が、もしそこに惠美子といふものが表はれなかつたとしたら、二人の母親だちの意圖のまゝに、信重と芙蓉子の緣談は、何の障害もなく進行したに違ひないのだ。賴子夫人に取つては、さう思つて見るだけでも、どれほど心外であるかは察せられ、惠美子を目の敵のやうに取扱つた心持も、容易に了解される。

どんな手段を取つても、わが子はきつとこの女から奪ひ返して見せる——それは惠美子を見送つた時の、賴子夫人の決意であつた。



この決意を實行すべく、そして何等かの對策を講ずべく、その智惠を借りに訪れたのが、壽子夫人の許なのである。

壽子は暫時の歸省なので、目黑にある里方の家に逗留して居るのである。今朝電話があつて、待受て居たので、壽子が賴子を喜び迎へた事はいふまでもない。壽子夫人に取つては肝腎の良人の問題もあれば、娘の問題もあつて、なか〳〵呑氣にして居られぬ歸省なのであつた。

壽子は自から出迎へて、賴子を日本座敷へ導びき入れた。二人の最初の話題は、山路子爵の

榮轉運動のそれだつた。賴子は既に外務大臣夫人の了解を得た事、良人の伯爵はまた外務大臣から、既に或程度の言質を得たまでに、極力運動して居る事などを話し、明日はまた總理大臣夫人を、二人で訪問する打合せなどをしたのであつた。

賴子がそんなにまでして、山路子爵の榮轉に力瘤を入れて居るのは、一ツにはそれが自分達のために好都合を齎らすためである事いふまでもない。それは信重を佛蘭西大使館勤務にしようといふ下拵へのためで、壽子もそれを了解して居るのである。信重を惠美子から引離して、佛國へやらうといふ事に、彼女等の計畫の基調があつた。いふまでもなく、賴子は信重と惠美子の一條を、壽子にだけは、打明けて居るのである。



榮轉運動の話の一わたり濟んだところへ、茶を入れて芙蓉子が挨拶に出て來た。

芙蓉子は二十三といふ年の割には大人びて見えるのは、體格のいゝためもあらう。五尺二三寸といふ日本の女にしては大分高い方で、太つて居る方ではないが、肉がしまつて健康にはちきれさうな血色をして居る。女子學習院時代には運動のチャンピオンだつたので、取分けランニングでは彼女に及ぶものはなかつた。テニスや水泳などでも、決して人には讓らなかつた。競爭心の非常に強い女で、何でも人に勝たなければ承知が出來なかつた。遊戯でも運動でも、そこに競爭といふ事さへあれば、どんな競爭にも加はつた。クラスの成績もわるくなく、その上器量は若い時評判の美人だつたといふ母親に似て、母親の若い時には及ばないまでも、並すぐれた美人であり、學習院時代の評判は大したもので、男學生等に

騷がれた、名實共に掛値なしの才媛であつたのである。

女學生時代にはちつともお化粧などをしなかつたのが、學校も出た上、外國の空氣も吸ひ、歐羅巴の小巴里として知らるゝブラッセルの社交界に花と歌はれて、すつかり磨きあげて來た彼女は、女學生時代とは見違へるばかり、現代の若い男の崇拜の的となるに相應しい輝やかしい女になつて歸つて來たのである。

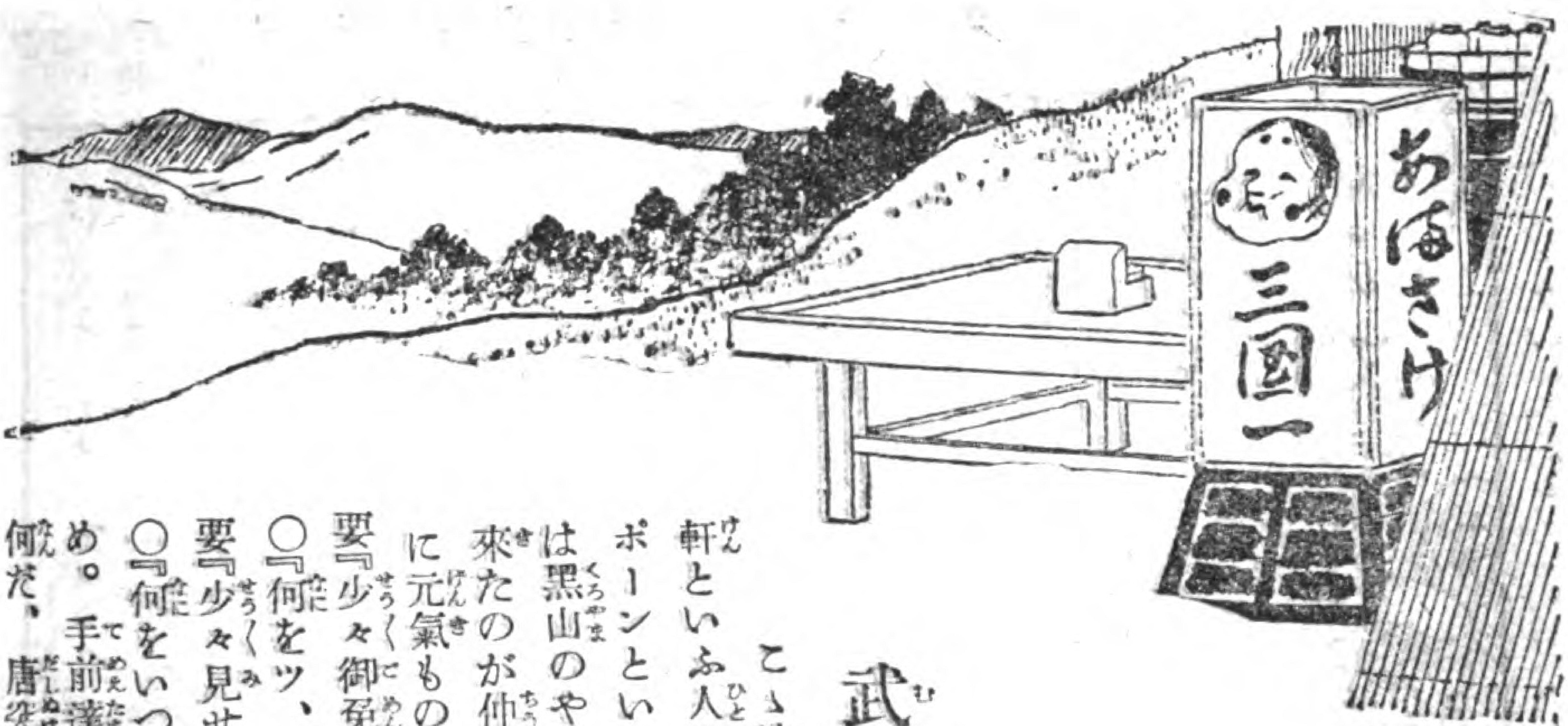
それは全く信重の配偶者として、未來の伯爵夫人として、十二分の資格と品位を備へた女だと云つて差支ない。美くしい女の好な賴子夫人が、芙蓉子をわが娘ほどに可愛がり出したに無理はなかつた。數年來自分の胸に大事に育くんで來た計畫が、曲馬團の娘上りのやうな女のために、こな〲にも碎されて了ふのかと思ふと、惠美子が憎くて憎くてたまらず、それだけにまた如何なる方法を講じても、惠美子をわが子から引離さなければ措ないと、心に誓ふのも、芙蓉子愛しさのためだつた。



賴子は今茶を入れて來た芙蓉子を融るやうな眼で見ると、

『芙蓉さん、今日は日本服ね。それがまたどんなにあなたに似合ふでせう。』

芙蓉子はお召の衣裳に、華やかな色彩の帶を、胸高に結んで居たのである。髪はウエーブして低く後で束ねて居る。くつきりと色が白く、どちらかと云へば丸顔の、瞳の力でこけて居るチャーミングな顏立で、現代式とも云へよう。鼻は一寸中低になつて居るが、決して惡い形といふのではなく、人に依つては却つて好まれる形である。眼に勝氣なところは見えるが、フランクな表情が、顏に浮んで見えるのは、乙女の純な心がまだ失はれて居ないためで、奥の知れないやうに見える母親の顏立



武勇講談 三家三勇士

大島伯鶴
井川洗厓畫

武者窓の失言

こゝは鎌倉雪の下の山田青龍軒といふ人の道場。エイヤツ、ポンポーンといふ烈しい竹刀の音。外には黒山のやうな見物。そこへやつて來たのが仲間の要助、年が若いだけに元氣もの。

要『少々御免下さいまし。もし〱』

○『何をツ、何でえ』

要『少々見せていたゞきたいので』

○『何をいつてゐやアがるんだ、奴め。手前達の見るものぢやアねえ。何だ、唐突に來やアがつて、尻なんぞを突きやアがつて』

要『いえ、別段貴下方の汚ない尻を突ツ突きたかアねえが、中を見てえんだ……』

○『何をツ、何を洒落たことをぬかしやアがるんだ。汚ねえ尻とは何だ。下らねえことをいふな。江戸ッ子を知らねえか』

要『へーえ、江戸ッ子でございますか。江戸ッ子といふものは、大層強いんですね。何も木戸錢を拂つて見るものぢやねえ。誰が見たつて差支ねえんだらう。して見りやア、見てえから少々見せてくれといふんだ。見せてくれたつてよからう。御託をならべやがつて、何をいつてやアがるんだ。江戸ッ子がどうしたといふのだ』大變な權幕になつたので、今度は江戸ッ子が驚いた。

○『何もそんなに言はなくつたつていゝ。ぢやア見ねえな』

要『何をいひやがる。乃公アこの二三年人間を食はねえんで、歯ぐきがウズ〱してしやうがねえんだ。まご〱すると喰ひ

附くぞ』

○『大變な奴が來やアがつた。二三年人間を食はねえと云ひやアがる』

要助、威張り飛ばして大勢の人を掻き分け、武者窓の所へ立



つて覗いて見たが、亂打の稽古とみえて、七組ばかりに別れて打合つてをりまする。何しろ、日本で今三人と數へられる和田平助政直先生から仕込まれて目錄に近い腕前のある要助、仲間なからも武藝のことが分るから、前の力で頻りに競合つてゐる二人を見て、

要『あゝ〳〵情ねえな。これでも劍術を使ふといふのだから、呆れたね。これぢやア煤掃きの手傳ひも滿足に出來やアしない。第一、この野郎、道具だけは恐ろしく立派だ。朱塗の胴に紋が二つ描いてあるが、はゝア一つは自分の紋で、一つは買馴染の女郎の紋だらう。劍術の道具に比翼の紋を附けるやうぢや、腕前も知れてゐる。呆れた奴だ、……それツ危ない。ほうら打たれやアがつた、馬鹿野郎』これを聞くと、劍術を使つてゐた男が驚いた。『何だ。うしろで馬鹿野郎と云

つた奴があるな』振返つたと思ふと、面籠手を脱つた若い武士、三八の竹刀を提げてそのまゝ道場を飛出してやつて來た。

武『これツ、誰だ、今、馬鹿野郎といつたのは……』四邊をじろりと睨み廻してゐる。

○『エ、旦那、先刻から勝手な熱を吹いてゐやアがるのは、この野郎でございます』先刻脅された江戸ッ子、口惜しまぎれに告口をしてゐる。

武『なにツ、此奴か』いきなり竹刀を振上げると、要助の背中をピシーリ打つた。

要『あゝ痛い、何をなさるんです。オ、痛い』

武『痛いとは何だ。なぜ神妙に見てゐない。道場の中を覗いて、馬鹿の白痴のとは何だ。不埒者め。貴樣、多少武藝の心得があるのだな。心得があればこそ、兎や角申すのだらう。さア道場へはいれ。道場へ……』

平助先生が決して道場へはいつてはならぬぞと言はれたのは此所のことだが、かうなると若いだけについその戒めを忘れ、どうせ敵の大之進、大次郎の樣子を見なければならないのだ、なアにあんな腕前なら大したことはあるまいと、高をくゝつた要助、強ひらるゝまゝに武士のあとから道場へはいつて來たのが一つの誤り。道場には二十二三人の若侍がずらりと列んでゐる。正面の高い所に坐つてゐる年若の武士、これが山田大之進の弟大次郎といふ者。それに向つてかの武士、

武『先生、若先生』

大次『何だ』

武『只今、此奴が武者窓から覗いてゐたから、吾々の稽古を兎や角と喙を容れる無禮者。いかさま武家奉公をしてゐる奴、多少心得もあるものと見受けまするが、誠に不埒な奴、懲しめのため只今道場へ連れ込んでまゐりました。拙者、御當家へ入門をいたしまして、今日まで三年の月日を費しまするが、未だ曾て人の頭を打つたことがございませぬ。此奴と試合つたならば、手前にも勝つことが出來ようかと存じます。この下郎との立合をお許しを願ひたう存じます』

大次『左樣か。さういふ奴は向後のために打据ゑておやんなさい』

武『委細承知いたしました……さア立上がれ、下郎。立上がれといふのだ』

要『エ、もしお武家樣え』

武『何だ』

要『あの高い所に坐つてお在での方は、あれは何方で……』

武『あれは當道場の御師範代山田大之進先生の御舍弟山田大次郎先生と申上げる』

要『へえ、あの方が山田大次郎樣と仰しやるのですか……なアんだ。アハヽヽヽヽ、違ふ』

武『なにツ』

要『ヘツヘヽヽヽ、どうもおやかましうございました』

武『何だ』

要『おやかましうございました。左様なら』そのまゝ要助は行かうとする。

袋叩きの惨

　要助の前に立塞がつた件の武士。

武『これッ、貴様踊らうといふのか。許さぬぞ。待てッ』

要『へえ、どうか一つ御勘辨を……』

武『いや、ならぬ。道場に向つて馬鹿の白痴のと無禮を申すやうでは、腕に覺えがあるのだらう。さア立上がつて勝負をしろ。勝負をしないうちは、この道場は出さぬから、左様心得ろ』ここで要助がハッと思つたのは、あゝ成程先生が決して道場へ入つてはならないぞと仰しやつたのはこゝだな、こいつは困つたなと氣がついた。だが、えゝ仕方がねえ、この野郎に負けておけばそれでよからう、かう思つたから、

要『ぢやア御相手をいたします』と、素直にうけた。

武『さア道具を着けろ』

要『へえ、もう着けたつて着けねえッたつて同じことで、このままで宜しうございます』

武『なにッ、貴様何か、素面素籠手の試合をする氣か。生意氣な奴だ。よし、其儀ならば……』と被つてゐた面を脱り、籠手をとつて其所へ置き、さて竹刀を執つたかの若い武士。

武『さア參れ、隙があつたら打つて來い』

要助も竹刀を執つて中段に構へて見たが、いやどうも呆れ返つた。先刻武者窓から見たよりも下手な奴ですから、

要『おやおやこんな奴に負けなくちやならねえのか。情ないな。少し性立つた奴に負けるのならいゝが、こんな生意氣な奴一人ぐらゐ、引ッ叩いても何の事もあるまい』

　そこが下郎の淺慮。かう思ひ立つたから、ヤッといふ聲諸共に要助の打込んだ竹刀、流石は和田平助から素面素籠手で痛い思ひをしながら稽古をした腕前、物の見事に面へ打を入れました。アッと後へ退がつたが、相手の武士『參つた』の聲が出ない。たゞ眼を白黒してゐるから、山田大次郎が見かねた。

大次『これッ、中村、貴公なぜ參つたと言はぬ』

武『はッ、參りました』

大次『拙者に言ふのではない。向ふにゐる下郎にいふのだ』

武『參つた』

大次『何だ、未熟者め……』と言ふと、ヒラリ師範臺から飛下りた大次郎。

大次『これ下郎、貴様はなかなか適れの腕前、拙者が相手になる。さア來い』

要『冗談仰しやつちやアいけませぬ。旦那方のお相手をするやうな腕前の者ではございませぬ。江戸へ參りまして武家奉公をいたしましたお蔭で、幾らか劍術の眞似を覺えました。生兵法でございます。どうか御勘辨を……』

大次『默れッ。そんならな此家の門弟を一人負かした。一人でも門弟を負かした以上は、其方を打負かすまでは此道場を出す

ことはならぬ。それが道場の穢だ。來い！』要助、弱つた。これは大變なことになつた、それでは今負けておけばよかつたのにと思つたが、もう間に合ひませぬ。據んどころなく竹刀を取つて澁々立つたが、『ヤツ』と互ひに位取りをしてみると、要助がまた驚いた。この山田大次郎といふ奴も全くのへボ劍術。おや／＼、田舍の劍術の道場などといふものは、情ねえものだな。師範代などと威張つてゐる奴が、こんなに下手ぢやお話にもならねえ。併し、此奴に勝つと、又他の相手が出て來るだらう。さうなつては事が面倒。殘念ながら此奴に負けて行かう』……かう考へたから、ボンボーンと二つ三つ打合つたかと思ふと、要助、持つた竹刀をガラリとそれへ取落し、『參つたッ』と、道場へ兩手をついた。その途端に、山田大次郎、右手に持つてゐた三八の竹刀で、いきなり要助の横面をピシーリ強かに引ッ叩いた。

要『アーッ……何をなさる』といふうちに、それッと聲を掛けたから、二十二三人の若侍、何れも竹刀を持つてそれへ躍り出で、起上がらうとする要助の向脛をいやといふほど引ッ拂つた。バッタリそれへ倒れた要助、

要『やア何を卑怯な眞似をしやアがる』と、云はせも果てず、上からのしかゝつて袋叩き。ピシーリピシーリ。哀れや要助は髻切れて散ばら髮、眉間は破れて血が流れ、おまけに唇を噛んだから口からも激しく血が流れ出る物凄さ。

要『ウーム、卑怯だ。さア殺せ』

大次『えゝい猪口才千萬。劍術の道場へ來て、兎や角と喙を容れる無禮者め。打据ゑろ。各々、此奴を打つて／＼打据ゑろ』

『心得ました』と、尚も折り重なつて打叩く、蹴る。要助は道場を鞠のやうに轉がつてをります。武者窓から見てゐた見物、

甲『おい』

乙『えゝ』

甲『大變なことになつたな。可哀相に、ひどい事をしやアがるぢやアねえか。參つたといふものを、あんなに毆るといふのは卑怯な仕方だ……やい／＼、こん畜生め。そんな酷い者咎めをするな。參つたといふものを毆るといふことがあるか』

乙『さうだ／＼。此方の仲間は確かに劍術は出來るらしいのだが、何と思つて負けてやつたのか。いゝ加減にしたらよささうなものだ。今に殺されてしまふぞ。可哀相に人が殺されるのを見ちやアゐられねえ。さア行つちまはう／＼』と、ゾロ／＼武者窓を離れて、三々伍々立去ります。

土足で踏込む

こちらは平助、安宿の一室に待てど暮らせど要助が歸つて參りませぬから、

平『爺さん、しやうがねえ。野郎を使に出したんだが、歸つて來やアがらねえ。雪の下はたしかに此方へ行くんだな』

爺『さうだよ』

平『勘定はこゝへ置くぜ』
爺『復割、これぢやア大變多いぢやねえか』
平『なアに、餘つたのは茶代に取つておいてくれ』
爺『濟まねえな。こんなに茶代になると思やア、まだお茶の附けやうがあつたものを』
平『何を言つてやアがるんだ。今になつて間に合ふか。その代り、奴が履いて行つた下駄だけは貰つて行くよ』
要助の三度笠に脚半巾掛草鞋、總べて要助の分を片手にさげ、身ごしらへして草鞋を履きしめた和田平助先生、宿屋を出てブラリ〳〵と雪の下の方へ向つて來ると、
甲『ねえ、吉兵衞さん、可哀相にあの仲間はもう死にますぜ。殺されますね。たとひ竹刀とはいひながら、あの一刀流の太い長い竹刀で、若い武士二十二三人に引ツ叩かれりやア、どんな者だつて參つてしまひますよ』
乙『さうさ、ひどい事をしますね』と、町人體の二人。この事がひよいと平助の耳にはいりましたから、
平『もし、今のお話は、それは一體どういふ譯でございます』
甲『あゝお仲間さん、お前さんもやつぱりおなかまだが、お前さんのやうな姿をした人が、この先の山田樣の道場で、今袋叩きになつて、もう殺されさうなのでございますよ』
平『へえッ、して、その男の顏つきは……？』

甲『さうさ、お前さんよりは一つ二つ年上のやうだが、ちよつと丈の高い色の淺黑い、顔の角張つた男だ』

平『へえ、それでは頤の所に黑子がありやアしませぬか』

甲『あゝあつた〳〵。確かに黑子があつた。毛が三本生えて、眞中のが渦を巻いてゐた』

まさかそこまで見た譯ではありますまいが……。

平『それは大變、確かに要助に違ひない』と、そのまゝバラバラツと横ツ飛びに飛んで行く平助先生。これを見た見物、

甲『やアあの人は、あの殺された仲間のなかまに違ひない。駈けて行つたが、どうなるか。これは面白くなつて來た。それツ行つて見ろ』と、後からゾロ〳〵ゾロゾロ〳〵ツついて來る。

やがて雪の下の假構へ、山田青龍軒の道場へ駈けつけて來た和田平助、玄關へ立つて耳を欹てると、道場の方で『ヒーツ、ヒーツ』といふ要助の聲。



平『願ひます、願ひます。お頼う申します』聲をあげて案内を請ひましたが、門弟達は殘らず道場に集つてをりますので、誰

れ一人執次に出る者がございませぬ。愚圖々々してゐれば、要助の命に係はる大事。脚半、甲掛、草鞋を玄關の脇へ置くと、そのまゝ土足で道場へ飛込んで來た平助、黒山のやうにのしかゝつて要助を打ち叩いてゐる侍共を、右と左に引つ拂つて、要助の上に馬乘になると大手を擴げて、

平『待つた、待つた〳〵。もし皆さん、待つて下さい』

武『あゝびつくりした。貴様は何だ』

平『はい、私はこの者の連れでございます。一體、此奴がどういふ無禮なことをいたしましたか知りませぬが、どうか一つ御勘辨が願ひたうございます。お話し申すも長いことでございますが、此奴と私とは別段血を分けた兄弟といふのぢやございませぬけれど、生れた土地が一つで親兄弟に頼まれまして、二人揃つて國を離れ、江戸へ出て武家奉公、辛抱したお蔭に些とばかり給金を溜めまして、これから國へ歸つて田地でも買ひ、親兄弟を安心させようと、只今歸國をするその途すがら、此奴に萬一の事がございましては、親達に對して私が申譯がございませぬ。門前の小僧習はぬ經を讀むで、劒術の先生の所へ奉公をしてゐましたので、見樣見眞似で竹刀を振廻すことを覺えやアがつたばつかりに、考へのねえこの野郎が、此方樣へ飛込んで、かういふ目に遭ふといふのも自業自得、決してお怨みとは存じませぬが、どうか命ばかりはお助けの程を願ひたう存じます』



△『ウム、なるほど、先生どういたしませう』

大次『ウム、これだけ打据ゑたら、もう後悔をして、此後は劒術の道場などに喙を容れまい。許してやんなさい』

△『これ、先生があゝ仰しやるから、許してやる。此後もあることだ、道場なんどへ足踏みをするなと申附けろ。』

平『有難う存じます……要助、手前が道場などへはいるから惡

いのだ。それだから、貴様に堅く言附けたぢやアねえか。しやうのねえことを仕出來しやアがつた。さア立て』これを聞くと要助は首をふつて、

要『兄い、口惜しい。參つたと云ふものを打ちやがつて、あゝ口惜しい。濟まねえが、刀の目釘の續くかぎり此奴等死人の山。その刀を私に貸してくれ』と、いかにも口惜しさう。

平『馬鹿、何をいひやアがるんだ。だが何か、參つたといふものを、袋叩きにしやがつたのか』

要『ウーム、さうなんだ。卑怯な奴等だ。口惜しい』

平『さうか。ウーム、よし、手前の敵は乃公が取つてやるから、默つて其處に寢ころんで見てゐろ……もし此方樣の先生と仰しやる方は何方でございます』

大次『身共山田大次郎だ』

平『あゝ貴下が此方樣の先生ですかい』

大次『いや、拙者は師範代を勤めてゐる山田大之進の弟大次郎と申す者だ。それがどうした』

平『へえ、此方樣では、參つたといふものを、手ひどく大勢樣で打つ叩く御流儀でございますか』

大次『なにッ』

平『參つたといふものは、死んだものも同樣。それを寄つてたかつて袋叩きにするとは、さても無慈悲な事をなさいますね。今も申上げる通り、國を出る時や二人連れ、無瑕の身體で江戸へ出て、無事に奉公を仕了せ、これから國へ歸つて兩親を安心させようといふ矢先き、相棒の此奴が若し不具にでもなつた日にやア、此奴の親達に私が言譯がございませぬ。濟みませぬが、死なば諸共と約束をして國を出たのでございますから、この野郎と同じやうに、私も打つたゝいておくんなせえ。さうすりやア、國へ歸つて怨みッこがなくてようございますから……』

大次『やアおのれッ、神妙に許してくれろと詫入るから、許してやれば猪口才千萬なことを申す奴。望みとあらば不具にいたして遣はす』

平『どうかお願ひ申します……さア要助、隅ッこに、轉がつて見てゐろ……さアどうか山田先生、御存分に願ひます』側に落ちてゐた竹刀を執つた和田先生、ピタリと付けて對手はとみると、大次郎は『おのれ』とばかり大上段に振りかぶつたが、隙だらけ。

道場荒らし

平助は對手を前においてせゝら笑つて、

平『おい要助、手前こんな野郎に負けたのか。情ねえぢやアねえか。この野郎、劍術を知らねえや』

武者窓から見てゐた大勢の見物。

○『おーい役割、しつかりやつてくれ。立派に敵を取つてやれ。奴、頼むぜ。奴負けるな。フレーツ、フレーツ、フレーツ……』その時分、フレーくなどとは言ひますまいが……『ヤツ』といふと打込んで參りました山田大次郎。一方は何しろ劍を執つては無

柔の名人といはれる和田平助、無造作なもので、パッと體をかはしながらピシーリと横面を引ッ拂つた。アッといふと、大次郎、眼が眩んでヨロ〳〵ヨロッとよろめくやつを、尚も足を掬つたから、ドシーンと筋斗打つてそれへ打倒れる。起上らうとする所を、又も足をあげて胸のあたりを蹴上げたから堪らぬ。

『ウーム』といふと、目をまはしてしまつた。

『奴、えらいぞ。奴、えらいぞ』武者溜では見物が大喜び。

平『要助、どうだ。もう片付いてしまつた。まだ大勢揃つてゐるぢやアねえか。汝等ア五百羅漢の土用干ぢやアあるめえ。一人二人は面倒だ。揃つてかゝつて來い。やい、此奴等ア鳩が豆鐵砲を喰つたやうに、目ばかりパチ〳〵しやアがつて。どうしたんだ』と云つたが、この勢ひに八十何人の者、どうすることも出來ない。

○『大變な奴でござるな。いかゞいたさう』

△『如何いたさうといつて、到底吾々の敵ではござらぬ』

慄へ上つてゐる連中を後目にかけた平助先生。

平『態を見やアがれ。意氣地のねえ奴等だ。さア要助、何奴も此奴も相手になる奴は一人もねえんだ。さア行かう。だが、手前はさん〴〵毆られて、彼奴等におもちやにされたのだ。構はねえから、景氣をつけて笑つてやれ。』

要『笑へつたつて、この口の所が腫れてしまつて笑へねえ』

平『意氣地のねえことをいふな。大きな聲を出して、景氣をつけ

へてゐる。

平『もう用がなけりやア歸るよ……さア要助、行かうぜ』そのまゝ要助を引ッ擔いで玄關を出る。振返つて見ると、門の標札、立派な欅の板に『一刀流指南所山田青龍軒平盛純』と達筆に認めてある大看板。和田平助もまだ年が若い。

平『オ、く〜大きな看板を掛けやアがつた。何だ、こんなもの……』

要助をそれへおろし、その看板に兩手をかけて引ッ外し、足を掛けると力一ぱい、ピシーリ二つにへし折つて、ガラく〜ッと投げ出した。

平『態ア見やがれ』と云つたが、平助先生、よつぽど蟲の居所がわるかつたとみえます。そのまゝ要助を擔いで、悠々と鎌倉の町を立去りました。



三國一の名物

町外れの立場茶屋の前まで來ると、幸ひあつた一挺の駕籠、それを雇つて要助を乘せ、御關所前まで急ぐことになりました。といふのは、彼等に恐れをなしたやうに思はれるのもどうかと思つて、鎌倉の町は悠々と歩いて來たが、町を出外れると、彼等門弟達何れも卑怯な奴、大勢して追駈けて來るは必定、彼等は恐るゝに足らぬが、萬一飛道具の用意でもあられては面倒と思ひますから、要助を駕籠へ乘せると、道もない近い所を山越えをして、翌朝の丁度四つ少々前に箱根の御關所手前へ辿り着きました。流石の平助も駕籠に附添つて、道なき所を走つて來たので、茨で膝頭を引ッ搔いたか無數の疵。峠の茶店の前へ來ると、

婆『お休みなすつていらつしやいまし。お掛けなすつていらつしやい。見晴しのいゝ所でございます。三國一の名物甘酒は此方でございます』と、茶店の婆さんが頻りに客を呼んでゐる。天氣はよし、東海道上り下りの人がぞろ／＼通る。こゝで駕籠を返して、



平『要助、少し此所で休息をして行かう。しつかりしろ。もうこの箱根を越えれば、今夜は三島泊まり、宿へ着いたら、ゆつくり療治が出來るぞ。少し此所で休んで行かう……御免よ』と、平助が先に立つてはいる。

婆『入らつしやいまし。お仲間さん、お上りかえ』

平『おゝ上りだ』

婆『おや、お友達はどうしなすつたのだえ』

平『なにね、この前の立場で、乃公がちよいと買物に行つてゐる間に、雲助を相手に喧嘩をしやアがつて、相手が相棒

手だ、ひどい怪我をしたんだ』

婆『本當に若い人といふものは、しやうがないね。大した怪我をしたのかい』

平『なに、怪我は大したことはないが、打ち所が惡かつたと見えて、歩くのが難儀なのだ。少し休ませて貰ふよ』

婆『さア〳〵、お休みなさい』

平『婆さん、濟まねえが、甘酒一ぱいくんねえ』

婆『へい、畏まりました』

平『おい婆さん、釜の中へ水ッ涕が垂れたぜ』

婆『へい〳〵、度々でございますよ。それでも甘酒は三國一……』

平『ふざけちやいけねえ……要助、甘酒を飲まねえか』

要『私は飲みたくございませぬ』

平『意氣地のねえ野郎だ……婆さん、この莚を貸してくんな、この葭簀のうしろの所が見晴しがよくつて、日當りがいゝ。此所で少し友達を寢かしてやるから……』

婆『あゝいゝともね。ゆつくり寢かしてお上げなさいよ』裏手の見晴しのいゝ所へ莚を敷いて、要助をそれへ寢かし、

平『どれ、疲れた。乃公も一寢入りやらかさうか。ドツコイシヨ』と、平助、自分も其所へゴロリ横になつたが、道なき山を越えて來たので、身體綿の如くつかれてゐる。間もなく起る鼾の音。

平『グーツ』要『ウーム』平『グーツ』要『ウーム』

鼾と呻り聲との掛合で、ぐつすり寢込んでしまひました。

婆『お休みなすつていらつしやいまし。お掛けなてすつていらつしやいまし。三國一の名物の甘酒は此方でございます』

馬子『いやだいやだよ馬力いやだ、手綱取る身で日を暮す』

シヤン〳〵シヤーンと驛路の鈴の音。馬子唄を聲自慢に唄ひながら通つて行く。

折しもワーワツといふ鬨の聲。見れば八十餘名の武士がこなたをさして乘込んで來る樣子。これ、何者でございませうか。

箱根山上の一大活劇は次號のお樂しみ。(つゞく)

米國人の憧憬

上山草人



『マウンテン・フジ』アメリカ人は日本の富士山に對して非常な憧れをもつてゐる。だから雜誌『富士』が創刊と同時に米國の書店に現れた時は、在米日本人は勿論、米國人男女は『愛する日本の雜誌』とばかり奪ひ合ひの盛況を見た。云ふ迄もなく僕も其一人であつた。日本懷かしさに僕は貪る樣にして讀んだ。『富士』は如何にも日本人らしい氣分の溢れた面白くて堪らぬ雜誌で大變な評判である。吾國の代表雜誌としてキングと並賞されてゐる『富士』は、今や全く各家庭になくてならぬものとなりました。切に皆樣に御愛讀をお奬め致します。

死線を越えて

結核患者の手記

(茨城) 野中政治

澤村博士に感謝の辭

私は三十二歳になる會社員ですが右肺尖を患ひまして、缺勤半年、絶對安靜を命ぜられて居ります中、胃腸を害し、脚氣を誘發して、殆んど世の中への望といふものは全部奪はれた思ひでした。苦痛の數々を擧げて見れば、頭痛、頭重、貧血、動悸、食慾不振、腹鳴り、倦怠、不眠、便秘等です。

「若素」服用直後に現れた喜ぶべき兆候は、第一に便通がよくなつた事です。十日目頃には家内中が驚くほど顏色がよくなつて、全身的の倦怠感が殆んど消失しました。勿論食慾は進む、腹はまことにセイ／＼する。心臟の工合もよほど變つて、動悸がなくなりました。二十日目になる昨今は夜間の睡眠が充分とれるので、勢ひ頭もよほど輕くなりました。

肺尖部の疾患はよほどの持久戰を覺悟して居りますが、身體榮養の門戶がかく良好ですから、もう一息と喜んでゐます。以前の牛の步みと違つて、日一日と皮を剝ぐやうに快くなつて行くのは、正に「若素」のお蔭と感謝してゐます。それに何と安價なことでせう、安い物に碌なものはない！ 病氣の經過なんて報告するほど目に見えるものかと思つて、しまひ込んでおいたこの葉書を、どうしても上げねばならなくなりました。世の爲人の爲に。

野中氏の手記を讀みて

「若素」は東京帝國大學名譽教授、澤村眞博士が、御自身の發明特許による米胚の有効成分に、最近歐米の學界に於て非常に榮養價と醫藥的効果あることを發見せられました稀有の有益菌ヘーフエの全成分を併せて製られましたもので、全然在來の榮養劑には見られぬ成分を有してゐます。その特徴は細胞原形質賦活作用といつて、身體器官の組織細胞を刺戟して、それ／＼持前の機能を旺盛にさせるのですから、先づ**胃腸の働きが昂められて食欲が非常に進み、消化吸收が活潑になつて榮養狀態が一變する**と共に、病氣で害はれてゐる細胞に活力を與へ、白血球を激增し、病原菌を死滅せしめますから、**肺結核は勿論、慢性胃腸病、脚氣、姙産婦、虛弱乳兒等、その外あらゆる病中病後の衰弱者**にとつて自力的に恢復に向はしめます。これについては豐島醫學博士、百合野醫學博士、森工學博士等をはじめ、多數醫家の實驗推奬するところで、その成分中の細胞賦活作用は今や治療界に革命を齎らさんとしてゐます。



發賣元「榮養と育兒の會」とは、わが國民の健康增進と、世界文明國で最高位にある乳兒死亡率低減の目的により設立されましたもので「若素」が至廉なのも本會の目的がそこにあるからであります。醫家及び服用者の方々は、一般營利事業と混同せられず、この意義ある愛國的運動を援助せられんことを望みます。

「若素」は本社代理部でお取次します。價格は粉末一月分一圓六十錢、三ヶ月分用四圓五十錢、錠劑二三〇錠入一圓六十錢、大瓶八〇〇錠入五圓、送料內地十二錢、海外四十五錢、粉末最大瓶家庭德用八圓五十錢、送料十八錢、海外五十五錢、東京小石川區駒込大日本雄辯會講談社代理部(振替東京六六二九番)か、發賣元、東京市芝公園十二號地ノ一號「榮養と育兒の會」(振替東京一七〇〇番)へ御送金次第急送します。



落語

垢角力

春廼家朧演

さしゑ 和田邦坊

お角力取のお角力さんは大したもので、天下の力士とか申しまして、どんな高貴の御方の前へ出ましても、裸體の儘で胡坐をかく。それで別段失禮にならないのださうで、それが出世をすると、腰へ注連繩を張ります。出世をして腰へ注連繩を張るのは、お角力と御神木ばかりでございますな。尤も惡い事をして腰へ注連を張られるのがございます。其注連繩は鐵で出來て居る、そんな注連繩は感心いたしませぬ。近頃はラヂオで本場所の相撲を放送いたしますが『只今双方睨み合つて居ります。手を下ろしました、アツ、立上りました〳〵、左四ツ、土俵の眞ン中一呼吸……』などと、まるで土俵で相撲を取つてゐる有様が、目の前に見えるやうです。誠に調法なもので、ラヂオで放送するやら、皆んな見に行かないかと思ふとさうでございませぬ。放送であのくらゐだから、一つ本物を見てやらうといふので、好きな人は素より、今まで相撲を見たことのない人まで場所へ行く。ラヂオのお蔭で場所は大入で、相撲協會が大儲けで、配當が多いさうで……是れは餘計なことですが、力士が見合つて正に立上がらうとする所なとは、見てゐても力瘤が入ります。『常の花ーツ、しつかり頼むぞ、――乃公が付いてゐるぞーイツ』

付いてゐたつて仕方がないが、あれが愛嬌にもなり力瘤にもなります。さうかと思ふと、

○『ソレツ立上つた、左四つだ〳〵、旨い〳〵、ウーンと寄つた、寄つた〳〵』

△『モシ〳〵お前さん、私の帶を攫んで押しちやアいけませぬよ』

○『いけねえことがあるものか、今大事の所だ、ウーンとウーン』などと前の人の帶を攫んで押してゐる人がある。お客さんでさへさうでございますから、取るお角力の身になつたら心配です。數萬の見物が見てゐる眞ン中で取るのですから、誰でも勝ちたいのが人情、けれども勝つ者ばかりでは見物は面白くございませぬ、負けるのがあるから人氣も立つので……

○『ヤア關取、初日はどうだつたい』

力士『ヘイ、勝ちやした』

○『お前さんがかい』

力士『イエ先方で……』

○『何だい、それではお前が負けたんぢやないか』

力士『早くいへばさういふ譯で……』

○『遲くいつても同じことだ……二日目

はどうだつたね』
力士『此方でごんす』
○『勝つたのかね』
力士『負けやした』
○『だらしがないな、三日目はどうだい？』
力士『こけやした』
○『オヤ〳〵、四日目は』
力士『突出されやした』
○『ます〳〵だらしがないね、五日目は』
力士『投げられやした』
○『仕様がないな、十日の間に勝つたことがあるのかい』
力士『一度もございませぬ』
○『オヤ〳〵情けないな、弱い角力だな』
力士『イエ先方が強いので……』

こんな角力ぢや張合ひがありませぬ。今日では東京大阪と合併いたしまして、一つの相撲協會になつて居りますが、まだ別々になつてゐた時分のお話でございます。大阪のある相撲取、強いので大層評判が宜しうございます。贔屓の旦那方が、

○『關取、お前は體格も好し、力も強くつて相撲上手、萬事抜け目がない、お前のやうな力士が、此の大阪で愚図々々してゐては出世が遲い、東京には幾らも強い相撲があるから、一つ東京へ乘込んで、本場所で修行をしたら、三役は愚か、大關にもなれる、東京へ行つて修行してお出で……』
力士『有難うごんす、それでは一つ東京へ行つて修行をして參りますが、留守中は女房を殘して行きまするで、どうか何分宜しくお願ひ申します』
○『あゝ宜いとも……』



御贔屓といふものは有難いもので、手當も下すつたので、お角力さん喜こんで遙々東京へやつて參りまして、或る部屋へ弟子入をして、一生懸命に修行いたしましたが、熱心といふものは恐ろしいもので、場所運も好かつたのでございませうが、トントン拍子の出世、立派な幕内力士、モウ是れならばといふので、東京の親方から暇を取つて大阪へ歸つて參りました、サア町内は大した人氣、贔屓筋の喜びは一通りではございませぬ。

○『今日は』
女『ハイ……オヤマア是れは御贔屓の旦那樣、よくいらつしやいました、サアどうかお上り……』

○『イヤお内儀さん、關取が東京から歸つて來たと聞いてやつて來たが……』
女『ハイ昨夜歸つて參りました』
○『さうかい、えらい出世をした、幕内と來たら大したものだ、定めし大きくなつたらうな』
女『ハイ、有難う存じます、お陰樣で大きくなつて歸つて參りました、門口でゴーンゴーンと釣鐘が鳴つてゐるから、何だらうと思つたら、釣鐘ではございませぬ』
○『何だい』
女『關取が歸つて來て、門口に立つて、女房共今戻つたといふ聲が釣鐘に聞えたので』
○『ホツホ、大きいな』
女『それから門口を開けて見たら關取の首がないので』
○『ハア首を何處かへ忘れて來たのかい』
女『イエさうではございませぬ、大きくなつて關取の頭が雲の中へ入つて見えませぬ』
○『冗談ぢやアない、そんなに大きかつたら、相撲を取つて居て顏が見えないぢやないか』
女『それだから相撲は晴天十日で』
○『洒落ちやいけないよ』
女『それから家へ入つたら、ガラ／＼ガラツとひどい音がして戸や障子が外れたり倒れたりいたしました』
○『ホツホ、まるで地震だね、東京の大地震は、關取が震源地ぢやないかい、それからどうしたえ』
女『何しろ足が泥でよごれてゐる、洗ふからと申しますから、一番の大盥を持つて來たら足が盥へ入りませぬ』
○『ヘエー』
女『是れでは仕方がない、ちよいと行つて洗つて來るといつて、近江の琵琶湖へ行つてザブ／＼ザブ……』
○『ふざけちやいけない、そんなに大きな足があるかい』
女『それから關取のいふには、可哀想なことをしたと申しますから、どうしたのかと聞いて見たら、東京から歸る途すがら、三疋踏み潰したと申しますので』
○『三疋踏み潰したといつて、蟻でも踏み潰したのかい』
女『イヽエ牛を三疋……』
○『エヽツ牛だえ……』
女『それから疲れたから寢る、布團を掛けてくれと申しますから、六布の大蒲團を持つて來て掛けてやつたら、お臍だけしか隱れませぬ』
○『フーン、大きくなつたな、そんな大きな力士は、日本一といひたいが、世界一だ、何しろ有難い、よくそんなに大きくたつて歸つて來て吳れた、……關取が見えないが留守かえ』
女『イエ、昨夜歸つた儘、草臥れてまだ寢て居ります』
○『寢てゐる……さうかい、けれどもそんなに大きな關取が、よくお前の家の奧へ入れたね』
女『ハイ、お前さんのやうにそんなに大きくなつては、家の中へ入れないぢやありませぬかといつたら、宜しく／＼心配をするなといつて、自分の身體を八つに疊んで……』

〇『八つに……新聞だねまるで……けれどもえらい者になつた……ナニ起さないでも宜いよ、起しなさんな、寢かして置いてお呉れ、目が覺めた時分に私の方から會ひに來るから、起きたら宜しく言つて置いてお呉れ、モウおツつけ此方の本場所だ、私が幹事になつて總見もこしらへて、積樽か何かして、立派とまでは往かないでも、關取の人氣の出るやうにするから、宜いかい、目が覺めたら、私が訪ねて來たといつてお呉れ、他の者には私から言つて置くから、左樣なら……』

町内の御方は大喜びで歸つてしまひました。

そこへ奥から出て來たのはお關取、派手などてらに、白縮緬のしごき、金鎖の下つた大きな煙草入を下げて居ります。

關『コレ女房共……』



女『アレ關取、起きたのですか、起きてゐたなら、ちよつと御挨拶に出て下すつたら宜かつたに……』

關『何をいふのぢやい、贔屓のお客さんぢや、挨拶に出るぐらゐのことは知つてゐるわい、けれども挨拶に出られるか出られないか考へて見ろ、先方さんが東京へ行つて、大きくなつて戻つて來たらうなといふ、其の鬪に乗つて今のお前の挨拶は、ありや一體何ぢやい』

女『あれではいけませぬのか』

關『いけませぬかというて、あんな挨拶といふものがあるかい、今も聞いてゐれば、門口で女房共今戻つたといふ聲がゴーンゴーンと釣鐘の樣だつたといふたらう、人間がそんな大きな聲が出るかい……それも宜いが、門口へ出て見たら雲の上へ頭が入つてゐて見えなかつた、だから相撲は晴天十日だなどと、人の頭で洒落をいつて、連添ふ亭主を化物扱ひにしてそれで嬉しいのかい、……家へ入つたらガラガラと戸も障子も外れたり倒れたりしてしまつたなどと、人を地震の震源地にしてしまつて、馬鹿め、お前も長い事相撲取の女房になつて居るくせに、ナゼそんな事をいふ、相撲稼業をしてゐて、外れたの倒れたのといふ事は忌言葉、禁言にもいふものでないわい、……足を洗はうと思つたら、大盥へ入らないから、近江の琵琶湖へ行つてジヤブジヤブ洗つたの、道中で牛を三疋踏み潰したのと、色々な事をいつて、出鱈目にも程がある、そんな大

きな事をいつてゐる所へ、のめ〳〵と挨拶に出られるか、若し出たら今の旦那はんが何と思ひなさる、今女房が大きい事をいつたが、斯うして本人を見ると、そんなに大きいものではないと、大きな事をいつたゞけ、私の身體が小さく見えるわい、相撲取の身體が小さいと思はれたら、モウ負けたと同じやうなものぢや、少しは人間は卑下することを知つて置け馬鹿め、お前のやうな馬鹿者には言つても分るまいが、是れも話の一つだから言つて聞かせるから、宜く聞いて置け、私が東京からの戻り道は、見物がてら半分は歩いて來た、道中筋は名所古蹟も澤山あるが、何といつても東海道の名物は、駿河の富士の山、昔は三國一といつたが、世界にもあんな良い形の立派の山はない、其の富士の山が宜う見える、原、吉原の宿、或る茶店で一ト休みした其の時に、其の茶店の女子が茶を汲んで持つて來たから、私が其の女子に向つて茶を呑みながら、富士の山を褒めたのぢや、姐さん、「三國の裾に寢ずとも富士の山、夢に見てさへ宜いといふのに」と、歌にさへある此の立派な富士の山を、斯うして朝夕見て暮すといふのは、お前方は何といふ果報な者だといつたら、其の女子が、自分のことを褒められたやうに羞かしがつて、お關取、そんなに仰しやいますが、斯うして朝夕見てゐると、左のみ大きいとは思ひませぬといふから、それでもあんなに大きいぢやないかと私がいつたら、大きく見えますけれども、あれは半分は雪でございますと斯う言つたが、何と言ふことが可愛いぢやないか、大きいといはれて、ナニ半分は雪だと卑下するわい、私は其の茶店の女子の言葉を聞いて、モウ一度富士の山を見上げたら、山が三層倍も四層倍も大きく見えた、お前のやうな女には、此んなことは迚も言へまいが、他の話でも宜く聞いて頭へ入れて置け』



女『何ですね、そんなにポン〳〵いはなくつたつて、私だつて家に富士の山があれば、其位のことはいへますよ』

關『馬鹿め、家の中に富士の山があるかい、宜い年をして、少し口の聞き方を愼しんだが宜いわい、お多福め』

女『どうせお多福でございますよ……それでは大きくいはないで、小さくいふん

ですね』
關『さうぢや、成るべく小さくいふのぢや、小さくいへばそれだけ大きいものが尚ほ大きく見えるものぢや、覺えて置け』
大層な小言でございます。小言を言ひッ放しでお關取、奥の座敷へ入つて休んで居りまするると、『今日は――ッ』とやつて參りましたのは先刻の髪結のお客のお友達。
女『アレマア、能うこそ、入つしやいました、サアお上りなさいまし』
△『イヤ〱構つて下さるな……お内儀さん、今横町で辰さんに會つたのだ、さうすると辰さんが、あの横町の村木の積んである上へ上つてサア皆んな來い皆んな來いと呼んでゐる、何が始まつたのかと思つて行つて見ると、大きくなつた大きくなつた、立派になつて戻つた、門口で戻つた聲が釣鐘で、出て見た頭が雲の上、足を洗ふのが近江の琵琶湖、道中で牛を三疋踏み潰したと怒鳴つてゐるのだ、何のことだかサッパリ分らない、段々聞いて見ると、家の關取が東京へ行つて、えらく大きくなつて戻つて來たといつて涙をこぼして喜んでゐる、私だつて友達だ、さういふことを聞けば嬉しいから、直ぐ飛んで來たのだ、お内儀さん、關取は大きくなつて戻つて來たつてな』



女『ハイ、有難う存じますが、それが大變な違ひなのでございます』
△『違ふ、どう違ふのだ』
女『それが三國一の富士の山なんでございますよ』
△『富士の山のことを聞いてるのぢやアない、關取が大きくなつて戻つたといふことさ』
女『イ、エ、小さくなつて歸つて來ましたので』
△『小さく……鰹節みたやうだな……けれども今辰さんの言ふには、女房共、今戻つたといつたのが釣鐘のやうな聲だつたといふぢやないか』
女『イ、エ、釣鐘どころか、蟲の息』
△『蟲の息……まるで大病人だね……けれども出て見たら頭が雲の上……』
女『イ、エ貴下、雲の上に頭があつたら化物でございます、私の連添ふ亭主を化物扱ひにして頂きますまいよ、雲の上からピューッと風が吹いて來たら、コロコロ〱ところがつて家の中へ入つてしまひました』
△『まるで鉋ッ屑だね……それでも家へ

入つたら、ガラ〱ガラと地震のやうで、戸も障子も外れて倒れたといふではないか』

女『イ、エ貴下、氣を附けて口を開いて下さいまし、相撲稼業は、外れるの倒れるのといふのは忌言葉、禁言にもいつて下さいますな』

△『どうも濟まなかつた、小言を聞きに來たやうなものだ……けれども足が泥で汚れてゐるから、洗はうと思つて一番の大盥を持つて來た所、足が入らないので、近江の琵琶湖へ行つて、ジャブジャブと……』

女『洗ふやうに大きくなると宜いのでございますが、幾ら曹達を入れてもさうはふやけませぬ』

△『煮物でもする氣になつてゐる』

女『それから瀬戸物の鉢へ水を入れて持つて來たら、中へ入つてジャブ〱と行水を使ひました』

△『オーヤオヤ、まるでカナリヤか十姉妹だね……けれども東京から戻つて來る途中、牛を三疋踏潰したといふぢやないか』



女『イヱ牛ではございませぬ、蟲を三疋……』

△『ア、蟲かえ……兵の奴、何を言やアがる、まるで話しが違つてゐる……けれども大蒲團を出して、寢てゐる上へ掛けたら、臍だけしか隱れなかつたつて……』

女『イ、エ、座蒲團を出したら、それへクル〱とくるまつて寢て了ひました』

△『赤ン坊だね、まるで……』

奥で聞いてゐた關取、餘り馬鹿々々しいやら可笑いやら、けれども大きいといはれるより小さいはれる方が出宜いものと見えまして、出て參りました。

關『イョー是れはお出でなさい、御機嫌宜しう、昨夜戻つて參りました、直ぐに御挨拶に出なければならぬぢやが、まだ荷物が着かんので、荷物が着いたら、繪葉書の一枚も持つて御挨拶に出ようと思つて居りました、もウおッつけ初日でございます、どうか又御贔屓さん方のお力で、何分宜しくお願ひ申します』

△『イヤーア關取、マア大きくなつたな、立派なものだ……お内儀さん、嘘を吐いちやアいけない、何が小さいものか、此んなに大きく立派になつたぢやないか』

女『けれども朝夕見てゐると、左のみ大きいとは思ひませぬ』

△『イヤ〱さうでない、あの通り大きいぢやないか』

女『イ、エ、あれは半分は垢で厶います』

——をはり

展望台

子供の讀物に就てのニュースです。お父さんもお母さんも、兄さんも、姉さんも、是非御精讀下さいまし。

尊いこの計畫

すべて本社の計畫は、會議々々と數十回の會議にかけ、よきが上にもよくと練りに練つて、これなら必ずや滿天下の御期待に添ひ得ると見極めがついた所で、初めて實行に移るのであります。

それだけに講談社の會議の多い事は有名なもの、その中で近來にないほど愼重に會議された計畫があります。本社發行の少年俱樂部が二百號に達した記念の大計畫がそれです。

キングの弟雜誌として、子供キングとまで呼ばれてゐる少年俱樂部が、小國民の間に熱狂的歡迎を受けつゝ號を重ね、いつしかこの五月を以て二百號に達することになりました。

目出度い二百號を記念して何をすべきか、少年俱樂部編輯同人は勿論、キング編輯同人も參加、本社の首腦を網羅して連日大會議が續けられ、いろ〳〵の計畫の決定を見るに至りました。

兩陛下の御尊影謹複製頒布、これが第一の大計畫であります。

仰ぐも畏い兩陛下の御寫眞を、新聞紙二頁大の特別抄極上の用紙に精巧な多色刷にて謹製し奉り、周圍に浮出額緣模樣まで加へられます。この御尊影を非常な疊紙にをさめて、少年俱樂部五月號讀者に謹んで頒布の計畫であります。

國民一家一部を安、朝夕仰いで皇運の無窮を祈り上げたい次第であります。

新學年と雜誌

新學年を迎へ、新しい教科書の用意されるこの四月には、少年俱樂部の發行部數が、例年急に增加します。卽ち進級とともに、新に少年俱樂部を讀み始める少年が多くなるからで、尋常五年以上の讀む雜誌は殆ど少年俱樂部と稱し得る程であります。「右手に教科書、左手に少年俱樂部」と呼ばれてゐますが、なるほどと合點されます

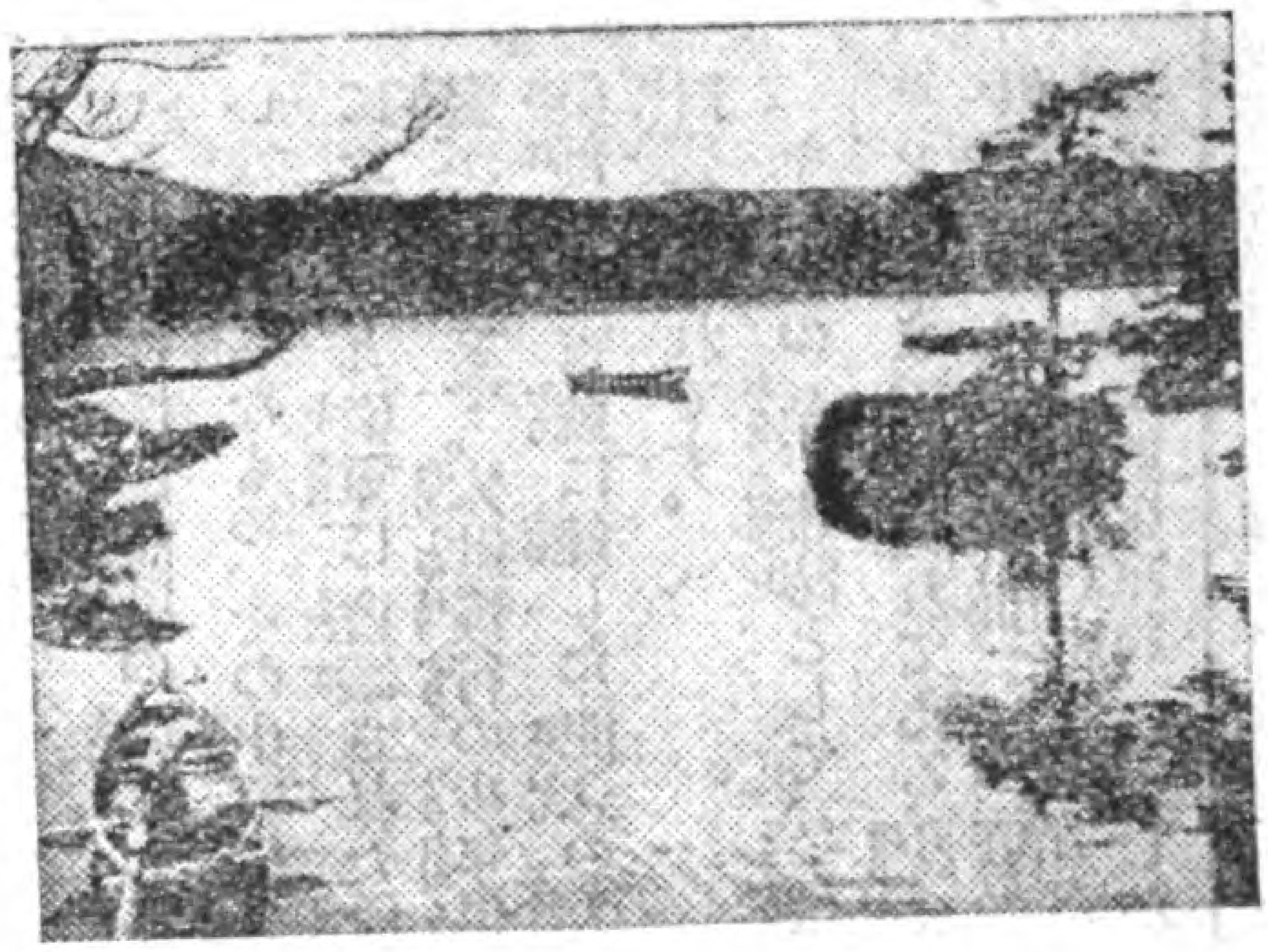
大奮發の少年俱樂部五月號は本月號通り五十錢(四月十日發賣)

教育家の言葉

學習院教授川島堰一郎先生は次のやうに語られてゐます。

「現今の少年は只、教科書丈を金科玉條としては居りません。燃える如き讀書慾、求知心は他に何等かの良書を要求して居ります。安心して子供に讀ませる事の出來る雜誌が欲しいとは、多數の親又は教師の眞情でありませう。少年俱樂部はその要求に應ずる良書の一として充分推奨する價値があると信じます。なんとなれば同誌は、學校教育、家庭教育、社會教育の及ばぬ所、不足の點を補つて、巧みに子供の智德の啓發につとめてゐるからです」と。

各方面からの推奨の辭に接し、少年俱樂部編輯局一同はいよいよ精進、雜誌の向上に苦心してをります。



たの風光と共に、姫鱒の世界的養魚場として名高い十和田湖

女の一心！夫を助けて大成功

—十和田湖養魚場の血涙ロマンス—

文學博士　加藤玄智

今は東北の一大名勝となつた十和田湖、此湖は今日又日本に於ける模範的な一大養魚場である。けれども四・五十年の昔迄は魚一匹も棲まない神の呪ひのかゝつた湖だとの傳說通り、十和田湖には魚類がまるでゐなかつたのである。それが今日、日本最大の養魚場と化し、年々鱒の產出のみでさへ百萬尾を越え、一大國益を擧げるやうになつた裡面には、一つの悲壯を極めた涙の物語がひそんでゐる。

あたら三百圓を湖へ

十和田湖畔、——秋田縣鹿角郡毛馬内町に、和井内貞行といふ人がある。此人は小坂鑛山の書記を勤めて居た。この和井内氏が一匹も魚のすまないといふ荒れすさんだ十和田湖を見渡しては、これだけ廣い湖が養魚場に利用できたらどんなに國產を增し、天惠を活かすか知れないと思ひ思ひしてゐたが、しまひに、この空想を實現したいといふ氣になり、次第に熱が高まつて、何も十和田湖の水も、琵琶湖の水も同じ水だ、養魚ができないといふわけはないと決心して、小坂鑛山の同僚三浦新八といふ人と共同して百方工面の末、三百圓許りの元手を作つた。

その金を以て、和井内氏は、まづ淡水魚の王たる鯉の子供を買ひこんで、湖に放つた。ところが、放たれた鯉は、どこへ行つたのか、さつぱり影も形もみえない。

その年は暴風や旱魃が打ちつゞいたので村の人々は、これはきつと和井内の奴が、禁斷の十和田湖に魚を放つた神罰だといひ出し、惡口雜言、はては暴行を加へられるやうなことまでできた。相棒の三浦新八氏は恐れをなして手をひいてしまつた。

とう〳〵三百圓を湖へ流してしまつたといふやうなわけである。これが明治十五年のことだつた。

湖畔の狂人夫婦

、村人から狂人とのゝしられながら、しかし和井内氏だけは、養魚事業をあきらめなかつた。

まづ十和田湖の水を、農商務省の松永水產局長に試驗して貰つた所、魚類の棲息に何等差支なしといふ折紙がついた。

之に力を得て、和井内氏は、まづ魚の產卵する場所をこしらへようと、魚道の開鑿を始めた。そのために、鑛山の書記をやめ、一家をあげて、氏は湖畔に居を定め、湖の唯一のはけ口、奥入瀨川に、件の魚道を作り初めた。

といつても金があつてやる仕事ではない。氏自身、一本の鶴嘴で以てなれぬ土工のまねをして、何年かかゝつて魚道開鑿工事をやりとげようといふのである。

土まみれになつて、朝早くから長い瀨川を徐々に掘つて行くのである。雨も降る、風も吹く。たつた一人でこんな無謀に近い開鑿工事を始めた和井内氏の苦勞は、スエズ運河をひらくレセップスの辛苦にまさるともおとらない。



和井内氏の妻女勝子さんが亦熱心に夫を勵まして、何くれとなく一緖に立ち働いてゐるので、村の人人は『狂人夫婦』とあざけり笑ひ、六つになる子供さへ、村の子たちにいぢめられ、泣かされたり傷つけられたりした。

その內に、何の收入もないことゝて、貧乏は迫つてくる。仕方がないので、勝氣な勝子さんは、木を伐り倒し、薪に割つて、村の問屋に賣り捌き、やつと、親子の口を糊するといふ始末。

和井内氏の勞働は、孜々營々としてつゞいてゐるが、今では泥だらけ汗みどろどころではなく、着てゐるものはボロ／＼に、目はおちくぼみ、色は焼け、たえざるすり傷生傷のために體中は血みどろとなり、だれがみても、これでは本當の狂人と思ふより外はない有樣だつた。これが明治二十五年のことである。

再生の日は來た

しかし、やがて、夫婦の勞苦の報いられる時が來た。

川口でいつもの樣に和井内氏が働いてゐると、突然鏡のやうな養魚場口の水面に波紋の騷ぎがおこつた。

波袖といふのは魚の群れの起こす波のことである。

『鯉だ！　鯉だ！』和井内氏は思はずをどり上つて、妻のゐる掘立小屋のやうな家の方へ走つた。

それはかつて三浦氏と共同で放つた鯉がいつの間にか繁殖して、群をなして游泳してゐるのであつた。夫婦は、大急ぎで笹網を作り、それで漸く數十匹の鯉を捕へた。これが明治三十年五月の事。鯉を放つてから實に十五年の歳月がたつてゐる。

夫婦はこの成功に喜び、その鯉を土産に久しぶりに故郷へかへつた。和井内氏の無謀な企てに頑として反對してゐた嚴父も今度は喜んで、家産を裂いて若干の資金を出してくれた。

再生の日は來た。

鯉はどし〳〵殖えてくる。すると、村の人々は十五年來、狂人よ、痴者よ、と嘲笑して爪彈きしてゐた己れを忘れて、ひそかに湖に網を入れて、鯉を盗みはじめた。

和井内氏は村人には、十五年來の怨みがある。或日、とうとう、鯉泥坊の一人を捕へ、繩で縛つて、これから警察へつき出すのだと、家迄曳いてかへつてきた。

これをみた勝子夫人は涙を浮べて、夫の非をいさめ、納屋に入れられてゐる泥坊に、そつと食べ物や火を（雪がふつてゐたので）與へ、朝迄かゝつてとう〳〵夫の心を鎭め、無事に泥坊はゆるしてやつた。

この事あつてから村人の夫婦に對する態度が一變し、とりわけ勝子夫人のかげ口をきく者などは一人もなくなつた。

失意にゐて變へず

鯉の養殖に完全に成功した和井内夫婦は、今度は農工銀行から三千圓を借りて、鱒の養殖を始めた。

ところがこのことから思はぬ悲境に沈淪しなければならなくなつた。放たれた鱒の子は奥入瀬川を遡つて湖水に入つたまま續々と皆死んでしまつたのである。

この失敗が二三度續く内に、借金で首がまはらなくなつた。おまけに鯉がさとくなつて網にかゝりにくゝ魚獲高が減つてきた。やがては農工銀行から差押へをくらふやうになり、父の田畑山林がすつかりそのために人手に渡つてしまつた。

而も、つゞいて、明治三十四年になると、湖水使用權の期限が切れて、繼續願ひがなか〳〵許されぬ。

一時の光明はどこへやら、さすがの和井内氏も、もう一切にあきらめをつけようと悲しい決心をした。夫婦別れをして、勝子さんや子供を一時實家へかへし、自分は小坂鑛山で坑夫にならうといふ一家離散の覺悟である。

夫の決心を打ちあけられて、勝子さんは泣き沈むかと思ひの外、キリッとした眉をあげて、

『待つて下さい！　今なげ出しては十何年の苦勞も水の泡……
……それこそ世間の物笑ひです。そんなお弱い心では何事も成就しません。私は絶對に反對ですとも！』

その意外な妻の返答に、

『では此の上お前はどうする積りかね』

『私が働きます! 私一人の力であなたや子供にどうにか不自由な目をおみせしないですむやうに、ええ、働きますとも!』

勝子さんはにつこりとして、夫をはげますのだつた。

貞行氏も今更ながら、わが妻の心の確かさに敬服の念を催し、心弱くも一家離散を決意した自分を恥ぢるのだつた。

夫婦は、勝子さんの意見に從つて夫は湖畔の家にあつて専念養魚の研究をつゞけ、勝子さんは子供をつれて、小坂に通ずる道傍にさゝやかな一軒の掛茶屋を營み、これでわづかに一家糊口の糧を得たのだつた。

さて、危なかつた瀬戸際もかうして切りぬけた。

しかし、どん底の闇にはどこからも光りがさしてこない。いつ成功の曙をみることか、夫婦は心一つに、はげましあつてはゐるものの、蔭ながら互に口惜し涙に袖をぬらすことも少くないのであつた。



立寄つた技師の一言

けれども神は、やがてこの苦しみもがく和井内夫婦をあはれと思つて天恵を下し給うたのか、それとも、神さへも知らぬ人間偶然の運命といふのか、はからずも、夫婦の努力に報いられる日がきた。

それは、その年もくれかゝる頃、一人の洋服紳士が、この街道をとほりかゝつて、勝子さんの營んでゐる掛茶屋をみつけてしばしを憩うたのである。

紳士は何氣なく前にみえる十和田湖を眺めながら、

『勿體ない湖だな、これを養魚場にでも利用すると一大國益だが……』

とつぶやいた。耳さとくそれをきゝつけた勝子さんは、つつましくも紳士の前にすゝみ出て、

『ホヽヽ、なか〱どういたしまして、私共夫婦はもう十何年來、この十和田湖の養魚事業に苦心さんたんの末が、この通り、わづかの財産も使ひはたして、おちぶれてしまひましたやうな次第で……』

と、思ひあまつてゐた事故、つい口に出して、われとわが身の上の端を語つた。

『ほウ……さうですか！……そしてまた、一體どういふ種類の魚を養殖しようとなすつたのですか？』

『あの、私の夫は鱒の養殖で、大失敗をしたのでございます。』

『成程、しかし、いかゞです。この十和田湖の性質を一應ご研究なさいましたかネ？　この湖は北海道の支笏湖とよく似た湖で、水は非常に冷たい。だから支笏湖の姫鱒ならば或は死なずに繁殖するかもしれませんよ。』

この紳士のひどく專門的なそして當を得た意見は、勝子さんにとつて天來の福音であつた。

『成程さうでございましたか!!』

と顏色の變る位驚いて感に打れてゐる勝子さんにひきかへ、紳士は出された澁茶をすゝつてしまふと氣輕く立ち上つて、

『どれ、長居をして、お邪魔でした。』と出て行くのだつた。

『もし、失禮でございますがあなた樣は……』

と追ひすがるのをふり返つて、

『私ですか？……私は青森縣水產試驗所の技師です……よくご研究なすつてどうか成功して下さい。』

とその紳士は街道の方へと立ち去つて行つた。勝子さんは感謝に胸のひきしまる氣がしながらその後影を心で拜んだ。

芳魂神と化す

この技師のいひのこした一言に、力を得た勝子さんは夫に向つて、熱心に、支笏湖の鱒の移殖をすゝめた。けれども先立つものは金である。姫鱒の子を買入れる金がない。

『金さへあれば乾坤一擲のつもりでやつてみたいが……』

と嘆ずる夫の前に、

『それではこれを賣つて下さい。』ととり出したのは鏡の下の五十兩ではなくて、夫人が嫁にきた時持つてきた親ゆづりの短刀である。それは勝子夫人の家に傳はる得難い銘刀であつた。

『これを賣つては義父さんにすまない。』

『ご尤もです。しかし、事業に成功さへすればお父さんも、草葉の陰からきつと滿足に思つて下さるでせう。』

『さうか、では御前の親切をうけることにしよう。』

遂に短刀は賣られた。それによつて得た僅かの金で、早速和井内夫婦は飛び立つ思ひで北海道へ姫鱒の種苗を注文した。

『天は自ら助くる者を助く』

果してそれは大成功であつた。この姫鱒は前の鱒のやうに死滅することなく、どん〳〵增殖した。

『あゝ、うれしい！』

和井内氏、勝子さん、夫婦は文字通り抱きあつて、思はずうれし泣きに泣いたのである。そして名もしらぬ青森縣水產試驗所技師を、再生の恩人として二人共、心に伏し拜んだ。

姫鱒の養殖は年々に好成績を擧げて、今では一年に產出する種卵が一千萬粒、湖畔十ケ村はこの養殖事業で富み榮え、十和

田湖の姫鱒といへば今や世界的に知られた名産となつた。そして、大正元年に永眠した勝子夫人は遺徳を慕ふ湖畔十ケ村の人々から神とあがめられ、その女ながらの芳魂は、今では、十和田湖邊、勝漁神社として、いつきまつられてゐる。女性の神樣としては天照大神は申すも畏し、神功皇后、弟橘姫、倭姫命の御神徳は人の能く知る所、庶民において實にわが和井内勝子夫人に於て其顯著なる實例を目撃させられたのである。偉人を奉祀した神社に於て、人格を通した神格の光が斯くの如くに、燦として萬古照す神々しい光を發つてをるのである。

附記――加藤玄智先生は神道研究の大權威であるが、目下『生祠』と云つて、或る人物が生存中に神として祀られた事蹟や實例を全國に調査されてゐる。若し讀者の中にさうした實例を御存知の方がありましたら、其の神社の場所、祭られた人の姓名、又生祠出來た理由等、東京市本郷帝大神道研究室の加藤元智先生まで御通知下さるやう希望されて居ります。

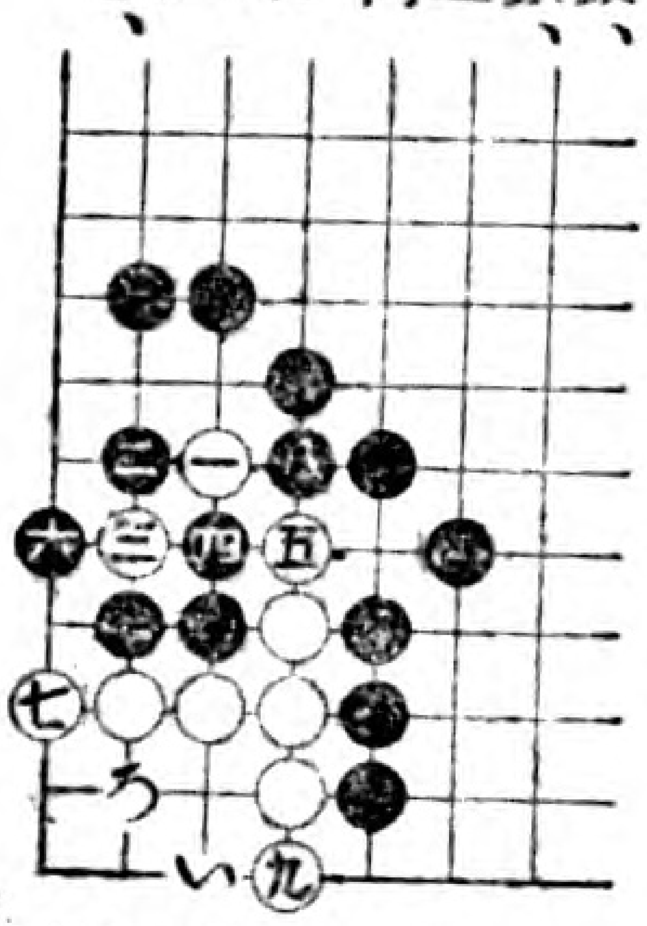
娯樂室解答

○詰碁解答

白一の手が良い手で、この一手が活きた作るのです。

但し白一で七に下つて黑が若し九にヘネ口「い」黑「ろ」と取りに來ればその時一に打つても同じく活きです。

本問題はたゞ一の手を發見するだけのものです。

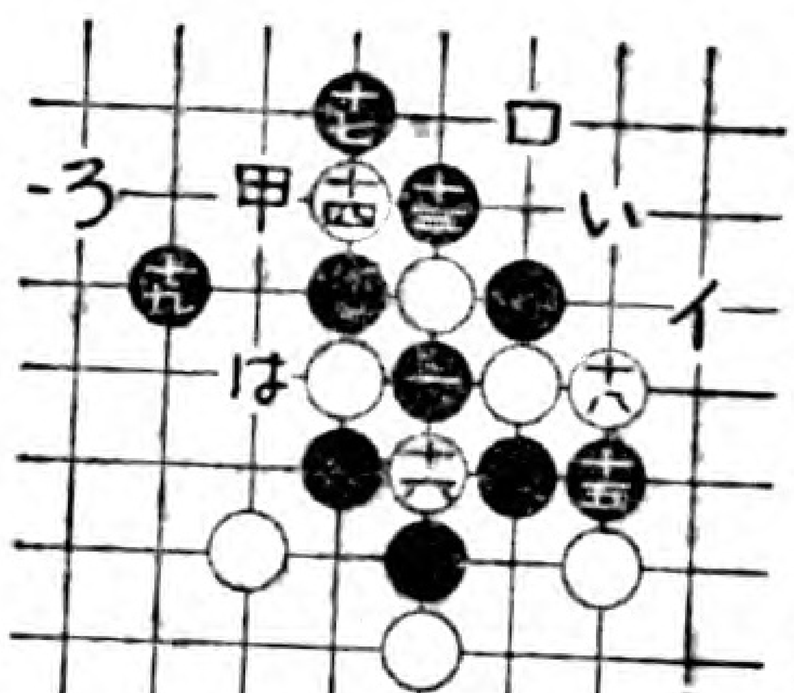


○詰將棋解答

七五銀、同銀、六四龍、同銀、八五歩、七三同玉、六二銀、同玉、六一飛ナル、七三玉、六三龍或は角ナルにてもよし、以上十一詰

○聯珠解答

（十三）は、次から「い甲（十四）ろ（十八）」の四追勝を見せた妙手、故に、白は（十四）と打つて、黑の四追筋を止めながら三勝を作つたが、黑に（十七、十五）と乘込まされて後は「十七、十九、甲」の頑なで容易く勝てれました。（變化（十四）で（甲）に止めれば、（十五）を（イ）にうち白に（甲）を止させて次から「ロい」の順で勝。



『キングを讀んで得た利益』原稿當選發表

應募數は、實に十三萬五千九百二十三篇の多きに達しました。その中、家庭生活の圓滿向上に關するものが最も多くその數三萬八千六百、自己修養に關するものこれに次ぎて三萬五千七百、發奮努力の結果遂に上長に拔擢登用されるに至つたもの二萬九千、教育家、宗教家の說話に役立つたといふもの二萬一千、その他がその殘りの數であります。今回嚴選の結果當選者を左の如く決定いたしました。

▽當選者（規定により金側贈呈）

○佐藤邦明（香川）○澤田里子（[illegible]）○高橋進（金澤）○木下三（三重）○山口利一（[illegible]）○森（[illegible]）○大河内[illegible]（福島）○柳井浩三（廣島）○李澤根（朝鮮）○佐久間生人（千葉）○山梨糸代（山梨）○森川つね（兵庫）○田熊義知（鳥取）○杉山寅吉（神奈川）○佐藤良一（福島）○白石文夫（福島）○小川荒太郎（愛知）○榊原生吉（但馬）○池田正毅（鳥取）○志賀而立（大阪）

▽選外優秀者（本誌特製キング銀メダル贈呈）

○龜山鑑雄（千葉）○中野離介（東京）○服部一（福岡）○金善富（朝鮮）○森川静（神奈川）○KI生（新潟）○小野照久（山梨）○山中信（香川）○小町咲榮（東京）○三島清治（岡山）○古館正孝（富山）○井上光子（新潟）○吉水澄治（神奈川）○坪井三木夫（新潟）○軌保致重○（兵庫）○土肥木蘭（宮崎）○渡邊堅三（東京）○古川良夫（北海道）○渡邊生（東京）○西山庚之進（靜岡）○中野佐吉（富山）○川村道夫（北海道）○尾崎龜吉（大阪）○山木曾太郎（和歌山）○西山信（神奈川）○妹尾薇（岡山）○鈴木勇（愛知）○小島豐子（福岡）○江波戸玄喜雄（千葉）○西山茂（台灣）○前田久志（台灣）○中村幸太郎（東京）○池田きみ子（新潟）○宮崎高里（神奈川）○粟野吉良（和歌山）○見野多正（京都）○平原春秋（廣島）○菅倉一（愛媛）○今嶋好瑞（東京）○逵藤（大阪）○磯野若彼（福岡）○橋木雅雄（德島）○原愛子（愛媛）○島田保雄（埼玉）○長源次（栃木）○齋藤宣明（秋田）○稲小一郎（滋賀）○高木秦（福岡）○室仙三（岐阜）○土江波完（廣島）○磯野みち子（東京）○藤原錦郎（愛媛）○大川英一（岐阜）○櫻澤不津興（山形）○泉圭介（兵庫）○野西五（京都）○富本茂（長野）○三尾崎林一（滿洲）

▽選外佳作

○北村弘行○鈴木とし子○林喜一呂淺○田健次○西孫常範○松尾忠○岩上定吉○石井[illegible]○櫻智[illegible]○田香幕○齋藤實[illegible]○熊兒市郎○仲村彦○森根[illegible]○吉川俊男○安[illegible]邦雄○多[illegible]○平中好文○酒井綾子○矢島正信○松本省三郎○忠[illegible]哲雄

『三萬圓大懸賞當選發表』の中

四六二頁のつゞき

（五等）スワンシャープペンシル

【鳥取縣】

荒木眞一、德田發志、關山戰一、安佐國夫、本庄美代、澤田二郎、近藤正新、上田山澤下之傳、吉野悲一、谷野千代子、谷口冬樹、清水正英

【島根縣】

足達滿智子、野津吉太郎、岡田周子、藤原茂、中村武利、野々村重行、小倉西尾上吉、高橋善吉、夫井上虎之助、安達下野、大澤昌子、三上[illegible]、木下、宮田[illegible]、野田花子、谷キク、谷口[illegible]、藤原郁、谷添三夫、金山武英子





◎修養に依て、自己の性格を一變した名士の體驗談あり
◎大人物の練心練膽感動物語あり
◎人相を良く美しくした實際談あり
◎頭腦を明快にし、記憶力を良くする體驗談あり
◎眼に、髪に、顔に、標緻を良くした實際談あり
◎瀕死の病弱から、評判の立派な體格になつた苦心物語あり
◎低腦といはれた兒を秀才に仕上げた母の一念物語あり
◎短所や惡癖をなほした實際談あり
◎死の床の肺病を征服した名士の鬪病成功物語あり
◎最新研究、自己の惡體質を改造する驚くべき實際談あり

右はその一例のみ、此外、悉く驚嘆すべき感激物語、誰にも出來る實際談、その粹を拔いて滿載。更に、本文は一段と面白く大活躍！

愈々面白い、有益なキング六月號

名訓、傳記、美談、成功物語、新智識、常識、實際記事、小說、講談、落語、滑稽讀物、等々……

六月號は際立つて面白い出來榮えです。

お知合の方々にも御評判、御紹介、揃つて御熱讀下さい！



二宮尊德（にのみやそんとく）

武者小路實篤
尾竹竹坡 畫

それは間違つた考だ

いろ／＼の人が金次郎の所へ相談にくるのは、前にも云つたやうに、日のわるい人が目醫者にゆくやうに、自分がどうしたら一番いゝかわからないことを敎へてもらひたいためである。之はどうしたらいゝか、それがわからない時、それのわかる人の所へたづねてゆくのは當然である。

しかしたづねてゆきたくもゆく所のない時は仕方がない。所が金次郎は實にはつ切りした考をもち、もの丶道理を知り、天道と人道を知り、人間がどう生ればいゝかを本當に知つてゐた。迷ふものは金次郎の處へ相談に出かけるのは當然なことである。

こゝに駿州の新田村に平兵衞と云ふものがあつた。心學の心得があり、以前に小田原で金次郎に逢ひ感心し切つてゐた。その平兵衞が自分の友達の加藤宗兵衞と云ふ人をたづねた。この人は相州伊勢原驛にゐて茶を賣つてゐた人だ。

二人は仲がいゝのでいろ／＼話をしてゐた。その時宗兵衞が平兵衞に云つた。

『私には二人の弟がある。一人は養子に行つたが、末の弟を爲藏と云つて、大へんよく出來た弟で、親にも私にもよくしてくれ、親もその弟を大へん可愛がつてゐる。それで私は親をよろこばさうと思つて、こゝの後つぎにしようと思つたが、父母が許さないで、分家にして、仲よくやつてゆけと云ふので、私のもつてゐるものは家財も土地も皆半分づつに分けようと思ふがどうしたものか知らん』



『それはいゝ考とは思ふが、さうしたら君の仕事にさしつかへは出來ないか。それに僕にはよくわからないから、之は一つ二宮金次郎氏にきくのがいゝだらう。あの人なら本當のことを

敎へてくれるにちがひない』
『それなら聞きにゆかう』
二人はつれだつて金次郎の處へやつて來た。平兵衛は金次郎を知つてゐるので、先づさきに上つて、之々だと話した、すると金次郎は『その宗兵衛と云ふ人は一緒に來たのか』ときいた。そして一緒に來て待たしてあると云つた時、『それならこゝへ案内してほしい。お逢ひして話すから』と云つた。
其處で宗兵衛はつれられて來た。そして丁寧にあいさつした。
金次郎はすぐ云つた。
『あなたの考はまちがつてゐます』
之は金次郎の口ぐせだ。彼はまづ一本、相手をやつける。なぜやつつけられるか相手は知らない。說明はあとから出てくる。
『あなたのお父さんが末子を愛されてそれに田をわけようとされるのは目前の愛情で、後年の爭ひのもとになることを知らないからです。今は親子であり、兄弟だからいゝかも知れませんが、あとになると、だんく他人になつて、そして一寸した利害のために、お互が讐敵のやうに思ふことはよくあることです。お話によると、爲藏さんは性質が篤實で、儉約家で、商賣の方ではあなたにまさるやうです。だからきつと爲藏さんは金をつくるでせう。そしてもしあなたの子孫が貧乏にでもなられたら、叔父さんに田を分けたからこんなに貧乏になつたのだと思つて、叔父さんを怨むやうにならないとも限りません、そして又爲藏さんのお子さんの力では怨まれるわけはないと怒るでせう、さうなると互ゝ子孫がお互に憎みあつて、面白くゆかないことがまゝあるものです。末子の爲藏さんが自分の力一つでやつてゆくのは當然なことです。自力で繁昌したのなら、誰も不服をもつものはありません。習慣に反して、家財をわけて、それがもとで子孫が不利になつたら、それこそ馬鹿氣たことです。だから爲藏さんは獨力でやつてゆく事にする方がよろしい。金がもし入用なら、私の方から無利息で二十兩や、三十兩おかししてもよろしい。あとの人の不平の種はまかないがよろしい。お父さんにもこのことをおつしやれば、反つてよろこばれるでせう』
宗兵衛は歸つてこのことを父に話したら、父も感心し、そして爲藏も亦、その方をよろこんだ。

米爭動

又こゝに一つの話がある。
この話こそ、金次郎の値打を高める話である。前の話はそれ程ではないが、今度の話は、金次郎でなければ、云へもせず、實行も出來ない話である。同じく天保七年の饑饉の時の話である。
大磯に川崎屋孫右衛門と云ふ米屋があつた。金はあつたが、吝嗇の評判の高い男だつた。饑饉の時に、米が段々高くなるの

を内心彼はよろこんでゐた。之で大いに金まうけが出來ると思つた。米は段々高くなつて來た。米の食へない人も次第にふえて來た。

米が食へないでおちついてゐる人はない。段々人間はやけになつてくる。どうせ死ぬなら、おとなしく死ぬより、食へるだけ食つて死にたくなる。

米屋が目につく。金持が目につく。彼等は腹一杯食つてゐるのだらうと云ふ氣になる。それ以上、飯が食ひたくなる。處が高すぎて中々手にあはなくなる。其處で方々の米屋が攻撃され出す。氣まへのいゝものは助かるが氣まへのわるい家はたゝきこはされる。

孫右衞門の處にも米をまけろと云つてくるものがある。孫右衞門は江戸に行つて、米相場をしらべた。彼はどうしたら一番安全にまうけられるかを考へてゐる。

江戸でしらべて、そして彼はまうけの胸算用してよろこんで歸つてくる。

所が彼が歸つてくる前に、腹のへつてゐる連中は辛抱出來なくなつた。

『やつけろ』誰云ふとなく云ひ出した。

『わつ』と云ふ勢ひで慾ばりな米屋がおそはれる。孫右衞門の處は殊にはげしかつた。彼は憎まれてゐたのだ。

數百人の人間があばれ込む。勢ひの向ふ處ことごとく破壞される。妻子や番頭は身をもつてのがれる。群集は奪へるものは奪ひ、奪へないものはこはす。勢ひあまつて、他の家も二三軒やつけて、快哉して引きあげる。

孫右衞門が歸つて來て見ると、目茶苦茶になつて手のつけやうがない。吝嗇な彼は腹が立つて仕樣がなくなる。すぐうつたへる。

處が彼の方が怒られて理不盡につかまへられて牢屋にほり込まれる。群集を罰すると騒動がうるさくなるので、彼の方が、ほりこまれた。彼は腹が煮えくりかへる。どうしてこの損失、この不平、この怒りをなだめていゝかわからなかつた。其處へ火事がおこり、彼が牢屋に入つてゐる内に、彼の家は燒けてしまつた。

不幸はそれ許りではなかつた。彼の妻はあまりにつゞいて不幸が起つたのが元因で、病氣になり、つひに死んでしまつた。孫右衞門はますます恨み骨髓に徹した。そしてとうとうそのために氣ちがひのやうにあれ狂つた。そして益々世間に出しては厄介だと思はれ、三年間獄の内に理由もなく入れられた。

この孫右衞門の妹があの宗兵衞の妻になつてゐた。それで宗兵衞は心配して金次郎に相談するより他仕方がないと思つた。

それで櫻町へ出かけていつて泣いて事情を訴へ『一たいどういたしましたらいゝでせうか』と云つた。

『それは困つたことだ』金次郎はさう云つた。そして彼はすべての因果應報の理を思つた。彼の心にはすべての世相が浮ん

た。彼は其處に孫右衛門の姿を見た。

『さう云ふ結果になるのは一朝一夕のことではない、禍ひのくる所にはその元因が何處かにあるものです。孫右衛門さんの一家のことは知りませんが恐らくたかく米を賣つてゐたとすると天明卯辰の兩年の饑饉の時、米粟を高く賣つて大利を得て、人々の憤りを買つたことがあるのではないのですか。その時他に憫みをかけず、自分のこと許り考へて、他人の不幸を反つて喜ぶやうなことがあつた罰がめぐりめぐつて、今度あらはれたのではないかと思ひます。だから孫右衛門さんは、今度のやうな目に逢へば、ます／＼謹んで、自分のしたことの悪い處を反省して見て、人々の怒りを買つた點を思ひ、自分の過ちを知り、又恐れるのが道なのに、自分の悪いことは少しも思はず、他を恨み憎む、其處に禍ひの一番大きな元因があるのです。獄屋に入れられたのも、自己の罪を反省するために入れられたと思へば反つていゝのに、たゞひたすらに無實の罪で入れられたと思つてさわぐので、ます／＼官の方では出すことが出來なくなり、迷惑を感じつゝもながく入れておくことになるのです。しか



し之も凡人としてはやむを得ないことで、もうからもつれて來ては、いくらあんたが救はうと思つても駄目です。實にお氣の毒な話ですがやむを得ません』

金次郎にかう云はれても宗兵衛はあきらめられなかつた。

『先生のおつしやることは實に本當です。孫右衛門の家は天明の饑饉の時に金持になつたのです。それで今度その罰をうけて亡びることになつたのは天命にはちがひありませんが、しかし何とかして救つてやりたいのです。私の妻なぞも心配して夜もろくにねむれず、食事も進まず、實に悲しんでをります。至誠神に通ずと云ふ言葉がありますが、何とかして救つていたゞくわけにはゆきませんか』

『至誠が生れば元より救はれるはずです。だが至誠を生かすと云ふことは、それこそ大變です。一通りの決心では出來るものではありません。それが出來るなら勿論道がないことはない』

『その道を敎へてはいたゞけませんか』

『敎へてあげるのはわけないが、しかしそれを實行することは餘程の決心がいる。あなたの奥さんが孫右衛門の妹で、一番血の近い方ですから、兄さんの捕はれたのを悲しまれ、實家のつぶれるのを心配されるのは尤もです。そのあなたの奥さんが、粗衣粗食で甘じることが出來ますか』

『出來ると思ひます』

『兄さんが獄中で困しんでゐらつしやり、生家が今つぶれかけてゐるのですから、あんかんと家にゐられるわけはないはずだが、しかしそれを實行しようとすると、いろ〳〵困難がともなふと思ひます。しかしその困難に勝つて本當に兄さんの不幸をかなしみ、兄さんと苦しみを同じくし、今からもつて來たものをすべて賣りはらひ、生家の再興をはかるやうにすれば、その至誠が通じて、兄さんの心を動かすことが出來るかも知れません。しかしそれはあなたの奥さんの御心がけ一つで、出來ることで、他に方法はありません』

『ありがたう御ざいます』

『それから奥さんが私の云ふ通りに兄さんと苦樂を共になさることが出來たら、そのありさまを獄中の孫右衛門さんに知らせることが必要です。兄さんがあなたの奥さんの至誠に動かされれば助かるのです。その他に助かりやうはありません』

『妻にそのことを話します。きつと喜んでお敎へに從ふと思ひます。ありがたう御ざいました』

宗兵衛はよろこんで歸つて妻にそのことを話す。妻も決心して金次郎の敎へを守ることにする。すぐ妻のもつて來た衣類、器財は賣られ、獄中の兄さんにまけずにの生活を始める。そして宗兵衛の兄の芳助がそのことを孫右衛門に話す。

孫右衛門は妹に同情する。今迄人を憎むこと切り出來ず、他人の愛情に餓ゑ切つてゐながら、反抗的に許りなつてゐた、孫右衛門のかくされた弱さに妹の眞心がふれた。

そして孫右衛門は思はず何年ぶりかで泣きだした。それから孫右衛門は官を恨んだり、土地の人を呪つたりしなくなり、自

分がわるかつたことを後悔するやうに見えた。其處で宿の人達も孫右衛門を離しても大丈夫だと思ふやうになり、許されて三年目に家に歸ることが出來た。

しかし歸つて見ると、家は粗末になり、子供達は母さんが居ないので、見ると氣の毒な氣がし、伊三郎は孫右衛門がつかまつてからのいろ／＼の有様をはなす。つけ奴の孫右衛門の善心はすぐ消えて、憎惡の炎が燃え上つてくる。彼は自分の妻の親類の宮原清兵衛と云ふ氣のあつた男と、相談して復讐のくはだてをする。

宗兵衛はそれを知つて驚いたが、どうすることも出來ない。其處で三度二宮金次郎の力をかりる。

宗兵衛は孫右衛門を訪れて云ふ。

『野州櫻町の二宮金次郎先生は無利息で困つた方に金をかして下さる方だから、其處へ行つて千兩かして戴いて、そして家を再興したらいゝと思ひます。よかつたらおともして行きませう』

孫右衛門は無利息で金を貸す馬鹿が今時にあつてたまるものか、そんな男は何かもつと恐ろしい慾を腹にかくしてゐる男にちがひない。

彼はあざ笑つて承知しなかつた。

その内に金次郎は小田原侯の命令で、彼等のゐる十里あまりはなれた所にくる。

それでともかく孫右衛門も逢ふだけ逢つても損はない、自分はだまされるやうな男ではないと思ふ。

其處で孫右衛門は宗兵衛と、清兵衛達と金次郎をたづねにゆく。

金次郎は竹松村の村長の處にゐた。そして孫右衛門達が來た時、湯に入つてゐた。そして孫右衛門達の話聲をきいて、

『こいつは厄介な奴だ』と思つた。

逢つたつて碌なことはないと思つた。とても普通では感化しがたい奴だと思つた。彼は湯殿から出ると誰にも知らさずに、裏口から逃げ出した。そして眞夜中に二里あまりはなれた下新田村の小八の家を訪れた。

小八はびつくりして、

『先生どうしてこんな夜中に一人でいらつしたのですか』と云つた。

『厄介な奴が來たので、風呂を出て誰にも知らさずに逃げて來たのさ』

村長の家ではあまり金次郎の風呂のながいのでおどろいて、様子を見にゆくと何處へ行つたか、影も形もなかつた。近所の心あたりに人をやつて見さしたが、何處にも見つからなかつた。

『今に歸つていらつしやるでせう』

村長はさう云つたが、孫右衛門だけはそら見ろと思つた。だがなんだか不氣味な氣がして來、もしかしたら腹を見すかれたのではないかと云ふ氣もした。

そして皆が大さわぎをしても中々見つからない内に、段々金次郎に助けてもらふより他、自分の家を再興し、『之見ろ』と云つて復讐する方法が見つからないことに氣がついて來た。そしてすぐ歸らうと云ふ氣にはなれず、宗兵衛達の意見に從ひ、金次郎に逢へるまで、歸らうとは思はなかつた。



極悪人から大慈善家に

村長はいたる所さがしても金次郎を見つけることが出來ないので、孫右衛門達に今夜は見つけることは出來ませんから、明日よくおさがしになるとい丶でせうと云つた。

そして聞かれるま丶に金次郎が、こ丶に來て村をよくするために働いてゐるありさまを崇拜して話してきかせた。

金次郎は善人を賞し、困つてゐるものをたすけ、こはれた橋をなほし、道をよくし、水利をはかる、いつもの流儀をこ丶でも徹底して行つて、自分の勞を惜まない。人々は金次郎を普通の人とは思つてゐない。

この人なら我等を救ふことが出來ると信じ切つてゐる。もう金次郎は今迄の經驗と、名譽で人々の信用をとることが出來、仕事ははかどつてゆく。彼は寸陰を惜んで、自分の考へ通りを行つてゆく、寸分のくるひもなく、彼の計畫ははかどつてゆく。

孫右衛門はそれ等の話をきいて、金次郎をいく分か信じて來た。ともかく宗兵衛からきいたこと丶違



ひないにしろ、實際の樣子を見聞するに從つて、一通りの人間ではない事に氣がつく。

翌日になつて金次郎が小八の家にゐることがわかり、幸内はすぐ小八の處へ迎へに行つたが、金次郎はきかなかつた。

何度も幸内や小八が『孫右衞門にお逢ひになつて戴くわけにはゆきませんか』と云つても金次郎はきかなかつた。その内に五六日すぎた。

それでも孫右衞門達は歸らうとしなかつた。彼等は金次郎の性質を知つてゐた。

金次郎は例によつて、中々あはないのだ。彼の戸は一通りでは開かないのだ。誠意をつくして戸をたゝかないものには開かないのだ。眞に求めることが出來ないものには與へてもだめなことを知つてゐる。だが彼はたゞこばむためにこばむのではないのだ。眞心が見えるまで拒むのだ。少くも意志の弱い、求める力のよわいものには自分の云ふことは行へないことを知つてゐる。自分の云ふことを行へないものには何を云つてもはじまらないことを彼は云つてゐる。だが行へるものには彼は道をといてうまない。

とう／＼金次郎は逢ふ決心をした。

逢ふとすぐ云つた。

『あなた達は何のために來たのです。私は今小田原侯の御命令でこゝで働いてゐるので、今いそがしい最中です。あなたたちのことをかまつてゐる暇はありません。すぐお歸りなさい』

宗兵衞、いろ／＼と嘆願する。

『だめです。本人の孫右衞門の顏を見るのに、まだ自分がわるいと云ふことが本當にわかつてゐるとは思へない。まだ他人をうらんでゐるとしか見えない。あなたの奧さんの半分の誠意もあると思へない。そんな人に何を云つたつて駄目です。私の教は自分のわるいことに氣がつき、他人の恩に報いる道です。孫右衞門の心がけとは正反對です。云つたつてわかるわけはない。早くお歸りなさい』

雷のやうな聲で怒りつけた。

孫右衞門も汗びつしよりかいて、頭をさげるより仕方がなかつた。そして、

『心を入れかへますから教へていたゞきたい』ことを云つた。

金次郎は默つて見てゐたが、顏色を少しやはらげて云つた。

『そんなに云ふのならば、ともかく役にもたつまいが、道理をきかせて上げよう。愚かな考をすて、私心をすてゝよく聞くがいゝ。積善、不積善で禍福吉凶が生ずるのが、自然の勢ひなことは聖人のおつしやつてゐる通りだ。孫右衞門の家は天明の饑饉の時に、何萬と云ふ人が死んだのにそれを助けようとせず、高く米を賣つてもうけた。それは天も惡み、鬼神も顏をそむける行ひで、その時すでに孫右衞門の家はつぶれてよかつたのだ。それがまはつて今度その報いが來たのだ。その時孫右衞門があはれみを知つて、家産をつくして人命を救ふために働いた

ら、家をたもつことは出來たのだ。そして孫右衞門の妻も死なずにすめたのだ。處が、孫右衞門は他人の苦しみを見て救はうとせず、江戸に出たりしてぐづぐづしてゐた。他の人達が、孫右衞門が又まうけようと思つてゐるととつたのも無理のない話だ。それでとうとうあんなひどいことが白晝行はれることになつたのだ。恐るべきことだ。自業自得、因果應報とはこのことを云ふのだ。だからますます畏れますます謹まなければならなかつたのだ。所が自分のことは棚に上げて他人のこと許りうらむ。土地の人に罪はないのだ、天が土地の人をして孫右衞門を罰し玉はつたのだ。それを孫右衞門は氣がつかなかつた。そして相手を恨み憎んだ。それは天を恨み憎んだやうなものだ。その結果獄に入れられた。それでもまだ目がさめない。今家を起さうと思ふ、その心がけはいゝが、一番大事なことを忘れてゐる。それは天罰からのがれるために、自分の心の内の罪をすつかりなくなし、一身を艱難において、他人の困苦をのぞかうとすることだ。それさへ出來れば、禍變じて福になり、求めずして一家は再興出來るのだ』

之は二宮金次郎にして云へる言葉だ。彼は之を口だけでなく實際に根本的に實行してゐる第一人者だから。

孫右衞門は金次郎の云つた精神は理解出來なかつたであらう。だがその權威の前には頭をさげないわけにはゆかなかつた。



『それではどうしたらいゝのですか』恐る恐るきいた。

『あなたの所にはまだ餘財がいくらかあると思ふが、皆でどの位ありますか』

『全部あつめれば五百兩位はございます』

『それを家へおいておくのは禍のもとであなたに害がある。それをそのまゝにしておくと禍が又生じてくる。餘財は病毒ですから、全部すてることが必要です。それをしなければあなたの家はつぶれるでせう』

之はいつもの金次郎の手だが、しかし孫右衞門にとつてはあ

まりに意外であつたにちがひない。宗兵衛にとつてさへあまりに恐ろしい病氣根治法だ。皆何とも云へずに默つてゐる。

金次郎は云つた。

『私の教は君子の教だ。小人の教へではない。だから私の云ふことを行ふには目前の利害得失に心を奪はれるやうな心では出來ない。もしさう云ふ心がけなら私にはどうすることも出來ないのだからうちへ歸つて、自分のいゝやうにしたらいゝだらう。しかし私の云ふことをきいて本當に家を再興しようと思ふなら、目前の利害得失は忘れて、神佛のよろこび玉ふ道をふまなければならない』

『どうぞ教へて下さい。私にはどうしていゝかわからないのです。先生のお教へにそむくやうなことはしません。餘財は何處にすてればいゝのですか』

孫右衛門の言葉には誠意があるとは思へなかつた。だが金次郎は良藥をのませる方法を心得てゐる。

『河や海にすてろとは云はない。あなたの土地の人はあなたの慾心をくだき、祖先以來の惡因をのぞいた恩人だ。さう云ふ人がゐなかつたらあなたは今になつても目がさめず、人間の道を忘れ、惡因をつづけてつくり出してゐたでせう。見やうによれば土地の人は自分の身を犧牲にしてまで、あなたの善心を發しそれを永續させるために働いてくれた人のやうなものだ。心眼がひらけるとさう思ふやうになる。



だからあなたはその金を土地の人にさし出すがいゝ。そして非常のさい、艱難を一緒にすべき時に、私が不明で時機を失し、皆さんに御迷惑を與へたのは私の大きな罪でした。今になつてやつとそのことがはつ切りしました。それで今更後悔しても始まりませんが、せめての罪ほろぼしに餘財を賣り、僅かですが、之だけ得ましたから、どうか貧苦の人を助けるためにおつかひ下さい、之は私の前非を悔いたしるしで御座いますから、どうか私の志をあはれんでおきき下さればこんな仕合せなことはありませんと云つてお金をのこらず差し出すがいゝ。そして土地の人にたいする恨みの念をすつかりなほすことが出來れば、萬事がうまくゆくことは昔からの道である。そして衣食のためにはあなたがいつも江戸へ舟で荷をはこんで運賃を得てゐたが、あの仕事は惡い仕事でないから、それで金をとつたらいゝでせう。その爲には身をへりくだり、勞苦すればするだけ福利があります。もし私の云ふ通りにしてなほ土地の人が不平を起しあなたの家があやふくなつたら、私が責任をもつて五百兩を與へるから心配しないで、私の云ふ通りにするがいゝ』

金次郎の教は至高である。だが彼は五百兩を與へると云ふことで至高の教が、一つの方便にかはる。だが普通の人を感化するには矢張りそれだけのことはしなければならない。金次郎の語を本當に從ふものがあれば、それは本當に君子である。だがそれを從ふことはむづかしい。孫右衛門達は保護を得て、いく分安心したであらう。

だが彼等は決心して金次郎の家を出たが、出て考へて見ると、少し馬鹿々々しくもなつて來た。興奮づかれがするに從つて氣が滅入り、決斷がにぶくなつてくる。

その時宗兵衛ともう一人は途中で孫右衛門と別れ、二人で鎌倉まで來て、大雨に逢つた。

それをさけるために或る寺により淡海和尚に逢つた。淡海和尚は何處へ行つたのだときいた。

二人は事實をありのまゝに云つた。淡海和尚は感心して云つた。

『そして孫右衛門はそれを實行する決心がついたのだね』

『處がどうしたらいゝか、少しまよつてゐるのです』

『馬鹿な。そんないゝ教をうけてまだまよつてゐる者があるか。すぐ實行しなければいけない。今の世にそんないゝ教へをうけておいて、實行しないのは道理に背く、早く歸つて實行するやうにするがいゝ。一刻も猶豫すべき時ではない。すぐ歸つて實行するがいゝ』

二人は信用してゐる淡海和尚にさう云はれて決心が定つた。

そして孫右衛門もとう／＼決心した。そして私財をのこらず賣つて、その金を金次郎に云はれた通り云つて、町役人に五百兩をさし出した。町役人はびつくり仰天した。どうしていゝかわからなかつた。孫右衛門にうらまれても仕方がないと思つてゐた所を、五百兩といふ大金を、罪ほろぼしとしてさし出した

のだから。驚くのはあたりまへである。太陽が西から出ても、そんなことはあり得ないことゝしか思へないことだ。

しかしびつくり許りしてゐられない。段々うれしくなつて來た。そして感嘆しないわけにはゆかなかつた。そしてすぐに町の人達の處に相談と吹聽に出かけていつた。町中の人はその話をきくと同時に一人のこらず、驚き、興奮し、喜びと、讃美の聲をあげる。

『孫右衛門と云ふ人は何處かちがつてゐた』

『惡にも強ければ善にも強いと云ふのは本當だ』

『俺達の方からこそあやまらなければならないのだ。家をやかれ、妻を失なつてゐながら、自分の惡いことを後悔して、のこつてゐたものを殘らずさし出すなんて云ふことは普通の人には出來ないことだ』

孫右衛門の評判は一朝にして大變化を起した。今迄町の極惡人だつたものが、忽ち町の一番慈善家になる。皆興奮して感心し、その噂には羽がはえてとびまはる。

金をかへさうと云ふ人もあつたが、『折角の眞心を無駄にするのも惡い。私達の方でも罪のつぐなひはしないとわるいが、金はもらつた方がいゝだらう』と云ふことになる。

そして金に困つてゐる人に無利息でその金を融通することになつた。孫右衛門にたいする皆の尊敬は、やがて孫右衛門の家の商賣を盛んにし、孫右衛門の家は目に見えて盛んになつてゆく。金次郎の云つたことは事實となつてあらはれた。

復讐に報いるに復讐をもつてせず、天意に從ふことで、復讐を忘れ、相手に天意を通じさせる。金次郎の道は立派である。

だが孫右衛門は運命がいゝ顔を見せだすと地金を出して來た。そしてしまひには貧乏になつたさうだ。

金次郎の精神が生さへすれば孫右衛門はそんな目にあはずにすんだ。金次郎は實によく人間がどう生ればいいかを知つてゐた。（つゞく）



家庭セクション

私が他家へ伺つて感心したこと

下駄箱と名札

大妻高等女學校校長 大妻コタカ



よく伺ふ澤山お子さんのあるお宅で感じた事ですが、そのお宅では玄關のわきに簡單な下駄箱がそなへてあつて、その下駄棚には銘銘の名前をつけておき、外から歸るとすぐに自分の名札のところに、下駄を仕末して上るやうにさせていらつしやいますので、いつもきちんと片づいてゐるのには全く感心させられます。

下駄箱の設備のないお宅では下駄を向ふむけにして上るやうに習慣づけておけば玄關が亂雜になる心配がなくてよろしいでせう。

奥樣の教育法

東京家政學院舍監 中山貞子



私の知己のお宅ですが、そこのお子樣達の善良な明るさと、奥樣の賢い教育振には常に

縮尻話

これは本誌寄稿家の奥樣方が「何かの御參考にもなれば……」といふ御好意からお漏らし下すつた實生活上の縮尻話や打明話です。その都度記者がノートして置いたものを逐號御紹介することにしました。失敗、縮尻等の原因がどこにあつたかにお氣を留めてよく御覽下さい。

雨の降る日でした。知人の方が手土産をさげて突然訪ねて來られました。さて困つた、お菓子は品切れ、買ひに行つて來ようかと思ひましたが、雨は降るし、ふと氣づいて只今頂いたお土産のお菓子、早速の機轉で、それをお菓子器にとつて、お客樣に侑めました。そのお菓子を見

訪客

的場朝二畫

1



感じ入つて居ります。それは殿樣かいゝ事をとつて訓誡し、惡い事をちつともおつしやらない事です。例へば『おいたをしてゐたのは誰ですか』といつたやうなことはおつしやらずに、『よく勉强したは誰ですか』とか『または明日もしつかりやりませうね』といつたやうに、不語のうちに怠けた子供を導かれてゐる事です。いゝ事ばかりに目をつけられる、それだけでも大した教育と感じ入つて居ります。

玄關の手洗

三輪田元道氏夫人　三輪田繁子

訪問の場合、女の方は下駄ですから、よろしう御座いますが、男の方は靴をぬがなければなりません、その手でお菓子を頂いたりするのは實に氣持のわるい事です。又、外を步いてゐると誰しも埃を浴びて居ります。お客樣に對し、夏ならば冷たい絞り手拭、冬ならば熱い蒸タオルを出すことが一般に行はれて居りますが、先日或る方の處をお訪ねしますと、玄關傍の一寸引込んだ窓下に小ぎれいな手洗所を付けてありました。衞生的でもあり親切な御心遣ひと實にうれしく感じました。

初夏と　お顏の手入れ

生地の荒い方は、クリームだけは必ず毎日附けて戴き度いと思ひます。そして洗顏前には顏の荒れる方もさうでない方も皮膚の氣孔を塞いでゐるお化粧を洗ひ落して、惡い分泌物を出す樣にしますと生地が垢拔けます。

花時から葉櫻の季節にかけては、一體に皮膚が荒れ易く汚くなる時ですから、荒れ性の方は特に御注意を願ひます。

私の經驗から申しますと二番目位の米の磨汁を一度ぬるい加減にわかして、顏を洗ふのも生地を細かにします。またお酢を半分の水で薄めてつけるのもよろしいし、橙汁、夏蜜柑汁を朝晩につけるのも有効です。

―小口みち子―

2



るなり主人が、『何だ、そんな子供だましのやうなものしかないのかい』と、如何にも苦々しさうに、叱るではありませんか。

私は突嗟の場合うまい言譯も出ず、赤くなつて、申譯ないやら、お氣の毒やらで、その時の居たゝまらなかつたつらさは忘れられません。最初に私が『只今これを頂戴いたしました。大變結構なので、早速御一緒に頂からうと思ひまして――』とたつた一言、主人に申しましたらかうした失禮がなかつたらうにと、今も悔いて居ります。

主人の好きな料理

塚崎直義氏夫人　塚崎里枝



鯛のちり鍋

私共では主人を始め子供、使用人まで一緒に食事を致しますので至つて愉快で、主人もお菜の好き嫌ひは申しませんが、強ひて申しますい、い、、、、ら鯛のちり鍋で御座いませう。

ちり鍋は、誰方も御存じの通り、鯛を賽の目に切つて置き、お鍋の湯が煮立つた時分に之を入れ、それが煮えた頃、三ツ葉、豆腐を入れて

聯想



的場朝二畫

寸鐵常識

▽メリンスの衣類には、菖蒲の葉を挟んで納めて置くと蟲がつかない。

▽雨のあたり易い障子は、焼明礬を入れた糊で貼つておくと、剝がれません。

▽ナイフの錆は、馬鈴薯の切口に磨粉をつけて磨くと、きれいに除れる。

▽着物に蠟が附いたら、削りとり、新聞紙を上にあて、焼鏝をかけると除れる。

▽海鼠は藁づとや、新聞紙に包むと溶けてしまふ。

▽嬰児の襁褓や寝衣は、センブリの煎じ汁につけて乾かして用ひると、蚤がつかない。

▽流し元にみゝずのわいた時は、酢をかけると全滅する、時々古い酢をかけてゐるとみゝずがわかない。

▽鏡は時々、アルコールで拭いて後、乾いた布で拭いて、軽革で磨いておくとよい。

▽馬鈴薯は芽が少くて凸凹なく、肌のなめらかなのが良く、赤いのより白いのが美味しい。

▽腎臓病の人は、蕗の根を煎じて飲むと効果がある。

私の家でやつてゐることで 是非おすゝめしたいこと

押入の工夫

薬學博士西崎弘太郎氏夫人　西崎綾乃



普通押入れの棚は中央につけてありますが、私は、それよりも一尺下げた所につけ直し、そして天井とその棚の間にもう一つ新しい棚を設けました。それは鴨居と同じ高さに奥と左右との三方の壁に桟を一本宛横にとりつけ、それと鴨居の長押を一方の支へにし、

醤油、砂糖、味醂で味をつけるのです。

御手製はんぺん

之は家庭で簡單に出來て美味しう御座います。白味の魚を摺實にした中へ玉子の白味だけを入れ、鹽で程よく味をつけ、それを圓いお皿の中に入れ半月形にきつたものを、煮出汁の中に入れ、浮き上つた頃引き上げます。これはお汁の實にしても結構ですし、ちり鍋にしても大變よろこばれます。



○女房に濟まない酒の通ひ帳（飴ン坊）

○お土産を抱いた儘子は寢てしまひ（逸名氏）

取外しの自由に出來る適當の板を渡し、棚にしたのでございます。この一番上の棚にはふだん餘り出し入れしないもの、例へば冬なら夏物などを入れて置き、中の棚には布團を入れ、下には行李やトランクをしまつて置きます。僅かの工夫ですが、かうしますと、これ迄とかく亂れがちだつた押入の中がきちんと整理され、布團の出し入れなども、子供や身丈の低い女中などにも容易に出來て大層便利でございます。

手紙の分類

櫻田助作氏夫人　櫻田節彌



私の家では毎日の手紙を讀むとすぐに返事のいるものはメモに記しておいて、夜分のひまを利用して返事を書きます。そして重要な手紙と普通通信とを分類して狀差に入れておきますので、あとで整理が大變樂に出來ます。

ポケット衛生寶典

赤ん坊に御用心

これから多い乳兒の濕疹は、種々の原因から發しますが、不潔、發汗、糞便による汚穢、蚤や蚊に刺されたりしたのが誘因となる場合が往々ありますから、お母さまは常に赤坊の清潔に注意しなければなりません。

煙草が藥になります

一、ちよつとした切り傷には、刻煙草をつければ血止の効があります。

二、毛蟲に刺された時は、ヤニを塗れば早く治ります。

三、小蟲が耳の孔に入つた時は、煙草の烟を輕く吹き込めば這ひ出して來ます。

四、兩切煙草の薄紙を書物や毛織物の間に挾んで置けば防蟲の効があります。



一、恐ろしい計畫

ある日、ある所に、十二匹の黒い二十日鼠と一匹の白い二十日鼠とが輪をつくり、中の黒猫の周圍をくる〳〵と樂しげに廻つて遊んで居りました。

最初面白さうに眺めてゐた黒猫は、そのうちにだん〳〵空腹になつて來たので、無心にたはむれてゐる二十日鼠を食つてしまはうと考へました。

ところが、その黒猫は、風變りだつたものですから、次のやうな奇怪な一計を立てるのでした。

それは、白い二十日鼠は食後の水菓子として一番最後に食べてやらう、又黒い鼠も片端から食ひ盡して行つたのでは面白くない、先づどれか一匹食べて置き、今度は、その次から彼等の方向へ數へて第十三番目に當る奴を食べることにしよう——こんな恐ろしい計畫だつたのです。



黒猫は最初一匹食べました。次に食つた鼠の前に走つてゐるのから數へて第十三番目の鼠を食べ、以下同樣にして黒い鼠を食ひ盡し最後に豫定通り白い鼠を食べてしまひました。さて、黒猫はどの鼠を最初に食べたのでせうか？

但しお斷りして置きますが、食はれた鼠は勘定の中に入れてはなりませんし、いつでも食はれたのの前にゐる鼠を起點として鼠の方向へ十三まで數へねばなりません。どうか一つ考へて見て下さい。

二、人形の家

1、第一圖は玩具で出來た人形さんのお家です。屋根の棟の長さＡＢと植木鉢の口の長さＣＤの二つのうちで、どちらが長いでせうか。

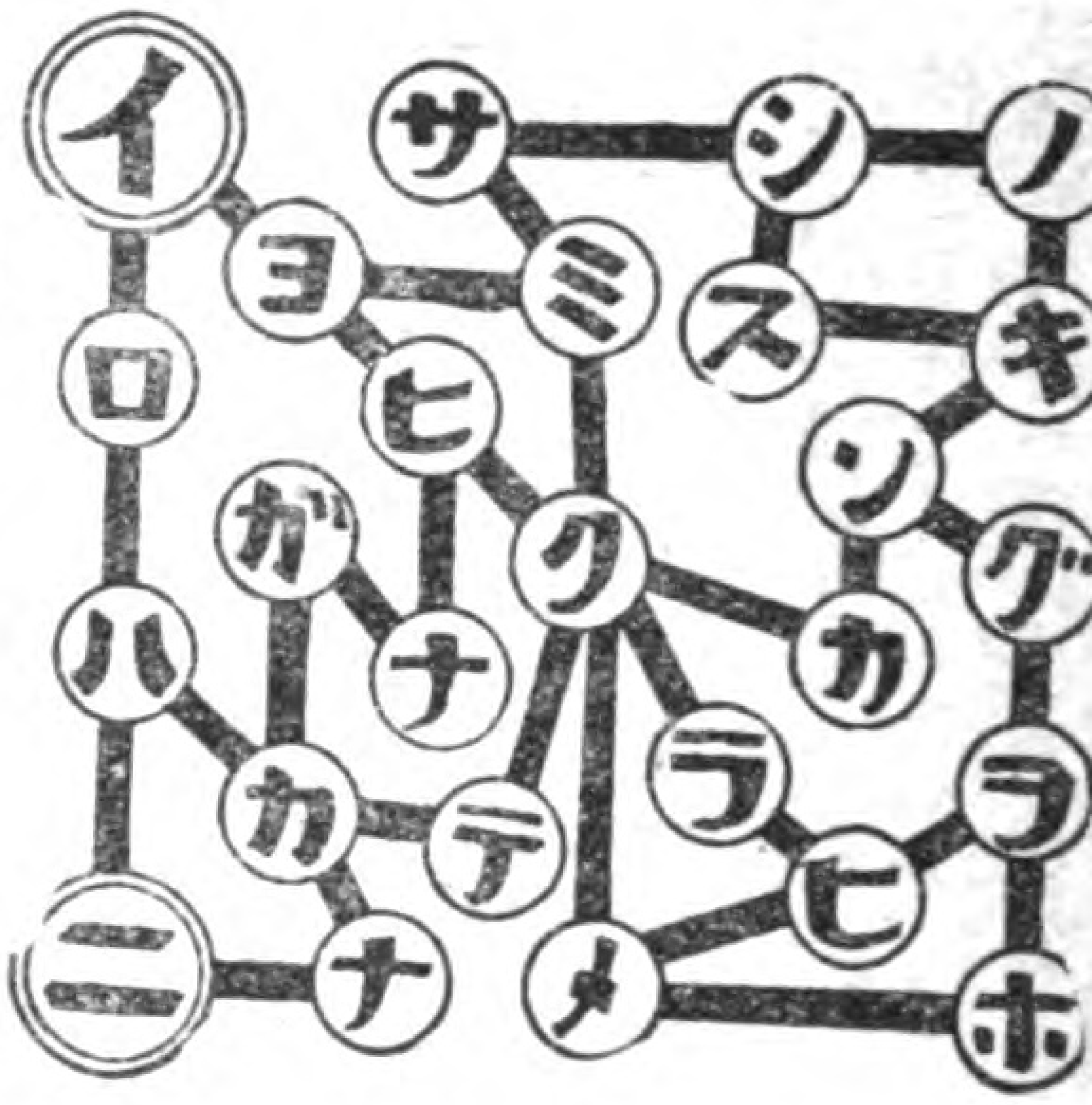


2、第二圖に於て二つの向日葵のうち、左のは外側に、右のは内側に點線の輪がありますが、この二つの輪のうちで、どちらが大きいでせうか、勿論右の方ですつて？本當ですか、それは。



三、ハテその通路は？

先づ圖を御覽下さい。これは(イ)から出發して文字から文字を渡り、最後に(ニ)へ行く考へ物です。



どの道を通つても構ひませんが、歩數が必ず偶數で終るやうに歩かなければなりません。例へば、(イ)から眞直に進んで(ニ)へ行く道を通るとしませうか、(イ)から(ロ)へ一歩、(ロ)から(ハ)へ一歩、(ハ)から(ニ)へ一歩、合計三歩といふ奇數の歩數で終ります。奇數ですからこれは失敗です。こゝでは四歩目、六歩目、八歩目といふやうに必ず偶數の歩數で(ニ)に達しなければなりません。はてその通路はどれでせう。通路の假名は十七字の俳句になつてゐます。

四、二人の關係

武雄は信雄の弟に當ります。國雄は綱雄の弟になります。そして武雄は國雄の父だとのことですが、すると信雄は綱雄の何に當りませうか?

五、盃の持ち方

盃がここに二つ置かれてあります。それを拇指と中指の二本だけで同時に二個が接觸せぬやう持ちたいのですが、どうしたらよいでせうか?



六、頓智の問題

1、佛蘭西の酢を一錢より一厘安く賣ると米國の偉人が出てまゐります。偉人とは一體誰のことでせうか。

2、『百百かかかかかかかかかかか風なななななななななな百升一升半升』何てあわたゞしい、まるで立體派の詩のやう。これは一體何のことでせうか。

3、歐洲航路の汽船の中で乘客の一婦人が遽かに産氣づき、たつた今赤ン坊を産み落しました。汽船の重さは前と變つてゐるでせうか。

七、立札の文字

H公園の一隅には、花が燃ゆるやうに咲いてゐました。私は、そのそばを通りかゝり、ふと圖にあるやうな立札を見出しました。何て不思議! まるで繪と字がごつちやになつてゐる、一體どうしたといふのだらう? 今以て何のことかわからない私のために、皆さん一つ判じて見て下さいませんか。



(解答は三七八頁)



御用心！ うつかりすると癌になる

醫學博士　山極勝三郎

此の貴重なる一篇こそ『癌を絶滅させるには國民の自覺を促すにある。それにはキングの如き世界的大雜誌に據ることが最も有効である』との見地より、斯界の權威山極博士が特に本誌に寄せられたものである。然るに、この稿成るや博士は忽焉として薨去された。我等は、故博士の靈を弔ひつゝその期待に背かざらんことを讀者諸君と共に切望して止まぬものである。

大酒家が胃癌になる例

世間では殘燭内閣などと評したあの加藤内閣の總理大臣加藤友三郎元帥は、若い時から大酒家であつたといはれてゐる。そして元帥の終焉の時、佐藤、本多兩博士の診斷に依ると大腸癌となつてゐるやうだ。

元帥のことはよく知らないが、大酒家と癌とは密接な因果關係があるものだ。殊に虛弱な體質であつた加藤元帥の場合を想像すると、普通酒呑が腦溢血から中風に罹るとは違つた道を辿つて、癌になるのは當然であつたと思はれる。

元帥に限つたことではない。大酒家はあの強烈な酒精の害に依つて、腦や脊椎を犯されるばかりでなく、胃腸は絕えず犯されてゐる。殊に胃腸の生來虛弱な人などは、忽ちにして胃腸壁は糜爛してしまふ。胃腸が絕えず痛みを覺えて來る。

さういふ時に斷然酒を廢めれば良いが、酒精中毒患者は、それが死ぬほど辛いらしい。太田南畝（蜀山人）のやうに、今日は天氣がよい、今日は氣分が惡い、いや今日は隣家の妻君の丸髷がよく出來てゐたから、一杯やらうと何彼と理窟をつけて飲む。胃腸が痛めば、

『酒を飲めば癒る！』

と、亂暴にも、更に酒を煽る。

その結果は、胃潰瘍や腸炎に罹る。

それでもまだよい。この時斷然酒を廢めて、胃潰瘍の根本的治療をすればよいのだが、それさへ怠つて、しかも酒は相變らず飲んでゐる。それでは癌にもならうではないか！　一時の快を貪つて、自殺してゐると何らの相違はないのである。

癌の前驅的病變

胃癌や腸癌の場合のみではなく、肝癌、呼吸器癌でも、或は婦人の乳癌や子宮癌でも、突然に起るものではない。

肝癌にすれば、住吸血蟲やヂストマに依つて、肝臟內の血管を喰破られ、そのため肝臟內に腸から來る血液が溜つて、宛も腸滿のやうに腹が脹れ出す。それを棄てゝ置くと、そこに癌が出來るのだ。

乳癌でも同じく、何うかして婦人の乳に慢性の炎症がある。大して苦痛でもないので治療もせずに放任して置くと、何日とはなくそこに癌が出來て、乳房を切開せねばならなくなる。

かうした癌の出來る以前に、癌を作る直接の原因となる病氣を、醫學上では、癌の前驅的病變といつてゐる。謂はゞ、『お前は軈て癌になるから注意しろ！』と、癌の方では親切にも、前觸れをして吳れてゐるのである。



但し、醫學の知識のない人で、かゝる前驅的病變が癌の原因となることを知らぬ人も、寧ろ多からうと思ふ。これは何とも致し方がないが、さういふ人は、本文に依つてこれから注意して頂きたい。

刺戟に依つて癌が出來る

昔の人は癌は、一種の腫物の如く考へてゐた。癌といふ一種のバクテリアがあつて、これが皮膚や粘膜に附着して癌となると信じてゐた。

ところが、醫學の進步と共に、この說は根柢から破壞され、現今では、ウイルヒヨウの刺戟說とコオーンハイムの遺傳素因說が、有力な兩論陣となつてゐる。

かういふと、餘り學問的で面白くないが、ぐつと砕けて、先づ刺戟說に就いて話して見よう。

この說に依ると、一定の刺戟が持續されると、そこに癌が出來るといふのだ。

前述した胃癌の場合でも、胃潰瘍になつてゐる胃壁を、後から〳〵酒精が入つて來て刺戟する。

そのために癌となる。

また面白い例としては、西洋人の唇に出來る癌である。あ

の太いマドロスパイプを年中横に啣へてゐるために、唇の一部に絶えず刺戟が與へられる。そのために西洋人には口唇癌が多いのだ。

私は、これに對する最も適切な實驗をしたが、それは兎の耳に人工的に癌を發生させることである。

先づ私は、兎の耳にコールタールを塗つて置いた。コールタールは石炭から作られるが、刺戟の强いもので、また塗つて置くと容易に脫れない。そして外からバクテリアなどの入つて來る心配もない。

可愛想だが、二ケ月餘りすると兎の耳はぐしや〳〵と爛れて來る。その時、直ちにタールを除いてしまふと、數日後にはその爛れは癒つてしまふ。ところがその爛れた上へ相變らずタールを塗つて置くと、爛れの上へ疣狀のものが出來る。これが癌の始まりで、その疣は段々數も殖え、範圍も擴がつて來る。そして完全な人工的タール癌となつて、兎は命を奪られてしまふのだ。

刺戟によつて癌が發生することは、これで證明された譯である。

癌は細胞の反逆運動

そこで病理學的な話になるが、もう一歩進んで、癌の發生狀態を仔細に觀察して見よう。

兎の耳に出來た爛れは詰り上皮（細胞）の破壞された結果である。人類でも他動物でも同一だが、かういふ爛れが出來ると、その周圍にある上皮細胞は、元の完全な上皮にならうと熱心に恢復運動を始める。この運動があればこそ、傷も癒り、爛れも癒るのだ。

ところが、折角恢復運動を熱心にやつてゐるのに、次から次へとやつて來る破壞作用が大きいので、なか〳〵恢復は出來ない。その結果、周圍の細胞は、自暴自棄に陷つてしまふ。否寧ろ反逆的な性質を備へるに至るのだ。

例へて見ると、昔の百姓一揆である。惡代官の徵稅が嚴しいため、藻搔いても〳〵追つかない。訴へても頼んでも採り上げられない。泣いても叫んでも苦痛から脫れる事が出來ない時、

『えいッ、勝手にしろ！』

といふ棄鉢な思想も生れるだらう。中には結束して、この惡稅を輕減すべく猛然として運動しようとするものも出る。その結果が、代官暗殺、燒討、續いて叛旗を押立て、暴動が始まる。

朴訥純眞な百姓に、始めからかうした反逆的な考へがあつたのではない。餘りの苦痛に堪へ切れず、止むに已まれず百姓一

挾をおつ始めたのだ。

これと同じく、幾ら努力しても何の効果もない上皮細胞は、遂に反逆的性質を備へ、今まで持合はせない特殊な性質の細胞となるのだ。これが即ち癌細胞である。

忠實な細胞が却つて命取り

このタール癌の實驗に依ると、凡ての癌の發狀態が説明出來る。

胃潰瘍の場合でも、潰瘍の周圍にある細胞は、早く潰瘍を癒して、健康な胃とならうと努力してゐる。ところが、かゝる忠實な細胞の主人たる人間御當人は、一向その誠心を知らず、暴飲暴食をして、胃壁を刺戟する。忠實な細胞の努力は、何日になつても酬いられない。結果、この忠實な細胞が、俄然、主人に弓を引くに至るのだ。

『これでもまだ俺を苦しめるか!!』

とばかり、奮然として癌細胞になり變り、胃癌となつてしまふのだ。そして主人たる人間に忠實であつた細胞が、反對に人の命を奪ふ細胞となつてしまふ。

して見ると癌は憎むべきものではない。寧ろその心情(?)は同情すべきだ。そして憎むべきは却つて癌を作つた癌患者自身といふべきではあるまいか？



口唇癌の原因

もう一つ、この實驗に依つて證明されたのは、癌が傳染病ではないといふことだ。

胃癌や子宮癌の患者を見舞つた人は、誰でも經驗するだらうが、あの我慢し切れない惡臭である。

『こんな惡臭を發する病氣は、無論傳染するだらう？』

と素人は考へる。併し、前述の如く、癌は細胞自身の反逆から發生するもので、決して他から傳染するものではない。

だから癌患者を恐れる必要はない。その排泄物や汚物なども、清潔にすることは無論必要だが、結核や窒扶斯患者のそれの如く、恐れなくてもよい。癌を手術した醫者で、癌に感染した例も絶對にない。

癌は遺傳する

ところが厄介なことには、癌が遺傳することである。

コオーンハイムの遺傳素因説は、これを立證したものであるが、詰り癌そのものゝ遺傳ではなくて、癌に罹り易い素質が遺傳するのである。

この實例で最も有名なのが、大奈翁一族である。あの英雄の如き偉人が、絶海の孤島セントヘレナの島蔭に、淋しい末路を

遂げた時、彼が胃癌に惱まされてゐたことは知らぬ人もないだらうが、彼の父も胃癌で死んだことを知る人は尠からう。否、彼の兄弟二人まで、同じ胃癌で死んでゐるのだ。詰り、奈翁一族には、胃癌に罹り易い素因が遺傳されてゐたのである。

ブローカーといふ人の調査に依ると、ある一族二十八人が、揃ひも揃つて胃癌で死んだと報告されてゐる。

これだけでは、學問上の立證とはならぬかも知れぬが、我々が動物に試驗して見ても、この説は誤りでないことが分る。例へば廿日鼠は殆んど全部乳癌に罹り、兎は肝癌に罹る等の例でも分明である。

そこで注意すべきは、一族中に癌に罹つた人のある場合だ。殊に、胃癌で死んだ父親を持つ人は、自分に胃癌の素因があることを忘れてはならない。乳癌や子宮癌で死んだ母を持つ婦人は、乳癌や子宮癌に注意せねばならない。若し、それらの前驅的病變を發見したら、何はともあれ、これを根治することが急務である。

尤も、胃癌で死んだ人の子が、肝癌や呼吸器癌になるとか、乳癌の母から生れた娘が、子宮癌になるといふことは少ない。常に同一種類の癌素質が遺傳されるだけ始末がよいともいへばいはれる。



癌は飛火性がある

前述した如く、兎の耳にコールタールを塗つて、人工的癌を發生させ得るが、この現象は、工業の發達した國では、自然に行はれてゐる。

例へば、英國の炭礦で働く礦夫は、手や足の表皮に癌が出來る者が多い。

これを學問上では、表皮癌中の職業癌といつてゐるが、石炭ばかりでなく、石炭から製作される諸種の誘導體、即ちタールやアニリン又は石炭酸、その他亞砒酸等の強烈な刺戟性ある藥品を製造する者は、この職業癌に罹り易い。

その理由は、兎の耳にタール癌の出來たと同じで、今更説明の必要もないが、常にさうした藥品で、手足の表皮を刺戟してゐる結果遂に癌となるのだ。

然るに日本人には、この癌は割に尠い。それは幸にも日本人が入浴好きであるからだ。西洋人が日本の錢湯を、汚垢をつけに行くものだと嗤つてゐるが、この職業癌を豫防するだけでも、錢湯の効果は莫大であらう。

要するに職業上強烈な刺戟の藥品が手についたのを、直ぐに洗ひ落さずに置く。そこへ爛れが出來る。それへまた藥品がつ

く。今度は癌になる。職業上から、我々の實驗した兎の耳のタール癌と同じ癌を發生させてゐることになるのだ。

併し、この表皮癌は、切開してしまへば癒つてしまふ。恐るるに足りないのだが、何ぞ知らん、これがまた致命傷の原因となるものである。

即ち、表皮癌そのものは何でもないのだが、癌には飛火性があるから恐ろしいのだ。手足に癌が出來たと思ふと、何日の間にか、これが飛火して、肝癌となり、肺癌となつてゐる。

この飛火の理由は、餘り學理的になるから略して置くが、唯傳染でないことは知つて貰ひたい。早くいふと、表皮に出來た癌細胞が、血管を通つて移植されるものと思へばよい。



老ゆるをも知らでながむる小世界：曲川。此短い一句にすら故博士の篤學さが窺はれる。曲川とは博士の俳號。書は博士の自筆で寫眞は研究室に於ける博士。

だから、表皮癌の出來た人は、單なる腫物位に輕視せず、早く醫者に診察を乞ひ、この飛火を防ぐことが大切である。

癌は壯老年者の病氣

こんな實例があつた。ある氷屋の女中が、毎日氷をごりごりと噛んでは食べてゐた結果、到頭胃癌で死んでしまつた。氷水のやうなものでも胃癌の原因となるといふ例としても珍らしいが、また彼女が二十歳前後で胃癌になつた例としても珍らしいものだ。

癌は一體壯年期から老年期へかけて罹り易い病氣で、種々の統計を見ても四十臺、五十臺の人が一番多い。

日本で胃癌で死んだ有名な人では、尾崎紅葉の三十七歳、前述の加藤元帥は腸癌だが六十三歳、公爵桂太郎の六十八歳、岩崎彌太郎の五十二歳等、何れも壯老年である。

世界の統計で見ても、三十歳位までは殆んど皆無だが、四十前後から急激にその數が増してゐる。漸く思慮分別も圓滿になり、所謂脂の乘つた働き盛りに、突然斃れることは、當人は勿論、國家としても如何ばかりの損失か知れない。

また他の病氣と比較して死亡率を見ると、癌に依る死亡率は、第八位ぐらゐにゐるが、これは當にならない。この統計は

死亡診斷書に依るものであるから、内臓癌などで不明なものは、他の病氣に依る死亡となつたものも多からう。故に、癌に依る實際の死亡率は、もつと多いと思はれる。

癌は何して豫防するか？

さて斯う觀じ來つて、愈々最後に殘つたものは、癌の治療法と豫防法とである。畏くも昨年、天皇陛下より癌研究所設立のため御内帑金を御下賜遊ばされた。我々は感泣措くことを知らず、直ちに基本金を募集し、愈々砲兵工廠趾に癌研究所の設立を見るに至つた。これに依つて、我々の苦辛研究してゐる、癌に對する抵抗素の完成も蓋し近き將來にあるだらう。

この抵抗素とは、丁度種痘と同じやうに、癌細胞を牛馬に移植し、そこに出來た抵抗素を、更に人に植ゑようといふのである。現在では、動物試驗では成功してゐる。

兎に角、この抵抗素の完成は勿論望むべきであるが、それ以上に大切なのは、轉ばぬ先の杖である。

前にも度々述べた如く、癌には必ず前驅的病變が伴つてゐる。卽ち胃癌には胃潰瘍、乳癌には乳炎、肝癌には住吸血蟲又はヂストマに依る疾患、口唇癌や子宮癌等には、裂傷又は炎症等、必ず前驅症がある。更にもう一歩前には、暴飲暴食とか、梅毒とか、その他の不攝生がある。これらさへ驅逐して置けば、如何なる人でも、癌にならうとしてもなり得るものではないのである。

癌とは、また厄介至極なことの別名である。曰く○○癌、曰く○○癌と、新らしい言葉さへ出來てゐる程だが、我々から見ると、癌そのものよりも、寧ろ癌になる人の方が厄介だといひたい。

詰り、誰でも用心すれば癌にはならない筈であるのに、不注意と無暴とで、無理に癌になるからである。それも一日二日の不注意ではない、胃癌の如き何年といふ長い間の不注意から生ずるものに至つては、その人の不注意こそ癌以上に厄介である。

だから、決して悲觀してはならない。用心せぬと誰でも癌になるけれど、僅かの用心さへ怠らねば、決して癌になる恐れは毛頭ないのである。

智慧くらべ解答

（三七〇頁參照）

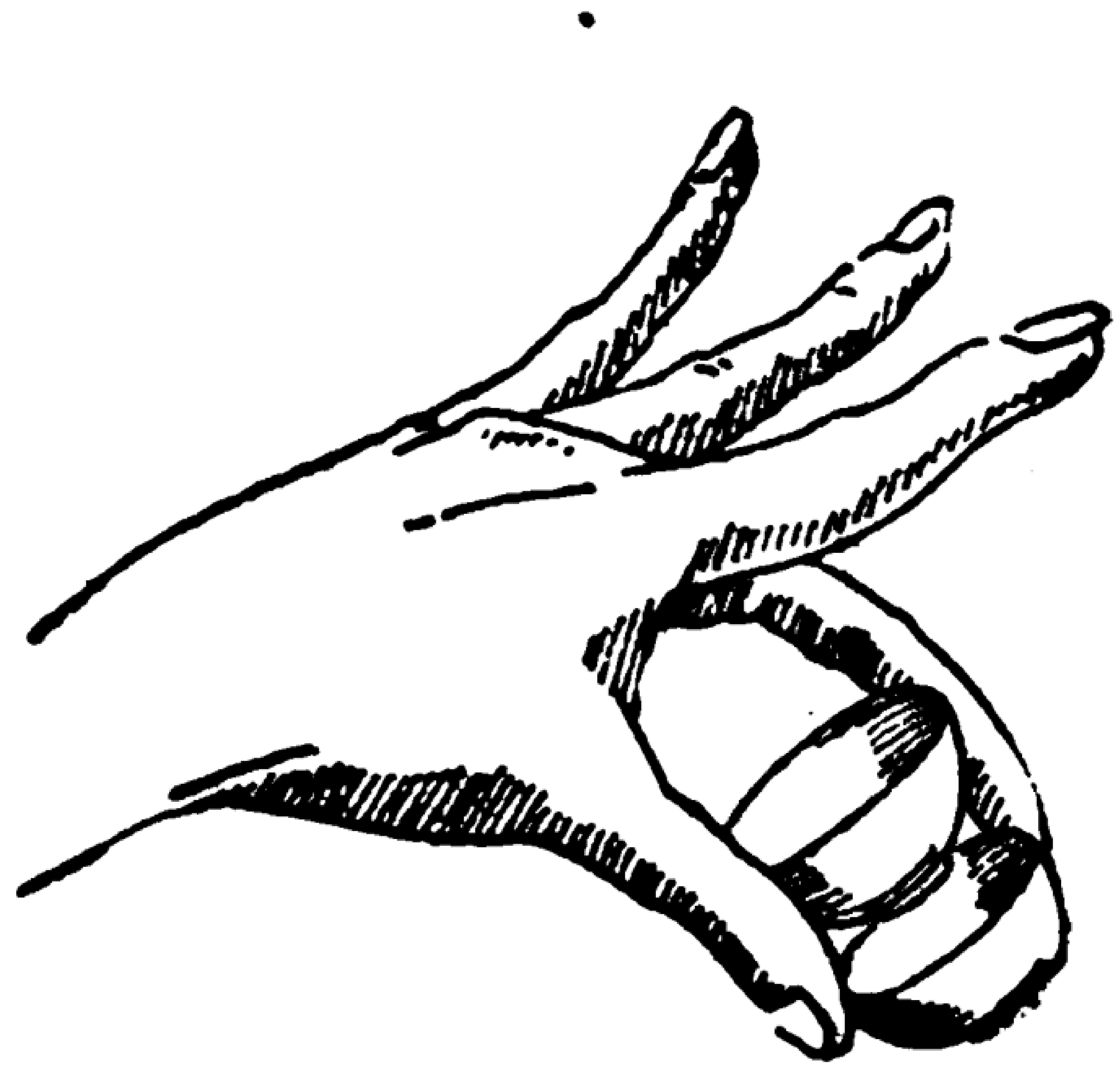
一、鼠の向きに從つて、白鼠から數へて第七番目の鼠を最初に食べました。

二、問題(1)(2)は、どちらも大きさ同じです。片方が大きく見えるのは眼の錯覺のせゐです。

三、ヨミサシノキングヲヒラクヒナガカナ（讀みさしのキングをひらく日永哉）

四、伯父。

五、左の圖解の通りです。



六、(1)フランクリン　(2)二百十日　風無く百姓一生繁昌　(3)同じです。

七、躑躅を折とる可らず。



日本一の婦人雜誌 婦人倶樂部五月號の大計畫御報道！

▲代表的の國産裝身具誌上展覽會
▲奇智頓智、家庭圓滿法珍案比べ
▲藝道に精進する名門の人々
▲大人物を仕上げた婦人の力物語
▲僕のしみ〴〵と見とれた婦人
▲花嫁さんの一番眼を着けられる所
▲萬年愛妻となる細君學
▲名家名流嫁づる婿づる物語
▲婦人病一切を治す座談會

▲初夏の誌上小兒科病院
▲いろ〳〵のおできの家庭療法
▲お產前後と愛兒の育て方百話
▲顏の長所を生かす洋髮の形のつけ方
▲しみ、小じわを隱す婦人の化粧法
▲中村福助さんの女になる秘法打明話
▲容姿を美しくする美人學講座
▲タオル地で拵へた子供着十種
▲新流行の裝飾手藝手ほどき
▲和服に便利な婦人下ばきの作り方
▲ネル地セル地の仕立方急所洗濯法
▲新流行雨コートの作り方

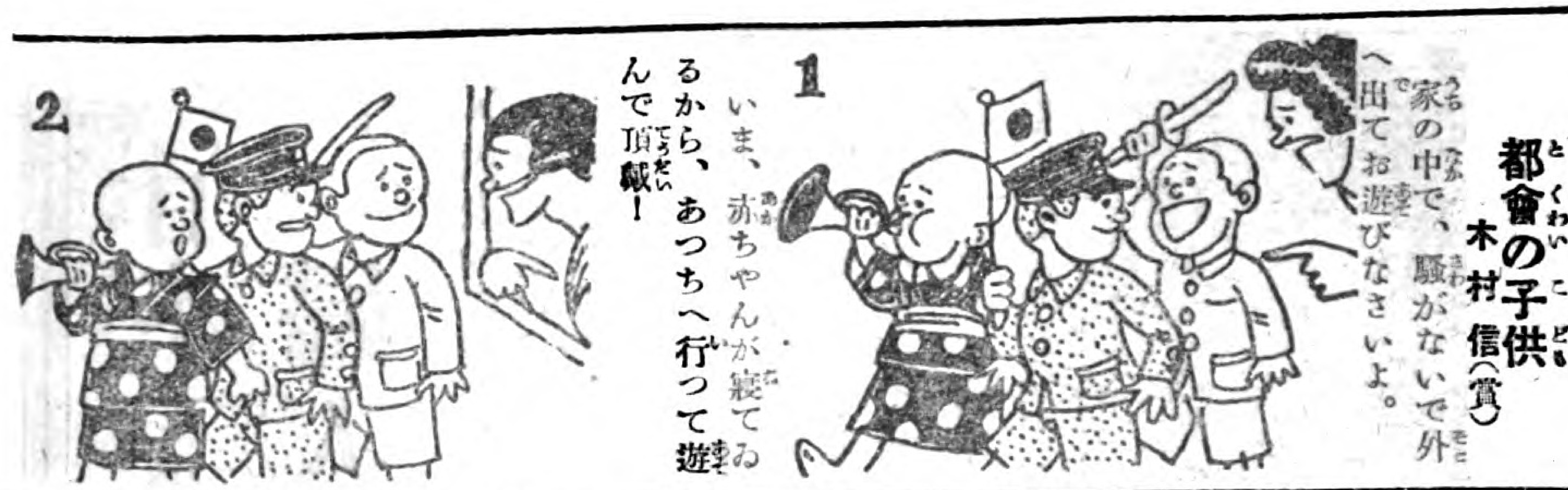
▲今月のお惣菜とおつけもの
▲子供さんの喜ぶ五月のお辨當
▲お料理の秘傳急所ものがたり
▲美容にも健康にもよい海草料理
▲素人にも出來る一品支那料理
▲結婚準備奧樣見習ひ日記
▲日本間の正しい飾り方
▲神さま佛さまの禮拜作法
▲一讀感激！昭和孝子節婦物語
▲人より見上げられる婦人
▲涙なしに讀み得ぬ人の情物語
▲傑作ユーモア映畫集

……**これは婦人倶樂部五月號計畫の一部**……

この外活記事・評判讀物數十篇滿載！（四百數十頁 定價五十錢）

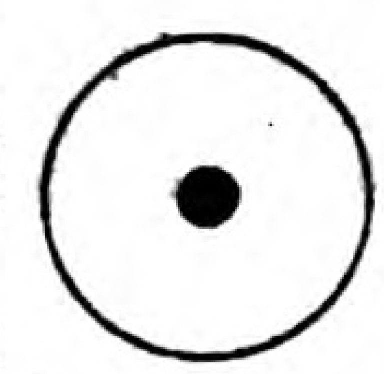
ゼヒ店頭實物を御覽下さい（**四月十六日頃發賣**）

都會の子供 木村信(賞)

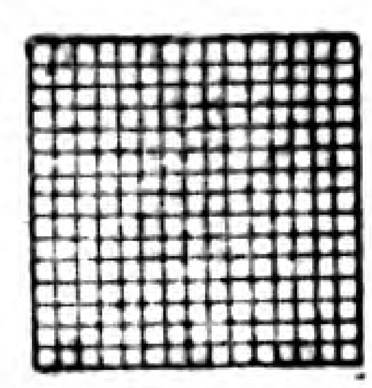


娯樂室

十人十色 これは何?



△愛煙家は煙管の吸口だと思ふ。
△子供は鉛筆のお尻だと思ふ。
△弓術家は的だと思ふ。
△運轉手は自動車のタイヤだと思ふ
△園藝家は植木鉢の底だと思ふ。



△碁狂は碁盤だと思ふ。
△漁師は網の一片だと思ふ。
△呉服屋は反物の縞柄だと思ふ。
△測量技師は製圖用紙だと思ふ。
△汁粉屋は餅燒網だと思ふ。

◎滑稽掛合

『まづ我輩位の儉約家はあるまいよ一ケ月の生活費が僅か十圓……』
『成程……一ケ月と云へばひとつきの事だね、君……』
『勿論。』
『ひとつき十圓! たまげたね、僕なんかひとつき五錢だ。』
『ヘエー、してひとつき五錢で食へる物は何んだね?』
『エヘン、ところてんさ。』

◎苦手くらべ

△虎の苦手は……加藤清正。
△猪の苦手は……仁田四郎。
△狒々の苦手は……岩見重太郎。
△百足の苦手は……俵藤太秀郷。
△鵺の苦手は……源　頼政。
△鬼の苦手は……渡邊　綱。
△大蛇の苦手は……素盞嗚尊。

◎早口競爭

○なた豆七粒生米七粒 七粒なた豆七粒生米。
○あの竹垣へ竹立てかけたのは竹立てたかつたから竹立てかけたのだ
○向ふの菜畑に鴨が百羽小鴨が百羽鴨が米嚙む小鴨が小米嚙む。

手品 茶碗の文字



此處に一個のお茶碗がございます。どなたか此中に墨で文字をお書き下さい。それを私には見えぬやうにお渡し下さい。ハイ、有難う、さて皆さん、此のお茶碗の中の文字、これを美事に鼻で嗅ぎあてましたならお手拍ち御喝采の程を。ハツ(と茶碗の糸底を嗅いで)エー、孝といふ字でございます。(拍手)

〔種明し〕卓子の抽斗を三寸程開けて、その中に小さな鏡を斜めに立掛けて置く。茶碗を受取つたら内側を鏡に向けて持ち、糸底の所を嗅ぐやうにしながら、鏡に茶碗の内側を寫せば文字はありありと見える。



▲落語のさげ▼

釜どろ

濱の眞砂と數のつきない泥棒連中が申合せて、先祖石川五右衛門が釜で命を捨てたから先祖供養の爲日本全國の釜を盗まうではないかといふことになつた。

大釜のある家からといふので、先づ豆腐屋から初めた。豆腐屋さんは大恐慌である。するとこゝに爺さん婆さん二人きりの豆腐屋があつたが、どんなに戸締りを厳重にしても盗まれるから、爺さん釜の中へ入つて寝た。夜中に入つた二人の泥棒が、そんなことは知らず釜を盗み出して行くと、途中で爺さんが寝言を言ふので泥棒は吃驚仰天、釜を捨てゝ逃げてしまつた。後に爺さん眼を覚してみると、上には星がキラキラおや家がない、『婆さん今夜は家を盗まれた。』



（地方民謡）

樺太の仕事唄

一、裏の畑に粟をば蒔いて、アラナトナト、そのまた隣に黍蒔いて、そのまた隣に蕎麥蒔いて、アラ、いゝゝそばとてあはなきやきび悪い、アラナト〳〵。

二、瓜は畑で晝寝の姿、アラナトナト、臍もかくさずごろ〳〵と、蟲は鳴き〳〵身の上話、聞いてホロホロ草の露、アラナト〳〵。

◇◇原稿募集◇◇ 百字小説、寸劇、珍談、奇談、早口、手品、仁和加等募集、採用篇は本欄へ掲げて薄謝進呈。宛名『キング娛樂室』〆切、四月末日

○詰將棋新題

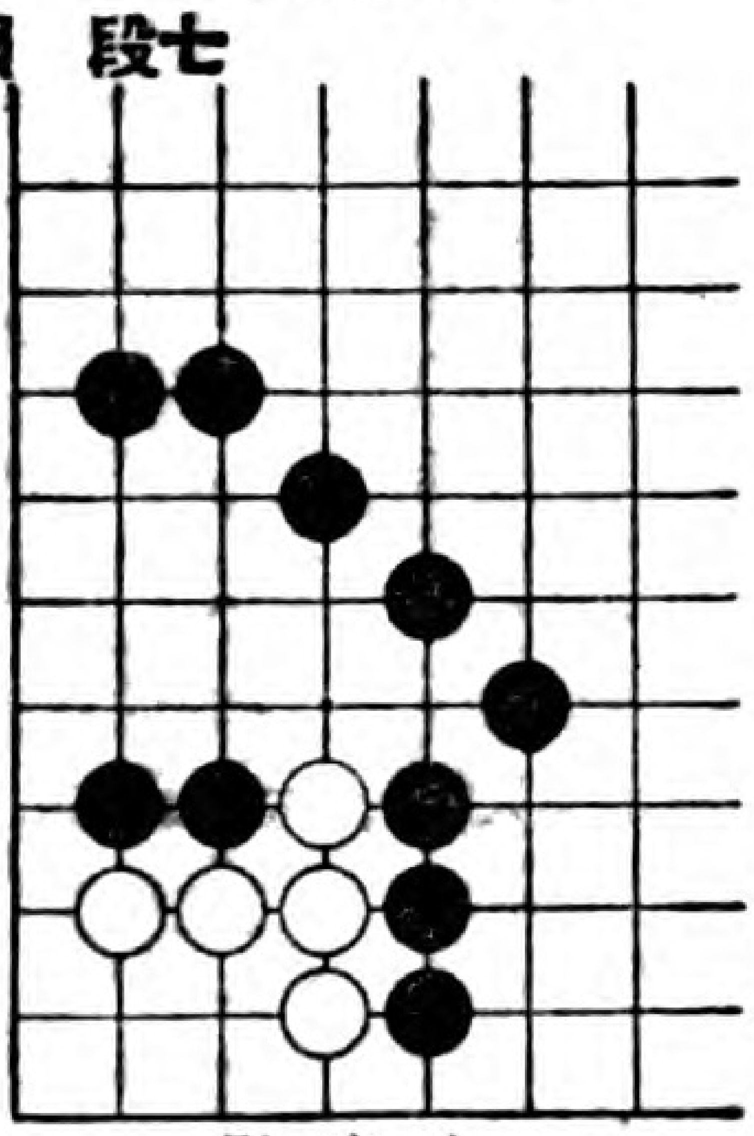
八段 金易二郎出題



持駒 歩

○詰碁新題

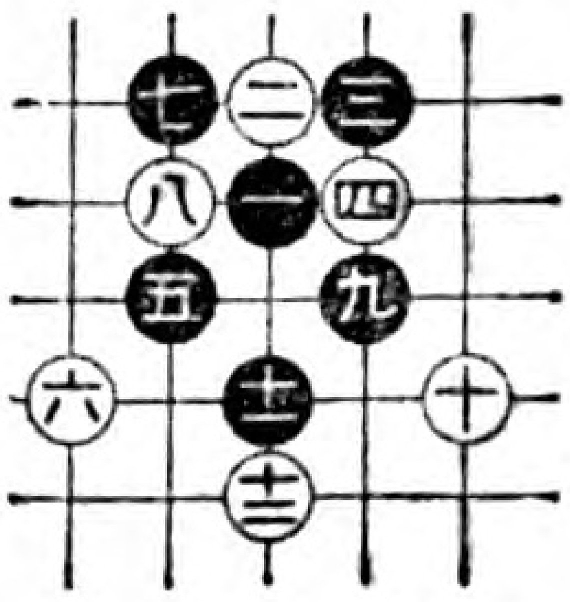
七段 瀬越憲作出題



白先で此白を活してごらんなさい。さうむつかしい問題ではありません九手程で活きます。五級程度（初段に五子）の技倆の人なれば解ける筈です。

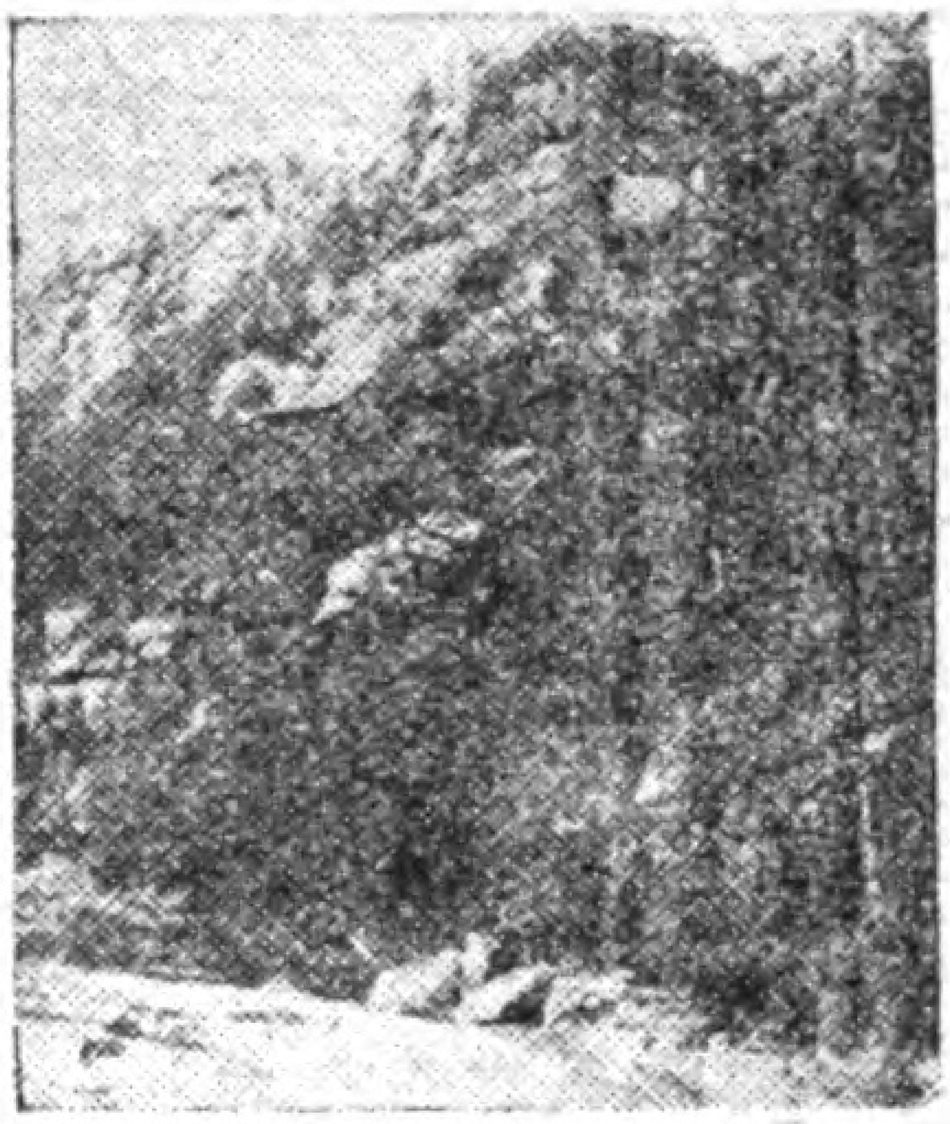
○聯珠問題

珠叟 濟水吾石出題



本題は實戰上稀に見る左右同形が現はれたのです。黒（十一）と打つたのは、次から（いろは）の順に引けば、左右の兩方に勝ありと見たのです。白はさうはさせぬぞと、牽制の意味で（十二）と打つた。そこで黒が最も容易に追手詰で勝つのは、どう打てばよいでせうか。

解答は一五三頁



人跡稀な朝鮮の山奥から・・・
全世界に誇る天然美白料を發見
◇數千年來の村の神秘が遂に美容界を支配する◇

『神秘な村』

世の變遷は如何に目まぐるしくとも、此所計りは何時變るとも果しのない朝鮮の都、京城から平安南道へ向つて約三十里距たつた奥深い山、その山をば圍んで、あの恐ろしい火田民に荒されつくしたものであらうか、疲れ切つて深い眠りにおちたやうな小さな部落が散在してゐます。粟とじやがいもと、からす麥や、小豆などをつくつて、一切のもの他から仰ぐことなしに、さながら原始時代の素朴な生活に親しんでをる有様は、とても私共にも推測することすらが出來ません。ところが、ここにもとく\只一つ不思議な謎として殘された神秘な事實がありました。それは交通も至つて不便訪る者も稀な寒村のことゝてこれまでは到底窺ひ知ることの出來なかつた『村の神秘』とでも申しませう？　それは何か、人間として此世に生れ出たからには、何人でも厭が應でも必ず遇はねばならぬ凋落、それは褪せ初める肌、張りのなくなる容姿、次から次へと現はれる小皺、初めは目尻に、それがやがて深い襞となつて口許に、頰先きへ遂には顏一面に擴がるところの、あの怖しい老境への悲哀が、この部落へ丈けは恰も素通りするかのやうに老い先き長からぬ人たち迄が判で押したやうに、殆んど變らぬ肌の美しさと弛緩のない若々しさを保つに妙を得てをることであります。世にはわたくし共の現實や環境を遙か超越した、通常の考へでは解決や理解の出來ない、多くの事柄は決して少くはなく、しかも、それらは實在して、わたくし共を驚かすのであります。花の色香が一度褪せ失せる時、どんな神技も、科學の努力も、未來永遠に、消えたあの色に向ふ魅力を喚び返へすすべもないのに、これは又何一つとして文化の恩惠にもあづかり得ない、このうら淋しい寒村の彼等の手の屆くところに、白粉洗粉、石鹼、脂とり、海綿はもとより、卑近な美粧料すらも得られよう筈もなく、又それらに浮身をやつす餘裕も必要も想像されぬのに、餘りにも神秘的な謎として、否嚴存する事實として驚嘆さるべきものであります。

『謎の扉漸く開かる』

しかるにかゝることが、其まゝ何人にも氣付かれず了ひになるべきものではなく、たまたまある旅行家が、渴を覺えて泉水を探す途

端、白い土塊のやうなもので、粘土細工に戯れてをつたこの村の兒達が、遊び疲れて洗つた手その手こそ土臭い田舍の穢いには餘りに不似合な、一樣に際立つて色白く、美しいのに驚異と好奇の眼を注いだのに端緒を發して見極められた結果は、決して不思議がるものでも何物でもなく、この山に採れる白い土塊のやうなものが、この村人にとつては、兒女の玩具の原料となり、若人の垢すりとなり石鹸ともなり、更にその中に含まれた微妙な素質の働きによつて、驚くほど確實に効く漂白美料となり、中年以後の人たちには何ものにも替へがたい皮膚の若返へり料となり、唯一の美容洗顔料入浴料として常用されてをつたのであります。又驚くことにはこの物質はこれ許りでなく物の地質を傷めずに脫色する不思議な作用をもつてゐたので、いろ〳〵の物を晒すためにも用ひられてをりました。これが人間の肌に對しても、色素を晒して白くししかも全く無害に働いてをつたのであります。

『デンマスク同樣の化粧』

多くのお化粧ぶりを見ますに、肌が荒れてゐるやうが、油滲みてゐてもお構ひなしに、白粉くづれするであらうことなどはてんで頭に入れておかずに、たゞ一面に白く塗つた顔に眉を立て、紅を刷いた丈けで、生きた表情がまるで欠けてデンマスク同樣ではないでせうか。

いつの時代にも好まれ喜ばれる代表的のものとしては、上品で洗練されたお化粧すなはちあまり白粉をあてにせぬ、技巧の凝りすぎない、端麗な粧ひ方であります。それには刺戟的な華やかさがなくとも、どことなく人をひきつけさせずには措かぬ、奥床しい或る閃きが現はれてゐます。それには第一に皮膚の手入れ、肌を整へる必要があります。



寫眞は人跡稀な朝鮮の深山茯物相

しかも肌を美しく磨き上げることによつて時たま濃化粧をするに當つても、ピツタリとくる苦勞なしのお化粧ができます。

偶然の動機から發見された朝鮮の一無名の山からの產物、それは期待に反せず、大きな衝動を美容界に與へました。これは水に溶いて毎朝洗面のとき、或はお化粧の前に洗粉のやうにして用ひるか、クリーム狀として作つておいて顔に塗り二三分そのまゝにしておいてから、水か溫湯で洗ひつゞけたならば、多くの實驗者が一樣に驚きの聲を擧げてゐるやうに、その效き目は日一日と目立つて色を白くし、てきめんに皺をのばし艶々しい若く美しい肌となし、肌の荒れて汚い人、小さなできに惱む人、ニキビ、ソバカスには勿論、一般に肌の自然美に惠まれない人たちには、見違へる計りに綺麗に磨きをかけた滑かな美しさになります。尙ほ首筋が黑くて常に惱みをもつ方、又これで全身浴をすれば肌全體をその微妙な作用はよく改造して、見苦しい色素を脫色して、白く美しくすることは、あきらかに事實が證明してゐます。

『効力を証る人々』

現に蒲田の川田よし子さんは『朝鮮の山か



ら發見されたといふ、クリーム狀の美白料を使つて見ますに、美しいキメの細かい肌とする不思議な效き目の顯たかなことは、全く驚かされます。世の進歩につれて、思ひもよらぬ、よい化粧料が現はれたことは、美を生命とする、わたくし共にとつて、ほんとに大きな力強さを感じます』

又柳さく子さんは『これを用ひたアトは、生地が如何やうである場合でも、白粉のノリをよくすることは、他の比べ難い特色をもつてゐます』と言はれ、

松井潤子さんは『美容とは化粧の技術でも技巧でもありません。そんな外面的な方法はむしろ枝葉のものであつて、内面から根本的に、ほんとに色を白く若き美をいつまでも保たせるこの自然クリームこそ、最も美容原理に適つたものであると信じて日毎に愛用してゐます。』

あれ性、吹出物や油性の人に試みてすぐ效き目のある、殊にもつとも取りにくい、爛れるやうな強い劇藥を用ひても困難といはれてゐる、ソバカスに惱む人などにも奇蹟的に脫色するといふ、この天然のクリームを用ひたならば、所謂磨きをかけた美しい生地とすることを、自身の體驗や實驗者のお談を聞いて、公表して憚らぬのであります。

以上の實驗例のほか、映畫界のスター、筑波雪子さん、大河内傳次郎さん初め、花柳章太郎氏、伊井、喜多村、島田正吾氏、辰巳龍太郎氏、中井哲氏、坂東秀調氏、中村歌扇氏二葉早苗氏だとか、皆愛用されて、各〻特色を擧げて賞讃されてゐます。

人類に及ぼす大福音

かく美容界に曾てない大革命を來した新發見の天然物質は、掘り出したまゝでは不純物や汚物が混入してゐますので、いろ〳〵複雜な方法を加へて、原質を少しもいためずに、直ぐ用ひられるやうしかも幾層倍も效力を増すために精製して、更にこれに氣分爽やかに使用できるやうに香氣をも付けて、クリーム狀につくり、多數の研究と多くの實驗を經たのち、更に以上の方々をはじめあらゆる階級の方々にお試しを願ひましたところが皆一致して、豫期以上の效き目を認められた事は、わが美容界のためにも、色の黑きを惱む方々にとつても大に祝福すべきことであります。しかも土臺が天然物であるために、往往他の化粧料などに見受け勝ちな、刺戟性の防腐劑などは少しも混つてをらず、最も特色として誇るに足るのは強く色素を吸收して了ふ作用のために、ソバカスや、いろ〳〵のシミなどには、他の科學品の到底及ばない、純白に脫色する效果があります。又中年期に起る大じわ小じわなども見違へる程キレイに取れる事は多數の實驗の結果明らかな事實であります。

記者ヨリ――この美白料の效果が一度世上に發表されますと、各方面から素晴しい要求があり、是非美白料として頒布する樣にと續々御申込が御座いますので、今回その發見者を介して御希望者のみに御取次する事になりました。

そんなわけで未だ名稱も附して御座いませんが、便宜上天然クリームとして美麗容器入一個一圓八十錢、別に洗顏及び浴用として粉末瓶入一箇一圓五十錢、送料各内地十五錢領土五十錢で大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九）で御取次します。

（寫眞は天然クリームの實驗愛用者右より筑波雪子氏、柳さく子氏、花柳氏、松井潤子氏、川田芳子氏であります。

萬人に嫌はれる……わきが療法の新研究

頗る手輕で……知らぬ間にキレイに治る
腋臭でお困りの方は是非御試し下さい

腋臭は如何して起る

汗は身體中の何處からでも出るものですが、その多い少ないは別として、その汗の性質が變つて一種の臭氣が發したり濁つた汚ない色がついたりすることがあります。一番それが甚だしいのは腋の下で、この臭い汗の出ることを俗にわきがと稱して居りますが、その匂ひは丁度狐に近寄つた時の様な厭なもので、狐臭と云ふ別名もある位です。西洋ではこの厭なわきがを一種の『婦人の臭』として寧ろ愉快に感ずると云ふことですが、外國では兎も角日本では非常に厭はれて居ります、若い娘さん等、自分がわきがと氣付いたが最後極端に悲觀してお嫁入りの相談などに耳を藉さないで、兩親を困らせる事がよくあります。又夏時分になると汗が多くなつて、愈よ臭氣が烈しくなるのに着物が薄着になるから實に堪へられない苦しみがあります。

醫書には、腋臭は多く遺傳性で、又體質不良及結核素因あるものに起り易く、男子よりは女子に多く、小兒や老人には稀れで、壯年者に最も多しとしてあり、又神經質の人に多いと云ふことも書いてありますが、よく恥しい時、怖しい時冷汗を流したと申しますが、汗と神經の働きとは餘程關係があるものでわきがが神經質の人に多いと言ふのも此邊の關係から來るのでせう、何れにしても不潔から來る場合が多いのです。

豫防せよ……輕症の手當

故にわきがの豫防としては之等の原因を取去ることに心掛けねばなりませんが、韮、大蒜等の如き臭氣の強い食物を避けることも必要であります、最も注意すべきは傳染を豫防することで、さういふ患者に觸れることは勿論、病氣のある人の着た下衣などは、よく消毒した後でなければ身體に着けてはいけません。

極く輕いうちならば、度々入浴して、其の都度二三十倍のフォルマリン水を塗布して置

けば外から氣がつかない位になつて居るものでありますが、然し少し重くなつて來ると局部が糜爛し、若くは炎症を起して痛みを感ずることがあり、又衣類なども汗の爲に色がつく樣になりますが、かうなると中々姑息的な方法では治り難いのであります。

それならどうしたらよいか

今まで多數の愛讀者からも種々御相談を受けて居りながら之ならと御すゝめ出來る方法もなかつたのであります、最も從來はこの治療方法としては外科手術の外サリチル酸、フオルマリン、ラノリンタンニン酸等の塗布劑を用ひて來たのでありますが之等は唯局部を一時收斂して僅かに臭氣を防ぐに過ぎない程度のものであり、又根本的療治と申して居る外科手術についてもその良否を如何とも御答へいたしかねます。古書にあるわきが治療法の中に『黑をすり腋の下に塗るに穴ある所は乾かぬなり、其處に灸してよし』といふことがありますがこれは實際に於て簡易に行はれぬにしても理論は腋窩皮膚穴をふさいで發汗分泌を完全に制止するのであるから確かに効があるので藥物塗布療法にしても同樣の著しき作用があるものなれば自然惡臭を除くことが出來る譯になるのであります。

類例なき腋下脫臭新劑の發見

茲にヒントを得て久しい間苦心研究され居られたのが和漢藥の研究家として有名な小泉先生でどうぞして一日も早く之等不幸な方々をお救ひしたい御精神から腋下脫臭劑として卓効あるゼットを御發見になりましたゼットは今迄の藥劑などと違つて收斂、防腐、鎭痛、殺菌の諸作用を兼ね備へてゐる藥物を主成分とした最も新しいもの丈にその効力も遙に優越してゐるわきが劑なのでありますからこれを患部に塗布すると腋窩皮膚穴に作用して發汗分泌を止めそれと同時に局部の糜爛や痛みも忘れた樣になくなり、從つて惡臭は全く出なくなるのであります。つまりゼットは古來のありふれた腋臭止の類ではなく腋下脫臭劑とも言ふべきもので勿論病氣の輕重によつて効力も一概には申されませんが今日まで多數實驗した例より申しますれば輕症は數回の塗布で治癒の狀態になり、殆んど百發百中の良結果を納めて居る事に依つてもこのゼットの價値を證明する事が出來ますが之以上は實際に御使用になつた方々からの御話を承りたいと思ひます。

此處に御紹介申上げました小泉先生御創製のわきが治療藥ゼットは粉末塗布劑ですから使用上には少しの手數も入りませんし一度御使用になつた方は皆一樣に喜ばれて居ります。價は一個二圓五十錢（送料內地十五錢領土五十錢）特に東京本鄕駒込坂下町大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）で御取次致します。

油斷出來ない！
痔疾の初期

痔疾の初期は 肛門部に少しの痒みを覺えるとか時々肛門內に蟲の這ふ樣な感じがするとか又は少し血が出るとか米粒程の疣が出るとかで大して氣にもかけませんし、病氣が病氣丈に、殊に婦人や手術を厭ふ人などは、ついおろそかになり勝ちでありますが最近輸入された獨逸ヘデンザ會社製の痔疾專門藥は最も簡單で完全な自宅療法藥として目下盛に愛用されて居る評判品であります。

曾つて伯林大學 臨床科を始め歐米各國の醫界でも最も合理的優秀な痔疾藥として好評を博して居る有名藥であります。注入に便なる樣チューブ入で少しも刺戟もなくあらゆる痔疾に用ひて著大な效果を奏する事は最近の實驗によつても確證を得て居ります。藥名をヘデンザと言ひ約十回分チューブ入で一圓五十錢（送料內地十五錢）御使用御希望の方は本社の代理部へ御申越し下さい。便宜に御取り扱ひ致します。

熱帶藥草『ダウンチリメン』で……
絶望の肺結核・肋膜・肺尖加答兒が癒る

醫師も患者も渇望せし藥

難治の百日咳、喘息、肺炎等が簡單に極短日で全快せる實驗例（岡部、佐野、三木、合屋の四醫學博士の實驗に依る數百人の各種呼吸器病）がキング外五大雜誌に發表されてより非常な問題となつたダウンチリメンは現代の化學では到底に製造し得ぬ神秘的なもので「熱を下げ咳を止め痰を切る以外に恐ろしき喀血を數日で完全に止め得るのみか胃と腸を非常に健全にし食慾を增進さす」と云ふ實に不可思議なる作用を具備して居りますので肺結核、肋膜炎、肺尖加答兒患者や醫師が望みに望んで遂に惠まれざりし理想藥「胃腸を健全にし解熱と鎭咳作用あるもの」よりも尚遙に勝れて居るのであります。本草が在來の藥と根本に於て違ふと云ふ事は次の實驗例に依つてもお分りになられませう。

肺尖と再發肋膜が二ケ月半で

原籍愛媛縣温泉郡中島村字粟井
明榮丸船長　中×爲×郎殿

私は大正七年在營中乾性肋膜をやつたのが大正九年再發し氣管支加答兒を併發し手當が海上の事で思ふ樣にならず遂に慢性になつてしまつた。其の後病氣は一進一退しつゝ昭和二年を迎へました、同年二月から病氣が非常に進み昭和三年十一月からは又々肺尖加答兒をも併發し其の間高知縣、愛媛縣等近在赤十字病院その他大阪、京都、福岡に於ても二三の大家にかゝりましたが少しも效なく昭和四年四月には愈々再生も覺束無い迄に重態に陷りました、ところが修養全集中に代理部取扱品目が入つて居りそれに依りダウンチリメン草の事が出て居たので何心なく服用して見ようかと云ふ氣になりました。今考へて見ると私は神の御知らせであつた樣な氣がいたします。昭和四年五月代理部に早速注文し送つて來た藥草を……そこで大體一ケ月分を二十に等分して服用し始めました。ところが三日目頃から胸が苦しく呼吸の困難が增して來ました。説明書に服用後二三日却つて息苦しくなる場合があると書いてあつたので、これは馬鹿にならんぞと内心驚いた樣な譯でありました。それから説明書を再三讀み續いて藥草を吸入に、シップに且つ服用を續けました。前記の樣に拾數名の名醫に私が船長となる迄の何倍かの金を費し其の效なく絶望とまで思はれた私が五月十一日から服用を始め七月末には立派に元氣な身體となりました、私は二ケ月半の間に四ケ月分の藥草を費ひました　私が病中の事や其の苦痛は仲々筆紙にあらはす事が出來ません。全快後は再び海上で働いて居りますが生れ變つた樣でセキ一つ出た事なく支那沿岸の寒さにも好く堪へ風一つ引いた事もなく目出度き正月を海より歸つて迎へ此の感謝狀を書く事が出來ました……云々（省略）

兩肺迄侵された重症が全快

富山縣下新川郡椚山村椚山新村
農業　大×善×殿

大正十四年四月右肺尖加答兒と診斷されて醫藥を服しても一向に快方に向はず衰弱は日日加はるので同年八月富山赤十字病院長の診察を受けました處肺結核と診斷されました、それからは專ら安靜にし療養につとめました甲斐あつて殆ど全快非常に喜んで居りました。而して其の樣な狀態は昨年の十一月迄續きましたが同月痔瘻となりましたので種々手當を加へましたが結局醫師のすゝめに任せ翌年一月手術を受けました。それで痔の方はすつかり治りましたが今度は肺の方が急に惡くなり三月

に入り數度の大喀血を致しました、診斷の結果は右肺全部と左肺をも侵されてゐる事が判明致しました。咳は一日二十回位あり痰は黄色で酒杯に四ハイ位あり衰弱は益々加はり床より起き上る事も困難となりました。同七月ダウンチリメンの偉效をキングで見早速注文し。服用二ケ月目頃より咳は非常に少くなり體温も最高三十六度九分迄に下り氣分が好く本を讀んでも目がクラ〳〵し字が見えなかつたのがその頃は終日讀み續けても目も頭も疲勞しない樣になり今日では熱も平熱となり、咳は全然出ず體重も増し血色が健康者の樣に出て參りました。今日迄色々試みましたが之程安く之程に確效のある物は他には絶對にありません……云々

重症の肋膜炎が二十日で全治

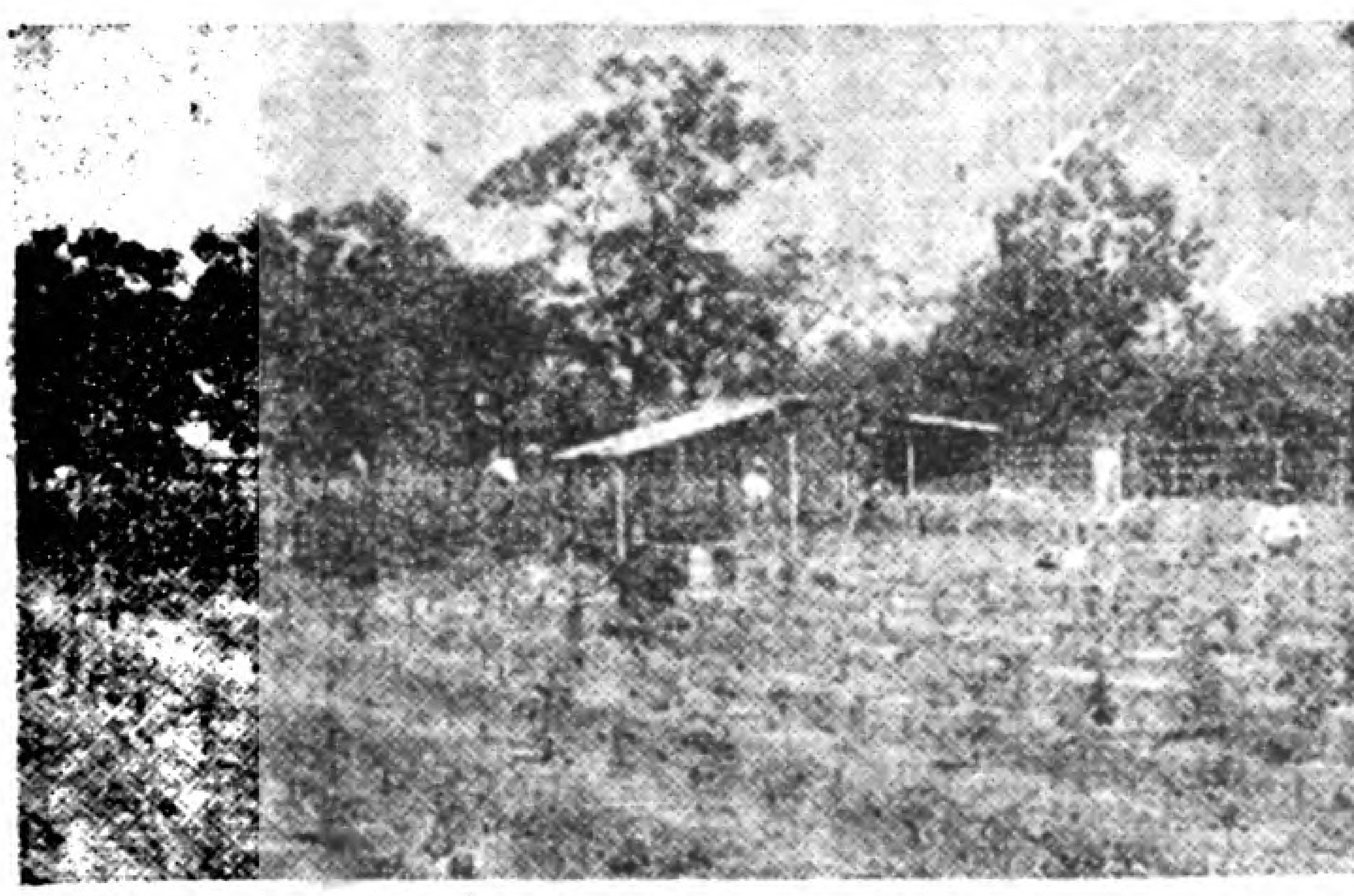
熊本縣球磨郡木上村字平野
洋服商 兒×岩×殿

昨年八月風邪が元で濕性肋膜炎となり病院に入院し療養する事になりましたが一ヶ月以上になりましても何等變つた事もなく益々病勢は惡化する一方でした。或日附添ひの人がキングに發表のダウンチリメンの本病にも效果がある樣だからと云ひますので私も贊成して貴社より取寄せました。服用二三日は大した變化もありませんでしたが四日目頃から熱も下り氣分も良くなりました。一週間目よりは背部の痛みも取れて來、同時に咳も減り痰も出なくなりました十四五日目頃よりは咳は全く出ず熱も平熱で何等平生と變らなくなりましたので十月二十日には愈々退院しました。以上の樣な次第で服用二十日で全快致しましたので私は素より皆々非常に嬉び且つ驚きました。之も皆ダウンチリメンの御蔭と感謝して居ります。

喀血が服用二週間で止る

福岡市養巴町
建築請負業 船×傳×殿

三年前の夏でありました小倉市立病院長藤澤博士から肺結核との宣告を受けましたが病勢は益々惡化して行く計りで昭和二年の十一月頃は四十度の高熱が約一ヶ月續いて咳、喀啖頻りに出て健康を誇りし十七貫餘の體軀も見る〳〵痩細り翌年の夏には十二貫五百匁と云ふ憐れな姿となり名實其の儘の肺病患者タイプとなつて了つたのです、其の時は醫師も所詮駄目だからと妻に語つたさうですが入院して文字通りの絶對安靜を十ヶ月守りました然し或時は强い發作の爲め喀血したり夜通し一睡もされない事が幾回繰返されました事でせう、それ以來咳と共に眞赤な血啖が毎日數回出る樣になりどんなに苦しんだ事か到底豫想外です、醫藥は勿論和漢藥に新藥、賣藥と廣告に出た藥は一通用ひましたが依然として三年一日の如くコンコン出通しです、昨年十二月中旬雜誌廣告でダウンチリメン草が咳に卓效ある事を知りました然し過去に於て購うた藥は浴びる程飲んで苦しい經驗を持つてゐるので危ふく讀み捨てようとしてフット胸に浮ぶものがあつたそれはダウンチリメンが熱帶産珍植物である事だつたのです、彼の心臟が正に死滅せんとする時僅少のヂキタリス葉一瓦が如何に奇效を奏するか、私は急に服んで見たいと云ふ氣が起つたので早速取寄せて服始めたのです、所が八日目から血啖が朝の起床時に少し出る丈で咳も非常に樂に出る樣になりましたので頓に元氣づき九日目から吸入を始めて見ました。丁度二週間目の朝からさしも長年頑固に治癒しなかつた咳がスーツと止つて血啖も全く止つてしまつたのです、餘りの事に啞然として數日を過しました。然し矢張り咳は、もう一つも出ません何と奇蹟的な效果でせう私は此の再生の喜びを同病に苦しむ人々へ分ち度いと思つて居ります。



ジヤワ島農園に於てダウンチリメン藥草栽培の實況（昭和四年十一月撮影）

◎全快者の氏名は德義上××にしてありますが必要のお方にはお知らせ致します。

尚實驗例集は別册になつて居りますから御希望者に御申込次第無代送附します。

▼ダウンチリメン藥草約三十日分罐入金貳圓也 送料内地拾貳錢、領土五拾錢 煎じる世話のない樣に之を粉末にし錠劑としたものは

▼錠劑小瓶五日分金壹圓也、中瓶十五日分金貳圓八拾錢也、大瓶一ヶ月分金五圓也送料同前

御申込は東京本郷區駒込坂下町 大日本雄辯會講談社代理部（振替東京六六二九番）へ

松葉特有の芳香に浸りながら
諸病を癒し身心共に爽快を覺ゆる

獨逸製新若返り溫浴素

尚神經痛リューマチス肩のコリ中風病等にも實によく効くので專門大家も素人も大喜び行はれ、心臓を健かにし血液の循環をよくします。

産地とその成分

この源産地は世界的に有名な、獨逸スチヮルツクルト俗に常盤の森と云はれて居る松樹の密森で、鬱蒼たる森嚴に、天然の清き芳香を滿した自然境、この森の清新鮮な朝霧滴る、松葉を絞り、その精粹を主成として、瓏氷晶の様な岩鹽等をも化學的に調劑せしめた自然そのまゝの全く他に得る事の出來ない天成靈兒であります。

自然境に病患なし

この溫浴素はモントサンと云ひ用法は極めて簡單で、入浴の際、錠劑を指先で碎き浴槽に入れますと漾々と溶解して淸快な綠色を漂はし、松葉特有の芳香は浴室內に放滿して宛かも、深山常盤の森にあると思はしめ、從つて神經を沈靜し精神を爽快にし、めきめきと活力を生じて疲勞を醫する事も實に妙です。之は即ち全身の氣穴よりオゾンを攝取し酸素を吸入しますから自然と血液の淨化作用が行はれ、心臓を健かにし血液の循環をよくします。

又身氣爽快從つて食慾を增進して消化機能を旺盛ならしめ胃腸を整へる事も實に妙で今までの實驗の結果によりますと中風リウマチス、神經痛、偏頭痛、動脈硬化症等には本當によく効きます。又肩のコリを解き腦溢血の豫防と治療によくその蒸發氣の吸入により呼吸器に最良の感應を與へますから一浴して身心の勞れを忘れ、腦裡を明快にし運動家の疲れ事務の疲れた後には何よりの方法です。

流感の豫防に

このモントサンの特別効能として入浴後長時間身體がポカポカ溫く決して湯ざめをする樣な事がないから感冒に冒される心配もなく殊に早老、老衰、虛弱體質者等には著しく効果があり、病後の保養を助けて血の環りを好くし老人小供の保健の上には勿論平素モントサン湯をなさいますれば一家揃つて無病愉快に過すことが出來ます。

現に東京青山原宿の東洋病院にては溫浴治療養所を特設して、その療法に主としてモントサンを應用され大に稱讚を博して居り、又多摩川の京王閣にもモントサン靈浴千人風呂の設備があり、鶴見の花月園にもモントサン大浴槽が設けられて大評判その他旅館料理店などを初め一般需用者も頗る多くその卓越した効果も一日毎に認められて參りました。兎に角色々な溫浴劑の中で純植物性の若返り浴劑はモントサン丈で今や世界各國共に素晴しい人氣で日本にも遂い最近の珍しい輸入品です。

獨逸製靈液素松葉の精モントサンは輸入以來素晴しい評判となり專門家も病人もその効果には驚いて居ります分量も普通の家庭風呂二石入に一錠を適當としますから至極經濟で、どんな病人にも少しの害を及ぼす心配も御座いません價は壹罐十二錠入金參圓(送料內地十八錢領土五十錢)輸入品故數量に限りがありますが御希望者には最近着荷分を本社代理部で便宜宛御取次いたしますから至急(振替東京六六二九)へ御申込下さいませ

ふけ・かゆみ・拔毛を止め
頭髮一切に素晴しく卓効する
香油とポマードの代用品

フケが多くて頭が痒い程氣持の悪いものはないのみならず、フケは非常に毛髮を荒しますから毛髮は自然榮養や發育を妨げられて段々赤細くなり艶を失ひ遂には脱落して了ふ、段々男女を問はず頭髮の拔けたり白毛が出來る程淋しい感じのするものはない。

フケや拔毛は單に毛髮を洗つたり粗雜なフケ止液や在來の怪しげな毛生藥を振りかけた位では何の効果もないばかりか徒らに安價なアルコールに刺戟されて毛質及皮膚面を害する事も實に甚しい。

唯一度でピッタリ止る

本社が特に推薦する『クイン』は純植物性の毛髮榮養料を主としてあらゆる科學の原理を應用し超人的な方法に依り精製された事は申すまでもなく、その不思議な作用は皮膚の深部にまで及びフケの發生をピッタリ止めてしまひます。

一度用ひると二十日間はどんなにひどいフケでも全く嘘のやうに止り常用すれば漸次少くなつて數回後にはあれほどヒドかつたフケ拔毛が全く根本から取除かれて氣分も自然と晴々して參ります。而も奇妙なことは若はげ髮の薄く切れ易い方光澤のない方などが常用すれば必ず一切の悩みを拭ひ去つて眞に一點のフケもなくなり若々しい漆黑な生き生きした頭髮を保つ事が出來ます。

ポマード・香油の代用に

又重寶な事に『クイン』はポマード代用になりますから平素ポマードや水油を御用ひになる方もこの『クイン』一つで何にも入りません（勿論香油と併用するも可）頭髮を短かくして居られる方は使用して三四時間後に直ぐ洗ひ落してもその効果は變りなく然も粘つく事がないから用ひた後の爽快さは又格別でその中に含有する高貴な香料は馥郁として身に迫りそれが如何にも氣高い趣味と深い教養を象徴するために上流階級の方々は爭うて愛用して居ります。**德川侯爵御夫妻**の如き口を揃へて、このクインの實効を賞揚なされ『外遊中なか〳〵純良な頭髮化粧品がなくて困りましたが、今回贈られたクインは全く說明書と寸分違はぬ不思議な効果に驚いた、然もサラ〳〵して少しも粘付かず拔毛も**ピッタリ**止つて本當に晴々しました』と尙**鶴見祐輔先生**も『私は頭が痒くなると止め度もなく痒くなつてたまらぬ程**ヒドイフケ**性なのにこのクインのお蔭で忘れた様に快復しました』と喜ばれて居ります。

頭髮病を防ぎ毛質をよくする

新發明の**フケ拔毛止『クイン』**を一度用ひて二三分すればすべてのカユミを忘れ不快味を一掃しフケや拔毛を完全に止めます。又あらゆる頭髮病を防ぎ完全無害に純良な頭髮を生育する作用のある事は全く之までに見る事の出來なかつた科學の力で正に實驗した記者の體驗より眞に優秀品として切に各位に御すすめ致します。この新發明の**フケドメポマード『クイン』**は特に御希望の方へ、お頒ちいたします。たゞ御斷りいたしておきますことは、多くの原料のうちで、容易に得難い一品があつて一回の調製數に限りある由でありますから、品切れになりますと、約四十日間はお待ちを願はねばなりませぬ故お申込はお早くお願ひ致します。お値段は一圓と一圓八十錢頭兩用二圓五十錢の三種、送料は三個まで内地十二錢海外は三箇迄の五十錢で、東京市本郷區駒込坂下町四八大日本雄辯會講談社代理部振替東京六六二九番でお頒ちいたします。



ニキビ、ソバカス吹出物を
根治し眞に色を白くするエスゾールの發見とその實際効力に就いて……

藥劑師　松浦泰造

ニキビ、ソバカスの藥には

男女を問はず青年期になると十人中八九人迄はニキビや吹出物の出る方は随分多く誠に見苦しいものであるが本人にとつて是がどんなにか氣勢であるかを想像いたしますと全く同情せずには居られません。是までニキビ、ソバカス、吹出物の藥は澤山發賣されては居りますが何れも一長一短で是ならばと云ふ完全な藥は尠いのであります。今日程進步した醫學で短期日に是を根治する方法を發見されないのは實に殘念なことではありませんか。

從來、皮膚病に特にニキビ、ソバカス、吹出物の治療に就いては硫黄化合體が一番効果があるとされて居り、この學說に基いて造られた藥は今までにも隨分澤山ありますが何れも硫黄の粉末が粗雜の爲めに塗つた場合皮膚面に於ける浸透作用が不充分であり而も皮膚を乾せぬ樣に製する事が出來ないので其の効力を充分發揮することが出來ません。

エスゾールの効果は偉大

ところが今回發見のエスゾールは多年研究の結果浸透作用不充分とされて居た硫黄粉末を電氣の力により更に十萬分の一以上の微粒子となすことに成功し、これを獨特の製法に依つて液體に製されたものであります。

從つて皮膚に於ける浸透作用が強烈でありますから、皮膚の奥底から溶解され二三回の塗布に依つてニキビ、ソバカス、吹出物は忘れた様に治り何等の副作用もなく樂々と其の効果を見ることが出來ます。

これこそ全く理想的の皮膚病專門藥で本藥の効に就いては今まで多數の實驗者が異口同音に其の効果のいつはらざるに驚嘆され、殊に山田醫學博士はエスゾールが意想外の効果を收めたるにより實驗の辭を寄せられ、これならば完全に根治すると云ふ確信を得たのであります。

見て居る間に色白くなる

試みにエスゾールを家人にも告げず少しく使用なされればニキビ、ソバカス、吹出物が拭つた様に綺麗に除去されますのでお友達は申す迄もなくお家の方々もビックリなさる程早いのであります。又前に述べた通り強烈な浸透作用に依つて皮膚の色素が根本的に改善されますので一度使へば見る間に見違へる程綺麗に色白くなり、顔の色も非常に良くなりますから、色の黒い方や引ケでお困りの方はエスゾールを是非御使用下さい。

價は一圓、二圓、三圓、四圓、(送料各十五錢、但し五十錢)の四種でありまして從來の他品に較べて一層安價に皆樣にお頒ちする事になりました。御希望の方は講談社代理部(振替東京六六二九)へ御申込みになれば、直ぐ御送りいたします。

ニキビ、ソバカス、吹出物の藥として種類も多く、其の選定に迷はれ區々の内に日を過されて居る方が少くないと思ひますが、このエスゾール丈は全く安心しておすゝめ出來、御試用して頂ける理想的藥品でこれまで多數の方々が試用して一樣に驚嘆感謝されて居ります。ですから躊躇せず一日も早く御使用の上根治の喜びを得られます樣御願ひします。



風雲天滿双紙

佐々木味津三
小田富彌畫

擧兵準備

一

——そのまにも奸商達の不當な米價吊り上げの噂は、町から町へ、人から人へ、旋風のやうに傳はつたとみえて、群集は刻一刻と數を增しました。いや、いづれも馳け集り乍ら、等しく平八郎の姿を見つけて、うしろの者はうしろから、前の者は前から、懸命に哀訴の聲を送りました。

『先生がお出まし下さいましたは千人力で厶ります！　お懲らし下さりませ！　憎い商人共を胸が癒えるまでお懲らし下さりませ！』

『お願ひで厶ります！　お願ひで厶ります！　先生よりほかにおすがり申すお方は厶りませぬ！　お懲らし下さりませ！　お懲らし下さりませ！』

叫び乍ら、次第に憤怒が高まつて來たと見えて、群集の哀訴する聲は、ひと聲ひと聲とふるへ乍ら、不氣味に殺氣を增しました。

だが、平八郎にも今はもう策がない。もしあるとすれば、鴻池善右衛門の言ふごとく救恤金を集めて、いち時凌ぎの彌縫策乍ら、饑餓の底に怯え泣いてゐる細民達を救濟する途が只一つあるばかりです。——じツとまなこをとぢ乍ら、嵐の中の巨人のやうに佇んでゐる天滿の偉傑の双の頰には、あとからあとからと淚が傳はりました。

だのに市場の中では、今なほ奸商共が飽く事を知らずに買占め吊り上げを續けてゐるとみえて、凄愴な怨嗟の聲が平八郎の胸を突き抉ぐるやうに傳はりました。

『上つたぞう！　また上つたぞう……。』

『天井知らずだ！　天井知らずだ！』

『虎屋の奴めがどんどんと買ひ占めてをりますぞう！』

『上つた！上つた！』言ふまにまた上りました！』
唸つて、空を流れて行くその聲をきいて、地上にうごめく人波の中から、凄惨た絶望の叫びが渦を卷いて舞ひ上りました。
『どうなることでムりませう！　この上高くなりましたらどうなる事でムりませう！』
『死ぬよりほかはムりませぬ！　飢ゑ死にするより途はムりませぬ！』
『いつそもう……いつそもう……。』
次第に絶望の聲は自暴自棄に、自暴自棄から殺伐に、刻一刻と不穏の色を加へました。このまゝ棄てておいたら、どんな恐るべき結果が到來するか分らないのです。やつつけろツ、――やつつけろと口火を切る――もしも誰かいち人感情に激して、やつつけろと口火を切る者があつたら、油は忽ち火を呼ぶに相違ないのです。――危險は刻刻に增しました。殺氣も刻一刻と高まりました。平八郎の面も一瞬一瞬と青まりました。石のごとくに突ツ立つて、啞のごとくに押し默り乍ら、默然と打ち考へてゐましたが、その時つひに何事か最後の決心が整つたものか、悲しく魂を絞るやうに呟きました。
『やむをえまい……。やむをえまい……。しかし――。』
ハラハラと落淚すると、慄へ乍ら青ざめてゐる鴻池善右衛門達に言ひました。
『施策つきるまで力を盡すが第一ぢや。元を潤らさずに棄てておいて、いち時凌ぎの惠み米をして見たからとて所詮は焼け石に水ぢやが、一飯たりとも與へるは與へないよりましであらう。その方共揃うて救恤金の寄進についてくれるか。』
『はつ。それはもう就く段ではムりませぬ。些少ではムりまするが、鴻池三家の名を持ちまして、三萬兩寄進致しまするでムります。』
以下一萬兩五千兩三千兩と、十六人の巨商達殘らずが心良く寄進に就く事を誓つたので平八郎はせめてもと、犇めき立つてゐる群集に告げました。
『みなの者もきいての通りぢや。折角中齋を賴つてくれてぢやが、わしにも奸商を倒すカはない。しかしいつかは奸商共も天の怒りに觸れて自滅する時が參るであらうゆゑ、騒がずに時を待つが大切ぢや。その代りに當座の飢ゑ凌ぎとして施米して遣はすゆゑ、みな靜かに天滿の屋敷に參れ。――では鴻池達、洗心洞の方に金子持參賴みまするぞ。』
言ふ平八郎も、聞いた群集も、共に斷腸の思ひだつたに違ひない。目前、奸商の横暴を見乍ら、これを倒す事が出來ないとは、これにました悲しみ無念はなかつたからです。しいんと水を打つたやうに片唾を吞んで默々とうなだれてゐる群集の間を縫ひ乍ら、義人平八郎は、兩眼に淚をいつぱいためつつ、重い鉛のついた足をでも曳きするやうに、蹌々踉々と洗心洞塾に立ちかへりました。
歸つてからも勿論無言……。魂ぬけたもののやうに悄然と、大書院の眞中に端坐したまゝでした。終始影のごとく附き



添つてゐた正一郎も、悲しくうなだれたまゝでした。屋敷にあつて悲しみのその二人を迎へた養嗣子格之助も高弟宇津木矩之允も、父師の悲壮に打ち沈んだ姿からすべてを察したらしく、黙然とうなだれたまゝでした。

だのに來ないのです。どうしたことか來るべき筈の鴻池屋連がなかなか姿を見せないのです。

『では頂かせて下さりませ！』

『催促して恐れ入りまするが、手前共はもう三日おまんまの顔を拝みませぬ。早うお恵み米頂かせて下さりませ！』

『お願ひでムります！　お願ひでムります！』

あとからあとからと、窮民非人細民の饑ゑ餲ゑてゐる群が屋敷の表につめかけて、施米を待つ聲、一飯を求むる聲が路上をうめてゐるのに、約束の十六人からは救恤金も救恤米も届かないのです。――不審に思つてゐるとき、金の包みらしいものをお伴の者に持たせ乍ら、悄然と姿を見せたのは待たれた鴻池屋の手代定吉でした。

『待ちどほだつた。大分顔色が悪いがいかゞいたした。』

『面目ムりませぬ。實は……。』

『何ぢや。』

『先程、あのやうにお約束いたしましたが急に……。』
『金がほしうなつたゆゑ施米取止めたと申すか！』
『滅相もムりませぬ。早速金子を調達致し、打ち揃うてこちらへ出かけようと致しましたら、どこからどうしてお聞きなさいましたか、御奉行様が直々にお越し遊ばしまして、きついお達しがあつたのでムります。』
『なにッ、跡部山城が邪魔を入れたとな！　何ぢや！　何ぢや！　きつい達しとはどのやうな事ぢや！』
『要らざる真似を致すと、十六人残らず家屋敷闕所に致すぞとこのやうにお叱り遊ばしたのでムります。』
『闕所とはまたなんのためぢや！』
『それがどうも何と申したらよいやら、御奉行様のやうなお身分高いお方の目には、餓ゑに苦しむ可哀さうな方々が、そのやうに見ゑるものかと、手前主人も呆れましてムりまするが、いづれにしても山城守様はこんなにお申されましたのでムります。――窮民共が饑饉に遭うて苦しむは、日頃の了見心掛けがわるいからぢや。不作だ饑饉だと言ふたびに、施米致さうものなら、この先怠ける癖がつくばかりでためにならぬ、それに第一施し米恵み金をするには奉行所の許しをうけて致すべきが掟ぢや。無断で出すぎた振舞ひ致すと重科申付くるぞとこのやうにお叱り遊ばしましたゆゑ、家代々の暖簾まで闕所にされてはといづれも慄へ上り、折角調へました金子も引込めましたのでムります。なれどもそれでは先生へお約束の顔が立たぬと手前主人がお心を砕き、公儀の名目でなくわたくし個人の名義で極内密に持参せいとの事でムりましたゆゑ、些少乍らこれへ持たせて参りました。お約束の金高には十分の一にも足らぬ少額でムりまするが、斯様な仕儀にムりますゆゑ、お叱りなくお受納下さりますれば、定吉めも使者の面目相立ちまするでムります。』
恐る〳〵言ひ乍ら、怖々そこへ差出したのは、千両箱の一包でした。十分の一どころか二十分の一にも足らぬ少額です。
――だが、平八郎は納めようともせず、聲もかけず、爛々とまなこを光らして、じッと虚空を睨んだまゝでした。いや、次第次第に憤怒の情が高まつて来たらしく、小刻みにその五體がわなわなと慄へました。何と言ふ不埒不遜な言葉だつたか！　貧窮者細民が餓ゑに泣き苦しむは、日頃の了見心掛けがわるいのだと放言するに至つては、まさに言語道断沙汰の限りだつたからです。あまつさへそれを放言したのは奉行所を預る吏長なのだ！　かう言ふ非常の場合にこそ、先に立つて救民済世の實を擧ぐべき職を持つ奉行なのだ！　しかも恵み金施し米をすれば、向後の癖になるとまで恬然として放言したと言ふのです。
『不所存者めがッ。俗吏ぢや！　俗吏ぢや！　跡部山城こそは俗吏の見本ぢや！　――今にみろッ、今に見ろッ。民の呪ひの聲が六十餘州に沸きたぎつて参るぞッ。』
抉ぐるやうに痛罵し乍ら、静かに目の前の千両箱を定吉の方へ押し返へすと、寂しく悲しげに微笑し乍ら言ひました。
『折角ぢやがこの金子は受取れぬ。早々に持つて歸れ。』

『ではあの……。』
『怒つたのでもない！ 叱るのでもない！ こころざしは嬉しう思ふが、その方達町家に購ひがふりかゝつてはならぬゆゑ頂戴出來ぬのぢや。歸つて鴻池にもその旨傳達せい。』
『でも表にはあのやうにお氣の毒な方々が施米をお待ちのやうにムりますゆゑ、せめてこの千兩だけでもお分ちなさいましたら――。』
『要らぬ！ さう言ふまにも跡部山城の間諜にでも見咎められるとならぬゆゑ、早う持つて行け。』
斥ぞけて立ち上ると、胸中の決意愈々固く整つたらしく、大書院から大廊下へ、大廊下から中書院まで、山と積まれてゐる數萬卷の藏書を、分れでも惜しむかのやうに愛撫しつゝ見眺め見廻つてゐたが、猪突に正一郎へ命じました。
『そち今より河内屋へ參り、急いであるじの吉兵衞を連れて參れッ。』
『不意に何でムります？ 河内屋と申さば書物を商ふ店の筈、何御用あつてお呼びなさるのでムります？』
『賣るのぢや。これなる藏書を悉皆賣り拂つて施米の金にするのぢやわ。』
『えッ――。』
きいて愕然とし乍ら言葉を挾んだのは、高弟



宇津木矩之允でした。
『あんまりでムります！ あんまりでムります！ 日頃命よりも大切な品ぢやと仰せの藏書ではムりませぬか！ それまでお手放しなさるとは、お痛はしうムります！ これぱッかりはお考へ直し下さりませ！ 折角御愛藏のこの書物を賣るは、矩之允めも殘念にムります！』
『愚かな諫言するでない！』
誠心こめた言葉を、ずばりと押へておくと、平八郎は凛として言ひました。
『知行合一――、それこそわが修むる陽明學の眞髓ぢや。これなる書物を貯へ集めたのも、元はと言へばこれを以つて濟民濟世の用に役立てようとしてからのことぢや。いかさまわが命よりも大切と愛惜した品ぢやが、饑ゑに泣く窮民達の生命は大切なこれなる書物よりももつと大切ぢやわ。――何を泣いてゐるか！ 正一郎！ 早う行けッ。』
凛とした決意！……。
断乎とした處斷！……。
凄愴なその顏！……。
　そしてその口の邊には、言ひ難く寂しい微笑が見えたのです。――矩之允は勿論、格之助も勿論、使者の正一郎も只涙でした。
『お願ひでムります！ お願ひでムります！』
『聽かせて下さりませ！ 早う讀んで下さり

ませ！』
『もう目が見えませぬ！ お腹が減つて目が眩みさうにムります！』
『早う下さりませ！ 早うお米の顔を拜ませて下さりませ！』
悲しく訴へる細民達の聲にせき立てられ乍ら、愛藏の書籍は惜しげもなく塾生門人達の手によつて表に運び出されて、程たゝずに正一郎が伴つて歸つた書林河内屋吉兵衛の俠氣から二千兩の金子に替へられ、替へられた二千金はたゞちにまた白米に買ひ替へられて、義人平八郎の血涙を絞つた恵み米は、旱天の赤土に水の沁み入るやうな窮民達の手から手へ奪ひとられて行きました。いや、平八郎の決意處斷はそればかりではない。胸中深く何か畫するところでもあるらしく、不意に意外な男を案内するやう正一郎に命じました。



『表の群の中に、誰ぞ非人頭がゐるであらう。構はずこれへ呼んで參れッ。』
『…………？』
『何を躊躇致すか！ 呼べばよいのぢや。早う連れて參れ。』

二

程もなく正一郎に伴はれて、をのゝき懼れ乍ら大書院に姿を見せたのは、五十がらみの見るからに精悍さうなその非人頭でした。
『おう參つたか。遠慮は要らぬ。近う進め。恐るゝところはない。もそつと近う進め。』
しかしどうしてこれが身近くに進まれよう！ 非人乞食人でなしと蔑視されて、人交はりすらも許されなかつた身が、士農工商の最上位に立つ士人の、それも偉傑平八郎から、破格の招きをうけたばかり

か、破格の同席を許されたのです。驚きと不審と感激に身の置きどころもなかつたと見えて、おどおどし乍ら躊らつてゐるのを、天滿の頭領は叱るやうに促しました。

『構はぬ！　構はぬ！　進めと言うたら近う進め！　跡部山城ならいざ知らず、この大鹽中齋には天下萬民一視同仁ぢや。いやみな兄弟ぢや。離れてゐては話が出來ぬ。もそつと進め！』

『……………。』

分け隔てのない言葉に聲も出ない程感泣し乍ら、漸く非人頭が遠慮深げににじり進んだのを、平八郎は心地よげに見迎へて膝を進めると、よくよく秘密を要する事であるらしく正一郎達三人に命じました。

『書院の廻りをよく張り番せい。』



矩之允が表廊下、格之助が中廊下、正一郎は玄關側と三人三方に分れて嚴重な見張りの位置についたのを見すまし乍ら、平八郎は靜かに非人頭へ問ひかけました。

『住ひはどちらぢや。』

『玉造りに厶ります。』

『ならばたしか五左衛門と言ふが非人頭の筈ぢやが、その方がその五左衛門か。』

『はつ。わたくしめが玉造りの非人村を預つてをりまするその五左衛門に厶ります。』

『支配の者はいくたり位ぢや。』

『五百人ばかりに厶ります。』

『なに！　五百人とな。なかなか大連ぢやな。屈竟な者は何人位をるか。』

『宮裏、橋下、高麗山と非人村も澤山厶りまするが、手前共の玉造りは別して力わざにすぐれた者が多う厶りますゆゑ、大半は屈竟な奴等ばかりに厶ります。』

『何よりぢや。』

意味ありげな事を尋ね乍ら、じッとまなこを閉ぢて、やゝ暫し考へつゞけてゐたが、胸中の決意さらに強固に整つたらしく、ふと片手を伸すと、引き寄せたのは愛用の一刀、あの天明行廣です。

『なぜか中齋、今日は氣が晴れて身も心もすがすがしい。近づきの印ぢや。遠慮なうこれをうけい。』

『えツ？——。』

五左衛門の驚ろいたのは當然でした。手づから武士の魂の一刀を下さるとは、破格も破格もおのれ自らを士農工商の上位のその士分並に待遇してくれたのも同然だつたからです。感極つて、精悍な面にじわりと泪を見せ乍ら、思はず、そこに平伏したのを、平八郎は拂ひのけるやうにし乍ら言ひました。

『そのやうに有難がる程の事ではない。ほんの寸志ぢや。早う受けい。』

『でも……、勿體なうござります。いいえ空恐ろしうござります。あのやうに手下の者がお恵み米を頂きましたのさへ勿體なうござりますのに、これまで頂戴しては空恐ろしうござります。』

『あれはあれ、これはこれぢや。遠慮せずと早ううけい。』

『はつ。では……。言葉もござりませぬ！ 只もう有難すぎて言葉もござりませぬ……。』

『泣く程の事でない。笑つて受けい！ 笑つて受けい！ しかしその代りそちに頼みがあるがきいてくれるか。』

『それはもう聞く段ではござりませぬ。先生のおためなら火水の中もいとひませぬが、御用の筋は何でござります。』

『近いうちに——。』

『えツ？』

『叱ツ。聲が高い！』

制し乍ら注意深くあたりを見廻してゐたが、一段と聲をおとすと、謎のやうな言葉を吐きました。

『よいか。忘れてはならぬぞ。近いうちにこの天滿から火の手が揚るやも知れぬ。何のための火の手か今は詳しう申せぬが、唯！……これから先は謎ぢや。わしの目色でよく判斷せい。それなる火の手を合圖に、この天滿で容易ならぬ異變が起るやも知れぬが、見つけ次第そち手下をつれて、洗心洞に馳けつけてくれるか。』

『分りました！　最先きに必ず！……。』

『忝けない！　斷じて他言ならぬぞ！』

『はつ。五左衞門しかとこの胸三寸にたゝみおいてムります！』

胸を叩かんばかりに大きく誓つたとき、——大廊下の先でけたゝましく呼び叫ぶ聲がありました。

『お早く！　お早く！　どなたかお早くお越し下さいまし！』

聲はまさしくあの芳音です。

『何事ぢや！』

見張りをしてゐた三人は勿論のこと、さつと色を替へて走りつけた平八郎の目に映つたものは、そこの廊下先で、芳音と平山助次郎が何事か必死に爭つてゐる姿でした。

『取亂した容子をなさつて、何とされたのぢや！』

『お恥しうムります。御密談を助次郎さまが盜み聞かうと致しましたゆゑ、叶はぬまでもとお爭ひ申したのでムります。』

きいて、慓悍兒正一郎が何しにすてておかれよう！

『あなた樣には、あなた樣には、先生のお慈悲が分りませぬかッ。』

叫びざまに得意の岩石落しで、ぺたりと青蛙のやうに叩きつけ乍ら、膝締めに締めあげようとしたのを、

『ならぬ！　放せツ。』

いつもの大愛でした。叱つて正一郎をのかせ乍ら、しかし今日ばかりは一言、抉ぐるやうに助次郎の胸を衝きました。

『そちは平八郎がこれまでに師の恩を以つて心のひがみ直して遣はさうとしてゐるのに、何までわしを裏切るつもりか。』

しかもその目！

叱つた目ではない。大きな師父の心と胸を以つて、邪道に踏み迷つた門人を正しき昔に生れ變らせようとする愛の目です。その愛の目に、師父の慈愛の淚すらもため乍ら、默つてじッと射すくめたので、助次郎は穴にでも這入りたいやうに、こそこそと姿を消しました。

『駄目でムります！　駄目でムります！　あのやうなお方を許して逃がさば、何を仕出かすか分りませぬゆゑ、締め上げませう！　締めあげて今の密談嗅ぎ知つたかどうか白狀させませう！』

危ぶみ乍ら正一郎が色めき立つて追ひかけようとしたのを、しかし平八郎は林のやうに靜かでした。

『まだ少しは望みがあらうわい。責むるよりも許す、——許せるうちは許してやつてこそ師の愛ぢや。いかな助次郎とても今日ばかりは骨身にしみたであらうゆゑ、見のがせ。見のがせ。』

飽までも信じ乍ら書院へ引きあげようとしたとき、血相變へて物々しげに表から駈け込んで來たのは、東町與力の門人瀬田濟之助でした。

『慌たゞしう何事ぢや。』

『あのやうな不埒見きゝ致しましては騒がずにをられませぬ。御奉行樣はどこまで情けない俗吏根性のお方でムりませう！只今京都より急飛脚が參りましたのに――。』

『まてッ、慌てるな。京都より急飛脚とは所司代からか。』

『はつ。聞くも畏れ多い事ではムりませぬか。さうでなうても禁廷樣の御手當米は日頃御不足勝ちでムりますのに、この饑饉にお遭ひ遊ばされて、諸高家お初め殊のほか御難澁の模樣にムりますゆゑ、大阪城中に貯への公米があらば火急に京都へ三百俵程廻送されたいと所司代樣からわざわざの飛脚でムりましたのに、呆れたお方でムります。そのやうなこと――。』

『ならぬと言うたか！』

『言うた段ではムりませぬ。御禁廷樣が御難澁と承はつては、何をおいても差し廻はすべきが臣下の者として當然でムりますのに、跡部樣はこのやうな言語道斷のこと申されたのでムります。この山城は御禁廷樣のために大阪町奉行の職を承はつてゐるのではない。わしに大切は江戸御公儀ばかりぢや、千

俵二千俵の要意がないわけではないが、城中へ貯への公米は、あすにも江戸よりお達しが参り次第、大御所様西丸入りのお祝ひ米に廻送せねばならぬゆゑ、三百俵はおろか半俵たりとも京都へなぞ差し送る事罷り成らぬわとこのやうに申されて、剣もほろろにはねつけまして厶ります。』

『悪逆無道人非人めがッ。』

きくや同時に平八郎は、烈火のごとく憤り乍ら、手にしてゐた白扇をばりばりと握り裂きました。何と言ふ不遜極まる暴言だつたか！　宮中禁裡よりも、江戸公儀幕府が大切だと言ふに至つては、小人小根、不埒不遜、もはや言ふべき言葉がなかつたからです。しかも米はたつぷりあるのに送られないと言ふのだ！　それも何と言ふ言語道断な理由だつたか！　おのが立身栄達を計るために、贅沢不必要なお祝儀米は廻送しても、禁裡宮中を饑饉の難から救ひまゐらせる必要米は送れぬと言ふのです。

『斬るべき奴ぢや！　斬るべき奴ぢや！　斬つて棄ててもなほ飽き足らぬ奴ぢやわ！　虎屋達に買占めさせた米のうちからなりと、三百俵位の廻米才覚はつくべき筈なのに、御禁裡様の御難を棄てておき奉つるとは何ごとかッ。不所存者めがッ。不埒者めがッ。』

面前に跡部山城がゐでもするかのやうに痛憤し乍ら、怒りに五體をふるはせてゐたが、突然格之助達に命じました。

『行けッ。みな退座せいッ。』

『……?!』

『なぜ去らぬ！　早う行かぬかッ。』

憤怒やるかたないもののやうに、叱りつゝ立ち去らせると、蒼然と面を青めて沈吟沈思すること数刻――。

『ほかに策はない。これよりもう執るべき途はない……。』

断乎として最後の決意を整へたらしく、悲痛に呟き乍ら、よろめくやうに立ち上つて、そこの手洗ひで手を浄め乍ら、再び端然として浄几に向ふと、おもむろに奉書をくりのべて、静かに筆をとつたのは次の一書でした。



『大塩中斎謹んで建白す。

宇内、時ならぬ饑饉に遭逢し、上下萬民等しく糧米に難渋すること、烈公様にもすでに御聞達の御事と存じ奉り候。然るところ、畏れ多い御事乍ら、京都御禁裡様におかせられても、殊のほか御難

迄の趣きにて、本日所司代より當大阪表奉行所に急使参り、火急に皇都へ廻米方取計らふやう御申越し有之候ひしに、奉行跡部山城守殿、西丸御祝儀米を楯にとつてこれを承服仕らず。



言ひやうもなき不埒と存じ候。それもこれもみな老中水野越州殿御肉親なるがゆゑの分を忘れたる横道に他ならず、天下を過り、幕政を紊し、民を塗炭の苦しみに陷し入れる者は、實に越州殿、山城殿御兩人と申すも憚り無之に就き、何卒御老公の威權を以つて、即刻御糺彈、天下政道の公敵、御懲罰願はしく、右密書を以つて建白仕り候。恐惶謹言。

大鹽平八郎。

水戸烈公殿

御座右へ。

紙を改め紙を改めると、さらに一書をかきしたためました。

『いつぞや御來阪の砌りは格別のおもてなしも仕らず汗顔の至りに候。さて突然乍ら、平八郎最後の決意を以つて、別封のごとく烈公樣宛の建白書かきしたため候間、然るべき便宜を以つて、藤田東湖殿お手元までへなりと、お届け方御高配煩はし度、右懇願仕り候。匆々不宣。

大鹽中齋。

江川坦庵殿。

二通の密書は、その文中にもあるごとく、實に盟友江川太郎左衛門の手を經て、水戸烈公を動かし、その並びなき權威によつて、佞吏跡部山城守を膺懲しようとの深慮なのでした。しかも認ため終ると疾風迅雷です。

『大井！大井！』

正一郎を呼び招くと命じました。

『門人部屋に參らばねるであらう。柿崎と二藤の二人を連れて參れッ。』

導かれて來たのは健脚を以つて鳴る塾生柿崎賴母と二藤淸之丞のその二人。

『急ぎの用ぢや。この二通の密書を携へ、即刻伊豆へ立てッ。』

兩人また疾風迅雷。

何の密書か？——言ふやうに格之助、正一郎、淸之助、矩之允の四人がいぶかり乍ら見守つたのを、平八郎は重く沈痛に言ひました。

『この密書が最後の望みぢや。御返書次第によつて、大鹽中齋が覺悟の時參るであらう。そち達も心致して、待つがよいぞ。』

言ひつゝ、手文庫の中から五十金を取り出すと、身支度をとゝのへ乍ら控へてゐた密使の二人に投げ與へ乍ら言ひました。

『路銀はこの通り、いか程かゝつても差支へない。火急の上にも火急の用ゆゑ道中は早駕籠雇うて伊豆韮山まで急行せい。』

果して烈公よくこの建白書を聽取するか？——天滿の義人大鹽中齋が決斷處斷覺悟の分岐の謎と秘密を、宵闇迫つた洗心洞塾に殘し乍ら、健脚の密使は東へ東へと、東路目ざして風雲急なる浪華表をあとに消え去りました。（つゞく）

お知らせ

愛讀者の皆樣に是非一讀をおすすめしたい三つの傑作があります。

一つは菊池寛先生の大作「肉眼心眼」で、醜貌ではあるが慈心熱腸の武將と、絕世の美色に惠まれながら盲目の歎きを喞つ彼の妻女と、彼女に熱愛を捧ぐる美貌の京侍とをめぐる哀しくも惱ましい人生悲劇。次は先頃大阪の客舍で謎の自殺を遂げた一代の麗人江木欣々女史をモデルにした「戀に勝てる女性」と題する小說、もう一つは明治大正きつての大劍豪の名をとつた內藤高治範士の波瀾重疊を極めた傳記的物語であります。

三篇共にいま大評判の「講談倶樂部」五月號に揭載され、到る所で非常な感銘を以て熱讀されてをります。

講談倶樂部は値下げ後一段と賣行を增し、每號エライ景況を示してをります。



變つた話二つ

風聞子

約束手形の濫觴

慶應元年六月、横濱の豪商伊丹屋へ、仇敵の首級を抱へた侍が、不測の助太刀に追はれて、救ひを求めて駈け込んだ。番頭は機轉を利かして側の大金庫の中にかくまつた。追手の目をうまく欺いて、件の侍の命を救つたが、侍は衷心から感謝して懇ろに禮を述べて立ち去つた。

店を閉ぢて、やがて番頭が錠を下さうと今の金庫の方へ向き直つた時アッと驚いた。金庫の中には生々しい女の首が恨みを含んで正面を向いてゐる。しかも生首と共に何やら書いた半紙がある。

「約束手札證。一金五千兩。右金額貴殿又は貴殿家族の者に此手形引換に相渡可申候也。



相渡場所、芝愛宕山。相渡期日、慶應五年師走晦日、慶應元年六月。前田正名、伊丹屋重助殿。」

生首と五千兩とをすりかへた侍は追手の二人と共謀の賊だつた。これが約束手形のはじめ。金儲けの快著「岡辰押切り帳」に、大衆文藝そつちのけにこのことが詳しく勇敢に書かれてゐる。前田正名といへば、明治時代の錚々たる實業家であつた。

女護ケ島の噺

議論が段々烈しくなるに連れ調子が高くなり面白く聞えたと見えて、船室の處々に寢轉んで居た乘客が思はず笑ひ出した。

『處女が子を産んだのなら何も奇蹟ではありますまい。それは私生兒といふもので今日でも數へ切れぬ程あります。又雞が雌ばかりで玉子を産むのも別に不思議でなく、唯其玉子は受精してゐないから、孵化せずに腐敗してしまふだけです。卵生と胎生との差別は受精しない玉子でも之を産んでから腐るか、受精しないものは體内で腐敗して産まずにすむかにあるのです。』

『しかし廣い世界を旅行して見ますと、色々の事があります。先づ太平洋の女護ケ島といふ所では、人間が女ばかりで、男が一人も居りません。それでも、子供が出來て子孫の盡きる恐はなし、聞く處によると、東の方に當つて男の居る島があり、東風の吹く時に、年頃の女は裾をまくり上げて濱邊に出て、其風に當つて戻れば孕むといふことです。』

……名著「二人行脚」より……

科學と紀行と滑稽で世界的の評ある快文章は、何人をもその興味のうちに魅了し盡さずにおかない。

近來痛快の極み

一記者

痛快の一語に盡く

二十世紀の現代に、甚だ奇異な存在といはれる伊國首相を評して、澤田謙先生は、『全く痛快の一語あるのみ』と云はれてゐる。

諸君は既にムッソリニ傳によつて大方は知つてゐるであらうが、イタリーの山中「喧嘩鍛冶」の息子と生れ、薄給なる小學校教員を振り出しに、或は瑞西の浮浪兒として牢獄を家とし、或は熱烈なる社會主義の闘士として官憲と戰ひ、一度世界の大戰起るや、勇敢なる軍曹として塹壕の砂を浴み、遂に三十萬の黑シャツ黨を率ゐて羅馬の都に討入り、年歯わづかに三十九歳の青春をもつて、新イタリーの國運を双肩に擔つて立てる、彼ムッソリニの姿こそ、まことに白雲を抽んづるアルプスの孤峰。その波瀾重疊、起伏極まりなき生涯は、まことや傳奇小説中の人物「事實は小説よりも奇なり」との言を實證するものと言はねばならぬ。



而して近來痛快なるもの

又、北昤吉先生はこんなことを言はれ

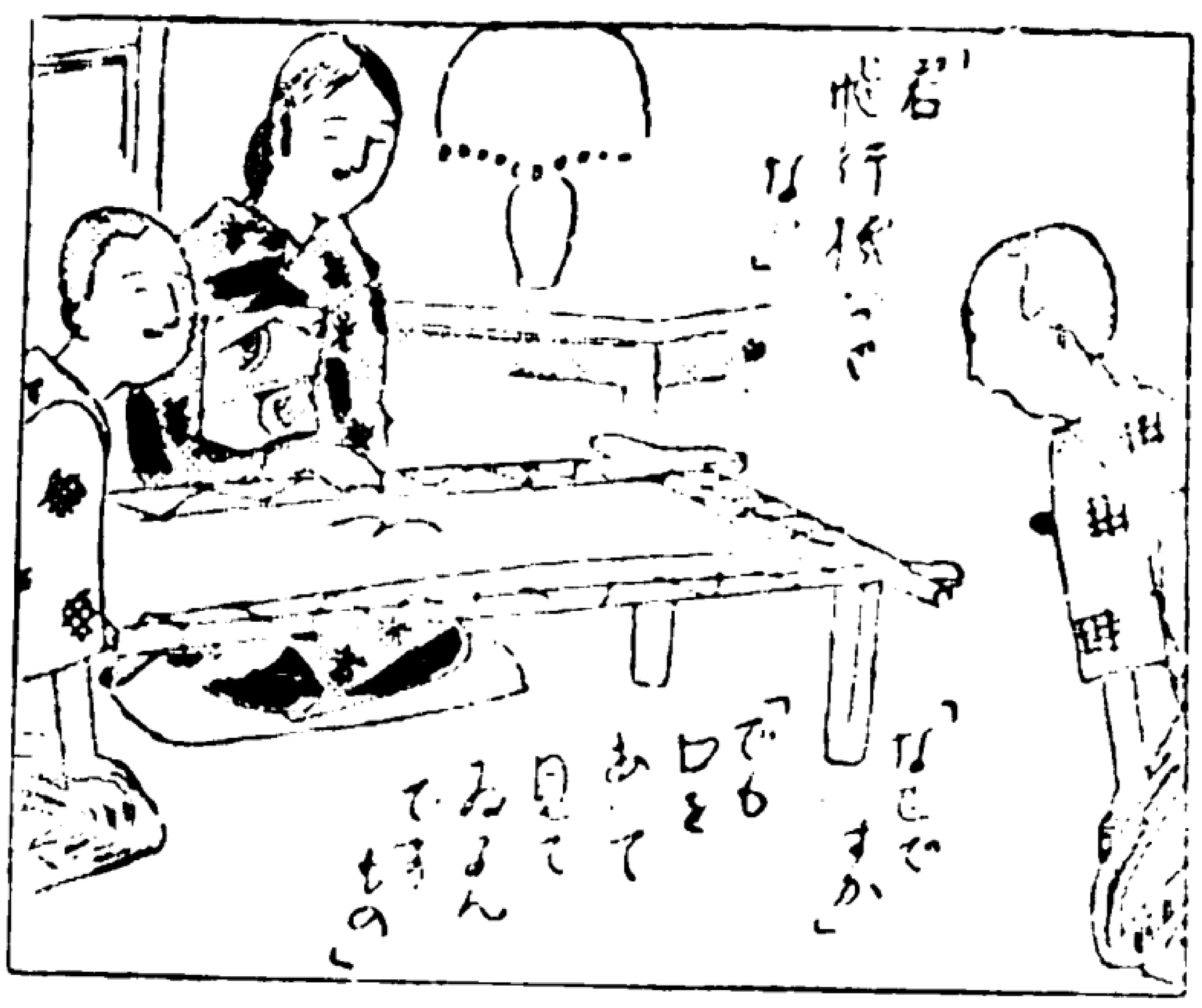
た『最近我國に、下位春吉氏の譯になるムツソリニの演說集が紹介されたことは痛快事中の痛快で、日本人殘らずに讀ませたい。私は實に愉快である』と。

彼ムツソリニが腐敗し切つた祖國を累卵の危より救はんと、愛國の熱に燃ゆる黑シャツ青年を統御して、國本主義を絕叫した時、感激し切つた聽衆は男泣きに泣かさるを得なかつたといふ。その悲壯にして壯嚴な情景を南歐最古の國イタリーに想像して見るだに、我等も亦勇奮の意氣勃然たるを覺ゆるではないか。かの有名な革命四大演說と、首相となつて議政壇上から獅子吼した施政演說始め、工場に廢兵隊に街頭に、或は農民に職工に軍隊に反對黨に、大經世家大詩人の建國至誠の大抱負を吐露し、全民衆を熱狂せしめ劇的光景を呈せしめた雄辯のみ二十九篇を蒐めた快著だ。

本書が今如何に日本全國の問題となつてゐるか、前伯國公使堀口九萬一先生は『讀んでは驚嘆し、驚嘆しては讀み續けた。荀くも政治に興味を有する者は必讀すべし』と、更に法學博士松波仁一郞先生は『予はロンドン會議に關し調査研究上、ム宰相のワシントン會議の愚を笑ふの演說を見て會心の感があつた』と、文豪家佐藤紅綠先生は『私はこれを單に西の彼方の伊太利の演說と思はずに、我が現在の國難に引き比べて讀むことに依つて更に大なる興味を感ずる』と評して居られる。

その讃辭は實に多種多樣であるが、何人も、どの一篇を讀んでも思はず感激して、じつとしては居られない快讀物であるといふ點は一致してゐる。

左に掲げた二書は、青年老年男女を問はず、ムツソリニの眞の姿を通して彼とイタリーを理解し、翻つて日本の現在を正しく反省批判し、更に自分一個の向上を熱願する諸君には絕好の快著である、敢て熱誠こめてお奬めする次第である。（澤田謙先生の名著「ムツソリニ傳」は定價一圓二十錢、送料十二錢。下位春吉先生の名譯「ムツソリニの獅子吼」は定價一圓八十錢、送料十二錢、何れも本社發行、全國書店に於て發賣中である）





霧の中の曙

野村愛正
林唯一畫

闇に幽閉

あゝ、あの春枝が酒見を誘惑して家出をした。死の結婚をするために……！

驚愕のあまり一時氣を失つた蘭子は、手當によつてやうやく自分に返つたものゝ、まだ健康な身體といへないのにまたこの打撃である。

醫者は非常に心配して、

『絶對に安靜にしていらツしやらねばなりませんよ！』と、繰返していふ。

思ふに、春枝は、手紙は蘭子が精二の許から歸つて來て讀まれるものと想像して、早目に投函したに違ひない。兄の辰郎の病氣のことで出發が遲れたのこそ偶然の幸運で――元日に家出をしたとしても、今日は三日、最早死んでしまつたとは考へられないので、

『いゝえ、まだ望みはある。早く……！』

安靜にしてゐるどころではなかつたが、起上ることさへ禁じられた

ので詮方ない。蘭子は、すぐ樣人を走らせて、酒見の留守宅と、下落合の叔母を宛てゝ、

サカミサンハルエサントイエデシタ、ジサツノオソレアリ、テハイタノム

といふ至急電報を發した。すこし考へさせられたが、精二にも無名で打つておいた——東京ではまだ誰も知つてゐなかつたので、大騷ぎになつた。早速、叔母の貞緒は、顏色を變へて逗子に驅附けて來て、

『大變なことになつたのね。どうしたといふの？』と、言葉忙しく訊く。

隱す必要もないことである。蘭子は、ありのまゝを詳しく話つて、

『よツぽど、あたくし、どうかしてゐましたのね。酒見さんがあれほどの決心をしてゐらツしやるのに、ちツとも氣が着かなかつたなんて……今になつてみると、可怪いと思はれることは澤山ありますのよ。それなのに、結婚々々と仰有るのを文字通りにとつてしまつて……！』蘭子は怺らなくなつて泣出して、

『みんな蘭子のせゐだわ。このまゝお死になるやうなことになつたら、あたくしだつて生きてゐられない！』

『まア〱今からそんなに心配しても仕方がありません。きつと無事にお連れして來ますよ！』

探索の手配は、主として叔父が、酒見の友人達と相談の上やつてくれてゐるといふ。打合せもあるので、叔母は、またすぐに鐵砲彈のやうに飛んで歸つて行つた——酒見達二人の消息は、わかり次第に知らせてくれる約束である。が、それから數日といふもの、蘭子は、耐へがたい苦悶に噛まれながら日を送つた。

みんなと一緒になつて行方を探すことが出來るのだつたらまだしもよかつた。狂躁的な焦慮が幾分かでも紛らせてくれるだらうが、たゞじツと病牀の中で報知を待つてゐる氣持は——身心を切刻まれる地獄の責苦である。そのため蘭子の容態は、ほんのちよツとしたことのやうに思はれたのに、なか〱快い方に向はなかつた。

蘭子は、叔母にも話つたとほり酒見の決心に氣が着かなかつたこともだが、それより何より根本的な原因に對して畏怖に近い責任を感じてゐた。もしも手配が遅れて死んでしまつたとすれば直接手を下さなかつたといふまでのこと、たとひ無事に連れ戻されてもそのまゝで濟まされるものでない。だん〱深く顧みて、

『さうよ、蘭子も覺悟をしたわ！』と自分にいつた。

あゝ、なんといふ呪はれた、哀しい戀だつたことだらう！

生命に關する犧牲者まで出して、今更なんの戀愛沙汰ぞ！

生死は別として——それが酒見の希望ではあつても、酒蛙々々と結婚の出來るものではない。かういふ事情になつてみれば、長い精二との交渉もいよ〱絶對的に打切るよりほかはないと思つた。

といつて、酒見が無事に歸つたとしても、最早この方にも返れるものでもなく、また返らうとも考へなかつた。すべてのことがみんな時機を失したのだ。蘭子は、このまゝ病氣で死ぬことを覘つたが、

『でも、死ねなかつたら……蘭子は、トラピストに行きます！』

修道院の生活は、永遠に自分で自分を幽閉することである。蘭子は、ひそかに、二度と男性の眼にも觸れず、口も利かずに、尼僧となつてその生涯を闇に埋めてしまふ決意を固めた。

最後の義務

三日經つて、やうやく叔母から第一の報知が來た。それによると、手紙にあつた通り、酒見達は元日の朝練馬の家を出て、打連立つて眞直に春枝の生れた家に行つた。そして父親に結婚の許しを乞ひ、その晩一泊して、次の日相當な金を殘しておいて出發した。行方はまだわからないが、日光方面に向つた形跡があるので、極力そちらを搜索してゐるといふことだつた。

猶、叔母は附足して、春枝の父親の話によると、二人は非常に落着いてゐて、幸福さうで、到底自殺の決心をしてゐるものとは思はれなかつたほどだといふことだから、まだきつとどこかで殘りの生を樂しんでゐるに違ひない、無事に連戻せる見込みが充分ある、と書いてゐる。蘭子を安心させるためであらうが——蘭子は違つた考へ方をした。二人がさうして最後の義務にいそしんだといふことに更に動かしがたい決意を讀んだのである。最早生きてゐる筈がないと想像して、いよ〳〵戰慄の度を加へた。

翌日、今度は電話で、

『それらしい二人連れが伊香保に滯在してゐると聞いて早速追手が向つた。二人には間違ひなかつたが、既に遲く、一足違ひで榛名湖へ出發した後だつたので、すぐに全力をあげて追跡中——』だといふ報知があつた。

蘭子は、直接聞いたのではなかつたが、すべてを察した。彼女も、自分を永遠に幽閉するまでに最後の義務を果さねばならない。よろめきながら病牀から起上つて——はじめから傍に附いて世話をしてくれてゐる看護婦に向つて、

『あたくし、今から伊香保へ行きます。止めてはいけないのよ。心配でせうから、あんたも一緒に來て頂戴！』

といつてすぐに仕度にかゝつた。そしていよ〳〵出掛けようとしてゐると、また電報が來て、

ハルエサンノシガイミツカツタ、サカミサンノセイシマダフメイ

とある。が、蘭子は、既にたいてい想像してゐた。最早それほど驚きはしない。叔母に阻止される虞れがあるので、默つて東京を通りぬけて——夜になつて伊香保に着いた。すると、覺悟をして來たとは違つて、酒見の死體はまだ發見されてをらず、生死のほどもやはり不明だといふことだつたが、詳しい樣



子は聞けた。

酒見達は、その前日榛名湖へ向けて出掛けて行つたが、午後になるとかなりはげしい吹雪になつた。そこで案内者を返し、二人は湖畔亭に一泊して——翌朝、天氣の穩かな間に雪景色を見物するのだといつて外に出たまゝいつまで待つても歸らない。そのうち、その頃の日和癖である。またはげしい吹雪になつたので、湖畔亭の人達は非常に心配してあちこち探しまはつてゐると、一日遲れてやつて來た搜索のものが伊香保から驅附けて來た。で、共々力を合せて尋ねたが、運の悪いことに、雪と風のために足跡が消されてゐる。たうとうその日はわからず仕舞ひに終つて、次の日になつて、湖水の西北の岸で雪の中から春枝の死骸

だけが發見された。
　春枝は、毒藥を服んで死んでゐた。無論、酒見も一緒に服んだに違ひないので、人夫を大勢雇つて、春枝の死骸のあつた場所を中心に雪を堀起して探してみたが、依然として見付からない。生死不明だとはいふもの丶、酒見ほどの人間が女だけ死なしておいて逃げだしたとはどうしても考へられない。この上は春になつて雪の消えるのを待つよりほかはないが、多くの人は、おそらく榛名湖の中に投身したのだらうといふ意見である。が、湖水もかなり結氷してゐる。危險で手が着けられない。みんなは匙を投げたが、まだ湖畔亭に殘つて熱心に探索をつゞけてゐるものもあるので、明日一日待つて、その結果によつてはひとまづ中止して引上げようといふことになつてゐた
　――春枝の死骸は、湖畔亭から伊香保のその旅館に運ばれてある。蘭子も、その晩、その通夜の席に列つた。
　はじめて見る酒見の父親と、兄とが、わざ〳〵郷里から駈附けて來てその席に加はつてゐた。先輩といふ白髯の老博士、友人の誰かれ――みんな苦澁めた顏をして默つてゐる。精二もゐさうなものだと思つたが、姿は見えなかつた。
　最早、酒見の死は間違ひのないことではあるが、蘭子は、春枝もはじめほど憎めなかつた。人を殺す罪は匕首にあるのでなくて、握つた手にあるのだ。誘惑したのは彼女でも、原因は自分にある。その亡骸に對しても心から頭を下げたが――たゞ、蘭子は、みんなの視線が自分一人に濺がれて、

『あの女のせゐだ。あの女が自殺の原因を作つたのだ！』
といはれるやうに思はれることが何より一等辛かつた。が、蘭子には忍ばねばならぬ義務がある。敢然と涙を隱して、
『さうよ、蘭子が受ける當然の罰だわ！』
夜通し齒をくひしばつて耐へた。名ばかりの春の、人氣のない伊香保の夜は、風が吹荒れて、ひどく寒く、寂しかつた。

兄の逝去

　その翌日の午後、蘭子は、思ひがけない一通の電報を受取つた。それは逗子から轉打されて來たもので、
　アニキトク、スグカエレ
とあつた。蘭子は仰天して、
『まア、兄さんが……？』
叫んだもの丶、次から次と絶間なく襲つて來る苦患が、彼女に習慣的な落着きを要求した。蘭子はさして取亂した樣子も見せずに、早速自動車を呼んで、附添ひの看護婦と二人で乘込んで――既に夕暮である。今將に旅館の玄關を走りださうとした時、一群の人々の近附いて來るのを認めて、
『あ、ちよいと待つて……！』と運轉手にいつた。
　それは、訊いてみるまでもなく、湖畔亭から歸つて來た人々である。捜索の不結果を語るやうに、みな〳〵力なく頭を垂れて――この人夫達の先頭に立つて、服裝も體格も立派な、雪に塗れた一人の青年紳士がゐる。紛れもない精二だつた。

精二も、自動車の中の聲を聞いて、ふと顏をあげた。二人は、まる〳〵一年振り、蘭子が負傷した彼を病院に殘したまゝ父に連戻されて行つてからはじめて顏を合せた——青年團の服を着て故鄕を出て來た時に較べて、なんといふ違ひだらう。堂堂としたその態度を一瞥しただけで、蘭子は、なる程、小さくても一つの銀行を支配して行かうとしてゐるだけはあつて、威嚴といつたやうなものも自然に備はつて來てゐるのを見取つた。

たゞ、場合が場合なので、地にでも滅入込むやうな樣子に悄然と沈みきつてゐる。さうして自動車の窓ガラスを隔てたまま——精二は蘭子があまりに病衰へて窶れ果てゝゐることである。ちよツと見違へたらしくもあつたが、すぐに悟つた。

十秒、二十秒、どちらも呼びかけようともしない。二人は、黙つて眼と眼を見合せてゐるばかりだつたが——蘭子は、蒼褪めた精二のその顏面を走つてゐる歪んだやうな痙攣を見た。宥しを請ふやうな、哀れッぽい表情を見た。

何もかも、悲しみも、惱みも、それから責任苦も、悔も、二人の持物はすべて共通してゐた。瞳から瞳へ、感情は相呼應し、相反射した——あゝ、この感情を二人で分けることが出來たら？　蘭子は、我を忘れてふら〳〵と立上りかけた。

だが、酒見は死んだ。最早、二人は、互に慰めあふやうなことも愼み、憚らねばならない。殊に、一段落着き次第、自分で自分を永久に幽閉してしまふ決意をいよ〳〵固めてみれば——今更、一時的に感情を分けあつてみたところでなんにならう。

蘭子は、氣が着くと、鞭打つやうに自分を驅つて、運轉手に、

『いゝの。やつて頂戴！』と命じた。

左樣なら——彼を見るのもこれが最後であらう！

自動車は徐々に動きだした。が、精二も、傾くやうな樣子のまゝで、聲もかけず、止めようともしない——皮膚を、何物かが、電氣をかけたやうにぴし〳〵と打ちつゞけてゐる氣持がす

る。蘭子は、忍びやかに振返つて、默念と突立つて見送つてゐる精二の姿を瞶めてゐたが、それもすぐに隱れて、

『切ない……！』

感情が破れた。蘭子は、附添の看護婦の膝に、たうとう正體もなく泣き崩れてしまつた――夜中に下落合の叔母の家に着いた。その翌日、叔母の貞緒も一緒に、三人は、朝の特急で鄕里に向つた。

間にあへばいゝがと心配したが、その甲斐がなかつた。兄の辰郎は、Tの病院で死んでゐた――病氣は、最初、非常に順調な經過をとつてゐたので、誰もかれも安心してゐたのが惡かつたのである。そこに油斷があつて、ちよツとした不注意から腸出血を起し、危篤の電報が打たれた時には旣に死んでゐたのだつた。

兄を亡くした蘭子の嘆きもいふまでもないことだが、それよりたつた一人の後繼息子に先



立たれた兩親の悲しみは、傍で見かねるほどはげしかつた。かうなると神樣が人間を餘程よく造つてゐられることに感謝したい。かさね〴〵の打擊に、とても肉體の力が耐へきれないと思はれたのに――兩親の絕望が、不思議な勇氣を揮起させた。精神が肉體に慰めとなるものは、最早自分一人ではないか？　勝つて、蘭子も、どうにか斃れずに濟んだ。

生ける屍

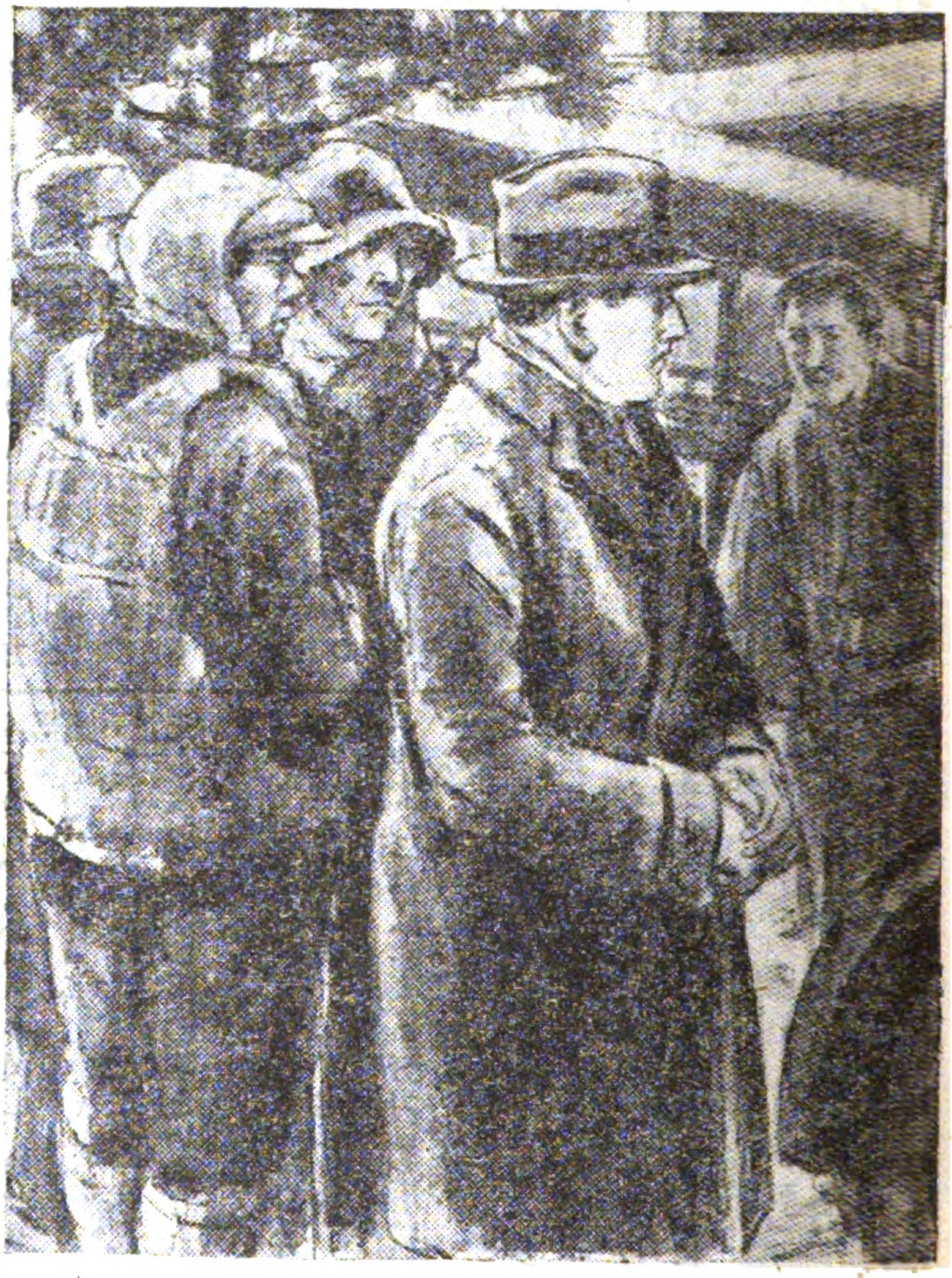
泣く〳〵辰郎の亡骸を野邊に送つて、それから一週間ばかり經つた後のことである。東京の叔父から、酒見が奇蹟的に救はれたと報知て來た。

『まア、よかつたわねえ！』

自分も助けられたほどの悅びである。蘭子はほツとして、叔母と顏を見合せた――が、叔父の手紙はあまり簡單で物足りない。叔母の貞緒は詳しく聞いて知らせると約束して歸京して行つたが、その返事には、やはり無事だといふこと以外は一

切不明だ、誰も會つたものもなく、練馬の家にもまだ歸つて來てゐない。どこにゐるのか、それさへわからないといつて寄越したばかりだつた。

ところが、この謎みたいな事情の裏には、深い苦心と、顧慮とが籠められてあつたのである。蘭子は、ずッと後になつて知つたことだが、酒見を救つたのは精二で——精二は、蘭子の電報を見ると直に行動を起した。はじめから單獨で、春枝の生れた家に驅附けたのも、伊香保から榛名湖畔に飛んで行つたのも彼が眞先きだつたのである。そしてみんなが絶望して引上げて行つた後も、一人だけ踏止まつて熱心に捜索をつゞけた。勿論、精二も、酒見が生存してゐると思つたのではない。ただ、一度は助けられたことのある恩人の消息を語る一片の形身の遺留品でも發見したいと考へたからで——無駄な努力だとは思つたが、人夫に案内させてずッと裏山の方まで歩きまはつてみた。すると圖ずも、雪に埋れた炭燒小屋で死に瀕してゐる酒見に出會つた。



酒見は、最初、春枝と一緒に毒藥を服んだことはいふまでもない。だが、分量でも過つたのか、彼は不幸にも（幸福にも）それを嘔吐してしまつた。死ねないが、苦しい。もう毒藥もなくなり、刄物のやうなものも持つてゐない。精神も朦朧として來たのではつきりした記憶は殘つてゐないが、多分、さうしてゐるうちには凍死するとでも考へたらしく、吹雪の中を蹣跚き〳〵行つて、いつとなく氣を失つた——後でわかつたことだが、酒見は、この時、高い斷崖の上から谷底へ轉り落ちたのである。運よく、恰

度そこを通りかゝつた炭燒人夫が見付けて、助けて小屋に連れて行つた。

その介抱によつて意識が自分に返ると、酒見は、第一に追手に捕つて連戻されることを非常に怖れた。春枝はたしかに死んでゐる。自分一人がさういふ醜態を晒したくない。炭燒人夫には道に迷つた結果だといつて、徐ろに再度の自殺を考へてゐるうち、極度の疲勞や、負傷もしてゐて、だん〳〵衰弱の度が加はつて危險に思はれだしてゐた際、端なくも精二が來あはせたので――この消息が搜索隊の人々の耳にはひらなかつたのは、雪のためである。積雪が路を阻んで、炭燒人夫の力でも幾日も里に知らせに出掛けて行くことが出來なかつたのだつた。

だが、單純にそれで酒見が救はれたのではなかつた。精二の苦心は、寧ろこの後のことで――早くも再度の決心を見取つて、どうしても思ひとまらせねばならない。悦びのあまり多くの人が驅附けて來た場合の酒見の胸中を考へたり、また再び世の中に出て行く時のこともある。出來るだけ聲を小さくする意味で、極めて少數の人々のほか、わざと詳しく知らせることを避けた。

そしてひそかにある山の中の温泉に連れて行つて、人知れず療養を加へてやつてゐる。が、これもやはり面接を避ける意味で、多くの人には行方も知らさないでゐるので――とにかく、酒見は助かつた。蘭子も、重い苛責からいくらか救はれた。

この上は、蘭子の立場としては、たゞ自分さへ所分すればいいのだつたが、事情が違つて來た。修道院に隱れてしまひたいといふ氣持には變りはなかつたが――兄の辰郎が亡つてみれば、否が應でも自分に婿養子を迎へて和田の家を繼がねばならない。殊に、それ以來めつきり氣の弱くなつた父親の姿を見ることは、なんとなく哀れに涙含ましい。到底、絕對に感情に任せての我儘は許されなくなつたことを知つて、

『でも、いゝわ。あたくし、今は悦んで犧牲になる。誰とでも結婚するわ……！』

とはいへ、それは、精二や、酒見の、二人のうちであつてはならない。人間には義理といふこともある。蘭子は、その人達のことはすつかり棄てゝ、新しく決心を立直した――二、三、四と、足掛け四月を、蘭子は、そのまゝ故郷で送つた。この間、何事も以前のことは忘れて、たゞ〳〵兩親の慰めとなりたいと念つて、一生懸命努力した甲斐があつた。精神の平和が、だん〳〵健康の上に及んで來て、

『まア、可笑しい。この頃、生きた屍が肥つて來るわ……！』

哀しい皮肉のやうにも思つたが、それが青春といふものである。みんなもさういふし、蘭子も自分で認めた。一旦失つてゐた美と、明るさとを、いつのまにか取返しつゝあつたのだつた。

不思議な見合

一人息子を失つた兩親は、ひどく氣を焦りだした。辰郎の百

ケ日がすぎると、何かこそ〳〵囁きあつたり、東京方面と打合せをしたり――蘭子もうす〳〵察して、

『いよ〳〵はじまつたのよ！』と思つた。

すると、四月の半ばすぎになつて、父の泰造が、不意に、

『蘭子、もう櫻花はすぎたが、お前も辰郎のことでいろ〳〵氣も遣つた後ぢや。暫く東京に行つて保養しておいで！』といつた。

意味ありげなにこ〳〵顏がすべてを語つてゐる。蘭子も、すぐに理解した――婿養子の候補者がきまつたに違ひないのだつた。

『えゝ、では行つてまゐります。』

それにしても、父も母も一緒でない。一人きりだといふことがちよツと不思議に感じられたが、叔父や叔母がゐることである。萬事一任してあるだらうと思つて――とにかく上京して來た。が、幾日經つてもなんの話も出なかつた。

『蘭子さん、さう家にばかり引込んでゐないで、すこしはお出掛けなさいよ！』

『えゝ、でも……。』

叔母にはすゝめられたが、遊樂の氣分なぞはすこしもない。相變らず出掛けもせずにゐると――また數日經つて、

『あんた、お聞きでないでせう？』と叔母がいふ。『養子のことよ！』

『えゝ……。』

『蘭子さんさへよかつたら、一度宅にお呼びしませうか？』

果してさうである。蘭子は濟まして、

『えゝ、どうぞ……！』といつた。

『ほゝゝゝ、まア、あの濟まして……どんな方だか、早く知りたいでせう？』

『いゝえ！』蘭子は首を振つた。『父や母や、みんなのお氣に入りさへしたら……。』

かういふ素直な返事を聞かうと思つてゐなかつたらしい。叔母は、暫く眼を瞬くやうな恰好に蘭子を眺めてゐたが——すぐに活然と笑つて、

『さうね、會へばわかりますわね。ぢやアわたしも、意地悪してそれまでお預りしておきませう！』

いよ〳〵その日が來た。家のために犠牲になつて、自分を生きた屍だと思つてゐる蘭子にとつては、假令相手が薄野呂のお馬鹿さんであらうと、兩親の氣に入りさへすればそれで異存はないのである。が、失禮にならないだけの仕度はして待つてゐると——午後である。叔母がやつて來て、

『お見えになりました。應接に通してありますよ。』と知らせた。

蘭子は、一緒に二階を下りた。自分でも冷静すぎると思はれるほどである。胸には、小波も立つ氣配もない——應接の前まで來ると、叔母は耳に口を寄せて、

『しツかりおやんなさいよ！』と囁いておいて行つてしまつた。

可怪なことではないか？　見合の席だといふのに紹介もしてくれようとしないで——だが、叔父がゐるのかも知れない。蘭子は、靜かに扉を開けた。



ところが、叔父もゐなかつた。たつた一人の、木綿の着物にセルの袴をはいた書生ツぽみたいな青年が——扉の開いた音にこちらを振向いた。同時に、

『まア……！』と蘭子が叫んだ。

『あ、お孃さんでしたか。お久振りで……！』

精二である。元氣よく立上つて挨拶をする——蘭子は、會つてならない人に會つてしまつたやうな、それでゐて嬉しさが胸一杯に込上げて來るやうな混亂に陷つた。見合の

相手のことなぞはとツくにどこかに消えて、

『まア、ほんたうに……！』と、深い胸聲でいつて、赧くなつて相對して掛けた。

精二の方は、べつに思ひがけなかつたことでもないらしい。暫くまじまじと顔を瞶めてゐたが、



『大變ご壯健におなりのやうですな。ご結構で……！』といつて、思ひ出して『さう〳〵、お目にかゝつたら、第一に申上げねばならないと思つてゐましたが……酒見さんは、恰度二週間ばかり前に、獨逸に洋行なさいましたよ！』

『まア……ちツとも存じませんで……！』

『いゝえ、わざと誰にもお報知しなかつたんです。見送りも、いはゞ僕一人みたいなもので……。』

『そんなにお寂しく……？』

『さうぢやないんです。それがいゝんです、今のあの方には……！』

こんなことから、二人の話題は、酒見の上に移つて行つた。蘭子は、この時、ある點までの詳しい話を精二に聞いたのだつた。

父母の眞意

いよ〳〵再度の自殺の決心を飜して、また世に出るべく酒見を洋行させるまでの精二の苦心は一通りではなかつた。ともすれば厭世に傾きがちな希望の光を掻立て〳〵して行つて——酒見は、たゞ、この厚い友情のためのみに甦つたといへる。が、精二は、經過がわかるだけの程度の、謙遜した調子で説明した上で、

『……酒見さんは、汽船にお乘りになるまでお嬢さんにご迷惑をかけて濟まない〳〵と繰返していらツしやいました。このことは、直接お目にかゝつて申上げようか、手紙を書かうかと仰有つてゐましたが……何より、あの方には、誰とでもお會ひになるのが一番辛いのです。それに、手紙では殊更らしいし……それで、僕が、たしかにお傳へいたしますと請合つたのです

がな……。』

要するに愛情の問題のことである。勿論、酒見は、春枝と死の約束をしたのもちツとも愛があつてのことではなかつたが、彼女一人が死んで自分が生殘つた後は急激に變つた。春枝にはげしい愛憐の情を持つやうになつて――從つて蘭子に抱いてゐた感情は綺麗に洗はれた。一體、蘭子は、それほどの愛情を持つてゐたのでもないのに、酒見自身が自分の愛情のために渦卷の中に卷込んだので、それが濟まないといふのだつた。

蘭子にも、その酒見の變化は、實によくわかつた。以前に解放するといつたのは愛と義理のためであるが、今度こそ眞にさつぱりと眞白になつたので――もう知らなかつた時も同樣である。心からほツとして、

『さうを……でも、ご迷惑をかけたのは、あたくしもですけど……。』

まアよかつた、と思ふと同時に、それではもう誰を愛してもいゝのだ、もう酒見の愛情に對して苦しい負債を持たなくもよくなつたといふ考へが浮んだ。たとへば、また精二に返つたとしても――精二にも、酒見には負債はあつた。だが、その恩は、既に數倍にして返したではないか？ 義理といふことからいへば、すべてがもとの白紙に返つてゐる譯だつた。

いつのまにか、生きた屍のつもりが、屍でなくならうとしだした。蘭子は、深い物思ひに沈んだ――言葉が切れて、暫く沈默がつゞいた後で、

『時に、お孃さん、何か僕にご用事がおありださうで……？』

と精二がいつた。

『え、あたくしがご用事ですツて……いゝえ……？』

『そりや可怪いですな。僕、今日訪ねて來るやうにお手紙を頂いたのですが、用件はお孃さんからお話になるといふことで……。』

『べつに、あたくし……。』といひかけたが、蘭子は、はツと思ひあたつて默つた。

やうやく見合のことを思ひ出したのである。叔母の樣子といひ、紹介のない見合は可怪いとは思つたが――精二のほかには誰も來てゐるものはない。してみると、父が二人の結婚を許してくれる……？

事實、全くその通りだつたのである。流石に泰造も、蘭子が、精二のために、雪の夜を二階の窓から脫けて酒見の許に驅附けて行つて倒れたのを見た時には、娘に持つ愛からである。氣も折れて許さうかと考へるほどになつたが、その後、また蘭子が酒見に返ることになつたのでそのまゝ棄てゝおいた。すると酒見の方に情死沙汰が起つたので、この方は斷念せねばならなくなつて――殊に、辰郎が亡つてみれば養子を急ぐ。精二の性質は知りすぎるほど知つてゐる上に、次男である。反感的な感情を去つてみる時は、申分のない立派な男である。社會的手腕も、銀行のことでわかつてゐる。蘭子との折合なぞは考へてみるだけが野暮である。親類ともいろ〳〵相談の結果、いよい

よそれと決定した。

だが、表面から養子に、といひだしたところで、精二の氣性としておいそれと容易に承諾しさうにない。また、泰造としても、行きがかり上いひ出しにくい。鮎を釣るに友釣といふ方法があつて、囮を水に放しておけば自然に他の魚が釣れるが、まさかその戰術によつたのではなからうが、とにかく蘭子を東京へやつておけばなんとかなるといふほどの氣持で出した。が、二人は一向會はうともしない。そこで叔母の貞緒が氣を揉んで、それと蘭子に暗示を與へておいて、わさ〳〵精二を招いて引合せたのだつた。

はじめは蘭子も、まさかと思つて氣も著かなかつたが、だんだん前後のことを考へてみてやうやく悟つた。今は誰に對する



義務もなくなつた。兩親が公然と許してくれたとなれば、猶更――ではあるが、あまり有難くて、嬉しくて、あれほどの氣持で後を追つて出、幾度も愛を訴へたこともあるにもかゝはらず、いよ〳〵となるとすつかり勇氣をなくなしてしまつた。なんといひださうか？　急にはげしく騷いて來た胸を抱いて、ただいつまでも默りつゞけた。

青春の朝

そんなことは、精二の方は一向知らない。潤んだ眼を深く伏せ、胸を喘がせて急に默りこんだ蘭子の姿に、可憐な愛の表情を見たが――これもいひ出す言葉がない。蘭子はやがておづおづと顏をあげて、

『さう〳〵、あのう……結婚なさるといふお話を聞きましたが、奧さまは？』といつた。

『拒絶りました。僕、はじめから自分にそんな氣持はすこしもなかつたんですがな、たゞあなたと酒見さんに、早く結婚して頂かうと思つたばかりで……。』と、精二は笑ひながらいつたが、急に思ひ深げに『世の中はわからない。好意も時には惡の働きをする。その結果があんな騷ぎになつて、春枝さんの死を早めて……あの女は、どうせ長くは生きてゐなかつたでせう。相手を見着け次第死んだでせうが……しかし可哀さうなことをしました！』

『ほんとね！』蘭子も應じた。が、同時に一方では安心して、

『では、今もやはりその銀行の方に……？』

『いや、銀行はとつくに罷めました！』

『まア、惜しいことぢやございませんの。折角……。』

『あまり惜しい地位でもありませんな。偶然の機會に拾はれたので、僕のほんたうの價値だつたかどうだかわかりませんからな。』

その妹との結婚の拒絶は、頭取の松永氏との斷交を意味してゐた。精二は、未練氣もなく辭職して、それ以來ずつと酒見の傍に附添つてゐたのである――さういはれゝば、伊香保で會つた時の堂々たる風采に較べて非常に見窄らしい。蘭子は心配して、

『では、その後、どうなすツていらッしやいますの？』

『今ですか？　今は牛乳配達をやつてゐますよ。』

『まア……！』

『酒見さんの勸告もあり、僕もそのつもりです。かた〳〵また東京に出て來て……この四月から、やうやく多年の望みどほり物理學校に入學しました。なんにしても繼續の學問では駄目です。何か專門のことを一つ、基礎からみッちりやつておかねば……新規蒔直し、またこれから第一步を踏出すのです。酒見さんが學資を出してやらうかと親切に仰有つて下すつたが、おことわりをしました。これからぼつ〳〵、苦學をしながらゆつくりやつて行くのです……！』

如何にも嬉しさうに、元氣よく語るのを聞いてゐた蘭子の眼は、またしても感激に濡れて來た。さうだ、これなのだ。自分

にこの方を選ませたのは――銀行の頭取との縁談をことわり、ゆくゆく支配人となるべき地位を敝履のやうに棄てゝ、苦學してまで向上の路を辿らうとする。その精二の氣概なのだ！

再び長い沈默があつた後、蘭子はやうやうのことで、思ひきつて、

『あのう……あのう……。』と、眞赧になつていひだした。『あのう、もしも父が、あたくし達の結婚を許してくれましたら……。』

女としてはそれ以上いひ得ない。兩手で顏を隱して、身體を揉むやうにしてわなわな顫へてゐる蘭子を、精二は、感激に滿ちた眼を瞬くやうにして暫く眺めてゐたが――つと立つて窓に行つた。が、既に決心がきまつてゐたらしい。すぐに蘭子の傍に返つて來て、

『蘭子さん……！』と、はじめて名を口にして呼んで『長い間あなたをお苦しめしましたな。僕達、酒見さんとも話しあつたことですが、好意の談合が、どんなにあなた一人をお苦しめしたことか！ 最早、この上は出來ない。が、酒見さんが全然、今のところで誰とも結婚する意志がないとすれば……僕も、自分の前途に、多少の希望が持てだしました。これから、あなたの生涯を幸福にするために、一生懸命自分の全力を捧げます。ただ、それにしても現在ではどうにもならない。もう三四年待つて下さい……！』

『でも、それが出來ませんのよ。兄が死にましたので……！』

と蘭子は顏を振上げた。

『えツ、兄さんが……？』精二ははじめて聞いたのであつた。ちよツと考へて『では、あなたが後をお繼ぎになるのですね？』

『えゝ……！』

蘭子は、精二がことわると思つた。長い間部屋を行つたり來たりしてゐたが――また、半ばべそを搔いて兩手を揉合せてゐる蘭子の傍に引返して、やさしい、靜かな調子で、

『蘭子さん、僕、誰にもまだいはなかつたことをお話しませう。僕は、ずつとずつと以前から心の中ではあなたを愛してゐたのですよ。あなたが、僕に助けられたといつて、親切な手紙や、いろいろな品物なぞを下すつた。その頃から……いつかお目にかけませう。今でも殘らず大切にしてゐます。が、自分の境遇を知つてゐる。一生、こんなお話をする機會はないと思つてゐましたが……。』

『まア、そんなに前から……？』

『えゝ、あなたは僕の神樣だつたのです。いつも僕を勵まして、正しい方へ方へと導いて下すつたが……いや、これから後もです。生涯、たつた一人の……！』

『あたくし、嬉しくて……！』

それは地上を閉籠めてゐた曉の霧が霽れてはじめて太陽の光を仰いだ悦びに似てゐた。長い長い苦患な試練を經て來た二人は――靑春の燦かしい希望の中からいつのまにか抱合つてゐた。蘭子は、精二の幅廣い胸に顏を埋めて、靜かに靜かに泣きつづけた。

（をはり）

大日本雄辯會講談社ニュース

本社の光榮

宮內省より『昭和天覽試合』記念出版の御下命を賜る

本社が雜誌に書籍に、常に志してゐる「報國」の微衷をお認め下さいまして、此度宮內省から特に「昭和天覽試合」の出版を、本社に御下命になりました。之は滿天下皆樣の血を湧かせた昨春五月五日の天覽武道大會の壯觀を永久に記念すべきもので、宮內省では此の種の出版を民間に御下命になつたことは、未だ嘗つてなかつたのでありますが、此度は特に本社を御選定御下命になつた次第と承ります。

本社一同はこの光榮に感激、感銘、早速「天覽試合編輯局」を特設して、宮內省からの非常なる御盡力、御指導を仰ぎ、齋戒沐浴して、日夜之が進行に沒頭致して居ります。本書には更に、武道家の好參考となるべき種々の材料、國民として修養になるべき資料も加へ、愈々最近刊行の運びになりました。本書が愈々社會に現れた曉は、獨り武道愛好家の絶好記念物たるのみならず、一般國民の又となき修養書、必讀の國民讀本として、必ず江湖の大歡迎を受けること丶確信致して居ります。

創刊第二百號を

迎へた少年倶樂部

本誌の弟雜誌、少年倶樂部は、この五月號を以て、愈々創刊二百號を迎へることになりました。同誌では發展又發展の歷史を祝すべく本月を記念號として、特に立派な、

兩陛下の御尊影
知識の寶庫

を、附錄として添附致しました。

野間社長の武道獎勵

天下の劍客集る

目下千葉別莊に靜養中の野間本社々長は、天下の名劍客を續々とその道場に招聘して、武道獎勵のため大いに盡力されて居ります。東都にては齋村五郎範士を初め、大島、白土、山本、橋本の諸先生及び警視廳、宮內省、陸軍戸山學校、有信館、修道學院等の一流の劍客が次々と御來訪され、又、特に京都から武道專門學校の近藤、津崎、菅、箱崎等の諸先生がわざ〳〵御光來、その他、仙臺二高の乳井先生、千葉市の大澤先生、横須賀の片岡先生等各地の名劍客が御來場、親しく少年社員一同に御指導下さいました。



・興味ある數字

兼ねて本社の募集中のもの、及頒布中のものは、左記の樣な壓倒的多數に上りました。本社でもこの全國の大共鳴には少からず驚き且つ大いに感謝してゐる次第であります。

健全なる歌應募數	一七九、二五六
三萬圓大懸賞應募數	一九六八、二四五
眞劍宣傳ポスター頒布數	五〇〇〇、二五〇

本社少年社員募集試驗

豫て、社長出身地の群馬縣下より募集中の本年度本社少年社員採用試驗は、去る三月二十三日、前橋市に於て擧行しました。應募する者、中學校、商業學校卒業者を初め、補習學校、高等小學、尋常小學卒業者に至るまで二百八十五名の多きに上りましたが、詮衡試驗を行つた結果、極めて優秀なる少年四十名を採用することになりました。

全く奉仕的な本社代理部

買つて御滿足下さる品、御註文下すつて氣持のよい小社代理部は、愈發展膨張いたしまして、日本全國皆樣のお膝元は素より遠く諸外國迄も躍進し、晝夜忙殺の有樣です。此の繁激渦を卷く中より、近日中更に新らしき商品數種を誌上に發表いたします。之こそ全く皆樣の御信賴と御歡迎を得るに足る優秀品で御座います。何卒御期待の上特に代理部案內には御注意下さいませ。

夏姿

二萬圓大懸賞つき
婦人倶樂部浴衣

夏の浴衣姿！ オ、輕やかな夏の婦人の浴衣姿！ それは日本婦人だけが惠まれてゐる美態で、本當に婦人の夏を明るく清くするものです。それだけに夏の浴衣は、日本婦人にとつては極めて重要なものゝ一つであります。



「朝凪」をつけた松竹スター及川道子孃

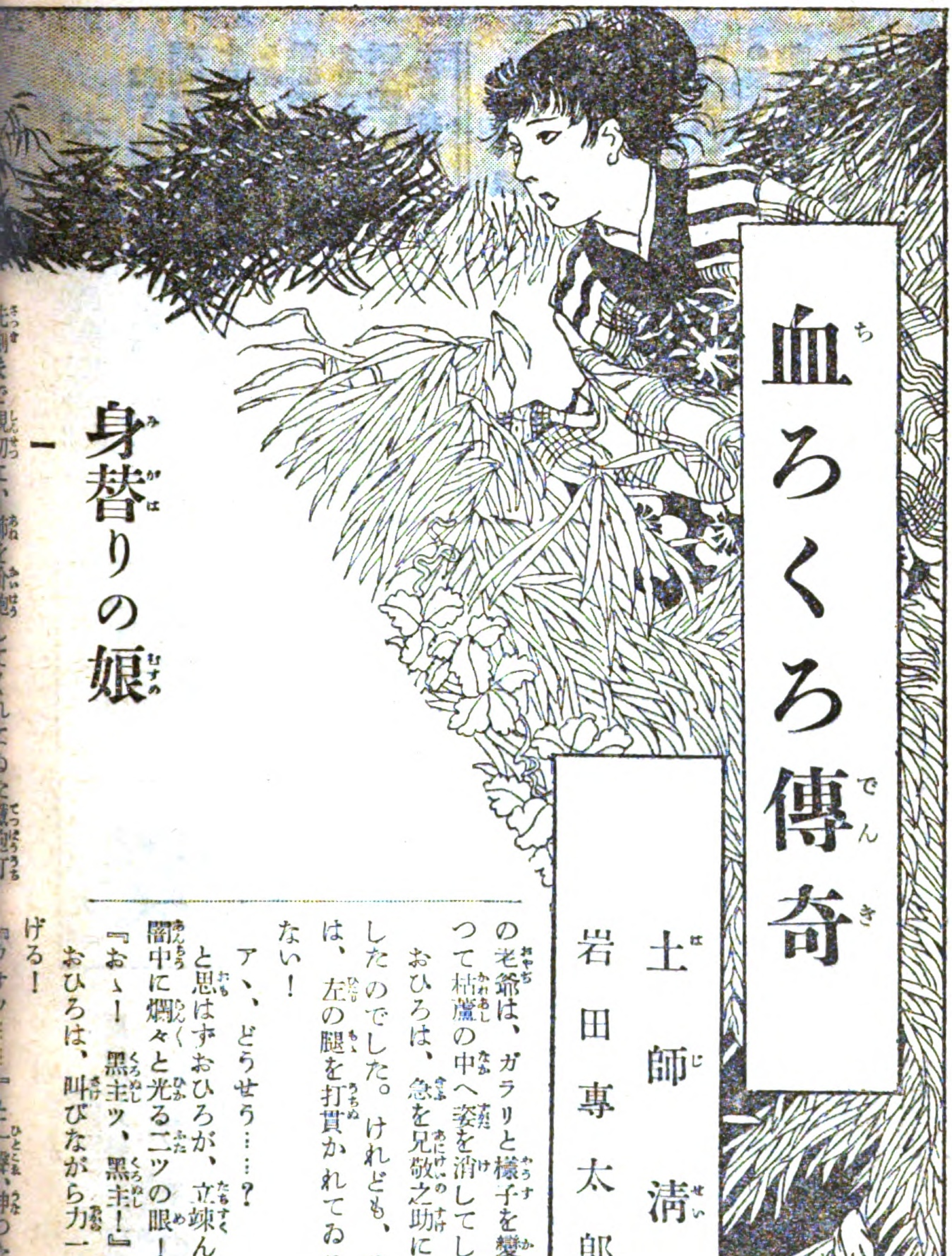
本社の「婦人倶樂部浴衣」は、今年はわが浴衣界に一大貢獻を致したい考へで、極めて

夏の婦人美を引立たせる
新考案の浴衣地

大規模にその計畫を建てました。

柄はよし、染は堅牢、生地は最良、三拍子揃つた逸品を提供する計畫です。

何しろ考案は現代一流の畫伯、文豪、名士名流婦人の趣味に成るもの三百有餘點を集めその中から特に優秀なる七十餘柄を選んだもの、氣のきいてゐる、氣分のよい、品のある香りの高いもの、恐らく婦人倶樂部浴衣は、昭和五年浴衣界の人氣を獨占するでせう。賣出しは五月初旬よりどうぞ今から御期待下さるやうお願ひ申上げます。



血ろくろ傳奇

土師清二
岩田専太郎畫

一　身替りの娘

の老爺は、ガラリと樣子を變へ、そのまゝ姉を脊負つて枯蘆の中へ姿を消してしまつたのです。

おひろは、急を兄敬之助に告げようと驅出さうとしたのでした。けれども、その力と頼む兄敬之助は、左の腿を打貫かれてゐる鐵砲瘡のために動けない！

ア、、どうせう……？

と思はずおひろが、立竦んだ途端、こちらへ……闇中に爛々と光る二ツの眼！

『おゝ！　黒主ッ、黒主！』

おひろは、叫びながら力一ぱい兩手を高く差しあげる！



か、それとも愛想か、うれしいのか、おひろの目前三尺ばかりのところまで、礫の如く飛び込んで來たかと見た瞬間！

ヒヨウ！

風を剪つて、おひろの頭の上を跳び越えました。

『アツ、黑主ツ』

とおひろが、背後を振返ると、またヒラリ！

『待つて！　黑主……』

おひろが、振返るとまた、ヒラリ！

猛犬黑主は、おひろの相手になつて遊ぶつもりなのだらう。おひろの頭の上、肩のところと右へ、左へ、前へ、後へ、跳び越え〳〵するのです。

おひろは、氣が氣でない！

折角黑主が味方に來てくれて『うれしや！』と思つたら、その黑主は面白さうに遊ばうとするのです。

『いけないよツ……黑主ツたら……いけないよ、いけないよ……』

おひろは、ベツタリ枯草の中に坐つてオロ〳〵泣き出しました。

これには驚いたか、猛犬は跳ぶのを止めて不審さうに鼻先をおひろの顏へ、擦りつけるやうにするのです。おひろは黑主の頸ツ玉に抱き付いて、泣きながら、

『黑主ツ、姉さんが……姉さんがゐないンだよツ。姉さんを……姉さんを探しておくれ！　惡い奴に伴れて行かれたンだ……惡い奴に……』

泣き、咽び、おひろは懸命に訴へ、頰を黑主の顏に押付けるのです。

だが、猛犬黑主は、何の事か、分らないらしいのです。俄に物優しい眼をして、パチクリやつてゐるのです。

『駄目だ〳〵……お前は、お豐叔母ちやんや、嘉兵衛さんの言葉はわかるけれど、あたしのいふことはわからないンだね……わからないンだね……ア、、どうせう……』

おひろは、幼い身にもさう分別して泣くのです。かうしてゐる中に、姉さんは……姉さんを負ンぶした惡者は遠くの方へ行つてしまふだらう！と心は焦るが、幼い身の哀しさに、おひろは、もう立上る氣力が無くなつたのか、黑主の頸に抱へ付いて、ひた泣きに泣くばかりです。

『ピユウ……ピ、、、……』

お、！　口笛だ！

『ウワン！』と一聲、闇の空を仰いで黑主は咆哮した。

『アッ、誰れ？』とおひろ。その耳へ、また近づいて來る口笛の音、

『ピツ……ピ、、、、……』

『ウワン！』

と二聲目には、猛然と四肢を張つた黑主、おひろが、手を解くと一緒に、口笛の方へ、彈丸なりに飛んで行つてしまつた！

おひろは、ヨロ〳〵と立上つて、

『伯父さんツ、こゝよウ……あたしこゝよウ……』

『オーイ、今行くぞ！』

と闇の彼方から答へる聲は、たしかに犬作ノ嘉兵衛の頑丈聲です。

『早く……早く來て……』

黑主を先に、嘉兵衛は畦道を間飛に、驅けて來る……。

『ナニツ、おてるさんが、悪者にやられたツ？』と嘉兵衛。

『あい！　あツちだよウ』とおひろ。

『何所にゐたンだ。一緒に來てくれツ』

『こツちよツ』

勢ひ付いておひろが、崇先寺池の岸道へ驅出せば續く嘉兵衛と猛犬黑主！

『火を焚いたか。よしツ、こゝにゐたンだな？』

『あい、こゝだよ』

『分つた』

と犬作ノ嘉兵衛が云つたかと見ると、彼の右の手は、燃え立つきた焚火の周圍に延びて、宙に大きく圓を描いてゐるのでした。

と、手の向く方へ猛犬黑主は歩み、鋭覺な鼻を地面に押附け嗅ぎ廻るのです。そこら一帶は吹矢ノ淺右衛門と姉おてるがゐたところ、淺右衛門がおてるを押附け、おてるを脊負ひあげた所です。

嗅覺の鋭敏な或る種の犬は、風上三十町の地點にゐる主人の臭ひを嗅ぎつけるといふほどだ。犯罪人捜査用専門の警察犬は、犯人が逃走した道順を嗅ぎ分けて犯人を追跡して行きます――犬作ノ嘉兵衛が鍛練に鍛練を重ねた猛犬黑主は、今や嘉兵衛の指揮に從つて淺右衛門の臭ひ、おてるの臭ひを嗅ぎに嗅ぎ、嗅ぎ廻つてゐるのです。その間約一分！

嘉兵衛は、圓を描いてゐた手を、高くさしあげました。

黑主は、その手を爛々と見守つてゐる！

嘉兵衛の手が下りれば淺右衛門追跡の出發點を切るのだ！

『おひろちやん』と手を上げたまゝの嘉兵衛。

『えツ？』

『おひろちやんは、これから兄さんとこへ歸るンだ。歸つたらお豐叔母ちやんに云つといてくれ』

『あゝ、いゝよ！　黑主と行つたツて――』

『賴むぜ』

と云ひ切るや否や、嘉兵衛はサツと手を下した。

パツと枯蘆の中へ、跳り込む猛犬黑主！

嘉兵衛も後を追うて、枯蘆の茂みへ飛込んで行く！
おひろは、畦道を玉姫稲荷の方へ、バタ〳〵驅け出しました――。

二

枯蘆の茂みをぬけると、崇先寺池の土手になる。そこまで出た黒主は、續く嘉兵衛を振返つて見たらしく、小半町遅れてゐる嘉兵衛の目に闇中、ギラギラッと合圖の眼を光らせます。『ピッ！』と口笛が鳴つたのは『心得たッ』といふ嘉兵衛の合圖でせう。

かくて嘉兵衛と黒主は、田圃路から汐入土手へ驅けあがり、また田圃路に驅け下りて出て來たのは、昔は龍女傳説、今は紡績で名高い鐘ケ淵の川岸です。

それから松崎社の前を左へ、橋場に踏込んで行くのでした。

そこら一帶、夜目にもソレとわかる贅澤豪奢な橋場の別荘地帶。いづれは富裕な大町人、裕福な旗下の隱居所と見える構への家が、垣、塀をめぐらしてゐるのです。

『おい、待つてくれ』

と嘉兵衛は、今黒板塀の根ッこをクン〳〵嗅いでゐる猛犬に、手をあげて見せます。

黒主は、チラッとこちらを見たが、直ぐまた板塀を嗅ぎ廻るのです。

『おやッ……？』

と嘉兵衛、二三間黒主に近づいて、

『此處へ……入つたてえのか』

黒主は、地面を引ッ掻き出した。『こゝだ！』といふのです。

『よし〳〵。見てやる』

嘉兵衛は、板塀に脊を押し付けて、ジッと押して見る……と、脊と尻の當つてゐる所がジワリと手弛みがある……腰の上あたりがガッチリしてゐるのは、確に掛金か、錠前のある證據だ……表から見ると何のこともない黒板塀だが、コヽ三四枚の板が開き戸になつてゐるのだ！

『さうか――』首肯いて嘉兵衛、板塀から脊を外した時です。

今嘉兵衛が通つて來た道から、

『あんま上下ウ……』

寒む〴〵とした聲を張りあげて、やつて來る流し按摩一人。

嘉兵衛は、用を達してゐる體で、板塀に向き、手では黒主を制してゐるのです。

だん〳〵近づいて來た按摩は、嘉兵衛の背後まで來ると、だしぬけに、

『親方さん、今晩は、犬もゐますね』

『えッ、按摩さんか』

『はい、親方、ナニしてゐらつしやるね？』

『ナニをしてゐるものか。小便をやつてゐたのさ』

『ヒ、、、……』

『氣味のわりい笑ひ方をするぜ』

『だッて、親方』
『どうした？』
『お前さん、先刻から見てゐると小便をしちやゐなさらねえよ』
『ナニ……見てゐたと！　ぢやお前、目あき按摩か』
『なンの、盲目さ。正銘の盲目だよ』
『勘で……感じでわかるといふのかい？』
『はい、わかりますよ』
『そりや感心だの。お前さん、どッちへ行く？』
『あッちへ、參ります』
『俺も一緒に行くから』
と嘉兵衞。この氣味のわるい子供上りの盲目按摩と伴つて歩き出しました。
『おい、按摩さん』
『はい』
『お前、この邊は詳しからう？』
『はい、目あきよりは詳しうございますよ』
『威張るぜ。はゝゝゝ飛んだ塙保己一だ。先刻俺が立つてゐた板塀……あすこは一體、何ッてえ家だ。莫迦にデッカイ構だなア』
『あすこ……あすこはね、阿波徳さんの寮ですよ。なんでも本家は日本橋で藍玉問屋の阿波屋徳右衞門さんといふ大身代だといふ評判ですよ』



『阿波徳……藍玉問屋で、阿波屋徳右衞門か……？』
と嘉兵衞は胸に疊込むやうに口の中で繰返し〳〵來た道を振返りました。
黒々とつゞいてゐる長い〳〵黒板、その內側、闇の空を劃つて立つ、城か、櫓のやうな大きな屋根塀。
そこで再び嘉兵衞は『阿波徳の寮！』を胸の中で繰返したのです。
黒主の鼻に間違ひ、狂る

ひはない！

いよ〱おてるさんは、あの板塀の開き戸から内へ、舁ぎ込まれたのか……？

おてるさんを攫つた奴は、慾や色氣でやつた仕事とは異ふのか……？

ハテナ……？

と嘉兵衛は、思はず腕を組んで立停りました。



あの鐵砲猪を受けてゐる敬之助、その妹達だといふおてるおひろの姉妹……おてるが攫はれた……此奴ア曰くも曰く、大變な曰くがあるンだな！

と胸算用の途端、何時の間にか小牛町先方へ行つてゐる先刻の按摩。

ピピーピッ。

嘲けるやうな笛の音です。

『チエッ、馬鹿にしてやがる……だが、歸えらう。あの構の内だ、オイソレと踏込むこともならねえ。お豐さんと相談だ』

嘉兵衛は、俄に足を早めて、元來た道へ引返して行く。その後になり先になり、猛犬黒主は何やら物足なさゝうに歸つて行くのでした。さうして先刻の板塀、開き戸のところまで來ると、

クン〱……鼻を鳴らして嗅ぎ廻るのです。

『わかつた〱。いゝよ』

嘉兵衛は、手で制して松崎社の方へ急ぎつゝ、

『おてるさん、頑張つてゐてくンなよ』

と念じるのでした。

だが、本當に、嘉兵衛が信じてゐるやうに、おてるはコノ阿波徳の寮に運び込まれたのでせうか？

さうです——黒主の鋭い嗅覺に狂ひはなかつたのです！

この阿波徳の寮構の内、隅田川にのぞんだ離座敷の一室に、紅い友禪の夜具をフワリと着て臥せつてゐる若い美しい女。そ

れは反古買の娘おてるだつたのです。

その枕頭で、大胡坐、鉈豆煙管で一ぷく吸ひ付けてゐるのは、片眼の怪老爺吹矢ノ淺右衛門でした。

三

おてるは、悪夢のなかに逍うてゐる心地です。崇先寺池の岸道で俄に起つた差込み……それから後は夢現、漸く氣が付いて見ると自分は見も知らぬ立派な部屋の内で、絹夜具の中に横たはつてゐたのです。

夢か……？

おてるは、氣付くと同時に、さう考へたのです。だが、次ぎの瞬間に枕頭に坐つてゐる片眼の怪老爺を見た時、

ア、……吹矢ノ淺右衛門！

兄さんを撃つた淺右衛門が此處にゐる！　渡し船で一緒になつた吹矢ノ淺右衛門がゐる！

驚き、怖れずにはゐられなかつたのです。

そんな筈はない……やつぱりコレは夢なのか……？

と思ひ返して見てゐると、そこへ廊下づたひに、こちらへ來る跫音です。

『來なすツたやうだぞ』

淺右衛門が呟きます。

跫音は襖の外で、ピッタリ止まつて、

『淺右衛門』

『はい、旦那、お入りなさいまし』

『うム』

と返辭があつて、襖を引開けたのは道岡三十郎だ。三十郎は相變らず左の手を懷に、右手に大刀を取つてズッと入つて來ます。

『どうぞ、こちらへ』

と淺右衛門が招じる坐蒲團を踏んだまゝ突立つて、

『おい、コレは何だ？』

と三十郎、寢てゐるおてるの方へ顎をしやくつて見せるのです。淺右衛門ニヤリとして、

『いゝ娘でござンせう。旦那、お氣に召しましたかね？』

『何所から拾つて來た？』

『何所だつていゝぢやありませんか』

『眠つてるのか』

『この娘ですか。さア狸寢入をきめてゐるやうで……』

『さうか』

と三十郎は、坐らうともせず、枕行燈に照らされてゐるおてるの寢顔を、ためつすがめつするやうに、凝ッと見下してゐます。

『へゝゝ……さうジワ〳〵見ちやいけませんよ。取引の濟まねえ中は、あッしの代物で……へゝゝ』と淺右衛門。

『淺右衛門』

『へい。なンでござンす？』

『俺に使を寄越したのは、此奴を俺に買はせる魂膽か』
『お値段に依ッちやア……といふところですね』
無駄口でなく、戯談でもなく、さらばと云つて本音でもないらしい氣味のわるい三十郎と淺右衛門の應答です。
それを聞いてゐるおてるの心持は、どんなでせう？
三十郎が目で相圖をしたと見えて、
『へい、ぢやア』
と淺右衛門の聲で、二人は伴つて部屋を出て行くのです。何たか、おてるに聞かせぬ相談をやる氣らしい。
おてるは、ムックリ頭を上げました。
逃げ出さう！　逃げねばならない！
殺されてもいゝ！
よろ〳〵ッと立上つたおてるは、窓の障子に手を掛けたのです。開けようとして氣が付いて見ると、身には緋縮緬の長襦袢一枚！
あゝ……これでは……これでは……！
私の着物はドコに？
おてるは混亂して、部屋の内を氣狂ひのやうに見廻しました。
と、何時の間に來たか、襖の前に若い女が一人……ニコ〳〵笑つて立つてゐるのです！
『アッ……』おてるは、棒立になつた！　すると――
『どうなさいまし――？』
『……』
『お目覺めでございましたか』
と云ひつゝ若い女は近づいて來て、おてるの手を握つて、
『そのまゝで結構でございますから、こちらへ入ッしやいまし』
といふのです。
おてるは最早逃げようといふ氣を打挫がれてしまつて、手を曳かれるまゝに、そろ〳〵此部屋を出て行くのでした。
長廊下を通つて、伴れて行かれた所は、湯殿です。
若い女は此家の女中と見えて、襷掛の甲斐々々しい身拵になつたかと見ると、おてるを裸體にしてやつて、湯槽の中に漬からせてやる、温まるのを待つて全身を洗つてやり、黒髪をも梳き付けてやるのでした。
今はもう心も魂も藻拔けの殻同然のおてる――彼女は呼吸をこそしてゐるが、美しく發達した四肢や胸や乳房を持つた乳白色の塑像のやうなものでした。
女中にされるまゝに委せてゐる此裸形の生き人形は、
『お化粧をいたしませう』
と云はれると、鏡と鏡臺の前に素直に坐るのでした。すると、
『お上りになつて？』
さう云つて現はれたのは、女髪結で、手練といふのか、見る見る黒髪を文金風の高島田に結ひ上げる。そこへ他の女中が目も文な振袖、帶、脊負揚を亂箱に堆く積みあげて運んで

來る……。

　おてるは斯うして、飾窓の中に飾付けられる人形のやうに、美しい髮容、衣裳で仕上げられてゐるのでした。一體、女達は何者の指圖、何者の命令で、おてるの清淨無垢な體をオモチャのごとく扱つてゐるのか？　陰で指圖をしてゐる奴の目的は？

　おてるを、このやうに美しくして、何所へやらうとしてゐるのでせう？　何者に與へようとしてゐるのでせう……？　けれども、そんな事には一向お構ひ無しで、女達は勝手な事を云ひ合つてゐます。

『こんどは、お腰紐？』

『え〻、こちらへ頂戴』

『まア、この方、美しいわねえ！』

『あたし、ね』

『え〻、なアに？』

『この方、先刻から見た人のやうに思へてならないのよ』

『さう、何所で？』

『何所と仰有ると困るけれど……云つてもい〻か知ら……』

『云つて御覽なさいな。い〻ぢやないこと』

『ぢやいふわ。近頃こちらへあまり來ないけれど、以前よく來てたでせう。あの姉妹屑屋ネ。わかつて？』

『さう、似てらッしやるか知ら？』

　と一人の若い女中は、兩眼を閉ぢ俯向いてゐるおてるの顏を無遠慮に覗込むのです。

　姉妹屑屋！　この言葉が發せられた瞬間、極度の疲勞に打拉がれて、何事も考へ、思ふことのできないおてるの魂の底に、ムクムクと湧き起つて來たものがある！

　それは姉妹屑屋といふ女中の言葉です。―妹おひろ！　兄敬之助！　お〻……！

『さうだわ。この方姉妹屑屋に似てらッしやるわ』

　と云ひながら尚も覗込んでゐる女中の顏を、くわッと大きく目を開いて見たおてるはその瞬間『さうです！　私は姉妹屑屋です！　屑屋ですから助けて下さいッ』と叫ばうとしたのでしたが、どういふものか舌が硬張つて聲が出ないのでした。

　おてるは又朦朧と意識が霞んで來る心地で、女達のするま〻に體を任せてしまふのでした。

『さア、立派なお嫁樣が出來上りました。お供してあげて下さいな』

　女髮結が、さう云ふと、左右からおてるの手を取つて廊下へ伴れ出すのです。

　その背後姿を見送つて、櫛、元結などを片付けながら女髮結は、誰に聞かすともなくひとり言のやうに、

『可哀さうに……人身御供か』

　といふのでした。

『もう丑滿刻かね？』

　さう云つたのは、鏡に手をかけようとしてゐる女中の、これ

もひとり言でした。

人身御供——おてるは、何所へ伴れて行かれるのだらう…？

四

『叔母ちゃん……』

『え、なアに？』

『黒主は強いわね！』

『えゝ強いのよ』

『きツと、姉さんを助けて來るでせう。嘉兵衛さんと二人でね』

『助けてくるわ。だから……おひろちゃんは安心してお寢みなさいよ』

『ウン……大丈夫だわね』

『大丈夫よ』

『さうね』

と云つたかと見ると、おひろはお豐の胸に顏を押しつけて、眼を閉ぢるのです。

お豐は一時おひろを抱き締めて、輕く脊を叩いてやるのでした。

敬之助は——と見ると、先刻から壁にもたれたきり、兩眼を閉ぢて何事か深く思案してゐるのです。無論淺右衛門の鐵砲に擊たれた左の足は投出したまゝでした。

この慘たらしい貫通銃疵のためか、二日三日の間に、さすが美男の敬之助も、頬は削け、顎は尖り、見るも痛々しい相貌となつてしまつてゐるのです。

『おひろちゃん……』

お豐は、囁くごとく呼んで見ました。

『ウン……』と微かにうなづくやうにしたのは、もうトロ〳〵おひろは眠つてゐるらしいのでした。

『お眠つたのね。可哀さうに……クタ〳〵に疲れて……』

さう云つて、お豐は敬之助を見やるのでした。

と、それを感じたか、敬之助はお豐を見返して、

『雜作をかけました。有難う……』

『いゝえ。お子供衆は罪がなくて、お可愛うございます』

『夜も更けて來た。歸つて下さらぬか』

『えツ……はい』

『こちらは、御心配なく……お捨置き下さい』

『でも……あの』

『老耄に擔がれて行く。いや、擔がれて行つたやうな不幸者の妹なら、あつても無くてもよいと思ふ……あれば却つて足手纏ひ。ないが結句幸せだ』

と敬之助は、嘲けるがごとく、苦笑ひを浮べるのです。

『しかし、俄の御病氣だつたと……』

『恥を知つてゐる奴なら、舌を食つて死んでゐませう。叶はぬ時は自殺しろ……私はさう敎へてある……』

『……』

『女は弱い。弱い者が眞逆の時、自分を守り通すには死ぬより途がない』

『はい……御尤ではございますが、今に嘉兵衞も黑主も此所へ、歸つて來るかと思ひます。今暫く待たせて下さいまし』

『左樣か』

敬之助は、打ツ切棒に云つて、また兩眼を閉ぢ唇を結んで身動きもしない……。

お豐は、抱いてゐるおひろの髮を、ソツと撫でてやりながら、溜息を凝ツと押へるのです。

何故わたしはこの方の前で……お豐らしくテキハキと物が云へないのだ？

待たせて下さいまし……コレが、今の場合のわたしが云ふことなのか？



わたしは、敬之助、おてる、おひろ三人の兄妹のために、力にならうとし、また力になつてこそゐるが、彼等兄妹達から鐚一文は愚か、塵一本、貰はうとしてもゐないわたしぢやないか。

それだのに、敬之助さんは……。

あゝいけないね……。

わたしも愚痴ツぽくなつた……。

お豐は、そんな風に思ひ悩むのだ。さうして結局は敬之助に惹付けられてゐるのだといふ自意識と、遣り場のない溜息に落ちて行くのです。

漸くおひろを膝から下して、蒲團を掛けてやつてから、破れ行燈の燈心を搔き立てようとして、お豐は簪を抜き取つた途端、

『お〻！　歸つて來た……』

思はず聲を出して、裏口をキツと見る。

『ウオツ……ウ、ヽ、』

低く呻るやうな黑主の聲。つゞいて驅け近づく跫音は、犬作ノ嘉兵衞です！

お豐は、土間に下りて裏口の戸を引開ける。黑主はピツタリ坐つて、お豐の顏を見上げるです。

『嘉兵衞！　嘉兵衞さん』とお豐。

『へい！』

と嘉兵衞は近づいて來るが、おてるの姿が



ない！

『おてるさんはッ、おてるさんはどうしたのさ？』

『變な家へ、擔込まれたンです』

『一體、何所へ？』

『橋場の阿波德の寮でござンすよ。阿波屋德右衛門とかの……』

と嘉兵衛は、急いだと見えて呼吸を切つてゐる。

『えッ、寮へ……？』

と驚くお豐よりも、壁にもたれて聞いてゐた敬之助は、我れにもあらず愕然！

『阿波德の寮かッ』

と叫ぶやうに云つたかと見ると、大刀を取るより杖に、無事な右足を蹴つてヨロ〳〵ッと立上つたのです。

この氣配にお豐は振返つて、

『御存じの家なのですかッ』

と敬之助に呼びかける。だが、直ぐ、

『いゝや……知らぬ……知らぬ家だ』

打消すやうに云つて、敬之助はまたドッカリと坐るのでした。

お豐は、何事か一人首肯いて、嘉兵衛に、

『御苦勞だつたね。では、私達はお暇するとせ

うよ』

『へい。そ……それでいゝンでござンすか？』

『さうね。お前さん折角、おてるさんの行方を突止めたのだから、お前さんから樣子を申上げて、それから一緒に歸らうよ』

　とお豐は、俄に冷やかです。あまりに他所々々しい鳴沼敬之助の仕方に向つて、お豐生得持前の負けじ魂が、反抗となつてジリ／＼頭を擡げ始めたのです。

『そ、……さうですか。ぢや、さうしませう。鳴沼樣』

　と嘉兵衞は、上框に手を突いて、

『お妹御おてるさんが掠込まれなすつたのは、お聞きの通り橋場で、阿波徳事阿波屋徳右衞門の寮でございます。では、お臥みなさいまし』

　と云つてしまつたが敬之助は、輕く首肯いたきりで眼を開けようともしないのです。

　お豐は、その樣子を凝ツと見てゐたが、これも無言でクルリと向直つて裏口へ。

『叔母ちやんッ』

『おゝ、おひろちやん！』と振返るお豐！

『叔母ちやん……叔母ちやん……』

　蒲團を刎ねて土間へ飛び下りたおひろは、泣き叫びながらお豐の膝に獅嚙付き、嘉兵衞に飛び付き、黑主の頸ツ玉に抱き付き、ギクリ／＼咽せながら彼方へウロ／＼、此方へウロ／＼氣が狂つたやうに、ぐる／＼舞ひに廻るのです。

『おひろちやん！』

　と、お豐は、おひろを抱き竦める！

『厭よッ、厭だ／＼……姉さんを連れて來てよッ。叔母ちやん！　叔母ちやん……叔母ちやん……』

　泣き叫び、お豐の胸と云はず顏と云はず、小ツちやい拳固を固めて小突き廻はすのです！

『あゝ、いゝよ！　叔母ちやんが、いゝよ……叔母ちやんが……』

　と云ふ中に、お豐は口が利けなくなつて、オロ／＼泣くのです。

『伯父ちやん……犬の伯父ちやん……』

『オイヨ、此所にゐら……』

『あたしを、伯父ちやん……姉さんのゐるとこへ伴れて行つてよ……伴れて行つてよ……』

『ウン……ウム』

　と首肯く中に、嘉兵衞も鼻を詰らせるのです。

『叔母ちやんッ』とおひろ。

『あい』とお豐。

『伯父ちやんッ』

『オイ……』と嘉兵衞。

『歸つちや厭だ！　歸つちや厭だ……黑主も去んぢや厭だ、厭だ……』

　泣きじやくりながら、お豐の胸に取付いておひろは、顏を押しつけるのでした。お豐はいよ／＼力一ぱい抱き締めて、おひ

ろの頰へ、頰を押しつけるのです。
嘉兵衛は涙の眼で、壁のところを見ると、敬之助は先刻のまま、身じろぎもしないでゐるのです！
だが、嘉兵衛は、痩せ削けた敬之助の頰に傳うてゐる一筋の涙を見遁さなかつたのでした。

五

丁度その刻限の阿波德の窯でした。
『若樣』
『うム。なんぢや？』
『お鶴樣に逢ひたいと思召しでございませう。美しいお鶴樣に』
『お鶴か……』
『このお座敷でございましたな。貴方樣とお鶴樣が、お炬燵で、お二人、お睦じう遊んでおいでゝございました』
『あゝ……』
『すると、何所から來たか、怪しい男……あの怪しい勇肌が現はれて、若樣とお鶴樣を攫つて行つたのでございます。若樣は、お覺えでございませう』
『あゝ覺えてゐる』
『あの時、此處をお出になつて、何所へお出でになつたのでございます？』
『うム。俺は穴の中にゐたよ』
さう云つてニヤリ、薄笑ひを浮べたのは、阿波二十五萬三千石蜂須賀侯の落胤だといひ、今は阿波家江戸家老生田辨左衛門の次男となつてゐる甚之助です。
甚之助は、怪しい勇肌に捕へられて以來未だ頭腦の狂ひが癒り切つてゐないと見えて變なことを口走る——そこで保養のためといふことにして、この阿波德の窯に預けられてゐるのです。
それにもう一ツ、思ひ出したやうに『お鶴に逢ひたい！』と云ひ出す。そこで『窯に行つて待つてゐればお鶴が來る』と言宥して生みの母お伊勢の方の清淨庵から、この窯へ移らせるやうにしたのでした。
お相手をしてゐるのは、町醫茂田兼庵で、阿波德に出入してゐる幇間醫者です。
『へえ……若樣が穴の中へお入りになつたので！』
と兼庵、驚き呆れた顏をして見せる。
『穴の中ぢや。穴の中で俺は神樣になつたので、大勢の者が拜みに來た』
『左樣で？』
『穴の口へ、油揚、强飯を持つて來てな。午の年男ぢやとか女だとか、いろ〳〵の願ひ事をして居つたわい』
『成程！』
感に堪へたごとく兼庵答へながら、そこは流石に醫者で『サテは甚之助、何所かの稲荷の狐穴に監禁されてゐたのだな』と見當をば付けて見るのでした。
『お前は、俺の家來ぢやな？』

『はい。御家來兼庵でございます』
『うム。見たことがある！　愛い奴、近う參つたがよい』
『へゝツ。そこで若樣』
『なんぢや？』
『間もなくお鶴樣が……』
『お鶴！　お鶴〳〵……』
『お鶴樣がこゝへお見えでございます』
『ア、お鶴か！　早うこゝへ伴れて來い！　お鶴か……お鶴か……』
　甚之助は、矢庭に立上つたかと見ると、部屋の中をキヨロキヨロ見廻はすのです！
『まア、お靜かに！　此所へお坐りなさいませ！　如何に逢ひたうござりませうとも、殿御の方から焦れてゐては、見ッともなうございます』
『お鶴は、何所にゐる？』
『お待ちなさいませ。私がお伴れして參ります。それまで此所で行儀よく坐つておいでなさいませ！』
　叱り付けられるやうに兼庵に云はれると、甚之助はピッタリ膝に手を置いて坐るのでした。
『では、少時』
と兼庵は、部屋の外に出る。と、そこにゐたのは吹矢ノ淺右衛門だ。
『コレは先生、へゝゝ』
『お前さん、見てゐなすツたのか』
『他所ながら、一寸ね』
『どうです。まるきり犬ですね』
『犬とは？』
『甚之助のことでさ。膝に手を置いて待つてゐるところは、オアツケ……チン〳〵といふところで。へゝゝ』
『なアる……可哀さうに、ひでえ醫者にかけたものだ。はゝゝ



は丶』
『時に道岡三十郎氏は？』
『あちらでチビ〳〵やつてまさ』
『では、拙もお相伴に參りませう。淺右衛門さん、どうです？』
『犬の方は、いゝンですかい』
『女どもに任せて置きませう』
と兼庵が先になり、淺右衛門と二人は廊下を奧へ〳〵這入つて行くのです。
すると、向ふから京好みの手雪洞が二ツ三ツ、衣擦の音をさせて、サラ〳〵、サラ〳〵此方へやつて來るのでした。
『來ましたぜ』と兼庵。
『アレですね』
淺右衛門は、待受けるやうに立停ります。
『見るンですか。お止しなさい。だが、見たいとあれば……あゝさうだ、そこの戸袋のかげから見なさるがよい』
さう兼庵に云はれて、淺右衛門は戸袋に體を寄せて待つてゐる。兼庵は廊下の眞ン中に立つたまゝです。
手雪洞が近づくに伴れて、廊下の闇に浮びあがるやうに見えて來たのは、文金風の高島田に振袖の、化粧ひも美しい紙屑買ひのおてるの姿です！



おてるの兩側には、手雪洞を高く捧げた若い女中が二人。一人は左に手雪洞、右におてるの手を、一人は右に手雪洞、左におてるの手を取つて徐々歩んでゐます。
その背後に一人、これは此家の女中頭お芳で五十婆、これも手雪洞を捧げるやうに照らしながらやつて來るのです。
『やア、皆樣御苦勞で……』

『これは兼庵様』
と二人の女中は立止りました。
『お芳どの、御苦勞で……』
『はい。貴方は、こゝで何をしておいでゝございます?』と
お芳。
『コレは、叱られましたな。はゝゝゝ、若様はお行儀よく待つてゐらるゝ。早くお供をなさるがよろしい』
『はい。參ります』
とお芳が權高に云ふと同時に、二人の女中はおてるを中に、また徐々と歩み出しました。續いてお芳も行過ぎる……。
戸袋のかげから、ソツと出て見送つてゐる淺右衛門。
『ウン……美しいなア』
思はず呻るのです。すると兼庵も、
『可怪しい……異ふ……』と呻る。
『異ふとは、ナニが?』と淺右衛門。
『紙屑買ひの娘で、あの棲外れはない……よい育の娘か知ら……?』
兼庵は稼業柄上流の家庭も知つてゐれば下流の家庭もよく知つてゐる。そこで、今伴れられて行つたおてるの足もと、裾さばきに、今でこそ紙屑買ひをしてゐるが嘗つては振袖を着てゐた娘、金欄の帶を胸高に締めたことのある娘!
兼庵は、さう見て取つたのです。
『なるほど、さうかね……』
と淺右衛門は、合點のいかない顏をして、尚もおてる達の背後姿を見送つてゐます。
女中頭のお芳は、甚之助が待つてゐる離座敷の外まで來ると、おてる達を待たせて置いて、先づ自分で部屋の內に這入りました。さうして、ピツタリ手を突いて、
『申上げまする。お鶴様久々にて、若殿様の御機嫌伺ひに參られましてござりまする』
いと恭しく、さういふのです。
『あゝ……待つてゐた! 俺は待ち兼ねたぞ……早うお鶴に逢はしてくれ』
甚之助は、興奮して全身をワナ〳〵震はせるのです!
『お鶴様を、こちらへ!』
と落着き拂つたお芳の呼び聲に、二人の女中は心得て、おてるを部屋の內へ扶け入れるのでした。
と見て、堪へ兼ねたか、甚之助は立上つたかと見ると今、部屋へ一足入つて來たおてるの兩手を摑んでグイ〳〵引寄せるのです!
放心同様のおてるは、引かれてヨロヨロ、甚之助の胸に倒れかゝる!
『おゝ! お鶴……』
甚之助は、ぐツとおてるの體を抱き寄せました。
お芳は、その様子を見てゐたが、二人の女中に目配せをすると、そのまゝ一緒に部屋を出て行くのでした。(つゞく)

キングポスト

□次號の大特輯

『鯉幟りこゝにも日本男兒あり』五月の空は晴れて、麥の香りは高い。讀者諸君、嘸かし御健勝の御事と御祝ひ申上ます。編輯局一同、益ゝ意氣軒昂、氣焔虹の如く大活動をつゞけて居ります。本號の大呼物『容易に聞かれぬ面白い話、滅多にない珍らしい話』については全く大苦心大努力の結果、曰く『猛獸狩』曰く『新徴組』曰く『白虎隊』曰く『眞劍勝負』等々…粒選りの特種を滿天下に發表することの出來たのは、眞に欣快に堪へません。何卒御知人方にも廣く御吹聽の程御願ひ申上ます。來月の特輯は『人物改造實際談』――今や同人打揃ひ、此大計畫に向つて驀地に奮闘中であります。

□文壇・畫壇



土師清二氏の夫人、令孃の女學校入學試驗準備に就いて切りに心配してゐられるのに、氏は至つて平氣。

『いや、餘り子供に無理な勉強させるのは考へものだヨ』

『でも、そんな呑ん氣なこと仰有つてゐらしちや、入學出來ませんヨ。森下さん(雨村氏)のお孃さんなんか、級で一番なのに毎晩十二時までも勉強してゐらつしやるんですつテ。少しは孃やに言ひ聞かせて下さらないと…』

と、そこへ當の令孃、丹精こめた自作の小説を持つて來て、

『お父さん、此の小説はどう? 巧く書けたつもりヨ』

夫人の心配に引きかへ、氏は目を細くして大喜び、

『うん、お前は矢張りお父さんの子だ。恐らく小説なら受驗者中第一番だらう…』

氏の子煩惱さがよく判る。

○



帝展審査員の蔦谷龍岬氏は日本畫壇の驍將であると同時に、斗酒も尙ほ辭せ[illegible]いふ酒豪。飮み飽きれば、所かまはず着の着のまゝゴロ寢するといつた磊落さ。そして眼が醒めるとタクシーを乘り廻して醉を醒ますといふ奧の手が出る。大酒だけに醉ひを醒ますにも大掛りである。

さても或る晩、例によつて丑滿時、タクシーを驅つて市中を縱横無盡。とう〳〵非常警戒のお巡りさんにストップを命ぜられた。

『何所へ今頃行くんだネ。君は何誰です?』

『上野の蔦谷です』

「キング」を讀んで得た利益

□老母の發奮

私はキングを創刊號から愛讀してゐますが此の愛讀によつて最も記念とすべきことが出來たのであります。私の郷里は岡山でありますが、職務の關係上當地に轉任して來て居ります。私には今年七十七歳になる老母がありますが、老人の通弊として郷里を動きたくないと云ひますので、女學校に通うてゐる娘と二人を岡山に殘して來たのです。老母は目に一丁字もないのに小説などを讀んで貰つて、聞くことを何より樂しみにして居りました。それで私等がキングを讀んでゐると、傍に來て熱心に聞くのが常でありましたが、私等が當地に轉任して來た爲讀み役が娘一人になつてしまひました。併し娘は學科の復習もあるので十分に讀んで聞かすこと

『蔦屋って！　池の端の料理屋ですか？』
『いや蔦谷だヨ』
『だから、蔦屋といふ料理屋かと聞いてゐるんです。ひどく酔つてるやうだネ』
『僕は龍岬だヨ、畫家の蔦谷龍岬だヨ』
『はア……蔦谷先生ですか……今頃また何方へ……？』
『一寸散歩に……』
『散歩に？……それにしても困りますネ。もう曉方の三時ですよ……』
『いや、御尤も〳〵——運轉手君廻れ右ッ！』

○



もう一つ畫壇の噂さ——。
女流畫壇に令名高き、榊原縫子女史のあることは諸賢も大方御存じの通り。この閨秀畫家を取り卷いて、若い青年畫家達の間では「高嶺の花」と稱してゐた。
蓋し手折つては



味である。それをこつそり手折つてさらつた不敵者が出た。
不屆千萬！　と、一同躍氣になつて探して見れば、これはしたり……その犯人は吉村忠夫畫伯
吉村畫伯は毎々本誌でお馴染の筈。その昔美術學校のスクール・ボーイとなつて苦學した人、天賦の畫才はその努力と相俟つて、遂に昨秋の帝展には光榮ある推薦を受けた、最も將來を嘱目されてゐる新進中の逸足である。
『吉村かい……ウンあれなら苦情が言へない、喜んで吉村に縫子さんを讓らうや』で、一同手を揃へて、シャン〳〵〳〵。

○



落語好きのU記者、ブラリ日曜日の晩を寄席へ出掛けた。
不圖、見れば直ぐ二三間前に美人と肩を並べ

ある。
はて——見たやうなシャンだが……と覗いて見れば、何んぞはからん、次號より本誌に掲載する名作『あゝ忠犬よ、辨慶よ』執筆者小島政二郎氏夫妻だ。U記者挨拶をしようとは思つたが、滿員の人中、その晩は挨拶拔きでコッソリ歸つた。——翌る日、不圖出逢つたので、早速一本參らせるつもりで、昨夜のいとも親愛なりし樣を揶揄したものだ。と小島氏、
『人の惡い男だなア。それならさうと聲かけてくれゝばよいに……實はあれから○○屋へ天ぷら食べに行つたんだヨ。あそこの天ぷらは素敵に美味い。一緒に來ればよかつたのに……』とばかり、さんざ羨ましがらせを聞かされたものだ。何がさて、天ぷらが大好物のU記者だつたから堪らなかつた。遂々やり切れなくなり、その足で早速○○屋へ出掛けて思はぬ散財をして仕舞つた。——とは、見事返り討ちされたかたち。

老母に『これは平假名をさへ覺えたら讀める』と云ひますと、非常に喜びキング讀みたさに、早速平假名の手本を娘に書いて貰つて習ひ初めたのです。七十の初手習ひで仲々覺えませんでしたが、それでも一年程ですつかり平假名を覺えてしまつたのであります。今では假名を拾つてキングも讀み、こ



私等と假名で立派に通信が出來るやうになつたのであります。私は何にものにも替へがたい記念であると思ひますと嬉しくてなりません。それと同時に努力の偉大さを老母が現實に見せて呉れましたことを、深く感謝せずにはゐられません。

香川縣善通寺町
佐坂　邦助

『健全なる歌』當選者發表

曩に小社が、社會風教刷新の目的を以て『健全なる歌』を募るや、滿天下の熱烈なる御賛同を得、應募歌篇實に十七萬九千二百五十六章に達し、名什玉篇尠からず、聖代未曾有の大盛觀を呈した。直ちに社内に詮衡委員會を設け、滿二ケ月間に亙つて嚴選に嚴選を加へた結果、選出優秀歌三百四十篇を無記名印刷に付し、左記諸先生の嚴密なる御選評を乞ひ、茲に漸く最後の決定を見るに至つた。尚當選歌詞は或は之を作曲して小社發行の各雜誌に發表し、或は之をレコードに吹き込み、或は佳篇全部を一括して近く單行本にする等愈ゝ淨歌大運動の實行を期する計畫である。選者諸先生並應募各位の御助力を感謝し更に今後の運動に御聲援あらんことを切願する。

選者

子爵 小笠原長生
貴族院議員 永田秀次郎
文學博士 中村孝也
作曲家 中山晋平
詩人 野口雨情
作曲家 山田耕作
詩人 西條八十
詩人 北原白秋
作曲家 弘田龍太郎
文部省社會教育局長 關屋龍吉
（イロハ順）

一等 賞金貳百圓宛贈呈（五名）

天皇讃仰　愛知縣碧海郡矢作町　結城　勳
日本娘の歌　高知縣香美郡岸本町　月見長平
海外發展歌　宮崎市橘通三 文華堂内　山根民三郎
國民歌　東京市外瀧野川町　川井松榮
田園歌　京都市新町市營住宅　落久保文郎

二等 賞金壹百圓宛贈呈（十名）

福島縣信夫郡平野村字明神町　新村秀雄
福岡縣浮羽郡福富村　西見哲代
東京市外池袋丸山一、六〇七　豐田　穰
福岡縣門司市港町三丁目　幸坂佳都夫
北海道上川郡多[illegible]
東京府下野方町下鷺宮九〇三　君塚紫樓
香川縣琴平町　植松苔石
兵庫縣氷上郡幸世村方町　田邊惠造
岡山縣御津郡字[illegible]小學校　村野修平

三等　賞金貳拾圓宛贈呈（五十名）

兵庫　矢部清三
東京　長谷見保
廣島　神原操
岐阜　江崎武雄
愛知　久保清
佐賀　西東十四春
富山　大松文藏
東京　七田武美
長野　藤田富雄
奈良　西尾芳齋
富山　平井源作
栃木　神田松雨
熊本　森坂清輝
青森　齋藤清一
東京　鹽谷紀美代
東京　戸邊吉太郎
東京　島田芳文
島根　大原健三郎
山口　高橋一二
千葉　市原三郎
茨城　岡實
廣島　小島悟
東京　戸邊吉太郎
大阪　藤村英隆
岡山　延原杉野

愛知　山川武夫
東京　横澤千秋
朝鮮　末松芳子
旅順　小西洋造
北海道　青山晃明
高知　筒井秀子
東京　日下部ふじ
廣島　齋木鷹治
栃木　戸井田四郎
靜岡　山本英雄
岡山　松本八百三
靜岡　田中米子
愛媛　天野一忠
大阪　中村佐香枝
鳥取　北方麗二
群馬　橋本葎村
東京　山中春夫
山梨　高野まつ枝
茨城　玉野きよし
福岡　甲山一郎
東京　戸田良助
石川　山本重行
東京　東日出男
長野　花野春風
住所乞御通知　五十嵐年雄

四等　賞金五圓宛贈呈（二百名）

東京　廣瀬鋼一
靜岡　杉村喜代次
滋賀　水上貞石
岡山　祇園流石

大分　堀定
秋田　須藤高俊
大分　重松楚二
朝鮮　上西一馬

靜岡　飛田清朗
岐阜　古里孝吉
長野　西山庚之進
千葉　大野均五郎

島根　安豆[illegible]男
長崎　森[illegible]浪影
熊本　宿小川照子
滋賀　西條三千
京都　小林弘
廣島　岡井悦始
岡山　津島恒一郎
東京　徳田正
廣島　篠田春
兵庫　塙美津子
岩手　伊藤吉[illegible]
香川　井上秀子
青森　松山かゞえ
東京　工藤榮愁
京都　三浦みつ子
靜岡　若杉香子
石川　中村建仁
札幌　松本明
朝鮮　坂井正二郎
住所ケ通知　中岡鉛男
青島　伊東茂
千葉　林光雄
東京　林陽太郎
愛媛　槇本光子
鳥取　加藤齢明
宮城　中村忠躬
東京　内石天羽子
福島　水島洋
東京　小栗美和子
和歌山　山本曾太郎
鳥取　徳安浩太郎
東京　土居郁郎
東京　村川重則
奈良　淺野源太郎
臺北　竹下津芳
栃木　藤澤喜一
東京　移川一三
岡山　松本一太
栃木　神田政子
愛媛　柏原三吾
布哇　三隅夕陽丘
青森　長尾良助
北海道　本田そのえ

[illegible]　河内男夫
岡山　松本一太
神奈川　高井宮
茨城　佐久登美子
東京　横澤千秋
函館　瀬戸春江
東京　今井得治
東京　大島清正
大阪　高田一草
東京　川口綾水
東京　横澤千秋
富山　平井源作
大分　川野庄吉
茨城　後藤利男
愛媛　村上孝德
千葉　渡邊榮
東京　吉村次郎
東京　鈴木夕路
神戸　河合豐和
北海道　中田猛夫
札幌　山岸正治
樺太　近藤敏三郎
大阪　平野明
小樽　佐々木健次
青島　廣瀬穎治
山口　澤村一生
高知　畠中順一
大分　松正作
埼玉　中川金吾
茨城　後藤良一
東京　恩田孝一
東京　生駒秋陵
東京　夏目嘉一
宮城　芒田三郎
朝鮮　森安笑樂
神奈川　畑中正治
吳　伊濱孝美水
靜岡　森崎次郎
千葉　原田草夢
門司　平田仁
新潟　小堺利作
茨城　柳生源一
東京　久保田英穗

[illegible]　濱邊喜鳥惠
鹿兒島　樺山和
京都　高木進
滋賀　岸本千代子
廣島　遠藤佐吉
福岡　森高浴香
北海道　柴田溪州
神奈川　畑中正洽
八王子　恩田霞陽
福島　柳沼竹次
八幡　渡邊とらのゑ
富山　平井源作
松山　松田一忠
岐阜　沼田哀花
兵庫　森脇しけい
大阪　楠草生
兵庫　春川和風
東京　神庭龜市
大阪　西崎美津留
千葉　子安芳水
新潟　石原榮作
朝鮮　西山喜壽
岐阜　大橋榮の家
群馬　坂田半醉
京都　石橋末吉
香川　岡崎太郎
青森　二階堂正壽
鹿兒島　小山郁夫
千葉　村上光
宮城　熊谷正志
東京　須貝幸子
福岡　織山晴月
甲府　奥水政一
千葉　廣瀬豐二
東京　大島清正
埼玉　小田茂
東京　蛯原八重十
熊本　森坂清輝
愛媛　泉一則
東京　島田芳文
千葉　寳瀬豐二
愛知　超人生
長野　山寺茂

[illegible]　石田忠三
[illegible]　[illegible]村ろしふ
東京　東日出男
[illegible]　水島洋
茨城　關燕三
[illegible]　蒲見武次郎
住所ケ通知　關屋妙子
栃木　新井若水
奉天　竹舜幸一
埼玉　島村小峯
岡山　横山二七春
長崎　渡邊篤
徳島　山根ひで緒
廣島　柳原昇一
東京　上瀬平文
東京　前島重男
東京　川口綾水
東京　遠山霞一
[illegible]井　林道子
旅順　小西洋造
東京　妃山重し
長崎　松本爾松
岐阜　市原義一
兵庫　松本青路
福岡　赤坂雪子
東京　永瀬英一
高松　堤のほる
鹿兒島　森田清隆
福岡　寺部造功
京都　鳥山春雄

[illegible]　瀧田信一
東京　宮崎白[illegible]
高松　巽朱美
廣島　眞船德治
新潟　小西謙吾
熊本　山内しげる
神奈川　井伊汎
京都　中井伊一
京都　永原興
新潟　石澤司
徳島　山根秀夫
兵庫　林小路寶房
神戸　田中顯治
住所ケ通知　香村亮
松江　栗田不[illegible]夫
東京　海老澤久太郎
兵庫　齋藤子郎
廣島　吉山吉夫
栃木　梶戸俊夫
福島　平田正志
群馬　井元卯吉
靜岡　角田忠七郎
三重　鈴木友吉
山口　竹内芳太
大阪　小谷燕
千葉　桑川常太郎
南洋　志村れつ子
千葉　水木悦
兵庫　井口靜子

五等　壹圓圖書券一枚宛贈呈（壹千名）

東京府

吉田丞
川久保侯
鈴木啓子
林明子
小峰勉
ふじの丘
菜間穿作
小森耀
豐田能太郎

佐藤蝶子
小西敏夫
櫻井房之助
出口守
武田酒風
鵜原和太郎
鈴木孝
土本春江
眞湖雄
横手大彦

成澤芳仙
福田春江
加納清五郎
佐高勇
戸田良助
森郁子
來南海郎
川久保侯
白島筏山
丸山千代子

堀口守　佐藤光晴　鈴木竹榮　田中久四郎　木村泉三　池原啓治　西條秋月　今村義光　藤井隆　吉田孝　栗原玲郎　蜷原八重子　向井親星　戸田良助　水口寶一　福岡貞治　あしまろ　荒川貞　石川いさ夢　塚原勇　木村操　金本實人　吉田玄三郎　狩堂藤吉　益子一彦　竹内しげ子　新田正平　蜷原八重子　君塚梨樓　名村眞喜　大庭九十九　壽山人　植村久三郎　島村てる　内山玉治　鈴木竹紫　石田忠三　及川吉藏　松崎武　常岡農夫峰　瀬尾登作　玉川尾與志　加藤寛吾

久保田千秋　柳井凡麟　翁川君子　石川章　西野禮一　佐高勇　田中重三　羽山正治　川田正二　關衛　永田正　加藤貞子　磯田濤譽　吉田三郎　松下豐治　若月千代子　宮川三榮　藤咲みち子　一寸木智惠　水上祝　堀口守　花形晉平　伊藤しげる　移川一三　塚田祐次　岩佐善行　大橋信藏　河東直　三好香　佐藤草一　古田慈夫　山口澄作　草壁長郎　塚原三重　山口嘉作　安西長圃　小森鑑男　月丘三子　椿田てい子　泥谷鶯人　森山義吾　高神信守　五十嵐益枝

近藤貞夫　須貝武雄　山田敏夫　岩間男　千樹路　弘田其太　熊崎風々子　若尾彌生子　高沖守　田村吉承　杉野美穂子　小林正一　武田一浪　窪川靜林莊　以後崎坐禪　山下拾松　齋藤きくえ　草薙三郎　西村眞二郎　長島章帆　水戸岩夫　長谷川太郎　小島延子　柏沼縫之助　山脇滋樹　池田永年　横堀英位　濱川濤信　瀧口英之助　近藤貞夫　明井殘紅　五百部豐米子　關小舟　花形晉平　八木秋江　臼井元嗣　宮路高次　小松平一　小森盛　田村豐太郎　光葉　神橋文男　後藤みどり

戸上英彦　宮崎白雨　**京都府**　南灯一　平井慈歩　岳本與一　山本史朗　佐藤長承郎　小中公正　松尾雅子　山口次郎　古池岡衛　井澤大千代　福井半眠　三好三良　清水光風　清水光一郎　小林連　辰田信　淺田政子　辻秋要　大村猪之助　林安孝　**大阪府**　井上實　奥野次夫　井口靜子　市上廣一　森原卓美　菊岡榮瑤　梅田正治　山口英穗　岩城源一郎　安藤南風　杉本良一　隈英夫　杉岡ふゆの　岡澤香月　田井太郎　三木谷あい　井上村賢　小塚利夫　戸田伊三郎

楠草生　福岡豐　柳蕎木　村上信一　隈英夫　柳落木　遠藤桐木澤　田井春太郎　中尾善彦　岩本重太郎　藤田壽夫　田中岩舟　源好雨　田中庄太郎　田中晩翠　東アヤ子　住充一路　杉本龜次郎　河瀬豐三郎　岩田志子　山田益子　**神奈川縣**　瀬川なるみ　長谷部信子　千種實　井伊汎　齋藤正造　臼井直　西村京美子　高橋通浩　大竹仙松　川島崇由　井伊汎　藤田一郎　谷智惠子　高井宮　小澤久三　田中黄波　高橋愛　藤木子男　間雄婁衛　瀬川る[illegible]　渡邊な[illegible]

中田陸三　和泉濟　吉田謙二　佐々木匡　吉田謙二　河合澄世　内野太郎　鈴木慶正治　眞殿八重子　高橋義純　旗中源治　大木玄祥　眞殿八重子　**靜岡縣**　松浦安顯　長谷川照治　富永武雄　鈴木三司　勝山喜郎　原田芳宏　山本綾秋　築地花子　望月子　高木一峰　堂森實藏　勝又新作　原田松太郎　木下榮再　米山義太郎　飛田浩朗　岩ケ谷林次　齋井儀十　後藤伊之助　高村喜　伊藤愛洪　大島一郎　田中濟二　小松政吉　高橋顯次　杉村喜代次　伊藤哲郎　佐野正二　[illegible]陀一

内山幸次郎　櫻井夜詩子　津川延江　杉浦綠雨　野島角男　小鹽正榮　眞田海兒　永田半吉　後藤伊之助　鈴木正路　吉野宣吉　堂森實藏　鈴木正路　**山梨縣**　藤原政次　林貞夫　小林貞宜　森下良雄　加藤辰雄　窪田一彦　蘆原美臣　望月敏枝　**千葉縣**　岩澤さだ子　志田博　岩澤恒二　御園芳松　岩本高次　保坂高知　平林たか子　澁谷靜江　松崎幸子　金井喜一　鈴木幸雄　田中清二　岩澤恒二　關良策　積田八郎　桑田敬　佐久間生人　相用まさ　森安子

中村鉄　佐久間千代吉　宮野富三　野平副在門　渡邊榮　伊藤善一郎　岩本高次　仁木松雄　原田草夢　稲子中　水木鋭　近藤とよ　水木鋭　野口順子　秋山舜夫　御子神利治　小橋欣一　間立業男　今井尚幸　藤井博夫　大竹省吾　鈴木秀一　森川龜德　荒井治郎　食野房太郎　大川昌中　佐久間千代子　須貝秀郎　森せき　高橋あや子　**茨城縣**　梅村歌風　出地康　石井淡流　龜川茂子　栗山親之　飛田濟　吉田茂　印山金之進　石川一二　雨谷ひろし　高橋櫻花　木村信吉

土肥幹三　高橋奇樂人　金澤一二三　佐川滿壽莊　大木ゲン　今泉一利　鈴木薄明　横張元一郎　**栃木縣**　北村英治　室井進　濱田ハナ　篠原敏子　吉田友三　石井福藏　稲木さき　沼尾楠二　日下準　谷中清美　野澤源吾　萩原英一　相谿泉　福田傳吉　渡邊傳六　石島大助　新井啓　柏美彥　安土健介　渡邊傳六　小林絹子　鈴木芳郎　桑川眞一　津久井詮三　田部井碎波　**群馬縣**　齋藤彰　中島博子　絹川三郎　五十嵐雅夫　大手昇　吉田無人　竹內風郁子　上田林秀治

鈴木重好　竹腰照子　竹腰松江　高橋璣藏　川端門郎　横瀬眞太郎　小野吉郎　劔持雅五郎　高橋凡介　山田武濟　關口森平　**埼玉縣**　關根一男　野原喜一　栗生田とら　三澤源橋　大越はるえ　戸張仲　米山榮夫　野原喜一　齋藤増雄　蛭間龍次郎　福島安五郎　蛭間龍次郎　松永憲一　平野萬平　福島安五郎　秋原不捨　新井たか子　鳥飼正次　新井たか子　**長野縣**　宮原茂　高木清　富久代荒星　深山小雨　鄕原いくよ　濱富治　西山庚之進　田中寛太　高波晉江　馬場壽雄　金井泰

宮尾俊男　和佐田鈍刀　清水虎三　宮本松雄　小林治三郎　御所窪靜々　茅野一穗　湖奥津福督　笠原博夫　小田切早尚　瀧澤寛　丸山衣都路　熊野正巳　野明爲義　師川敏之　**新潟縣**　外山小青　永井豐平　近藤吐愁　中島基　眞島義一　柏原政雄　金子寛一　關谷惣平　吉原照眞　小柳廣藏　本間伊八　横田恭平　渡邊喜一郎　外川東福　下條一路　阿部留松　本間伊八　平塚寨子　藤井二作　小川秋水　若林太市　佐野順平　近藤吐愁　大矢清一　桑山岡萬　藤井達明　**山形縣**

鈴木健太郎　井上孝一　村山研究會　渡邊義市　鈴木彌々衛　阿部文彦　小川留三郎　**秋田縣**　工藤忠　村上正吉　田牧精一郎　柳谷敏夫　吉田久一郎　柿崎正策　福原乙吉　佐々猪造　德永儀誠　佐々木三郎　由利生　大坪秀吉　須藤高俊　**青森縣**　和島凡平　盛田秀子　小谷新一郎　木村幹雄　大谷アイ　小室穗月　工藤小太郎　道合鐵藏　松山かづえ　松山かづえ　**岩手縣**　豐田勝介　大島正衛　佐藤伊藏　小原喜一　伊藤淳一　安倍清雄　佐藤草雨　佐藤草雨　**宮城縣**　岡田十存

田草武翁久山　大渡國赤小川日三遠安井川阿白神金長小高安　菊一鹽松伊兒兒內芒堀佐齋正遠菅
家雄田山保川愛谷邊分澤泉原下浦藤彥上原部川長澤谷泉梨齋福地條田井藤玉玉海田田々藤木藤原
綱　喜　　　知　　　　　　部　　ば　　倉義川　九　島　　　　　　文文　　　木　　　淸
早健代周　正縣要周　市虎幽廣藤時邦ん團　貞タ三周潤十宗縣正秀竹義勝三三大三樂新重隆泰次
苗三松三濟子　吉藏和郎雄谷吉吉雄雄か谷傳一キ郎治次郎司　二夫翁武雄郎郎助郎山二郎夫子一郎

橋牛細谷　山水關加鈴小岡松山岩杉牛金塚鈴久水松岸愛安鈴秋室山超渡田近北浦村河中河小土林
本場川川三川谷本藤木川田田川槻浦田田本木保谷村　葉藤木山賀川　邊邊藤田口松谷村合出田
　不　重　　ま　　　　　　　　　　　　　　　芽　　　　　　　　　シ市　　　千
一二逸嘉縣武寸秋さ　文　德作三愼綾誠正　　淸秋時沙　泰聖好壤　恒國貞ズ之花一爲代末默秀
郎太夫一　夫鵬美子勇治貢次月江三香一一長淸輝生一夫豫三行誠兒人治照一へ進咲路又子義村雄

鵜早森太江小牧龜沖　永阪安古奥藤渡渡平朝　向小佐岩田上鈴瀧山楠岡和細西鷲河平小秋鈴希水
飼川田田崎栗野山本岐長本田家　本邊邊畠田奈林淵々橋岡野本本本山崎歌川山見邊塚山山木　谷
　三　た　　み阜久千　　　　　　　菊良　木喜　　作　會　丁山　久
貞　千宗け甘金靜ち縣治代千秋　秀次次曉治縣原　綱宮武由米哀太和宇縣逸兵幸春喜菊定邦縣義
子敏三年詩哉次泉子　郎子秋意佐夫郎郎村郎　良洗則一夫弘三蓮郎雄路　夫衞三吉八朗義彥滿正

今足　縣古瀨森石山廣大藤野高金石　上野山宮茶森山松　中高大中久須澤金佐塚山河　岡大森川
村利福見館島本田下田松城村橋井原富村澤岡本山影先本石川谷森西野川田澤藤本田合滋田橋川島
　井　　美ま　淸　　な山　　季　　　川　　田　　シ又治　　　賀　　　栄
　松縣躬正曉登粂す和文一近虎す乙縣嘉喜倫代幸　淸明縣勝哲鶴　房ゲ治三要政文貞縣治の保政
直生　行孝星里直い吉藏郎世雄子巳　一好三子一漣一夫　輔郎子弘枝子郎郎助男夫乘　夫家夫彥

大石松阪上森濱岡大丘高岸細　船林岩河松梶岡佐鈴　福貫竹川栗加松秦飯神森後石並朝上伊
前原原中田川田谷西　木　田兵川　崎本本川　藤齋島鄉嶋內上田藤田　國田脇藤飛河日原藤島
　　　ゑ　政　倭　治廣庫　　須　　田　　取啓　　不　　　　八　ア　　　根
雅栖直紅つ和二寸文夢太太靜縣政和勝喜俱實　德喬縣次　昭惠爾守　康繁天郎百サ君德薩忠縣
俊史貫潮子風郎花子雄郎郎夫　雄夫次三範路人堯智　郎令二司夫子芳信一樂治次代惠市子三

皆原小出沂藤桑皆　三横宮森三橋眞赤金白白三横小乘大中横世　矢山上細本伊青小世小大松佐中
本田田廣藤井田本廣宅山田本木本鍋木光根根宅山谷金杉山山良岡部元杉見間藤山西　路前原々澤
　與　　新島二　　　　一　　　二　　　二山　　　　　　庄　賀　　意木喜
柒夕太榮淸稱二春縣治七千恒惟壽正優念幸正艶七　米正春七文縣淸善　修宮淸之淸　英雅智淸久
惣エ郎二秀一郎惣　郎春水太永枝雄子子雄壽子春啓造直子春彥　三司一治雄學助作喬文俊露治雄

同高豐同眞眞荒　澤金吉重有山松非福宮定細岡石村澤　松木諏馬西藤石馬田奥田池宮安藤松宗兒
　城田　部部川香村山田枝本縣崎有江村名田田元田村山浦村澤場原原川場中田中田本保澤本田玉
　　　　川　ひ　丞　　　　　　富　　　口　　　　　　　　　　文
　正穎　六六淸縣一ろ芳善太正恒道ト新松勝美富元一縣貞正　翠義地與翠唯と靜好安み狂　可
人矩一人白白兒　生し介人郎文彥人モ一夫治子造彥生　一之稔實惠册一雲登め子子吉ゑ花毅力外

日香原平鄉中長直萬楠山武久黑櫻　三高首小白柏松黑手二　坂　畠河京岡浦山高　中高楨山綿堀
野川　田原垣谷村田葉內田藤木井福浦岡藤松石原前瀨島宮愛田德中添野　原崎野高山橋松下家金
　　　　川　　　摩　　　　　　岡シ淸み　　喜　媛島　　　　　知
益政吉　睦廣　數良ゆ弘幸　松菅縣哲ズ次の好三同代照貞縣理縣順賢　　正　耕縣額義　誠喬數
巳市郎仁子太壽夫助吉峰一勇三野　也エ郎る葉喬治平一雄　一　一治實人德芳人　繁八晃一一雄

小宇古中梁池中山松長　岬比三森井宮木　小立二杉柴藤　深小首吉河武金川小松武土都田更橋松
佐野屋島瀨江山田永井長白良苫野田本本大田木宮松田井宮見泉藤永江田子江林井田居地口川本本
し　　　　　津　　崎侃田ひ有　　分　　　　　崎　　　　春　哲　　　敏
げ龍正周義　シ奈　幹縣之鐵さ健杜鐵文縣具迪泰千淸美縣卓風茄友之幸之吉年　太增德　直　武
子磨郞錄一篤グ王莞子　介太郎か次史男世　城雄忠秋一惠　司陽造子助一助樹子勇郎雄人榮也勇市

本笹増笠　德前鹿楠川佐　増村今永永森岡杉井上森古木深増守稲村守坂淺宮光米美筑泉　春西近
田島田島北田田兒本崎々佐田田村山田坂　山本田坂川村水田永井田永部利內田澤濃紫　熊島岡藤
　　英海　　　島　健木賀　瑳つ　美　　　健　　　　岡　　　　　八此　部　　本
そ涵信三道　重縣安三紺縣　次る誠代淸　武能太淸道西志　利正　利彥伸ル農丈　岳　縣浪水益
え弘一郎　優行　治郎子　惠郎子二子輝人夫磨郎輝一彥子惠纖卓勻纖太一ヨ夫夫淳川磨　影朗雄

佐三　石栗林佐竹林　佐中源井阿歌井龜大梁末中千松中田岩小金伊丸後港中金上平山佐樺高池前
藤宅樺村原淸多ド　臺藤井新澤部野澤山庭田永山葉本田村城野子藤茂澤　田津仲　內藤島橋田田
利　　　　　　淸　　　　　　三　　　　　曉　　　　寺　　　　嘉　　藤常　　　今
右俊太竹貞　重津灣吉淸義健政十健　壽政忠透明　猛康定新安敎　重由猛米五次高信羽朝滿伸
衞藏　母治龍茂芳龍　哉一典水雄太水叶峰燚義旦史明夫吉二一一間淸雄美夫作郎郎松一衣夫穗代

小　中　野野西寺高松近卿岡和國高和　今森市横造田藤塚二江田入安　山佐
早北原壘上上浦島橋浦藤木　田廣森田支泉安來山化淵永崎宮口淵杉藤觀口藤
川　　　　　鐵　さ　　　　　　　　　　　　　た　　源　　一
夢米S國珪鈴東之　よ正林　　久　那吉笑壽春の茂星か圭文茂次善縣之喜
路　N　子子裕助傳子明一人茂博雄茂　秀粲吉夫子尊花子三夫尊郎紀　助逸

三萬圓懸賞當選者發表

解答　獅子又は虎





應募總數百五十三万五千五百二十六の中正解者數は百四十六万八千二十八ありました。嚴正なる抽籤の結果左記の方々を第二回の當選者と決定いたしました。

特等（西川夜具蒲團）十名

兵庫縣西宮市　磯尾妙子
東京府下目黑町　樋口博而
和歌山市岡山町　西山磐
盛岡市加賀町　遠藤たま
福岡市鋤島新道　金子ヨシヱ
千葉縣神崎町　石橋敏郎
德島市佐古　佐野玉枝
旭川市宮下通　松本成子
埼玉縣熊谷町　小田富子
鹿兒島市高麗町　久保宮子

特等（ナポレオン蓄音器）十名

香川縣高松市　中條晴夫
愛媛縣周桑郡　飯尾秀三郎
大阪市東區島町　宇野房子
函館市湯の川通　松座龜
新潟縣三島郡脇野町　小林利介
豐橋市花田町　金田春野
兵庫縣加古郡加古川　橋本まさ子
大阪市西成區千本通　吉田秀穂
福島縣若松市甲賀町　森川田鶴子
東京市小石川區表町　伊東正雄

特等（富士自轉車）十名

東京市本郷區田町　廣田稔
京都市蛸藥師通　洲崎鐵太郎
秋田市茶町　小坂多一郎
神奈川縣川崎南河原　佐々木康孝
朝鮮京城若草町　石川英夫
甲府市横近習町　田中竹三
群馬縣佐波郡伊勢崎　增子正憲
靜岡市新通　市川浩義
大阪市天王寺區大道　岩田一
八王子市寺町　森住伊三雄

特等（十八金側腕時計）十名

樺太野田町西一條　宇佐美粂一
臺北州濠東郡頭東街　張阿德
富山縣西礪波郡福岡　中田勝馬
奈良縣北葛城郡高田　乾敏男
島根縣能義郡安來町　飯田季正
鳥取市茶町　三澤定雄
高知縣高岡郡須崎町　池川馬吉
佐賀縣佐賀郡新北村　糸山貞次
大分縣北海部郡佐賀關町　松海鐵夫
南滿洲鞍山會羽町　朝倉宏

一等（ブドウ印セル地）廿五名

埼玉縣北葛飾上高野　熊倉幸子
靜岡市東草深町　長谷部慰子
福岡縣久留米市梅滿　笠初子
岩手下閉伊郡茂市村　野崎トモ子
栃木縣足尾町　永瀨ツヤ
高知市田淵　坂本正子
大分縣直入郡城原村　茅野達子
松江市伊勢宮町　岩佐喜久子
岡山市下出石町　佐々木幸子
新潟縣北蒲原郡水原　佐藤富美枝
豐橋市東八町　山田房子
京都市梅小路坊城東入ル　猪村弘子
群馬縣新田郡綿打村　北爪ツヤ子
福岡縣三瀦郡大川町　石橋ミヨノ
廣島縣世羅郡東大田　西川春子
神奈川縣鎌倉郡川口　五島田鶴
佐賀縣藤津郡吉田村　畑瀨ハル
名古屋市東區千種町　大原正一
樺太泊居町末廣町　本田トク
東京市京橋區築地　細野智代子
東京市小石川竹早町　西村すみ子
大阪府豐能郡箕面村　谷口和子
北海道釧路茂尻矢町　茅野弘子
三重縣員辨郡石榑村　伊藤つな
東京市赤坂區傳馬町　松井峯子

一等（電氣應用模型電車）廿名

山梨縣南巨摩郡身延　林保夫
鳥取市東町　木村敏郎
鹿兒島市山之口町　中村久喜
宮崎縣都城市藤原町　勝目とみゑ
廣島縣福山市櫻町　篠崎勝吉
大阪市天王寺區上汐　辻阪通弘
東京市外杉並町馬橋　奥秋保雄
札幌市南二條　片山幸一
滋賀縣阪田郡六莊村　安村三治郎
山形縣北村山郡大久保村　田代安太郎
橫濱市中區中村町　小林正次

愛知縣[illegible]　齋藤[illegible]一
秋田縣仙北郡南楢岡　伊藤雄夫
岩手縣黑澤尻町新殿　赤平登
横濱市鶴見區下町　林田元治
栃木縣足利郡筑波村　橋本健司
岐阜市今川町　岡部與
宮城縣黑川郡大谷村　遠藤次郎
茨城縣結城郡玉村　石塚政雄
福岡縣八幡市通町　松本一馬

一等（クローム側腕時計）卅名

長崎縣南高來郡島原町　尾藤和衛
岡山市北方　富加見和平
弘前市在府町　佐々木金五郎
長岡市千手横町　平松幸五郎
山形縣新庄町　菅運吉
朝鮮新義州府彌町　三宮森喜
朝鮮咸鏡南道咸興驛　川島一郎
富山市神通町　牧野寶
福島縣耶麻郡鶴島村　二瓶一喜
大阪西成粉濱中之町　三輪三郎
小樽市若竹町　金森武雄
神戸市池田廣町　稚井俊男
香川縣大川郡志度町　河内義明
埼玉縣北葛飾早稻田　中村聖夫
京都府岡崎町　池田豐
愛知縣東加茂郡盛岡　深見正雄
愛媛縣宇和島市追手　酒井薫
熊本市新魚屋町　位田源七
下關市新開町　西島武夫
千葉縣本銚子町南町　伊藤仙太郎
群馬縣邑樂郡千江田　荒川嘉平
仙臺市南材木町　小林秀雄
山口縣厚狹郡厚東村　岩本孝道
大連市惠比須町　小金丸フデ
和歌山伊都郡高野町　南岡久仁雄
福井市東上町　大家三郎
神奈川縣田浦町船越　岡本三則
岐阜縣大垣市外青柳　臼井功
千葉市北道場　笠川正

[illegible]

一等（三菱電氣アイロン）廿名

石川縣師範寄宿舍　木藤靜
靜岡縣清水市北矢部　高村孝子
東京市小石川區原町　原田勇
奈良縣吉野郡吉野町　石橋武次郎
福島縣伊達郡桑折町　渡邊新一郎
茨城縣筑波郡田水山　遠藤浪雄
神戸市和田宮通り　木下保
大阪東淀川區木川町　松田正一
京都市東山線八坂　北岡嘉三
東京深川富岡門前町　宮崎眞
東京府淀橋町角筈　澤山幸三
沖繩縣宮古郡下地村　清川惠仁
長野縣埴科郡東條村　窪田敢治
鹿兒島揖宿郡喜入村　山口茂夫
新潟中魚沼郡芦ケ崎　石田政清
臺灣嘉義郡北門外　豐田牧男
金澤市松山　東幸作
青森縣八戸市町組町　柴田精一
長野南安曇郡北穗高　小幡利長
靜岡縣志太郡燒津町　谷口惣吉

二等（ノーブル美細）百名

京都府　吉田都太
東京市　大住邦彦
千葉縣　伊原良平
東京市　人見正久
東京府　松村都志彦
埼玉縣　山崎義男
神戸市　大井貞藏
埼玉縣　小林敬二
奈良縣　富田利雄
東京市　山上壽造
埼玉縣　小野澤庄三郎
神奈川縣　小島茂一
福島縣　佐藤與則
和歌山市　宇野光雄

長崎縣　矢[illegible]
關東州　木村次郎
大分縣　中村豐子
山梨縣　小池照子
宮城縣　增澤正夫
宮崎縣　岡崎秀吉
高知縣　岡本福忠
愛知縣　田中眞一
岐阜縣　堀都士市
福岡縣　宮田芳太郎
山口縣　福田ヨシエ
東京府　長村光子
横濱市　大河原與七
大分市　岡本妙子
佐賀縣　牛島勝美
廣島縣　中野妙子
鳥取縣　根鈴正雄
東京府　河原明
福岡縣　吉田寛藏
滋賀縣　菅井俊一
宇都宮　相樂しげ
群馬縣　原大二
山形縣　岩瀨まつ
神戸市　渡邊陸彦
青森縣　成田みつ
和歌山　竹田昌弘
八王子　鈴木ミネ
鳥取縣　湯本鋼
横濱市　小川武
東京市　大住邦彦
東京市　八木田寛貫
鳥取縣　林政良
東京市　後藤貢雄
千葉縣　青木正輔
千葉縣　小平文雄
岐阜縣　村瀨峯
千葉縣　松崎道子
岩手縣　鳥居カツ子
大阪市　西森みさへ
秋田縣　木島節子
愛知縣　金井玉枝

熊本市　下吉ユフ子
宮城縣　川村みさを
島根縣　高平ツタ子
群馬縣　生方八千代
福井縣　船木ミノル
和歌山　藪本美津子
岐阜縣　大野かの
岩手縣　高橋佐助
兵庫縣　白尾登志
岩手縣　鈴木良子
宮城縣　竹根滿
奈良縣　藤井壽平
横濱市　松本千代次
東京市　南錢
長野縣　岡部幸子
東京府　秋阪昇
群馬縣　深町吾郎
横濱市　小原田松翠
朝鮮　飯田ツキ
東京府　長沼隆治
岡山縣　宮野美緣子
熊本市　田中信子
奈良縣　飯原富子
樺太　野村ワサ
和歌山　川下かつ子
靜岡縣　加藤千枝子
富山縣　清水政次郎
群馬縣　小林タカ
名古屋　服部はま子
岩手縣　昆野コウ子
東京市　藤岡花子
青森縣　八木橋ふみ
兵庫縣　中田菊枝
千葉縣　深田ゆき子
京都府　太田きく江
長野縣　鈴木さみよ
長崎縣　川浪英子
靜岡市　大杉きわ
兵庫縣　荒川志津子
鳥取縣　山口利弘
茨城縣　廣原昇

秋田縣　岩谷[illegible]
奈良縣　[illegible]本新太郎
東京府　遠藤常
福島縣　林繁男

三等（マスター五百番衿白粉外組合）百名

栃木縣　三重縣　熊本縣　横濱市　廣島縣　石川縣　新潟縣　山口縣　山形縣　德島市　岸和田　長野縣　東京市　佐賀縣　名古屋　鹿兒島　福岡縣　愛媛縣　鳥取縣　下關市　鹿兒島　香川縣　大阪市　兵庫縣　北海道　北海道　朝鮮　東京市　靜岡縣　富山縣　札幌市　栃木縣　清水市

高齋八重子　柳川きみ子　浦田瑠璃子　板津ふみ子　青井キシノ　長野豊子　內宮ナツ子　山縣照子　安孫子翠子　石立貞枝　岡田千代子　西谷信子　田村操　堤コト　近藤志ずゑ　小林柳枝　高橋トミエ　石村クサ子　中井勝江　渡邊操　坂本彌壽子　市之瀨志津　澤池常子　岩付恒子　酒井君枝　小林千代惠　長野チエ　秋山松代　櫻井年子　松下賢一郎　一宮つや子　近芳枝　佐藤靜三　志田功

[illegible]　神奈川　東京府　東京府　東京府　秋田縣　宮城縣　北海道　京都市　八王子　福島縣　東京府　兵庫縣　樺太　新潟縣　東京府　石川縣　朝鮮　愛知縣　福岡縣　山口縣　大阪府　岐阜縣　千葉縣　石川縣　大分縣　富山市　奈良縣　新潟縣　神奈川　仙臺市　三重縣　愛知縣　茨城縣　福島縣　京都市　靜岡縣　富山市　新潟縣　京都府

渡邊[illegible]子　戸倉明子　磯貝タカ子　津田稔　加藤晃子　豐田愛子　藤木トロ子　菊田キヨ子　高橋敏子　廣岡稻穗子　阿部玉江　白井富美子　木島榮彌子　高橋基子　泉隆　藤田クル　平塚藤吉　宮下準營　森川正治　淺野常吉　操齡德太郎　若月勇　二松芳枝　足立壽天子　坪井恭子　桂田秀子　鈴木ヒナ子　福田英子　梶岡露子　池田ユリ　波多野ケンヂ　和田芳　中美里　影山一義　久保田晃己吉　友田仁　森田道夫　井熊儀市　石坂政次郎　難波隆史　佐々木綱之助

靜岡縣 山路勝之
山口縣 吉田榮一
福岡縣 林巴
福島縣 根本榮奈子
栃木縣 佐藤ムノ
千葉縣 總貫光子
大阪府 藤本鶴五郎
京都市 岡本初之助
岡山縣 大野計一
東京市 今内喜太郎
山口縣 中川ロレ子
神奈川 吉田幸代
[illegible]北市 中野高榮子
廣島縣 岡本〆ナセ
甲府市 土橋喜代
長崎市 武谷さと
東京府 平井キヨ子
神奈川 古知てる子
京都市 望月ヒゲ子
鳥取縣 小西朝子
米澤市 吉井鮮五郎
京都府 木村憲治
三重縣 米川鈴子
徳島縣 大澤榮好
廣島縣 森田藤枝

二等（スワン萬年筆1號）百廿五名

福井縣 末本さだを
青森縣 岡崎光枝
香川縣 小西ミナ
福井縣 齋藤權一
兵庫縣 木下敎男
福岡縣 田中又雄
奈良縣 松下義治
埼玉縣 多里登榮子
群馬縣 内田正男
茨城縣 高城亨吉
三重縣 大井孝行
石川縣 松本俊之
埼玉縣 松岡百男
和歌山 山田藤吉郎
三重縣 西村源一郎
名古屋 加藤龍
福井縣 笠原豊
東京市 小島修
長崎縣 森家
大阪市 竹内庄太郎
栃木縣 山下廣
秋田縣 石井忠慶
福島縣 松本正治
靜岡縣 鈴木象吉
三重縣 谷口五郎
三重縣 生川猷吾
奈良縣 大堀千代龍

福井縣 田中幸子
大阪市 松本良延
東京府 加藤満綱
岡山縣 岡崎富
東京府 山口正吉
東京府 市毛直
京都府 岡本鐵治
大阪市 宮崎東雄
岡山縣 坂本豐
尼崎市 小森美知子
徳島縣 吉成さか江
香川縣 渡邊文江
北海道 木内タマ子
福岡縣 北島岩雄
山形縣 酒井俊
岡山縣 三宅カノ
長野縣 深澤榮嘉子
廣島縣 河口啓雄
愛知縣 松永春雄
鹿兒島 松崎貫
青森縣 神三千五郎
八幡市 上原雄一
福島縣 島田鶴二
熊本縣 布足才介
福島縣 熊坂寛
樺太 小島要一
廣島縣 横田義和
新潟縣 吉井育夫
愛知縣 内田雅司
靜岡縣 御原藤平
長野市 篠原友三
東京市 飯田象
東京府 佐藤四郎
岩手縣 瀬川馬太郎
廣島縣 栗原鎮郎
東京府 鈴木軍男
宮崎縣 宮永哲夫
埼玉縣 竹内榮司
青森縣 小島文一郎
神戸市 喜多作門
茨城縣 栗原高伎子
京都市 岡田實太郎
山形縣 奥山隆一
石川縣 三浦正信
新潟縣 渡邊秀次
北海道 杉本芳夫
群馬縣 櫻井顯清
長崎縣 東一郎
奈良縣 松井美侏雄
新潟縣 小野澤草治
東京府 三浦昌雄
大阪市 赤澤正行
大阪府 中川義明
朝鮮 金震[illegible]
廣島縣 高岡鍋一

神奈川 加藤健夫
大分縣 武田出雄
東京府 鶴[illegible]秀治
横濱市 田中長門
東京市 野津登男
京都府 能勢將枝
京都市 服部修
山形縣 加藤庄吉
廣島縣 奥坊幸三
秋田縣 樽原清之助
新潟縣 宮田治
山形縣 宮櫻德太郎
新潟縣 山澤喜一
富山縣 岩井邦夫
宮城縣 長南錫太郎
愛知縣 川口藏
新潟縣 小越連三郎
福井縣 池田博
三重縣 廣田良吉
函館市 西片久雄
盛岡市 滝野武雄
青森市 市野川敏
東京市 辰見魏一
島根縣 三浦庸平
長崎縣 石原傳光
石川縣 有田義清
愛知縣 森木元治
横濱市 近藤安進
福島縣 石田正治
[illegible]縣 早川竣通
[illegible] 久永精道
大阪府 成瀬貞次
鹿兒島 宮内森藏
愛知縣 鷲尾誠一
長野縣 山口三八藏
神戸市 今村敏雄
島根縣 久家新六
京都府 植村忠一
青森縣 敦賀政政
横濱市 持田正男
愛知縣 林傳
東京市 山川種雄
靜岡縣 市川庫男

二等（[illegible]）百名

東京府 牧野昇
岡[illegible]縣 前田光作
青森縣 尾野裕三
廣島縣 宇坪敏三
岐阜縣 仲[illegible]象也
愛知縣 林勝慶
福島縣 根本正雄
兵庫縣 林孝一
香川縣 中井友一
茨城縣 筧孟

島根縣 岩岡符夫
福岡縣 下川原米市
富山縣 金森林藏
群馬縣 野中定雄
埼玉縣 丹羽陸彰
京都市 佐竹恕次
香川縣 木村與俊一
和歌山 松本利男
廣島縣 西川輝夫
廣島縣 池口覺
鳥取縣 篠原孝雄
靜岡縣 鈴木藏
北海道 吉村好一
名古屋 中神吟三
名古屋 野田五兵衛
長野縣 臼井道平
靜岡縣 植田利一
山形縣 竹田忠助
水戸市 小室勝司
秋田縣 芳賀利一
宮城縣 服代清
大阪府 勝谷廉宏
神戸市 多田義雄
三重縣 谷岡義夫
福島縣 山下忠勝
愛知縣 長谷川圭介
岩手縣 木下正次郎
群馬縣 坂本喜代松
岩手縣 吉田岩五郎
埼玉縣 石井寶一
愛知縣 中村光顯
宮城縣 泉邦夫
愛知縣 加藤利三
八戸市 金田要一
石川縣 宮島榮二
茨城縣 松葉勝男
長野縣 戸塚平太郎
茨城縣 竹田正雄
東京市 梅澤傳政
栃木縣 大森等
大阪市 龜井三郎
兵庫縣 多村俊二
千葉縣 有明平吉
新潟市 渡邊一三
京都府 中井市次郎
愛知縣 伊藤久介
大阪市 澁田藤雄
秋田縣 大山岩三郎
熊本縣 石貫三次
愛知縣 岩田要造
福島縣 高木孚多郎
三重縣 久世貞夫
岡山縣 藤好信生
横濱市 安西宗之助
[illegible]島縣 門川貞一

大阪市 小川權彌
大阪市 奥田精次
岩手縣 吉田泰一
岐阜縣 高橋純一
長野縣 加藤良造
名古屋 西村竹雄
靜岡縣 見原捷治郎
秋田縣 鍵田鐵郎
群馬縣 岡圓治
長野縣 橋場房雄
北海道 菅井五郎
富山縣 高橋清五郎
千葉市 櫻井宗正
靜岡縣 若林士男
旭川市 赤坂高久雄
大阪府 赤田發
靜岡市 加藤新一
長野縣 鈴木隼人
大阪市 林博
小樽市 村田靜雄
東京府 中村泰敏
東京市 武田毅英
岡山縣 平松光三郎
熊本縣 登成岩滋
愛媛縣 藤本正義
神戸市 岡藤達夫
長野縣 丸山逸治
廣島縣 大野智丈
鶴岡市 高木正雄
北海道 下田晃正
大阪市 大西寅藏
岡山市 河田亨
京都府 日下部範雄
兵庫縣 藤井敦吉
横須賀 山口和英

三等（[illegible]）百五十名

北海道 大巻武美
香川縣 大成正吞
福井縣 增谷三郎
靜岡縣 永田信象
兵庫縣 堀内順二
宮城縣 津谷川寛
青森縣 海野福助
北海道 佐藤節子
高崎市 一場梅次
千葉縣 秋元奈榮子
岩手縣 山崎實叔
山形縣 岸田賢
岐阜縣 中居満慶
新潟縣 野末武夫
滋賀縣 山本房子
福島縣 長瀬とみ子
神戸市 [illegible]

滋賀縣 荒場茂
新潟縣 澁谷五平
岩手縣 下田忠八郎
京都市 石原昭子
朝鮮 小河内忠男
三重縣 谷川治郎
佐賀縣 長池洋
兵庫縣 圓井鴎松
岡山市 松尾清
愛媛縣 松井勝
三重縣 松本幸造
靜岡縣 岡本貞一郎
新潟縣 古原正僕
東京府 芳賀金太郎
沖繩 眞鍋寅銓
臺灣 旭邦雄
茨城縣 吳玉山
福島縣 小谷泰一
支那 松山文二
滿洲 渡部久太郎
千葉縣 小川常藏
滋賀縣 原田百藏
高知縣 高島傑华
宮崎縣 甲斐造一
長崎縣 吉原辰雄
東京府 木村節子
長野縣 大島貴夫
熊本市 大村正信
岐阜縣 飯沼本治郎
福岡縣 松中久子
秋田縣 荻原榮二郎
廣島縣 山口恭治
三重縣 中島啓之輔
東京府 增田晉松
栃木縣 神山優子
神奈川 佐崎信子
長野縣 竹内金子
富山縣 吉田しる
山形縣 武田房子
三重縣 中野靜子
札幌市 品田たみ
鹿兒島 胡田花枝
大阪府 藤井ヒデ
滋賀縣 秦ひで子
大分縣 巴田初子
岩手縣 工藤キイ
秋田縣 金田一ヤエ
岡山縣 吉岡夏子
茨城縣 内田千鶴子
愛媛縣 宇野文子
廣島縣 加島幸子
群馬縣 霜澤松子
神戸市 和田好子
岡山縣 高谷利子
福岡縣 鈴川志津子

東京市 宮本篤子
宇都宮 川畑キヨ
岡山縣 丸隈秀子
埼玉縣 桑原美代
兵庫縣 古川英枝
名古屋 安藤志津
愛知縣 寺村アヤ子
岡山縣 木谷修三
千葉市 關よし子
山口縣 中川正子
鹿兒島 荒木スゞ子
廣島縣 甲斐文子
靜岡縣 和田くにゑ
奈良縣 木田文枝
長崎縣 古巢哲子
臺灣 庄司若子
青森縣 古川由紀子
埼玉縣 關坂奈津
香川縣 河野京子
三重縣 内田き以
和歌山 草田優
樺太 阿部喜久子
横須賀 今澤ナワ鑑
熊本縣 甲[illegible]友子
愛媛縣 渡邊證江
滋賀縣 高橋クノ子
横濱市 谷澤ツル子
大阪市 岡本壽與子
東京府 安永恒志
臺灣 保科三敏
群馬縣 多田浩郎
山形縣 伊藤長朗一
沖繩縣 飯沼節悅
大阪市 南幸子
新潟縣 土田秀一
鐵嶺市 德田美
滿洲 安倍徹
熊本市 西岡且
山形縣 高橋正
福井縣 宇隨工
富山縣 山崎靜夫
大阪市 庄子俊昭
群馬縣 横山ウノ
福岡縣 大橋康利
栃木縣 渡邊保慶
臺灣 桑野正子
濱松市 桐良松枝
東京府 松永たけ子
東京市 名倉たま
青森縣 佐藤啓作
名古屋 細川季夫
宇都宮 大出セン
八王子 野口和人
臺灣 佐藤登榮子
熊本縣 熊谷鶴吉

東京市 川口賢二郎
千葉縣 渡邊佐喜子
富山縣 阿東慶雄
朝鮮 金木正子
横濱市 近藤敦三
臺灣 村山榮晉豊
臺灣 李惟朋
千葉縣 大井節雄
栃木縣 高進恒行
金澤市 小々高幸一
北海道 柴山信一郎
大阪市 笹原良雄
和歌山 石倉辰夫
埼玉縣 原田五郎
支那 深井由松
香川縣 久米春雄
北海道 生田千秋
愛知縣 森知也
姫路市 豊岡克二
福島縣 高阪忠
京都市 新谷幸一
大阪市 松井勤
靜岡縣 大藪一男

三等（[illegible]）百五十名

佐賀縣 大内英勢子
北海道 猪口トツ
京都市 長谷川志津
三重縣 安達富子
大阪市 鷹木ツマ
福井縣 堀内藏
靜岡縣 田中清一
神戸市 瀧井三太郎
仙臺市 鵜村芳雄
宮城縣 田代三郎
横濱市 柴田晃子
兵庫縣 森健治
岩手縣 金子豊富
臺灣 坂口寅吉
大阪市 大原はま
富山縣 國田武一
東京市 吉仲康子
栃木縣 大谷和歌子
佐賀縣 宮崎菊次
三重縣 大堀貞一
秋田縣 藤田源一
福井縣 石寺喜榮子
福島縣 高濱夜詩榮
山形縣 田中タカ子
新潟縣 小林美也子
石川縣 西畑百合子
福島縣 小山たぬ
大連市 池田八百子
長崎市 溝上笑子

神靜三大岩盛三山水宮東東福兵東横神宇神神大神京長和青長岩岐神長兵靜栃岐山島島德島新石長仙宮愛長神靜東青靜馬島
戸岡重阪手岡重口戸山京京岡庫京濱奈都戸戸阪戸都崎歌川野手阜戸野庫岡木阜岡取根島潟川野臺城媛野　京森馬根
市縣縣市縣市縣縣市市市府縣縣市市川宮市市市市市市山縣縣縣縣市市縣市縣縣縣縣縣縣市縣縣縣縣市縣縣縣太鮮市縣縣市縣

鶴根中谷中及伊福高板伊竹池安南堀喜武田西古中中宮中佐南橋清山松大永水藤飯澤高木深小久柴柳塩山野須三野林宮山西柳
木木西田崎川藤井田倉原下川沼部　代井中本賀川村永林伯澤本水口浦野瀬品井田登廣村井田野山澤　本岡山浦間　本田原藤
吉　英　千鶴千　も　又津　艶文　イ　ひた
政　横淳俊　四鉾美　　保正光數房哲　初　猛三　　昌佐次代數ト政銳　一グ幸敏　　佳幸代さセて語廣チワ貞んみ靜靜
操雄清秀悦夫貴郎作明一通子三江子子夫昭枝潤羽郎治德夫子郎子久子重作榮郎枝子子男靜江子子子ツい義子ワエ子子子子子

三福宮愛島東岩大愛岐岩山廣島廣岡奈三和福群神和宮朝千愛富島大臺三東香山東東宇山岐岩鹿熊神大廣岡京香新姫岩長栃臺
重井城媛取京手阪知阜手賀島取島山良重歌井馬奈歌崎　葉知山取灣　東京川形京京都口阜手兒本奈阪島山都川潟路手野木
縣縣縣縣縣府縣市縣縣縣縣縣縣縣市縣縣山縣縣川山縣縣縣縣縣市灣縣府縣縣市府宮縣縣縣島市川市縣縣市縣縣市縣縣灣

西松菅西久長高藤柴武鈴小寺柴赤泉森森三足増太越行堀沼内太田今福加高田松島山竹山山佐相小石栗井大吉八鈴豐川山増遠
田田原本吉田後本田藤木林内田毛　　本栖立越四水本切淺條田村中永森橋中澤山野澤根本々德松井和上橋田木木田村崎子藤
谷清　啓　正　か　風　須　木　德
中平正駿源次善圭　一幸　力泰重貞幸貞正光義　三武　宗經康良夏光太隆千知茂義君林ヲ光堅正正濟正勵正一　洋豐武宗
毅七治明治清郎三一弘郎好茂壽三郎男雄一雄次雄守郎彦意司る雄平雄磨郎文代子樹大子司ノ子治直夫隆雄畝幹郎一子信夫治

群大秋釜横岡滋東滋山三大靜神兵東熊岐福仙愛群島臺愛栃群東東福東名岐佐靜福埼愛福愛愛
馬阪田山濱山賀京賀形重阪岡奈庫京本阜島臺知馬取北知木馬京京井京古阜賀岡岡井下知島媛
縣市縣府市縣縣市縣縣縣市縣川縣市市縣縣市縣縣縣市縣縣縣市府市府屋縣市縣縣縣縣縣縣縣

高玉藤大金小津梨長石伊寺辻川久越郷岩宇今林相伊堀淺栗長林近山野酒平中松竹丹塚大三塚
橋置田澤子野邊井崎井藤田村田國　　久山村　崎田澤野原田　藤崎村井澤野浦田野本内久本
千　慶　安　千　富
常作代榮治義次貞和美　明吉正二重愛園正光秀代　實　　律思　久修士正正長　友武次　正
夫七慶一郎造郎夫子得清義雄雄郎男子子明雄信子登仲薫正郎朗彦幸三雄市隆雄造隆彦郎藏一

三等（スワン萬年筆）百十五名

松京德長長德富神東函秋
本京本野野島山奈京館田
市府市縣縣市縣川府市縣

高關山山田宮野武渡清戸
山口田崎中崎村井邊野島
慎幸　隆源
榮太四邦伸マ太七重信元
重郎郎雄治ナ郎吉郎一雄

神大岩岩大福德埼德島北愛廣群吳北愛愛滿高岐熊東福高名高山門山青福東神兵東東靜青東和岩宮廣富京岩富石長佐靜岡會秋
奈阪手手阪井島玉島取海媛島馬　海媛媛洲知阜本京岡崎古知形司形森岡京奈庫京京岡森京歌手城島山都手山川庫賀岡山川田
川府縣縣府市縣縣市縣道縣縣縣市道縣縣市縣縣市府縣市屋縣縣市縣縣縣府川縣市府縣市府山縣縣縣市市縣縣縣縣縣縣縣縣

永山房伊澤石中金永戸角田吉關佐星高德倉德桑橋橋村岡杉片阿永齋八田宮大井内播高工古射千滝山青大吉橋鶴上渕丸秋秋佐
井崎　野藤口井村子井田仕中川口々　瀬永島本原口本田野山崎部田藤木中崎塚上藤本梶藤市場葉野崎松島茂爪見村　山田田藤
審　富　木才當晃　み權ト橋不　喜　百　鍋　格
文俊君十　幸正貫國常　美　知治次隣次之芳鶴　民政耕一ち之鎮メ二久輝吉靖隆坦誠精房貫繁定ヲ正金吉賢賀米銀太康廣正
藏尾平郎博江男三一郎康子繁治好郎男郎助治松基部子三次ゑ助雄子男男清雄行當代治一雄一雄雄七三慶榮三郎一次郎男男一

岡大大京神千東石栃福埼東埼神前千名東靜東福石東名東東東東宮大群東和吳大三山群茨大山廣大東愛北千大北樺福福富栃
山阪阪都戸葉京川木井玉京玉戸橋古古京岡京岡川京古京京京京城阪馬京歌　阪重形馬城阪形島阪京媛海葉阪海太島岡山木
縣市府市市縣府縣縣縣縣府縣市市縣屋市縣市縣縣府屋府市府府縣市縣府山市市縣縣縣市市縣縣市府縣道縣府道縣縣縣縣縣

小横長長深庄中山瀧竹内黒坂山山山丹藤木武岡多井宮岩小河明石本中福山渡山野吉小新加後杉大森矢増瀧小田飯齋野宮岡
堀木村崎川司島内田内藤田巻本村口野岡下内崎河上崎崎澤村石田田澤本下藤口坂村泉坡島藤山島本野田口川中森藤見井田
ムマ　いよ英て　喜　正　吉金　伊勝　傳山
玉みツ光秋勝八光秀ナ正健ね　二武る英恵元　美良文太正三英清正加芳幸開四靜太博皓利勢　治倍忠實正醇　五倉重長良
一子エ子治錢重枝作子雄夫子進郎重子雄治子正子男子郎明良一春雄吉春晴夫郎夫郎孝三郎壽忠郎郎也一明一實郎吉義次男

三等（[illegible]）百名

愛青兵長北長靜宮大新福兵栃東宮東靜靜仙島富名名富福山兵山愛鹿東東臺濱四山大栃盛神東栃福東北佐高沖東滿岐滋
媛森庫崎海崎岡崎阪潟井庫木京山京岡岡臺根山古古山岡梨庫口媛兒京京　松日口阪木岡奈京木岡京海賀知繩京　阜賀
縣縣縣縣道市縣縣市縣縣縣縣府縣市縣縣市縣縣屋屋縣縣縣縣縣縣島市府灣市市縣府縣市川府縣縣府道縣市縣市洲縣縣

稲菊岸浦川加池寺太大田山森石佐内曽後水宇寺藤成笹木雨岩田山鮫小佐奥水山安伊臼立石村寺菊中樹鶴小山竹宇清赤
生池本　口藤谷原田野中口谷井伯山根藤野畑島田田井本宮田口口島西々田野田藤藤井花井田門池野谷田松里谷野水尾
須さ　與　日　木正　チ都キか　シミ喜富　眞
　靜　キ賀だ靜慶壽　　榮傳　俊正惣三次源清　善出虎哉　之大富梅セ美ロよ壽登優ナ澄ナキ代美貞靜砂
量裕茂枝博ヲ子か三次朗宏弘力竿吉清郎巳吉郎典一一徹雄樹吉人昇一助造江子子子子子人子子子子ヲク子子子子子郁

四等　三百名
キング川口ハーモニカ

山靜長横神福東東岐大島山東三和茨愛郡群大東東靜東栃神山福群朝福福神長島德三宮千和岸大新横茨北青宮
形岡崎濱奈岡京京阜阪根口京重歌城知山馬阪京京岡京木奈形岡馬　岡島奈野根島重山葉歌和田潟濱城海森崎
縣縣市市川縣市府市市縣縣市縣山縣縣縣縣市市市縣市縣川縣縣縣鮮縣縣川縣縣縣縣縣縣山山田市市縣道縣縣

大山松金伊矢北登山原稲横古高岩關押渡小河鈴山木青稲今阿三青吉松高富片後石辻關久山上服村井坂高菊本
久内下山從野見子崎　村山山木橋　渡邊田村木田村木村野部木柳野本橋岡桐藤井本原保本野部田上入橋池山
鐵保　豐　光吉　津田　紀
之　野米貢安三謝彌　章　政伸峯芳治正寛宏之榮五鈴榮博義敏光佐長德總太仲正奈玄信い東　　定朝榮三
助　榮子吉雄雄郎子助正雄芳吉篤市之一義吉凪楠子郎吉吉子正二吉盛己江一吉彌雄子一次し猛實孝敏道明裕郎

東京府
宮大吉西能錦池板鈴高山西市岡鶴中本本齋内山和千成川岡田鈴大
田石岡村藤織田倉木澤内島坂田岡村間戸藤山内田藤田上久名木内
喜　律き　ま　二　岬　清潤
榮太四孝和友照服花ぬ毅五軍謙吉清勝金貞芳四　名賞宗元親五會
一郎郎子夫子代志子子義郎郎子子元治一正子作明子典一　義郎作

京都府
澤谷高糸大大
藤口木井槇山
ふ
直さ克博
道輝子朗己亥

大阪府
岩山池高石大高寺佐佐
本中田田崎吉澤田藤竹
愛保善綱
峰輝太傳太守代泰太
男雄麟郎融郎子子造郎

栃木縣
猪酒岸菅柿菅
原井　野沼原
榮　健碩
一誠次之浩敏
郎巳郎助三男

埼玉縣
田岡黒鷲正森大新福
代部澤楨田　野井山
小關
宗茂　さ春正富一二
藏吉保ゑ衛治久郎郎

千葉縣
奈林　小木
良　　早村
智昭
勝　麿　き
光築子　く

群馬縣
須島兒多佐長川島大
藤山島胡藤谷島田澤
な川
忠てか朋　芳　賢良
三る子榮正夫孝三雄

茨城縣
高内樹鳥
分野木山
國と
三秀く秀
郎子子吉

神奈川
渡八齋林田新内金佐須
瀬木藤　中野田子藤田
龜秋
清綿フ芳政芳三太之久
子一ミ江子子郎郎助子

青森縣
高木健吉

秋田縣
工長高奥
藤谷橋山
川
イ正潤榮
ョ利造藏

岩手縣

宮城縣 [illegible]
山形縣 [illegible]
福島縣 [illegible]
岐阜縣 [illegible]
靜岡縣 [illegible]
石川縣 [illegible]
富山縣 [illegible]

新潟縣 [illegible]
山梨縣 [illegible]
長野縣 [illegible]
福井縣 [illegible]
愛知縣 [illegible]
滋賀縣 [illegible]
和歌山 [illegible]
三重縣 [illegible]
奈良縣 [illegible]
兵庫縣 [illegible]

鳥取縣 [illegible]
山口縣 [illegible]
岡山縣 [illegible]
廣島縣 [illegible]
愛媛縣 [illegible]
香川縣 [illegible]
高知縣 [illegible]
徳島縣 [illegible]
大分縣 [illegible]
宮崎縣 [illegible]

福岡縣 [illegible]
鹿兒島 [illegible]
長崎縣 [illegible]
熊本縣 [illegible]
佐賀縣 [illegible]
沖繩縣 [illegible]
北海道 [illegible]
樺太 [illegible]
朝鮮 [illegible]
滿洲 [illegible]
臺灣 [illegible]
[illegible]

四等　三百名
キング川口ハーモニカ

東京府 [illegible]
京都府 [illegible]
大阪府 [illegible]
北海道 [illegible]

茨城縣 [illegible]
千葉縣 [illegible]
埼玉縣 [illegible]
群馬縣 [illegible]
神奈川 [illegible]
栃木縣 [illegible]

青森縣 [illegible]
秋田縣 [illegible]
岩手縣 [illegible]
山形縣 [illegible]
宮城縣 [illegible]
福島縣 [illegible]
新潟縣 [illegible]
富山縣 [illegible]

岐阜縣 [illegible]
長野縣 [illegible]
山梨縣 [illegible]
愛知縣 [illegible]
靜岡縣 [illegible]
石川縣 [illegible]
福井縣 [illegible]
兵庫縣 [illegible]

和歌山 [illegible]
奈良縣 [illegible]
三重縣 [illegible]
滋賀縣 [illegible]
岡山縣 [illegible]
廣島縣 [illegible]
山口縣 [illegible]
島根縣 [illegible]
鳥取縣 [illegible]
香川縣 [illegible]

徳島縣 [illegible]
高知縣 [illegible]
愛媛縣 [illegible]
福岡縣 [illegible]
佐賀縣 [illegible]
長崎縣 [illegible]
熊本縣 [illegible]
宮崎縣 [illegible]
大分縣 [illegible]
鹿兒島 [illegible]
沖繩縣 [illegible]
樺太 [illegible]
臺灣 [illegible]

朝鮮 [illegible]
支那 [illegible]

四等　三百名
[illegible]印ハーモニカ

東京府 [illegible]
京都府 [illegible]
大阪府 [illegible]
北海道 [illegible]

栃木縣 [illegible]
埼玉縣 [illegible]
群馬縣 [illegible]
茨城縣 [illegible]
千葉縣 [illegible]
神奈川 [illegible]

青森縣 [illegible]
秋田縣 [illegible]
山形縣 [illegible]
岩手縣 [illegible]
宮城縣 [illegible]
福島縣 [illegible]
新潟縣 [illegible]
長野縣 [illegible]

富山縣 [illegible]
石川縣 [illegible]
福井縣 [illegible]
靜岡縣 [illegible]
山梨縣 [illegible]
愛知縣 [illegible]
岐阜縣 [illegible]
兵庫縣 [illegible]

奈良縣 [illegible]
三重縣 [illegible]
滋賀縣 [illegible]
和歌山 [illegible]
廣島縣 [illegible]
鳥取縣 [illegible]
島根縣 [illegible]
岡山縣 [illegible]

山口縣 [illegible]
愛媛縣 [illegible]
高知縣 [illegible]
香川縣 [illegible]
徳島縣 [illegible]
長崎縣 [illegible]
福岡縣 [illegible]
宮崎縣 [illegible]
大分縣 [illegible]
佐賀縣 [illegible]
熊本縣 [illegible]
鹿兒島 [illegible]

朝鮮 [illegible]
臺灣 [illegible]
樺太 [illegible]
沖繩縣 [illegible]

四等　三百名
サンキユーハーモニカ

東京府 [illegible]
京都府 [illegible]
大阪府 [illegible]
北海道 [illegible]

支那 [illegible]
埼玉縣 [illegible]
神奈川 [illegible]
栃木縣 [illegible]
茨城縣 [illegible]
群馬縣 [illegible]
千葉縣 [illegible]
山形縣 [illegible]

宮城縣 [illegible]
福島縣 [illegible]
秋田縣 [illegible]
岩手縣 [illegible]
青森縣 [illegible]
新潟縣 [illegible]
愛知縣 [illegible]

長野縣 [illegible]
福井縣 [illegible]
岐阜縣 [illegible]
石川縣 [illegible]
富山縣 [illegible]
靜岡縣 [illegible]
[illegible]

山梨縣 [illegible]
兵庫縣 [illegible]
三重縣 [illegible]
奈良縣 [illegible]
和歌山縣 [illegible]
滋賀縣 [illegible]
山口縣 [illegible]
島根縣 [illegible]
廣島縣 [illegible]

岡山縣 [illegible]
鳥取縣 [illegible]
高知縣 [illegible]
愛媛縣 [illegible]
香川縣 [illegible]
徳島縣 [illegible]
福岡縣 [illegible]
宮崎縣 [illegible]
佐賀縣 [illegible]
鹿兒島 [illegible]
大分縣 [illegible]
長崎縣 [illegible]
熊本縣 [illegible]
沖縄縣 [illegible]
朝鮮 [illegible]

臺灣 [illegible]

四等 三百名 メタリコン ハーモニカ

東京府 [illegible]
大阪府 [illegible]
支那 [illegible]
樺太 [illegible]
京都府 [illegible]
北海道 [illegible]
栃木縣 [illegible]
茨城縣 [illegible]
千葉縣 [illegible]
神奈川 [illegible]
埼玉縣 [illegible]
群馬縣 [illegible]
秋田縣 [illegible]
福島縣 [illegible]
青森縣 [illegible]
岩手縣 [illegible]
山形縣 [illegible]
宮城縣 [illegible]
長野縣 [illegible]
新潟 [illegible]
福井縣 [illegible]
富山縣 [illegible]
岐阜縣 [illegible]
山梨縣 [illegible]
愛知縣 [illegible]
石川縣 [illegible]
靜岡縣 [illegible]
兵庫縣 [illegible]
滋賀縣 [illegible]
三重縣 [illegible]
和歌山 [illegible]
奈良縣 [illegible]
岡山縣 [illegible]
島根縣 [illegible]
鳥取縣 [illegible]
廣島縣 [illegible]
山口縣 [illegible]
高知縣 [illegible]
徳島縣 [illegible]
愛媛縣 [illegible]
香川縣 [illegible]
佐賀縣 [illegible]
福岡縣 [illegible]
大分縣 [illegible]
長崎縣 [illegible]
鹿兒島 [illegible]
熊本縣 [illegible]
宮崎縣 [illegible]
沖縄縣 [illegible]
朝鮮 [illegible]
樺太 [illegible]
臺灣 [illegible]
支那 [illegible]

四等 三百名 スター ハーモニカ

東京府 [illegible]
神奈川 [illegible]
茨城縣 [illegible]
栃木縣 [illegible]
千葉縣 [illegible]
群馬縣 [illegible]
埼玉縣 [illegible]
秋田縣 [illegible]
北海道 [illegible]
大阪府 [illegible]
京都府 [illegible]
宮城縣 [illegible]
山形縣 [illegible]
岩手縣 [illegible]
青森縣 [illegible]
山梨縣 [illegible]
新潟縣 [illegible]
石川縣 [illegible]
岐阜縣 [illegible]
富山縣 [illegible]
靜岡縣 [illegible]
愛知縣 [illegible]
福井縣 [illegible]
長野縣 [illegible]
滋賀縣 [illegible]
兵庫縣 [illegible]
奈良縣 [illegible]
和歌山 [illegible]
三重縣 [illegible]
島根縣 [illegible]
鳥取縣 [illegible]
山口縣 [illegible]
岡山縣 [illegible]
廣島縣 [illegible]
愛媛縣 [illegible]
高知縣 [illegible]
徳島縣 [illegible]
香川縣 [illegible]
大分縣 [illegible]
宮崎縣 [illegible]
鹿兒島 [illegible]
長崎縣 [illegible]
佐賀縣 [illegible]
福岡縣 [illegible]
熊本縣 [illegible]

四等 三百名 ミヤクバンド ハーモニカ

東京府 [illegible]
京都府 [illegible]
大阪府 [illegible]
臺灣 [illegible]
朝鮮 [illegible]
沖縄縣 [illegible]
樺太 [illegible]
北海道 [illegible]
栃木縣 [illegible]
埼玉縣 [illegible]
群馬縣 [illegible]
茨城縣 [illegible]
神奈川 [illegible]
千葉縣 [illegible]
秋田縣 [illegible]
山形縣 [illegible]
福島縣 [illegible]
青森縣 [illegible]
宮城縣 [illegible]
岩手縣 [illegible]
石川縣 [illegible]
岐阜縣 [illegible]
新潟縣 [illegible]
靜岡縣 [illegible]
福井縣 [illegible]
長野縣 [illegible]
山梨縣 [illegible]
富山縣 [illegible]
愛知縣 [illegible]
奈良縣 [illegible]
和歌山 [illegible]
三重縣 [illegible]
兵庫縣 [illegible]
滋賀縣 [illegible]
山口縣 [illegible]
鳥取縣 [illegible]
岡山縣 [illegible]
廣島縣 [illegible]
島根縣 [illegible]
高知縣 [illegible]
香川縣 [illegible]
愛媛縣 [illegible]
佐賀縣 [illegible]
大分縣 [illegible]
宮崎縣 [illegible]
鹿兒島 [illegible]
熊本縣 [illegible]
福岡縣 [illegible]
長崎縣 [illegible]
沖縄縣 [illegible]
樺太 [illegible]
支那 [illegible]
朝鮮 [illegible]
臺灣 [illegible]

五等 千五百名 [illegible]眼液バミール

【東京府】 [illegible]

[illegible]

五等 千五百名 美眼藥スマイル

【東京府】 [illegible]

【京都府】 [illegible]

【大阪府】 [illegible]

[illegible]

五等二千名 エヴァーシャープペンシル

五等 千名 オリジナル香水

（前頁より續く）[illegible]

四等　三百名
キング川口ハーモニカ

東京府 [illegible]
京都府 [illegible]
大阪府 [illegible]
北海道 [illegible]
神奈川 [illegible]
栃木縣 [illegible]
埼玉縣 [illegible]
群馬縣 [illegible]
千葉縣 [illegible]
茨城縣 [illegible]
[illegible]

四等　三百名
桃印ハーモニカ

東京府 [illegible]
京都府 [illegible]
大阪府 [illegible]
北海道 [illegible]
神奈川 [illegible]
千葉縣 [illegible]
茨城縣 [illegible]
群馬縣 [illegible]
埼玉縣 [illegible]
栃木縣 [illegible]
[illegible]

四等　三百名
サンキユーハーモニカ

東京府 [illegible]
京都府 [illegible]
大阪府 [illegible]
北海道 [illegible]
神奈川 [illegible]
埼玉縣 [illegible]
千葉縣 [illegible]
茨城縣 [illegible]
栃木縣 [illegible]
群馬縣 [illegible]
[illegible]

山梨縣 兵庫縣 三重縣 奈良縣 和歌山 滋賀縣 山口縣 島根縣 廣島縣

岡山縣 鳥取縣 高知縣 愛媛縣 香川縣 徳島縣 福岡縣 宮崎縣 佐賀縣 鹿兒島 大分縣 長崎縣 熊本縣 沖繩縣 朝鮮

臺灣

四等 三百名

メタリコン ハーモニカ

東京府 大阪府 京都府 北海道 栃木縣 茨城縣 千葉縣 樺太 支那

神奈川 埼玉縣 群馬縣 秋田縣 福島縣 青森縣 岩手縣 山形縣 宮城縣 長野縣

新潟縣 福井縣 富山縣 岐阜縣 山梨縣 愛知縣 石川縣 靜岡縣 兵庫縣 滋賀縣 三重縣

和歌山 奈良縣 岡山縣 島根縣 鳥取縣 廣島縣 山口縣 高知縣 徳島縣 愛媛縣 香川縣

佐賀縣 大分縣 福岡縣 長崎縣 鹿兒島 熊本縣 宮崎縣 樺太 沖繩 朝鮮 臺灣 支那

四等 三百名

スター ハーモニカ

東京府 京都府 大阪府 北海道

茨城縣 神奈川 栃木縣 千葉縣 群馬縣 埼玉縣 秋田縣 福島縣

宮城縣 山形縣 岩手縣 青森縣 山梨縣 新潟縣 石川縣 岐阜縣 富山縣 靜岡縣 愛知縣

福井縣 長野縣 滋賀縣 兵庫縣 奈良縣 和歌山 三重縣 島根縣

鳥取縣 山口縣 岡山縣 廣島縣 愛媛縣 高知縣 徳島縣 香川縣 大分縣 宮崎縣 鹿兒島 長崎縣

四等 三百名

ミヤタバンド ハーモニカ

東京府 京都府 大阪府 佐賀縣 福岡縣 熊本縣

臺灣 朝鮮 沖繩縣 樺太 北海道 栃木縣 埼玉縣

群馬縣 茨城縣 神奈川 千葉縣 秋田縣 山形縣 福島縣 青森縣

宮城縣 岩手縣 石川縣 岐阜縣 新潟縣 靜岡縣 福井縣

長野縣 山梨縣 富山縣 愛知縣 奈良縣 和歌山 三重縣 兵庫縣

滋賀縣 山口縣 鳥取縣 岡山縣 廣島縣 島根縣 高知縣 香川縣 愛媛縣 佐賀縣 大分縣

五等 千五百名

美服液バミール

【東京府】

宮崎縣 鹿兒島 熊本縣 福岡縣 長崎縣 沖繩縣 樺太 支那 臺灣 朝鮮

[illegible]

五等 千五百名 美眼薬スマイル

【東京府】

【京都府】

【大阪府】

【北海道】

【大分縣】

【宮崎縣】

【鹿兒島縣】

【沖繩縣】

五等　二千名

（スフレジャー　ベンツル）

[illegible]

五等　千名
オリジナル香水

[illegible]

[illegible]

【宮崎縣】

[illegible]

【大分縣】

[illegible]

【沖縄縣】

[illegible]

文部満洲

[illegible]

五等　家庭常備藥オゾ　千五百名

【東京府】

[illegible]

五等 二千名 リソウパン

[illegible]

[illegible]

お斷り

六等當選者芳名は、誌面の都合で省略し賞品は一ケ月以内に直接當選者にそれぞれ御送りいたします。

尚五等（ベスワンシャープペンシル）當選中鳥取縣の芳名は三五一頁に掲載してあります。

記者より

讀者諸君へ

△よい時候となりました。人の心は希望に燃え、木の芽草の葉には生色の躍る春です。

△お蔭様でキングもハチ切れさうな生氣を以てドン／＼發展して行きます。いくら増刷してもすぐ賣切れてしまひます。就中四月號の如きは發行後二三日にしてもう追加注文が殺到するの大盛況でありました。

△此の勢ひでは五月號も亦忽ち賣切れることでせう。キングは汽車に汽船に旅館に街頭に人の行く處はどこへでも進出して行きます。

△それにつけても雜誌をいやが上にも良くして、讀者諸君の御熱援に報いるため、編輯局は文字通り毎日戰場のやうな活動を續けてゐます。

△躍進の氣漲るキング――六月號は果してどんな新機軸新計畫で讀者諸君を駭すでありませうか？今からお樂しみにしてお待ち下さい。

六月號發賣日五月五日

御注文の仕方

○本社發行の書籍雜誌は、お近くの書店でお求め下さい。若し品切で御手に入らぬ時、又は近くに書店のない方は、直接本社へ御注文下さい。

○本社への御注文は前金に限ります。

○御送金は振替貯金が一番安全で且つ送金代が安くすみます。振替貯金の用紙は郵便局にあります。その使ひ方も局でよく教へてくれます。

○郵便爲替や郵便切手代用でも結構ですが、郵便切手代用の時は必ず一割増に願ひます。

○爲替や切手を封入した郵便物は、ぜひ書留郵便に願ひます。

○代金引替と集金郵便は一切扱ひません。

○御注文書には必ず書籍名なり雜誌なら雜誌名と何月號からといふ事をハッキリお書き下さい。

○御住所と御名前とは、ぜひ楷書で願ひます。

○御注文は大日本雄辯會講談社營業部宛に願ひます。振替口座は東京三九三〇番です。

○代理部への御注文は大日本雄辯會講談社代理部宛に願ひます。代理部の振替口座は東京六六二九番です。

○本誌へ廣告掲載御希望の方は大日本雄辯會講談社廣告部宛御照會下されば、詳細御報知御相談に應じます。

定價表

冊數	國內及滿洲支那（送料共）	諸外國（送料共）
一冊	金五拾參錢五厘	金六拾八錢
三冊	金壹圓五拾錢	金壹圓九拾五錢
六冊	金貳圓九拾四錢	金參圓八拾四錢
十二冊	金五圓六拾四錢	金七圓四拾四錢

◎特大號で定價を上げた場合は、その増した分だけ右表の外に頂くことになります。但し前金にて數ヶ月分お拂込の方は、そのお預り金の中より差引計算致しますから、其の都度御送金には及びません。

昭和五年四月三日印刷納本
昭和五年五月一日發行　第六卷第五號

毎月一回
一日發行

編輯兼發行人　淵田忠良
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷人　中田福造
印刷所　株式會社秀英舍
東京市本鄉區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇
電話小石川 [illegible]

元取次店　東京堂・東海堂・北隆館・大東館

KING. Published monthly by the **Dai Nippon Yubenkai Kodansha,** Tokio, Japan.
Entered as second class mail matter at the P. O. at Los Angeles, Cal., U. S. A.
大正十三年十一月二十日第三種郵便物認可　昭和五年四月三日印刷納本　昭和五年五月一日發行（毎月一回一日發行）

